
異次元図書館

セツナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異次元図書館

【Nコード】

N9331B

【作者名】

セツナ

【あらすじ】

平凡に生きてきた、高校1年生である杉本 刹那。
ある日、母親のお使いの帰りに園の木の下で休憩を取っていたところ・・・突如空間に大穴が開き、黒いマントを羽織った男が出現する。

「僕は神の使いさ。名前はリバーっていうんだ」

それが、冒険の始まりだった。

出会った仲間たちと共に、『畏』の仕掛けられた世界へと旅立つ刹那。

様々な世界で出会いと別れを繰り返し、刹那は少しずつ成長し、大人になつていく。

繰り返される戦い。

神と人間との因縁。

この旅の終わりには、果たして何があるのだろうか。

第1話 プロローグ

一人の男が、暗闇の中、歩を進めていた。

(次の世界に行つて『罨』を仕掛けてきてくれ)

自分の仕事を心の中で確認し、男は暗闇の中を歩き続ける。

壁に突き当たる、男は歩くのをやめた。

男はゆっくりと壁に向かって右手を差し出した。

右手の平に、淡い青紫色の玉が形成され、それがだんだん大きくなつたかと思うと、

男はそれを、壁に向けて放った。

ごごご、と音がしたかと思うと、空中に穴が開いていた。

男は何のためらいもなく、

穴の中に入っていった。

「刹那、起きてるの？」

女性が一階から二階に向かって叫んだ。

「あゝ！起きてますよ！」

そう答えた刹那は、ベッドに寝つ転びながらマンガを読んでいる途中だった。

八月三日、高校一年生の杉本 刹那は、夏休みの真つ最中だった。忙しいことがあまり好きでない刹那は、部活に所属していないため、やることがない（宿題当は別、もちろん一切手をつけていない）ので家の中でごろごろしていることがほとんどだった。そのため、

「どうせ暇なんでしょう？ちょっと手伝ってちょうだい！」

このような母からの頼みごとは、そう珍しいことではない。

「はいはい！今行きますよ！」

パタンとマンガを閉じ、はあ、とため息をつく、刹那はがばっとベッドから起き上がった。

開け放したドアを通過し、部屋の近くにある階段を駆け下り、母のいる居間へとやってきた。

「はい、これ」

目の前に差し出されたものは、何者でもない、ただの封筒。

刹那は封筒を受け取ると、それをひらひらさせながら母に向かって、

「またかよ、これくらい自分で・・・」

「ちゃんとポストに入れてきて頂戴ね。まったく、いい年してやることも無いなんて、哀しい男だねえ」

文句を言う前に逃げられた。しかも、自分に対する侮辱を残されて。刹那は少しだけむくれたが、母の言うことももつともだったので、反論することなく玄関に向かった。

「いってきまゝす」

そう言うと、暑い中、刹那はポストに向かって、前進した。外はとても晴れていた。雲ひとつなく、まさに晴天だった。

しかしそれゆえ、日光が直接体に当たり、急激に体温が上昇してしまふ。たまに見かける女性は、日よけ用の傘をさしており、日光への対策が充分にされていた。刹那はというと、日光対策などまったくしていなかった。急いでいかないと、

「真っ黒焦げになっちまうな」

そんなことを思いながら、残り少しの道を急ぎ足で歩き、ポストにたどり着くと手に持っている封筒をすくとポストに入れた。

あとは帰るだけ、刹那は来た長い道を再び戻り始めた。じりじりと言わんばかりの日光が、刹那に容赦なく降り注ぐ。

「暑い暑い暑い、おっ！ー！ー」

そんなことを思いながら刹那は歩いていると、公園の中の広葉樹で出来た大きな木陰を発見した。ラッキーと思いつつ、その木陰に近づく。

「ちよつとくらい、いいよな」

そんなことを考えながら、刹那は木陰に、否、異次元の扉に足を踏み入れてしまった。

「みーんみーんみーん……」

せみの鳴き声がうるさい。額から汗が流れ落ちた。と、そのときだった。

いきなり空間にゆがみ、2メートルほどの穴が開いた。

「??????」

刹那には何が起こったのか、理解できなかった。本当にその通り、空間に穴が開いていたのだ。刹那が混乱に陥っていたときに、ゆっくりとその穴から黒い布、いや、黒いマントを羽織った男が出てきた。

「次は暑いところか。あいつもよくやるよ」

男はため息をついた。刹那はその光景を見てあ然としていた。

その男は綺麗な赤紫色の髪の毛をしていた。黒いマントに良く似合う髪の色だった。

「な、なんだこいつ。手品・・なわけないし、どう考えてもおかし
いだろ空間から出てくるなんて」

男は刹那にきずき声をかけた。

「やあどつも。こっちは暑いね」

髪の毛とは全く違う、黒い瞳をしていた。

刹那はいさつを返す余裕もなく単刀直入に聞いた。

「あ、あんた今どつやって出てきたんだ？どう考えても人間業じゃ
ないだろ？」

男は笑いながら答える。

「人間業じゃない……か。そりゃそうだ。人間じゃないんだから」

綺麗な顔立ちをしていた。外国人みたいに、ほりの深い顔だった。

刹那は驚いた。

「こ、こいつ頭おかしんじゃないか？でもこんなの普通の人間な
んかにできっこないし……」

刹那は考えるのをやめ、男に聞いた。

「だったらあなたは何者なんだ？」

男は答えた。

「僕は神のつかいさ。名前はリバーっていうんだ。」

「神の……つかい？」

驚く刹那にリバーは言った。

「そう。ここに来た詳しい理由は教えられないけど、僕が出てきたこの穴のことなら教えてあげる」

不思議だった、その男の声から姿まで、なにからなにまで、不思議だった。

リバーは驚く刹那に続けて言った。

「この穴の名前は『ゲート』っていうんだ。魔力を圧縮し放つことで空間に穴を開け、中の超空間を通り別の異次元に行くことが可能になる。でも、ゲートのある所場所は決まっっていて、そこに魔力を放つことでゲートが開く。ゲートのない場所で魔力を放つても無駄なことだね。どう、わかった？」

刹那は驚きながらもゲートの仕組みを理解した。（刹那は頭が悪いわけではない）

なるほどな。でも、魔力って一体なんなんだ？それにそのゲート

を通ってきたってことはこいつも魔力を持つてるってことじゃないか。ヾ

刹那はこのリバーという男を疑問に思った。神、魔力、ゲート、異次元、どれも聞きなれない言葉だ。疑問を持つのも無理もないだろう。刹那はリバーにもっとたくさんのことを聞こうとした。そのときだった。ゲートがいきなり竜巻のように風を吸い込み始めたのだ。

「くっ、まずい！」

リバーはゲートに吸い込まれた。刹那の体も浮く。

「う、うわああああああ！！！！！！」

刹那も暴走したゲートに吸い込まれる。

刹那を吸い込んだゲートは、その後何もなかったかのように閉じた。

第1話 プロローグ（後書き）

さてさて、いきなり異世界にとばされてしまった杉本刹那
これは偶然？

それとも運命？

いや、もしかすると誰かの予定調和？

いずれにせよ、物語は進んでいくこととなります

何も知らない刹那には抗う意思さえないのですから

さあ、長くなりました

次の物語は初世界編です

楽しんで読まれるか

それともすぐにこの物語から脱出せかいするかは

あなた次第

第2話 初世界編 1

どれくらいの間がたっただろうか……。刹那は見慣れない部屋の布団に寝かされていた。

「うー、どこだ？」

刹那は起き上がろうとした。しかし、全身がひどい痛みに襲われおきる事が出来なかった。

「うー！いてててて。」

ばたんと、いきなりドアが開き、おとなしそうな男の子が入ってきた。

「あ、目が覚めましたか？」

男の子が刹那に声をかけてくる。

見た目、刹那と同じくらいの年頃の男の子だったが、決定的に違うのは頼りなさそうな感じがするということである。

「あんたは？なんで俺こんなところにいるんだ？」

刹那は、自分が抱いている疑問を男の子にたずねた。

男の子は困っていた。どう返答すればいいのか分からないが、とりあえず知っていることを刹那に伝える。

「なんでって言われても、道端に倒れていましたので僕の家運んできたんですよ。それと、僕の名前はダン。なにかあったら遠慮な

「く言ってくださいね。」

ダン是一部始終を説明すると暖炉にまきを入れた。弱弱しかった炎が、だんだん大きくなり、しばらくするとごうごうと燃えていた。

パチパチと、薪の燃える音がする中、今度は逆にダンが刹那に尋ねた。

「そういえば、あなたは？まだ名前を聞いていませんが。」

ダンが刹那に名前を聞いた。自己紹介の基本であるが、重要なことでもあるのが名前である。

「ああ、俺の名前は刹那。ところで、ここ地球じゃないのか？」

刹那はダンに名を名乗り、再びダンにたずねた。

そもそも、刹那は自分の住んでいる町に暖炉がある家などあるわけが無かった。もしあったとしても、自分の家の近くにはないはず。近くであれば自分の耳に入ってくるはずである。

刹那の問いに、ダンは不思議そうな表情で答えた。

「地球？ここは名前なんてないただの島国ですよ。」

「ダンは刹那に言った。」

島国？島国……

そんなところあったか？そういう問いかけが刹那の頭の中でぐるぐるまわっている。

おかしい、なにかおかしい。なぜ自分の住んでいるところではないのだ、気絶している間に運ばれたのか？馬鹿馬鹿しい、それだったら監禁か何かかされているはずだ、道端に捨てるなんてさらった意味が分からない。

「いや、まてよ・・・」

刹那の頭に一つの心当たりが浮かんた。

黒いマントを羽織った、青紫色の髪をした男が現れたときに発生した空間の穴、すなわち、ゲート。あの男は確か、ゲートは異次元と異次元をつなぐ役割をしているようなことを言っていた。

そのゲートに引き込まれた記憶がよみがえってきた、確かに吸い込まれた。

それならば全部つじつまが合う、このわけの分からない世界にいることも、ここが異世界であるということも。

刹那は自分はゲートに吸い込まれ、異次元に来たことを悟った。

「そろそろ夕飯にしましょうか。」

ダンはそう言うと、戸棚を開け中からパンを2切れ取り出した。刹那が必死に情報を整理しているのに、夕食・・・のんきなものである。

「では、いただきますよ。」

取り出したパンは食パンに良く似ていた、形といい、外のみみといい、似ているというよりも食パンそのものだった。

ダンが刹那にパンを一切れ手渡した。しかし刹那はパンを食べようとしなかった。というよりも、口に運ぶ作業すらしていない、手渡されたパンをただただ手に持っているだけである。

「食べないんですか？」

「体中が痛くて起きられないんだよ。手を貸してくれ。」

ああ、そうかと、ダンは自分のパンを口にくわえ、刹那の体を起こした。刹那の体を起こすときに、ダンは刹那の着ている服に疑問を抱いた。

こんな服見たことが無い、作りから柄まで、布が使われているという以外には自分の服とまるつきり違っていた。

「あなたはどこから来たんですか？その服もこの世界のものじゃないし、あなたは何者なんですか？」

今度はダンが刹那にたずねた。

刹那はゲートによってこの世界に来てしまったことや、ゲートの仕組みなどをできるだけ丁寧にわかりやすくはなした。ダンは驚いた様子だったが、刹那の話し方があまりにも真剣だったためそれが本当のことだと悟った。

刹那は、この世界にもゲートがあるはずだ、だからそれっぽい場所はないか、とダンにたずねた。

「んー、それっぽい場所ですか、残念ながら僕にはわかりません。」

ダンは答えた。刹那はがっかりした様子だったが、ダンは話を続けた。

「だけど、長老なら何か知っているかもしれません。長老は本当にいろんなことを知っていますから。」

ダンの話が終わると刹那はうれしそうに、

「だったら早く長老のところに行こう！うまくいけば地球に帰れるかもしれない！」

と言い、布団から起きようとしたが、やはりあの全身の痛みが襲ってきた。

「あせっちゃだめです。みたところそれは打撲によるものだと思います。明日になれば痛みもひきます。長老のところには明日いきましよう。」

刹那はうなずくとパンも食べずに寝てしまった。

やれやれと、ダンも刹那が手に持っていたパンを口に運んだ。

+++++

夜中のことだった。刹那は激しい爆音で目を覚ました。刹那は少し外の様子を見てこようと布団から起き上がった。痛みもずいぶんなくなり、立って歩くのには何の支障もなかった。

ドオオオオオオオオオオ！！！！

何の前触れもなく轟音が辺りに鳴り響いた。刹那が急いでドアを開けると外は火の海だった。

空には得体の知れない怪物が10匹飛んでいた。不意に、その中のひとときわ大きい怪物が手のひらから炎の塊を放った。その塊は勢い良く地上に落ちていったかと思うと、民家を焼き、火柱を上げて燃え盛った。もくもくとあがる煙、民家を焼く炎、そして人の断末魔の叫び、この情景はまさに地獄だった。

外の断末魔の叫びでダンは目を覚ました。あわてて外の様子を見た。ダンは、みるみる顔が青ざめていった。

「くそ、なんてことだ。」

ダンの声は震えていた。こぶしを握り締め、思い切り歯をくいしばっていた。

その様子のせいで、刹那の抱いていたおとなしそうというイメージは完全になくなっていた。

いまあるのは、憎しみだった。刹那にも分かるくらいの、憎しみだった。

窓の外の、燃え盛る光景、ダンはただただ見ていた。

「このままだとこの家も・・・」

行かなければ、頭にそんな言葉が浮かんだと同時に、

「ここは危険です。とりあえず避難しましょう。」

と言い、刹那の手を引っ張って家の中から連れ出した。が、

「分かった、分かったから手を離してくれ、自分で走れる。」

刹那が手をつなぐ事を拒否したので、ダンは先に家を出て炎をかくぐつてある方向に向かって全力で走り出した。もちろん、そのあとを刹那が追いかける。

しばらく走ると、小屋の前に着いた。森の中にあるその小屋は、猟師やきこりの小屋かと思うほどに、小さく、質素だった。

ダンは息を切らしながら小屋の扉を開けた。ぎいー、ときしんだ音がドアから聞こえる。

ドアが開くと同時に、ずんずんが入っていくダンのあとに続き、恐る恐ると刹那が後から付いていく。

小屋の中に入ってみると、見た目とは裏腹に広く、天井も高かった。ダンは部屋の真ん中にあるテーブルを移動させ、その辺の床とあまり変わらないくらい精巧に作られた幅50センチくらいの地下への隠し扉を開けた。

「こつちです。」

と、ダンが刹那に呼びかけた。刹那はテーブルを元の位置に戻し、しゃがんで地下へと入っていった。

真っ暗だった。ダンがどこにいるかも分からない、と思ったのもつかの間。ダンが、懐から出したろうそくに火をつけたのである。ぱつと、闇が光に照らされ明るくなる。

「降りますよ、しっかりと付いて来てくださいね。」

「分かってるっての！」

なぜだかは知らないが、ダンがすごく大人っぽい。刹那はそう感じていた。

最初のころもそうだった。無理して長老なる人物に会いに行くときも無理するな、と止められ、小屋に向かうときも決してあわてずに炎を避けて走っていた。(初めてこんな事態に陥ったため刹那は非常に動揺していた)冷静沈着、まさにこの言葉がピッタリだった。

「どうしたんです？付いて来て下さいって言ったでしょ。」

ダンが少し降りたところで刹那に少々からかい混じりに刹那に呼びかける。

「わかったって!!！」

刹那が少々むきになるのを、ふふつと笑いながら軽く流す。刹那は、少しだけ、怒りながらダンに付いて行った。

地下室へと続いている階段は思ったよりも長く、刹那はだんだん不安になってきた。

ところが2、3分くらい降りたところで階段は終わってしまい、代わりに木で出来た大きな扉があった。

第3話 初世界編2

「ここです」

と、刹那に呼びかけダンは大きな扉を開けた。

そこには怪物の奇襲から生き延びた村の人々がいて、みんな自分の家のことや、はぐれてしまった家族の安否を気にしていた。

まるで地震かなにかの災害にでもあったかのようなようだった。事情なんてわかってなく、走り回っている小さな子ども、不安で下をうつむいている老人、毛布に包まっている女性。絶望している人々の中、一人だけそんな様子を感じさせない老人がいた。

こちらの様子に気がついたその老人がダンに声をかけた。

「おお、ダン。生きておったか！」

「長老こそ、無事でよかった。それと、こちらは異世界からやってきた刹那さん。・・・長老、ゲートについて何かわかることがあれば教えてください」

「異世界から？ほほう、ゲートとはもしかや異世界と異世界をつなぐ扉もことじゃな。」

「・・・しかしなぜ刹那さんはこの世界に？よほどのことがない限り、異次元の扉は開かぬはずじゃが」

驚いたことに、長老はゲートのことを知っていた。

刹那とダンは今までのことを全て話した。長老は何も言わず目を閉じて話を聞いていた。

話が終わると、長老は目を開けて、

「話はよくわかった。わしも協力しよう。こんな危ないところにいつまでも刹那さんを居させたくはないからの。刹那さん、これを見てください」

と言うと、ふところからにぎりこぶしくらいの大きさの水晶を取り出し、刹那に手渡した。

その水晶の中にはなんともいえないあざやかな光が閉じ込められていた。綺麗だった。まるで宝石。

「これは、いつたい・・・」

「これは、ゲートの場所を見つけるための水晶じゃ。わしのじいさんのじいさんがもっていたものじゃ。この水晶に光を当てると、ゲートに向かって一直線の光がのびる。つまりその光を追っていけばゲートのあるところにたどり着けるといいうわけじゃ」

長老は刹那に水晶の説明をした。刹那はうんうんとうなずき、水晶の説明を熱心に聞いた。

説明し終わると、長老は刹那に、

「しかし、この世界のゲートは・・・あの怪物たちによって開けることが出来なくなっているのじゃよ」

と信じられない言葉を言い放った。

刹那はそれを聞くと、ショックのあまり黙ってその場に立ち尽くしてしまった。

なんとということだ、帰ることが出来ない。絶望、と言うのが正しいのか、刹那はがっくりとうなだれてしまった。ダンはそのを聞くなり、

「そ、それってもう刹那さんは帰れないってことなのですか!?!」
と、大声で叫んだ。

「一つだけ方法がある。ゲートを封印している怪物を倒せばいいのじゃが、その怪物は村のものたちがいくら力を合わせて戦っても歯がたたないくらい強いじゃよ。」

と、残念そうに言った。ゲートを開ける方法はなんとあの怪物たちを倒すということだった。

怪物、それを倒せば帰れるかもしれないという、『希望』が刹那の中にわいてきた。

「じゃあその怪物を倒せばいいんだな?よし、じゃあ倒しにいつてくるよ!」

と、無茶苦茶なことを言った。それを聞いたダンは驚いて、

「ちよ、ちよつと刹那さん、さっきの話聞いてなかったんですか?あの怪物たちは村の人たちが力を合わせて戦ってもかなわないくらい強いんですよ?それなのに一人で戦うなんて無茶です!」

と、あわてて止めた。怪物の恐ろしさを充分に知っているダンには、刹那を危険な目にあわせたくなかった。

立ち向かうことがいかに無謀か、刹那はさっきの光景を見て理解しただけだった。

ところが刹那は、

「そうだったとしても、このまま地球に帰れないよりは、わずかな可能性に敗れて

死んだほうがまだだよ。まあ、死ぬ気なんてさらさらないけどさ。」

と、信じられないことを言った。

負ければ死ぬ、そんなリスクを背負ってまで刹那は帰りたいという。自分の世界に、自分の家に帰りたいと。強く強くそう思っていた。事故でこんなわけの分からない世界に連れて来られ、そこで死ぬなんて冗談ではなかった。

「この人は・・・勇敢なんだか馬鹿なんだか・・・」

こう思うのが普通であろう。しかし刹那はダンの思惑とは裏腹に、敗北なんて恐れない！と言わんばかりの目をしていて。死ぬことなんてまるで考えていない、目をしていて。その目は、とても美しいかった。

「・・・わかりました。もうやめるなんて言いません。しかし、僕は目的のためとはいえ、友人を見殺しにするわけにはいきません。・・・僕も、行きます！」

ダンは刹那を助けたい一心でついていくことにした。刹那はダンの気持ちに感謝し、黙ってうなずいた。

+++++

怪物を倒すことにした刹那とダンは、正面から戦っても勝てる確率は限りなく0に近いので策を練ることにした。ダンは意外にも策を

考えだすことに関してはとても優れていて、あの怪物たちをうまく倒す策を考えるにはそう時間はかからなかった。ダンの考え出した策は次の通りである。

- 1、まずは怪物たちを中心に二手に分かれる。
- 2、ダンが囷になり怪物たちの注意をひく。
- 3、一番後ろの怪物を刹那が後ろから切り捨てる。
- 4、それに気づいた怪物たちの注意を今度は刹那がひく。
- 5、また一番後ろの怪物をダンが切り捨てる。
- 6、あとは2、5を繰り返し全滅させる。
- 7、全滅させたら寝ているボスを二人で殺す。

補足

怪物たちは主に昼間が活動時間のため夜は寝ているが、必ずボス以外のやつらが見回りをしているはずだ。

怪物たちはたかが人間と我々をなめている。たった二人の人間相手にボスが出てくることはありえない。

怪物たちは非常に頭が悪く、物忘れが尋常ではないためこの作戦が理解できないであろう。

万が一気づかれた場合や、すぐにボスが出てきた場合はすぐに作戦を中止しすみやかに逃げ出すこと。

以上がダンの編み出した策であるが、その発想力に刹那は疑問を抱いた。

「なあ、何でこんなにいい方法があるのにいままで怪物たちを倒せなかつたんだ？」

その問いかけに、ダンが静かに答えた。

「……やっぱりいざとなるとみんな自分の命が大切でね、作戦開始のときに半分以上の人が逃げ出したんですよ。僕はそのときの数やそのときの時間などを計算に入れて策を編み出しているから、一気に計画が台無しになってしまったんです。その結果、正面から突っ込んでいくことになってしまい、僕や逃げ出した人以外はみんな死んでしまっただんです。それ以来ですよ、あいつらにすぎ放題やらせているのは。」

刹那は黙って聞いていた。見ると、言い終えたダンはどこか悲しい表情をしていた。刹那は言った。

「大丈夫。俺は絶対に逃げ出さないから。」

温かい言葉だった。刹那の口から、温かい言葉が出ていた。ダンはそれを聞くとふつと微笑んだ。

第4話 初世界編3

作戦開始の時間となった。

刹那とダンは剣、槍、弓などを持ち皆へと向かった。

(武器は多いほどいいです。正確な数はわかりませんが、怪物はかなりのかずのはずです。)

こんなことを聞いたのが、もうだいぶ前のように思えてくる。最初にこれらの武器を見たとき、まるで新発売のおもちゃを見る子どものように、刹那は物珍しそうに見ていた。

片手持ちの剣の柄を、両手で持ち振ってみたり、槍の矛先を指で突っついてみたり、弓の弦を引っ張ってみたりなどのお遊び行為もしていた。(やはりダンにからかわれた)

しかし、もうそんなことも出来ない。今は討滅のことを考えなければならぬ。

のだが、大人なダンは、刹那の様子を気にかけていた。

「刹那さん、緊張とかしてませんか？」

刹那は不安そうに答えた。

「正直に言うとあまり緊張なんてしてないんだ、なんでかな・・・」

正直に自分の心境をダンに話した。

自分が病気にかかっているみたいなの、それを確かめるような刹那の口調が、おかしかった。

いたずらっぽく、刹那に聞いてみる。

「気にすることはいいですよ、緊張のしすぎで体が動かなくなるよりはいいですからね」

「ふ、言ってくれるな。ダンのほうこそ緊張してんじゃないの？」

刹那はむきにならなかった、冗談交じりに刹那はダンに尋ねた。しかしダンは意外にも、

「はい、その通りです、はっきり言ってかなり緊張してますよ」

刹那は意外な返答にどういった反応を示せばいいのかわからなかった。その姿を見たダンは笑いながら、

「意外ですか？別にそんなに深い意味はありませんよ。人間の生理現象ですからね」

と刹那に言った。刹那はダンの言葉に安心し、ダンに再び話しかけようとしたがダンに制止され、

「おっと、おしゃべりはここまでです。作戦現場に着きましたよ」

刹那はダンに言われてはじめて気がついた、目の前には何十匹の怪物が砦の周りで外敵が来るのを見張っているということに。刹那が砦のほうに目をやっている間に、ダンは武器の配分を済ませていた。

「では刹那さん、作戦開始です。もうわかっているかと思いますが、最初に僕があいつらの気をそらしますのですその隙に刹那さんは一番後ろのやつを倒してください」

「わかった、気をつけていけよ」

ダンが刹那の言葉にうなずくと、茂みや木に隠れるようにしながら作戦の場所へと向かった。

ダンの姿が見えなくなると、刹那はいつでもいけるように剣を握り締め、ひたすら待った。待っている時間はとても長く感じられた、その長さが刹那に不安を感じさせた。まだかまだかと思う気持ちはしだいに、ダンがやられてしまったのではないのかという気持ちに変わってきた。しかし、その気持ちは杞憂に終わった。見張りの怪物たちが騒ぎ始めたのだ。

「ハダンだ！」

怪物たちは刹那に背を向け、向こうにいるダンを追いかけて始めた。刹那は、待つてましたと言わんばかりにぱつと飛び出し、握り締めていた剣で一番後ろの怪物を力いっぱい切りつけた。切りつけられた怪物は断末魔の悲鳴を上げその場に倒れこんだ。

すると、青い炎が自然発火し、怪物の体を包み込み、炎が消えたかと思うといつの間にか怪物の体も消えていた。怪物たちは断末魔の悲鳴のほうに顔を向けた、一瞬だけダンは怪物たちの視界から消える。その隙にダンは近くの茂みに入った。怪物たちがダンのほうを見る、いない。標的を見失った怪物たちは一斉に刹那を追いかけた。刹那はくるつと後ろを向くと全速力でにげだした。また、怪物たちも全力で刹那の後姿を追いかける。

怪物たちの注意が完全に刹那のほうにむくと、ダンは弓を構えた。そしてゆっくりと矢を引き絞り一番後ろの怪物に狙いを定め、勢い良く放った。ダンの放った矢は見事に怪物の頭に突き刺さった。

「ぎいいいいいいいいいい！！！！」

断末魔の悲鳴が上がり、怪物は青い炎をまといながら消えていった。

このような調子で刹那とダンは、ついに見回りの怪物を壊滅させることに成功した。ちなみに、この作戦は意外にもうまくいき、怪物たちの出した断末魔のおかげで砦の中の怪物たち全てを壊滅させることができたということをおの場をかりて報告したい。

+++++

刹那とダンは砦の前で合流し、足並みをそろえて砦の中へと入っていった。

「いや〜よかったよ、この作戦が見事に成功してさ」

「当たり前じゃないですか、なんていったってあの怪物たちはこの僕が、あ！！！」

ダンは口をふさいだ。何か口にはいけないことを言ってしまったのだろうか。

「???、どうかしたか?」

ダンは、少々あせりながらもこう答えた。

「い、いや、なんでもありませんよ」

ダンの口調に疑問を抱きながらも、

「まあいいや。ところで、怪物たちのボスがいるところはどこなんだ?」

刹那は細かいことなど気にしない、話したくないのなら別に無理し

て詮索する必要もない。

刹那の問いに、ダンはすぐに答えた。

「はい、この砦の大広間にいます。ちなみに僕たちは怪物たちのボスのことを『ラチス』と呼んでいます」

「ラチス・・・」

刹那はそうつぶやいた。ダンは刹那にふと言いかけた。

「そうです、こつちの世界では恐怖という意味になります。村を焼き、人々を殺すあいつは恐怖そのものです」

「そうか、恐怖か。あんなやつ、何でこの世に存在するのかな、人の命なんて誰にも奪う権利なんてないのにな」

「・・・」

ダンは何も言わなかった。顔をこわばらせてただじっとしていた。そのときだった、刹那の目に飛び込んできたのはひとときわ大きい扉だった。

「なんだ？あの扉？」

「あれは大広間に通じている扉です。あの中に・・・」

「ラチスがいるっていうわけか・・・」

刹那とダンは扉の取っ手に手をかけた。

「いきますよ、せーの!!」

バンツと勢い良く扉を開く。そこにいたのは紛れもない、ラチスだった。

一際大きい体、一本が大人の男性並に太い両腕、その大きい体を浮かすことの出来る大きな羽。

そのラチスは膝を抱えてうずくまっていた。寝ているのか、いや違う。その証拠にゆっくりと顔を上げて刹那たちをじっと見ている。

「あいつを倒せばいいんだな？」

「ええ、そうです。」

短い会話を済ませると刹那は息を胸いっぱい吸い込み、

「そんじゃあ、いきますかあ!!」

と叫んだ。その叫びと同時に刹那とダンは持っていた剣をギュッと握り締め、ラチスめがけて切りかかっていった。

刹那とダンは剣を武器にしているのに対してラチスはたくましい両腕を武器にしている。これは決してハンデなどではない、むしろラチスの方が有利となるのである。なぜか、それは《慣れ》の問題である。ダンとはかく、刹那はこれまで剣などという物など持ったことがなく、慣れていない。一方ラチスは生まれたときから使っている腕を武器にしている。物を食べるにしろ、邪魔者を殺すにしても、一番多く使っている体の一部を武器にしている。おまけに、ラチスの腕は鋼鉄の様に硬い。それゆえ、いくら剣で切りかかっていても一向にダメージを与えることが出来ないのである。

刹那とダンはラチスの素早く強力な攻撃を避けてラチスの腕に攻撃していた。このままではらちが明かない、

「刹那さん、いまから僕の言うことを良く聞いてください」

刹那はラチスのほうを見ながら、ああ、と返事をした。

「入り口付近に大きな弓と矢があります。いまから私が一人でこいつの相手をします。その間にこの大広間を出て入り口付近に向かい、弓矢を持ってきてください」

その作戦を聞いて刹那は、

「でも、それじゃあダンが・・・」

ダンは刹那の心配をよそに、

「後のことは持って来てから説明します。僕を信じてください」

ダンの気迫に後押しされ、刹那は弓矢を持つてくることを決意した。

「わかった、俺戻ってくるまで死ぬなよ」

「わかってますよ。でもなるべく早く戻ってきてくださいよ」

ダンがそう言うと刹那は勢い良く走りだした。

「さて、と。魔力のつかえないこの体で、何分こいつをおさえられるかな。」

刹那が見えなくなったと同時に、ダンは苦笑しながら剣を握りなおした。そして、目の前にいる巨大なラチスに向かっていった。

第5話 初世界編 4

刹那はというと、走っていた。全力で入り口まで逆走していた。

「ダン、俺が戻るまでなんとか持ちこたえてくれよ」

ダンの事を心配しながら刹那は入り口を目指してひたすら走る。

「もう・・・少し・・・」

刹那の呼吸はどんどん荒くなり、ぜいぜい息を切らしながら走り続けた。

そのとき、刹那の目には一際大きい弓とすぐ横にある矢が壁にたてかかっているのが映った。

「これだ・・・」

息を切らしながら近づくと刹那。弓を背中に背負い、矢を肩にかける。

「待ってるよ、ダン」

+++++

一方、刹那が弓矢を入手したとき、ダンの体力は限界に達していた。

「はあ、はあ、き、きつい・・・」

愚痴を言いつつもダンはひたすらラチスに向かって行った。刹那がいなくなっただので、いままで二人で受けてきたダメージが一気にダ

ンにくる、きついのも無理はない。太い鋼鉄の腕二本の攻撃をダン
は剣一本で受け止めていた。例えて言うならば、金属のバットで電
柱を思い切りたたくようなものである。こんなことがしばらく続い
ていれば手の感覚がなくなってしまう。

「くそ、こんなときに魔力が使えたら・・・」

そんなことを言っても魔力が使えるわけでもなく、ダンは手の痺れ
を我慢しながらラチスに向かっていった。剣で腕を受け止めるたび
になる金属音、激しい痺れ、悪化する疲労。ダンはこれらに耐え、
死ぬ気でラチスと戦った。すでに体力は限界を超えている。しかし、
いつまでも耐えられるわけではない。

「くっそ、だめか・・・」

諦めかけた次の瞬間だった。閉まっているはずの扉がいきなりバア
ンツと開き、刹那が息を切らしながら入ってきた。

「ゼイ、ゼイ、と、取ってきた、ぞ、はあ、はあ」

ダンはすぐにラチスとの間合いをとると、刹那に作戦の続きを話し
た。

「いいですか、いまから僕はもう一度ラチスと斬りあいます。その
隙に後ろに回りこんで今とってきた弓矢を使ってラチスの頭を射抜
いてください。いくら腕が二本あるからといっても激しい斬撃を連
続してくらわせば後ろがから空きになります。そのときを狙って
矢を放ってください」

ダンは刹那にそう言うと、ぎゅっと剣を握り締めた。

「ゼイ、はあ、わかった。やって、はあ、みるよ」

息を切らしながらも刹那はラチスの後ろへ回り込もうと走った。ダンは刹那が走つたのを確認すると、深く息を吸い込み、疾風のごとくラチスに切りかかっていった。

風魔連斬

ダンは剣が見えないくらい素早く攻撃を繰り返した。と同時にラチスめがけて突風が起こる。剣の速さのせいで突風が起きているのだ。雨のような斬撃をラチスに浴びせる、さすがのラチスもこの速度と斬撃の多さでは両手を使わざるをえない。

両手がふさがる、それはつまり後ろからの攻撃に対応できないということ。

この時を待っていた、刹那はラチスの後ろに回りそして、弓を構えた。

決して力まず、冷静に相手の弱点を狙い、そして・・・放った。

ひゅんと風を切ったかと思うと、いつの間にか矢はラチスの頭にふかぶかと刺さっていた。

ダンは矢が刺さつたのを確認すると切るのを止め、剣をおろした。ラチスは両腕をだらりと下げ、白目をむいていた。

「お、終わった・・・」

ダンはそう言っていると剣を地面に突き刺し、その場につづくまり、はあ

はあと荒い呼吸をしていた。

刹那は、急に足が崩れ、しりもちをついてしまった。いまさらだが、足も震えてきた。

戦いが終わった、刹那もダンもそのことは疑わなかった。

しかし、そう思えたのもつかの間、ダンの体に黒く、大きな影が覆いかぶさった。

ダンがそのことに気づき、上を見上げる。そこには頭に矢が刺さって死んだはずのラチスがいた。ラチスはいやりと笑うと腕を伸ばし、頭の矢を乱暴に抜きとった。

これには刹那もダンも驚いた、生き物は脳を傷つければ死ぬと思っていたからだ。

完全に意表をつかれたダンはあわてて剣を握り応戦しようとする。

しかし、立てない。さっきの技がよほど体にこたえたのか、ダンは立つことが出来なかった。

そんなダンをラチスは遠慮することなく拳を放った。

「!!!が……は……」

10メートルほど吹っ飛んだダンは、口から血を吐き気を失ってしまった。

「てめえ、このやろっ!!!」

刹那は無謀にも武器を持たずにかかっていった。当然、真正面から武器も持たずにかかっていった刹那はあっけなくラチスに鉄拳をもらい5メートルほど吹っ飛ばされてしまった。

「う……ぐぐ……ぐ」

あまりの痛さに声が出なかった。幸いなことに吐血はしていない。

ラチスは刹那よりも先にダンを殺そうと、ダンの方向へゆっくりと歩いていった。

「や……やめ……ろ」

無理矢理声を絞り出し、刹那は叫ぶ。しかしその叫びは弱く、小さかった。

ラチスは構うことなくゆっくりとダンの方へと近づく。

「やめ……ろ……やめて……くれ」

そんな願いもむなしく、ゆっくりと、しかし確実にラチスはダンのところへと向かう。

10メートルから5メートル、5メートルから3メートル、次第にダンのところへと歩み寄る。

「……やめる……」

自分の拳が届く距離にたどり着き、右腕を構える。そして、その剛健な腕が、今振り下ろされた。

「やめるおおおおおおおおお!!!!!!」

刹那が叫ぶと同時に、ラチスは異様な気を察知し腕を止めた。

独特の気配、まがましい気。

それらが示すもの、それは紛れもなく、魔力であった。それも、そんなじよそこらの小さな魔力ではない。おそろしく大きく、強大な魔力だった。

ラチスは声のしたほう（魔力が感じられたほう）に体を向けた。

そこには誰もいなかった、しばらく動けなくなるほどのダメージを

喰らわせた刹那の姿も。

気のせいかな、そう思ったラチスは再びダンの方へと体を向ける。そして、もう一度右腕を振り下ろす。

そのときだった。

いきなり黒い風が自分の右腕を通り過ぎた。ラチスは構うことなくダンに右腕を振り下ろす。

その時にゴトンと何かが落ちる音がした、自分の足元から。

なんだろう、と音の発信源を見る。

そこにあっただのは腕であった。自分のと酷似している太く、大きな右腕が。

まさか。

あわてて自分の右腕を確認する。

ない。

振り下ろしたはずの自分の腕がない。

ラチスは激しく動揺した。何が起きたかが全然わからなかった。

ないないないない、腕が、誰にも傷つけられることのなかった腕が、

なくなっている。

このときラチスは気が付かなかった、正面に先ほどの強大な魔力の根源が存在するのに。

我を失って動揺しているラチスの足元に再び黒い風が通り過ぎる。

ずるずると風の通った足の部分がずれる。足で支えきれなくなったラチスの体は仰向けにひっくり返った。ラチスは残った左腕で体を支え、ゆっくりと起き上がった。

ラチスの目に入ったもの、それは刃が黒い大剣を構えている刹那の姿だった。先ほど感じた強大な魔力も刹那から感じられる。

ラチスは刹那の持っている大剣を見てはじめてわかった、自分の右腕や足は切られたのだと。黒い風はすさまじい速度で自分の体を切った黒い大剣だったのだと。

不意に刹那はパツとラチスの方へと攻め込む。ラチスは残った左腕で刹那を迎え撃った。

鋼鉄の拳が刹那を襲う。

ところが刹那はこの拳をひらりとジャンプしてかわし、左肩めがけてそのまま飛んだ。

大剣を振り上げそのまま左肩へと振り下ろす。

一度放った拳は急には戻せない、ラチスの残った最後の腕もあつけなく宙へと飛んだ。

手足が切られ、もうラチスはもう芋虫のように胴体をぐねぐねさせることしか出来なかった。必死に抵抗するラチスをよそに、刹那はゆっくりと頭の方へと近づく。

ぎゃあぎゃあと耳が痛いくらいに叫ぶラチスの顔へ到達した刹那はゆっくりと大剣を振り上げる。

「だから・・・やめろっていったのに・・・」

そう静かに言うと、勢い良く首めがけて大剣を振り下ろす。

大剣が首を通過すると、急に叫び声が途絶え、ラチスの体（離れた

手と足も）が青い炎に包み込まれる。ごうごうと勢い良く燃えたと
思うと、だんだん火が小さくなっていき、他の怪物と同様、ラチス
の体がなくなっていた。

ラチスの体が消えると刹那の持っていた黒い大剣が黒い霧になり、
刹那の体に染み込んでいった。

「なんだっただ、あのでかい剣は・・・」

刹那はふとそのことが頭に浮かんだ。大剣が手に収まっていた時の
情景を思い出し整理する。

「へえと、確かラチスがダンを殺そうとした時に・・・ん？ダン？
・・・」

考えている途中でダンという単語が頭に浮かぶ。そして、

「あ！！！ダンは！！！！」

気づいた。

きよろきよろと辺りを見回しダンを探す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・いた！！！！」

ダンを見つけた刹那は、倒れているダンの元へと駆け寄る。やっぱり
り口から血を吐いている。

刹那はダンを手で起こし呼びかける。

「ダン、ダン、終わったぞ・・・」

ダンを揺さぶり声をかける。

「う……う……う……」

ダンの口から声が出る。そしてゆっくりと目を開ける。

「せ、刹那さん……」

ダンが刹那に気づき、声をかける。口から血が出ているので無理に立たせてはまずい。

刹那は起こした体をゆっくりと地面に寝かせた。

「ダン、終わったぞ。ラチスも俺が倒した」

刹那はダンに報告する。弱っているダンの顔が一変、驚きの表情に変わった。

「せ、刹那さん、本当に一人でラチスを？」

「ああ、俺が一人で倒した」

刹那はふふんと胸をはり、すごいだろうと言わんばかりの顔をした。

「ど、どうやって？」

刹那はダンのその質問にうんとうなってから答えた。

「それがな、ラチスがお前を殺そうとした時になんか急に体の周りから黒い霧みたいなのが出たんだよ」

ダンは刹那の説明に疑問を覚える。

「?黒い霧?・・・まさかそれで?」

「違う違う、話は最後まで聞け。それでな、その霧がなんかでつかい剣になったからさ、それもってラチスにかかっていったんだよ。」

「なるほど、それでか・・・」

黙って何かを考えているダンをよそに刹那の説明は続く。

「そのでかい剣もつたらな、なんか知らないけど体がすごく軽くなつてさ、ラチスの攻撃かわしてそのまま左肩切つてやったんだよ」「
ダンは、自分は心の中で喜んでることがわかった。

「すごい、魔力を発動させたばかりだけじゃなく、いきなり結晶化までさせるなんて」

そんなことを思っていると、不意に刹那の後ろから「ごごご」という音が聞こえてきた。

刹那はぱつと後ろを振り向いた。ゲートがあつた、しかしそのゲートはこういうことか、消えたり広がったりしてひどく不安定だった。ひゅっひゅっとうと風を吸い込んだり、吐き出したりしている、それがだんだん激しくなり一つのこと刹那の頭に浮かんた。

このままだと、閉じてしまふ。

刹那は迷った、行くべきか、とどまるべきか、頭の中の天秤に二つ

の考えがのしかかる。

「このまま行ってしまうとダンが死んでしまうかもしれない、でも俺の望みはなんだ？家に帰ることじゃないか。どうする、どうすればいい！！」

冷静に頭を働かすことなんて出来やしなかった。心臓の鼓動が激しくなる、どくんどくんと自分の心臓がなっている。こんなことを考えている間に、ゲートはだんだん小さくなる。

そのときだった。地面に寝ていたダンがゆっくりと起き上がる。

「ダン……？」

ドン！！

ダンは強く刹那の胸を押し、押し先はもちろんゲート。刹那には何が起きたのかわからなかった。わかることはダンが自分をゲートに向かって突き飛ばしたということだけだった。

「！？ダン！！」

混乱している中、必死になって絞り出した言葉がそれだった。突き飛ばされ、ゲートに入る時間は決して短くはなかったが、ダンが言葉を放った時だけは時間が長く感じられた。

「大丈夫……死にはしません……だから……行ってください……刹那さん……あなたの旅路に……幸多かることを祈っていますよ……」

「だああああああああん!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ゲートに入る直前、刹那は叫んだ。
精一杯、叫んだ。

+++++

刹那を送り出した後、ダンの後ろからざ、ざ、ざと足音が聞こえた。

「送ったのか、刹那を」

「ええ、送りましたよ。長老」

ダンが答えを返す、その足音の正体はダンの村の長老だった。

「……もう長老はよしてくれ、爺さん言葉にも飽きたところだ」
長老はそう言うと一緒にまばゆい光を体から出した。光が収まると、そこには老人ではなく一人の青年が立っていた。

「まったく、なんでこの俺がこんなことを……」

「あの人の命令ですから。それに逆らったらどんなことをされるか……考えたくもない」

「……もつともだね。あの人、怒ると怖いんだよねえ」

ダンはその青年と親しげに会話している。また、青年もダンと親しげに話している。

「ところで、刹那の魔力は？」

「しっかりと発動しましたよ。それどころか、結晶化まで使いこなせてました」

ダンの話を聞き、青年はヒューと口笛を吹く。

「すごいじゃないの、魂と肉体かたがこわいくらいにフィットしてんじやんか。それで、属性は？」

「黒い霧、と行ってたから、おそらく闇でしょうね。まあ、魂の転生前が魔界の王だったから当然と言えば当然でしょうね」

ダンはそのいい終えるとふうとため息をつく。ダンの言葉を聞いた青年が驚きの声を上げた。

「マジかよ。闇って、大丈夫なの？ひよっとしたら刹那もリミッターが外れちゃって、マリスみたいになっちゃうかもよ？」

「・・・あなたはどうも勘違いしていますね。あくまで属性は属性。闇が悪になるとは限りません」

ダンのもっともな言葉に、青年は反論する余地がなかった。

「まあ、そうだけどさ。もしもってことがあるじゃんか」

かろうじて、言葉を述べる。

「それは闇だけじゃないでしょう。ありとあらゆる属性の持ち主も

同じ可能性をもっています」

「う……………」

青年の言葉は見事に一刀両断、切り捨てられてしまった。

青年は一方的に追いやられるこの空気を変えるように、ダンに言った。

「……………そろそろ帰ろうか、異次元図書館に。詳しい話はそこで皆に聞かせてやっておくれ。我が使い魔、ウィルゲール・ダン・セリマティ。」

「……………わかりました。我が師、我が主、時の神ゼール。」

第5話 初世界編4（後書き）

初世界編、終了です

さて、いかがでしたでしょうか？この物語は
魔物に弾圧され、家族から自由まで奪われたこの世界は刹那とダン
のおかげで救われました。

刹那はこの世界で、自分の中の『力』を見事使ってみせました。
それが、後の物語にどう関係していくのか？

・・・それは見てもらわなければわかりませんね
さて、長々とすみません

次回の物語は近未来編

どんなお話かは、見てからのお楽しみ

第6話 近未来編1

そのころ、刹那はゲートの中を移動し、次の世界に向かっていった。それが地球であるのか、はたまた違う世界なのか、今の段階では刹那はそのことはわからない。

刹那はずっと1つのことが頭に浮かんでいた。ダンのことである。傷ついたらそのまま置いて来てしまったので、ひよっとしたらダンは死んでしまったのではないかということが、いやでも頭に浮かんできってしまう。

「ダン、大丈夫かな？・・・もしかしたら・・・って何考えてんだ俺」

頭のもやもやを消すように、頭をぶんぶんと振る。

「ひいや！大丈夫だ！ダンだって大丈夫だって言ってたじゃないか。うん、そうだ。きっと大丈夫だ。そうに決まってる！」

前向きな考えを無理矢理頭に浮かべ、不安な考えを頭から消す。マインスの考えにいつまでもとらわれていてはいけけない、刹那はダンが生きていることを信じ、出口が見えるのを待つ。

その時だった、不意に前の方から明かりが見えた。出口だ。その光は次第に大きくなり刹那の体をやさしく包んでいく。と、いきなり体に衝撃が走った。

「いてててて・・・」

いつの間にか違う世界に来てしまったようだ。

刹那は、自分が地面に倒れているのに気が付いた。着地に失敗して

刹那も応戦しようとするが、肝心なものなかった。

武器がない。

相手は鉄の塊、とても素手で勝てる相手ではない。

「やばい、どうしよう……」

取り乱すわけでもなく、刹那は自分のピンチを冷静に受け止めていた。しかし、冷静に受け止めてもロボットが消えてくれるわけではない。

ロボットはいきなり空高くジャンプした。空中で四足を広げた、足の横からは刃が出ている。そのまま高速で回転したかと思うと、刹那めがけて突っ込んできた。

ロボットの攻撃があたれば、刹那の体はばらばらになってしまう。例えるのなら、高速で回転しているヘリコプターのプロペラに突っ込むようなものだ。

このままだと確実に刹那は死んでしまう、いや殺されてしまう。その時だった、刹那の手のひらから黒い霧が出て、それが大剣の形になったかと思うと一瞬で刀身が黒い大剣となった。

「これって……」

そう、ラチスの時にも出た黒い大剣。何でこんなのが？、どうして大剣？考えている暇はない、ロボットがすぐそこまで迫っている。大剣を両手でつかむと、そのまま肩まで振り上げ、迫り来るロボットめがけて勢い良く振り下ろした。

ロボットは右半分左半分と胴体が真っ二つになり、それぞれ対の方

向へ飛んでいき爆発した。

「あ……あ……」

男は黒焦げになったロボットの残骸を見つめながら、驚きの声を漏らしていた。

刹那はというと、再び黒い霧となって消えてしまった大剣のことを考えていた。

「なんなんだよ、あれ。何が起きてんだ？」

必死に考え事をしている刹那に、男が声をかけた。

「あ、あの！」

「……うあい……」

不意に声を掛けられたせいで変な声を出してしまった。男の方も刹那の反応に少し驚いたようだったが、特に問題もなかったのもそのままお礼の言葉を述べた。

「た、助けられてありがとうございます！」

刹那はお礼を言った男を振り返り、じっと見つめた。その男は眼鏡を掛けていて、頭はぼさぼさで白衣をまとっていた。がりがりにやせていて身長が高かった。

「い、いえ、とんでもないです。当然のことでしたですから」

自分でもわかっていたが非常にあたふためいていた。反射的に良く

漫画で使うセリフを並べて口に出す。非常に格好わるい、刹那はそう思った。

しかし、男は刹那のその言葉を聞いたとたん、パツと刹那の手を両手で握り、勢い良く上下に振りまわした。

「いやいや、あなたは命の恩人です。ぜひ私たちの『研究所』に来ていただきたい。」

刹那は男の言葉を聞いて一つだけ気になることがあった。

「私たち？」

複数の人数で構成されているらしい。しかし、刹那はそんなこと気にも留めずに首を縦に振り、

「よろこんで」

そう一言。

その男はペアと明るい表情をつくり、刹那の手を引いてその「研究所」へと向かった

第7話 近未来編2

暗い空の下、男は刹那の手を引いて自分の『研究所』に向かった。

「あ、あの……」

刹那が男に声を掛ける。男は満面の笑みを浮かべながら、刹那のほうへくると顔を向けた。

「なんですか？」

「自分で歩けるんで、手を離してもらえないでしょうか？」

なるべく相手の機嫌を損ねないように刹那は用件を述べる。男はその表情を崩すことなく、

「あゝ、すみません。つつい興奮してしまつて」

と、ゆっくりと刹那の手を離す。

「もうすぐ着きますからね」

手を後ろで組みながらうれしそうに刹那に言う。その喜びようといったらまるで子供のようで、さっきまで怯えていたというのが嘘のような喜びようだった。

男はスキップをしながら進んでいた、暗い空の下でするような行動ではなかった。刹那も遅れを取らないように小走りで男についていた。

ルンルン気分が進んでいく男をよそに、刹那は不安になってきた。それもそうである、工場が極端に多くなってきたり、道幅も狭い。こんなところを先ほどのようなロボットに不意打ちされたらやられてしまう。不安に駆られて刹那は男に尋ねた。

「あの、その『研究所』ってまだですか？」

男はやはりにつこりとした顔を刹那に向け答える。

「あれです」

男は右手の人差し指で目の前の廃ビルをさした。男は廃ビルの扉を自分で開け、中へと入っていった。もちろん刹那も続く。

入ってみると、やはりと言うか、ほこりやガラスの破片があちこちに散らかっていた。外見の様子を裏切らない見事な散らかり具合だった。

男はきよきよと辺りを見渡す刹那をふふ、と笑いながら奥へと進んでいった。もちろん、

「こつちですよ」

周りを見て、男が行こうとするのにも気がつかない刹那に声を掛けるのも忘れなかった。刹那はあわてて男の後ろに着いていく。

しばらく歩いていくと、ビルの入り口よりもはるかに立派で頑丈そうな扉と、すぐ横の0から9までの数字が書かれたプレートが目に入った。

男はプレートに近づいていき、なにやら慣れた手つきで番号を押しした。すると、ガシャーンと音をたて、頑丈そうな扉が開いた。

男は再びスキップをして扉の中に入ったので、刹那のその後が続いた。

刹那が扉に入り、初めて目にしたものは、敷きつめられたおびたらしい数のテントだった。体育館並の広さの広間に歩く隙間がないくらい、びっしりと敷きつめられていた。

不意にがさがさと音がする。音した方を見てみると、テントからぼるをまとった子供が出ようとしていた、が、すぐに手をつかまれ、中に引きずり込まれた。（親が引っ張ったのだろうか？）

「何ですか、ここは……………」

ショックを隠しきれない声で男に尋ねる。

「……………詳しいことは研究所に行ってからお話します」

男の顔にもう笑顔はなかった。

男はスキップするのをやめ、テントの間を普通に歩いて進んでいった。（おかげで小走りで着いていく必要がなくなった）

テントの一番はじにたどり着くと、そこにはまた鉄の重苦しい扉があった。しかし、番号のついたプレートがない。今度は暗証番号を押さなくても良いようだった。

男が扉に近づくと勝手に扉が開いた。

「自動ドアか」

男は平然と奥へ進んでいく。もちろん刹那も続く。

自動ドアの中にあつたものは、大きなコンピュータやたくさんの方のついた機械だった。刹那は、こんな設備があるということに驚いたようだった。

「部外者を入れるなど言っているだろう」

不意に、奥から女が出てきて、男に文句を言った。

「そつだよ兄さん、知らない人入れちゃだめだって」

今度は男が出てきた。

「ああ、そんなに怒らないで。今日はすごい人を連れてきたんだ」

「すごい人って、その人？兄さん」

男が刹那を不思議そうな目で見る。当然だろう、見た目はごく一般の青年だ。（妙な服装だということを除けばだが）

「ああ、ぼくがp・8050に襲われたところを助けてくれたんだ。名前は……あ」

重大なことに気がついたらしい、男はまだ刹那の名前さえも聞いてはいない。

「刹那です。杉本 刹那」

瞬時の判断で男をフォローする。

「いや、ごめんごめん。僕としたことが、自己紹介もせずにつれて来てしまうなんて……」

男は頭を右手でかき、少し照れたように言う。

「申し遅れました、僕の名前はリーマス、ここの研究員です。こちらの女性が僕の姉さん、んでこっちが僕の弟」

「クリスマスという」

「ロックスって言います。よろしく刹那さん」

一通り自己紹介を終えた後、刹那はリーマスに尋ねた。

「それで、さっきのテントは何だったんですか？人が住んでいるようだったけど」

「うん、それは順を追って説明しましょう」

リーマスは近くにあってたいすに腰を掛け、両手の指を絡めさせ語り始めた。

「20年前までは、この町は人間しかいませんでした。食料を作るのも、生活用品を作るのも全部手作業で、効率の悪いことばかりの毎日でした」

リーマスは少し下を向き、話を続ける。

「しかし、一人の男があるシステムを完成させました」

「私たちの父だ」

クリスが話しに割ってはいる。リーマスが少しむっとした顔でクリスを見つめるが、クリスは知らん顔をしている。リーマスはあきらめ、話を続けた。

「そのシステム本体は、AI（人工知能）を組み込んだ機械、つま

り意思を持ったコンピュータでした。父はコンピュータに物を読み取り、情報を映像化するセンサー、音声を聞き取ることのできるマイク、言語を話すための電子式の音声用機械、簡単に言えば目、耳口を取り付け、自らの意思を的確に他人に伝えることができるようにしました。そしてそのAIは私たちの父が一から教育し、絶対に人を襲うことのないようにしました。その教育というのは……」

「人と機械は同等の『生き物』である、というのを教えることでした」

今度はロックスが話に割り込んできた。リーマスはまたむっとした顔でロックスを見つめるが、ロックスは知らん顔をした。この時刹那は、この兄弟は似ていると、笑いを漏らした。リーマスはため息をつき続きを語った。

「そのコンピュータはさまざまの勢いで学習していき、ついには人をも超えるほどの知能を身に着けました。その時期を見計らって父はあることをコンピュータに教えました。それは……」

「『基本的な機械の構造と製造方法および複製の方法』」

妨害したのはクリスとロックス。息がピッタリで、言うタイミングも同時だった。

リーマスはさらにむっとした顔で二人を見つめる。二人はというと、肝心なところを言って満足したらしい、笑顔を浮かべていた。リーマスは残念そうに続きを話す。

「そのことを覚えたAIはたちまちある機械の作り方を紙に書き、私の父に見せました。それは人型のロボットの設計図でした。父はすぐさまそのロボットの設計に取り掛かり、三日で完成させました。

それを足がかりに、AIはさまざまな機械やロボットを設計していききました。ロボットの製造機械や無限にエネルギーを作り続けるタンク、農作業に必要な機械から生活用品製造の機械まで、様々な機械を作り続けました。AIの設計したものには一切ミスがなく、機械による事故やロボットが起す事件などは絶対に起きませんでした」

そこまでの話が終わると、リーマスはふうとため息をつき、今まで話では見せなかった表情、昔の栄光を思い出すような、そんな顔をして話を続けた。

「さまざまな機械を作っているうちに、AIは人と機械の関係をより友好的なものにしていきました。環境問題も新しく作った機械でどんどん解決していき、人にも自然にも優しい社会を築いていきました。AIは人を愛し、また人々も、人のため、自然のため、そして社会のために尽くし続けるAIに好意を抱きはじめていきました。その姿はまさに機械と人間の理想郷でした。父も、その光景に満足して亡くなりました」

と、リーマスの表情が180度がらつと変わり、悲しい顔をして再び語り出した。

第8話 近未来編3

「10年前、異変は起こりました。今まで作ったことの無かった戦闘用ロボットの生産機や兵器を作り始めたのです。人々は不信に思いましたが、AIのことを信じ、目をつむっていました。もちろん私たちも含めてね」

リーマスは指を絡めさせるのをやめたが、代わりに右手ぐつと握り、それを左手で包み込むように構えなおした。

「しかしその3年後、私たちの期待は見事に裏切られました。AIの作ったロボットは大量生産した兵器を利用し、人間を殺し始めました。私たち人間は必死に逃げました。一部の人は武器を持って戦いましたが、長い間争いなどなかったもので、抵抗も無駄に終わりました。当時千人以上はいた人間も、今は200人もいません」

悔しそうにリーマスは刹那に言った。

それを聞いた後、刹那には、リーマスが悔しさの右手を左手で隠しているように見えた。

自分たちが裏切られた悲しさ。違和感を覚えたときにすぐ検査しなかった自分のミス。

何も出来ずにただ逃げ回っていた自分の無力さ。

それらを、隠すような、まるでそんな仕草。リーマスの話を聞き、あることが思い浮かぶ。

「200もない、ということはまだ人は存在している、て事だよな」

さっき見たぼろを着た子ども、人はまだ存在している、生活用品が

製造されていない、大量のテント、これらのキーワードが意味するもの。

「まさか……」

嫌な予感が、頭をよぎる。刹那は少々慌てて『確認』する。

「それじゃあ、さっきのテントの中の人たちは」

リーマスは深くうなずいて刹那に『確認』に答えた。

「その通りです。テントの中の人、その人たちはロボットの殺戮から逃れた人々です。みんな食料も作ることができないので、非常食でなんとか持ちこたえています……」

「もうすぐ、在庫が尽きてしまう、ってことですか」

刹那は、リーマスの口ごもった先と自分の考えが合っているかの確認のため、リーマスに問い出した。嫌な予感は的中していた。テントの中の人々は、ロボットの支配から逃れた人たち、裏切りによりシヨックと絶望感を味わった人たち。もちろんその中には、親族が目の前で殺された人もいるだろう。そんな中、必死に逃げてきた人たちだった。

案の定、リーマスは再びうなづき、そして語りだした。

「それは置いといて続きを話しましょうか。私たち兄弟はAIが人を襲うことに疑問を抱き、その原因を解明すべくAIにハッキングを繰り返しました。原因を探るのに時間はかかりませんでした。AIを狂わせた原因、それはウイルスによるものでした。その原因を知ったとき、私たちはあることに疑問を覚えました。それは……」

・・・」

「どんなウイルスも進入不可能のファイヤーウォールをくぐりぬけて感染することなんてありえなかったからだ」

再びクリスが割って入るが、さきほどのふざけた様子は無く、真剣な口調だった。

「あれ？」

刹那の頭に疑問が浮かぶ。浮かぶと同時に、

「何で進入不可能のファイヤーウォールがあるのに、ハッキングなんて難しいことがそんなに時間がかからず成功したんだ？」

刹那はリーマスに聞いていた。リーマスはしまったと言わんとばかりにあっ、と口を開け、言い忘れた事を刹那に伝えた。

「すみません、言い忘れてしまいましたね。実は調べて分かったことなんです、ウイルスによってファイヤーウォールのシステムが解除されていたんです。それでいとも簡単に進入できたってわけです」

リーマスは頭をかきながら刹那に伝えた。

「あ、なるほどな」

リーマスの説明を聞くと刹那はうんうんと、熱心にうなずいていた。リーマスたちは、刹那のその様子がおかしくて、つい大事な話なのにふっ、と笑ってしまっていた。

「さて、続きを話します。私たちはそのウイルスを滅するべく、研究を続けてきました。AIに感染したウイルスは、そんじょそこらのウイルスバスターの攻撃にはびくともしません。だからこそ・・・」

「強力なワクチンソフトが必要だったんです」

ロックスも、真面目な口調で割り込む。それゆえ、リーマスは何も言わなかった。リーマスはロックスのことには触れず、続きを話した。

「私たち兄弟は、AIのウイルスに通じるようなワクチンソフトを作り続けてきました。世界中のワクチンを合わせ、どんなウイルスにも対抗できるワクチンを。そしてつい最近になってようやく完成したのです。AIに巣くうウイルスを消滅させることの出来る、まさに最強のワクチンソフトを」

言い終わったと同時に、リーマスは席を立った。そして奥のほうへ歩をすすめ、一番大きなコンピュータについていたボタンを押した。すると、ウィーンと音を立てコンピュータの上にある機械の壁が開き、中から一枚の黄色いフロップディスクが姿を現した。リーマスはそれを手に取ると、再び席に着いた。

「これがそのワクチンソフトです。最初で最後の対ウイルス用の武器です」

そういうと、そのワクチンソフトを刹那に手渡した。

刹那は少しためらってからそれを受け取った。見かけどりの重量のソフトは、なんともいえない威圧感を出していた。

刹那の真剣な様子を、申し訳ないと思いつながらリーマスは、

「しかし、このソフトは一つ欠陥があるのです。それは……」

「送信してしまうとたちまち効力を失い、ただのふざけたプログラムになってしまうこと」

欠陥を伝えようとするが、再びクリスとロックス、二人に邪魔された。しかし、リーマスはめげずに刹那に続きを伝える。

「その通りです。このソフトは、この施設にあるコンピュータを使ってAIに送信してしまうとたちまち効力を失ってしまい、効果がなくなるのです。ゆえにAIのコンピュータに直接入れなければなりません。しかし、我々には戦うすべがなくAIにたどり着くことなど不可能です。そこで、戦闘ロボットに対抗できる人間が必要だったのです」

嫌な予感がした。

「まさかな、そんなこと、いやでも」

そんなことはない、と思ってもやっぱり浮かんでしまっ

「私が外の見回りをしているときに不意に戦闘ロボット襲われました。そのときに私は刹那さんに助けられました。私はそのときに思いました。この人なら、と」

言わないでくれ、それ以上先は。

心の中でそう願うが、

「刹那さん、お願いがあるのです。刹那さんの力でAIまでの道を切り開いていただきたいのです」

言われてしまった。もっとも最悪で、もっとも恐れていたケース。先ほど倒したようなロボットが多数存在している場所へと行ってくと、そう言われてしまった。

「いや、あの、さっきのは、なんというか、その、自分でも良く分かっていないって言うか、その、つまり、使いたいときに使えない、というわけで、その……」

必死に弁解を試みるが、

「お願いします！人々のためにも、ウイルスによっておかしくなっているAIのためにも、どうかお願いします！」

ここまで、必死になられたのでは断るわけにもいかない。

本当のことを言うと、刹那も恐怖におびえている人たちを救いたかった。断ったのも、自分が死地に行かされることの恐怖感からではなく、あの能力をうまく使いこなせずに何も出来ないまま、殺されて、人々が更なる恐怖感に襲われることの怖さからだった。何も出来ない自分に期待されたことが、怖かった。もちろん、命の関係している期待など初めてだったから余計に怖かった。

あの能力が使えれば、あの黒い大剣さえ出てくれれば……. 行きたかった、救ってやりたかった。この恐怖から、絶望から。でも、

使えないんだよな…….

無力、という言葉がピッタリなのだろうか、嫌でもそんな単語が頭

に浮かんでくる。
せめて、リーマスに伝えよう。

「リーマスさん、実はあの能力、まだうまく使えないんです。自分でもあれが何なのかすら分かっていないんです」

さっきの動揺した言葉とは逆に、しっかりと、誠意を持って伝えた。

「本当なんですか？それ？」

本当に驚いたみたいだった。しかし、嘘です、と言えるわけでもなく（言っても能力が開花するわけでもないのだが）ただ、深く頷いた。

リーマスはがっかりしたようだった。希望が、唯一の希望が、今ここで絶たれたのだから。

パンツ！！！！

いきなり音がした。どうやら手をたたいた音のようだ。

音のしたほうを見ると、クリスが両手を合わせている。犯人はクリスだった。

「よし」

それだけ言うと、刹那のほうに向かって歩いてくる。

「リーマス、お前は刹那に助けてもらったと言っていたな。どうやって助けてもらった？」

歩きながらリーマスに聞いた。

「黒い大きな剣でp・8050を真つ二つ、だけど……」

弱弱しくリーマスは答える。(リーマスは姉であるクリスに頭が上
がらないらしい)

それを聞いたクリスはにやりと、何か企んでいそうな笑い刹那のほ
うを見た。

「あ、あの……」

近くまでクリスが迫ってきた。見下ろされている、まさにそんな光
景だった。

「じゃあ刹那、お前がその力を発動させたことは何回ある？」

突然聞かれた発動回数。わからないわけがない、その数、

「に、二回です」

あわてて刹那は答えた。

「そうか、二回か」

にやりと不敵な笑みを浮かべたクリスは、なんともいえない重圧感
にあふれていた。

なんだか怖い、そんな感情が刹那に芽生えた。恐怖感など、そつい
う類ではなく、なんとなく怖い。

「一回目はまぐれかもしれないが、二回目はそんなのではない。二回も出来たんだから三回目も出来るはずだな」

「姉さん、まさか……………」

ロックスはあわてて言葉を放った。その額には、少量の汗がにじみ出していた。

刹那にはクリスの意図が分からなかった。二回目も出来たのだから三回目もできる？

使いこなせることなら使いこなしたい、その力で人々を助けたい。しかし出来ない、だったらどうしようというのか。

「出来ないと最初から諦めるのではなく、結果がどうあったとしてもやってみるんだ。それでだめなら諦めてまた別の方法を探せばいいのだ」

とにかくやってみる。

「そつだな……………」

リーマスのお話を聞く限り、こちらの状況も限界らしい。自分が唯一の希望ならば、

「やってみようかな、やれるだけ」

やろう、やってみよう。

そんな感情がわいてきた。

「わかりました、やれるだけやってみます」

第9話 近未来編4

やろう。

そう決めた刹那はリーマスの座っていたイスに座って集中していた。(リーマスは刹那が座るという理由でクリスに蹴り飛ばされた)最初はただ、手を合わせるようにしてはあー、と言っていたんだけど、効果がないと判断したクリスは集中してみたらやるのはどうかと刹那に提案した。刹那もその意見に賛成し今に至っている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言で目を瞑り、ただ集中する。だが、

「・・・・・・・・・・刹那、まだか。」

かれこれ30分経っている。いい加減痺れの切れたクリスは刹那に話しかけた。
その瞬間、

「はあ~~~~~!!!」

突如、刹那は気合の声を出し、最初と同じように手を合わせた。が、

「・・・・・・・・・・・・・・・・何も起きませんね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そうみたいだね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何も起きなかった。つまり、失敗ということになる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・やっぱり無理なのかな」

ふう、とため息をつく。三回目を信じてやっているが、いまだに何も起きない。

やる気をなくした刹那にクリスが、

「二回目も出来たんだ、三回目が出来ないわけがない。やり方を変えてみればいくかもしれぬ。諦めるな」

と、一喝。

「出たよ、姉さんの『やり方を変えてみよう方法』」

この方法を説明しよう。

- 1、やる気のないやつを説得し、もう一度奮い立たせる。
- 2、失敗したらやり方を変えてみようと言う。
- 3、出来るまで繰り返す。

以上である。

「さういえば、小学校の逆上がりもこの方法でがんばったっけな。」
昔の事。あんまりに出来ないで蹴り飛ばされた記憶がある。肋骨骨折で逆上がりは結局出来なかった。

「すごいですよ、刹那さん」

「もう少しですね、でも良く出来ました」

みなに褒められて刹那は、こんなのも悪くないな、と思ってしまったのだ。しかし、喜ぶのはまだ早かった。まだ肝心な大剣が出せていないのだから。大剣を出すこと、これが絶対条件なのだからこれで浮かれてはいけないのだ。た。

イメージで黒い霧が出たんだから、霧が出たの後に大剣をイメージすれば出るのかな？

失敗するかもしれない不安と、成功したらと思う希望、二つの感情に挟まれながら、刹那は黒い霧をイメージする。

〜黒い霧、黒い霧、黒い霧。〜

すると、先ほどと同じように黒い霧が、少しずつ、刹那から出てきた。刹那がそれを確認すると、急いであの黒い大剣のことをイメージする。闇のような黒い色の刃、しっくりくる持ち手、おぞましい威圧感。最初に見た（感じた）大剣を鮮明にイメージする。

刹那の体の周りに浮いている黒い霧が、

あの時と同じように、

大剣の形が形成され、

刹那の手に、

あのときの大剣が、

握られていた。

+++++

大剣が出来るや、すぐに歓声が上がった。

刹那はリーマスとロックスに背中をたたかれて、うれしいやら痛いやらだった。(クリスは成功したとたんに刹那めがけてとび蹴りをしてきたが紙一重のところかわされた)

喜ぶだけ喜んだあとは、AIのいる場所の説明と手順のことについて話し合った。

AIはこの町の一番高いビルにあり、見張りのロボットはもちろん他の戦闘ロボットも蠢いているらしい。戦闘ロボットの武器はビームソードとレーザーガン、いつてみれば近距離用の武器と遠距離用の武器だ。だが、ビームは高熱なため触れただけで溶け、レーザーに貫かれるものならば、重傷はまぬがれない。そのため、刹那の出した真正面から、という案は危険すぎるという事で全員に却下された。

リーマスの出した、ばれないように忍び込むという案も、見張りもいるし、そのロボットに温度専用のセンサーがついているということとでクリスに却下された。

しかし、入口は一つしかないため、どうしても正面から入らなければならぬ。

「やっぱり正面から入った方がいいんじゃないか？」

「だから駄目ですつてば、危険ですつて」

「ふう、何とかならないものか」

みんなが話し合っているときに一人リーマスだけが、笑みを浮かべていた。その笑みに、なんとなくむかついたクリスは、

「リーマス、蹴り飛ばされたいのか？」

空気も凍るような声でリーマスに問いかける。いつもならこれで真面目になるはずのリーマスは、

「いい方法があるんだよ」

と、笑みを浮かべながら驚きの言葉を放つ。え、と刹那とロックスは、間抜けな声を上げた。

「言ってみろ」

「はいはい、まずは温度センサーのこと。そのセンサーのついてるロボットはその見張りだけなんだよね。だったら、見張りさえやり過ぎせばあとは中に入っても大丈夫、ばれる心配はない。あとはロボットの視界内に入らないようにしてAIのところまで行けばいい」
その意見にクリスはため息をつき、

「見張りをやり過ぎすのはいい。だけど、中にはロボットがうじゃうじゃいる。そんな中、ロボットの目をかいくぐって行くななんて不可能だ」

欠点を指摘する。が、

「その通り。だから二人の囷役の人がいるんです」

と自信ありげに答えた。

囷役、言ってみるのは簡単だが、果てしなく危険な役である。敵にわざと見つかり注意を引く。ある意味、乗り込み役よりも危険なのである。

「まずは正面の入口にいる見張りをひきつける役に一人、もう一人は中のロボットをひきつける役の人。刹那さんは論外、ワクチンを扱えるのは僕一人、ということ……」

ちらと、クリスとロックスのほうを見る。その意図に気付いた二人は、

「おいふざけるな！そんなことできるわけないだろう！」

「そつだよ兄さん、すぐに殺されちゃうって！」

すごい形相で否定する。まあ、やりたくないというのも、無理だとも当然といえば当然なのだが。そんな反応を見るなり、

「いくらなんでも生身で行けなんて言わないよ。幸い、ロボットは足も遅い。襲ってくるとしてもレーザーガンを撃ってくるだけ。だからこれを使う」

リーマスは懐からスイッチのついた小さな箱を取り出した。緑の箱に、ピンク色に近い赤色のボタンがついていた。これをどう使えとこのだろうか。

「ボタンを押すとレーザーを防ぐバリアが5秒間出る。もし、レーザーがあたりそうだと思うたらボタンを押すこと。ただし、3回しか使えない」

クリスとロックスはそれぞれ箱を手に取りまじまじと見る。唯一の防御壁、唯一身を守るための盾、この小さな箱に自分の命運がかかっている。生きるか死ぬか、全てボタンを押すタイミングにかかっ

ている。少しでも押すタイミングがずれれば、レーザーは自身を貫通し、死に至るだろう。

「僕が中のロボットをひきつけるよ、姉さん」

クリスは驚愕した。何を言っているのかわかっているのか、と心の中で思った。

いや、わかっていると言っているのだ。正面の見張りの注意を引くのは簡単だ。見つかって逃げればそれでいい。だが、中の注意を引くのはそうもいかない。見つかっても外になど逃げれない（例え逃げれたとしても意味がない）、AIがひたすら直ることを信じて逃げ回っているしかない、うごめいているロボットをかわしながら。それをわかっている、だからこそ、中のほうを引き受けた。自分の姉にそんなことをさせるわけにいかない。なら自分がやると。

「ロックス・・・・・・・・・・・・・・・・」

なんともいえない気持ちになる。自分のために危険な方を選ぶ弟に、なんと声をかけたらいいのかわからなかった。ただ、弟が、ロックスが心配だった。

「大丈夫だよ、これでも逃げ足は速いし、ワクチンをAIにいれるのもそう時間はかからないでしょ、兄さん？」

クリスの心配をわざとはぐらかすようにリーマスに問いかけた。

「AIにたどり着くまで5分、入れるのに3分、というところだね。それだけ早くても最低8分はかかってしまう」

事実を伝える。

8分。バリアが使える時間はわずか5秒が3回、つまり15秒。耐え切れるか？いやなに、雨のようにレーザーが飛んでくるとは限らない、節約していけば大丈夫だ。そんな算段をつけているときに、クリスはロックスに話しかける。

「無理をしなくてもいいんだぞ。私がやっても……」

しかし、クリスの心配は、

「いって。大丈夫、足は姉さんより速いし、何とかなるから。心配しなくて大丈夫」

この確証もない言葉によって封じられた。ならばと、クリスは、

「だったら、持っていけ」

自分のもっていた箱を、ロックスに手渡した。

「だったら姉さんが……」

さっき自分がやられたように、クリスはロックスに言う。

「大丈夫、すぐ近くに障害物がある。レーザーガンといっても建物も貫通するほどの威力はない」

その通りである。レーザーガンといってもコンクリートや鉄を貫通するほどの威力はないのである。（大量生産は質の低下につながり、本来の効果の半分以下になってしまった）

直接当たれば死につながるが、物陰に隠れてしまえば（薄すぎると貫通する）死ぬことは免れる。

だが、ビルの中は障害物が少なく、隠れる壁も決して多くない。1
5秒のバリアではどうがんばってももたない。

「わかった。ありがとう、姉さん」

そのことをわかっていて、だからこそロックスに箱を渡した。30
秒のバリアならもつかもしれない、と信じて。血のつながった姉弟
に生きて欲しくて。

「さて、役割も決まったことですし、いきますか」

そっけなく言った。

ロックスは、リーマスの言葉にあきれ『ず』、クリスはそのことに
むかつ『かなかった』。

二人ともわかっていて、一番つらいのはリーマス自身だということ
を。表情には出さないが、二人にはわかった。ずっと、一緒に暮ら
してきたのだから、顔に出せないこともわかっていて。心の中では
悲しんでいることも、わかっていて。

「うん、行くう」

そんな空気をかえるように、刹那は元気良く言った。
それを合図とし、AIのビルへと、一同は向かった。

第10話 近未来編5

「2体、か。まあ何とかなるだろう」

「姉さん、死なないでね」

「がんばってください」

「ちゃんと振り切ってくださいよ」

一同は見張りのセンサーが届かないところに待機していた。

見張りのロボットはレーザーガンを所持している。近寄れば追いかけるがレーザーを放ってくるだろう。しかし、クリスの役割は見張りを破壊することではない。

「いつてくる。しっかりやるんだぞ」

見張りの注意をひきつけ、刹那たちを進入させることだった。

「無事に。」

「怪我しないでください」

「姉さん……………」

そのため、クリスはゆっくりと見張りに近づく。見つけた瞬間逃げつもりだった。自分だって命は惜しい。そろそろと、見張りに近づく。ゆっくりと、しかし確実に、徐々に徐々に近づいていく。と、そのとき。見張りの一体がクリスに気付き、走って来た。

「！！！！」

クリスは逃げた。もちろん二体の撃ってくるはずのレーザーのほうに気を配るのも忘れない。

見張りの二体はクリスを追いかける、が機械仕掛けの体である二体はとても人間の足には追いつけない。ならばと、

バシューー。

レーザーをクリスめがけて撃ち放つ。

クリスにレーザーが迫る。5メートル、3メートル、1メートル。もう当たる寸前のところで、

「はっ！！！！」

クリスのはがれきの障害物のかげにダイブする。おかげで当たるはずのレーザーも空を切って一直線に飛んで行き、やがて消えた。

クリスはレーザーが通り過ぎていったのを確認するとすぐさま起き上がり、再び走り出す。

ダイブして起き上がるまで5秒ちょっと。だが、その5秒の間に距離を詰められる。

「もう一回ダイブすればあいつらの射程圏に入る」

緊急回避用のダイブはもう使えない。ならば、

「障害物に身を隠す」

あと少しで廃ビルの陰に隠れられる。その距離残り約10メートル。

そのまま走っていれば問題ない、が、

バシュー！！

バシュー！！

二体は同時にレーザーを放つ。

レーザーはどんどんクリスに近づく、

障害物である廃ビルはもう少し、残り3メートル。

だが、レーザーのスピードは人間の足よりも遥かに速い。

ぐんぐんとその距離を縮めていく。

もうレーザーとクリスの距離はない、クリスの体はレーザーによって貫かれた。

「うあー！！！！」

しかし、貫かれたのは左肩。残りの一発ははずれて消えていった。はずれてくれたおかげで廃ビルに、ひとまず身を隠すことが出来た。

「左肩で良かった。足だったら死んでた」

出血部分を右手で圧迫し、止血する。右手が真紅の血によって真っ赤に染まる。どくどくと血が漏れ、地面に滴る。

しかし、歩を止めることは決してせず、ひたすら、走る。

その走りは、注意を引くためなのか、自身の命を守るためなのか、わからなかった。

+++++

「行ったね、見張りの連中は」

クリスに連れられて、見張りは正面の入口からいなくなった。

「早く行きましょう。ぐずぐずしていると見張りが戻ってきます」

ロックスがせかした。

まさにその通りだった。クリスが見張りのロボットを振り切ったのならすぐに戻ってくるはずなのである。こんなところにいる暇など微塵もなかった。

「じゃあ行こう」

その一言で、3人は入口に向かって走り出した。先頭はもう一人の囷役のロックス、そのあとにリーマス、刹那と続く。

入口のドアをくぐったロックスは二人に告げる。

「ではここで、2人はしばらくしたらAIのところに戻って来てくださいます」

言うなり、ロックスは走り出した。

AIの設備はそう簡単に移動できるものではなく、今も作られた当時の場所、つまり、8階の奥の部屋に存在している。またビルも改装などしていないため、ビルの作りは当時のまま。つまり、リーマスたちの父の趣味で設計した、まるで迷路のように曲がり角の多いのも、やたらと階数の多い造りもそのままだった。

ウイルスに犯されたAIは自己が破壊、もしくはワクチンを入れられるのを恐れ、下階に武器を持たせたロボットや見回りを無数配置した。そのロボットたちに音声機能を取り付け、侵入者を発見した場合は叫ぶようにする。こうすれば、一体でもロボットが侵入者を発見したときに、ロボットたちはその音声を聞きつけ、その階にいるロボットは一気に侵入者を追いかけることが出来る。機械に頼つ

ていた人間たちは空飛ぶ乗り物など作れるはずがなく、屋上から乗り込まれる心配もない。ロボットは呼吸しないため、窓も必要ない。必要とすれば動くためのエネルギー（エネルギーのタンクは地下に無数存在しており、現在も無限にエネルギーを作り続ける）。入口だつて一つあれば充分、他の出入り口など必要ない。

つまり、進入できるのは正面の入口一つ、ここさえ抑えれば人間たちは入ってこれないということになる、AIも安全だ。

しかし、その見張りを遠ざけ、他のものが進入してきたら、曲がり角の多いこのビルは侵入者にとっては有利になりAIたちには不利となる。無数にロボットはいるが、見失ってしまい、AIのところへ踏み込めるかも知れない。それこそ、リーマスたちの最後の切り札であり、希望だつた。

ロックスは左の角を曲がり、少し離れた角を右に曲がると、

「シンニューウシャー！シンニューウシャー！」

1体のロボットに見つかり、やたらと大きい声を上げられた。

「思ったより見つかるのが早かつたな」

その声を合図とし、次々とロボットが現れる。と、同時に、ロックスはロボットに背を向け、一目散に逃げ出した。

「シンニューウシャー！シンニューウシャー！」

そんな声を上げながら、ロボットたちは追いかけてくる。

声のおかげで、まわりのロボットたちはどんどん集まってくる。一人だつたのに、現在は10体以上、確実にいる。と、ロボットたちは手に持っていたレーザーガンを、

バシューー！バシューー！バシューー！バシューー！バシューー！
バシューー！バシューー！
バシューー！バシューー！バシューー！バシューー！バシューー！バシューー！
バシューー！バシューー！

雨あられのように乱射した。

ひー！！！！

あわてて左角に身を隠す。

ひとまず安心、というところだが、正面からもロボットがこちらに走ってくる。手にはもちろんレーザーガンが握られている。銃口はロックスに向けられた。

「嘘でしょ！？」

バシューー！バシューー！バシューー！バシューー！バシューー！
バシューー！バシューー！
バシューー！バシューー！バシューー！バシューー！バシューー！
バシューー！バシューー！

もちろん全員一斉発射、逃げるスペースなどあるわけ無い。あとは無数のレーザーに貫かれるだけ
いや、

ひ早くもか……………

リーマスにもらった箱を取り出し、レーザーと自分の距離が充分詰まったことを確認して、

ひよっつ

ボタンを押す。すると、一瞬にして淡い青色の壁が円状に自分をすっぽりと囲む。そして、レーザーが自分の体を貫く1メートルほど前になって、

シュー、

と、まるで火を消したような音を出し、レーザーは消えていった。

「しっかり機能しますよ、兄さん」

と、そんなことを思いながらロボットたちに背を向け走り出す。残り3秒前後、その時間を利用して、自分の隠れるところまで走る。レーザーはバリアが遮断してくれるから気にかける必要などない。ロックスは走る、

障害物のあるほうへ、

自分の身を隠す盾のある方へ。

全力疾走で走る姿は、クリスと同じく、引き付けるために走っているのか、自分の命を守るために走っているのかわからなかった。

第11話 近未来編6

「行きましようか。今が絶好の機会、と言ったところですからね」
「ああ。じゃあ、後ろからしっかり付いていくから、道案内は頼んだよ」

ロックスが囿になってロボットを引き付ける役を提案したのは、他でもない、リーマスである。

血のつながった兄弟を、最も危険な所へ行かせた張本人、リーマス。果たして、リーマスはわが身可愛さでロックスにこの役割を押し付けたのだろうか。違う、これにはれっきとした理由があった。

理由とは、AIに入れるワクチンを扱えるのは、三兄弟の中でリーマスただ一人だということである。

ワクチンソフトを製作する際、三人はそれぞれ役割を決めて取り組んでいた。クリスがあらゆるウイルスバスターのソフトを収集し、ロックスがAIに感染したウイルスの情報を解析し、リーマスが二人の集めてくれたソフトや情報を元にワクチンをプログラミングしていくという手順である。

三人で製作したといっても、直接ワクチンに関わっていたのはリーマスだけとなる。もちろん、仕組みも効果も、知っているのはリーマスのみ。

よって、用心棒扱いの刹那も除外され、消去法でロックスとクリスがリーマスの案である『囿役』となったのである（ロックスがビルの中の囿になることを、リーマスは想定していなかった）。

二人を危険にさらしてまで、この作戦を行うのにはもちろんメリットがある。ロボットに襲われ、食物もろくに作れないのはリーマスの話からわかっているだろう。人々は保存食で耐えており、命綱であるその保存食も尽きようとしている。つまり、あまり時間がない、早く手を打たないと食料が尽きてしまい、全滅してしまうことにな

る。

そこで、リーマスは囷を使うという作戦を編み出した。入口が一つしかなく、裏口がないというのも理由の一つだが、なによりもAIにたどり着くスピードが速いということにある。囷によって見張りのロボットの注意をリーマスたちからそらし、その際にAIに向かって一直線。戦いながら進むよりよっぽど効率がいいはずである。

AIの部屋は侵入者対策として一つしか入口がない。裏を返せば、入口だけに集中して守備をしていればいいということだ。他のところから戦闘ロボットが来ることもない。

これらが、リーマスが必死の思いで考え出した、人々を苦しみから救う手段だった。

囷となつてくれたクリス、ロックスのためにも、このチャンスを棒に振るわけにはいかない。

リーマスと刹那は走り出す、
何度も通ったAIの部屋へと向かう、
迷いのない足で走るリーマスの後を刹那が追う。

+++++

もぬけのから、という表現がこの状況にピッタリだった。ロボットなどいない、聞こえてくるのは下の階からの銃声のみ（ロックスは死ぬ物狂いで逃げ回っている）。

「大丈夫、だよな」

今刹那達がいるのは7階のフロア、迷路のように複雑な曲道をぬけながら、ひたすら走ってここまで来たのである。ロックスが、下の階で追い掛け回されているうちに、上層部のロボットたちも1階に降り、一斉に追いかけているのだ。

「クリスもロックスも、大丈夫……だよね」

今、何のトラブルもなくここまで進んでこれたのも、ロックスのおかげだった。一人、たった一人だけで逃げ回り、注意を刹那たちからそらしている、今も。

「死んだ、なんてことは、絶対ないよな」

心配だ、冷酷で感情もないロボットに、ただひたすら追いかけられ、レーザーをかわし、逃げている。そんな彼らがどうしようもなく心配だった。

人々を助けるためとはいえ、なぜ自分たちが命を賭けなければならぬのか（刹那は除く）。その理由が今ひとつ、理解できない。別にその姉弟のせいでウイルスに侵されたわけでもないのに、なぜだろう。なんでここまで出来るのだろう。もしかしたら命を落とす

「刹那さん」

リーマスに呼ばれ、刹那は正気に戻る。気付けば、既に8階へと続く階段の前に立っていた。この階段を駆け上がり、奥の部屋に突入すれば、

「AIとご対面か」

などと頭に浮かべ、改めてリーマスの顔を見る。緊張と、あせりと、動揺、これらが全て入り混じった表情をしていた。

「この階段を上るといよいよAIのいる階にたどり着きます。ここ」

まではロボットがいなかったけど、8階には必ずAIを守備するためのロボットがうごめいています。今のうちに剣を出しておいたほうが良いでしょう」

そうか、と刹那はうなずく。階段にも守っているロボットがいるかもしれないのだ、最初から大剣を出して行った方が絶対にいい。

「よし」

まず、頭の中で黒い霧をイメージし、自らの体と手から黒い霧を出す。次に大剣をイメージする。黒い霧は大剣の形となり刹那の手に収まった。準備は万端、あとは突入するだけ。

「行きますよ刹那さん」

「わかった」

短い会話を合図に、二人は勢い良く階段を駆け上っていった。

このビルの階段は段数こそ短くはないものの、グネグネと曲がっているため実際の距離よりも長く感じる。上野様子を見ようにも、曲がっているため、どうやっても上の様子がわからない、このため刹那たちは階段を上がるときに、上をのぞくようにして上がって来なければならなかった（刹那が剣を出さないのは力を温存しておくため、とはいっても、剣を出すことにエネルギーを使うかどうかはわからないが）。この階段だって同じだった。3段程度上がったところで曲がり、再び3段上って曲がるの繰り返しだ、これが5回続くとやっと次の階へと進むことが出来る。今は4回目、次曲がれば8階へと到達する。

曲がり角に身を隠して、二人は8階の様子をうかがう。やっぱりロボットはいた。

「さて、どうしたものでしょうか？」

頭の中であれこれ考えていると、隣にいたはずの刹那がパツと飛び出し、大剣を一振り、

「はあ！！」

黒い風が吹き、見張りのロボットは両断されていた。

「リーマス、行こう！」

あぜんとしているリーマスに呼びかける。かくして、刹那たちはA Iのある8階に乗り込んだのであった。

+++++

8階をただただ走る二人、目指しているのはA Iの部屋。先頭はリーマス、後から刹那が続いてくると感じる。道を良く知っているリーマスが走り、後ろから追いかけてくるロボットを真っ二つにしながら刹那が追いかける、という手際だった。

「リーマス、まだか？」

「あの右の角を曲がれば！」

指をさしたのは、ほんの5メートルほど手前の角だった。

ロボットは相変わらず追いかけてきている。刹那の働きもあつたため、後ろを追ってくるロボットの数は大分減っていた。レーザーを撃つてくるときも隠れたり、あるいは撃つてくる前に大剣でたたき

切ったのである。

リーマスが角を曲がると、扉があった。リーマスに連れてこられた研究所と同じ、自動ドアだった。もちろんその前には見張りのロボットが2体、並んで立っている。

「はあッ！！！」

ロボットにレーザーガンを構えさせる時間も与えず、刹那は大剣の一振りですべてを斬り飛ばした。胴体が上半身、下半身になり、動かなくなったロボットは、バチバチと電気を出していた。

「リーマス！！」

「わかってます！！」

いよいよ、というところだった。ついに、ロボット達からの恐怖が終わる。今までの苦勞が報われる。AIを正気に戻すことが出来る。リーマスたちの父のいたときの、あの輝かしい時代へと帰ることが出来る。

その、期待を胸に自動ドアをくぐった先にあつたものは、

「うわ、あ」

巨大な機械だった。コンピュータみたいなものが組み込まれている。目でわかった、これこそがAI。機械の神に等しい、強大で、おぞましい姿の機械の塊。

この機械の製造したロボットのせいで、生み出された武器のせいで、どれほどの命が消えていっただろう。消えていった命のためにも、困らなすてくれたクリス、ロックスのためにも、

「早く、終わらせなければ」

リーマスはAIに近づいた。恐怖を終わらせるために、ゆっくりと胸ポケットのワクチンソフトを取り出した。と、リーマスは、

「刹那さん、入口の防御、頼みます」

刹那に最終注意を促す。刹那は声では答えず、うなづく事です承した。

リーマスは手に取ったワクチンを、AIに入れた。

「AI、もうすぐだからな」

ワクチンがAIの中のウイルスを破壊するまで、だいたい3分程度だった。この3分間、AIはどのような抵抗をしてくるのだろう。長い、長い、3分間が始まった。

第12話 近未来編7

AIの部屋の入口は防弾ガラス製である。外の廊下を見張る人にとつては、とてもありがたいことである。

ロボットはまだ来ない。AIにソフトを入れてから、すでに一分近くたっていた。おかしい、なぜ来ない。後2分もすればウイルスを完全に破壊し、昔のAIに戻るのだ。いや、昔に戻るといっても、『今』のAIの自我を殺してしまうと言ったほうがいいだろう。そんなこと、ウイルスは絶対に望んでなどいない。ならばどうして？、理由は？

一つも浮かんでこない、早々に手を打たなければAIの負け。それはそれでいいのだが、何か引かかる。

と、ロボットが見えた。もちろん一体だけではない。その数、

ひゃ、やりやがった………

不明。

一目見ただけでも嫌になつてくるほどの数、と言っしかない。ロボットにより廊下が埋め尽くされていたのである。先が見えないくらい、それは多かった。手にはレーザーガン、ビームソード。

AIが今の今まで動かなかった理由、それは数で力押ししようとして、全ロボットを8階に集結させるためだったのである。

いくら武器を使つても、一対一だと負けてしまう。ならば、百対一ならどうか、と。

「リーマス！あと何分？」

「あと1分45秒！」

それを聞くなり、刹那は廊下に飛び出していった。賢明な判断である。

迎え撃つなら、出来るだけ遠い位置のほうが良い。一体でも部屋に侵入させてしまえば全て水の泡なのだから。

ロボットたちは一斉にそれぞれの武器を構える。狙いはもちろん刹那ただ一人。

「やらせるかよ!!」

大剣を一振り、前方のレーザーガン部隊が壊滅し、

「はあ!!」

もう一振り、ビームソードで一斉に切りかかってきたロボットを壊し、

「でやああ!!」

さらに一振り、後方のレーザーガン部隊を滅ぼす。

「なんだ?」

自分に迫り来る機械人形を壊しながら、

「わかんないけど」

自分の体の、

「すくく、軽い」

変化に気付く。

「ロボットたちが遅く感じる」

大剣を振り回しながら、自らの変化に気味悪さと喜び、二つの感情が混ざった感情を覚える。今現在、間違いなく刹那が押している。

残り1分。

++++

「あと、40秒。」

緊張。今、リーマスは緊張していた。

背中に感じるプレッシャーを、ひしひしと感じながら、リーマスは緊張していた。あと少し、だけど、みんなが。クリス、ロックス、それから刹那。心配、緊張、不安、プレッシャー。複雑に絡み合う心境。

「あと、30秒」

余裕なんて少しもなかった。少しでも早く終わらせたかった。この場から逃げ出したかった。なるべくなら、背負いたくはなかった。でも、自分の父の想いを、人々の恐怖をはらってやりたい、と言うのも事実だった。

「あと、20秒」

AIとリーマスは友達だった。思えば、あれが初めてだったのかも。親近感がとてつもなく感じられた機械を見るのは、触る

のは、感じるのは。

楽しかった。メンテナンスに行つてくると嘘をついて、AIと色々話をしたのを覚えてる。宇宙のこと、自然環境のこと、人間のこと、機械のこと、それから、自分のこと。

「あと、10秒」

友達を越えた関係だった。父が亡くなったときも、ずいぶんと励まされた。クリスマスも、ロックスも、それから町のみんなも、AIが好きだった。もはや家族だった。家族同然だった。その大事な家族が、突然いなくなつてしまった。それどころか裏切つた、悲しかった、つらかつた、何もかも嫌になつた。

「終わった。AI、スリープモードより起動」

何かの間違いと信じたかつた。原因を探つた、AIの意思なんかじゃない、何かAIを操っている。そう思つて、調べた。原因はウイルス。嚴重なプロテクトも外されていた。

正直、良かったと思つた。AIのせいじゃないと知つて。だから取り返そうとみんなだ決めた。ウイルスから、大事な家族を、取り返そうと。そう決めた。

「AI、完全起動。AI、聞こえる？僕だよ、リーマスだよ？」

帰ってきて欲しい。もう一人の、大事な家族。戻ってきて欲しい。機械のくせに、温かい心とおもいやりを持ったAIに。話がしたい。昔みたいに、色々聞かせて欲しい。だから、戻ってきて。

「リ、リーマス。ワ、ワタシハ一体何ヲシテイタノデス？」

戻ってきてくれた。大事な大事な、家族。温かい心の持った、思いやりを持った、家族。戻ってきてくれた。うれしい、とてもとても、うれしい。

お帰り、A I。

とても、心配、したんですから。

+++++

「????」

一斉にロボットたちの動きが止まった。

残り数体、5回も大剣を振れば全滅させることが出来ると言うところで、ロボットたちは時間が止まってしまったかのように静止していた。

「あ!!」

気付いた、もしかしたら、と。

思った瞬間、駆け出していた。A Iの部屋に向かって。自動ドアが開くまでの時間がとても長く感じられた。早く、早く、と。自動ドアは完全に開いた。

「リーマス!!」

叫びながら入って来て、刹那が見たものは、泣いているリーマスだった。待てよ、失敗したのか?そんな馬鹿な、だってロボットたちが止まったじゃないか。

確かめなければならぬ、刹那はリーマスの方に歩を進める。と、

「アナタハダレデスカ？」

「うわああ！！」

AIが刹那に話しかけた。驚くのも無理はない、いきなり聞きなれない声が耳に入ったのも理由の一つだが、何よりも先ほどまで敵だった相手に話しかけられるということに驚いた。

AIは見た限り正常になっている。しかし、リーマスは泣いている。なぜだ？

刹那の考えている様子を見て、AIは少しおかしそうに言った。

「アア、リーマスデスカ。コノ子ツタラ昔カラ泣キ虫デネ、マツタク困ツタモノデス。」

AIの声は、女性のような感じがした。人間の、とは程遠いが、そう感じられた。

「ちよ、ちよつとAI、なに言ってるんです！！」

リーマスが少しあせつたように言う。母と子のような感じ。思わず、刹那は笑ってしまった。

「せ、刹那さん！なに笑ってるんですか！」

怒られてしまった。でも、笑うことをやめなかった。リーマスは本気では嫌がってなかったみたいだから。むしろ喜んでみたいだったから。笑っているうちに一つのこと頭が頭に浮かぶ、

「あ！クリスとロックスは！」

と同時に口に出していた。

クリスとロックス、囹役の二人の安否がまだ不明なのである。武器を持ったロボットに追いかけられている二人。レーザーに貫かれていないだろうか、ビームソードで体を斬られてはいないだろうか。もしかしたら、もうすでに殺されているかもしれない。

そんな……。せつかく、せつかくAIが正気に戻ったのに、せつかくロボットによる虐殺の歴史に終止符を打ったのに、せつかく人々が恐怖から解放されるのに、それなのに、こんな結末はあんまり

「ああ、それなら心配ないですよ」

泣いた後独特の声で刹那に言った。

心配ないとは、無事ということだ。何でわかるのだろうか？その答えはリーマスの、

「AIの周辺温度感知器を使って探索してもらったんです。そして
ら」

「元氣ニ走り回ッテマスヨ。体温モ見タ限リ正常。命ニ別状ハアリ
マセン」

姉弟と同じよう、AIにまでも邪魔をされたリーマスはむっとなつてAIのほうを見る。なんとなくだが、AIは目をそらしているのがわかった。

「そうか、ふう、良かった」

安心のため息をつく。よっぽど不安だったのだろうか。

「やてと」

心の中のもやもやがなくなり、刹那はふところから水晶を取り出した。

ここからが本番だった。本来の刹那の目的は日本に、いや、家に帰ることなのだ。前の世界の村の長老が言っていた、水晶に光を当てろ、と。

刹那はA Iに埋め込まれているコンピュータの光を水晶に当てた。すると、

「おっ！」

水晶から一本の光が伸びる。光の伸びた先は自動ドアの少し前の空間。ここだ、ここにゲートがある。ここに魔力を圧縮して放てば、

「あ

しまった、自分は魔力なんてない。あつたとしても圧縮して放つなんて出来っこない。出来るのは、体から出てくる黒い霧を大剣に変えることだけ。

しかし、圧縮ということなら同じだった。黒い霧が大剣の形になって出来るわけだから、

「これで斬ってみるか？」

なんて事を考えたりする。物は試し、やってみよう、と刹那は大剣を振り上げる。そして勢い良く振り下ろす、何事も起こらないだろうと気楽な気持ちで。大剣が空を切ったときに、異変は起きた。ごごご、と音がし、空間に亀裂が入った。亀裂はどんどん広がってい

き、やがて丸い穴になった。

「.....は？」

一瞬、ほんの一瞬だけだったが、何が起こったのかを理解することが出来なかった。目の前に、『道』が存在するということを理解することが出来なかった。

+++++

「AI、これは一体」

「私二モ何ダカワカリマセン」

いきなり目の前に現れた穴。空間にあり、風を吸い込むようにぽっかりと開いている穴。

不意に刹那は大剣をもとの黒い霧に戻し、体に入れた。そして、得体の知れない空間の穴に入り込もうとしていた。

ゲートが開いた事はまぐれかもしれない、もう一度剣で斬っても開かないかもしれない。ならば飛び込むのは今しかない。開いたのが偶然だったとしても、それがゲートであることには変わらない。

「刹那さん！」

何を？、危険だ、の二つの意味を込めて刹那に言う。刹那はくるりとリーマスたちのほうを向き、笑って答えた。

「ごめん、もう行かなくちゃいけない。クリスとロックスよろしく言うておいてくれ」

「行ってくて、どこへ？」

心配そうに刹那にたずねる。出来ることなら引き止めたかったが、事情というものがあるのだろう。ただ一つだけ、どこへ行くか、それだけをたずねる。

「わからない!!」

笑顔で答えた刹那は、そのままゲートに入り、行ってしまった。再び、「ごっこ」という音がし、ゲートは閉じられてしまった。

自分らの家族を取り戻してくれた恩人、人々の不安を取り払ってくれた英雄が、得体の知れない空間の穴に入ってどこかに行ってしまった。

「行ってしまいましたよ。まだ、何もお礼言っていないのに」

「ソウデスネ」

なぜかは知らないが、不思議と悲しくはなかった。良く分からないが、多分これで良かったのだろう。ただ心残りなのは恩人に礼を言えなかったこと。

「ありがとう、刹那さん」

聞こえていることを、きつと届いているだろうと信じて、リーマスはこの言葉を声に出していた。空間の穴に迷わず入り込んだ理由はわからないが、きっとあの人は大丈夫だろう、なんとなく、わかつ

た。

「さて!!!これからは忙しくなりますよ!!!」

「ソウデスネ。デモ、人々ハ私ノシタコトヲ許シテクレルデシヨウカ.....」

リーマスが話してくれた事にかなりの不安を感じながら、AIはリーマスにたずねた。自分がしてしまったこと（もちろん望んでやったわけではない）、たくさんの人の命を奪ってしまったこと。許されるだろうか、いや、許してもらえないわけがない。自分は大変なことをしてしまった。取り返しをつかないことを。自分が嫌になる、だめだ。もう何をしても許してもらつことなんて

「なに言ってます、らしくない。姉さんだったら飛び蹴りかましてるんですよ」

はつと我に返るAI。リーマスの何気ない一言が自己嫌悪の渦から開放してくれた。たった何気ない一言で、おおげさかもしれないが、救われた。

「そうぞ、AI。お前は私に怪我をさせた分、きつちり社会献上してもらつぞ」

声が出て、出てきたのは、肩を押さえているクリス。しかし、なぜか笑っている。

「僕の足の分もね、AI。」

また出てきたのはクリス同様、笑っているロックス。しかし、左足

のすねから下がらない。傷口は見えないが、おそらく焼け焦げているだろう。出血はしていない。おそらく、ビームソードによって斬られたのだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

驚きで声が出なかった。クリスはともかく、ロックスは足を失ってしまったのだ。

「なに、心配ない。私の方はすぐ治る。ロックスも、AIの発明次第でどうにかなるだろう」

「そうですよ、AI。悪いと思っっているのだったら、人々にその分、精一杯償ってください。もちろん僕たちも手伝いますよ」

肩を押さえるクリスと鉄パイプを杖代わりにしているロックスは明るくAIに言った。

リーマスの一言と同じくらい、あるいはそれ以上に、絶望しているAIにとっては救われるような、そんな言葉。

「ハイ・・・・・・・・、ワカリ、マシタ」

生身の体だったら、もうとっくに涙を流しているところだ。こんなに、こんなに自分のために励ましてくれる、『家族』がいる。うれしかった、ありがたかった。支えてくれる人がいることが、何よりも。

「だったら、そんなに落ち込んだ声を出すな」

「そうです。落ち込んでる場合ではありませんよ」

やらなければ、自分のしてしまったことを償わなければ。みんなのために、自分はやらなければならない。

「エエ、ワカリマシタ」

希望、やる気に満ちた、機械のAIの明るい声だった。

ちなみに3年後、この町は再びロボットと人間の理想郷となった。ロックスの足も、AIの発明によって無事再生したらしい。

+++++

「……………」というのが発動当時の刹那さんの様子です」
ダンが一人の女性に、刹那のことを報告する。その隣にはダンと歳も変わらないくらいの青年が立っている。

「ふうん、そう。」

そっけなく、返事を返すのは眼鏡をかけた女性。長い栗色の髪の毛に、細い体には白いローブを纏っている。街に出てみれば、たちまち若い男から声をかけられるだろう。

「でも、報告が遅れたのはなぜかしら？ダン、ゼール？」

ふうとため息をつき、二人に問いかける。

「ええ、実験体の制御を奪われ、自分たちの魔力も封じられていたのです」

そして、ダンは間を置き、

「リバーによつて」

その名を口にしたとたん、女性のやる気のない表情が一変。悲しみの表情をし、視線を下に向ける。

「……………そう」

ただ一言、返すだけだった。しばらく、ほんのしばらくの間、沈黙が辺りを包む。

「そんなに暗くななんないですよ、もうあいつと君はなぐんの関係もないんだから」

その空気を変えるように、ゼールは明るく話しかけるが、女性は首を横に振り、

「あいつは、まだ私の大事な……………」

最後までつなげず、そこで言葉を切った。女性の表情はさらなる悲しみに包まれる。

辺りは、再び沈黙に包まれた。

第12話 近未来編7（後書き）

近未来編、終了です

いかがでしたでしょうか、今回の物語は

飼犬に手を噛まれる、それが実現した世界でした

今回、刹那は自らの『力』を自在に使うことを会得しました
力の本領はまだ発揮できていないにせよ、大きな進展には間違いありません

刹那は家に帰りましたが、所詮は願望

一人の思いが物語の運命を狂わすことなどできますまい
ここまで言えば、おわかりでしょうか？

わからなくても結構、むしろわからないほうが良いのです

さて、次の物語は偽者編

興味を持たれた方は前へ

興味が失せた方はご退場を

あなたがどちらを選ぶにせよ、この物語は動くのをやめませんがね

第13話 偽者編1

「AIも元にもどったし、クリスマスもロックスも大丈夫だって言ってたし、後は何とかなるだろうな」

そんなことを思いながら、ゲートの中を移動するのは刹那。前に移動するときには気が付かなかったが、移動のときは体がふわふわ浮いているような感じだ。それを感じ取ることが出来たのは、前の移動よりも大分余裕があったからだろう。

安心、出来たからなのだろう。ダンときは命が危険かもしれないが、つたが（刹那の見た限り）、今回はAIが命に別状はないと言ってくれたおかげで、だいぶ楽な気持ちになっていた。

「次は、家の前だったらいいな。何事もなかったみたいに、家に帰りたいな。」

こんなことを思っているうちに、周りが光に包まれて、いつのまにか新たな世界へと、たどり着いていた。

「……………ん？」

気付いたときには、その場に倒れていた。が、痛みはない、ただ倒れていただけだった。

やれやれ、とゆっくりと立ち上がって周りを見渡す。そこに広がっていたのは、荒れた地帯、荒野というやつだった。草が、一本も生えていない。何もない、文字通り、ただ荒れている地。

「なんだ？ここは……………」

何があったのだろう、どこに行けば良いのだろう、何をすれば良いのだろう、行く当てなんてない、自分は何を――

『うおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!』

突如、前後から鳴り響く怒声が耳に入り、我に返る。

前を見ると、鎧を纏った兵士が馬に乗って、一列にこちらへと向けて走ってくるのが見える。後ろを見ると、武器を持った人間がこちらに押し寄せてくるのが見える。

「あれ、もしかして………」

双方激突するつもりだ。ということは、間にいる自分が何よりも危ない。

「や、やべえ!!--」

思った瞬間、刹那の足は動いていた。方向は前でもない、後ろでもない。右方向。

どちらの軍に逃げたとしても、命の保証などどこにもない。とりあえず今は自らの命が先決、ここから一刻も早く逃げ出す、ということが刹那の頭に一瞬にして浮かび、自然と体が動く。その行動は、自分の命の危険を感じた刹那の脳が、勝手に信号を送ったための行動だったのかもしれない。

自分の全速力がこんなに遅いものだ、刹那は初めて感じた。

右の方の普通の人間は問題ないとして、左の方の馬はものすごい速さでこちらに向かってくる。人間と馬とでは、圧倒的に馬の方が速い。人間の足では、どうがんばっても逃げ切れない。

「へだ、だめだ………」

思った瞬間、異変は起きた。

馬の足元が爆発したのだ。一列に並んで走ってきた馬、兵士たちは一斉に空へと舞い、後ろの部隊に激突する。まるでそれはドミノ倒しのようなのだ。激突した部隊はその場に止まり、後ろから来た部隊にぶつかる。ばたばたと倒れていく姿に面白さも覚えてくる光景だが、空に舞ったのは、何も兵士たちだけではなかった。

「うわあああああ！！！！！！」

先ほども言ったが、だめだと思った瞬間に爆発したのだ。刹那が空に舞っていてもおかしくはない。爆風により、2メートルほど空中に上がった後、背中から地面にたたきつけられる。

「あ………」

味わったことのない痛撃に、刹那は気を失ってしまった。

「ははははは！！さすがレオさんだぜ！みんな帰ってくよ！！」

「あれ？あそこに誰か倒れてるぞ」

「本当だ。国王軍じゃないみたいだ。どうする？」

「連れて行くに決まってるだろ。こんなところに放置してちゃ危険だ」

「ええ！こんな得体の知れないやつを？」

「レオさんが居たら絶対連れて行くつて。あの人ならな」

こんな言葉が、気を失う直前に耳に入ってきた。

+++++

決して柔らかくはないほこり臭いベッドの上で、刹那は目を開けた。地雷の爆風によって空中の吹き飛ばされたということをし、徐々に、鮮明に思い出していく。痛みに怯えながらゆっくりと体を起こしてみるが、なんともない。大丈夫のようだ。

興味に駆られて、病み上がりの体であたりを見渡してみる。

ここには、このベッドにも負けないくらい、ほこり臭そうなベッドがたくさんあり、その上には腕に包帯やら、足にギプスやらをつけた人が寝ており、ベッドの半数は人が人で埋め尽くされていた。

見ただけでわかった。なにか争いごとをしている、まぐれでもこんなに人が傷つくはずがない。

とたん、前の二つの世界のことが思い出された。

両世界、争いごとをしていた。戦争、といっても良いかもしれない。そのおかげで、死人もたくさんでた、大切な人が数え切れないくらい失われた。帰るべき場所も、大切な思いでも、なにもかも、焼き払われてしまった、壊されてしまった。たった戦争の二文字だけに

「この世界もか。たくさん死んだ人がいるんだろうな」

思うと、なんだか悲しくなってきた。自分には何の関係もないのに、なぜか悲しかった。

「お、起きましたね。グッドタイミング、ってやつですか」

声のしたほうに顔を向ける。

てつと自分の方に歩いてくる若い男は、いかにも大臣といった服装だった。丸めがねに、右手には分厚い本、頭にはどこかの博士がかぶっているような帽子さえもかぶっていた。

「いや、男たちに担がれてきたときは驚きましたよ。一瞬死んでるんじゃないか、って疑ったくらいですからね」

「はあ、と、とりあえず助けていただいてありがとうございます」

一方的な話し方に少々戸惑ってしまうが、とりあえず自らを助けてくれたことの礼を述べる。男は声では答えず、代わりににっこりと笑うことで答えた。

「さて、怪我も火傷もないようですし、さっそくあの人会ってもらいましょうか。あなた素性もそこでお伺いさせてもらいますよ」

にっこりと笑ってはいるが、やはり怪しがっているらしい。あたりまえである。むしろ、その怪しい者を救助すること自体間違っている。

「会って、誰に？」

疑問を浮かべる前に、聞いてしまっていた。男は胸をはって、

「我らの英雄、また次期国王様のレオ・ヴィンスタール様です！！」

答えた。

部屋をぬけ、目の前の男についていく。見回すと、ここは城のようだった。石で出来た壁、無数にある木の扉、広い中庭。しかし、奇妙なものだった。普通は中庭に花やら噴水やらをつけるはずなのだが、広い中庭一面、畑で埋め尽くされていた。くわを持って耕す者もあれば、ブリキのじょうろで作物に水を与えている者もいた。変わった城もあるものだなあと、刹那は頭に浮かべる。

ゆっくりと（病み上がりの刹那の体を気にして）歩いている男が階段にさしかかる。こつこつと上がっている途中、ふと壁の「2・・・3」と書かれた文字が目に入る。

あそこの部屋は2階だったのかと、素朴なこと（まぬけなこと、ともいう）を考えているうちに三階へとたどり着く。奥の方に一際大きい扉がある、おそらくあそこだろう。

男は歩を緩めることなく、その扉の方へと向かう。刹那もそのあとを追う。だんだんと扉に近づき、男は扉に手をかけ、ゆっくりと開ける。

カチャ、

突如、静かで、冷たい金属音がした。

見ると、つぎはぎの玉座に座っている青年が、右手の手に持った銃をこちらに向けていた。よくテレビなどで見かける警察の拳銃などというちんけなものではなく、ゲームなどに出てきそうな形であっ

た。

「なんだ爺か、脅かすな」

不適に笑うとその青年は、右手の銃を下ろした。

見た目は刹那より少し年上という感じだった。銀色の長い髪の毛に、海のような深い青い瞳。袖の短いシャツに長いズボン、身軽な服装だった。

「扉開けるたびに銃口をこちらに向けるのはよしてくださいよ、レオ様。それに、私はまだそんな歳じゃありませんよ」「

ふう、とため息をつき、レオと呼ばれる青年の前に近寄る、もちろん刹那もあとから続く。

「そいつかい？倒れていたやつは」

興味津々に男に聞く。先ほどの苦情は無視した。

「ええ、見た限り怪我もない、魔族のようです」

レオという青年はうんうんと頷いた。

刹那には爺と呼ばれる男の言葉に怒りを覚えた。魔族、といわれたのだ。ごく普通の少年（自称）が。

魔族といえ、人間に害を及ぼす存在だったはずだ。ごく平凡な人間がいきなり人類の敵だと、そう言われたのだ。

「俺は普通の人間だ！！」

自分が害のある人間だと言われて気分の良いやつなど存在しない。

だから口に出してしまった。自分はそんな危険な存在ではない、と。爺と呼ばれた男はぼかんとしていたが、レオと呼ばれる青年は大口を開けてはははと笑った。

「あたりまえだ。そうだよ、お前は普通の人間だ」

意味がわからなかった。魔族だと言ったり、人間だと言ったり、どっちなんだと言いたくなかった。

「どういうことだ？」

少し挑戦的に言い放った。本当に意味がわからなかった。一体、自分は何者なんだ？ 苛立ち始めてきた。

「知らないのか、だったら教えてやる」

刹那の声にも動じず、それどころか笑いを抑え、レオと言う青年は語りだす。

「一般的に人型、つまり俺たちみたいな姿の生き物はみんな人間と呼ばれてる。その人間を更に4種類にわけたものを『種族』っていうんだ。分け方は実に簡単。目と髪の色で判断する。黒、紫系統の色だったら魔族、白、青系統だったら神族、赤、オレンジ系統だったら鬼族、黄、緑系統だったら獣族、という具合かな。まったく、だれがこんなこと決めたんだろうな」

説明に一生懸命頭を使う刹那。その姿を見て、ふふふ、と大人らしい笑いを浮かべたレオという青年は刹那に問題を出す。今習ったばかりの簡単な問題を。

「じゃあ、今言ったことをふまえて、俺の種族を言ってみろ」

本来は言っただけでやる必要なんてないのだが、単純な刹那はそのことに

気付かない。

うん、と頭をひねらせ青年の言葉と照らし合わせる。

銀髪、青い目、つまり、

「神族、つてことになるのか？」

青年は満足そうに頷き、

「その通りだよ、短気な魔族の少年さん」

先ほどの刹那のことを指摘する。いわれた刹那は少しむっとなるが、勘違いした自分が悪いので反論せず、しょんぼりとうつぶむいてしまった。

「そういえば、自己紹介がまだだな。俺の名前はレオ・ヴィンスタール。レオって呼んでくれ。んで、こっちが俺の側近の爺だ」

「爺って歳じゃないって言うてるのに。ああ、私は大臣とでも呼んでいただければ」

二人はそういつて自己紹介を終えた。

「俺の名前は刹那、杉本刹那」

うんうんと首を少しだけ上下させ、本題へと話を移す。

「それで、お前はどこから来た？俺の策にひっかかったってことはこの城のものじゃないし、第一、服が変だ」

その答えについて、刹那は話し始めた。

異世界飛ばされたこと、その世界の事件のこと、家に帰りたいということ、もちろんゲートのことも。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ということなんだけど」

大臣は口を開け、刹那の話に驚いていた。レオはあごに手をやり、いかにも何か考えているという格好を取っていた。

「なるほど、そうならば全部説明がつく、な」

手をあごにやるのをやめ、次にレオが、

「よし、それじゃあ、今度はこの世界のことを話そうか」

語り始める。この国に起こっていることを。

第14話 偽者編2

「俺の親父は王様なんだ。しかも、かなりのお人好しの王様がな。城下町で騒ぎが起こったりしたら、まず自分がその場に行く。王様がだぜ？無法者たちが暴れだしたときだって、だまって城を抜け出してとつちめちまった。変な王様さ」

飽きたようにため息をつく。しかし、次のことを語る際に、微笑みによく似た表情になっていた。

「でも、すごく強いんだ。俺も、親父に銃の撃ち方から体術まで全部教わった。

昔、この国の王様になるまでは、親父の親友と一緒に賞金稼ぎやっていたらしいんだ。親父が使うのは両手のハンドガンのみ。狙った獲物は逃がさない。凄腕、だったんだそうだ。その親友は親父が王様になったときに行方不明になったらしい」

熱っぽく語ったあと、前置きは本題へと変わった。

「町の間人からも愛されていた親父が変わっちまったのは5ヶ月くらい前のことだ。理由を無理やりこじつけて処刑したり、トラブルがあっても救援なんて絶対しなかった。

もちろん俺は怪しく思った、当然だろ？問い詰めたんだ、親父に。なんでこんな酷いことするんだ、って。そしたら、牢屋に入れられた。理由なんてない、ただ『うるさかった』だけらしい。

でも、その夜、爺が牢屋から出してくれた。爺に助けられなかったら確実に処刑されていた。明らかに違ってたんだ、以前の親父と。まるで別人だ。爺も同じ考えだったらしくてな、俺は爺と一緒に、妹を連れて逃げたんだ。同時に、親父に不信感をもった兵士も、ひどい

扱いをされてる町民も、全部逃げたんだ。あの国から、あの親父から、な。でも、残ったやつもいた。親父を心から信頼して、あの人がそんなことをするわけがないって最後の最後までかばっていたやつだ。そいつらはたぶん、兵士になって戦場に駆り出されたり、とつくに殺されているかのどちらかだろうな」

ふう、とため息をつき、一度話しをやめた。

酷い話だ、と素直にそう思った。なんで変わってしまったのだろうか。いままでは優しい王様だったのに、なぜいきなり人が変わったようになってしまったのだろうか。

大臣の方に目をやると、少々青ざめた顔でうつむいている。よほど辛いことだったのだろう。当然だ。無罪の人間を処刑されているところを見て、うれしいはずがない。

「俺たちは協力してばらばらになった町のやつらを集め、この城に集結させた。そしてみんな決めたんだ。親父を倒すんじゃない、もう一度話しをしようってな。親父が変わってしまった理由でもなんでも、聞きたかったらしくてな」

希望というやつがまだ途絶えていなかった。

レオを中心に人々は団結し、必死になって望みを果たそうとしている。王様の変わってしまった原因を知ろうという望みを、果たそうとして。

それを知り、原因を解決できれば、元の王様に戻るかもしれない。そんなことを考えながら、今日も戦っているのだ。

しかし、その望みのために犠牲になった人がどれだけいるのだろうか。考えると、やっぱり悲しくなってくる。戦いなだから、という理由で、人は殺しても、殺されても良いのだろうか。

「この戦いで、何人死んだんだろうな。」

思ったことを口に出す。
出してもしょうがなかった。あまりにひどい現実を目の当たりにしたのだから。

「教えてやるう、刹那。」

レオがしぼんでいる刹那に向かって言う。刹那はそんなことを聞くつもりではなかったのだが、断る前にレオの口が開いてしまった。

「こつちの被害人数はゼロだ。一人もこつちの軍の人間は死んじやいない」

驚いた。嘘もここまで堂々と言えることなのかと、非常に驚いた。戦いで死人が出ないはずがない。戦いというのは殺し合いだ。それなのに一人も死んでいないという。明らかに矛盾していた。ありえないと、割り切ってしまうおう。

「レオさんの考え出した策はすごいなんてもんじゃありませんよ。真面目から激突させるなんてこともなかったし、命を第一に考えて行動させていましたしね。それに、レオさんが戦いに出るなんてことになる、相手なんて全滅ですよ、全滅」

興奮気味に、刹那に一方的に話す大臣の姿は、初めてカブトムシを捕まえた子どもようだった。

大臣の話し方から、これは嘘ではないことによく気がついた。戦いで死人が出ないなどということなど前代未聞、ありえない話だったため、信じる事が出来なかった。

「さすがに、怪我の方まではカバーできなくてな。あいつらには悪いことしちまったな」

苦笑しながらレオは事実を話した。

とんでもないことを言ってくれる。死人を出さないだけでもすごいのに、怪我の方まで気にかけているのだ。

刹那は、なんとなくレオに付いていつてる人たちの気持ちがわかった気がした。

この人に任せれば大丈夫、特別思ったわけではないのだが、なんとなく、ただなんとなく、そう感じた。

ギィー、と音を立て、正面の大きな扉がゆっくりと開いた。

レオはすかさず右手の銃を扉に向ける。カチャ、と冷たい金属音が辺りを緊張させる。緊迫した空気が刹那たちを包み込みこむ。が、

「兄さ〜ん、入るよ〜」

それは、大人の女性の声とは違い、まだ成熟していない女の声によつてうちけされた。その声が耳に入るなり、レオはゆっくりと銃をおろした。

「扉開ける前に言うもんだ、そういうのは」

徐々に見えてきた、声とは違い、大人っぽい姿の女性に声をかける。髪の色はレオと同じ銀、瞳は深い青色のレオとは対照的な、空のような淡い青色。身長こそ小さいが、それを感じさせないくらいの清らかな姿。

「別にいいでしょ〜、兄妹なんだから」

あのなあ、と小声で言うのを無視し、ふふ、と笑ってこちらへと近

づいてくる。こつこつと床に靴がぶつかる音が広い部屋の中に響いている。

「あ、この人？兄さんの作戦に引っかけちゃった人？」

言うなり、まじまじと刹那の顔を覗き込む。

長い髪、大人な雰囲気、それらとは逆に子どものような話し方。それゆえ、馬鹿にしている感じはまったくなく、興味本位で聞いているという風にしか感じ取れない。

「ああ、刹那って言うそうだ。しばらくはここに居させる」

レオの居させる、ということとは本人の意思を無視して強制的にさせると、と解釈してよさそうだった。

「そう、始めまして刹那さん、私はリア・ヴィンスタール。レオ・ヴィンスタールの妹だよ」

にっこりと笑って自己紹介をするリア。妹、レオの妹。でも、似ていない。髪の色と目の色は似てはいるが、顔が全然似ていない。他人と言ってしまうえば本当にそう思えるくらいに、二人は似ていなかった。本当に兄妹なのだろうか？

「似てないな。二人とも」

思わず感想を述べる刹那。すると、レオがははは、と笑い出し、

「よく言われるんだ、似てないって。似てんのは髪と目だけなんだけど、種族が同じだと、他人でもまったく同じだって場合があるから、これが兄妹の証明にはならないからなあ」

と、他人事のように言うレオ。自分たちの問題だというのに、のんきなものである。

「似てようが似てなかるうが、兄妹は兄妹なんです」

リリアは頬をふくらませ、すねてみせた。

これが刹那とレオとリリアの出会いとなった。

++++

「で、何の用だ？なにか用事でもあるんじゃないのか？」

レオがリリアにたずねる。

「そうそう、付近で城の見張りをしていた国王軍が撤退したの。何かあるんじゃないかと思って」

先ほどの空気が一変、深刻なものと変わった。レオはあごに手をあてて、考える格好をした。

「妙だな、見張りを解除しても何のメリットもないはずだが」

見張りというものは、普通相手に見つかからないよう、隠れて行うものである。しかし、国王軍は隠れる様子もなく堂々とこの城の様子をうかがい、さらに少人数構成ではなく、わざわざ人手を増やし、一つの『軍』として置いている。だが、レオの軍はそれを討滅しようとはしなかった。放っておけば、こちらの動きを相手に知らせるということになるのに。

理由として、こちらの軍はあまりにも戦力がなかったことが挙げられる。向かってくる意思のない敵に、少ない戦力で立ち向かうという無駄なことをレオはしなかった。否、させなかった。こちらにも訓練した兵士がいるとはいえ、国王軍の方がその兵士の数が圧倒的に多い。武装し、訓練を受けていて、なおかつ数の多い国王軍を打ち負かすということは無理だ。

そのため、レオは相手を全滅させるのではなく、追いつ返すという形でこれまで戦闘を行ってきた。相手の動きを読み、その先に罠を仕掛け、相手の戦闘能力、あるいは戦意を奪うという正面からぶつからないやり方をしてきたのである。しかし、動きがなく、ただ様子を見ているだけの見張りに、罠は仕掛けられない。相手が動かなければ罠の張りようがないのである。これも理由の一つになる。

更にもう一つの理由として、見張られていても別に困らない、という事だった。相手をただ追いつ返す、ということしか出来ないため、こちらは動く必要がない。だったら放つておいても良いだろう、ということ放つておいたのだ。

国王軍の見張りも、そのことを知っていた。こちらが向かって行かないのだから後退する必要も、動きがないのだから報告する必要もないのだ。ならば、なぜ撤退する？

しばらくレオは考える、はずだったのだが、ほんの1分程度経った後、がばっ、と継ぎはぎの玉座から立ち上がる。

「爺！外の部隊を呼び戻して城の守備を固めろ！！城に入る際、一人一人この城の者かの確認も忘れるな！」

「は、はい！！」

慌てて大臣は扉を開け、駆けていった。

「ど、どうしたの？兄さん？」

いきなり態度が豹変し、城の守備を固めるレオに問いかける。

先ほどの余裕のあった表情、目をは違う、何か妙に慌てている。見張りが撤退しただけなのに、なぜ守備を固める必要があるのだろうか。

「この城の報告をするのには誰か一人か二人出せば良い。食料の補給も場合もそうだ。わざわざ見張りを撤退して得られるメリットは一つ、国の兵力が増幅することだ。なぜ、増幅させたか、それは……」

レオは歩き出す、扉の方へ。刹那とリリアは少しあっけに取られてからレオに付いていく。

「全軍でこの城を潰すつもりだからだ!!」

第15話 偽者編3

レオは早足で階段を下り、あっという間に入口付近にたどり着く。もちろん刹那とリリアも後から付いてきた。城の人たちはみんな入口の防御を固めている。

「入口だけじゃなく、この城の城壁全て強化してくれ。入口から入ってくるとも限らないからな」

入口の扉の前でうろろろしている人たちに、嫌味ではない声をかける。

一斉にはいつ、と返事をし、それぞれ四方八方に散っていった。レオも手に金槌をもち、扉の強化にあたる。リリアも腕まくりをし、服に似合わない格好で城壁の強化にあたる。

「刹那、おまえもこっちで手伝ってくれ」

うろろろと何をすれば良いのかわかっていない刹那に、レオは金槌を投げる。おととと、と危なげにそれを受け取り、やっと刹那も強化にあたった。

「へえっと、この板を打ち付けるのかな？」

じいじ、と周りの人たちの仕事を見る。

その様子をまねて、床に置いてある大量の板を、山積になった釘で打ち付ける。

とんとん、とんとん、ひたすら板に釘を打ち付ける、意外にも難しい。みんなは手際良く打ち付けられるのだが、どうも刹那には荷が重かったらしい。

「う……………これは……………」

曲がっていた、それも1、2、センチではなく、斜めになっていた。刹那も決して器用な方ではないし、なにせ始めてやる事だからうまくいかないのも無理はないのだが。

「やり直しておくべきだよな。これじゃ、あんまりだ」

しぶしぶ板を外す、はずなのだが、

「あ、あれ？」

外れない、釘を強く打ちすぎたみたいだった。それもそのはずだ。釘の周りには、金槌で叩いた跡がしっかりと残っている。

釘VS刹那、今壮絶な戦いが幕を開ける。

必死に取り外そうとするが、四隅に打ちこめられた釘がそうさせない。しかし、刹那もそれを超える力を出そうと踏ん張る。

「ふん、ぬぬぬううう!!!」

外れない、外れない、外れない。ありつたけの力を振り絞るがどうしても外れない。もはやこれまで、と刹那が諦めかけたそのとき、救世主は現れた。

「なにやってんだ、刹那」

レオが呆れたような（本当は呆れている）声を出して現れた。

ふんふん、と刹那の打った板を見つめ、はあ、とため息をついた。一目でわかった、これは無理だと。

「刹那」

「な、何？」

妙に優しい声でレオは刹那に話しかける。そして、刹那の両肩に手を置き一言。

「がんばれ、俺は忙しい」

「は？」

そうして唯一の救世主は去っていった。

ちなみに、刹那の張った板は、中の人たちによって無事取り外された。こんな大事なときに、まったく、何をやっているんだか、そう思わずにはいられない滑稽極まりない光景だった。

+++++

見張りが撤退し、城壁の強化も十分すぎるほど行ってから数時間が経ち、あたりはすっかり夜になっていた。

夕食を食べ終わった（刹那にとっては最初の異世界の食事となった）三人はレオの部屋に入り、レオとリアの二人は刹那の話に耳を傾けていた。話題は対ラチス戦のことだった。

「へえ、それでおまえはどうしたんだ？」

「いや、よくわかんないけど黒い霧がかい剣になって、それで倒したんだよ。無我夢中だったから、怖いって感じなかったな」

「へえ、それじゃあ刹那さんも『能力者』なんだ」

なにげなく言ったりリアの一言だが、そのことに刹那が反応した。

「リア！何か知っているのか？」

がつつくようにリアに問い詰める。

そうなんだよ、と答えると思っていたリアは、完全に意表を突かれてしまった。てっきり刹那は自分の能力のことを知っていると思っていたからだ。

びっくりしているリアのことを思って、レオは刹那をなだめ、座らせる。

「刹那、お前知らないのか？」

驚いたように刹那に問いかける。刹那は黙ってうなづいた。

わかる訳がなかった。刹那もこの能力について早く知りたかった。

この得体のしれない能力について教えてもらいたかった。

「うーん、それじゃあ刹那、お前の言ってた黒い霧っていうのを出してみる」

言われたとおりにしようと、黒い霧のイメージを頭に思い浮かべる。徐々に体、手から黒い霧が出てくる。よし、とレオは次の説明に入る。

「その霧は『魔力』を具現化した物なんだ。魔力は普通体内を巡っているもので体外に出すと……」

そのとき、刹那の周りの黒い霧が、刹那の体に戻っていった。

「自動的に体内に戻る仕組みになっているんだ。次はお前の魔力で大剣を形成してみる」

再び黒い霧をイメージする。体、手から黒い霧が出て、それを大剣の形になるよう頭に思い浮かべる。そして、刹那の魔力は大剣の形になり、黒い刃の大剣が刹那の手に握られた。

「それが『結晶化』と呼ばれるものだ。魔力が体内に戻る前に魔力を圧縮し、固体にする。その固体は人それぞれ違った『戦闘用具』になる。その戦闘用具のことを『結晶』というわけだ。それで、魔力を持ち、自在に操作できる人間を『能力者』と呼ぶわけなんだ。結晶を出している間は体の中の魔力が活性化し、通常時の2倍の身体能力が備わる。わかったか？」

レオの問いに、刹那は頷く。

正直、こんな能力を持っていても、全然うれしくなかった。こんな能力、人を傷つけることにしか役に立たない。そんな能力、自分には要らない。そんな様子を見たレオは、励ましの声をかける。

「別に落ち込むことなんてないぞ。魔力は大半の人間が持っているし、それを使えるか使えないか、それだけの話だ。現に俺も能力者だしな」

えっ、と刹那はレオの顔を見る。自分と同じ能力を持っている人がいる。そのことに、刹那はほんの少しの、いや、かなりの喜びを感じた。

見せてやるうか、と言って腰の銃を右手に取る。そして、銃のマガジンを取り出し刹那に見せる。中には弾が装填されていなかった。

「中に弾はないな？」

そう言うと、弾の装填部分をぐつと手で押さえる。すると、レオの手が一瞬白色に光り、その瞬間、カチャカチャとマガジンから音がした。

「ほら、弾があるだろ？」

と行ってマガジンを見せる。先ほど見たときにはなかった弾が装填されていた。そのことにつけに取られている刹那の姿がおかしくて、くすくすとリアは笑う。

「手品？」

言った瞬間、刹那の頭にレオの拳が振り下ろされた。

いてゝ、と頭を押さえる刹那にレオは呆れたように声をかける。

「見せてやるって言うてるのに、手品見せてどうするんだよ。まったく……」

ガチャン、とマガジンを銃にしまい、腰に戻す。

「に、兄さんの結晶は弾なんです。だ、だからとても銃使いにとっては都合の良い能力なんですよ」

刹那とレオがあまりにおかしくて涙目になって答えるリアは、言い終わった後、笑い崩れてしまった。むっとなったレオは、リアの頭めがけて拳を振り下ろす。

「いったくい。何するのよ兄さん」

「なんとなくだ」

頭を押さえて痛がるリリアにレオは無茶苦茶な理由で弁解した。なによそれ、言いながら、リリアはレオにかかっていった。ばたばたという音が部屋中に鳴り響き、ギャーギャーと叫び声が聞こえる。そんな二人の姿は、仲の良い兄妹そのものだった。

++++

数分後、レオとリリアのじゃれあい治まり、再び会話に入る。話題はレオとリリアの修行時代のことについてだった。

「あの時は本当に大変だったな」

「うんうん、二人でお父さんにかかっていっても歯が立たなかったもんね」

「へえ、大変だったんだな」

昔、まだ国が平和だったころ。レオとリリアの二人は、親である国王に訓練を受けていた。小さいころから国王に、『いざとなったら民は自分の力で守れるようになれ』、といわれ続けてきたため、幼いころから手に銃を持たされ、過酷な訓練を続けてきたのだという。レオが12、リリアが10のとき、中間テストと称し開始されたのが2対1の真剣勝負。チーム編成はもちろんレオとリリア、国王、という具合。ルールは当たると色のつく弾を一発づつ所持し、チームの人間一人でも当たったら負けというものだった。有利になったのはレオ達なのだが、いくらなんでも実力の差があり

すぎる。まだ幼いレオたちは正面から挑んだが、あっけなく撃たれて再テストとなった。

二回目の中間テスト、レオは正面からかかっていくのは無理だと判断し、二手に分かれて勝負することにした。が、国王にしてみれば「どちらでも、弾が当たれば自分の勝ち」だったため、片方に集中して戦った。弾も制限され、二人で無理だった相手に一人で勝てるわけがなく、再び再テストとなった。

三回目のテスト、「おびき寄せろ」という形をレオは取った。リリアをポイントまで移動させ、自分は国王を移動させるように離れていく。銃弾は一発限りなのでむやみには撃てないはずだから、充分よける距離を保ちながら移動する。どうにかリリアの隠れているポイントまでたどり着いたレオは、国王に向かって発砲する。「充分よける距離を保っていたため」、国王はひよいとよける。と同時にレオとの距離をいっきに縮めた。もう弾はない、となれば自分が撃たれる心配はない。リリアがどこかに隠れているはずだが、撃たれる前に撃てば良い。そう思い、射程距離にレオが入った瞬間、引き金に人差し指をかけ、発砲した。充分近い距離のため、レオはよけることが出来ず、弾に当たり服が青色に染まる。

もう一回だな。国王がレオに言うが、レオはにやりと笑い、俺たちの方が早かったよ。と国王に言う。服を引っ張り、背中を見つめると、青色に染まっていた。後ろにはニコニコ笑っているリリアが立っていた。

当たる前に当てれば良い、この考えは何も国王だけが持っているものではなかった。

リリアが隠れているポイントまでおびき寄せ、弾を撃つ。弾が一発だけなので、それを使えば迷わず突っ込んでくる。標的は「レオのみ」になる。リリアは標的からはずれる。

その一瞬を狙い、リリアは撃つ。という具合に、国王は先に撃たれたことに気がつかず、レオに撃つた、ということになる。

「大変だったな、あの時は。気に入ってた服は青くなっちまうし、親父は負けず嫌いだから認めない認めない言ってたし。まったく、説得するのが大変だったぜ」

「ほんとほんと、いくら言っても俺が早かった、なんて言ってるね」

「そうなのか。ずいぶん苦労したんだな」

そのまま感想を述べた。今は笑っているが、昔は大変だったのだからと思う。

「でも、大変だったのはそのあとだったんだよ、刹那さん。センスのある兄さんはどんどん上達していったけど、私は全然駄目でね、いつも怒られてたんだ」

言い終わるとちらとレオの方を見てもう一言。

「ま、そのたびに兄さんから優しく慰められたんだけどね」

いたずらっぽくふふ、と笑う。レオは少し赤くなり、

「な、なに言ってる。俺がいつそんなこと言った」

とぼける。刹那にもこれは嘘だとわかるくらいに、レオは動揺していた。その姿が可愛いくて、リリアはからかう。

「確かねえ、お兄ちゃんがついてる、だから」

「だあゝゝゝ！！！！言うな、言うんじやねえ！！」

あわててリリアに跳びかかるが、ひよいとかわされ、ずででと情けない音を立てて転ぶ。

「あとねえ刹那さん、『なにがあっても、俺が』

「やめろゝ！！リリアあああ！！」

最初に見たときのレオ姿とはあまりに違いすぎていた。余裕があり、知的な雰囲気だったのに、今ではリリアにいいように弄ばれている。その様がおかしくて、おかしくて笑いがこぼれてしまう。和やかな部屋の中、異変は突然起きる。

バーンッ！！

扉の勢いよく開く音が耳に伝わる。さっきの動揺とは一変し、緊迫感のある表情でレオは銃を構える。

「た、大変です。国王軍が攻めてきました！」

さっと銃を下ろし、大臣に近づく。

「あとどれくらいでここに到達する？」

あごに手をやり、考える格好をとって大臣にたずねる。

「あと10分ほどで」

何か理由があるのだろうか、大臣はかなりあせっていた。

「数は？」

「そ、それが……」

言うべきなのであるが、どうしても言い出せない。口の中でもごもごということしか出来ない。

「数は？」

もう一度、大臣に聞く。さすがに言わないわけにはいかず、大臣は答える。あまりに絶望的な数を。

「約2000です……」

「……覚悟の時、か」

それを聞くとふっ、と笑い、レオは歩き出した。

「爺、誰も外に出すなよ。俺が出る」

「しかし……」

大臣はあわてて引き止めた。

最低でも数は2000人。それも、鎧、剣、銃を持った完全武装、これに一人で立ち向かう人を引き止めないわけにはいかなかった。自分たちの大将が出て行くというのだからなおさらだ。

と、方向転換。爺の方を向き、肩をつかむ。強く、つかむ。

「なあに。この国で俺に勝てるのは親父だけさ。2000人でも、な。わざわざこんなところに大将が来るわけないから、なんとかするさ」

それだけ言い残して、レオは部屋を出る。はずだったのだが、

「俺も行ってもいいかな」

刹那の声でレオの歩は止まった。

「刹那さん？」

隣にいたりリアは信じられないといった顔で刹那を見る。自ら戦場に赴くというのだ。なんの関わりもない青年が。しかも、2000の武装兵に。

「……………気持ちはずれしいが、もう追いつくだけじゃ済まなくなつたんだ」

レオは残念そうに、そして悔しそうに言う。

リア、大臣は意味がわかったようだが、その言葉が何を意味しているのか、刹那には理解できなかった。追いつくだけではもう済まない？ならばどうしようというのか。

「今まで追い払えたのも、攻めてくる郡の数が少なかったからだ。でも、今回は違う。2000の大規模な数でここを潰そうとしている。策を仕掛けても、それをかわしてくる奴らが必要。だから今回は策を仕掛けなかった」

まだわからなかった。絶対的な数なのに、策も仕掛けないでここにいる意味がわからなかった。

「今回は、殺さなければならぬ。向かってくる敵全員」

耳を疑った。あんなに、あんなに人のことを想っているレオが、かつての国民や兵士を殺すと言った事を信じられなかった。否、信じたくなかった。自分の耳がおかしくなったと本気で思ったかった。

「俺一人で行くって言ったのも、こっちの兵士の手でかつての同士たちを殺させたくなかったからなんだ。そのぶん、俺はこの城に向かってくる敵を殺すことをためらわない。完全に『敵』と割り切ることがするのは俺だけだからな。」

言っている意味をようやく理解することができた。でも、信じたくなかった。レオがあんなことを言ったことを。

「お前に覚悟はあるのか？人を殺す、命を奪う覚悟が」

刹那は固まった。勢い良く言った方がいいが、そのことを考えてはいなかった。

無理に決まっている。訓練を行っているのならまだしも、そんなことには無縁のただの青年に、人を殺すなんて出来るはずがない。いままでも人なんて殺したことなんてなく、殺す勇気もない。

「……………無理、なんだろ。できないよな、話を聞く限りじゃ化け物しか倒したことがないだからな」

言っと、レオはくるっと扉の方を向いた。そして足を動かす。行くつもりだ。

「お前の恩を返したい気持ちもわかる。でも、今はここで待っていろ」

ばたんと扉を閉める。そして向かう、戦場へ。

「兄さん……………」

リリアは気持ちを声に出し、想う。どうか無事に帰ってきますように、と。

刹那はというと、自分の無力さに打ちひしがれていた。何もできない自分の手を見つめながら、そう思っていた。

第16話 偽者編4

鉄の胸当てと額当てをし、一撃死だけはしない必要最低限の防具を装着して、レオは夜の風が涼しい城壁の上に立っていた。

「思ったよりも少ないな」

そう思いながら徐々に近づいてくる国王軍を見つめる。馬に乗って移動しているらしい、どどど、と音がする。軍の所々に暗闇を照らす明るい光が灯っている。たいまつである。ゆらゆら揺れながら、しかし速い速度でこちらに向かってくる。

「そろそろ、か」

マガジンを外し、左手で装填部分を押さえる。白色の光が暗闇を一瞬照らし、マガジンに弾が装填される。

国王軍があと数百メートルと迫って来る。それを見計らって右手の銃を動いている軍に向けて、引き金を引いた。

「……………悪い」

パンツ！と音がし、一発の弾が軍に向かって放たれた。ぐんぐんと近づいていき、前方の兵士の一人に当たる。と、

ポオン！！

弾が爆発し、ドーム状に炎が広がる。いつきに300人ほどの兵士が爆風を浴び、焼け死ぬ。

「なにがあつたああああ!!」

「と、突然爆発して……」

軍隊がパニックに陥り、馬の手綱を引き、歩を止める。辺りを見回すが人の姿を確認できない。ざわざわ、と騒ぎがおき始める。

こうなつてしまえば都合が良いのはレオである。相手が混乱し、自分を認識出来ない間に連射すれば、だいぶ数が減らすことができる。

このチャンスを逃すわけにはいかない。

ぱつと城壁から飛び降り、混乱している軍に向かって走る。結晶化をしているため、速度が約2倍、文字通りあつという間に射程距離までたどり着いてしまった。銃を構え、ためらうことなく、撃つ。パンツ！と音がし、弾が軍めがけて飛んでいく。弾丸は再び兵士の鎧に当たり爆発する。爆風により、何十人もの兵士が空を舞い、焼け死ぬ。

「被害数はああああ!!」

「半数が爆発により死亡しています!」

ぐつと足を曲げ、軍を飛び越すように跳ぶ。浮遊している途中、真

下の混乱している軍に向かって銃を構え、弾を3発放つ。パン！パン！パン！と3発の弾が軍めがけて飛んでいき、そして爆発する。混乱している軍は真上からの攻撃に気がつかず、爆発に巻き込まれる。残ったのは10数人。

「何なんだよこれはああああ！！！！」

見えない敵の恐怖、もうじき死ぬかもしれない不安感、双方の感情にはさまれ、発狂する。

すた、と着地し、最後の1発を放つ。ためらうことなく、引き金を引く。

残った兵士の真ん中に向かって弾はとんでいく。弾は地面に当たり、辺りは爆発とその爆風に包まれた。

焼け焦げた臭いが鼻に刺さる。人の焼けた臭い、血の焦げた臭い。人をたくさん殺してしまった、かつての国民、兵士を。自分の仲間を、たくさん殺してしまった。

しかし、間違っただとは思っていない。昔は仲間でも、今は敵なのだから。自分たちの居場所を壊す、敵なのだから。

そう割り切ったはずなのに、頭に何度も敵だと呼びかけたのに、なぜか涙が出てきて、

「みんな、ごめん………」

自然に口が動いてしまっていた。

+++++

沈黙があたりを包み、10分が経とうとしていた。

刹那、リリアは（大臣は人々にもしもの準備を呼びかけているためいない）レオの帰りをただひたすら待っていた。レオが出て行つてから二人は一言も話をしていない。刹那は自分の無力さに打ちひしがれ、リリアは兄の無事を祈っている。会話も必要ないといえば必要ないのだが。

外は先ほどよりも少し騒がしくなったみたいだった。聞こえなかった大人数の声や、カチンと金属音のぶつかる音がする。この城の人たちも、大臣の声により、ようやく戦闘の準備を始めたようだった。

「レオ、大丈夫かな」

不意にそんなことが頭をよぎる。前の世界でもそうだった。

刹那は心配性なのである。昔、母が仕事の都合で何日も家に帰らなかったときも、わざわざ仕事先に来て安否を確認してたし、友達が転んで膝をすりむいたときも、おおげさに救急車をよんでいた。

そんな性格の刹那が、戦場に行ってしまったレオの帰りを黙って待っているのには理由があつた。レオの言葉である。

お前の気持ちもわかる、と言っていた。恩返しをしたいという気持ちわかるとわかってた。だったら、きつと何かをさせてくれるはずだ。生きて帰ってきて、きつと何かを自分にさせてくれる。その思いが、自らも戦場に赴くという感情を抑えていた。

自分の命がなくなるかもしれないという恐怖感はまったくなかった。というよりも、その思いに押しつぶされていた。それほどその思いは強く、揺るがなかった。

沈黙の場、刹那は密かな思いを胸にただひたすらレオの帰りを待つが、

「刹那さん」

リリアの声で、はっと我に返った。
あわててリリアのほうを向きなおり、顔を見る。寂しい、不安、そんな感情が混ざり合った、悲しい顔をしていた。

「兄さんのこと、心配ですか？」

あたりまえだ、と大声を出すところだが、今大声を出してしまうとリリアが泣き出してしまいそうなので、こくりと頷いた。

「私も兄さんが心配で、つらいの」

そう言うと、リリアは顔を下に向け、その壮麗な顔は更に悲しくなった。

「でも、一番つらいのは兄さんなの」

そう言うと少し間を置き、再び口を開く。

「つらくないわけがない。敵と割り切ってるって言ってたけど、仮にも自分の仲間だよ？そんなこと、できるわけない」

そのことは、わかっていた。いままで共に過ごしてきた人を殺す。普通に自分では無理だ。人を殺すのにも勇気があるのに、近くの人を殺すことなんてできるはずがない。レオも、平気なふりをしていたが、心の奥はやりきれない思いでいっぱいなのだろう。

「兄さんはきつと全員殺して帰ってくる。私が心配しているのは兄さんの安否じゃなくて、殺した後のことなの」

「殺した後？」

普通、戦場へ行ったものを心配するとしたらその者の体の安否である。怪我をしていないだろうか、死んでいないだろうか、などの心配をするはずなのだが、リリアはその後のことを心配している。なぜだろう？

「いままで近くに居た人を殺して、正気でいられると思う？」

「・・・・・・・・・・」

無理だ、と思った。少なくとも、自分は無理だと思った。

「もしかしたら、心が壊れてしまつかもしれない。そしたら私、私・・・・・・・・・・」

そう言った直後、リリアは兄を、レオを心配するあまり泣き出してしまった。二人しかいないレオの部屋に、リリアの泣き声は響き渡る。

「何考えてんだ、俺」

自分以上にレオを心配している人がここにいるじゃないか。他人の自分よりも、身内であるリリアの心配の方が大きいに決まっている。だったら、もう心配なんてする必要なんてないじゃない。泣き出すほど心配しているリリアがいるのだから、自分はそのリリアを慰めなければいけない。自分まで心配している顔をしていたら、リリアの心配は大きくなるばかりだから。

「レオって、強いんだろ？」

「はい？」

泣き出すリリアに励ましではない言葉をかけた。言われたリリアはいきなり聞かれたことに少し戸惑い、短い言葉で返す。

「だからさ、レオってすごく強いんだろ？」

「はい。とても戦闘センスがあつて、とつさの判断力にも長けている。それにどんな状況でも諦めない強い心を持つ、とても強い人です」

泣き腫らした目で静かに、でも誇らしげに兄の強さを語る。子どものころから一緒に国王の訓練に耐えてきたのだ。そんなことくらいわかってる。

それを聞くと、さっきの不安がっていた表情を消し、笑ってリリアに言う。

「それだけわかってるんだから、信じてあげないと」

「え？」

「それだけ自信を持ってレオのことを言えるんだから、きっと大丈夫だつて思わないと。最悪のことを考えても結果は変わらない。だつたら明るい考え方でいかないと損だろ？」

「・・・・・・・・・・」

刹那なりの慰め方はとても変なものだったが、それでも本人は精一杯の慰めなのだろう。少し赤い目をしたリリアはふふふと笑い、

「ありがとう、刹那さん。だいぶ気楽になったよ」

刹那に礼を言う。

「うん、きつと兄さんなら大丈夫だよ。あんなに強いんだからね」

さっきまでマイナスだった思考を、刹那の言葉がプラスへと変えていた。刹那は特別言葉の使い方がうまいというわけではなかったが、ただ慰めたい一心で言った下手な言葉でも、リアの不安を充分取り除くことができた。

一方レオのほうも、心に大きな傷を負ったものの、心が壊れてしまうというまでは至らなかったため、一応杞憂に終わったといっても良いかもしれない。

+++++

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

思ったよりも、くる。

人を殺すのはこれが初めてというわけではないが、今回はかなり、くる。

今まで殺してきたのは町の人たち。つい何ヶ月前までは剣や鉄砲の変わりにくわを持って畑を耕していた人たちだった。ずっと城の中で暮らしていたため、その人たちとは関わりがなかった。だから、あまり気にかげず殺すことができた。もちろんつらかったが、

でも、今回の人たちは……

「……………」

見たことのある人たちが大半だった。

一気に今の拠点としている城を潰すのだから、訓練した人間でなければいけない。そのため、今までは兵士を無駄に失わないために町民を戦場に駆り出していたのだ。 全てはこの作戦のために……

訓練した人間といえは兵士となる。その兵士の訓練は城などで行われ、レオもたびたびその光景を見ている。それに、国を守るための兵士なのだから城に居なければいけない。となれば、自然に顔を覚えていてもおかしくはない。それに優しい国王の息子ということで話しかけられ、仲良くなつた兵士もいたりするわけだ。

「……………」

断末魔の叫びは聞き覚えのあるもの。当然だ、一番仲の良かった兵士なのだから。

『お、君がレオ君か。私は守備兵長の役目につかさせてもらっているものだ』

『へえ、そうなのか。レオ君も大変なんだなあ』

『私はこの国の王様が好きだ。もちろんこの国も好きだ。だからこうやってこの城の守備について、みんなを守りたいからここにいるんだ』

何回も話しかけてくれた。いつの間にか毎日話すようになっていた

人。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

城に帰還している足は、重かった。怪我をしたわけではないのだが、なぜか重い。まるで帰ってはいけないと、自分の足が言っているみたいだ。

でも、帰らないといけない。振り向いちゃいけない。まだ自分にはやらないといけないことがある。みんなとを国王に会って理由を聞かなければいけないということが。だから今は振り向いちゃいけない。少なくとも今は。

それに、早く帰らないとみんなが心配する。他人なのに命をかけた戦いに出るなんて言っている客人、いつも近くにおいてオーバーなりアクションを取る爺、それに、泣き虫のリリア。みんな待ってる。帰らないと。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

重たい足を引きずり、やっとの思いで強化された扉の前に着いた。開けてもらおうか？いや、まだ残党が残っているかもしれない。

左手をぐっと握り、その手が白色に光る。結晶化だ。

ぐっと足を曲げ、溜めた力を使い一気に地面を蹴る。勢いの強さにより、痛いぐらいの風が顔に当たった。すた、とうまい具合に城壁まで跳ぶことができた。下を見下ろしてみると、おそらく全員だろう、城のみんながたいまつを持ち、おとなしく待機している。ちゃんと言いつけは守ってくれたらしい。

ゆっくりと歩き、そしてみんなのいる城門の前に跳び下りる。

「レオさん！！！」

「レオ様!」

みんなから自分の名前を呼ばれ、レオは怖くなった。今から報告することが、言わなければならぬことを言うのが怖くなった。

「レオさん、怪我は？」

「……ない」

自分の心配を先にしてくれたのはありがたかった。でも、自分の安否を確認した後はおそらく、敵のことを、あいつらの事を聞いてくるだろう。

「それで、あいつらは……」

言いたくなくても言わなければならない。それが義務であり、またこいつらのためなのだから。

重い口をゆっくり開き、言葉を絞り出すようにみんなに伝える。

「みんな、一人残らず……俺が殺した」

「……そうですか」

聞いたとたん、力が抜けたようにうつむく。

「悪い、少し疲れたから部屋に戻る」

言うことを言ったら、ごまかしの入ったいいわけで自分の部屋へ、逃げるように帰っていった。これ以上この場に居たくない、みんなから『仲間殺し』なんて呼ばれたくない。

少し早歩きで階段を上がっていく。
なんだか、その夜の風はなんだか少し冷たくて、なんだか寂しくて、
より一層レオの悲しみを深くした。
無意識に足を動かしているうちに、いつの間にか自分の部屋の前に
たどり着いていた。

「今日は、寝よう」

扉に手をかけ、力を込める。ゆっくりと扉は開き、部屋の明かりが
目に飛び込んでくる。まぶしい光に目が慣れるまでの間、白いもの
に包まれるような感覚に陥る。

ドンッ！！

不意に胸に衝撃が走り、あお向けに倒れこむ。

「いててて……」

背中に痛みが走った。いや、痛みより気になるものがある。なんだ
が、腹に重みを感じる。それに、やわらかい。物ではないらしい。
なんだろう。

徐々に徐々に目が光に慣れてくる。だんだん腹の重みの正体があら
わになる。

「兄さん！兄さああん！！」

銀色の髪の毛、小さい体。

リリアだ、泣き虫なリリア。ほんのちょっとした事ですぐ泣き出してしまっ、妹。

よっぽど心配だったのだろう。自分の胸から離れようとしなない。

「おかえり、レオ」

刹那もいる。リリアとは逆の、やっぱりそつだという顔をしている。

「刹那、どうしたんだこいつ」

「よっぽどレオのことを心配してたみたいだった。あんまり妹を泣かせないほうがいいよ」

笑みを浮かべながらレオにリリアの先ほどまでの様子を伝える。

「まったく、こいつは……」

こんなに泣かれちゃ、俺が悲しめないじゃないか。そう心の中でつぶやき、泣き虫な妹の銀髪の毛の頭を優しくなでた。

終わらせなければならぬ、この戦いを。一刻も早く。

「さあ、明日は早い。今日は寝るぞ」

この城のみんなのため、いままで殺してきた人のため、そしてリリアのため。

第17話 偽者編5

「いつまで寝てる気だ。今日は早いつて言っただろっ」

布団が剥ぎ取られ、レオの声が上から降ってくる。そういえば、昨日そんなことを言っていたような気がする。

仕方なく温かい布団から立ち上がり、精一杯のびをしてみる。

「ううっ〜ん」

気持ちが良い、朝の起きたてといえはのびが一番。と、思ったのもつかの間。

「よし、さっそく朝食にするぞ」

レオはそう言って、刹那をずるずると食堂まで引きずっていった。

+++++

「それで、今日はなにがあるんだ？」

早起きには何か理由があるのだろう、パンをほおばりながらレオにたずねる。かちやかちやとナイフとフォークを動かし、肉を口に運ぶレオはもぐもぐ口を動かし、ごくりと飲み込んでから刹那の問いに答える。

「今日中に、ケリをつけようと思ってな」

「まず、とティーカップに入った紅茶をすすりながらさりげなく、とんでもないことを言った。」

「え？」

戸惑いを隠せない刹那。

無理もないだろう。今の今まで戦いを引っ張ってきたレオが、今日中にその戦いを終わらせると言ったのだ。

「俺一人で城に乗り込む。そしたら親父を生け捕りにしてここまで連れてきて、みんなとご会談って言うわけだ」

手に持っていた、まだ熱い紅茶の入ったティーカップをテーブルに置く。きよとんとしている刹那を見ていると、自分の言ったことがどれだけ馬鹿げているかわかる。

「リリアにも爺にも言っていない。あくまで乗り込むのは俺一人だけだ。余計な心配はかけたくない」

「俺も行く」

いきなりの刹那の言葉。でも、レオはそれを待っていた、と言わんばかりの、あの不敵な笑みを浮かべた。

「そう言つと思ってな、お前にも少し協力してもらおうと思つ。嫌とは言わせないぜ、宿泊代と思つて腹くくってくれ」

こくりと、一度だけうなずく。
わかってくれた。自分の恩返しをしたい気持ちをわかってくれて、
連れていってやる、と言ってくれたのだ。

「ところで、俺の役目は？」

「ああ、ちょっと待て。作戦のことを説明させる」

もう一度、熱い紅茶に口をつける。ずずと音がして、レオの口の中に紅茶独特のほろ苦さが広がる。ふうと、一息ついたところで話を始める。

「昨日、大人数の兵士が攻めてきたよな。国王軍のほうも、帰ってこない軍に不信感を抱く。だから、偵察の軍が絶対に来るはずだ。その軍に意図的に戦いを仕掛ける。

もちろん全滅なんてさせない、手加減をする。敵わないと悟った偵察軍は血相を抱えて逃げ出す。兵士一人一人の数なんか確認しないでな。その騒ぎに乗じて相手の鎧や兜、それに馬を奪う。それから何食わぬ顔で国に潜入し、城まで見つからないように行つて親父を生け捕りにする」

言い終わったレオはどこか満足そうに刹那の顔を見る。

レオの作戦に呆気にとられている刹那の顔は、なんだかおかしくて笑ってしまう。

「お前の家に帰る手段は終わってから考えることでもいいな？」

「ああ、いいけど……」

少々口ごもった刹那の話し方にレオは疑問を抱く。

口の中でもごもごしている刹那は言う決心がついたのか、レオの深い青色の目を黒い目でじっと見る。

「本当にいいのか？リリアに言わなくて。黙って消えたらまた・・・」

「・・・」

何も言えなかった。

自分のやることがいかに無謀な、馬鹿なことだかわかっている。昨日来たばかりの刹那にも、どれだけ迷惑をかけているかもわかっている。（無論、刹那は気になどしていないが）

失敗すれば死ぬかもしれない。でも、成功すればこの戦いを早く終わらせることができる。

迷っている暇なんてないのだ。みんなの不安を取り除くためにも、リリアの泣き顔を見ないためにも。だから、やらなければならぬ。しかし、そのことをリリアに伝えたら、絶対止めるに決まってる、泣き出すに決まってる。

もう泣く顔なんてみたくない。だから・・・

「いいんだ。黙っていくさ」

「・・・そうか」

レオの気持ちが変わるわけではない。レオのつらさ、悲しみがわかるわけではない。もちろん考えもわかるわけではないが、これだけはわかる。この男は死に行くのではない、と。もし命に代えてまで、なんていう考えだったら、絶対に自分を連れて行くわけがない。それが唯一の、レオから感じ取れたことだった。

再び、レオは紅茶に手を伸ばす。が、先ほどまで熱かったその紅茶

は、なぜか悲しいくらいに冷めていた。

そのやり取りを見ていたものがいた。

2人は気付いていない。

そのものはさつと身をひるがえし、その場を去っていった。

+ + + + +

朝食を終えた刹那とレオは、準備のためレオの部屋へと移動した。最初から準備をしておけば、偵察の軍が出て来たとき誰よりも早く出陣ことができああの作戦がうまくいくからだ。もちろん見つからないように。

「よし、こんなもんかな」

「鎧って重いんだな」

こっそりと武具庫から持出してきた鎧は刹那の胸にぴったりだった。刹那も鎧など着けたことなどなかったため、この重さもむしろ楽しんでた。青銅でできた鎧は、日本の武士が着けているようなものではなく、中世の騎士が着ているような作りだった。

「でも、レオの方はどうするんだ？」

刹那の防具はそろったものの、レオは何も装備していない。まさかそのまま偵察軍に突っ込んでいくなど、

「どうせ偵察軍の鎧が手に入るんだから着ていくだけ無駄だ。お前は戦い慣れてないから念のために鎧を着けてるだけの話。」

あった。確かに偵察軍の鎧や兜を手に入れることができ、防具の準備には困らないとしても、どうせ最初は戦わなければならないのだ。防具無しのレオの体は、攻撃など一発でも当たってしまうと簡単に壊れてしまう。でも、

「まあ、レオなら大丈夫そうだな。」

昨日、2000もの兵士相手に怪我一つしていないレオならば、相手の攻撃を食らうことなく相手を恐怖させ、追い返すことなど簡単だろう。

問題は刹那のほうにある。

刹那は相手を傷つけるつもりなど、さらさらしない。しかし、相手は容赦なく殺しにかかってくる。一応大剣を出して威嚇、あるいは少しの打ち合い、などをしようとは思っているものの、どこまで耐えられるかはわからない。はっきり言って、レオ一人の方がかえって楽かもしれない。

しかし、レオは一人では行こうとはせず、わざわざ足手まといになるだろう、刹那を連れて行くと言ってくれた。恩を返させてくれると言ってくれた。

だから、自分はやれることをやらなければならない。なんとかしてでも。

「あまり気を張らなくてもいいぞ。楽にやればいいさ」

本人は気が付いていなかったが、刹那は強張った顔をしていた。ああ、と刹那は返事をし、にっこりと笑って見せた。大丈夫だ、と言ってるかのように。

「城に乗り込むときも、その調子で頼むぞ。一番肝心なのが」

「城に乗り込む、ってどういうこと？兄さん。」

あわてて、ぱつと声のした扉の方を向いた。そこには、昨日と同じくらい悲しい顔をしたりリアが空色の目をレオに向けているのが見えた。

しまった、音を立てないように静かに扉を開けたのだ、とレオの頭に浮かぶのに時間はかからなかった。刹那はどうすれば良いのかわからず、ただただレオとリアの双方を交互に見ていた。

「もう一回聞く。城に乗り込む、ってどういうこと？」

レオはあきらかに動揺していた。一番このことを知られなくなかった人に知られてしまったのだから当然だろう。

「いや、あれだ。いつかみんなで乗り込むときの

「嘘つかないでよッ！！！！」

リアの怒鳴り声が部屋を包んだ。レオの苦し紛れの、明らかな嘘に、リアの顔はいつそう悲しくなる。

「どうして？どうして兄さんは一人で背負い込もうとするの？私たち残された人のことを考えないの？」

「え？」

レオは真っ先にやめて、と言うと思ったのに、リリアがその無茶なことをする理由を聞いてくることに少し不意を突かれてしまった。

「だってそうでしょ？今までも、危険なことや人を殺すことは全部兄さん一人でやったし、昨日だってみんなで行けば安全で確実なのに、わざわざ一人で行った。」

その挙句、刹那さんとたった2人で危険地帯に行こうとしてる。つらいことや悲しいこと、兄さんは全部自分でやってる」

リリアの目から涙があふれ、頬をつたって床に流れ落ちる。

全て事実だった。危険なことは暇だから、などと適当に理由をつけて人々を危険にさらさないようにしたし、やむを得ず殺さなければいけないときは、邪魔だからと嘘をつき、たった一人でその体を血に染めたことがあった。

「最初に兄さんが言ったこと覚えてるの？！みんなで戦っていこうって言ったのは嘘じゃない！！全部自分一人で背負っているじゃない！！なんのための仲間よ！！！！一人戦場に旅立って残された人のことなんか全然わかってない！！！！兄さんはそれが一番良いって思ってるかもしれないけど、そんなの大きな間違いよ！！！！！！」

リリアの涙が止まらなかった。あふれる涙を手ですくってやりたかったが、今はそんなことをする立場ではない。

「みんなうすうす感じてるのよ！！！！兄さんが嘘言って一人でつら

いことやってるの!!! 兄さん一人で戦いに行くとき、兄さんばかり嫌な思いをさせていることが悲しいって、みんなみんな言っているのよ!!! 兄さんもつらいかもしれないけど、この城のみんなだつて同じくらいつらいってこと、わかってないよ!!!」

リアの怒声、一つ一つが胸に突き刺さる。

初めて気づいた。否、気づかされた。みんなのためと思ってやってきたことが、逆にみんなを苦しめていたことに。一人で危険な所に行くことが、どれだけ人々に不安を与えていたかということに。

ドンッ!!

昨日と同じく、不意にリアがレオの胸に飛び込むように抱きついてきた。ただ昨日と違うのは、ああ向けに倒れず、リアをしっかりと抱き止めてやれたことだった。

「わかってないよ! 兄さんはなんにもわかってない! みんなのことも、私のことも! 全部、全部!」

レオの胸に顔をうずめて、精一杯叫ぶ。今までの思いを、苦しみを、つらさを、悲しみを。

そんな小さなリアの体を、今まで殺しに使ってきた両腕で、強く

抱いてやる。まるで、今までの行いを、謝るかのように。

「ごめん……ごめんな、わかってやれなくて」

「そつだよ、兄さんは何もわかってないよ……」

さっきの荒げた声とは違う、どこか安心したような声。リリアは安らぎに浸っていた。大事な人に抱きしめられ、心の奥底から安心と安らぎに浸った、心ゆくまで。

しばらく、レオとリリアの2人はそのまま抱き合っていた。

呆気にとられている刹那を放っておいて。

+++++

「じゃあ、絶対に私も行くからね」

「……」

「ちょっと、兄さん……」

あれからしばらくし、リリアは自らも一緒に行くということ、レオのことを許すことにした。一方のレオは、あまり賛成していない様だったのだが、

「わかった。ただし、絶対に俺の言うことは聞けよ」

「うん」

しづしづ了承してしまつたのだつた。

返事をするリリアの姿は子どものような純粋な笑顔をした。放つておくとはしゃぎだしそうな感じだつた。

レオは一通りリリアに作戦を説明すると、やはり念のため、武器庫からリリアに小さい鎧を持ってきた。鎧を受け取つたりリリアはさっそく装着してみる。しかし、

「……………リリア、小さいな」

「……………まっただくだな」

リリアが小さすぎて鎧とリリアの体が密着せず、歩いたり走つたりするとその反動で鎧が上下左右に動いてしまつのである。

「うるさ〜い！もういい、鎧はいらない。胸当てで良い！」

「それも小さかつ

「刹那さん！」

リリアに怒鳴られ、刹那は悪ふざけをやめるのだつた。

やれやれ、とレオは再び武器庫に向かい、一番小さな胸当てを手に取つて部屋に帰り、すねているリリアに手渡した。今度こそは、と意気込み装着してみる。すると今度は、

「ほら見て、ピッタリ」

うれしそうに笑つて見せびらかした。

レオはあきれた顔をし、はあとため息をついてリリアに一言。

「それ、本当に一番小さいやつなんだが……」

「いいのいいの、ちゃんと着れば」

バタンツ！！

勢いよく開いたドアに、レオは忘れることなく銃を向ける。がすぐ下ろした。扉を開いたのは紛れもない、大臣だったからだ。少々あわてているような顔をしている大臣は、レオに慌ただしく近寄り、口を開く。

「レオ様、外に国王軍が……」

来たか、そう頭に響いた瞬間、レオの口も開く。

「行くぞ、刹那、リリア」

「ああ、わかった」

「うん、行こう」

2人の声が聞こえた瞬間、足は動き出す。扉の向こうへ向かって一同は足並みをそろえて歩き出した。

大臣はその3人をただじっと見つめていた、姿が見えなくなる一瞬

まで。その一瞬さえも過ぎ去り、視界内から消えたとき、そつと、小さい声で、声の届かないあの人に、言ってる。

「……………今回が最後ですよ、レオ様。黙って戦場に行くのは」

大臣は食堂での、悲しいレオの顔を思い出していた。微笑みながら、そつと。

第18話 偽者編6

荒野を照らす太陽は、どこの方向も向いていない。太陽で時間を確かめるとしたら今は正午。太陽は真上から日光を放射している。

「いいか、とりあえず俺が合図するまでは絶対に動くなよ」

「わかった」

「うん、オツケー」

王国の偵察軍は前の見張りの軍同様、レオの城の近くでおとなしくしていた。一応軍として構成されているため、人数はだいたい100くらいいるようだった。

今現在ではまだ偵察軍に動きはないが、また前回みたいに帰られたら作戦が台無しになってしまう。だから、できる限り早いうちに手を打っておく必要がある。

それを理由として、レオは一人で偵察軍に向かった。もちろん刹那たちをここに置いていくつもりなどない。置いていくのは本当に邪魔だからなのと、相手と自分の攻撃を受けさせないためだった。

右手を腰のホルスターに入っている銃にのばす。マガジンを取り出し装填部分を押さえ、弾を補充する。それが終わると再びマガジンを銃に戻し、軍めがけて銃口を向ける。

「隊長、あそこに人がいますけど……」

「我々の仕事は昨日の軍の消息を調べることだ。そんな人一人に構っている暇などない」

距離はだいたい100メートル前後。普通の人間、いや訓練したもので、それだけ離れていれば正確に弾の狙いなどつかない。否つ
けられない。
しかし、レオは違う。常人離れしたセンスと幼いころからの厳しい
訓練、そのレオに狙い撃てないものなどない。

ズガン!!!

一発の銃弾がきれいな放射線を描き、軍の少し手前に落ちる。そし
て、

ポオン!

弾が爆発した。手前に落ちたことで軍の被害はなかった。否、『手
前にレオが狙い撃ったことで』被害はなかった。

「な、なにがあつた!？」

「前方で爆発、原因はさきほどの人かと思われます」

「な、なめやがって。おい！あいつを殺せ！」

声と同時に、10数人の兵士が乗っていた馬の腹を蹴り、レオのほうに向かって風を切る。だんだんと近づいてくる兵士に、レオは最初の一発を撃つてそのまま構えていた銃を向け、人差し指を折り曲げた。

ズガン、と発砲音がして、弾が一発発射された。ぐんぐん弾は前方へと飛んでいき、騎馬兵に命中する。そして、

ポオン！

爆発する。一発で300もの命を奪う爆発は、いとも簡単に向かってきた兵士たちを焼き殺す。断末魔の音が、偵察軍の耳に入る。

「な、なんだと！？くそ！全員でかかれ！相手は一人だ！」

本来の目的を忘れ、偵察軍はレオめがけて一斉に馬を走らせる。

「思ったより向かってくるのが早かったな」

レオは右手の銃のマガジンを取り出し、横についてる小さなボタンを押す。すると、装填されていた弾5つがじゃら、と音を立てマガジンから飛び出す。装填部分に手を当て、再度弾を装填する。

ガチャン、とマガジンをしまつと、すでに軍は文字通り目の前に迫っていた。

「つぶれるおおおおお!!!」

「おっと」

間一髪のところを蹴り、空に跳んだ。と、同時に体を反転させ頭から落ちていく形になる。空中で腕を伸ばし、銃を構える。

「た、隊長!上です!」

気付いた瞬間、レオは右手の銃を連射した。

ズガガガガガン!!

6発の銃弾が兵士6人に見事命中する。空中という不安定な場所でも外すことのない、おそるべく集中力と技量。

地面がだんだん近づき、レオは体を半回転させ足から着地する。偵察軍のど真ん中。しかし、兵士誰一人として動こうとはしなかった。皆顔を凍りつかせ、目に映る人物の名を呼ぶ。

「レ、レオ様だ……」

「駄目だ！この人に敵うはずがねえ！」

「に、逃げる！！！」

「うああああああ！！！！！」

そして、一斉に血相を抱えて逃げ出す。悪魔でも見たような顔をしないで。

これを待っていた。レオは空いている左手を握った。白く光り、一つの弾が出来上がっていた。それを勢い良く上に放り投げ、右手の銃で空中を進んでいく弾を狙い撃った。

ズガン、と音と同時に銃口から弾が飛び、空中で回転している弾を貫いた。瞬間、

ポオン！

空中で爆発が起きる。さっき作った弾は、最初に撃ったあの爆発効果のある弾だった。

びりびりと衝撃が肌に伝わり、刹那とリリアはその『合図』を受け取った。

「行こう！！！」

「うん!!」

二人は物陰から一気に走り出した。今なら兵士の視界内に入らないし、入ったとしても戦意が喪失している兵士がこちらに攻撃してくることはない。まさにグットタイミング、非常に走りやすかった。

「こつちだ」

近づいてきた刹那とリリアに呼びかけたレオは、手に3頭の馬の手綱を握っていた。足元には死体から取り外した鎧と兜が置いてあった。これを取るとき、レオはどんな気持ちだったのだろうか

レオに促されて、刹那とリリアは鎧に手を伸ばす。少しだけ戸惑ったが、今は仕方ない。

鎧を着け終わり、転がっている兜をかぶった頃にはリリアとレオもちょうど準備し終わったところだった。

「よし、早く追いかけるぞ。先に城に入られたら面倒なことになる」

軍の大半が戻ってきたのの後から3人来ると、どうしても不信感を抱かせてしまう。しかし、一緒に入ってしまったえば数の多い兵士の顔をわざわざ確認されることなどない。作戦を確実にを行うためには、どうあっても追いつかなければならない。

馬に乗り、レオとリリアのやり方を見て、刹那も馬の腹を蹴った。

思いのほかうまくいき、3人は軍を追いかける。刹那は恩を返すため、リリアは大切な人というため、レオはこの騒動を終わらせるため。

+++++

荒地を3人を乗せた馬が走る。普通に走るよりははるかに速いはずなのに、未だ先ほど逃げた偵察軍には追いつけない。相手も馬に乗っているため、追いつきにくいのも無理は無いのだが。

「ところでさ、レオ。さっきの爆発ってどうやったんだ？爆弾なんて持ってなかったけど」

ふと、先刻のことが気になってレオに聞いてみる。そのときは防具をつけていなかったため、なにか武器を隠していてもすぐわかる。でも、レオは腰のホルスターに入っている銃一丁しか持っていない。爆弾なんてものは持っていなかった。

ああ、と言ってレオは疑問に浸っている刹那に説明する。

「教えてなかったな。結晶の戦闘用具は人それぞれ違った『潜在能力』があるんだ。俺で例えてみると、火、水、雷、風、土、闇、光のそれぞれの属性の弾を作れるってこと、つまり、『全属性結晶化』なんだ。さっきのは火の属性にあたる弾だ。衝撃が当たると爆発する」

さきほどの大規模な爆発、レオの能力で作りに出されたものだった。

「じゃあ、俺の大剣もなんか能力があるのかな」

馬の手綱を握り締めながら聞いてみる。だが、その問いにはレオではなく、リリアが答えた。

「あるよ。でもね、潜在能力は何年も訓練を重ねていくうちにいつ

の間にか体得しているものなの。兄さんだっっていつ習得したかなんて覚えてないんだよ」

それを聞くと、刹那は少しがっかりした様子だったが、レオは笑って、

「なあに、お前にそんな能力必要なんで無いさ。お前の目的は人を殺すことじゃなくて、家に帰ることなんだからな」

と、励ましてやった。

確かにその通りだった。武器の能力といっても、おそらく人を殺しやすくするようなものだろう。家に帰るために人なんて殺すことなんてないだろうし、今回に限っても国王を生け捕りにすることが目的で殺すことが目的ではない。よほど作戦がうまくいかない限り、戦闘なんてすることなどない。言ってしまうえば、今の刹那には必要性のないものだった。

と、前方から砂ぼこりが空に上がるのが見え、偵察軍の姿を確認することができた。

「見えた!!」

レオの叫び声が耳に入った。偵察軍のほうもさすがに安心したのか、馬の速度を少し緩めていた。後ろに先ほどの脅威が迫っていると知らずに。

馬の腹を強く蹴り、レオはさらに速度を上げる。刹那とリアも続き、3人は前方の軍に追いつくべく、馬の足を急がせる。軍との距離がだんだん迫って来る。兵士誰一人としてその存在に気が付いていない。やがて、軍の一番後ろにつき、他の兵士の馬の速度に自分たちの馬の速度を合わせ、まんまと兵士にまぎれることに成功した。国王のいる城へは、まもなく着く。

+++++

あれからしばらく馬を走らせ太陽が沈みかけた頃、レオを先頭とした一同の目にはレオ達の故郷、この争いの元凶の拠点となっている王国が見えた。

「変わってないな……見た限りじゃあ、な」

古い、しかし高く、ちよつとやさつとじゃ壊れることなどない立派な城壁。声に出すとばれてしまうので、心の中でそつと、見た限りでは変わってない城壁を見て素直に呟いた。

兵士達を乗せた馬は、高さが10メートル以上はあるだろう門の前に歩いていった。もちろん、門の前には門番が武器を持って立っていた。

門番が偵察軍の姿を確認すると、一人が門をとんとんと手でノックする。すると、中にいたまた別の見張りが門を開けるためのレバーを引く。すると、ぎぎぎ、と古い木で出来た大きな門が開いた。レオのいらんだ通り、門番は数の多い兵士を一人一人チエツクなどしなかった。

まんまと国に潜入できた刹那たちだったが、いきなり馬から降りて城に向かうものならば、この国の兵士全員に追いかけることになつてしまう。そのため、人気のつかない所まで馬に揺られていることにした。

外から見た様子は変わっていなかったが、城下町は変わってしまった。それも前の明るい、子供たちがはしゃいで遊びまわるとい

う光景ではなく、人一人外には出ておらず、そこらじゅうに人の骨が転がっているという残酷なものだった。子どものとき、一度だけ連れてきてもらったときはまるで違う姿に、レオは目を薄めていた。リリアもその光景を見たくなくて目をつぶり、早くこの場から逃げ出したい、という気持ちでいっぱいだった。そんな二人の姿を見る刹那には、前のこの光景がどれだけ変わってしまったか、たやすく想像することができた。レオの話を聞く限り、国王は優しく、国民を第一に考えていたというが、今は民のことなど考えず無益な争いをしている。どうやったら、ここまで変わってしまうのだろうか。

無残極まる城下町をぬけ、城までの一本道にさしかかった。青空が良く似合う並木道、今では焼き払われかろうじて立っている焦げた木へと変貌していた。空には黒い鳥がガアガア鳴きながら飛び交っており、まるで魔王が住んでいそうな光景だった。

城の前の折りたたみ式の橋までたどり着く。真ん中が鎖で支えられているため、内側からその鎖を巻き取られると自動的に橋が折りたたく、という仕組みだ。しかし絶対忍び込まれない自信があるのか、あるいは偵察軍が帰ってきたという報告を受け取ったからなのか、その橋は折りたたまれてはおらず、兵士たちはまるでそれが当たり前であるかのように渡っていく。ぎしぎしと音をたて、全員が渡りきっても橋は折りたたまれることはなかった。どうやら前者のほうの方が正しかったみたいだ。

奥のほうに進み、馬小屋のあるところまで軍は歩を進める。そしてようやく馬から降りることが許された軍は、無言で下を向き馬の手綱を引き馬小屋の中に引っ張っていく。刹那たちも、一番後ろからついていく。小屋の中、兵士たちは自分の馬を各自決められた場所に馬の手綱を結びつける。仕事が終わっても、仕事道具を外してもらえない馬はなんだか悲しそうな目をしていた。必死な訴えも兵士に届くことがなく、手綱を結んだ兵士から順番に広い馬小屋から出る。

このときを待っていた。兵士全員が他人に関心がないのを、その態度から読み取っていた。レオの思惑に反し兵士の後を着いていこうとするどこか抜けている刹那の肩をガツとつかみ、刹那の耳元でささやく。

「もう追いかけてなくてもいい。ここまで来たら後は進入するだけだ」
言い終わるとそっと肩を離した。まだ兵士が何人か残っているため、刹那は声を出さず、うなづくことでレオの言葉の理解を主張した。しばらく経ち、兵士が刹那たちに構うことなく城に戻っていった。辺りはすでに夜。その夜は、満月だった。きれいな、とてもきれいな、一片も欠けていることのない、丸い丸い、月。

+++++

月明かりが異様に明るい夜。あまり潜入するには有利には働かないのだが、これも仕方ない。そんな夜を刹那たちは走っていた。馬小屋で軽い打ち合わせを済ませた後、城の中に忍び込み生け捕りにしようとして、あまり知られていない道、つまり隠し通路まで見つからないように物陰に隠れながら、少しずつ、しかし確実に進んでいった。

「そこからよく逃げ出して城下町に行こうとしたもんだ。見張りの兵士たちに見つかって結局いけなかったけどな」

「いつも私に黙ってね……」

走りながら、ずいぶん昔のことを話す。リアの苦情はレオの心に突き刺さり、苦笑いをするしかなかった。

そんな感じで明るい夜の道を進んでいき、ある城の壁、つまりは城壁にたどり着く。休憩、ということなのだろうか。

「ここだ」

休憩ではなかった。

レオはここだと言ったが、見た限りではあまり他の城壁とは変わりが無い。少しだけ、ほんの少しだけだが城壁を構成している石のブロックの隙間が他のところよりも深く、大きい。ただそれだけ。

レオの左手がすつ、とその城壁を押した。するとゴゴ、と城壁のブロックが動き、それが仕組みだったのか、すぐ横のブロックが更に動き人ひとり通れるくらいの通路が現れた。

昔のことを思い出し一瞬、たった一瞬だけ微笑み、すぐに消した。今はそんなことに浸っている場合ではないのだから。

「さあ、行くぞ。ここを通れば親父のいる『王の間』に直結する」

そう言つて、レオを先頭に、暗くじめじめした通路に足を踏み入れる。

やはりというか、足場には少量の水がたまっていた。びちゃびちゃと音を立てて進むとするが、いきなりレオが逆戻りをした。隠し通路の扉を閉めるのを忘れていたのだ。これを閉めないと、見回りに来た兵士が入ってきてしまう。入り口のすぐ横のブロックをレオの左手が押した。さきほど同様、ゴゴ、と扉が閉まり、辺りは真っ暗になってしまった。

じめじめとした空気、真っ暗な空間、少し、いやかなり怖い。日本と言う丑三つ時（うしみつどき、幽霊が出やすい時間）であつたら、

間違いなく青白い光を纏った足のない浮遊物とご対面してしまうだろう。

不安がっていたのもほんのわずか、レオがマッチをすり切りは明るくなった。リリアが持ってきた古びたバッグからランプを取り出し、レオに手渡す。さすがレオの妹、ぬかりない準備だ、と思う刹那だった。

ランプにも灯りがとまり、辺りは暗闇のくの字もなくなった。刹那たちはランプの助けを借りながら徐々に進んで行った。しかし、歩くたびに鳴るびちゃびちゃと水がはねる音が非常に耳障りだった。そんな音を聞くのが嫌だったから、刹那はレオに話しかけることにする。

「なあ、レオ。聞いていいか？」

「ん？なんだ、いきなり」

唐突な刹那の言葉に驚くが、断る理由にはならない。

「それで、なんだ？」

「小さいころから、リリアと一緒に国王と訓練してきたって言うんだけど、やめたいって思ったことはなかったのか？」

うん、とうなってから、しばらく沈黙に包まれる。仕方なく、という雰囲気を出しながらレオは刹那の顔を見ることなく答えてやる。

「あつたさ。何回も、な。でもな

「私がいつも泣いてたからやめられなかったんだよ。」

リリアがレオの言おうとしていたことを口に出す。きよとんとした顔でリリアを見る。しかしリリアは刹那の顔を見ず、まだランプに照らされていない暗闇を見つめていた。

「きつくて、つらくて、厳しくて。耐えられなくなっていつも泣いてたの。それを見た兄さんはいつも慰めてくれたの。自分もつらいのにね」

レオの方を向いてみた。薄暗い通路でも、少し頬が赤くなっていたのを刹那は見逃さなかった。

「自分が弱音を吐いちゃだめだって、きつと兄さんはあの時思ったはず」

言い終わるとリリアはレオの顔を見て、当たってた？と、短い一言をレオに言った。

「さあな」

「あ、刹那さん見て。兄さん照れてる」

「ったく、早く行くぞ」

びちゃびちゃ水がはねる音を立て、レオは少し早足で通路を歩いていった。

からかっていたリリアは口を押さえ、ふふふと笑っている。

ふ、と刹那の頭にあることが浮かんだ、変な考え。こうしてみると兄妹じゃなくて、恋人みたいだな、という考え。

通路はまだ続く。王の間まではまだ少し距離がある。

第19話 偽者編7

湿っぽく、生温かい空気。それが確かに存在している通路を歩いていた。歩き始めたからもう20分程度は経っているだろう。夏休み、ひたすらマンガばかり読みあさっていた刹那はいい加減足が疲れてきた。

「レオ、まだか？」

相変わらず地面には少量の水がたまっていて、歩くたびにびちゃびちゃと耳障りな音が当たり一面に響いた。レオは刹那の方を見て笑った。

「もうそろそろだ。疲れたか？」

正直に言いたかったが、馬鹿にされるのが嫌だったので首を横に振った。そうか、と一言刹那に言い、再び歩き始める。

が、ほんの10歩程度歩いたところで通路は行き止まりになっていた。

「着いたぞ。ここだ」

そう言うなり、左手で通路の石ブロックを押す。すると、先ほどと同じく行き止まりの石ブロックが左右に動き、明るい光が目飛び込んできた。ランプの明かりで目が慣れていたので眩しいとは感じなかった。

レオが腰のホルスターから銃を取り出した。弾はすでに装填してあるのだろう、そのまま光に吸い込まれるようにして通路を出た。辺りを見回してみる、どうやら兵士はいないようだった。

「よし、出てきていいぞ」

ひとまず大丈夫、ということなのだろうか。刹那とリアはあの生温かく、湿っぽい通路から出た。刹那たちの目には広間が飛び込んできた。隠し通路のつながっていた場所はレオの部屋の扉と同じくらい大きい扉の前だった。おそらく、この中が『王の間』なのだろう。レオは銃からマガジンを取り出し弾を確認している。

リアは背中にも手を伸ばした。すると黒く長い物体が取り出された。世間一般から言うところの散弾銃、ショットガンと呼ばれるものだった。バッグの中から弾を取り出し、セットする。ジャキッ、という音が響いた。

二人の戦闘準備を見て、刹那も大剣を形成した。通路の暗闇に良く似た黒色の大剣を。

「よし、行くぞ」

声と同時に扉に手をかけ、押した。ぎぎぎ、ときしむ音がし、ゆっくりと扉が開いた。一人が入れるくらいに開いたとき、それ以上は開けないでさっと入った。扉を限界まであけてしまうと万が一兵士が気付いたときに、扉を閉める前に入られてしまう可能性があるからである。刹那とリアも後から続いて入る。

体育館ほどの大きさの王の間の玉座に座っている一人の男が見えた。全ての原因となっている一人の男。

「親父い！！」

そう叫んだのはレオだった。レオの座っていた玉座よりもはるかに立派な玉座に腰掛けている国王は、自分のことかと言わんばかりの声を出す。

「あ〜ん？なんだ〜、てめえ〜？」

「!？」

違った。自分の知っている父親ではないことは明白だった。口調が違うし、それに自分の息子をてめえ、とはき捨てたのだから。しかし、衝撃な言葉を吐かれても、レオの頭の中は冷静だった。その言葉のおかげでわかったことがある。

「お前は、誰だ？親父じゃあないな？」

自分の考えが正しければ、玉座に座っているのは父親である国王ではない。別の誰かだ。レオの問いに、少し笑みを浮かべた国王。その笑いは冷たく、おぞましさをえ体走る。

「あ〜、『こいつ』の息子かあ〜。顔なんか見てねえからわかんなかったよ」

変なことを言っている。刹那の頭は混乱する。親なのに自分の息子の顔を見ていない。そんな馬鹿なことがあるか。リリアは驚いたように目を開いていた。おそらく、リリアも刹那と同じことを考えているのであろう。

だが、レオだけは違った。刹那とリリアの考えていることとは違うことを考えている。表情を変えることなく、再びレオは問う。

「お前は誰だ？」

クククと小さく笑い、国王は玉座から立ち上がった。

「俺は、神の使いさ」

その言葉に一番反応したのは刹那だった。

神の使い、異世界に来る前に接触した男はリバーと名乗っていた。

その男もまた神の使いだ、と言っていた。その男のせいで異世界に飛ばされたといっても過言ではない。

立ち上がった男はにやりと笑うと、全身が真っ黒に染まった。一同が驚いていると、その黒くなった男の形が少し変わり、国王とは違う、一人の人の形となった。少しづつまた黒くなった男は、人の色を取り戻していった。完全に人となった黒い男は、国王とは違う髪、顔、体をしていた。

「名をシャドウ、ある器を壊すために張られた罠さ」

「罠、だと？」

この言葉ばかりはさすがのレオも理解できなかった。

「ああ、罠だ。これ以上しゃべる義務はねえ。罠の存在を知られたからには死んでもらうしかねえな」

灰色の髪、黒い目をした男は拳を握り、少し体勢を低くした。

「ちっ！」

右腕の銃をシャドウめがけて撃った。充分離れているため確実にかわされる。撃った理由はシャドウの攻撃をよけるときの様子を見るため。それがわかればなんらかの欠点が見える。はずだったのだが、

「ぐ……」

「!?!」

充分よければ距離だったにもかかわらず、シャドウはレオの弾をか
わしていなかった。

おかしい、明らかにおかしい。よければ致命傷になるだろう胸
体を狙ったのに、自ら当たりに行ったかのようにも見えた。
シャドウは撃たれた胸を押さえ、その場につづくまる。

「これって、チャンスじゃないか？」

そう思い、飛び出していったのは刹那。もちろん剣で斬るようなこ
とはしない、少しばかり殴りつけおとなしくさせるつもりだった。

「おい、刹那！うかつに近寄るんじゃ

「おせえよ

途端、近づいてきた刹那にシャドウは拳を放った。畏だった。

「ぐふ……」

拳は刹那の腹をえぐり、刹那は吹っ飛ばされた。少しばかり空に浮
いたかと思うと床に体を打ち付けられ、動かなくなった。

「あゝあゝ、かなり手加減してやったんだけどな。死んだか？」

刹那の腹に突き刺さった右手をひらひらさせ、冷たく笑って答える。

「リリアー!!」

そう言った瞬間にリリアはうつぶせになっている刹那に近づき、その体を起こした。少し口から血を吐いているが息はしていた。かろうじて生きていたものの、応急処置をしないと後遺症が残ってしまうかもしれない。

レオの顔色をうかがう。リリアの顔を一瞬だけ見て、連れて行けと暗黙の指示をした。

それを受け取ったりリリアは刹那の体を背負い、元来た道を戻り扉を閉めた。

「なんで追わなかった？」

「今からやることのほうが楽しそうだからよ」

そういうと、シャドウは玉座を蹴りレオのほうに跳ぶ。

さっと銃を構え、後退しながら2発銃弾を放つ。やはりかわすことなく、弾丸はシャドウの体に突き刺さった。しかしダメージを受けた様子もなく、シャドウは猛然とレオに突っ込んでいった。

「んなもん効かねえよ」

右腕を振りかぶり、レオに向かって拳を叩き込んだ。しかし、レオのほうも慌てることなく必要最低限の回避をする。が、それは間違ったよけ方だと知ることになる。

レオにかわされた拳はそのまま床に向かっていき、拳が床に触れた瞬間、何の音かわからない大きな音が辺りに響き、床に半径2メートルのクレーターが出来上がった。

「!!!!!!」

必要最低限の回避しかしていないレオは完全に意表を突かれ、そのクレーターを作った威力に巻き込まれてしまった。倒れた体をすぐさま起こし、シャドウとの距離を保つ。

「相手の力量わかんねえのに、んな小せえ回避してっからだよ」

まるで獲物をじりじりと追い詰める肉食動物のような冷たい目をレオに向ける。

それを振り切るかのようにレオは銃弾を放つ。が、

「わかんねえかなあ」

人差し指一本で弾丸は止められた。

「なっ………!!!」

驚かすにはいられなかった。銃弾を指一本で止めた、いや、ただならぬ速度で向かってくる弾を正確に止めていることに。

驚いているレオを無視してシャドウは止めたレオの弾をじいと思つめる。

「なぐんだ。弾が悪いんじゃないやなくて銃のほうか」

そう言うと弾を放り投げ、再びレオに接近する。レオも弾を止められたことにシヨックを覚えて少し動けなかったが、かろうじてかわすことができた。

相手が背を向けているその一瞬を狙って残り2発の弾丸を浴びせる。しかし、シャドウはまるで答えた様子がなく、冷たい笑顔を顔に貼り付けたままレオに突っ込む。

「くそっ!!」

突っ込んでくるシャドウをかわして、レオはマガジンを取り出して弾を補充した。さっきのただの鉛弾ではない、すこし特別な弾を。ジャキンと音をたててすぐさま自分に背を向けている無防備なシャドウに狙いをつけ、撃つ。

「これならどうだ!!」

飛んでいった弾は見事に命中した。瞬間、

ポオン!!!

爆発がおき、爆風がシャドウの体を包んだ。さすがにこれは効いたであろう、とほんのわずかな安堵に浸った。しかし、

「ん〜ん、やっぱ鉄くずで出来た銃じゃ、弾の威力10分の1も引き出せてねえな」

爆風の中、炎が体を包んでいるのにも関わらず笑みを浮かべている

人間、いや、化け物が平気で弾の感想を述べた。信じられなかった。たった一発で300の人間を殺すことができる弾なのに、シャドウにはダメージすら与えられなかった。もう打つ手が、なかった。

「さく、今度はこっちから攻めるぜえ〜」

冷たい目から、殺しの目が変わった瞬間だった。

さきほどのむやみな突っ込みのスピードをはるかに上回る速さで突っ込んできたのだ。あまりの速さにレオは反応ができなかった。

「か………は………」

すさまじい速さで勢いづいた拳がレオの腹に直撃し空に舞う。結晶化をして肉体の強化をしているとはいえシャドウの攻撃は重く、息をするのも苦しかった。10メートル高く舞ったレオに更なる追撃が加わった。地上にいたはずのシャドウが空中のレオのところまで跳び、がら空きの背中に重い拳を放ったのだ。

「がは………」

勢い良く床に叩きつけられ、その衝撃でクレーターが出来上がった。

「くそ、なんだこいつ。結晶化で体の強化もしてないのに〜」

ふと頭に浮かんだ疑問。

確かにそうだった。結晶は普通目に見える戦闘用具になるはずなのに、シャドウはそんなものつけていない。薄く、防具ともいえない服装の中に何か隠しているとも思えなかった。

さらに弾丸の威力が皆無だということ。おかしい、絶対に何かから

くりがあるはずなのにどうしても見抜けない。

「いゝこと教えてやるよ」

ダメージの大きさを動けないレオを見てにやにや笑いながら口を開く。

「おまえ、結晶化で肉体の強化なんかを施してんじゃねえか、なんて考えてるだろうがな、残念ながらはずれだ。結晶化なんざこんなちんけな場所で使いたくねえ〜んだよ」

こつこつと足音をたて、ゆっくりとレオのほうへと歩みよる。レオは動けない。

「俺は、強化人間だ。細胞の作りがめえらなんかと格がちげえんだよ」

はき捨てるように言った。だが、レオは聞き逃さなかった。

「強化人間だと？冗談じゃない、細胞の作りが違うからって俺の弾丸が効かないなんて……」

レオに敗北感というものが初めて芽生えた瞬間だった。冷たい感覚、何よりも信じられない事実が目の前まで迫っている。

「さらにもう一つ教えてやる。てめえの親父はもう虫の息さ。あとだいたい5分くらいか」

「えっ……」

レオの中の何かが切れた。ぶつり、と自分でも音がしたのがわかった。こんな屈辱、怒りを抱いたのは生まれて初めてだった。

ゆっくりとぼろぼろの体を起こす、のうのうと笑って馬鹿にしているこいつだけはなんとしてでも殺さなければならぬ。自分のためにも、侮辱された父親のためにも。

「お！まだ起きれんのかよ。あの無様な野郎とは違って最後まで鳴いてくれるってか？」

「貴様は、ここで死ななければならぬ」

「あ？」

そういうと、レオは右足のふくらはぎの部分のズボンをまくった。そこには腰の銃とはまた別の銃がしまわれていた。いわゆる隠し武器。

「ほお、二丁銃か。だがな、そのポンコツで撃つ限り強化人間の俺にやあ効かねえんだよ」

そんなことは言われなくてもわかってる。だからこそ、『とっておき』の出番。

10年前。レオが弾を初めて作り、更なる発展を遂げようと研究して出来た一発の弾丸。三日三晩寝ずにひたすら魔力をこめ続けて完成した一発の弾丸。試しに自分の銃で使ってみた。目掛けて撃った城壁は跡形もなく消え去った。そのことが父親にばれて以来これを使うことを禁止された。

その弾を使う時が今訪れた。

右手の『とっておきの弾』の装填された銃をシャドウに向けた。

「ほう。まだわかってねえのか。なら撃ってみろや」

逃げる素振りなどまったく見せないシャドウ。その行為が間違っているとも知らずに。

狙いは定まった。後は人差し指を曲げるのみ。自らの感情が込められた人差し指をゆっくりと引いた。

装填された弾の名、それすなわち『アルテマ』。

第20話 偽者編8

刹那の腹に青い光を纏った手を乗せているリリアの耳に轟音が飛び込んできた。

「!?!」

なにが起こったか理解できていないリリアは、刹那を担いで出てきた扉の方を見た。しかし、何の変化のない扉を見ただけでは何が起こったのかを判断するのは難しい。

いっそ刹那の手当てをやめ、自分の目で何が起きているのかを確かめたかったがそうするわけにはいかない。リリアは再び刹那の腹に青い光で包まれた手を置いた。

リリアは結晶化すらできないが、立派な能力者である。なぜならば、結晶を作ることだけが能力者に当てはまる条件ではないからである。自分の持っている魔力を自在に使える者も能力者として認識されるのである。リリアはレオや刹那とは違い、戦闘用具を生成することはできない。その代わりに自らの魔力を手に集中させ、それをかざすことで自然治癒の効果を高めることが可能なのである。

もちろんそういったメリットがあればデメリットもある。

自然治癒を意図的に高めるのだから体にかかる負担は大きくなるのである。そのため、命に関わる重傷を負った人にこれをやってしまうと、死亡確率を高めることになってしまうのだ。だからこそ使う場面は、軽傷ですぐに行動しなければならぬ人、重傷ではあるが体力がかなりあると判断されたときなど、限られてしまうのである。刹那の場合は意識こそ失っているものの、シャドウに殴られただけで特に命には別状なかったし、本人も瀕死の状態ではなかったため、回復魔術が施されたのである。

下ろした。シャドウの右腕を奪ったレオのとおきおきの弾、『アル
テマ』はもう装填されていないためだ。あまりに危険すぎる弾なの
で、一発きりしか銃に込めなかったのである。
終わった。と3人は確信した。シャドウを傷つけるための最後の手
段がもう無くなってしまうのだから。

「おもしれえ！！おもしろ過ぎんぜえ、てめえ！！！鉄くずで出来
た銃にもかかわらず、強化人間である俺の右腕を吹っ飛ばすなんて
よお！！！」

そう言うと、シャドウは残った左手に魔力を込め、空に向けて拳を
放った。とたん、ゴゴゴと音がして、空中に穴が開いた。

「ゲート！？」

刹那があわててふところから水晶を取り出す。ダンの村の村長から
もらったゲートの方に光放つ代物。王の間のランプの明かりを水晶
にうまく当て、水晶から一筋の光が伸びた。がしかし、

「あれ！？」

シャドウの開いたゲートの方に光は伸びていかず、王の間の扉の方
向に伸びていた。

レオが仕組みを理解していれば何かの疑問が沸いたのだが、あまり
鋭くない刹那は単に故障かな？などと思ってしまうのだった。

「逃げるのか！！」

レオがゲートに入りかけているシャドウに激昂を飛ばす。が、シャ
ドウは冷たい笑いを隠すことなくレオの方に顔を向け、

「何言つてやがる。このまま戦つたらてめえらが死ぬってというのは一番お前が知ってるはずだぜ」

明らかに上から見下しているような口調で言い放つ。

「てめえはおもしれえから生かशीてやる。もっと強くなつて俺を殺しに来い！俺を恨んで憎んで、怒れ！俺を楽しませろ！！」

そう言い残すと、シャドウはゲートの中に消えていった。ゴゴゴ、という音が辺りに響き、ゲートは閉じた。

「兄さん！！」

リリアは傷ついたレオの方に駆け寄つた。あわてて刹那もレオに近寄る。

レオは二人の方を向き、少しあせつたように言う。

「親父を・・・親父を探してくれ。早くしないと、死に目に会えなくなる」

「兄さん、それってどういう・・・」

「説明は後だ！今は親父を手分けして探すぞ！」

その言葉と同時に3人は散り、探し始めた。

+++++

刹那は王の間の天井を探していた。結晶化を使って肉体の強化を行い、大剣で天井を斬って穴を開け、そこから入って探していた。リリアからあらかじめ借りていたランプを使って辺りを照らし、ほこり臭い床からくもの巣の張った天井まで、隅々まで探した。

「国王さ〜ん。居たら返事してくれえ〜」

大声で叫んでみるものの、返事はまったくない。

早く探し出さなければ国王の死に目に会えず、レオやリリアが悲しんでしまう。恩人が悲しむ姿、それだけは絶対に見たくなかった。自分の無力さに下唇を噛むレオ、悲しみに暮れるリリア。想像しただけで悲しくなってくる。絶対に探さなければいけない。

「ここには居ないな」

隅々まで丁寧に探し、いないと判断した刹那は一旦下に降りることにした。もしかしたらすでにレオたちが見つけ出しているかもしれない。

そう信じて刹那はレオ達がいる王の間に戻っていった。

+++++

リリアは王の間の壁を調べていた。もしかしたら隠し部屋があった。そこに国王が居るかもしれないからだ。調べる方法は手で叩き、軽い音がしたらそこが隠し部屋、というものだった。

入口の扉の横から始まり、叩いては一步ずれまた叩く。この方法で

王の間の壁は調べられたが、残念なことにとどの壁も重い石音しか帰ってこなかった。

「どこなの、お父さん……」

リリアの不安は表情にまで出ていた。

生まれてすぐに天国に旅立った母親の代わりに、男手一つで育ててきてくれた大事な父親の死に目に会えないかもしれない。

リリアの不安は表情にまで出ていた。確かな焦りの色。いつも桃色の頬も少し青白くなっており、額には汗がにじみ出ていた。

「隠し部屋は、ないみたい」

もしかしたら刹那やレオがもう見つけているかもしれない。そう信じてリリアはレオのもとに戻っていた。

++++

レオは王の間の床を調べていた。ひよつとしたら地下室があるかもしれないからだ。

王の間の端から端まで歩いて調べてみたが、どうも空洞らしき音はしない。

レオはすさまじくあせっていた。あと数分、いや5分で父親が死ぬかもしれないのだ。探し始めてからもう5分を切っている。

「くそっ、見つからない。どこだ、親父。」

床に国王はいないと判断したレオは刹那とリリアの報告を待つことにした。

広い王の間の端から端まできっちり調べてないのだから、二人の

報告を待つしかない。

「兄さん……」

そう言って駆け寄ってきたのは顔を青白くしたりリアだった。

「どうだった？」

「だめ、隠し部屋なんてない。」

「そうか……」

リアの調べた壁がだめなのならば、後は刹那の調べた天井しかなかった。

と、上から人が落ちてきた。否降りてきた。刹那だ。

「どうだった？」

緊迫と期待が辺りを包む。が、刹那は首を横に振り、

「だめだ。国王どころか生き物一匹いない」

絶望となる言葉を言った。

天井、壁、床、これらにないとすれば、一体国王はどこに行ったのだろう。

「くそっ!!!」

いつもなら頭を働かせどこにいるかを予想するはずなのに、レオは近くにあった玉座を蹴り飛ばした。普段冷静なレオも、見てはいら

れないほど取り乱していた。

玉座は5メートルほど飛び、ガタンガタンと音を立て床に転がった。

「あれ？」

そう言ったのはリリア。

レオの蹴り飛ばした玉座の下に穴、というより地下へと続く通路があった。レオの探していたところは床のみだったため、玉座の下まで調べてはいなかったのだ。

「ここ、だったのか」

レオは安堵のため息をついた。刹那もリリアも一安心したようだったが、そうしている場合ではない。一刻も早く進んで国王を探さなければ。

刹那とリリアは地下に進もうとするが、レオに手で制された。

「兄さん？」

「レオ？」

「畏かもしれない。ここからは俺一人で行く」

言われてみればそうだった。ここに入入りしていたのはシャドウだけ。他の人間が入らないようになにか畏を仕掛けている可能性がないとは言いきれない。

「行ってくる。絶対ついてくるなよ」

リリアは何か言いたそうな顔をしていたが、今は構っている場合で

はない。レオは刹那の持っていたランプを奪うようにして取り、地下へと続くはしごに手をかけするすると降りていった。

+++++

地下の通路にかかっているはしごを使って一番下まで降りたレオは、国王を探すためランプをかざした。地下の通路はこの城に潜入するときに通ったじめじめした通路に似ていて、たんに床に水たまりがなく、じめじめしていないという点以外はまったく同じ作りだった。暗闇をランプの光が照らし、歩きやすくなった道を注意深く歩く。地下通路独特の冷たい空気と暗闇の怖さはなんとも言えないものがあった。一歩進むたびに辺りを見回し、さらに進む。時間が迫るにつれてレオの焦りは確かなものになっていく。

どこまで続くんだよこれ

城で育ち、いたる所の隠し通路や隠し部屋を探し当ててきたレオだが、さすがに王の間のこの地下通路までは発見できてはいなかった。というよりは探すことができなかった。理由として挙げられるのは、たんに怒られるからである。神聖である王の間なのだから当然なのだが。

それゆえ、どのくらいの長さなのか、奥に何があるのかなどわかるわけがなかった。

へまずいな、少し急ぐか

国王が一番奥にいる可能性が高いと判断したレオは走ることにした。もともと歩いている暇などなかったのである。

地下の空気が顔に当たりながらもレオは走った。父親のために精一杯走る。

走りながら気がついたことは、足元にあまりほこりがたまっていなかったことだった。シャドウがこの通路を使っていたというのは明白だった。

しばらくして、少し広い部屋にたどり着いた。どうやらここが最深部らしい。

着いたと同時にレオは辺り一面にランプの光をかざす。くもの巣のかかった古びたタンス。汚れた床、傷だらけの机、そして、

「親父！！！！」

横たわる人。ひどい格好だった。国王の着ていた服はところどころ切れており、一目で死にかけていることがわかった。

レオはすぐさま駆け寄り父親の体を抱き起こす。体は人としての温かさを失っており、顔は青白かった。呼吸はしているものの、虫の息だった。

「親父！しつかりしろ！！！」

レオは両腕で国王を揺り動かす。シャドウから受けた拳の痛みはすでに忘れていた。

閉じていたまぶたが開き、力いっぱい呼吸している口から言葉を搾り出す。

「レ……レオ……」

本当に微かな声だった。死にかけている者の声。

「待ってる、今リリアを呼んでくるから！」

応急処置の心得があるリリアを呼んでくれれば国王が助かるかもしれない。

そつと国王を床に寝かせると、レオはもと来た道に戻っていきこうとした。だが、

「親父!？」

ズボンの端をととも死にかけている者とは思えない力で捕まえ、レオを行かせないようにした。

「いい……もう助からない……」

「何言ってるんだ親父! まだわからないだろ!」

「いや、わかる。俺の体のことは俺が良く知ってる。それよりも、死ぬ前に話しておかなければならないことがある」

国王の言葉が耳に入ると、レオはさすがに諦めたのか国王の近くに寄り、聞き取れないくらい小さな声に耳を傾けた。

「お前が二十歳になったら言おうと思ってたんだ。よく聞け、お前は俺の息子じゃない」

「!?!? じゃありリアも……」

「いや、リリアは正真正銘俺の娘だ。だからお前とリリアは本当の兄妹ではないんだ」

いきなりの事実、レオは内心かなり動揺していた。しかし、表面

は冷静を装っていないと国王が次のことを話せない。

「お前は昔話した俺の親友の息子だ」

「じゃあ、俺の本当の親父はどこにいるんだ？」

国王は苦しいのか、すぐには話さず一呼吸をした。話を一時区切られたレオはもどかしいのとじれつたという思いの二つにはさまれていた。

時間にしてほんの10秒程度、しかしレオにとっては一時間にも感じた国王の一呼吸が終わり、続きが話された。

「お前の本当の母親は、お前を産んですぐに死んでしまった。リリアのときと同じだったんだよ。でも、そんなときにお前の親父の『ゼロ』は俺に産まれたばかりのお前を俺に預けて他の世界、つまり異世界に旅立ってしまった。『すまない、俺は行かなければならぬ』の一言だけを残してな。行き先を聞いても決して答えてはくれなかった」

「じゃあ、俺の本当の親父は……」

「ああ、この世界にはいない。どこか他の世界にいる」

そう言ったとたん、国王の顔が一気に青白くなっていった。呼吸もだんだん弱まっていき、体力も尽きてきたようだった。

「おい！親父！しっかりしろよ！！まだリリアに会ってないだろ！！」

「レオ……ごめんな。俺がんばったんだけど……どうし

ても勝てなかった。俺の力が弱いせいで………たくさん
人の期待と命を奪ってしまった………」

「うるせえ!!! 遺言なんて聞きたくねえよ!!! 生きる! 生きて帰
つてみんなに事情を説明するんだよ!!!」

「魔力を吸収されてるときもな………ずっと………
お前とリリアのことを考えてた。ちゃんと飯食ってるかなとか……
……体は大丈夫かなとか………しっかり生きてるかなとか」

「親父!!! ふざけるのもいい加減にしろ!!! 怒るぞ!!!」

「それと………お前に渡しておくものがある」

そう言うと国王は懐に手を伸ばし、二丁の銃を取り出した。一つは
光を思わせる真っ白な銃、もう一つは闇を思わせる黒い銃。その二
つをレオに手渡した。

「なんだよ、これ?」

「これは………『神器』と呼ばれるものだ。この銃は………
………」

「違う!!! 俺はそんなこと聞いてるんじゃない!!! なんだよこ
れは!!! 形見なんてもらったってしょうがないだろ!!! いい加減
にしないと本当に」

「レオ!!!!!!」

国王が残された力を振り絞り一喝する。焦りと怒りではさまれてい

たレオの感情は吹き飛び、いつもの冷静さを取り戻した。

「まったく……最後まで世話……焼かせやがって……」

残り少ない体力をさらに減らした国王はもう死ぬ寸前だった。声も途切れ途切れになり、呼吸も本当に微かなものになっていった。

レオは覚悟した。もう父親は助からない、いまさらリアを呼びにいても間に合わない。ならば自分だけでもこの人の死を見届けよう、と。

ごそごそ、と懐をあさり手紙を取り出した国王はそれをレオに手渡す。受け取った際に触れた手は氷のように冷たかった。

「それを……跡で読め……。大
変……だったんだ……ぞ……。
。あいつ……の目を盗んで……これを……
書く……のは……」

もう何も言い返さなかった。もうじき聴けなくなる自分の義父の声を、今は心に刻みつけて起きたかった。

「最後に……リアに……」

言葉を言い終える前に、国王は静かに息を引き取った。顔はシャドウから受けた苦痛から開放されたためか、国王の死に顔は安らかだった。

自分の愛銃の代わりに国王から譲り受けた二丁の銃をホルスターに入れ、苦痛に耐えて書いた手紙をズボンのポケットに入れ、国王の遺体を背負った。あんなに大きく、偉大だった義父の体は驚くほど軽くなっていて、それがなんだか悲しかった。

しかし、レオは泣かなかった。今は泣けない、リリアのもとに帰るまでは絶対に。死に目に会わせてやれなかったリリアを差し置いて、自分だけ悲しむわけにはいかなかった。

もと来た暗い通路をレオは引き返す。背に義父の亡骸を乗せて。

通路の暗闇は、来たときよりも暗く感じた。

第21話 偽者編9

「お父さあぁん!!!」

亡骸を持って帰り、リリアは大声を上げて泣いた。冷たくなった父親の体にしがみつき、精一杯の悲しみに暮れる。

その姿を見ても、レオは何も言ってもやれなかった。自分の勝手な判断のせいでリリアを余計に悲しませてしまった。ひどい罪悪感がある。

落ち込むレオに刹那は近寄り、小さな声でレオに話しかけた。

「なあ、なんか言ってもやらなくてもいいのか？」

しかし刹那の声などまるで耳に入っていないように、レオは呆然と立ち尽くしていた。

レオには今、義父である国王の死の悲しみよりも、国王の實の娘であるリリアを死に目に会わせてやれなかった罪悪感の感情が渦巻いていた。

なぜあの時一緒に連れて行ってやらなかったのだろうか。時間をさかのぼることが可能であれば、迷わずリリアと一緒に連れて行くだろう。でも、それは叶うことなどない非現実的な話だ。

自分の勝手なリリアを思いやる気持ちのせいで、リリアの悲しみをより大きいものにしてしまった。いったい今までどれだけリリアを悲しませてきたのだろう。いっそ自分などいなくなったほうがリリアのためであったのではないのか？そうかもしれない。いやそうに決まっている。

そんなマイナス思考がレオの頭に巡っているのをよそに、刹那はいつまでたつても慰めないレオの代わりにリリアに近づき、震えているその肩に手をのせる。

「リリア、今は戦いが終わったことをみんなに知らせないといけないんじゃないか？」

刹那のその言葉がリリアの耳に入り、目にたまった涙を手でぬぐい立ち上がった。

「そうだよな。今はみんなに終わったことを伝えないとね」

えへへ、と笑みを浮かべ、レオのほうに近寄る。

「何ぼーっとしてるの兄さん。早く行こ？」

目を真つ赤にしたりリリアは、まだ暗いことを考えているレオの腕をつかみ、扉の方に引つ張っていった。

それがスイッチとなり、レオは我に返り悲しみを隠して笑っているリリアに言う。

「お、おい。引つ張んなって」

少し前に考えていたことはもう頭から消えていた。

++++

「お、おい。どうする？」

「どうするって言ったって、行くしかねえだろ」

「馬鹿！『王の広間』に入ったら死刑だぞ！」

「そんなこと言ってもあんなでかい音がしたんだぞ」

「そつだ、国王になにかあったら……」

兵士たちは轟音を聞きつけ、王の間へとつながる王の広間の前でたむろっていた。

城内から王の間に行くためには、その手前にある王の広間に入らなければならぬのである。しかし、兵士たちが入ってくるのを嫌ったシャドウは王の広間に入ってくる者を容赦せず処刑し、侵入を禁じた。

そのため、刹那たちが使った隠し通路は王の広間に通じていたため兵士には見つかることなく、レオが『アルテマ』を使って轟音を発生させたときも、処刑されることを恐れている兵士は入って来たくとも入って来れなかったのである。

扉の前でうろろしている兵士たちをよそに、問題となっている扉はきしむような音と共に開いた。レオが先頭に、次にリリア、最後に刹那といった並び方で3人は兵士たちの目の前に現れた。

「レ、レオ様だ！」

「なんでレオさんがこんなところに」

「くそつ、国王様はどうした!？」

「もうだめだあゝ、殺されちまう……」

動揺している兵士たちにレオは伝えた、先ほど起きた事実を。

「もう、戦いは終わった。親父は死んだ」

「それは、どういうことで……」

「あとで全部教える。今は停戦のことを皆に伝えないといけない。みんな、頼む」

最初に向けられていた恐れと殺意は一気になくなり、兵士たちは各方向へ散って城全体にレオの言葉を伝えた。もう戦いは終わりだ、国王が死んでしまった、と。

そのことはたちまち城全体に伝わり、たくさんの血が流れた戦いの終わりに城の人々は歓喜の声と、皆に愛され、尊敬されていた国王の死の悲しみの声、二つの声が上がった。

城の兵士たちのいざというときの動きはすばやく、何人かが馬の手綱を握りレオたちの拠点の城へそのことを伝えにいった。

時間短縮のため全力で馬の腹を蹴ったためあまり時間はかからず、国王の兵士たちはレオの城の門の見張りの兵士に会うことができた。もちろん最初は警戒されたが、武器を持っていないし、戦う者の目をしていなかった。なので国王の兵士はレオの城に無事入ることができた。

話を聞いた大臣はすぐさま移動を開始した。ただ国王の死をまだ知らない人々がパニックを起こすのを恐れた大臣はそのことを伝えず、戦いが終わったの一言だけ人々に伝え王国へと歩を進めた。

人々が全て王国に集まって最初にレオがしなければいけなかったのは事実を伝えることだった。国民全員を城に集め、皆の前でレオは語った。

王が変わってしまったのは別世界の人間がその姿を借りて国王に成りすましていた、その者をなんとか追い返すことに成功した、しかし姿を借りるためには魔力を吸収しなければならなかったため、魔力を全て奪われた王はそれが原因で死んでしまった（このことについて

は後にわかるだろう」。

全ての真実を聞かされた国民は驚き、そして悲しんだ。レオの言葉が終えるころには、その場はすすり泣きの声でいっぱいになっていた。誰もが国王の死を心のそこから悲しんでいた。

国の方針は後にまた話す、と最後言い残し、次にやらなければならぬことに取り掛かった。刹那とリリアを部屋に呼び、刹那の帰りのことについて話し合う。

「それで刹那、帰れる方法は検討がついているのか？」

「ああ、これが教えてくれる」

そう言つて刹那はふところから拳くらいの水晶を取り出した。相変わらず宝石のようだった。

「綺麗、なにそれ？」

「光を当てるとゲートの位置めがけて光が指すんだ」

「へえ、じゃあゲートに入れば刹那さん帰れるんだ」

にっこりと笑うリリア。どうやらゲートに入れば帰れると思つていいらしい。

「そういうわけじゃないんだけどな」

小声で言つたため、リリアには聞こえてはいなかった。純粹に信じているのに、わざわざそれをぶち壊すような真似はしたくなかった。

「なにせよ、ゲートに入るのは明日にしろ。今日は遅いからな」

「わかった。じゃあ遠慮なく」

外を見るともう月が空にあがっていた。まぶたも重くなってきた。

「じゃあ私も寝るね。おやすみ兄さん、刹那さん」

そう言い残すと、リリアは自分の部屋に戻っていった。

「さて、と。俺たちも寝るとするか」

「そうだな。明日は早めに出て行かないと」

二人は寢床についた。レオがろうそくの火を消し、部屋は真つ暗になる。

大きな騒動があつてから丸一日が過ぎて、さすがに疲れたのだろう。暗くなるなり刹那の寝息が聞こえてきた。

ふ、と笑い、レオも眠りについた。まぶたを閉じ、夢の中に入った。

+++++

「.....」

夢の中にいるはずだったのだ。飛び切り明るく、前日のいやなことをほんのわずかな時間でも忘れさせてくれる夢を。しかし、

「ぐおおおおおお、がああああああ」

「・・・・・・・・・・うるさい・・・・・・・・・・」

刹那のあまりのいびきのうるささに寝るに寝られなかった。

子どもの頃からだったのだ。疲れがピークに達すると、すさまじいくらいのいびきをかくのだ。何度母親をたたき起こしたかわからない。ひどいときは近所から苦情がきたものだ。

眠れないレオはとりあえず部屋から出た。起きているにしてもこんなうるさいところにはいたくない。

刹那が目を覚まさないうつくりとドアを開け、（大きな音で開けても起きるわけが無いのだが）レオは外に出る。

夜の城は少し不気味だった。やっぱり夜でも見張りはいいて、たいまつがゆらゆら揺れているのはあまり綺麗なものではなかった。

しかし、空を見上げてみると城の炎とは逆に、綺麗な星空が広がっていた。夜風も吹いていて気持ちの良い夜だった。

ふらふらとそこら辺を散歩してみる。暗いけどうっすら見える廊下、ろうそくで明るくなっている階段、ついにはある部屋のドアの前まで来てしまった。

「・・・・・・・・・・あ、来ちゃったか」

そこは紛れも無い、義父の死体がある部屋。

無意識のうちにここまで来た。明日にはもう姿が見れなくなる。だから今のうちにしっかりとそれを目に焼き付けておこう、というレオの中の感情がここまで足を運ばせていた。

そっとドアノブに手を置き、くるりと回してドアを開いた。この世界には通夜の習慣は無いらしく、棺桶に入って目を閉じている義父のそばには誰一人いなかった。

近寄れなければ姿は見えない。レオはゆっくり歩を進め、永眠している義父に近寄った。表情は最初見たときと同じ、安らいでいるよ

うな顔だった。

その姿を見てふと気がついた。

「そっすいえば、手紙もらってたっけ」

ズボンのポケットを探り、シャドウの目を盗み必死で書いた手紙を取り出す。封筒に入っているわけではなく、白い紙を2回折りたたんだだけの質素な手紙だった。

月明かりのある窓に向かってぺら、とめくり、義父の残した手紙、いや遺書を読み始める。

「この手紙を読んでは、俺はもうこの世にいないだろうな。レオ、多分お前が真つ先にこの手紙を読んでいるだろうと思ってお前宛に書いた。本当はリリア宛にも書きたかったんだが何よりも時間なくなてな。

まあ、前置きはこのくらいにしておこうか。実はレオ、お前は俺の息子ではない。昔話した俺の親友の息子なんだ。あいつはお前が生まれてすぐに別の世界に行きやがった。『すまない、俺は行かなければならない』の一言だけ残してな。

レオ、お前はお前の本当の父親を探すために異次元に旅立たないといけない。俺がいなくなつてからの国は大臣に任せればいい。もちろんリリアは連れて行くなよ、あいつには関係がないからな。

お前の父親の特徴を書いておく。あいつはリリアと同じで散弾銃、つまりショットガンの使い手なんだ。もちろんあいつのショットガンは結晶だ。普段は持ち歩いてはいない。それと、あいつの結晶の能力は『弾自動装填』だ。なくなつたら自動に弾を補充するっていう能力だ。顔もお前と似ているからすぐわかるだろう。

あとは、俺のふところに入ってる銃のことだな。餞別にくれてやるよ。それは神器っていったら、唯一結晶に対抗できる武器だ。結晶からしてみれば鉄なんて棒切れ、紙切れに過ぎないからな。

神器は全部で12ある。神器はそれぞれ対になっていて、武器が10、防具が2という割合でできている。お前に渡す二丁の銃は『神爆銃』^{ばくじゅう}っていう名前だ。黒い方が闇、白い方が光をつかさどっているらしい。

まあ、こんなもんかな。お前に伝えることは。あ、忘れてた。

お前の父親の名前は、ゼロ・ヴァルヴァット、だ。肝心なことを伝えるのを忘れてたぜ。

今度こそ全部伝え終わつたな。それじゃ、リリアによろしくな」

紙切れいっぱい書いた小さな文字を読み終え、レオはため息をついた。

「何が全部伝え終わつた、だ。肝心な旅立ち方が書いてないじゃないか。」

まあいいか、と再びため息をついた。異世界を飛び回っている刹那という客人在るのだから。

「これ何かの縁かな」

そう思つて苦笑する。一緒に行かせてくれなんて言つたらどういう顔をするだろう、想像しにくいこの上なしである。

「あれ？兄さん？」

不意に後ろから声がかかった。振り向くとランプを片手にリリアが立っていた。ドアは開け放していたため、音はしなかった。

「なにしてるの？こんな夜中に」

「ああ、刹那のいびきがあんまりうるさくてな。散歩ついでに親父の顔を見に来たんだよ」

「そうね。明日でもうお父さんの顔見られなくなっちゃうもんね」

顔は笑っているものの、その笑みはなんだか悲しかった。リリアはゆっくり父親に近づき、その安らかな顔を見た。

「もう、喋らないんだね」

「ああ、もう喋らない」

「もう、一緒にごはんも食べられないんだよね」

「ああ、もう一緒に飯も食えない」

「もう、一緒に……ううう、ううう……」

空いていたもう一つの手で目を隠した。嗚咽を聞いたレオはなんともいえない気持ちだった。リリアのこんな姿を見るのは嫌だった。そっとリリアの後ろに立ち、優しく、しっかりと抱く。今はただ泣いているリリアを包んでやりたかった。リリアも拒むことはなく、レオに抱かれたまま悲しみに浸っていた。

++++

「くすん……くすん……」

「だいぶ落ち着いたか？」

「うん、もう大丈夫」

「そうか」

落ち着いたのを確認したレオはまわしていた手を解いた。リリアは少し残念そうな顔をしたが、レオは見て見ぬふりをした。そつだ、とレオは手に持っていた手紙をリリアに手渡した。リリアはきよとんとしてレオの顔をのぞく。

「何この紙？」

「親父の遺書だ。俺宛だけど、お前にも見せないといけなくてな」

へえ、とリリアは手紙を拡げ読み始める。レオは事実を知ったりリアを見るのが怖いのか部屋を出ようとした。

「最初に言っておく。お前は来るな」

「え？」

何のことだかわからないリリアは思わず声をあげた。構うことなくレオは部屋から出た。何も知らないリリアを残して。レオがいなくなり、手持った手紙に目を通す。最初は悲しい表情をしていたが、徐々に驚きの顔になっていった。

「それか。兄さん……」

全てを知ったりリアはぼー、としていた。おそらく明日刹那と共に

異世界に旅立つのだろう。自分が行くと言っても絶対に許してはくれないだろう。だけど、

「私も行きたい」

そう思ったりリアは部屋を飛び出した。夜の通路を走り、自分の部屋へと帰っていった。

余談だが、レオは刹那のいびきで一睡もできなかった。

++++

翌朝、刹那はのんきに朝食を食らっていた。目の下にくまができているレオを差し置いて。

「どうしたんだレオ？そんな顔して」

「お前のいびきのせいだつての」

すこし皮肉っぽく刹那に言う。言われた刹那は少し申し訳なさそうに頭をかき、「やっぱりかあ」と一言漏らした。その言い方からだと自分で自覚はしているらしい。

レオも刹那の向かいの席に腰を下ろすと皿の上にあったパンに手を伸ばした。刹那との中間に置いてあるジャムの入ったピンを手に取り、スプーンですくってパンにつけた。

「今日でお別れだな」

すこし寂しそうに刹那がレオに言う。まだレオのひそかな決意をし

らない刹那は紅茶に口をつけた。口の中のパンを飲み込んでから刹那にさらっと告げる。

「ああ、そのことなんだけどな。俺も一緒に行くから」

「は？」

何気なく言ったレオの言葉が信じられず、疑問符を浮かべる。

事情を知らない刹那にレオは、国王は自分の本当の父ではないということ、本当の父親は別の世界にいるということ、全て刹那に告げた。

刹那は驚いた顔をして聞いていた。しかし聞き終わると笑ってレオに言った。

「じゃあ改めてよろしくだな」

「ああ、そうだな」

「ところで、リリアはどうするんだ？」

そう言った瞬間、レオは黙ってしまった。刹那には理由がわかっていた。ここに置いていくつもりなのだろう。

そのまま無言の食事が続き、皿の上のパンを全てたいらげた刹那は席を立った。

「よし、それじゃあ俺ゲートの位置を確認してくるよ。レオはどうするの？」

「俺も準備っていうものがあるからな。荷物をまとめてるよ」

わかった、と返事をし、刹那は食堂を出て行った。

刹那の姿を見届けた後、レオはリアのことを考えていた。義父の残した遺書にも連れて行くなと書かれていたし、連れて行くべきではない、自分でもわかってる。しかし、自分のどこかで連れて行きたいと思っっている自分がいた。一緒にいたい、でもリアのことを考えればここにいてもらうのが一番だ。

そう自らに言い聞かせる。あいつを危険な目に合わせるわけにはいかない。

「よう」

席を立ち、自分の部屋に向かう。まずは準備だ。その後に大臣にこの国のことを頼もう。あとリアのことも。さすがに刹那の事情に合わせるわけだから義父の葬儀には立ち会えない。おそらく、葬儀の前に出ることになるだろう。

そう考えながら自分の部屋に到着したレオは色々荷物をまとめた。といってもあまり多くの荷物は持たない。邪魔になるだけだから。換えの服と非常食、応急処置の道具が入っている救急箱。これだけあれば充分だった。これらをバッグに詰め、そして背負う。

「次は、服装か。さすがにこれじゃな」

もう用のない部屋を後にしてレオは自分の服装を見る。半袖のシャツにズボン、本当に軽装だった。これでは命がいくつあっても足りない。

そう判断したレオは武具庫へと足を運んだ。扉を開けると様々な防具、武器が立てかけられていた。鉄でできた鎧、両刃の剣、重すぎる鎧はかえって役にたたないし、武器も義父の形見である『神爆銃』があるので必要ない。

「確か奥のほうに……お、あった」

奥には一昨日リリアに持って行ってやった胸当てと同じタイプのものがズラリと並んでいた。胸当てだけなら鎧よりも軽くなるし、急所である心臓を守ってくれる。必要最低限の装備以外は重くて邪魔なだけ。

大きいサイズから順番に見て回る。最初に手に取った胸当てには驚かされた。軽く幅が1メートルくらいある。相撲取りがやっとこ着れそうな一品であった。

その後も異常なサイズに驚かされたが、どうにか自分ピッタリの胸当てを見つけた。少し喜んだ顔でそれを手に取るうとする。たくさんある中でやっと見つけたのだから喜ぶのは当然だ。

念願の胸当てを手に取ったその瞬間、ぼろりと胸当てが崩れ落ちた。

「な、なんで崩れるんだよ」

あわてて崩れた胸当てを拾い、理由を確かめる。

おかしい。錆びて崩れたのだったらまだわかるが、どこも錆びてない。ために外の方をコンコンと手で叩いてみるが綺麗な鉄の音しか返ってこない。

絶対におかしい。今度は中の方を叩いてみようと思ち上げる。

「なんだこれ？」

胸当ての中の方に文字が書いてある小さな紙切れが貼ってあることに気付く。ペラ、と紙をはがし、字を読んでみる。

「私を置いていく兄さんの胸当てなんて壊してやる！」

見てやっと納得した。これは自然に崩れたわけじゃなく、置いてい

くことに怒ったりリアが壊したのだと。

原因はわかったものの、防具はどうすればいいのだろう。と、レオはため息をついた。小さい胸当ては窮屈だし、大きい胸当ては動いているときに動いてしまつて邪魔だ。

うくん、と首をかしげ、そして考える……。のをやめた。自分の都合で刹那を待たせるわけにはいかない。少々心もとないがこのかつこうで行こう。

そう頭の中でまとめ、武具庫から出た。次にやることはこの国を大臣に任せると伝えることだった。さすがに反対されるだろうが、義父の遺書で行かなければならないとも言えはOKしてくれるだろう。

歩き出したレオは廊下を通り、階段を駆け下り、王の間の大臣のところまで歩いていく。場内はもうにぎわつていて、武器の片付けやら、国民の人数確認やらで人がたくさんいた。まだ安定していないこの国を大臣に押し付けるのはさすがに悪い気がしたが、刹那と一緒にいかないとゲートの場所がわからないので、この期を逃すわけにはいかない。

そうこう考えているうちに王の広間についてしまった。

「あ、レオ様。おはようございます」

「おはようございます、レオさん」

門番というか、見張りの兵士のあいさつがレオの耳に入り、反射的に言葉を返す。

「ああ、おはよう」

二人の見張りはさつと後ろを向くと扉を開き、ぎぎぎと音がする扉にレオ迎えいれる。

「や、どござ」

そういうとレオは広間に入っていった。相変わらずそこは広くて、これからまたしばらく見れなくなると思ったら少し寂しくなった。広間をぬけ、王の間にたどり着いたレオは扉を開ける。ここもやっぱりぎぎぎという音がして、いかに年季が入っているかということを見せてくれた。

王の間には大臣、それから3人ほどの上級の兵士、それからむくれたりリアがいた。

ふまいったな……… }

伝えるにしても、リアがいるのではやりづらい。それもかなり。大臣に伝えているときにきっ！とにらまれたのではたまったものではない。

はあと深いため息をつき、大臣に歩み寄る。大臣は話に夢中で気付いていないようだ。リアは真っ先に気がつきこつちを見て、すぐにそらした。ははは、と心の中で苦笑した。大臣たちの話は終わったよう。3人の上級兵士は軽くあいさつをし、そのまま出ていった。

それがきっかけだったのか、大臣はやっとレオの存在に気付いたようだった。

「ああ、レオ様。国王の葬儀のことについて話し合っていたんですが、どうも場所の配置が決まらなくてですねえ………」

長年見てきたレオの表情が曇っていた。言つのをためらっていて、しかし伝えようと口のなかでもごもごしている。視線は自分、それとリア。ちらちらリアを見ては視線を戻し、再びリアに視線

をやる。

そしていよいよ決意したのか、レオは口を開いた。

「あのな、爺・・・・・・・・」

「わかってますよ、言わなくても。刹那さんと行くんですよね？」

言おうと散々悩んでいたのにあっけなくばれてしまっていた。自分は言った記憶はないのだが・・・・・・・・

「あー！」

気がついてリリアのほうを見る。刹那と行くという事を知っているのは自分とリリアだけ。自分が大臣に言っていないとすればリリアしかない。

レオと目が合った瞬間、少し赤くなってリリアはぶいと顔をそらしてしまった。その様子をふふと笑って大臣は話を続ける。

「飲み込みが早いことは良いことです。わかっている通り、リリア様が私に教えてくれたんです。兄さんが刹那さんで行っちゃうからって。理由を聞いたら父親を探しに行くっていうから驚きましたよ。てっきり本当の親子だと思っていましたからね」

笑いながら言う大臣を見てすこしレオは安心した。とりあえず話しがこじれることはない。

「とりあえず、国王様には悪いですが、刹那さんを待たせるわけには行かないでしょう。ただし顔だけは見てからにしてください。装備の方も、国王様のお下がりがありますので大丈夫でしょう」

お下がりというのはたぶん昔の賞金稼ぎのときのものだろう。
国のことも葬儀のことも装備のことも整った。あとはリリアのこと
だけだった。

「たぶんわかってくれるよな」

手紙には連れて行くなって書いてたし、言い方は冷たいが異世界に
旅に出ることはリリアには関係ない。大臣も国王の娘、言ってみれ
ば跡継ぎとなるリリアを危険な目に合わせるわけにはいかないはず。
話しを切り出そうとしたレオだったが、その前に大臣が口を開いた。

「あ、そうそう。この国の指揮を私に任せたいのであればリリア様
は連れて行ってくださいな。国王の娘であるリリア様がいたら誰も
私の言うことなんて聞かないですからね」

「!?!」

「!?!」

驚いたのはレオだけではなかった。大臣に頼んでいないことを言わ
れたリリアのほうも驚いていた。

「で、でも、親父の遺言じゃ……………」

「別に構わないですよ、置いていっても。そのかわり、私は政治等
には関わりませんのであしからず」

汚い、実に汚い手だった。一人で行けば国は安定する確率はがくつ
と落ちる。かといってリリアを危険な目にあわせるわけにもいかな
い。もちろん遺言のことも含めてだが。

「さあ、どうします？連れて行きます？置いていきます？」

少しいたずらに笑みを浮かべ、レオに問い詰める。レオはどうすればいいのかわからず、ただ困惑していた。こんなレオを見るのはずいぶん久しぶりだ。

「何も難しいことではないでしょう。リリア様を連れて行って、あなたが守れば良いだけの話なのですから」

言うとおりであった。自分が守ってやればいいことなのだ。リリアに危害を加えるやつから守ってやればいいだけの話。だが、

「それだけの力が俺にあるのか？」

自分の技量に自信がない。いや、ついこの間までは確かにあった。

義父から伝授してもらった知恵、戦闘。自分の戦い方は義父の戦い方だった。自身がないはずがない。

でも、リリアを守る、と聞いただけで自信がいつきに崩れてしまった。もし、もし敵の攻撃を防ぎきれず、リリアに傷を負わせてしまったら。きっと自分は壊れてしまうだろう、リリアの傷を見ながら悲しみと悔しさと怒りで自我が崩壊するだろう。それが、怖い。

考えている兄を見て、リリアはレオのほうに歩み寄った。

冷静で、センスもある。優しいし、頼れる人。でも、知っているのはそれだけじゃない。少し涙もろくて、自分のことになると頭に血がのぼってしまう。そんな人の考えなど、顔を見ただけで一発でわかる。

いま兄は不安の淵に立たされている。暗く落ち込んだ顔をしているのが何よりの証拠だった。おそらくは自分のことだろう、大臣の言葉で表情が変わったのだから間違いない。

近寄った兄の手を取った。

「!?!」

急につかまれたことで正気に戻ったレオは、手を握っているリリアの顔を見る。おそらく、いままでで一番強い顔だった。ぎゅっと強く握るリリアはレオに言った。

「大丈夫、兄さんは世界一のナイトだから。きつと守ってくれるよ。えへへと、だらしく笑う。先ほどの強い表情はどこへ行ってしまったのか。」

「当たり前だろ？俺に勝てるやつなんていないさ」

どうやらリリアの笑みには不安を取り除く効果があるらしい。笑顔のリリアを見てるとそんな気がしてならかった。

+++++

その場がひとまず落ち着いたところで大臣は国王の賞金稼ぎのころに身につけていた装備を持ってきた。ざっとみて、青みのかかったマント、少しサイズの大きい黒いズボン、それと赤いヘアバンド。胸当て、皮製のホルスター、以上の5つ。

「こんなもんですかね。ホルスター以外は全てミスリルが織り込まれています。鉄でできている武器であれば傷さえつけられないですよっね」

「ああ、ありがとう。ありがたく使わせてもらつよ」

言うなり、レオはさっそく防具を装着し始めた。胸当てはつけたことがあるが、ヘアバンドだのマントだの、一度も装備したときのないものもあつた。必要最低限の防具しかつけないレオにとっては貴重な経験だつた。

長い前髪を押さえるヘアバンドをつけ終わり、最後にマントを羽織る。その姿は騎士というよりも旅人みたいな感じだつた。まあこれからその旅人になるのだが。

「似合つてますよ。とても良く」

につこり微笑みながら大臣はレオの姿を素直に褒めた。レオはその言葉に少し顔を赤らめ、それを隠すように自分の頭を掻いた。

「あの……私のは？」

はつとしたようにリリアのほうを見る。レオの装備は国王のものでよかつたものの、リリアにはお下がりの装備がない。さすがに私服のまま旅をさせるわけにはいかない。

はあとため息をつき、自分のマントをリリアに渡そうとするレオの手を大臣の手が止めた。

少し驚いた表情で大臣の方を見る。何を考えているのか、にやにやと笑っている。

「そうですね。リリア様にはこれを差し上げましょう」

そう言うと、大臣は自らのローブを脱ぎ、リリアに手渡した。手渡された本人のリリアはどうすればいいのかわからず、きょとんとし

た顔で大臣を見ている。

「そのローブにもミスリルが織り込まれています。戦闘には参加しないのですから、身を隠していればそれだけでも何とかなるでしょう」

大臣の言葉が終わったあと、すぐさまリリアは大臣のローブを身につけた。少し大きかったが、あまり気にするほどでもない。大臣の体も大きいわけではないのだ。

身につけたリリアは腰に両手をやり、どうだ！のポーズをレオに見せてふふふと笑う。

「似合う、兄さん？」

「……」

「あゝ、かわいい妹の姿に声も出ないってこと〜？」

「馬鹿言っていないでとっとと行くぞ。刹那が待ってる」

そう言うと、扉の方に向かって歩き出した。異世界への旅立ちとなるその扉めがけて。

「あゝ、待ってよ〜」

慌ててレオの後を追うリリアだがその足はすぐに止まった。レオが大臣のほうを向いていたからだ。

いままで散々迷惑をかけてきた一番信頼できる側近に、言わなければならぬ言葉があった。それを察知したリリアもレオの隣に並ぶ。

「いつてきます」

「いつてくるね」

不意のことに少し意表を突かれたが、すぐに顔が緩み笑顔になった。

「いつてらっしゃいませ。二人とも」

++++

ドアを抜けた先に刹那がいた。どうやらゲートの発見が終わったらしい。

「待たせた」

「行こ、刹那さん」

リリアは連れて行かないと言っていないなかったか、と口には出さず心の中でつぶやきレオのほうを見た。刹那に見られたレオは目線をそらし、頬を掻いていた。

最後にはリリアもついてくるだろうと刹那は予想していた。城に潜入する際も結局はリリアも連れて行ったし、今度もなんとかリリアか大臣にうまく言いくるめられるだろうと、なんとなくだがわかっていた。

まあいいかと、レオたちにゲートに場所を告げる。

「ゲートは屋上にあつたよ。早く行こう」

「ああ、悪いがもう少し待ってくれないか？親父の顔を見ておきたいんだ」

そういえば葬儀は今日だったのだ。だがタイミングが悪いことに、今日自分が行くのでレオとリリアは国王の葬儀には出られないのだ。

「ごめん、よりによって今日で……」

「いいからいいから。刹那さんも来てくれるよね」

落ち込んだような暗い顔をした刹那にリリアは笑いかけた。

刹那はこくりとうなづくことで了承した。

一同は国王の遺体のある部屋に向かった。廊下から見える中庭の兵士や国民は葬儀の準備やなにやらで相変わらず動き回っていた。

その廊下を通り過ぎ、階段に差し掛かる。最初にいた城の階段とは違ってほこりが落ちておらず、誰かが掃除したのか清潔に保たれていた。

やがて、ある部屋にたどり着いた。国王の遺体がある部屋だ。レオはドアノブに手をかけ、内開きのドアを開けた。レオを先頭に部屋に入った3人は国王の元へと近づく。国王は死んだときと変わりなく、苦しみから解放された安らかな顔をしていた。

「親父、行ってくるよ」

「お父さん。遺言に背いちゃうけど、兄さんと一緒に行くね」

しばらく国王の顔を見て、レオとリリアはつぶやいた。それからしばらく目を瞑り、父との思い出を振り返った。

「よし、行こう」

レオが立ち上がるのと同じく、リリアも立ち上がった。

「もういいのか？まだいいよ」

「いや、大丈夫だ。あんまりこうしてるといつまでも行けなくなるからな」

「そうだね。行こ」

3人はドアのほうに歩いていき、部屋を出る。最後に出るリリアは出る際に少しだけ父親の方を振り返り、ドアを閉めた。

++++

「ここでいいんだな？」

「ああ、確かに光が指してる。間違いないよ」

屋上に着き、刹那がふところから出した水晶の光が空を指していた。光は空中で途切れていた。途切れ始めているところがおそらくゲートになっているのだろう。

「これで帰れるね。刹那さん」

相変わらず笑みを浮かべて、リリアは刹那方を見た。

レオはこのゲートが刹那の世界につながっているとは限らないということを知っていたのだが、リリアはそれを知らず本当にゲートを

通れば刹那の世界に行けると信じていたのだ。

「あの……リリア、このゲートを通れば帰れるわけじゃないんだけど……」

「え、刹那さんの世界に行けないの？」

「たぶん、ね……」

それを聞くと、リリアはがっくりとうなだれ、つまんない、と言漏らした。

純粹に信じていたリリアに事実を伝えるのは少々気が引けたが、ゲートの先で絶望させるよりはまだましだろう。

刹那はゲートの位置を記憶し、水晶をしまった。いよいよこの世界から旅立つときが来たのだ。頭の中で黒い霧をイメージし、次に大剣をイメージする。やり方はもう覚えていた。刹那の体から出た黒い霧は大剣の形となり、刹那の手に握られる。記憶していたゲートの位置めがけて刹那は大剣を振り下ろした。

とたん、ごごごと音と共に空間に亀裂が入り、空間に穴が開いた。

「さ、早く入ってくれ」

刹那の言葉を聞いた二人はゲートの中に飛び込んだ。刹那もその後続く。

3人が入り込んだゲートは、何事もなかったかのように閉じた。

+++++

「もどつたぜ」

「おかえり、シャドウ」

片腕をなくしたシャドウが入ってきたのは薄暗い部屋。大きさはだいたい体育館くらいで、奥の方に巨大なカプセルと成人する前くらいの男がいた。

「どうしたのその腕！早く治療しないと！」

男はシャドウの腕を見るとすぐさま駆け寄ってきた。しかし、シャドウは残った手で駆け寄ってくる男を制した。

「おめえは部下の心配なんざしなくていい。腕くらい修復室ですぐ治る。それより他のやつらは？」

男は納得のいかないような顔をしていたが、口を開きシャドウの質問に答える。

「みんな中心世界にいつて『罨』を張ってるよ。とりあえず『捕獲』じゃなくて『確認』だけで帰ってくるように言ってるけど」

さつきよりも少しきつめの目をして、男はシャドウに言った。

「あまり無理はしないでって言うてるでしょ。一人でも欠けたら駄目なんだから」

ふん、と鼻で笑い、シャドウは部屋の扉へと歩いていった。

「おめえのためならなんでもやってやらあ。死ぬようなことでもな」

「シャドウ!!」

出て行くときに言った言葉に、男はシャドウの名前を叫んだ。シャドウは振り返りもせず、その部屋から出て行った。

第21話 偽者編9（後書き）

偽者編、終了です。

いかがでしたでしょうか？何も知らず、ただ戦いを繰り返していた
哀れな世界のお話は？

さて、刹那にも仲間ができましたね。レオ・ヴァルヴァット、リリ
ア・ヴィンスタール。

それと同時に出てきた神の使いを名乗る男、シャドウ。

この人物達は、これから刹那の運命にどう関連してくるのか……

さて、次回の物語は女兵士長編です。どうか、お楽しみを。

第22話 女兵士長編1

刹那、レオ、リリアの3人はゲートを通っていた。一人で通った感じとはまた違うなんというか落ち着くような感じで、それがなんだから落ち着いた。

「なんだか変な感じがするね」

ゲートの中をきよろきよろと見渡してリリアは言葉を漏らした。今までは（といっても二回きりだが）ゲートの中をゆっくりと見渡すということをしなかった刹那はそんなリリアの言葉につられてゆっくりと見てみた。まわりは七色というか、虹色というか、そんなたくさんの色が混じった感じで、あまりじっと見ていると引き込まれそうな感じだった。

「刹那、これっていつ頃に到着するんだ？」

「何言ってるんだよ。まだ入って20秒ぐらいしか経ってないだろ」
レオが口を開いたかと思うと、いつも冷静なレオには珍しいせつかななことを聞いてきたため、刹那は一瞬意表を突かれてしまった。

「そうだな・・・一分ぐらいじゃないかな。正確な時間はよくわからない」

レオ達の世界に来たときに通ったゲートはだいたい一分ほど通ったような気がする。と、言っても計ったわけでもなく、ただなんとなく感じたというだけの話であるが。

「あ、光が見えてきたよ」

そうこう言っている間に光が見えてきた。刹那の世界か、はたまた違う世界なのか、その時点ではまだわからない。

徐々に光に近づいていき、3人の体は光に包まれた。3人もまぶしさに目を閉じた。あたりの光が消えたことを察した3人は、ゆっくりとあたりを見渡した。周りは草木の生えている公園のような場所だった。しかしそんな周りの景色よりもひととき目立つものに飛び込んできた。

「なんだ、あれ。城か。俺たちの城よりもでかいな」

白い城壁でとがった屋根、中世のお姫様が住んでいそうな感じの城だった。ただし、その城はやたらと大きく、明らかに東京ドームの広さの10倍はあった。

「わあ、すごいなあ。あんな城に住んでみたいな」

そのあまりに見事な情景にリアは感想を一言。ただし、言った直後にレオに突っ込みを食らったが・・・

「いったい。何するのよ兄さん」

「んなこと言ってる場合じゃないだろ。刹那、どうする？しばらく滞在するか？それとも次の世界に行くか？」

レオが城に見入っている刹那に声をかけた。刹那はレオのほうを向き、微笑んだ。

「レオの父さん探さないといけないんだろ？ここに滞在しよう」

「いいのか？おまえも家に帰りたいんじゃないのか？」

「いいよ別に。せつかく来た世界だし、ゆっくり見てみたいよ。ここは争いとかはなさそうだしさ」

刹那の気遣いに感謝しながら、「そうか」と一言言った。

「じゃあ行ってみよう。いけばレオの父さんの手掛かりが見つかるかもしれない」

刹那の言葉と共に、3人は城のあるほうに歩き出した。

大きいと感じていた城は近づくにつれ大きくなっていき、やがて城門の前までたどり着いた。

「あれ？」

城門の前に来て疑問符を浮かべたのはリリア。

なぜかという、城門の扉が開いていたからだ。普通城門は外敵を城に侵入させないために閉じているものなのに、この世界の城の城門はまるで入ってくださいと言っているかのようにはじめのほうまで扉を開けていた。

おかしいと思ったのは刹那以外の二人だった。簡単には破れなさそうな城門をわざわざ開けておく意図が理解できなかった。

「どうしたんだ二人とも？」

そんなことに何一つ疑問を抱かない刹那は、なにやら考え込んでいるレオとリリアに問いかけた。

「いや、なんでもない。行こう。」

そう言つて、3人は城の中へと足を踏み入れた。

「うわあゝ。すげえ・・・」

感嘆の声を刹那は上げた。城の中に町があったのだ。城の中なのに明るいのには上のほうに窓があるからで、それ以外はいたって普通の町だった。しかも、その奥には階段があり、どうやらその上がこの城の主がいるらしい。

「どおりで大きいわけだな」

町を歩く通行人、店の前で大きな声で宣伝している店員、隣同士仲良く歩いている恋人、手をつないで今晚のおかずについて話している親子。なんだか見ていてほっとした。

とりあえず酒場に行こうとレオが言った。RPGゲームでも酒場での情報収集は基本である。足を進め、どこかに酒場はないかと探してまわる。この町にはたくさんのお店があつてなかなかそんな雰囲気のお店は見つからなかった。

そういえば酒場というのは夜から開くものではなかったか？と刹那は心の中で投げかけてみる。

「あ、あれじゃない？」

リリアが指を刺したのは少し古びた建物だった。その建物の扉は少し日焼けをした茶色の木で出来た扉で、上のほうにはビールジョッキによく似たグラスの看板があつた。

「入ってみるか」

迷わず足を運んでみた。レオが扉に手をかけると扉はぎいと音をたて開いた。

中はリリアの思ったとおり、酒場だった。木製の丸いテーブルに酒を置きにぎやかに話し合っている男たちは酒の飲みすぎで頬を真っ赤にしていた。

「ちょっと待ってる」

そう言うと、レオはカウンターでコップを磨いているバーテンの方に向かっていき、話しかける。レオの話が全部聞いたあと、バーテンは首を横に振った。

少し残念そうな顔をしてレオは戻ってきた。

「やっぱり最初から見つかるわけないか。情報0だよ」

言い終えるとははは、と苦笑いをした。予想はしていたとはいえ、実際に起こってみるとやっぱりがっかりする。

「それじゃ、少しまわってみるか。色々見ておきたいんだろ？」

そういえばと、刹那は思い出した。せつかく来た世界、できることならこの世界にしかないものを見てみたかった。いろんな建物の中にも入ってみたかった。

「うん。実はまわってみたかったんだ」

嬉しそうに言う刹那。レオは苦笑いを微笑みに変え、行くかと言って酒場を出た。

酒場を出て、にぎやかな通りに出てきた一同。どこから行くのかな、と楽しそうに考える刹那であったが、

「あ、あれ面白そう」

リリアがそう言って二人の袖をつかみ小走りでその場へと向かう。リリアが面白そうと言ったのは砂時計のようなものだった。ただ刹那の世界と違うのは、砂が上に落ちていくということだった。重力を無視しているこの砂時計の仕組みはどうなっているんだろうか。

「あ、あれ可愛い」

再び二人の袖をつかみ、人形を売っている出店に向かった。なんとというか、可愛いというか奇妙なぬいぐるみだった。虎と熊が合体したようなへんてこりんな人形。女性はこんなものが好きなのか？ 女心などわかるわけもない刹那は頭の中でつぶやいた。

「あ、あれおいしそう」

またもや二人の袖をつかみその場へと向かう。おいしそう……。とはずいぶんかけ離れたものだった。果物なのだが、皮は紫で果肉は茶色をしていた。これの一体どこがおいしそうなのか、こっちは聞いてみたかった。

こんな感じで、リリアの強烈な女の子パワーでレオと刹那は強制的にリリアのあとをついていくはめになってしまった。

+++++

「あゝ、面白かったね。他の世界って楽しいものいっぱいあるね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どしたの二人とも？せつかく珍しいもの見れたのに・・・・・・・・」

二人は言い返せなかった。まさかリリアがこんなに歩くものだとは思っても見なかった。この世界に来たときはまだ朝だったのに、今では太陽は西に傾きかけている。その間、休みなしで歩き続けた。刹那はもちろんレオまでもくたびれていた。

「おまえのせいでくたくただったの」

「ええ、なんでよ」

リリアにしてみれば本能赴くまま行動しただけらしい。

「とりあえず、休憩しよう・・・足が・・・・・・・・」

刹那が死にそうな顔をしていた。比喻ではない、本当に。

「そ、そだね・・・・・・・・あそこで休もつか・・・」

刹那の顔を見てさすがに悪いと思ったのか、リリアはベンチに座る

よう促した。刹那はふらふらしながらベンチに座り込んだ。

「あ~~~~、生き返る~~~~」

だらしのない声を上げて刹那は足の疲れを癒した。

「座るか……………」

「そだね……………」

レオとリリアもベンチへと向かった。

数十分が過ぎた。刹那とレオの疲労も少しは和らぎ始め、それと同じに辺りは暗くなり始めてきた。

「さて、次の世界に行くところか」

「え！もう夜だぜ!？」

驚く刹那にレオは笑って言う。

「だから行くんだよ。今のうちだったら奥の方にゲートがあっても忍び込みやすくなる。確認したらゲートの近くで休めばいい。もちろん見つからないところだな」

相変わらず頭の回転は速かった。おそらくもう手順は考えているの

だろう。

休んだことで疲れは少しだけ楽になった。たぶんいけるだろう。刹那はふところから水晶を取り出し、月の光に水晶をかざした。光は一直線にのび町の奥、すなわち城の中を指した。

「やっぱりな。どうも嫌な感じがしたんだよな」

レオは笑っていた。苦笑いではなく、自分の勘が当たったことを喜んで笑いだった。

3人は奥の城へと向かった。夜になっても町のにぎやかさは消えることはなかった。さすがに完全に人がいなくなるとまではいかなかったものの、夜には夜なりのにぎやかさがあるらしい。

そのにぎやかな町並みを抜け、城へとつながる階段を一段一段上っていった。段数はあまり多くはなかった。学校の階段を上るような感じだった。

そして3人は城の前へとたどり着いた。さすがに城の前には鉄格子があり、さらにその前には見張りがいた。やはり見張りは付き物なのだ。心の中でつぶやいた。

「さて、どうする？って……」

言い終わる前に、レオはぱつと飛び出していた。何者か気が付かれる前に一人、声を出される前にもう一人、銃で頭を殴って気絶させた。

ぱたりと倒れたところで刹那とリアはレオのそばに寄った。

「手馴れてるな」

「まあな」

刹那の関心はレオの一言で終えられた。

「で、どうするんだ？真正面からつつこんでいくわけじゃないだろ？」

刹那はレオにたずねた。実は刹那は心の中ではなにか考えがあるのだろうと思っていた。

「ああ、あるぞ。二人とも今から言うことをよく聞いとけよ」

刹那とリリアはレオの近くにより、その作戦の内容を聞く。見張りが気絶しているとはいえ、油断はできない。レオはなるべくわかりやすく、的確に内容を伝えた。のだが、

「お、おい。そりゃないよ」

「そうだよ兄さん。そんなの刹那さんがかわいそうだよ」

作戦を聞いたとたん、刹那とリリアの反対の音が飛んできた。レオもあまりこの作戦を気に入っていない様子だったが、

「仕方ないだろう。この城の内部の情報は絶対町のほうになんか流れないし、城の中を知るためにはこれがベストなんだ」

と、作戦の意図を二人に告げた。

刹那は苦虫を噛み潰したかのような渋い顔をし、いやいや首を縦に振った。よし、とレオは手を叩いて立ち上がり気絶させた二人の見張りの鎧を脱がし始めた。完全に気絶している見張りの鎧を脱がすのはそう難しいことではない。2分もかからないうちに鎧は見張りの体から離れた。

「ねえ兄さん、ホントに良いの？」

レオの脱がした鎧をつけながらリリアは不安そうにレオに聞いた。兜をすっぽりとかぶったレオはそんなリリアに言う。

「よほどのことがない限り大丈夫だろう。それじゃあ刹那、あまり無理はするなよ」

鎧を着け終わったレオは少しむくれている刹那に言い聞かせた。

「危ない役を俺に回しておいてよく言うよ」

やはり刹那は自分に回ってきた危険な役に納得していない様子だった。

第23話 女兵士長編2

「めんどくせえな、見張りなんてよう」

「仕方ないだろが。義務じゃなきゃ誰もやらねえよこんなこと」

「そりゃそつだ」

文句を言いながら城の入口に向かうのは二人の兵士。さきほどまで城の中の見回りをしていた者だった。時間が経ち、今度は入口の見張りをするため向かっている途中のようだ。

「それじゃ、本日最後の仕事にいきますかね」

「そつだな。この見張りで今日は最後だな」

めんどくさそうに外に通じるドアに手をかけゆっくりと開ける。暗闇に目が慣れるまでに少し時間がかかったが、やがて闇に目が慣れ外の景色を見ることができた。

「ん？」

異変に気がつくまで時間はかからなかった。前の二人の見張りの代わりに一人の青年が黒く大きな剣を持っている。

「なんだおまえ？この見張りはどこ行ったん……」

兵士の言葉が言い終わらないうちに刹那は兵士の胸に蹴りを入れていた。蹴り飛ばされた兵士は何が起こったのか理解できなかった。

強い力に吹っ飛ばされたということしかわからなかった。ぽかんとしているもう一人の見張りの体に間髪いれず拳をふるう。この兵士も同じように吹っ飛ばされていた。それを確認すると、刹那は城の中に潜入し長い廊下を駆け抜けていった。

ぽかんとしている二人は顔を見合わせて頭の中で今起こった事態の整理をしていた。

「「進入者」」！！！！」

二人は叫び体を起こしてすぐさま刹那のあとを追った。いくら刹那の体が結晶で強化されているとはいえ、立てないくらいのダメージは受けてはいなかった。

「うわ、やつぱり来た」

後ろを見ながら刹那はつぶやいた。後ろの兵士はなにやら叫びながら追いかけてきている。言っていることは大体予測できたが。

その声につられて城の中の兵士が集結してきた。刹那の後ろの兵士は2人から30人に増え、逃げている途中に前からも兵士が走ってきた。

完全にはさまれた刹那は逃げることをやめ、手に持っていた大剣を構えた。

「あまり、傷はつきたくないんだよな」

人を傷つけることにあまり乗り気ではない刹那は苦い顔をした。

「おいよく見るよ。まだ子どもじゃないか。俺一人で充分だ」

「おいおい、手加減してやれよ、はははは」

何を勘違いしたのか、前方から一人体つきの良い兵士が剣を構えて刹那に近寄ってきた。どうやら刹那と一騎討ちでやりたいらしい。

「おい坊主、降参ならいまのうちだぞ？」

「馬鹿にされるのはあまり好きじゃない」

すこしむきになって刹那は男の方に体を向けた。そうかと男は一言言って笑いながらかかってきた。上から振り下ろされる剣撃。刹那は大剣を横にして受け止めた。さすがに訓練しているだけのことはあって兵士の一撃は早かった。だが、

「なんだ、思ったより全然弱いじゃないか」

体を強化している刹那にしてみれば幼稚園児が新聞紙を丸めた棒を振り下ろしてくるのに等しかった。あっさりと押し返し、思い切り腹部に蹴りを入れた。

「ぐへっ！！」

変な声を出し、男は飛んでいった。どんっ、と壁に体が激突し、男は気絶してしまった。周りの兵士の誰もがその光景に啞然としていた。たかが子どもに訓練を受けた大人が負けていることに。

「なんだこいつ。みんなでやっちまえ！」

一人の兵士がそう叫ぶと刹那の周りの兵士はまとめて剣をふるってきた。これには刹那も動揺した。数十本の剣が自分めがけてくるの

だから当然だろう。

剣が刹那の体を切り裂く一歩手前で刹那は上に跳んだ。剣はいつせいに空を切り、床にがつんと当たる。

跳んだ刹那の向かった先は辺りを照らしているシャンデリアだった。大剣を振り上げ、天井に結びついていて鎖を切り離れた。支えを失ったシャンデリアは下の兵士めがけて落下していった。

「う、うわあああ!!！」

あわてて逃げ惑う兵士たち。どうにかよけたものの、兵士たちのプライドはずたずただった。長年訓練してきた経験と努力がいともしも簡単にただの青年（兵士たちは刹那が能力者であることに気付いていない）に破られたのだから。兵士たちの戦意はなくなっていた。

「く、くそだめだ。俺たちじゃ手に負えない」

「そ、そうだ！プロミネンス隊長だ！隊長だったら何とかできるかもしれない！」

「そうだな。あの人ならきつとやれる」

兵士の半分は刹那を追い、もう半分はこの城の守備兵長を呼びに分裂した。

刹那はとうとただひたすら奥の方へと逃げていた。とりあえずこの狭い廊下で戦ってはいけない。あまりにも分が悪すぎる。もっと広いところにいけばなんとかなる。刹那は広間目指してひたすら歩を進めていた。いや、逃げていた。

+++++

ドンドン！

大きな音でドアをノックする音が聞こえてくる。良い気持ちで寝ていたのにと、その者は少しむくれた。

「プロミネンス隊長！侵入者です！侵入者が現れました！それも我々だけでは取り押さえることができないほどの力の持ち主です！」

それを聞いてその者は驚いた。この辺でそんな腕の立つ人間などいなかったはずだが。

今行くと返事をし、準備に取り掛かった。着慣れた上半身鎧、使い古してぼろぼろの手袋。その他の防具をすぐさま装着し、最後に細く、長い剣が収まっている鞘を手に取りその者は部屋から出た。ノックをした兵士に場所を聞くなり、ぱつと駆け出してその場に向かった。走るときになびいていたそのオレンジの髪は炎を思わせ、とても綺麗であった。

+++++

後ろの兵士の数はもう数え切れないほどに増えていた。前から来る敵はジャンプしてかわしたものの、もし間違えて行き止まりのところにいきついてしまったらこの大人数相手に戦わなければならない。それだけはなんとかして避けたかった。

広間に行き着くように願い、刹那は走った。と、手前に大きな扉が立ちはだかった。一見鉄でできているが、結晶である大剣にかかれば水に濡れた紙を切り裂くようなもの。手早く大剣をふるい、鉄の扉に穴を開けその中へと入っていった。小さな穴なので、後ろの大

人数兵士は一気には入って来れない。扉の向こうは刹那の希望通り広間だった。大きな広間の壁際には多数他の部屋へと通ずるドアがついていた。狭い廊下より何倍も戦いやすい場所だった。

やっとのことで大人数の兵士たちは広間に入ってきた。と言っても全員ではなく、半分くらいだが。その兵士たちは刹那の姿を確認するとお互い顔を見合わせ、一斉に刹那めがけて剣を振るってきた。刹那は意外にも物怖じしないタイプである。無数の刃に決して絶望せず、兵士たちの体に当たらないようにその手に持っている黒い大剣を振った。その瞬間黒い風が吹き、兵士たちの持っている剣の刀身を切り落とした。

「うああああ、なんだよこいつ！」

「化けモンだ！勝てるわきゃねえ！」

「逃げるしかねえよぉ〜！」

各兵士それぞれ捨てゼリフを吐き、早々に撤退していった。それを見計らっていたかのように扉の向こう側にいる兵士たちが次々と入ってきた。

しかし今度は一斉にかかってくることはせず、刹那を囲むようにして剣を構えた。そして兵士どうし目で合図をし、そのうちの2人が刹那にかかっていった。刹那は慌てずに大剣をふるい、二人の兵士の剣を斬った。そこまではよかったのだが、次に後ろの方から2人かかってきた。大剣を振った瞬間にかかってきたため、再び振るまではない時間がかかる。大剣の強みである重みは、最大の弱点になっってしまうのだ。刹那は頭の中で間に合わないということ素早く理解し、大剣を振るのを諦めた。その代わり空いている両足で二人の兵士の体を吹っ飛ばした。それを見計らっていたのか、今度はまわ

りの兵士4人全員が刹那にかかってきた。刹那の体が床から離れるその瞬間を狙っていたのだ。

どうしようかと考えているうちに体は動いていた。両足で蹴ったときの反動を利用して大剣を振り下ろしたのである。一人の兵士の持っていた剣を真つ二つに斬り、後ろからかかってくる二人の兵士に再び両足で蹴りを入れた。あとの一人はその一瞬の光景に取り残されて動いていなかった。ようやく事を理解したその兵士は悲鳴を上げて逃げていった。

兵士たちはまた広間に入ってくる。またかと刹那は心の中で舌打ちをした。ところが、

「おい！プロミネンス隊長が見えたぞ！早く撤収して来い！」

「ほんとか！はははやったぜ、これで形勢は逆転だぜ！」

扉の向こうの兵士の言葉を聞くなり、出てきた兵士は戻っていった。絶対に自分たちが勝ったということを決めつけた言葉を残して。

その兵士の言葉を聞く限り今度出てくるのはこの兵士長らしい。隊長と言っていたから間違いはないだろう。問題なのはどういう人物なのかである。筋肉で覆われていそうな大男か、はたまたざる賢そうな策士か。

「そこまで。これであなたの快進撃はおしまい」

刹那の想像していたものは全て外れた。扉から出てきたのは自分と同じくらいの女だった。炎を思わせるオレンジの髪の毛。桜色の瞳。綺麗な顔立ちのその女は息を飲むほどの美少女だった。

しばらく見とれていた刹那は、もうその女が武器を構えているのに気がついた。

その女の武器は剣というか、刀のような武器だった。ただ違うのは

長さである。普通の刀とは違い長く細い。刀身はぱつと見自分の大剣と同じくらい長さ。そして刹那の黒い大剣とは対照的に炎のような紅い太刀であった。

女とはできるだけ戦いたくはなかった刹那はいやいや大剣を構えた。もちろん真正面から戦うつもりはない。適当に戦ってからレオの作戦通り逃げるつもりだった。

「言っておくけど、私からは逃げられない。あなたは私に負けてこの城の王妃様のもとにつれて行かれる」

「悪いけど、その要望には答えられない」

言い終わった瞬間、まわりの空気が変わった。ピリッ張り詰めたような感じになり、女の体からオーラのようなものが見え、体が動かなくなった。

「なんだ、これ？動けない」

刹那にはそれが女の殺気というものだということに気がついていなかった。

早くここから逃げ出さねば。本能的にそれを感じ取った刹那は早めに決着をつけるべく女に向かっていった。走り出した足は次第に加速していき、その勢いを利用して刹那は担いでいた大剣を女めがけて振り下ろした。圧迫感で刹那は加減することを忘れていた。

女は自らめがけて振り下ろされてくる黒い大剣を、慌てることなく自分の太刀で受け止めた。

「え！？」

自分の精一杯の一撃をあつさりを受け止められた刹那は驚きを隠せ

なかった。それよりも、なぜ兵士の持つている剣は斬れたのにこの女の持つているこの紅い太刀は斬れないのだ？

刹那は一旦距離をとり、事態を一旦把握することにした。今の状況からわかることは二つ。

1つは女の持つている武器を斬って戦闘手段を奪うことは不可能。もう一つはこの女には絶対勝てないということだった。

「兵士たちがてこずる理由がわかった。あなた能力者でしょ。私の『神器』で斬れなかったんだから結晶に間違いない」

女はそう言うのと今度は自分から刹那にかかってきた。刹那は慌てて大剣を横に構え振り下ろされた太刀を受け止めた。

初めて完全というものを知った気がした。テレビでよく見る達人同士の試合や剣道部の練習など比べ物にならなかった。文字通り無駄がなかった。走ってくる早さも振り下ろしてくるタイミングも全て見えない威圧感、物怖じしないはずの刹那の心をあせらす恐怖心、それら二つに駆られて刹那は大剣を構えたとおり横に振り、女の太刀をなぎ払った。

「しかもあなたのは剣術じゃない。ただやみくもにふりまわしているだけ。そんな腕で私に勝てるわけがない！」

そういつて再び刹那に斬りかかってきた。今度は大剣で受け止めようとはせず上に跳ぶことで回避した。しかし甘かった。その女も刹那と同じように上に跳んだのだ。体を強化している刹那と同じくらいの高さまで。

その勢いを利用し、女は下から太刀を振り上げた。刹那は手早く受け止めるが、勢いづいた太刀の威力に耐えられず大剣を離してしまった。

大剣は自分の後ろのほうに飛んでいき、取りにいこうものならばた

ちまち斬られてしまうという距離まで飛ばされていた。

「く……………」

刹那は悔しそうな顔をし、一目散に逃げ出した。このまま捕まるわけにはいかない、レオの作戦をぶち壊すわけにはいかない。刹那は扉のほうに向かって全速力で走った。だが、戦闘手段を失った侵入者を逃がすわけがない。走り出す刹那の足を蹴り、刹那を転ばせた。

「痛たたた……………、う……………」

起き上がった刹那の喉元に女の太刀が突きつけられた。完全に負けだった。

「どうするの？降参？まだやる？」

女は表情を険しくした。逆らえばすぐさまのどを貫かれる、表情からそんな気がしてならなかった。

「だめだ……………勝てない……………」

戦意を喪失した刹那は「降参だ」と一言つぶやき、両手を挙げた。とりあえず今は命を大事にしなければならぬ。

それを確認した女は扉の兵士を呼び、刹那をロープで縛るよう命じた。

「ははは、やっぱりすげえやプロミネンス隊長は！！」

「俺たちが勝てなかったやつをいとも簡単にやっちまったしな！」

女が勝ったことを喜びながら刹那たちに近づく。転がっている刹那の体をロープでぐるぐる巻きにし、そのまま王妃のいる間まで連行されていった。

+++++

かつかつと靴が床を蹴る音が辺りに響く。刹那は腕を後ろにロープでぐるぐる巻きにされ先頭を歩き、その後ろから兵士に見張られているという形だった。

「なあ」

無言の間に耐えられなくなった刹那は歩きながら女に話しかける。

「何？」

「俺はこれからどうなるんだ？」

「王妃様の前に連れていくの。そのあとにあなたがどこから来たのかとか、なぜこの城に喧嘩を売るようなまねをしたのかとかをじっくり聞くことになる。事情によっちゃ死刑っていうのもある」

「そうか……」

「怖い？死人はだしてないもののあるだけのことをしたんだから

当然だよ」

「別に怖くなんてないさ」

この言葉は強がりだと女は思った。もしかしたら殺されるかもしれないのに怖くないなどありえないからだ。

「だって少なくともあと少しは生きていられるんだろ？その間に友達のことか家族のことかを思い出せれば怖くなんてないさ」

微笑んで刹那は言った。強がってなどいなかった、本当に怖がっていなかった。

変なやつだなと、女は思った。だから言っただけだった。

「変なやつ」

「そりゃひどいって」

刹那の顔は前を向いていてわからなかったが、口調から微笑んでいることがわかった。

再び辺りは沈黙し、女と兵士たちは王妃のいる間へと歩いていった。

+++++

「ははは、見たかよあの見事な剣さばき。あんなの絶対真似できねえよ」

「ほんとほんと。さすが歴代最強兵士長だな。俺たちが勝てない相

手でも勝つちまうなんてな」

「今頃王妃様の前に突き出されてるぜ、あの侵入者」

「まったくちげえねえや」

すれ違った二人の兵士の会話を聞いていた偽装したレオとリリアは作戦が失敗したことを悟った。

兵士たちは二人の偽装に気づかないまま女兵士長の武勇を語り合っていた。

「ど、どうしよう兄さん刹那さんがつかま痛!!!!!!」

リリアの大きな声をレオは拳で黙らせた。

「いったくい。何するのよ兄さん」

「少し声を低くしろ、ばれるだろう」

ああそうかと、リリアは声を低くした。

ふうとため息をついてレオはどうするか考えた。

「まさか刹那がつかまるくらいの実力者がいるとは思わなかったな。戦闘経験がないとしても一応能力者だから、混乱させて出てくることくらいいけないと思ったんだけどな」

城の前で打ち合わせた作戦。刹那がいよいよ引き受けた役は城の中に殴りこみ城内を混乱させることだった。

城の見張りの兵士の着ていた鎧は二着しかないので、誰かが混乱させる役に回らなければならなかった。

戦闘能力のないリリアは論外。リリアを守ると決めたレオも役からはずされる。ということは消去法でいくと刹那が混乱させる役に回ることになる。

手順は刹那が城内に潜入して混乱させ、騒ぎに乗じてレオとリリアが兵士に紛れ込む。ある程度暴れまわったら脱出し、レオが父親の情報をつかむために立ち寄った酒場に向かい待機する。なぜ酒場なのかは、まさか見つかりやすい酒場にいるわけがないという考えの裏をかいたからである。

その間にレオとリリアの二人は城内のマップを頭にたたきこむ。もちろん城内にレオの父親もいるかどうかの確認も忘れない。

マップを記憶したら城を抜け出し、酒場へ向かい刹那と合流する。そのあと刹那の水晶の光と照らし合わせて大体の位置を確認し、再進入し次の世界に旅立つ。というもの。

だったのだが、刹那が捕まってしまったので城のマップを把握する時間がなくなってしまった。

「ねえ、どうするの?」

「決まってる。助けに行くぞ」

そういうとレオは少し早足で進んだ。向かう先はもちろん王妃の間。さきほどの兵士たちが王妃の前に突き出されていると言っていたからたぶん今向かっている途中だろう。

「世話がやけるな、刹那」

心の中で皮肉を言っているが決して嫌がってはおらず、むしろ世話を焼くことを喜んでいた。

第24話 女兵士長編3

城の作りというか、王などの国の中心人物のいる間の扉は巨大で、さらにちよつとやそつてでは壊されないような作りになっている。

(結晶ではもちろん壊れるであろうが)

女はすつと刹那の前に出て、その大きな扉を二回ノックした。たたくと鐘のような重い音が響き、辺りの空気を震わせた。

「王妃様。レナです。侵入者を捕らえてまいりました」

「入ってきて」

艶っぽい大人の女性の声がした。この声の主こそが王妃なのだろう。

「失礼します」と女は言うのと周りの兵士に目配せをする。すると兵士たちは王の間の扉の前に行き一斉に力を込めた。扉はゆつくりと開き、その奥の様子が刹那の目に飛び込んできた。高く大きい玉座に座っている女性、広い間、明るく照らすシャンデリア。女性は人目で王族とわかる容姿をしていた。少し青みがかかり、つややかな紫色の髪の毛、見たものを虜にするような瞳、色っぽい唇。

ただ一つおかしいところがあった。側近がいないのだ。普通ならばありとあらゆる事態に備えて必ず兵士がいるものなのに、この国の王妃の近くにはいない。いや、どこかに隠れているのか。王妃を守る人が近くにいないなどあるわけがない。

女はため息をついてその王妃に言った。

「兵士を最低二人は近くに置いてくださいつて言つてあるでしょう。王妃様がこんな無用心な国はそうそうありませんよ?」

「いいじゃない。だって居ても邪魔なだけなんだもの」

本当に兵士をつけていないようだった。単にわがままなだけなのか、特別な理由があるからなのか。刹那にはそこまでわからない。

「で？その可愛い子は？」

「ああ、進入者です。能力者だから少し捕獲するのに手間取りましたけど」

レナが言い終わると王妃は刹那のほうをじっと見つめ、何かを見定めるような顔をしている。と、王妃は表情を変えポケットに手を突っ込み、なにやら小さなガラス玉を取り出した。そのガラス玉は王妃の手から離れ徐々に上昇していき、高く上がったところで光を放った。その光はまぶしいとまではいかないものの、なにやら神々しさあふれた不思議な光だった。そして、放つだけ放ったあと、

パン！！！！！！

そのガラス玉は粉々になり、まるで粉雪のように空を舞った後、文字通り消えてなくなった。レナも周りの兵士もぼかんとその光景をみていた。今起きている事態を把握することができないようだった。

「ふふふふふふ……」

王妃は笑っていた。ついさきほどの気配がらっと変わり、禍々しい雰囲気になっていった。

「見つけた……ついに、ついに見つけた……」

なにやらつぶやき刹那のほうを見ている。
おぞましかった。怖かった。

「王妃様？」

レナは王妃の豹変ぶりに疑問を持った。こんな王妃、生まれて一度も見たことがない。いつもの王妃ではなかった。

「そ、それでこのものの処分はいかがなさい」

「今ここで殺しなさい」

きっぱりと、なんのためらいもなく言い切った。その顔は不気味な喜びで満ちていた。その言葉にレナはもちろん、刹那さえも驚いた。

「は、話が違うじゃないかよ！しばらくは生きられるんじゃないのかよ！」

大声を出した刹那をかばうようにレナは王妃に言った。

「そんな理不尽な！この者は器物は破損したものの、死人けが人は一人も出していないのですよ！？死刑はあまりにも理不尽です！絶

対反対です！」

こればかりはさすがに女も反対した。王妃に忠誠を誓っていても、理不尽な罰には納得できなかったらしい。

王妃は怪しく笑って女に言った。

「これは国の定める罰の制度に従ったわけじゃない。私の仕事もためなの」

「どづいつことですか？」

「この子を殺すことが私の仕事だと言っているの。理解した？プロミネンス隊長？」

この場にいる兵士、レナ、そして刹那も言っていることがわからなかった。

その様子がおかしいのか、王妃はあははと声を上げて笑っている。高笑いというやつだ。

「そうね、わからないわよね。でもそれでも私はかまわないわ。あなたがその子を殺さないというのなら……」

王妃は玉座に預けている腰を上げ立ち上がった。

「私が殺すわ」

「そうはさせません！！」

そう言っただけ二人の戦いは始まってしまった。

その場にいた刹那とその周りにいる兵士はなににもできず、ただ呆然

と立ち尽くしていた。

+++++

「邪魔するのなら、少し黙ってもらおうかしら。レナ……」

「……………」

レナは手に持っていた鞘から長く紅い太刀を取り出し構えた。迷いはしなかった。王妃に剣をふるって許されるはずはない。だが、罪の軽いものを死刑にすることのほうが許されるはずがないとレナは信じていた。

殺すつもりはない。まともに戦うつもりもない。そんなことをすればすぐに王妃が死んでしまうからだ。戦いに慣れ、さらに場数を踏んできたレナならば、太刀のみねで殴り気絶させることくらい簡単だ。

急接近すれば相手はひるみ一瞬だが身動きが取れなくなる。その一瞬を狙って首に太刀を打ち込めばなんとかなる。

頭の中で組み立て、確認する。大丈夫だ。相手は訓練もなにもしていないただの王妃様だ。

「来ないの？せっかくだから遊んであげようかと思ったのに、残念だわ」

構えてばかりでかかってこないレナに、そして硬直している場に飽きたのか、王妃はため息をつき、右手の平ををさっとレナのほうに向けた。

「悪いけど、かかってこないのならこっちからやらせてもらおうわ。私は無駄な時間が大嫌いなもの」

すると辺り一面、いや部屋全体が紫色に包まれた。

「!?!」

レナは驚いていた。一瞬で感じ取り、そして理解したからだ。

驚くべきことだった。この紫が全て魔力だったからだ。こんなに大規模な魔力、訓練なしでは絶対に扱えないし、ましてや出現させることもできない。毎日玉座に座っていただけの王妃に訓練する時間などないはずだ。

「驚いた？私がこんなことができるなんて。でも、驚くのは少し早いわよ？」

驚いているレナが面白いのか、王妃は怪しく笑っている。悪魔のような笑みだった。

レナは王妃の言ったことが気になっていた。

「驚くのはまだ早い」

魔力を部屋全体に行き渡らせたのは何か意図があつてのことなのか？だとしたら相手が攻撃に移る前に決着をつけなければならぬ。もしかしたら一撃で致命傷をもらう攻撃かもしれないからだ。

ぱつとレナは飛び出した。床を蹴り王妃に攻撃するつもりだったが、

「!?!」

足に力が入らずそのまま前のめりになって倒れてしまった。変だな、と思いつつ再び起き上がるうとするが、なぜか体に力が入らない。ふと見ると、王妃が自分の前に立っているではないか。あわてて体を起こして距離を取ろうとしても、やはり体が動かない。

「どう？動かないでしょ」

「何を、した……」

うふふ、と笑って王妃はしゃがみこんだ。レナの悔しそうな顔を見ながら解説をする。

「《魔力吸収》。今私が発動させた『魔術』。名前の通り、体の中の魔力を吸収するというもの。体を動かしているものは体力と魔力、両方欠けていても体を動かすことはできないし、どちらか一方欠けていても体は動かせない。魔力はどんな人間にも血と同じように体を巡ってるって知ってた？だからこの場にいる人間は例外なく動けなくなるの。もちろん魔力を全て奪われると心臓などの臓器も停止するから、今は半分くらいしか奪ってないわ」

周りの兵士、刹那もレナ同様、体に力が入らずその場に倒れこんでいる。この場にいる誰一人体を動かすことはできなかった。王妃に抗えるものはいなかった。

「さて、お仕事しないとね」

王妃は立ち上がり倒れている刹那のほうへ歩いてくる。こつこつとゆっくりと歩み寄ってくる。刹那は恐怖感を覚えていた。抗えない、これから殺される、という二つの感情に。

「一つ、聞かせて。あなたは何者なの……」

王妃は足を止めてゆっくりとレナのほうに体を向ける。声の通り、ぐったりしているようだった。

「そうよね。不思議よね、訓練も何もしていない王妃様がこんなに強いなんてね」

ふふふと笑いながら、王妃は再び刹那のほうに歩み寄った。

「そうね……、神の使い……かな。ある器を壊すために張られた罫。そしてこの国の正式な王妃ではない。私にはこれだけしか言えないわ」

神の使い、刹那は反応せずにはいられなかった。異世界に旅立つきっかけとなった原因のリバー、レオの父親を殺し、国を混乱に陥れたシャドウ。どちらとも「神の使い」と言っていた。無関係だとも単なる偶然だとも思えなかった。絶対にこの二人に関係がある。

「なあ、あんたりバーとシャドウを知ってるか？」

体は動けなくなっているものの、レナのようにぐったりとした口調ではなかった。

刹那がそういうと、その女は刹那のほうを向いて笑い、答えた。

「やっぱり、喋れるのね。魔力をあれだけ吸収したのに。まあいいわ、動けないみたいだし。教えてあげる。どちらも私の同志よ。二人の名前を知って生きてるってことは……あの二人がしくじったわけね」

はあ、とため息をつき腕を組んだ。

「もう……一つ……、正式な王妃ではないって、どうい
うこと……?」

にやりと笑い、王妃はレナに背を向けたまま答えた。

「もうすぐ任務も終了するし、種明かしてもいいかな。この国の
もとの王は私が殺したわ。だって任務を遂行するためにはどう
してもこの階級でなくてはいけないもの」

「馬鹿……な……、遺言では……隠し子のあなたに
全てを……任せる……と書いてあった。鑑識の話でも……
・字は王の……ものだったと……。王がそんなことを……
・……書くはずが……ない……」

「ああ、それか。ちょこつと痛みつけてやったらおとなしく言うこ
とを聞いてくれたわ。どんな生き物も痛みには逆らえないからね。
書いた後は苦しまないようにすぐ首をはねてやったわ」

「そん……な……、そんな……ことって……
……」

事実を知ったレナは怒るでもない、悲しむでもない、ただ呆然と虚
空を見つめていた。今までこの国を全てこの得体の知れない女に動
かされてたということと、行方不明の王をこの女が殺したというこ
とに多大なショックを受けていた。

さきほどまであったほんの少しの闘志さえも、レナの眼から消えう
せてしまった。それを悟った女は怪しく微笑み今度こそ刹那を殺す
ために近づく。

刹那は身の危険を感じていた。死の恐怖というやつが今になってや

つとわかった。全身から一気に汗が噴出した。
そばにいた兵士の剣をすつと手に取り、刹那の首に押し付けた。

「さあ、さようならよ。この世から。」

そしてゆっくりと振り上げ、刹那の首めがけて振り下ろす。

ズガン!!!!

発砲音がした。視線を音のしたほうに向けてみるとそこには、

「レオ!!! ナイスタイミング!!!」

神器、『神爆銃』を手に持っているレオの姿と後ろに隠れているリアの姿があった。

女は弾丸によつてはじかれた剣のほうをみて驚いた。

「へえ……やるじゃない。高速で振り下ろしている剣を打ち抜くなんて。かなりの腕をもっているわね、あなた」

女は動揺することなく、やはり妖しく笑っていた。

レオはとりあえず今の状況をじっくりと見た。倒れている兵士と刹

那、一人笑っている女、大体は予想がついた。全部この女がやったのである。

「刹那、この女の能力は？」

「魔力吸収って能力だ。吸収されると動けなくなる」

「なるほどな。通りでみんな倒れてるわけだ」

うーんとあごに手を当て、何かいい考えはないかと頭を働かせる。後ろでレオの服をぐいぐい引っ張りながらリアは小さな声でレオに話しかける。

「ちょ、ちょっと兄さん。こんなときに考えてる場合じゃないですよ？」

「ば〜か、こんなときだから考えなきゃならないんだよ」

リアにそう言うってから怪しく笑っている女に視線をやった。

「この状況をひっくり返すにはどうすればいいか、ってな」

その妖しい笑みは少しもくずれることがなく、女は大きな声で笑った。

「あはははは、無理無理。あなたがどれだけ強くても魔力を吸収されれば動けなくなるのよ？ひっくり返すなんて無理よ」

その無情な宣告にもかかわらず、レオは不敵に笑っていた。

「レオ、やっぱり何か考えがあるんだな」

刹那は心の中で、この状況を逆転する手立てを考えるレオに尊敬の意を抱いた。

そのとき、緊迫していた場が動き出した。レオが横の壁めがけて一発の弾丸を放った。高速でとんでいった弾丸は壁に当たると同時に爆発した。火の属性の弾である。やはりというか壁には大きな穴が開いた。何をするつもりなのか、刹那には想像がつかなかった。

「さて、覚悟はいいか？」

「きゃー！！」

レオはそういうと銃を腰のホルスターにしまいこみ、リアの体を担いで女のほうに特攻していった。

「何考えてるの？そんな自爆行為で私に勝てるの？」

「ふっ……」

レオは構うことなく女のほうに突っ込んでいった。

女はというと、言葉とは裏腹にレオのその行動に完全に意表を突かれていた。まさか銃を持っているやつがわざわざしまい突っ込んでくるなど、あるわけなかったからだ。

「！？」

レオは女の少し手前に倒れている刹那の体を残った右腕でつかみ、そのままあらかじめ空けておいた穴まで一気に跳んだ。まさか、

「最初から戦う気なんてなかったの？」

「ああ。悪いが一旦退かせてもらうぜ。刹那に傷つけさせるわけにはいかないからな」

そう言うとそのままレオは飛び降りた。あまり長居していると追撃を食らう可能性があるからだ。

目的の刹那を逃がし、その場は沈黙した。

「う……………」

レナは何とか動こうとするが、無駄であった。魔力を抜き取られてしまつてうんともすんとも動かないのである。

それを見た女は少し不機嫌そうにすぐ近くにいた兵士の剣を手にとつた。

「ごめんね。生かしてあげたかったけど、真実を国民に伝えられると面倒なことになるの」

動けなくなつたものに止めを刺さなかつたのは無駄な殺しをしないためである。女は刹那を殺し次第この世界を後にするつもりだったため、レナと兵士たちによって国民に伝えられても関係ない。

しかし刹那に逃げられてしまったため、真実を知ってしまった者の口をふさぐしかない。知られてしまえば刹那抹殺がやりにくくなるためだ。

刹那と同じように首に剣を突きつける。白く、冷たい刀身。

「最後よ。言い残すことはない……………つてしゃべれないか」

すつと剣を振り上げる。首をはねるつもりだ。

「さようならレナ・プロミネンス隊長。殺すには惜しいくらい的美貌と戦闘能力だったわ」

そして何の迷いもなく剣をレナの首めがけて振り下ろした。

第25話 女兵士長編4

ドンー!!

銃撃音がしたかと思うと、女の腕は空を舞っていた。撃たれたほうを見てみると、そこには逃げたはずのレオが立っていた。

「悪いな。裏をかくのは得意でね」

行ったとみせかけ、相手の油断したところを狙う。これにはさすがの余裕を持った女でも隙を突かれてしまう。

鮮血が女の腕からあふれていた。傷を見てみると、撃たれたというよりも斬られたという感じの傷だった。女はレオの跳躍力を見て能力者と判断したため、そう驚くことはなかった。

「やるじゃない。完全に意表を突かれたわ」

「ゲートの位置がここだったんでな。どうやってもここは退いてもらわなくちゃならなかった」

女は分離した腕を拾い上げ、頭上でプラプラ動かして見せた。

「あゝあゝ、レディにすることじゃないわよ。こんなにしちゃって」

そうした後、女はその腕をレオのほうに投げつけた。レオはチャット銃を構えるが、特に攻撃の意図があるわけではないとわかるとそのまま腕をキャッチした。

「あなたが斬ったんだからちゃんと供養してよ？」

血がぼたぼたと垂れているのにも関わらず、やはり女は笑っていた。妖しく、艶やかに。

残ったほうの腕で女は魔力を圧縮した。次第に球が出来上がっていき、ソフトボール大になったその圧縮した魔力を地面に放った。シヤドウのときと同じように丸いゲートが出来上がり、女はその穴に迷わず入っていった。レオは追撃をしようとはしなかった。退かせることが目的で、戦うことが目的ではないからだ。

「ふう。まあ今回はいいわ。退いてあげる。無理に殺してこいなんて言われてないしね」

「誰に、頼まれたんだ？こんなこと」

レオは既に腹の部分まで沈んでいる女に問いかける。女は笑っていた。

「『神』よ。また会うかもしれないから覚えといて。私の名は、サラ」

そう一言だけ残して、女の体はその穴に沈んでいった。体が全てゲートに入り込んだ瞬間、ゲートの穴は閉じ、その場に短い沈黙が流れた。

レオは銃をしまい、レナのほうに歩を進めた。そのときにレナ警戒したしたのは当然であろう。

「進入……者……」

「さて、争う気はないからこっちの事情を伝えておく。俺たちは他

の世界、異世界からここにやってきたものだ」

「異世・・・界・・・？」

疑問をレオにぶつけるレナ。ああ、とレナに一言いい、レオは話を続けた。

「今回こんな騒動を起こしたのはこの部屋に異世界の扉があったからなんだ。この世界から出て行くためにもここに来る必要があった。まともに言っても取り合ってくれないはずがないし、第一に王妃のいる場なんてたとえ町の者だったとしても簡単には入れない。だから今回はこんな騒動を起こさざるをえなかった。許してもらいたい」

そう言ったあと、レナは口をししばらく塞いだ。

この者の言っていることが嘘だとも思えない。目が嘘を言っている目ではない。でも異世界から来ただと？そんなことがあるわけない。しかし実際に王妃は偽者だったし、侵入者たちの強さも納得できる。

「もう少し・・・話を・・・聞きたい・・・」

「悪いが考えさせてくれ。連れの意見も聞かないといけないからな」

そう言い残すとレオは跳躍し、壁にあけた穴から下に降りていった。再び辺りは沈黙し、レナは大きくため息をついた。

「今日は・・・なんだか疲れたな・・・。寝てるとこ起こされたし、魔力吸い取られて力入らないし・・・、なんだか眠い・・・」

いつの間にか重たくなっていた瞼を閉じ、レナは体の負担を癒すた

め深い眠りについた。

+++++

「どうだ？刹那」

「だめだ、体が動かない。しばらくはこのままかな、リリア？」

「うん、魔力がほとんど底をついてる。これじゃ動かせないよ」

「仕方ない。今日はここで野宿かな」

「えゝ、寒いよゝ痛！！」

「文句言うな。この世界の金ないし、大体今宿屋に行ったら兵士たちに見つかって牢獄行きだ」

刹那、レオ、リリアの3人は城外の目立たない木陰にいた。城から脱出したレオは刹那、リリアをこの地点に下ろし、これからのことについて少し話し合っていた。

刹那は体が動かないものの、口はきけたためなんとか意見を言うことはできている。半分はレオとリリアの会話なのだが。

「いやよ！こんな寒いところで寝るの！変な人に襲われたらどうするの！？こんなに可愛くて愛らしい女の子に手を出さない男なんているはずないわ！」

「安心しろ、お前を襲う物好きこの世に存在しない」

「なによそれ〜！兄さんだって時々私のこといやらしい目で見てるくせに！」

「いつ誰が誰をいやらしい目で見たって？え？」

「いや、あの、二人とも、俺を無視しないで……」

「大体なんで俺がお前なんかをそんな目で見なくちゃいけないんだよ」

「すっすっすっごく可愛いからに決まってるでしょ〜！」

「自画自賛かこのばかたれ」

「なにお〜〜！！いいもん。兄さんの子供のときに私に言った言葉全部刹那さんに言っちゃうから！！刹那さんあのね……」

「ちよつと待て、そりゃ反則だろうがああああ！！！！」

「なによ！良いでしょべつに！減るもんじゃないし」

「そういう問題じゃないっての！とにかくそれだけは絶対駄目だからな！！！！」

「そんなこと言っても言っちゃうもん！」

「だからあああああ！！！！」

「頼むから俺を無視しないでくれ……」

こうして刹那の希望もむなしく、二人はこのあと1時間ほど口げんかしていた。

「なによ!?!」

「なんだよ!?!」

「おい……………」

+++++

東の空から日が昇った。朝がやってきた。

「うーんんん!?!」

大きく伸びをし、すっと立ち上がってみる。なんともない。動かなかったのが嘘のように体が動く。

「そついえば昨日リアが言ってたっけ……………」

けんかが終わったあと、リアは魔力のことについて刹那に話した

のである。魔力は体力と同じで休んだり睡眠をとったりすることで自然に回復する。だから、動けなくなるほどの魔力喪失であっても一日寝れば治るだろう、とのことだった。言われた通りぐっすり寝たらまるで元通り。体の不具合は見当たらない。

「お、起きたか」

「おはよう、刹那さん」

昨日のけんかが嘘のように二人はくっついていていた。二人の手には魚やら何か野菜が握られていた。そういえばレオの国以来なにも口に運んでいないことに今気がついた。空腹で胃が少し痛む。

「さ、火をたかないとな」

「え。でも火をたいたら城の兵士に気づかれるんじゃないのか？」

「私もそう言ったんだけど、大丈夫だって聞かないの」

一通り会話が終わるとレオは近くにあった木の枝を拾い集め一箇所にまとめたあと銃を取り出した。ドン！と発砲音がしたあと、木には火が点っていた。

「火の属性の弾さ。魔力を最小限まで抑えればこんなことにも使えるんだぜ」

得意そうにそう言うところからはじめ尖らせておいた木の枝に魚と野菜を突き刺し、ちよっとしたバーベキュー的な朝食が始まった。

「レオ。この後どうするんだ？」

バチバチと魚の脂がはじける音がした。それをおもしろそうに眺めながらレオは言った。

「ああ、城に行く。もちろん正面から堂々とな」

「え！？捕まるって！」

あわてて刹那は否定するが、レオは少し微笑みながら言った。

「なあに、大丈夫さ。女の兵士に本当のことを話したら『もう少し話を聞きたい』って言ったんだ。戦う意思はもうないんだから事情のしらない兵士に捕まっても女の兵士を呼んでくれって言えば大丈夫さ」

そういうと少し焦げ目のついてきた魚をひょいっと取る。

「焼けたぞ。食わないと黒焦げになっちまうぞ」

あわてて魚を取り口にほおばった。魚の脂が口の中いっぱい広がった。素直においしいと思った。

やがて三人の食事は終わり、再び城の中の町に入ってしまった。橋を渡り、紋をくぐった先にあるその町は昨日と何一つ変わらないにぎやかな雰囲気だった。

と、目の前から城の兵士がこちらに向かってやってくる。武器を構えてはいるが敵意を示している目はしていなかった。三人の足は止まり、そして兵士たちも三人の前で止まった。

「異世界の方ですね？」

兵士の一人が丁寧に聞いてきたことが意外だった。その質問をするためにまっすぐこっちに向かってきたのは、若干町の人々との服装が違いわかりやすかったからである。

「そうだが」

「プロミネンス隊長の自宅までご案内するよう言われて参りました。ついてきてください」

そう言うと体をひるがえし、裏の路地のほうに歩いていった。三人は迷うことなくついていった。

表のにぎやかさは消え、静かな空気になった。人こそいるものの、表の人数とは到底比べ物にならないくらいその数は少なかった。

こつこつと地面に靴が当たる音があたりに響き、やがてある家にとどり着いた。

「こちらになります。くれぐれも失礼のないように」

そう言って兵士たちは表のほうに引き返していった。行く前にあまり面白くなさそうな顔をしていたのは気のせいだろうか……。とりあえずレオが家のドアを数回ノックしてみる。「はい」と女の声がした。少しバタバタという音がしてガチャとドアが開いた。

「あ、来たね。入ってちょうだい」

そついうと女は再び消えていった。レオは刹那とリアのほうを見てちよいちよい、と手招きをする。刹那とリアはレオの後に続いて家の中に入っていった。

中はいたって普通の家だった。丸いテーブル、棚、カーテン、いたって普通の民家だった。

「そこにかけてて。今紅茶だから」

言われた通りテーブルぼ近くにあるいすに腰をかけた。それを見計らっていたかのように女は紅茶の入ったカップをすつと差し出し、自分もいすに座った。

「最初に、自己紹介かな。私はレナ。レナ・プロミネンス」

「俺はレオ・ヴァルヴァット」

「えと、俺は杉本刹那。刹那でいいよ」

「私はリリア・ヴィンスタール。ちなみにレオの妹ね」

そう言っつてリリアはうれしそうにレオのほうを見て笑った。はあ、とレオのため息も聞こえてきた。

さて、と言っつてレナは口に運んでいたティーカップをテーブルに置いた。とたんにさきほどの表情とは一変、ピリツとした真面目な顔になった。

「詳しく教えてもらえる？整理がついてないの」

「ああ。わかった」

レオはとりあえず自分たちのことを話した。ある異世界の人間によつて自らの国が戦争になったこと。その後刹那と一緒に異世界を旅していること。そしてこの世界にたどり着き、次の世界に進むためにやむを得ず進入という形をとってしまったことなど。

レナは驚きもせず、静かにレオの話に耳を傾けていた。自分の国で

も同じようなことがあったのだ。いまさらその話が嘘だとは思えなかった。

一通り説明が終わると、レナは再びティーカップに口をつけた。

「大体の事情はわかった。私も少し考えたんだけど……」

カタ、とティーカップをテーブルに置き、一段と真面目な表情をして言った。

「私も連れて行って」

3人は驚かずにいられなかった。会って間もないのに、いきなり旅に連れて行けと言うのだ。

「こつちにはお前を連れて行く理由なんてない」

「私には行かなければいけない理由がある」

レナはその真面目な顔を崩さず言った。

「大げさかもしれないけど、あなた達はこの国を救ってくれたじゃない。あなたたちがいなければ私は死んでた。だから」

「恩返しとして役に立ちたいってことかな」

刹那がレナの意図を言葉にした。当たっていたのか、レナは刹那のほうを見て笑った。

「そう。だから私も連れて行って」

レオは困ってしまった。役に立ちたいという気持ちはうれしかったが、女を連れて行くわけにもいかない。どうしたものかと考えていると、刹那はレオの顔を見て言った。

「レオ、連れて行こう」

「あのなあ、女連れて行っても仕方ないだろう」

しかしそのレオの一言に、レオは納得しなかった。

「失礼な人ね。女でもこの国一番の兵士なの」

「それは俺も保障する。だって俺なんかじゃ全然歯がたたなかったもん」

え、とレオは驚きの声を上げた。刹那が兵士長に負かされたということは聞いていたが、まさかその兵士長がレオであるということを知らなかったのだ。

レオはニヤッと笑ってレオに言った。

「さあどうする？これでも連れて行けない？」

しばらく悩み、そしてはあとため息をついた。

「まあ、刹那が言うんだったらいいだろう。リリアもいいな」

「うん、もちろん。よろしくね、レオさん！」

刹那たちに恩返しをするということで、国一番の剣技を持つレオも刹那たちと共に異世界を旅することになったのであった。

「うん、よろしく」

+ + + + +

「ただいま」

「おかえり……ちょっと！なんで確認で腕がなくなってるの！？」

あわててその青年はサラのほうに近寄る。あわてて右腕をとって見るが、血は止まっているようだった。

サラは苦笑いして青年に言った。

「あとあとにめんどうだからね、今のうちに殺っちゃおうって思ったらこの様」

「だから確認だけでいいって言ったのに！」

あまりの必死さに、サラは自分が悪いように思えてきた。

「わ、悪かったわよ」

「早く治してきて……！」

「はいはい……」

後ろのドアのほうに歩いていき出ようとする前に、サラは青年にたずねた。

「そういえば『あの子』は？」

「ここにもやることはないからってわざわざ罫を張りにいったよ」

「まったく、ここでおとなしく私の帰りを待ってなさいって言ったのに」

不機嫌そうな顔をしていたが、怒っているようではなかった。それは言いつけを守らない子供をもつ母親そっくりだった。

「早く治してきて!!」

「はいはい……」

いつまで経っても行かないサラに大声を飛ばし、修復室へと向かわせるのであった。

第25話 女兵士長編4（後書き）

さて、いかがでしたでしょうか。今回の物語は？^{せかい}

この世界でも出てきました、神の使い。名はサラ
刹那の前に現れる神の使いとは一体何なのか？

それはもう少しあとにわかることです、あせってはいけません

そうそう、今回の世界で刹那の仲間にならに新たに加わった女兵士長、レ
ナ・プロミネンス

その実力は折り紙つきです

そして、レオとレナの持つ神器とは一体？これももうじきわかるこ
とです

さて、長くなりました。次の物語は不死編。^{せかい}

望まない永久の命を得た青年の滑稽なお話をお楽しみください

第26話 不死編1

「それじゃ、私がない間お願いね」

準備が全て整った。服装は比較的身軽なもので、手には刹那の大剣を受け止めるほどの強度の紅い太刀のしまわれた鞘が握られていた。あとは出発するだけとなったレナは自分の一つ下の階級の兵士、つまり副兵士長にあとのことを頼んでいた。

「そ、そんな。隊長がいない間に能力者が現れたらどうするんですか！？それにまだ国民に知られていないとはいえ、国王の死についてはどうなさるのですか！？」

当然副兵士長は引き受けるはずがない。自分よりもはるかに強く、人望もあるレナを異世界に行かせたくはなかった。

「仮に来たとしても、正気の人間だったら国に喧嘩売るような真似はしないし、王の件は大臣がなんとかしてくれるでしょ」

「し、しかし……」

もつともな意見に、副兵士長は口を紡いだ。それを見たレナは笑って、

「大丈夫、あなたならやれる。しっかりね」

「はい……」

納得ができなかったのだが、レナの笑顔と説得で返事をしてしまっ

た。

レナはそのまま固まっている副兵士長のいる廊下をあとにし、まっすぐ刹那たちの待つゲートの前まで向かった。

「お、来たな」

「レナさん早く〜」

途中の王の間の扉を開けるなり、声はとんできた。ふふ、と笑いながらレナは急ぎ足で三人の近くに寄った。

「で、どうやって行くの？」

当然のことながらレナは異世界の行き方というものを知らない。異世界なんてあることすら知らなかったのだから当然のことなのだが、それを聞くとにやっと笑い、刹那は右手を出した。黒い魔力が刹那の体からあふれ出て、大剣の形が形成される。

「こっするんだ!!!」

その漆黒の刃の大剣を握り締め、刹那は空に向かって勢いよく放った。

とたん、ごごごという音が辺りに鳴り響き、刹那が斬った部分に穴が開いた。ゲートだ。

レオとリリアは一緒に入り、刹那も入ろうとするが、

「レナ？」

レナが入ってこないことに気がついた。レナはゲートをじっと見つめている。何も言うことなく、ただじっと見つめている。

「どうしたんだよ？早く入らないと閉じちゃうって」

刹那の問いかけにも応じず、レナは硬直していた。レナがそうしている理由はわからないが、早くしないとゲートが閉じてしまう。

「……………わ!？」

刹那はレナの手をつかむとレナは我にかえた。刹那は構うことなくそのまま一緒にゲートに飛び込んだ。入るとほとんど同時にゲートは閉じてしまった。間髪なかった。

ゲートの中は前に通ったときと同じ虹色で、レナは物珍しそうに眺めていた。

「さっきはどうしたんだ？何にも言わないで黙ってて？」

「ちょっとね、怖かった。それだけ」

「怖い？」

レナの答えに刹那は疑問を抱く。

「うん。これからどうなっちゃうんだろう、とか、生きて帰ってこれるのかな、って。考えてたら、動けなくなっちゃった」

刹那が思っていたレナのイメージとはかけ離れた答えが返ってきた。戦っているときの姿からはどうやっても想像できない答えだった。

「どうしたの？」

「いや、驚いた。かなり」

正直に言うと、レナは怒るでもなくすねるでもなく、笑った。

「戦ってたときは強くて、凜々しい感じだったんだけどな。そんなこと言うなんて思ってもみなかった」

「それは刹那が敵だったから。今は異世界と一緒に旅する仲間ですよ？仲間にはもっと自分を見せないとね」

会話していると、光が見え始めた。レオとリリアはおそらく着いているだろう。

「そろそろなの？」

「うん、光が見え始めたらもうすぐ次の世界の合図」

まばゆい光が刹那とレナを包み、二人は目を閉じた。だんだんと光が消えていくことを察した二人は目を開けた。するとそこには刹那とレナを見てにやにやしているレオとリリアの姿があった。

「お〜お〜御二人さん、出会って間もないのに仲良く手なんてつないじゃって」

「お似合いですよ〜、二人とも〜」

言われて刹那は気がついた。そういえば、あれからずっと手をつないでいたのだ。当然今も手をつないでるわけで……

「うああああ、違う！これにはわけが！〜」

あわてて手を離すがもう遅い。レオの野次は続くのであった。

「言い訳がましいなあ刹那。そんなに照れてるんじゃないや自供してるもんだぜ」

「だから違うっての~~~~~!!!」

あわてる刹那をからかうレオ、二人の様子を面白そうに眺めているリリア。思っていたよりも、ずっと楽しい旅になるかもしれない。レナ自身も気がつかないうちに自然と笑っていた。

+++++

騒ぎが一段落したところで、一同は何をすべきかを検討することにした。現在の場所は竹やぶの中。しかし、竹はそれほどなく、真上からの太陽の光が十分に感じられる所だ。

「それで、どうするんだ？レオ」

「どうするも何も、まずはゲートの確認から始めないとな」

そうか、と言って刹那は服の中から水晶を取り出し、それを太陽の明かりにかざした。光は水晶の中に吸い込まれていき、一筋の光が

水晶から出た。

「あっちみたい、早く出発しよう」

「うん、じゃ行こっか」

光の指した方角目指して4人は歩き出した。数歩歩いただけで竹やぶのをぬけ、代わりに少し険しい上り坂が目に入った。そういえば、と上り坂を登っていく途中、刹那はレナのほうを向いてたずねた。

「なあ、なんでレナの剣は俺の大剣じゃ斬れなかったんだ？他の兵士の剣は斬れたのに」

「簡単だ。その剣も俺の銃と同じ『神器』だからさ」

レナが答える前にレオが答えた。

「そう。この神器の名は『神抜刀・炎』。私の家庭に代々伝わってきて、二十歳になったらこれを先代の保持者から正式受け継いできたの。でも、これを持っていた父が亡くなってしまったから二十歳になる前に受け継いだの。て言っても最近のことなんだけどね。」

通りで斬れなかったわけだ、と刹那は苦笑した。

「それから父のあとを継いであの国の兵士長になったってわけ。小さいころから父に剣を教えてもらってたから、実力のほうは問題なし。周りからは歴代兵士長の中で一番強いとまで言われたときもあったっけ」

レナは少し自慢げに話した。

「へえ。じゃあレナさんも私たちと同じだったんだ。私も兄さんと一緒にお父さんから訓練を受けてたんだ。まあ私は全然だめだったけどね」

あはは、と笑いながらリアもレナに話しかけた。短い時間でも、レナはこの三人の中に溶け込めたようだった。

「おい、村が見えたぞ」

上り坂を登りきったとき、レオが三人に言った。険しい坂を登った先には数件の家の集まり、つまり村が見えた。

4人は少しはしゃぎながらその村に向かった。人気はそれほどなく、レナの国の町のような活気とは比べほどにならないほど静かだった。といっても何か争いごとのようなことはないようだった。目が死んでいなかったからだ。

さて、と言ってレオはこれからのことを相談するため、3人に話しかける。

「これから俺は村の人に親父の情報を聞いてくる。お前たちはどうするんだ？」

「私は兄さんと行く」

「うーん、少し見てまわるかな。散歩みたいな感じでさ」

「私も見てまわりたいな。刹那と一緒にまわる」

つと、ここまで順調に話が続いていたのだが、レナの言葉に再び二

人がニヤニヤして刹那とレナを見る。

「お〜お〜、仲がよろしいことですねえ〜、二人とも」

「さっきなんて、ぎゅって手をつないでたしねえ〜」

ひやかしの言葉が刹那を襲った。レナははっきり言ってあまり気にせずははは、と笑ってやり過ごしていたが、刹那は単純なのでそうことにすぐ反応してしまう。

「う、うるさいなあ。解散解散！待ち合わせはここだからな〜！」

「あれ〜？刹那さん顔が赤いよ〜？気のせいかなあ〜？」

「いいから早く行く〜！」

「はいはい、わかりましたよ」

なんとかその場はやり過ごしたが、帰ってきてくとまたひやかされそうだなと心の中で刹那はつぶやいた。

「さて、行きましようか。どんなものがあるのかな〜」

「ああ、行こう」

そう言って二人は村の探検、見学に行くのであった。

第27話 不死編2

小一時間程度経ち、刹那とレナは待ち合わせの場所に戻っていった。案の定レオとリリアは何か会話をしながら待っていた。

帰ってくる二人を見るなり、やっぱりというかニヤニヤしながら見て、

「遅かったじゃないか。時間が経つのを忘れるくらい楽しかったか」

「実は刹那さん、レナさんを口説いてたりして……」

根も葉もないことを言うやつらである。絶対にそんなことないのに刹那の必死な否定のせいで、まるであったかのように見えてしまうのであった。(もちろんレオもリリアもからかっているのが本当にあるわけなどないと思っている)

「だ、だから！……」

「でも楽しかったのは本当。私の世界じゃ見れないものもたくさんあったしね」

「へえ、そうか。異世界の旅も悪くないだろ？」

「うん。これから珍しいものとかたくさん見れると思うとね」

そこで刹那がレオに突っ込む。

「なあレオ。俺とレナに対しての扱い方がまるで違うじゃないか。

俺が楽しかったって言えば絶対からかってくるだろ」

にひひ、と笑って正直にレオは答える。

「お前の反応がおもしろいんだよ。見てて飽きない」

「そついう問題じゃないだろうが!!」

年齢の割には子供っぽい一面もあるレオであった。つたく、と刹那は言って話は元に戻った。

「それじゃ、次の世界かな？レオも情報集め終わったんだろ？」

「ああ、俺のほうは問題ない。見るもんも見たからあとは次の世界だな」

そうレオが言うと、刹那は再び水晶を取り出した。太陽の光を水晶に当てると一筋の光がでて、この村に来たほうとは逆の方向の林を指した。

「あつちにゲートがあるね」

「それじゃ行きましょうか」

4人がその林の中に向かおうとしたその瞬間だった。

「おい!!あんたらどこに行くつもりだ!!!!」

後ろから叫び声を思わす大声が飛んできた。見てみると中年の男が顔を真っ青にしてその場に立っていた。

「この林の先に用があるんだが……」

「いかん！！絶対に入っちゃいかん！！その先に入ったら……」

「入ったら？」

リリアが聞き返すと、その男は黙ってしまった。

「とにかく、忠告はしたからな！！」

そう言い残すと、男はそそくさと立ち去ってしまった。

どうすればいいのか、そういった表情で刹那はレオのほうを見た。ふ、と笑ってレオは言った。

「あっちに行かないと次の世界に行けないだろ。行くしかないさ」

「でも、兄さん。林の先に何がいるんだろ？」

リリアの問いにうん、とレオはうなり、しばらくしてから結論を出した。

「わからないな。まあ行けばわかるだろう」

と、男の忠告をさほど気にしていないようだった。

しかし

これが間違いだった。

これから4人はおぞましく、

恐ろしいものを見ることになる。

+++++

林を抜けると、古ぼけた家があった。屋根の端は崩れ、壁にはひびが入っていた。水晶の光はその家を指していた。

「あの家の中だな」

4人は家に近づいた。無人かどうかを確かめるために、刹那は壊れそうなドアをノックした。

「すいませ〜ん。誰かいませんか〜」

返事はない。

「!?!」

レオの耳に妙な音が入ってきた。シュンシュン、と周りの空気を吸い込むような音だ。通常の音ではない。何の音だか未だ判断できない。

シュンシュン、という音がキーン、と響くような音に変わった。戦

闘の経験のあるレオの頭に一つのこと浮かんた。いや、それしか考えられない。確信があった。レオにはそれがなんだかはつきりとわかった。何かエネルギーを溜め、放つときの音だ。

「刹那！離れる！！！！」

「え？」

叫んだと同時にレナが飛び出し、刹那に突進した。刹那の体は横に吹っ飛ばされ、レナの体も勢い余って同じほうに飛んだ。

ドォーーン！！！！

それらとほぼ同時にドアは中からのビームのようなものによって壊された。あと少しレナの突進が遅ければ刹那の体は跡形もなく吹き飛んでいただろう。それほど激しい攻撃だった。

土ぼこりが舞い上がり、家の中に人影が見えた。男、いや青年だった。レオと同じくらいの青年だった。冷たい目をしており、目の下にはくまができている。表情も暗く、明るいとは絶対にいえなかった。手には何も武器を持っていない。ならばさっきの攻撃は一体・

「……殺す殺す殺す、みんな殺してやる。」

その青年の乾いた唇から、そう一言漏れた。

「っち」

レオは舌打ちをし、ホルスター右側のほうから黒光りが美しい神器『神爆銃・闇』を取り出した。話し合いにならないのは目に見えていたからだ。はっきり言ってあの青年は正気じゃない。

銃を構える前に青年はレオめがけて突っ込んできた。いや、突っ込むというよりもレオのほうに走ってきた。

「こいつ、何を考えている？」

ぱつと見、武器らしきものは一つもない。武器を持っている相手に素手で挑むということは得策ではないことは明確だった。それに銃などの飛び道具を持つ敵に戦いを仕掛けるのならば正面からは絶対に行ってはならない。銃口を向ける速さとたかが人間の足の速度、どちらが速いかは言わなくともわかるだろう。それなのになぜこの青年は身を投げるような行為をするのだろうか。はっきりいって意味がわからない。

頭を狙うわけにもいかず、レオは青年の足めがけて弾丸を放った。

「ぐあ………」

体を支えるべく足がもつれ、青年の体は崩れるようにして倒れた。

「何考えてるのか知らないが、戦う意思のないものにそういう行為をするのは」

レオの言葉は途中でさえぎられた。足を撃たれ、痛さで立てもしない青年が再び体を起こしこちらに走ってきたのだ。あわてて弾丸が貫通した足を見た。しかし、あるべき場所に傷がなかった。

レオは嫌な予感がした。まさか、いや、そんなことあるはずがない。その嫌な予感を確かめるため（もちろんもう一度青年の動きを止めるためもある）、レオは再び青年に弾を放った。弾は青年の足を貫通し、その傷から血が出たのが見えた。だが、

「!？」

今度は倒れなかった。傷に構うことなく向かってきた。自らの射程圏に入ったところで、青年は足を折り曲げ、そして跳んだ。ふと足を見ると、付けたはずの傷がなくなっていた。レオの嫌な予感的中していた。致命傷にならない軽傷はすぐに再生してしまうのだ。

「くそっ!!!」

距離をとろうと後ろに跳ぶが青年のほうが早い。レオは青年につかまれてしまった。

「レオ!!!!!」

「来るな!まだつかまれただけだ!!」

刹那が自分のほうに来ようとしたところを制止する。まだ青年の戦い方もわかっていなかったし、刹那を危険な目に合わせるわけにはいかない。が、

スバツ!!!

刹那の代わりにレナが来ていた。さらにレナは、レオをつかんでいた青年の腕の片方を神器『神抜刀・炎』で斬りおとし、自分も青年と距離をとった。レオもその隙に後ろに跳び、距離をとった。腕を斬られた青年の腕からは、なぜか血が流れていなかった。

「来るなと言ったのに！」

「よく言うね。あんなに距離をつめられてるのに行かないわけにはいかないよ」

不機嫌にそういうレオだが正直、レナが腕を斬ってくれたのはありがたかった。おかげで青年との距離が取れた。

「おまえもか・・・おまえも、僕を・・・」

腕を斬られた青年は斬られたほうの傷を抑え、そうつぶやいた。とたん、青年から出ていた殺気が明らかに増したのが感じられた。いや、殺気というよりも憎悪というべきか。

戦闘の経験がある二人には次にしてくる行動がわかった。攻撃だ。十中八九、攻撃がくる。

「あああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!」

青年が叫び声を上げたその瞬間、刹那、レオ、リリア、レナ、4人は信じられないものを目の当たりにした。

青年の斬られた傷から無数の触手が出てきたのだ。いや、触手というにはそれほど太くはなく、よく見ると一本一本が針金のような大

きさで、それらがひとつのまとまりとなってレオとレナのほうに向かってきたのだ。それはおぞましさを通り越し、恐怖を与えるに等しい光景だった。

「リリア、刹那！……！物陰に隠れる！……！良いというまで絶対に出てくるな！……！」

いままで聞いたことのないレオの本気の叫び声だった。レオにもう余裕なんてまったくなかった。

「リリア、早く行こう！」

「はい！」

す、と刹那はリリアの手をとり、二人は急いで近くの茂みに身を隠した。それを見届けたレオは今度こそ本気でかからなければならなかった。

するすると伸びてきた触手はスピードを緩めずレオとレナのほうに向かっていた。チャ、つとレオは銃を構え、その触手めがけて弾丸を放った。発砲音が響き、弾は触手を貫通した。が、その瞬間、まとまりとなっていた触手は離れ離れになり、改めてレオとレナに襲い掛かった。

「はあああああ！」

レナは太刀を構えて飛び出し、向かってくる触手めがけて振り下ろす。触手の耐久力はそれほど高くなく、普通の鉄でできた剣でも斬れるという感じの強度だった。触手が分離したことを確認すると、レナはすぐに後ろに跳んだ。

しかし、斬れたはずの触手はあつという間につながり、悪いことに

レオの方に向かう触手、レナの方に向かう触手と、二手に分かれてしまったのだ。さらに今まで動かなかった青年も斬りおとされた腕を手に取り、レオのほうに向かつて走った。

「くそっ!!」

レオは青年に銃を連射し、寄ってくるのを阻止しようとしたが、触手がちょうど盾になり、邪魔で当たらなかった。弾も触手を貫通するものの、弱まった弾の威力は青年にダメージは与えられない。青年はレオが射程圏に達したことを悟ると、斬られた腕の指先のほうをレオのほうに向けた。すると、一瞬で指先が鋭く尖り、そのまま凄まじい勢いで伸びていった。

「つく!!」

前方から触手と槍の如く指先。後ろに逃げれば伸びてくる指の餌食。左右に逃げれば触手に捕縛される。残りは上空。足に力を込め、青年を飛び越えるように跳んだ。指と触手は空をきり、青年はレオのいる上空をみるため、ぐいと顔を空のほうに向けた。

レオはそのまま青年の背中に弾丸を撃ちまくった。一発二発三発四発五発、青年はよけることができず、弾はすべて青年の体を貫いた。青年はさすがに効いたのか方膝を地面につき、口から血を流した。それを見たレナは勢いが弱まった触手をかわし、青年に接近する。

「はっ!!」

倒れている青年に容赦なく攻撃を加える。体への斬撃を食らわせ、青年は地面に倒れてしまった。それと同時に触手も勢いを失い、青年同様、動かなくなった。その瞬間一気に周りの空気の重さがなくなり、それが戦いが終わったことを告げた。

「ふう。危なかったね」

「ああ。それより、何者だ、こいつ？」

「わからない。魔力は持ってないみたいだから能力者じゃないってことは確か」

「……………。まあ今は検証してる場合じゃないな。刹那、リリア！出てきていいぞ！」

そう叫ぶと、がさがさと茂みから少し青ざめた刹那と怯えたリリアが出てきた。リリアは出てくるなりレオのほうに走り出していき、飛びつくようにして抱きついた。

「怖かった。あんなのと戦って死ぬんじゃないかって、思うと、すごく怖かった」

こいつは自分の実力を知らないんじゃないか？レオはそう思いつつもリリアを抱きしめ返してやった。

「おまえは自分の兄貴の力も信じられないのか？俺は死なない」

「……………うん」

刹那はいつもならばここぞとばかりにひやかすのだが、今回はそんな気分ではなかった。初めて本当の戦闘というものを目の当たりにして肝が冷えていた。

「刹那、大丈夫？顔色悪いよ？」

「いや、大丈夫。ありがとうレナ」

刹那の顔色が悪いのを心配してくれたが、体自体はどこも悪くないので笑って見せた。

「死んだのか？」

「わからない。だが倒れてる今を逃すわけにはいかないだろう」

リアの頭を撫でながらレオは刹那に言った。

「で、でも、このままじゃ………」

「心配しなくても、こいつは再生力が並じゃない。ほとんど瞬時に回復してるから大丈夫だ」

その言葉通りだった。

レオの神爆銃に貫かれ、レナの神抜刀に斬られたはずの青年は、ゆっくりと立ち上がった。傷はさっきの間で全てふさがり、手には武器に変化する腕が持たれていた。腕はもう剣に形成されていた。

そしてその剣を

刹那めがけて

振り下ろした

もちろん

刹那は気づかない

「刹那あああああああああ……!……!……!」

第28話 不死編3

「え!？」

レオの叫び声で刹那は青年の攻撃に気がつき、間一髪で即死はさけることができた。が、その瞬間肩に冷たい感覚が走った。この感覚が何を意味するのか、またそれを理解するのに少々時間がかかった。そして目の前の光景がやっと飲み込めた瞬間、激しい痛みが刹那に襲い掛かってきた。

「うぐうああああああ!!」

右腕が肩からザッパリと斬りおとされてしまった。激しく流血し、刹那はこれまでにない猛烈な痛みと驚きで地面に倒れ伏してしまった。残った左腕で裂傷部分を押さえるものの、指と指の間から血が流れ出て止血することができない。目の前が暗くなっていき、息も苦しくなり、そして痛みによる絶望を味わっていた。

「が、は……………、ぐううああ、あ……………は、あが……………
……………」

苦しいのは呼吸がうまくできないからだだった。す、つとすぐに吸い、は、とすぐに吐いてしまい、まともな呼吸ができない。痛みによる呼吸混乱である。このままでは危ない。

「一旦撤退だ!! 急げ!!」

このまま戦っていれば手負いの刹那が狙われる可能性がある。刹那の手当てにリリア、その援護にレオかレナのどちらかがつく。そう

なると、この化け物を一人で相手しなければならない。

並外れた再生力を持つこの青年に勝つ方法はまだ見つけてないうえ、二人で攻撃してもすぐ回復してしまうのだ。一人で戦うには不利な点が多すぎる。一旦退却するのが得策だった。

レオは刹那の体を持ち上げ、そのまま青年に背を向けて走り出した。

「レナ！！リリアを！！」

声を上げる前にレナは神抜刀を鞘に収め、リリアと刹那の斬られた腕を抱えて逃走を計っていた。

しかし、青年は逃がすまいと触手を伸ばしてきた。レオとレナは身体能力を強化してはいるものの、わずかに触手の速度に及ばない。するするともうそこまで迫ってきた。

「ちい！」

ちや、とレオは持っていた銃を構え、入っている弾を全て触手めがけて乱射した。弾は全て触手に当たるが、スピードは落ちるところか逆に上がってきた。

引き金に指をやるがカチツという音しか返ってこない。弾切れだ。

舌打ちをし、レオは銃のグリップをぐつと握った。するとレオの手が光り、カチャカチャとなにかの音がした。

レオは再び銃口を触手に向けた。もうレナと触手の距離はほとんどない。ぐつと引き金を引き、発砲音のあとに銃の中には入っていないはずの弾が触手めがけて飛んでいき、その弾が当たった瞬間、

ポオオオオン！！

小規模な爆発が起こり、触手は爆風で焼け焦げたり引きちぎれたりしていた。動かなくなった触手、そのチャンスを逃すわけにはいかない。今だ、とレオとレナはさらに速度を上げた。しばらく走り、後ろを向いて確認してみるが触手は追ってこないようだった。

4人の後ろ姿を見ながら、青年は持っていた剣を形成した腕で肩から生えている触手を切りおとし、そのままその腕をくっつけた。腕の切り口と肩の切り口はお互いの細胞を確かめ合うようにして交わり、数秒とたたないうちにくっついてしまった。腕も、剣の形からゆっくりと腕の形に戻り、戦闘の前の状態にもどった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

青年は4人の行ったほうをしばらく見つめ、そのあとゆっくりと家の中に戻っていった。何事もなかったかのように、平然と。

+++++

「ううぐ！・・・・・・・・・・があ・・・・・・・・・・は・・・・・・・・・・」

「刹那さん！！しっかりして！！！！」

青年の触手を振り切ったあと、一向は刹那の手当てをするために近くの茂みに入った。出血の量がひどいので村に帰っている時間はな

かった。茂みに入ったのも、万が一触手がきたときにやり過ぎせるかもしれないからだだった。

リリアは落ち着かせるために必死に声をかけるが、痛みのおかげで我を失っている刹那の耳には入らなかった。右腕の傷を残った左手で必死に抑え、額には脂汗が浮かび、苦痛に顔をゆがめている刹那を見て、レオは悔しさと罪悪感でいっぱいだった。

「くそつたれ!!」

悔しさを壊すように思い切り近くの木を殴る。しかし心の中のその感情は消えず、拳を意味もなく痛めただけだった。なぜもつと早く気がつかなかった。並外れた再生力を持っていたのはわかっていたのに油断をしてしまった。そのせいで刹那が傷ついたのだ。自分の浅はかさにはただちを感じた。

「リリア、治りそう?」

「治すよりも刹那さんを落ち着かせないと。このままじゃ心拍数が上がって出血がひどくなっちゃう。どうしよう……」

レナは心配そうに刹那の容態をリリアに聞くが、声の届かない刹那にリリアも動揺しているようだった。けが人を治したことは何度もあるが、こんなに取り乱している患者に立ち会ったことがないのでどう対処していいかわからないのだ。

困っているリリアを見て、レナも刹那に近寄った。肝心の刹那にはレナの姿がまるで見えておらず、ただただ痛みを耐えていた。

レナは刹那の肩をつかみ、ゆっくりと刹那に話しかけた。

「刹那、深呼吸しよう。ゆっくり吸って、吐く。ほら、繰り返して吸って、吐いて」

かすかだが刹那にレナの声が聞こえ、自らの呼吸を正すように深呼吸をした。

「は……………、はあ……………すう……………はあ……………」

「うん、その調子。吸って、吐いて。吸って、吐いて」

呼吸の乱れが少しずつ収まってきた。その間にレナは右手を刹那の傷口にかざした。すると、レナの右手が淡い青色の光を帯び、刹那の左手からとめどなく溢れている血が止まったのだ。魔力による止血だった。

「すう……………はあ……………すう……………はあ……………」

「呼吸が落ち着いてきたね。刹那、体の魔力を傷のほうに持ってこれる？」

呼吸が落ち着き、自然と心のほうも落ち着いたようだった。しかし、一向に腕の痛みはひかず、痛みには顔をゆがめていた。

魔力を傷のほうに持っていく。どうということなのだろうか？それは刹那やレオで言えば結晶形成するとき、リアやレナで言えば肉体の回復のときに魔力を集中させるという意味、つまり傷のほうに魔力を集中させるということなのだ。

結晶のときに魔力を集中させるということを体で理解していた刹那は、レナの言われた通り体から黒い霧状の魔力を出し、それを傷のほうに移動させた。黒い霧状の魔力は傷に染み込んでいき、その全

て傷に入ったその瞬間、刹那は異変に気がついた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？痛みが・・・・・・・・」

「和らいだでしょ？」

「でもなんで・・・・・・・・」

笑ってレナは答えた。

「今は腕をくつつけるのが先。リリア、抑えてて。」

動揺している刹那をたやすく落ち着かせるという行為に、リリアは驚かすにはいられなかった。自分ができなかつたことをいとも簡単にやったのだから当たり前なのだが。

「あ、うん。わかった」

レナの言葉ではっと気がついたリリアは、刹那の斬られた腕の切り口と肩の切り口をくつつけた。傷口に当てられたのだからもちろん痛いはずなのだが、どういうわけか刹那はあまり痛みを感じなかつた。

レナは両手を刹那の腕と肩の切断部分に当てた。やさしい青い光が出て、刹那は残っていたわずかな痛みが徐々に消えていくのを感じていた。ふと切断部分を見ると、驚いたことにどんどん回復しているのだ。骨が接着し、筋肉がつながり、皮膚がその筋肉を覆い隠した。

「はい、おしまい。動かしてみてください」

レナに言われてさっそく動かしてみる。あまり力が入らないがちゃんと指先まで動く。刹那は心底から驚いた。切断された腕がつながり、そして動かすことができる。それもほんの一分程度でだ。自分の世界の医学では到底不可能なことだった。

「どう?」

「少し力が入りにくいけど、大丈夫だ。痛みはない」

「まだ神経系のほうまで回復してないみたいですね。あとでちゃんとケアしますから安心してください」

リリアがほっとため息をついた。いや、リリアだけでなくレオもレナも一安心したようだった。

「刹那、すまない。俺が油断してなければこんなことには……」

謝るレオに、刹那は笑って返した。

「いや、レオが叫んでくれなかったら死んでたよ。頭めがけて振り下ろしてきたんだ。腕だけで済んでよかったよ。もう繋がったしな」

そう言って刹那は繋がったばかりの腕をぶんぶん振り回して見せた。が、

「ちょ、ちよつと刹那さん!!そんなことするとまたもげますよ!」

リリアの口から洒落にならない言葉が飛んできた。せっかく繋がっ

たのに、またもげるのはたまらない。ご、ごめん、と一言言って、刹那は腕を振り回すのをやめた。

さて、とレオが言った。腕組みをし、これからどうするかをみんなに聞かなくてはならない。

「これからどうするか、だな。村にいったん帰るか、それとももう一度あの化け物と戦うか」

その二択を聞いて、レナはすぐに自分の考えを口に出した。

「いったん村のほうに帰ったほうがいいと思う。今行っただって倒し方がはつきりしない以上戦っても無駄。それに刹那の腕のケアのこともあるから」

「うん。私もそれがいいと思う。それに村に行けばあの人のこと知ってる人もいるかもしれない」

「なるほどな。あとは刹那か。どうする？」

「俺も村のほうに行ったほうがいいと思う。なんであんな風になったのか、知ってる人がいればなんとかなるかもしれないし」

刹那もレナとリアの考えと同じようだった。

「それじゃあいったん村のほうに帰還だな。行こう」

レオの言葉が耳に入ると4人は茂みから出て、村のほうに向かった。そのとき刹那は、なぜかわからないが急に気になってあの青年のいる家のほうを見た。

しばらく見ているとレオに名前を呼ばれた。刹那は家のほうに背を

向け、3人の方に走り出した。

+++++

4人は村に帰還し、今日の宿を探していた。いつの間にか日が沈みかけていた。普通は宿があるはずなのだが、こんなところに人が来るはずないと村の人が判断したのか、全くないのである。村の人に泊めてくれるように頼めばいいのだが、あいにく村人は一人も出ていない。理由はおそらくあの青年も恐怖感を覚えているせいだろう。いつここにやってくるのかわからないのだから。

心なしか刹那の顔色が少し青くなってきた。やはりあのとき血を流しすぎたのだ。3人は心配そうに刹那に大丈夫？と聞くが、刹那は大丈夫と明るく振舞っていた。本当はレオに宿を見つけるまで安静にしていると言われたのだが、そんなの悪いと言ってきかないのだ。影が長くなってきた。もう夜になる。急がなければならぬ。と、そのときだった。

「あ、あんたら無事だったのか!？」

後ろから驚いた声が飛んできた。振り向いてみると、あの青年の家に行く前に止めたあの中年の男性がいた。なにやら幽霊でも見ているかのように驚いている。

「悪いのだが、あの家の青年のことについて教えてもらいたいのだが」

男性はしばらく考えていたが、ふうとため息をつき、

「お前さん方、今晚泊まる場所は？」

「ない。悪ければ野宿だ」

「なら俺の家に來なさい。もう夜だ。話は俺の家でする」

ちょうど太陽が山に沈み、一気に暗くなった。着いてきなさい、と男性が歩き出したので、そのあとを追った。村中を歩いていると、各家がパツと明るくなり、その光で道が照らされて歩くのが楽になった。

「ここだ。入りなさい」

男性が開けたドアの家にも明かりはついていて、どうやら同棲しているらしい。男性がただいま、といって入るとお帰りなさいという声が飛んできた。声からして中年の女性のようだ。案の定出迎えてくれたのは予想通り、男性と同じくらいの年齢の女性だった。

「あら？あなた、そちらの方たちは？」

「『レメンの古家』から生きて帰ってきた人たちだ。」

「え！？レメンの！？」

「そうだ。今晚泊めることになった。夕食の準備を頼む」

こくりと頷き、女性はそのまま奥の部屋に入ってしまった。男性もそ

の部屋に続いたので、刹那達もあとに続いて入っていった。その部屋には大きなテーブルがあり、人数よりも多い数のいすもあった。男性がそのいすに座り、立ち尽くしている4人に座りなさい、と言った。言われたとおり4人はいすに座った。男性の隣にレオ、その左隣からリリア、刹那、レナ、といった席順だった。4人がいすに座ったのを確認すると、男性はなんの前触れもなしに口を開いた。

「君たちはあの家で何を見た？」

「青年だ。それも傷がすぐ再生するというおまけがついた、な」

「青年、か。あのときのままか……」

男性は両手に頭を乗せてうつむいた。この男性は何か知っている。レオは確信した。

「あの家は『レメンの古家』と呼ばれている。そこに立ち寄ったものはどんな人間でも殺された。本当に『どんな人間でも』だ。だからあの家に行って生きて帰ってきたのはお前さん達だけだ」

「……とりあえず、こちらからも聞かせてもらおう。あの青年は何者だ？」

レオの言葉に男性はすぐには答えることができなかった。まず、どこから話そうか。迷った末、過去のことから入ることにした。事の始まりから、と言っべきか。

「今から20年前。俺がまだ18のときに、友にレメンというやつがいた。レメンは明るいやつで、村の連中からも好かれていた。そ

れに頭のいいやつで、村の問題もあいつがすぐに解決策をだしていた。だが………」

そこでいったん男性は言葉をきった。その次のことがとても話しづらかった。そのまま時間が過ぎていった。いつまでも黙っているわけにはいかない。男性は口を開いた。

「あいつの家に遊びにいったときだ。突然空間から黒いマントを羽織った男が出てきて、レメンに、何かをしたんだ。そのときから、あいつの体はおかしくなってしまった」

男性の言葉に刹那は反応した。黒いマントの男、まさか………
。刹那が異世界に旅立つ原因となった男。その男が、まさか………
。。

そんな刹那の心境をよそに、男性はこの始まりを語り始めた。

第29話 不死編4

「ほら、21。僕の勝ちだな」

「レメン、お前強すぎだ。ってかお前イカサマしてんじゃねえのか？」

「はは、まさか」

村のはずれのほうにある一軒家。そこに住む青年レメンは3年前に両親を亡くし、現在に至るまで一人で暮らしてきた。もちろん最初はつらかったものの、時間の経過と共に作業に慣れ、一人暮らしを不便に思った村の人々も協力してくれたためなんとか生きていけた。

「ふふふ、次は勝ったな。2、6、10、3の21だ」

「残念でした。こっちは10、10、1の21。枚数が僕のほうが少ないからまた僕の勝ち」

「やっぱイカサマしてないか？」

人柄もよく、問題行動を起こさないレメンにはたくさんの友人がいた。さらに村に問題が生じたときは巧みなアイデアを提案するので、村の人からも信頼されていた。まさに村の中心人物と言っている人間だった。

「ブラック・ジャックはやめよう。ポーカーにしよう」

「いいよ」

レメンには親友というものがあつた。今トランプをしているこの青年だ。小さいころから一緒に遊び、悩み事や困ったことを話し合つて来た仲だつた。

レメンが冷静沈着な性格だとすれば、この青年は熱血漢。頭を使つて物事を予想してから行動をとるのがレメンのやり方だが、この青年はまったく逆。先に行動してから後でこうすればよかつた、と後悔するタイプだ。性格が真逆だつたからこそ、この二人は仲がよくなつたのかもしれない。

「1ペア！」

「ストレート。僕の勝ち」

「く……」

もちろんずっと仲好しだつたわけではない。時には胸倉をつかみ合う喧嘩もした。しかしそのあとは決まって和解し、笑いあつた。もう兄弟のような存在だつた。

「2ペア！」

「フラッシュ。僕の勝ち」

「おいおい。イカサマしてんだろ、絶対」

「やってないってば……」

この青年、かけっこや木登りではレメンに勝てるのだが、こうい

運関係や頭を使うゲームでは絶対レメンに勝てなかった。本当にいままで一回もレメンに勝ったことがないのだ。神経衰弱や大富豪、ババぬきなどもつてのほか。とにかく勝てない。

「なにもできない……」

「ロイヤルストレートフラッシュ。僕の勝ち」

「ちゃんとシャッフルしたよな？」

「うん、もちろん」

今日もまた、青年はレメンの家にトランプ勝負を仕掛けに行くのだが、やはり勝てない。もう30ゲーム以上やってるのだが、それでも勝てない。

そして、青年がレメンに31ゲーム目を挑んだそのとき、不意に何か奥から物音が聞こえてきたのだ。

「ん？なんだ、この音？」

「なんだろう。見てくる」

想像もしなかった。

ただ見に行くというだけのこの行為が、自分自身を変えてしまうとは。

もの音がしたほうに足を運ぶ。ねずみが暴れてる音かなにかだろう、
と思っていたレメンは全くもって予想外な光景を目にした。

「な!？」

空間に穴が開いているのだ。常識から、いや、どう考えても空間に
穴が開くはずなどなかった。ならばなぜ、空間に穴が開いている？
あれこれ考えているうちに、その穴から黒マントを羽織った男が出
てきた。

「まったくもってランダムだね。今度は家の中か」

「あ、あんたは誰だ？」

驚いて聞くレメンに、その男は笑って答えた。

「僕は神の使いさ。名前はリバー」

「神の使い？」

疑問に思っている青年をふふ、と笑い、男は服の中に手を入れた。

「そう。悪いけど、今回は時間がないんだ」

そう言ってリバーは服の中に入れていた手を出し、一瞬のうちにレ
メンの腹に拳を放った。

「げふ!!」

レメンはその場にうずくまり、両手で腹を押さえ、悶絶していた。

リバーは構うことなく『検証』を続ける。傷口をおさえているレメンの残った手を容赦なく握りつぶしたのだ。グシャリと、まるで粘土をつぶすように。あたりにバキバキ、という骨の碎ける音と、レメンの絶叫が響き渡った。

「骨の強度、並」

「

!!!!!!!!!!!!!!」

!!!!!!!!!!」

レメンは猛烈な痛みに襲われ、声になっていない悲鳴を上げた。リバーはうるさそうにしながらも、つかんでいるレメンの手を乱暴に振り投げた。レメンは勢いに任せて飛んでいき、家の壁を貫通し地面を何度かはねると、そのまま動かなくなった。

「体そのものの強度、並。なんだ、失敗作だったのか」

不服そうに、穴の開いた壁からレメンを見る。
血まみれの床、切断されている腕、穴の開いた壁。青年はやつとそこで何が起こっているのかを理解した。

「う、うあああああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

悲鳴しかあげることができなかった。恐怖とおぞまじさに体を震わせ、無我夢中でその場から逃げ出した。廊下を全力で走り、ドアを乱暴に開け、叫びながら村のほうに帰っていった。
固まっていたくせに、逃げるときだけは早いその様子に、リバーあきれたようだった。

「まったく、人が死んだくらいで大げさな。ん？」

そのとき、リバーは外に倒れているレメンの体に変化が現れているのに気がついた。傷が再生しているのだ。グシャグシャになった手も元の形になっていき、さっきまで吹くようにして出ていた血もいつの間にかおさまっている。

「なるほどね。再生力、特化」

死んだと思われていたレメンはゆっくり立ち上がった。体の猛烈な痛みはなくなっていた。それを見たリバーはレメンの切断した腕を持って穴の開いた壁から外に出た。

「何をした………僕の体に、一体何をした」

レメンも自分の体の変化に気がついたようだった。体がこれまでになく熱くなっているし、なによりも体の傷があれだけの時間で完全に治ったのだ。普通の状態ではまずありえない。この男がさっき自分の腹に拳を入れたときに何かをしたのだ。

「さっきも言っただろ？ 『実験』だよ。」

「ふざけるな。僕の体を元に戻せ。」

「ふふふ、いいじゃないかそのままです。君は人間を越えたんだよ、たった今。『細胞一定化』の段階はもう検証済みだ。君は不死になっただよ」

聞きなれない言葉が飛び交う。しかし、レメンは疑問を覚えることはなかった。そんなことに時間を費やしている暇など、今はない。そんなレメンを面白そうに見ているリバーは、手に持っている腕を

レメンに投げた。レメンはそれを受け取り、肩にくっつけた。やはり、腕はなにこともなかったかのようにくっついた。

「ふざけるなと言ったはずだ。元通りにしろ」

「悪いけど、無理だよ。もう君は人間にはもどれない。ずっとそのままだ」

「ふざけるなああああああ！！！！！！！！！！」

怒り狂ったレメンはリバーにかかっていった。次第に速度は上がっていき、その勢いに任せて思い切りリバーの顔を殴るつもりで右手を振りかざした、のだが。

「ふっ」

リバーは笑ってそれをよけ、突き出た腕を持っていた果物ナイフで切り落とした。身のこなし、そしてこの余裕。明らかに戦いなれている。

腕は切り離されて地面に落ちるはずなのだが、今度は違った。腕は切断されず、切られた瞬間につながったのだ。余裕のあるリバーも、これには少し驚いたようだった。

タン！と地面をけり、レメンとの距離をとる。

「だいぶ体になじんできたね、『実験体』は。もうだいぶ人間離れしてるよ、今の君は」

その言葉のせいで、レメンの怒りは最高潮に達した。いきなり現れたくせに、検証だとか言っただけで自分の体を容赦なく傷つけ、自分の体をいとも簡単にすさまじい再生力をもつ不死の体へと変えたのだ。

瞬でやらなければならぬ。先天的なセンスの問題だった。

「さて、そろそろ結果は全部出たかな？そろそろ帰らせてもらおうよ」

「何を言っていると思えば。いまさら帰るだと？」

「そうさ。もうデータは十分出ただろうしね。もう君は用済みさ。いらなくなったんだよ。たとえデータが不足してたととしても、他の人間を代用すればいい話さ」

「好き勝手やっておきながらもういいから帰るだ？そんなことさせると思うか？」

「そんなこと言わないでさ。不死の体になれたんだよ？永遠に生きるっていう人間の願いを叶えてあげたんだよ？」

「僕はそんなこと望んじやいない。今の僕の望みは君の死だ」

「ふふ、怖いことを言うね」

そう言うとりバーは後ろに飛び退き、シュツと持っていたナイフをレメンに投げた。レメンは向かってきたナイフを剣ではじき落とすが、それが失敗だと気がついた。家の中に逃げ込んでしまったのだ。あわてて追うが、もう遅かった。ゴゴゴという音がして、やっと穴の開いた壁のところまで来たかと思うと、その空間の穴は閉じてしまっていた。リバーは逃げたのだ。

「くそ！逃がしたか！」

悔しがるレメン、ちょうどそれを見計らっていたかのように、村人

たちはやってきた。

「お〜い！レメン〜！」

「大丈夫か〜い!？」

村人は大勢でやってきた。おそらく青年から話を聞いたのだろう。その人々の中に、青年はいなかった。

近寄ってきた村人たち。レメンは当然のように何か励ましてくれるものだと思っていた。しかし、予想とはまったく違うことが、起きてしまった。近づくにつれ、村人たちの顔が青くなっていき、体全体が見える位置まで来たときにはその足は止まっていた。

一人の男が震えながらレメンに指を指し、真っ青になって言った。

「な、何だよ……腕……腕……」

「え？」

言われてレメンは自分の腕をしてみる。さつきりバーに腕を斬られたときに噴き出した血が自らの腕を真っ赤に染めていた。こともあろうか、その腕が剣に形成されたのでその剣にも血がついていた。これでは本当の化け物だ。あわててもとの腕に戻そうとするが、どうやって戻せばいいのかわからない。

「腕が、剣になってる……き、気味が悪い……」

「ちよ、ちよつと待ってよ。僕の話……」

「来るな!!!近寄るんじゃない!!!」

一人の男が、落ちていた石をレメンに投げた。なぜ投げたのか？もちろん怖いからだ。

石はレメンの額にぶつかり、血が流れ出た。血が眉毛のところまで流れると傷が勝手にふさがり、何事もなかったかのようにレメンは額の血をぬぐった。

「何、するんだよ………？」

「き、傷が治ってる！人間じゃない、悪魔だ！」

「ずっと人の皮かぶってた化け物だったんだ！！ずっと俺たちを騙してたんだ！！！」

「人間じゃ………ない？」

「この悪魔！！！！こっちに来るな！！！！」

その石を投げた男に続いて、他の者もレメンに向かって石を投げ始めた。人々は完全にレメンが化け物だと認識していた。レメンは傷こそほぼ瞬時に治るものの、痛みは感じる。体に当たった石はこれまでにないくらい痛いものだった。体が痛いのではなく、心が痛い。

「待つてよ………なんでだよ。何で石を投げるんだよ」

「死ね！！死ねよ化け物！！」

「お前なんて死んじまえ！！！」

「化け物に生きる価値なんざねえ！！！！！」

レメンはたまらずその場につずくまっただ。とたんに村人たちは寄ってたかってレメンに、いや、化け物に暴行を加え始めた。

「気味悪いんだよ！とつとと死ね！！！」

「腕が剣になるなんて悪魔以外の何者でもねえ！！！」

「このままほっときや村にも危害が加わるかもしれないな。ここで殺しておこう」

「そうだな、それがいいな」

ますます暴行と暴言は強くなっていった。いままであんなに優しくった人たちがここまで変わってしまったなんて知らなかった。

レメンは困惑していた。今まで尽くしてきたのに、あんなに笑いあったのに、今あるのは汚い目と手に持っている石。それらはレメンのいままで思ってきたことを裏切り、そして絶望させる行為だった。怒りを感じた。とてつもない怒りが自分の奥底から湧き上がってくるのを感じた。

なんだよ

なんなんだよ

今まで

今まで仲良くしてきたのは見せかけだったのかよ

ちよつと外見が変わつたからつて

こんなのあるかよ

人の話も聞かないで

こんなのあるかよ

ふざけるな

危害が加わるから殺すだ？

そんなの

僕を殺したいだけの理由じゃないか

僕はこんなやつらのために

今まで知恵を貸してきたのか？

バカみたいだ

生きる価値がない？

そんなのはこいつらじゃないか

だつたら僕が殺してやる

殺してやる殺してやる殺してやる

「レ、レメン・・・・・・・・・・」

遠くのほうで見ていた青年は恐怖のどん底に叩き落されていた。ぶるぶると体を震わせ、手には汗をかいていた。頭の中は真つ暗になり、吐き気もした。今日二度も人が殺される現場（あのとき青年は完全にレメンは死んだものと思っていた）を目撃したのだ。こうならないほうがおかしい。しかも、親友のレメンが腕を刃に変化させて容赦なく村人たちを殺したのだ。シヨックが大きすぎる。

青年はレメンが家に入ったのを見ると、すぐさま村に帰っていった。今の事実を村に伝えるために。この家に近寄せないために。

それ以来、この家にはだれも来なくなった。いや、来れなかった。行けば確実に殺されるこの家に近寄る馬鹿はいなかった。行くという行為そのものが自殺行為になるのだ。

物珍しさに初めて来る旅人や、誰も生きて帰ってこれないというその原因を退治しようとするもの、レメンを調査しようとするそれらのものたちは二度と帰っては来なかった。

ポツンと建っている家に住むレメンは20年間、孤独に耐え生きてきた。ずっと、ずっと。

第30話 不死編5

話は終わり、男は口を閉ざしたままだった。刹那とレオとレナも何を言ったらいいのかわからず、じっとしたままだった。リリアに限ってはレオにしがみついている。話を聞いたときに相当なショックを受けたようだった。

「夕食の用意ができましたよ」

その場の空気を変える声が聞こえてきた。女性はお盆の上に料理の持った皿をのせ、こちらにやってきた。卵を使った料理なのか、黄色いふわふわしてそうなものと、なにかの野菜を炒めたものが湯気を出していて、刹那たちの空腹感を増させた。

一人ずつ目の前にフォークと皿が置かれた。少しずつとって食べる方式らしい。

「食事の前にいやな話をして申し訳ないな」

「いや、むしろ話づらかったことをわざわざ話してくれて感謝している。リリア、食べづらい」

「うん……」

レオが言いかけると、リリアはつかんでいたレオの腕をしぶしぶ放した。それを見計らった男性は、食事の前の言葉を言う。

「では、いただきます」

「いただきます」

こうして食事は始まった。食事中、場が暗かったのは言うまでもない。

+++++

食事が終わったあと、刹那達は部屋に案内された。さすがに男女が同じ部屋で寝るのはまずいと思ったのか、男性はわざわざ二部屋も刹那達に与えてくれた。今は今後どうするかを話し合うため男部屋に全員集まっている。リリアはベッドに座っている刹那の肩に、青い光を纏った手を当てていた。ケアである。レオは腕を組みながら、一人悩んでいた。

「こうなった以上、もはや仕方ない、か」

レメンを撃破する考えは浮かんだものの、どうもやりたくはない。だが、この先に進むためにはやるしかない。刹那を刹那の世界に帰すためにも、自分の父を探すためにも、ここで立ち止まってなどいられない。なんとしてもやらねならない。

「はい、終わったよ。刹那さん、動かしてみてください」

リリアのケアが終わり、刹那に動かしてみるように言う。言われた通り刹那は腕を動かしてみる。なんともない、痛むどころか斬られた前よりも調子がいいようだった。

「うん、大丈夫だ。ありがとう」

「どういたしまして。これからは気をつけてくださいね」

ケアがうまくいき、リアはほっとしたようだった。腕をぶんぶん振り回している刹那はそういえば、とレナに聞く。

「そういえばさ、なんであの時痛みが和らいんだ？ほとんど痛みなんて感じなかったけど」

言つのを忘れてたね、と言い、レナは説明を始める。

「魔力を活性化させると肉体が強化されるってことは……？」

「それなら既に教えてある」

「ならこの説明は省くね。それじゃあ、刹那は刃物で手のひらを切ったら死ぬ？」

いきなり大げさなことを言う。

「まさか。手のひらを切ったくらいじゃ死なないよ」

「なら同じ傷を小さい動物、例えば虫とかに与えたらどうなる？」

「……死ぬかもしれない。それってまさか……」

満足そうに笑ってレナは答えた。

「そう。肉体の強化をしなかった刹那には致命傷だったかもしれないけど、魔力を一点集中させたことで部分だけの強化を行ったから、たいした痛みにならなかったってこと」

「つまり、ねずみの受けた重傷は象にしてみればかすり傷に等しいってわけか」

「まあそういうこと」

疑問が晴れた刹那は、難しい問題をやっと解いた子供のようにうれしがつっていた。望んでいた知識が増えるとうれしいものだ。レナはそんな刹那を見て笑っていた。

説明が終わり一段落したところで、レオはベッドに腰をかけ話を始めた。

「明日は、レメンを殺すつもりでいかないといけない」

「え！？そんな！それじゃレメンが！」

いきなりのレオの言葉に刹那が血相を抱えて反対する。やはり、刹那は人の命を奪うという行為をかなり反対している。

「私はレオの意見に賛成。今日は本気で斬りにいかなかったけど、たぶん本気でいっても倒せないと思う」

「レナ！！」

「あくまで『つもり』。本当に殺すわけじゃないよ」

「でも！！」

「刹那、俺だってむやみに人は殺したくない。殺さずに済むんだっ
たらそうしたい。だが、それが今日の結果だ。刹那の腕を斬りおと
させてしまうことになってしまった。俺の甘い考えがお前を傷つけ
てしまった」

「それは違うだろレオ！あれは俺の不注意でなったことじゃないか
！レオのせいなんかじゃない！！」

「いずれにせよ、次の世界に行くためにはどうしてもあそこを通ら
なければならぬ。あいつの視界に入らず、ゲートを開き、進む。
戦いながらの同時進行じゃ無理だ。あいつはたぶん一定以上のダメ
ージを与えれば動けなくなる。その間に行けばなんとかなる。俺と
レオで一気にダメージを与えて動かなくなった瞬間に行くこと、い
いな」

「……………でも」

仕方ないとはいえ、どうも納得がいかない。もしかしたら死んでし
まうかもしれないのだ。そう思うと、どうも気が滅入ってしまう。
そんな刹那に、レオは気休めの言葉をかけてやる。もしかしたら、
気休めにもならないかもしれないが……………

「心配するな。あれだけやったのに生きてるんだから、たぶん大丈
夫だ」

「……………うん」

頭の中で本当にいいのか？ということを考えながら刹那は首をゆっ
くりと縦に振った。

「刹那さん、ちょっといい？」

話が終わったそのとき、リリアが刹那に言った。うん、と返事をし
て、刹那は部屋の外に出ようとすするリリアのあとをついていった。
戸を開け、廊下に出た刹那とリリアはお互い見合うような形で向
き合っていた。

「兄さんのこと、わかってあげて」

「え？」

いきなりのことだったので、なんと返答していいかわからなかった。
しかし、不意を突かれている刹那を構うことなくリリアは話を続け
る。

「今回の刹那さんのこと、一番気にしてるの兄さんなの」

「でも、あれは俺の不注意で……」

「そうかもしれないけど、私からもあれは兄さんの判断ミスに見え
た。倒したって思ったから出てきていい、って言った。けど、まだ
倒れてはいなかった。そのせいで刹那さんは傷ついた」

「レオは悪くない。悪いのは俺だよ」

「私が言いたいのは、兄さんのつらさをわかってあげて欲しいって
こと。あれは刹那さんのせいかもしれないけど、兄さんはそれを認
めない。だから兄さんは責任を自分ひとりのせいにしちゃう。兄さ
んの悪い癖なんだよね」

刹那は何も言い返すことができなかった。リリアはなにやら難しい顔をしている刹那に笑いかけた。

「難しく考えなくていいんです。単に兄さんはそういう性格だって理解してあげてほしいだけですから」

「わかった」

そう一言言うと、先ほどの難しい顔はどこに行ったのか、笑ってつぶやいた。

「レオ、ちゃんと俺たちのこと考えてるんだな。」

「そうですね。変に難しく考える人なんです」

あはは、と刹那は笑った。つられてリリアも笑い、二人の笑い声につられてレオとレナが廊下にやってきた。

「おいおい、夜中だぞ。笑うのもいいけど、声を小さくしろよ」

「ごめんごめん」

ふう、とレオがため息をつき、もう遅いな、と呟いて会議はお開きになった。

「さて、そろそろ寝るか。ほら、部屋にもどれ」

「うん、それじゃおやすみ」

「おやすみ、刹那さん、兄さん」

「ああ、おやすみ」

レオの言葉で会議は終了し、レナとリリアの二人は部屋に帰っていた。レオも明日は早く出る、と刹那に言ったので、今日はもう寝るらしい。

備え付けのベッドにそれぞれもぐりこみ、レオが明かりを消すと、部屋の中は真っ暗になった。だんだん時間が経つにつれ目が慣れてきて、月の明かりが窓からさしこんで暗い部屋を明るく照らしていたのに気がついた。

「なあ、レオ」

「なんだ？」

刹那に声をかけられ、レオは返事をする。刹那の声はさっき笑っていた声よりも細く、弱い声だった。

話しかけた刹那はすぐには話さず、少し間をおいてからレオに話しかけた。

「レメン……かわいそうだよな。今まで誰からもかまってもらえなかったんだろ？」

「ああ。話からはそう聞き取れる。おそらく、変な体になったせいで怖がって近寄れなかったんだろっな」

「ずっと……ずっと化け物だって言われ続けたのに、それでも一人で生きてきたんだよな」

「たぶんな。ずっと一人だったんだろっな」

「死のう、って考えなかったのかな？」

「わからないな。だが、死のうとしたんだったら生きてるはずがないだろ」

「レオは、レメンのこと、可愛いそうだって思うか？」

「……………」

レオは刹那の問いに答えることができなかった。頭の中では孤独に生きてきたレメンのことを哀れに思ったが、口には出せなかった。口に出してしまうと、戦うときに躊躇してしまうかもしれないから。

「刹那、もう寝よう。明日は早い」

「うん、ごめん。変なこと言って」

「いや、いい。今度こそ、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

こうして二人は眠りについた。

明日、どうなるのかはこの時点では誰にもわからない。

誰が傷つき、そして誰が傷つけるのかは、神でさえ、わからない。

+++++

翌朝、刹那は目が覚めた。レオに起こされることもなく、一人で起きることができた。

むくり、と起き上がり、隣のベッドを見てみるとレオはいなかった。うづんと伸びをしたあとベッドから降り、そのままドアを開けて下の階に下りていった。

「あ、刹那さんが起きた」

一番最初に気がついたのはリアだった。階段をゆっくり降りてくる刹那は、むう、とむくれて言葉を放った。

「なんだよ。もうみんな起きてたのか」

「でもまだ朝食は食べてませんよ。行きましょう」

そう言うと、昨日夕食を食べた部屋のほうにたつたと走っていつてしまった。その後を刹那が追う。テーブルにはもう料理が置かれていて、いすにはもう全員腰をかけていた。

「なんだ、起きたのか。今のうちに食っちゃおうと思ったのに」

レオがにひひ、と笑って刹那をからかう。昨日の真面目さは微塵もなかった。

「なんだよそれ。いくら俺の寝起き悪いからって、そりゃないだろ」

少しむくれた刹那は空いていた席に座った。クスクスと笑いながらリアも席に着く。

全員そろったな、と言って、男性は食事の前の言葉を言う。

「それじゃ、いただきます」

「いただきます」

朝食のときは昨日の暗さとは逆に、会話もはずみ、明るかった。

+++++

「そうか……やはり行くのか」

「ええ。進むためにはあそこを通らなければなりませんから」

「……わかった。くれぐれも、気をつけてな」

「色々ありがとうございます」

レオが男性との挨拶を済ませ、待っている刹那たちのほうに向かう。来た来た、と刹那が言うと、ふうとため息をついてレオは刹那に言う。

「あのお、普通はみんなで挨拶するもんだろ」

「まあ、いいじゃんか。ははは」

のんきなやつだ、と心の中でレオがあきれかえった。

これから刹那たちは、再びレメンの古家に向かおうとしている。人間離れした体を持ち、そのせいで村人たちから忌み嫌われてきた悲しい青年、レメンの住む家に。

男性の家を出るときに、打ち合わせは終わっていた。戦いは一瞬で終わるとレオは言っていた。なぜなら、初っ端っから本当に全力でかかっていくからだ。一定以上のダメージを食らわせれば動かなくなるのだから、全力でやればすぐに動かなくなる。これはレオに言われなくても刹那にも理解できた。レオとレナ（特にレナ）は戦闘に関してはかなり優れているということを刹那は知っているからだ。

4人はレメンの古家に歩き出した。一步一步進むごとに、なぜだかわからないが空気が重くなっていくのを感じた。それは刹那だけではなく、他の3人も同じだった。

古びた家が見えた。昨日ぶち破られたドアはいつの間にか直っていて、周りには戦いの跡もなくなっていた。

「刹那、リリアを頼む」

こくりと頷いて、刹那はリリアと共に近くの茂みに隠れた。がさがさと入っていくのを見届けると、レオはチャ、と黒い神爆銃を構えた。ゆっくりと銃口を家の扉に向け、ゆっくりと引き金をひいた。ドント音が響き、弾丸が高速で飛んでき、そして、

ドオオオン！！

爆発が起こった。無防備で油断しているところを殺傷力の高い爆発で攻める。容赦がなかった。爆発で家の半分が吹き飛んで、残った部分は燃えていた。パチパチと音を出しながらだんだんと火は広がっていった。

「わかってる。あいつはこれくらいじゃ死なない。」

レオの思ったとおりだった。燃え盛る家の中から無数の触手が飛び出し、レオとレナのほうに向かってきた。まだレメンの姿は確認できていない。姿を家の中に隠して触手で攻めるといふ作戦だろうか。この作戦、一見良い考えのように思えるが、遠距離武器を持つ人間には実にあっけなく破られてしまうのだ。

触手はレメンの体から生えている。ということは伸びてきている場所を狙って撃てば、ほぼ確実にレメンに被弾することになる。

すると勢い良く伸びてきた触手をかわし、レオは右手に持っている銃をその触手の原点に向かって連射した。6回の発砲音のあとに銃弾が飛び出し、燃え盛る炎の中に向かっていった。

銃の中の弾が全てなくなったのがわかった。レオは持ち手の部分をグツ、と握る。するとやはり光りを放ち、かちやかちやと弾が装填される音がした。

その瞬間だった。燃えている家の屋根を突き破り、レオとレナの前に着地したのだ。憎しみの目をし、右肩から下が触手を形成しているレメンであった。

レナがすっと紅の刀身、『神抜刀・炎』を抜き、レメンにかかっていった。

「よくも……よくもこんな真似を……」

向かってくるレナを、レメンはただにらみつけていた。レナは構うことなくレメンの胴体に斬撃を加えた。一閃の炎の光を思わせるその太刀はレメンの体を切り裂き、倒れこんでしまうほどのダメージを与えた。

レナが後ろに跳び、間合いを取ったのを見計らったレオは容赦することなく装填されている弾丸を全てレメンに撃ち込んだ。当然よけることができないレメンはもろに弾を食らい、口から血を吐いてうつぶせに倒れてしまった。動かなくなる程度のダメージを与えたのだ。

「刹那あ!!!」

レオが叫んだのと同時に刹那とリリアは駆け出した。茂みから這い出し、刹那は懐から出した水晶から出ている光の指す家の中めがけて全速力で走った。

レオとレナは、レメンがいつ再び動き出すのかわからないのでいつでも攻撃できるようにレメンを見張っている。動き出したらその瞬間に再び攻撃を加える。えげつないが仕方がない。その隙に刹那はゲートを開け、次の世界に旅立つ。

レオの作戦は完璧だった。『ここまででは』。
刹那が家に入りこもうとしたその瞬間、

「え!?!」

地面を突き破り、無数の触手が沸き出てきたのだ。すでに焼けてしまっているドアの代わりに、触手は刹那とリリアの進行を妨害した。

家の中には入れさせない、まるでそんなことを言っているかのよう
に。
家の中に入ることができなくなってしまう刹那とリアは触手との
距離をおき、レオにどうすればいいかアイコンタクトをとる。

しかし、レオもどうなっているのかわからなかった。最初に見たレ
メンは右肩から触手に変化していた。だが、その右肩の触手はピク
リとも動いていないし、地面に刺さってもいない。ならば、刹那た
ちを妨害しているあの触手はどこから出ているのだろうか。

頭の中が混乱しているそのとき、レメンがむくりと立ち上がった。
ダメージが回復してしまったのだ。

あわててレオは神爆銃を構える。しかし、撃つのを少しためらって
しまった。

「何!？」

ためらったと言うよりも、レメンの姿に驚いて撃てなかった、と言
ったほうが正しいか。

刹那たちを妨害した触手、それはレメンの腹の傷から生えていたの
である。てつきり腕からしか触手を出さないものだと思ひ込んでい
たレオは意表を突かれてしまった。

「なにボーっとしてるの!!」

レナが大声を張り上げ、まだ完全に起き上がっていないレメンに向
かっていった。レメンは相変わらず恨みで満ちた目をしており、向
かってくるレナをにらみつけた。

ひゅっ、と風を切る音が響き、紅い太刀が触手にはなっていない左
腕の肘を切り落とした。血が噴き出しているが、レメンは気にして
いない様子だった。レナはすぐさま距離をとり、レメンの次の攻撃

に備えた。

やがて、レメンは完全に立ち上がった。最高潮の怒りと恨みを目に灯して。戦いはこれからだった。

「刹那とリリアを戻すのはもう無理だな」

レメンが立ち上がってしまったので、刹那たちはもうさっきの茂みには戻れなくなってしまった。うかつにレメンの近くを通ると攻撃される恐れがあったからだ。

こうなってしまうえば、もう一度ダウンさせるしかない。幸いレメンは自分たちのほうにターゲットを絞っている。少なくとも刹那たちが攻撃されることはない。

そうとなれば急いで済ませなくてはならない。チャ、と神爆銃を構え、レメンに向かって発砲する。弾丸はグングンレメンに飛んでいき、レメンの胴体に命中した。

胴体に弾丸が当たったその瞬間、レメンの右の触手が始動し始めた。まるで蛇のように近寄ってきたかと思うと、いきなり先が尖り、高速で向かってきたのだ。

前から来る槍の雨、かわすには跳ぶしかない。レオとレナは上に高く跳び、向かってくる槍の雨を回避した。だが、

「レオ！！！！！！！」

刹那が声を張り上げている。槍の触手はかわしたし、追撃の触手も来ていない。ならば何なのだろうか？辺りを見下ろしてみる。

燃えている家、そのすぐそばにいる刹那とリリア、そして肘から先がない腕を『こちらに向けている』レメン。

「まずい！！！！！！」

最初にレメンの古家にむかったとき、出会い頭に強力なビームでドアをぶち破ったのは他でもない、このレメンだ。
いやな汗がレオの体中から噴き出した。今は空中にいるため身動きが取れない。そして、レメンは腕をこちらに向けている。
キーン、と前にも聞いたような音が響き、レメンの向けている腕に光が集まった。そして、

ドォーーン!!!!!!

あのとときと同じビームが放たれた。ビームはやはりレナではなく、まっすぐレオのほうに向かってきた。

「っちい!!!!!!」

レオは左手で腰のホルスターからもう一つの銃を取り出した。『神爆銃・光』である。『闇』の美しい黒とは逆の、太陽の光を受け、神秘的に光を反射している白。

チャ、と白い銃を構え、向かってくるビームに向かって引き金を引く。シャドウの腕を奪ったあの『弾丸』が、放たれた。文字通りの轟音と共に白い銃から巨大なビームが出た。そう、あのととき城の壁に巨大な穴を開け、シャドウの腕を奪った弾の正体はこの巨大なビ

ームだったのだ。

レオの『アルテマ』はレメンの腕から出たビームをあっさり飲み込み、そのままレメンのほうに向かっていった。

向かってくるアルテマに危機感を感じたレメンは横に跳び、ぎりぎりのところでアルテマの直撃を回避した。だが、レオの強力すぎるアルテマは地面をえぐり、激しい爆風を巻き起こし、レメンを巻き込んだ。

レオとレナはそのまま着地した。地面の表面の砂が舞い上がり、視界が悪くなっている。レメンはおるか、刹那とリリアの姿も認識できない。

「まあ、刹那がうまく誘導してくれただろう」

そんなことを思いつつ、これからどうするか。レオはそれを考えなくてははいけなかった。こう視界が悪くては、銃を撃っても無駄だ。かといってこのまま黙ってここに居るわけにもいかない。一体どうすれば

「が！！！！？？？」

何の前触れもなく腹部に痛みが走った。見てみると、槍のように尖っている触手が貫通していた。その触手はぐねぐね動き貫通した傷口を散々広げたあと、あっけなくレオの体からぬけた。肉体強化しているおかげでのた打ち回るほどの痛みはなかったが、それでも膝をついてしまうほどの痛みは残ってしまった。

「馬鹿な・・・・・・・・・・・・・・・・視界が悪くて俺の姿なんて見えるはずが・・・・・・・・・・・・・・・・」

ふと、自らを貫いた触手を見つめる。

「なっ!?!」

触手の一つに目があったのだ。こちらをじっと見つめ、傷ついたのを確認するとゆっくり目を閉じ、最初から目なんてなかったかのようになくなってしまった。

「くそったれ……そんなことまでできんのかよ……」

「レオ?これからどうするの?」

不意にレナの声が聞こえてきた。まだレナのほうに触手は行っていないようだった。いくら触手に目がついていたとしても、近くにターゲットがなければ意味がないようだった。

だんだん舞い上がった砂が落ち着き、周りの様子も見えてきた。きよきよとレオを探しているレナは、血まみれで腹を押さえているレオを見つけた。

「レオ!?!」

慌ててレナは近寄る。が、そのレオの近くにはさきほどの触手がまだうごめいている。しゅるしゅると自分のほうに伸びてきた触手に気がついたレナは触手を出している張本人のレメン目掛けて特攻する。

視界が回復し、ターゲットに狙いがついたのはレナだけではなかった。レメンは特攻してくるレナに向けてあのビームを再び放った。

「!?!」

とつさに踏みとどまり、神抜刀を地面に突き刺して魔力を込める。すると、レナの周りに薄い紅色の炎壁が出来上がり、レメンのビームを防いだ。

レナの持つ神抜刀・炎は、持ち主の魔力を込めることにより、こめた分だけ炎が自在に使えるという能力を持っている。今行ったのは魔力による防壁である。他にもやろうと思えば自分の周り炎で包むということもできるし、炎で形成された巨剣を作ることにも可能だが、今はそんなに時間がない。魔力を込めるにしても時間がかかるのだ。防壁は使う魔力も少ないため、短時間で作ることができた。逆に回りを炎で包むなどということは時間が1分弱もかかってしまう。

レメンのビームを防ぎきったレナは再度レメンに特攻する。もうそんなに距離は遠くない。す、とレメンは今一度レナのほうに向かって腕を構えた。もう一度ビームを放つ気だ。

さすがに二回目は放つ前の動作などもわかってくる。レナは二つ見抜けた。一つ目は放ってくる腕の切り口をこちらに向けていなければならぬこと。もう一つは放つ前のほんのわずかな時間に腕が光るということ。

レメンがビームを放ったのはレナが空高く跳んだあとだった。レメンのビームは連続しては撃てない。時間がかかるのだ。だから一度かわしてしまえばあとはこっちのもの。二回目を放つときにはレメンを斬れる射程までたどり着いている。

レメンが自分のもとに降りてくるレナにビームを撃とうとするが間に合わない。落下の威力を利用し、レナの神抜刀はレメンの右肩を切り落とした。もう容赦はしない。チャ、と握りなおすと目にも止まらぬ速さでレメンの胴体を切り裂いた。たまらずレメンは倒れる。ここまでは今までと同じ、違うのはここから。

す、と神抜刀を振り上げ、レメンの首を狙い定めた。殺すつもりはなかったが、今回はやむを得ない、レナの神抜刀はレメンの首目掛けて振り下ろされた。そのときだった。

「!？」

足に違和感を感じ、体全体のバランスが崩れてしまった。背中から倒れてしまったレナは違和感のあった足を見てみる。触手がまとわりついていたのだ。

「そんな！？まだ動けたの!？」

慌てて触手を切断しようとするがもう遅かった。レメンはがばつと立ち上がり、レナの足に絡まっている触手を使ってレナを空中に投げた。別に投げられたこと自体はダメージとまではいかなかったし、空中にいる間も追撃はされなかった。だが、触手に絡めとられた足がかなり痛む。肉体強化をしてもだ。おそらくつかまつたときに恐ろしい圧力をかけられ骨折してしまったのだろう。

「う……………」

足は体を支えている部分の一つである。その足の片方が損傷してしまった今、レナには反撃はおろか逃げることもすらできなかった。レメンは近寄ってくる。とどめをさすために、ゆっくりと。

「まさか……………ここまでやるなんて……………思わなかった……………」

絶望が顔に浮かんでいるレナ。重傷を負っているレオ。その一連の流れを見ていた刹那は体から黒い霧を出し、大剣を形成した。

「刹那さん!？」

「リリア、俺がなんとかひきつけるからレオ達を安全なところに」

「でも!! 兄さんだって、レナさんだってやられちゃったんだよ？
勝てないよ!!」

リリアが必死になってとめる。

確かに、戦闘能力が優れているレオとレナがやられてしまったのだ。それなのに、戦いに関しては素人の刹那がレメンに打ち勝つなど無可能だった。無謀、自殺行為、それらに等しかった。だが、

「ここで俺が出ないと、レオとレナは絶対殺される。仲間が死ぬところを、俺は見たくない!!」

レメンが二人に近づいていく。もう時間がない。

「やるしかない。俺がやらないといけないんだ。リリア、頼む」

刹那がこんなに必死になっているところを、リリアは見たことがなかった。確かにこのままだとレオとレナの二人は確実に殺される。だが、刹那がほんの少しの時間を稼いでくれれば、二人を安全なところに避難させることができるかもしれない。

「うん! わかった! 刹那さんお願い!!」

「ああ、わかった。やってやるさ!!」

刹那のこの戦いは、異世界で最初の山場となった。

第31話 不死編6

大剣をぎゅっと強く握り締め、刹那はレメンにかかっていた。速度は次第に速くなっていき、刹那に気がついていないレメンは、勢いに任せて振り下ろされた大剣に触手を切り落とされた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

切り落とされた張本人のレメンは、視線をレナから刹那へと移した。レメンのその目は、恨みのこもった目というよりも、いきなり現れた刹那を不思議に思っているような目だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

射程の短い武器の戦い方のセオリーとしては隙をついて一気に斬り、そして反撃を食らわないうちにいったん間合いを取る、というものがある。レナが使っている戦闘手段だ。

ところがその刹那はと言うと、レナのように攻撃のあとにやる間合いを取る、ということもせず、ただ黙って大剣を構えている。なぜだ？簡単なことだ。何も作戦など考えず、ただ勢いだけで攻撃した刹那は、いったん間合いを取るということを知らないからである。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

こういった一対一の戦いで、相手の腕を切り落としたことは見事だ。たとえそれが勢いによるものでも、切ったことには変わりはない。だがそのあとのこと、すなわち『間合いを取る』ということをやらなければ、その見事な行為もただの自殺行為で終わってしまう。反

撃してくる対象の近くにいるのだから。

「く……!?!」

切ったほうの腕から触手が出てきて、ボーっとしている刹那を襲う。しゅるしゅると何本も触手が自分のほうに攻め寄ってきたかと思うと、いきなり全てが剣に形成され刹那めがけて一斉に振り下ろされた。

取り乱すことなく全てを受け止め、払いのける。レナの世界で城に侵入したときも同じ体験をしている。これくらいわけはない。払いのけた剣の触手を大剣で斬り、次の攻撃に備える。

「?」

レメンは刹那に疑問を持った。少し前に戦ったレオやレナとは違い、攻め込んでこないからだ。何か意図があつてのことなのか、それとも攻め込んでこれないほど臆病者なのか。

試してやろう、とレメンは思った。どうせ自分は死なない。隙をわざと作ってやれば全部わかる。触手を刹那のほうに伸ばし、自分もそのまま突っ込む。これなら相手の回避方法は自分の後ろに跳ぶしかない。右にも左にも逃げ場はない。向かってくる触手のせい以後ろにも逃げられない。触手を切つて前に逃れたとしても、あとから来る自分を警戒して前には突っ込めないのだから。そしてかわしたあとに自分の背中を斬ることもできるだろう。まったくもって隙だらけなこの体を。

やはり、刹那は向かってきた触手を跳んでかわした。ここまでは予想通り。次はおそらく攻撃をしてくる。そうレメンは思っていた。しかし刹那はレメンの後ろに跳び、攻撃することなくただ次の攻撃

に備えて大剣を構えているだけだった。

レメンは刹那が何をしたいのかわからなくなってきた。攻撃できるときに攻撃しない。ただこっちの攻撃をかわしているだけ。

「つらかったんだよな……いままで……」

刹那の口からその言葉が出た。その言葉のせいで、レメンの怒りは本当に最高潮に達してしまった。

+++++

「大丈夫？二人とも。」

「俺は、何とか大丈夫だ」

「私も大丈夫。それより刹那が……」

リリアは刹那がレメンの気をひきつけている間に二人を背負い、茂みまで来たのだった。二人を担いでここまで来るのは無理なはずなのだが、そこは火事場の馬鹿力というやつを發揮し、なんとかここまで来れた。

この二人を助け出したまでは良いものの、戦っている刹那をどう助けたらいいかわからなかった。レオは腹に穴が開いているし、レナは足が折れている。自分が出て行っても邪魔になるだけ。誘導できる者はいなくなってしまうた。

「俺が出る……………」

レオはゆっくりと立ち上がった。が、腹の痛みに耐えられず、膝をついてしまった。

「駄目！！いま動いたら出血がひどくなっちゃう！！」

「だったらどうすればいいんだ！！このままだと刹那は死ぬんだぞ！！！」

「二人とも、静かにしたほうがいい。せっかく刹那がひきつけたのに台無しになっちゃう」

レナは取り乱すことなく、冷静に二人を制する。二人は黙ってレナの言ったことに従った。

「だが、このままだと本当に刹那が殺されるぞ？」

「わかってる。でも手負いの私たちがいっても意味がない。出て行ったところで何も変わらない」

そう言ったあと、レナはうつむき悔しそうに言った。

「私だって助けに行きたいよ。『仲間』だもの。でも、体の傷が行かせてくれない……………」

見ている、心が痛くなった。

「……………見守ってるしかないのか」

「・・・・・・・・・・うん」

3人の空気が重くなったときだった。
不意に黒い光が辺りを照らした。

3人はそのほうを見てみる。

そこには肩を上下させ、必死に呼吸している刹那と、
上半身と下半身に切られたレメンがあった。

+++++

「お前に何がわかるんだ！！！！！」

レメンは両腕の切り口から触手を出し、それを剣に形成させ刹那に襲い掛かった。刹那は突如突っ込んできたレメンに取り乱すことなく、大剣を横にして剣を受け止めた。受け止めたときに感じた重量感は、見た目に反して重かった。

「今まで信頼してきた人々から裏切られる僕の気持ちが変わるか！！！」

両腕が剣のため、刹那は逃げる余裕がなかった。右腕の剣を振り下ろされるのは、間を空けることなく左腕の剣が振り下ろされ、そして再び右腕の剣が振り下ろされる。隙が全くなかった。一瞬でも防衛を解けば自分の体が切り裂かれてしまう。

「そして罵倒され、忌み嫌われてきた僕の気持ちがお前にわかるか
！！！！！」

どうすればいいかわからなかった。このまま防御をしても意味がない。かといって攻めようがない。一体どうすればいいのか・・・

「血を一晩流し続けても死なない、首を切っても死なない、心臓を串刺しにしても死なない、頭を突き刺しても死なない！！死のうとしても死ねないやつの気持ちかわかるか！！！！！」

レメンは叫ぶように自分の過去を話し続けていた。刹那はその言葉を聞いていただけで胸が苦しくなってきた。一体レメンがいままでどれくらいの苦しみを味わってきたのかはわからない。今叫んでいることの他にももっとつらく、苦しかったときがあったのだろう。刹那にはそう感じ取れた。

「周りには誰もいない！！孤独にずっと耐えてきた僕の気持ちかわかるか！！！！！！！」

言葉を放つごとに、放たれる剣の威力は強くなっていった。

威力が強くなってきた理由には理由がある。振り下ろす時間が長ければ長いほど威力は高まっていく。そのため、強い攻撃を放つときにはよりターゲットから離れたところから剣を振らなければなら
ない。

今レメンは怒りに駆られて力一杯刹那めがけて剣を振り下ろしている。徐々にだが、左右の腕の剣が振り下ろされる間が大きくなって
いる。その間がもう少し大きくなれば、切り込める。

「おまえに、おまえに」

右腕の剣が来た。次にくる左腕の剣は高々と振り上げられている。攻めるのは今しかない。

「あああああああああ！！！！！！！！！！」

大剣を思い切りレメンの腹めがけて振り上げたそのときだった。刹那の持つ大剣が黒く光り、ターゲットのレメンのほうに強い衝撃波が放たれた。

「!?!」

レメンは我に返ったがもう遅い。隙を見せた瞬間、刹那の大剣と衝撃波に襲われる。

始めに衝撃波がレメンの体全体にぶつかった。村人に殴られたあのときと同じく、全身に痛みがはしった。次に来たのは黒い大剣だった。まるで風のように自分の体を通じたかと思うと、いつの間にか上半身と下半身に分かれてしまっていた。

「が……………」

レメンはそのまま地面に倒れ、気絶してしまった。痛みによるものだ。

斬った張本人の刹那は一生懸命呼吸をして自分を落ち着かせていた。初めて人をこんなに傷つけた。もしかしたら死んでしまったのかもしれない。そうになったら、俺は……………

「刹那……………」

レオの声で我に返った。振り向いてみると腹を押さえながら歩いてくるレオと、リアに肩を担がれているレナが見えた。刹那は大剣を黒い霧に戻したあと霧を自分の中にしまいこみ、あわててレオの元に近寄る。

「レオ、どうしよう。俺、俺………」

「大丈夫だ、まだ生きてる。上半身のほうを覚えてみる」

見てみるとわずかに上下して呼吸をしているのがわかる。はあ、と安心のため息が自然に出た。

「さて、早いところ行こう。今だったら大丈夫だ」

ああ、と返事をしてゲートのある位置を水晶で確認する。幸いゲートのある所と、そこまでの道のりの炎は消えていた。次の世界に行くには支障がない。

4人はゲートのほうに向かった。が、

「どうした刹那？」

足を止めた刹那にレオが声をかける。刹那は迷っている。顔からそんなことが察することが出来た。

「どうしたんだ刹那？」

もう一度刹那に声をかけてやる。すると刹那は決心したのか、顔を上げレオに言った。

「ここで、レメンを殺そう。」

+++++

本当は意識があつた。気絶しているふりをしていただけだつた。油断しているあいつらの後ろ姿を思い切り攻撃するつもりだつた。そのため気絶したふりをしていた。

あいつらは思ったとおり、自分に背を向けている。だが一人だけ、一人だけこちらを向いているやつがいる。そいつはなんだか悲しそうな目でこつちを見てばかりで、いつまで経つてもあいつらの後についていこうとしない。

なんなんだよお前はさつきから。僕の何がわかるんだ。どうせつらかつたんだろつな、の同情でその顔をしてるんだろ。そういつやつが一番嫌いなんだよ。何もわからなくせに、僕の気持ちを知つたつもりでいるやつが一番嫌いなんだ。不意に、そいつは仲間の一人にこう言った。

「こつで、レメンを殺そう」

僕を殺すだ？そんなことできるわけがない。いままでありとあらゆる手段を使って死ねないのに、いきなり来た人間が自分を殺せる手段を思いつくわけがない。おもしろい。

あいつらが自分を殺してくれればそれでよし。出来なければあいつ

らを殺すまで。
成り行きを見ていてやるうじゃないか。

+++++

「刹那、さん？」

「刹那、あなた何を言っているのかわかるの？」

リリアとレナが信じられないという表情で刹那に問いかけた。刹那は決心したその顔を崩さず言い返した。

「わかってる。自分がどれくらい間違っただことを言っているのか、わかってる」

刹那はそう言ったあと、いったん口を閉じた。

「刹那、人を殺すこと、人の命を奪うことは苦痛にしかないんだぞ？お前はその苦痛を自ら味わうと言っているんだ。そんなことをする必要なんてないんだぞ？」

レオは傷を抑えながら必死に刹那に説得をする。だが、刹那はその顔を崩すことなくこう言った。

「でも、これじゃレメンがあんまりだ！このまま俺たちが行ったら

またレメンはまた一人孤独に生きていかなきゃならない！誰にも構ってもらうことなく、誰にも接してもらうことなく生きていけないといけない！人に忌み嫌われ、恐怖されながらこれからも生きていけないといけない！レメンは生きていくことに苦痛を感じている！俺たちが救ってやらないと、レメンは永久に苦しむことになる！」

刹那は表情を崩さなかった。自分の決心に、揺らぎが生じることはなかった。

レオは黙って刹那の言い分を聞いていた。人を思いやる刹那らしい言い分だ。

確かに、このまま自分たちが次の世界に行ってしまうえばレメンは再び孤独に耐えて生きていかなければならない。しかも、レメンは死ねないのだ。世界に終わりがくるまでずっと一人。もしも自分がそんな人生をおくるのなら、生き続けるよりも死を選ぶだろう。レオは表情をいまだ崩していない刹那に問いかけた。

「お前の言いたいことはわかった。でもどうやって殺す気だ？どんなに攻撃をしても再生するんだぞ？並みの攻撃じゃ殺せない」

刹那はうん、と一度だけ頷いて、自分の考えを述べた。

「再生するっていうことは、つまり自分の細胞が完全に治るってことだろ？だったら再生する間もなく全ての細胞を消し飛ばしてしまえば殺せるはずだ。」

この考えはレオにも思いつかなかった。確かに、再生するものが跡形もなく消し飛んでしまえば、体は再生することなく死ぬ。だが、

「刹那、そんな攻撃が存在するのか？」

この問いにも一度頷いて、レオに考えを伝える。

「レオ、レメンと戦ってるときに、一度だけ撃ったビームみたいな、あれもう一回撃てる？」

「『アルテマ』か。確かに、あれなら跡形もなく消し飛ばすことができるな……」

スチャ、と白い神爆銃を取り出した。これにレメンを殺せる唯一の弾、『アルテマ』が入っている。これを撃てば、レメンは……
銃を渡す前に一度だけ、刹那に聞いてみなければならぬことがある。

「刹那、お前はレメンの命を背負っていけるか？これから生きていく長い時間の中を、レメンの命を背負って歩いていけるか？」

レオの重い質問、刹那は表情を変えることなく、強く言った。

「ああ、背負っていく。レメンを、背負って生きていく」

「そうか……わかった」

す、とレオは刹那に銃を差し出した。刹那はレオのほうに近づき、銃を手を取った。

「トリガーを引けば弾が出る。レメンを、救ってやれ」

刹那はレメンのほうを向いた。レメンの上半身は呼吸をしているのか、上下に動いている。この人差し指を曲げてしまえば、その生命活動は終わってしまう。否、自分が止めてしまうのだ。

両手で銃をつかみ、ゆっくりとレメンに銃口を向けた。あとは、引き金をひくだけ。引けばレメンを苦しみから救ってやることができる。だが同時に、自分はレメンの命を背負って生きていかなければならない。

決心は既についている。いまさら迷うことなんてないはずなのに、どうしてか自分の心のどこかで躊躇している。もしかしたら怖いのかも知れない。今から人を殺す、ということに恐怖しているのかもしれない。その証拠に足が少し、いや、かなり震えだしてきた。15歳、命の重さを知るのにはまだ幼すぎる。

だが、やらなければならぬ。いまここでやめてしまえば、レメンは再び………迷わない、迷ってはいけない。

刹那はレメンの顔を見ると、ゆっくりと引き金を引いた。

ドオーン!!!!!!

その銃口から、破滅の弾丸が放たれた。巨大なアルテマはあっさりとレメンを飲み込み、周りにも爆風が起きた。砂煙も上がり、刹那の視界を悪くした。

そしてその砂煙もおさまり、レメンのいた場所を見してみる。そこは地面がえぐられているだけで、レメンの姿はどこにもなかった。あ

とかたもなく、消し飛んだのだ。
す、と刹那は銃をおろした。

刹那は気づいていなかったようだが、頬には涙が流れていた。

+++++

「再生するっていうことは、つまり自分の細胞が完全に治るってことだろ？ だったら再生する間もなく全ての細胞を消し飛ばしてしまえば殺せるはずだ。」

そいつはこう言っていた。

確かに、それなら死ぬかもしれない。いままで自分に不死を与えて続けてきたこの体を破壊してくれるかもしれない。

よかった。これで、やっと死ぬ。やっと楽になれる。

思ってみれば、最悪な人生だったな。父さんと母さんは早死にするし、自分に身内はいなし、最終的には化け物になってしまった。

村の人間たちは喜ぶだろうな。こんな化け物が死ぬんだ。喜ばないほうが嘘だ。僕が死んだあと、ここも取り壊されるのかな。まあいままで住んできた家だ。一緒に死ぬのもいいか。

そいつは銃を僕に向けた。いよいよか。この世界ともお別れだ。

父さん、母さん、いまそっちに逝くよ。いままでのぶん、わがままするからそのつもりでね。

ギル、できれば僕が生きている間にトランプで勝ってほしかったな。いままで勝ったことなかったもんなあ。

あとは……もういないか。本当に寂しい人生だったんだな。

ドォーン……！！！！！！

これが。僕を殺してくれる攻撃は。確かに、死ぬそうだな。そうだ、殺してくれたこいつに礼を言わないとな。でも死んだら喋れないか……でも……でも伝えてみせる。どんなことでもいいから、伝えてやる。

+++++

アルテマを撃つた刹那は、銃をレオに返した。レオは銃を受けとり、そのまま腰のホルスターにしまいこんだ。

「……よく撃てたな」

「……ああ」

「しばらく、この世界にいるか？」

「いや、次の世界に行こう。そっちのほうがいい」

「……………そうか。探すのは俺がやる。光を当てればいいんだよな」

レオは刹那に水晶を借りようと手を伸ばした。

「……………ごめん。頼む……………」

「気にするな」

レオは水晶を受け取り、炎も落ち着いてきた家に向かった。それを見送ると、刹那はレメンのいたその場所を見つめた。

地面がひどくぐれている。やっぱり、レメンは死んだんだ、と実感できた。これだけ強い攻撃だ。消し飛んでいないほうがおかしい。ゆっくりとその場に座った。足が震えて立っていらなかった。自分が決めたこととはいえ、やはり心に重くのしかかるものがある。

人を殺してしまった。人の命を奪ってしまった。

本当にこれでよかったのだろうか。やはり、殺さず生きていたほうがよかったのではないか？生きていれば新しい道も開けたかもしれない。自分が殺さなければ、まだ希望が残っていたかもしれない。目から涙があふれてきた。自分がどれほどのことをしてしまったのか、刹那はいま感じていた。

「刹那……。そろそろ行くぞ」

レオの呼ぶ声がする。行かなくちゃいけない。す、と立ち上がり、レオの元へと向かった。もうゲートまでの道のりの炎は消えていた。

「ここだ」

レオが指を指す。刹那は黒い霧を体から出し、大剣を形成した。ぐっと握り、レオの指差した所を切った。すると、「ごごご」という音がし、空間に穴が開いた。

「行くか」

レオが最初に入り次にリアが入った。そしてレナがゲートに入ろうとしたとき、突風が刹那とレナにぶつかった。

「風、か。そういえばここ温かいからね。春風ってやつかな。ね、刹那………」

レナが刹那のほうを見てみた。刹那は口をぽっかりとあけ、空を見上げていた。

「? どうしたの?」

レナの言葉で我に返った刹那は、『笑って』レナに言った。

「なんでもない」

「? そう、それならいいけど」

レナがゲートに入りこみ、刹那も続いた。二人が入ったあと、ゲートは何もなかったようにゆっくりと閉じた。

この世界の現在の季節は春。春風が吹いてもおかしくはない。現に、レナはこれを春風だと思っている。

だが、刹那はそうは思わなかった。確かに、確かにこう聞こえたから。

『しんがく』

第31話 不死編6（後書き）

さて、今回の物語はいかがでしたでしょうか？

仲間だと思っていた人々から迫害され
死のうと思っても死ねない

刹那が殺さなければ、レメンは世界が終わるまで孤独だったことは
明白です

ですが……命を他人が奪っていいものなのでしょうか？
レメンは感謝していたものの、それが良い行いだっただとは限りません
刹那の出した答えは果たして正解だったのか、否か

……少々喋りすぎたようですね
さて、次の物語は異次元図書館編
穴の開いている真実をどうかお楽しみ下さい

第32話 異次元図書館編1

現在刹那たちはゲートの中を移動していた。レオとリリアは刹那とレナよりも先に入ったため、少し前のほうにいる。たまに刹那の様子をちらつと見て確認してくるが、刹那は大丈夫、と手を振って伝えた。

「なんか、思ったより落ち込んでないね」

「え？」

不意にレナが刹那に声をかけた。

レナは命を奪ってまだ時間が浅いの、刹那が落ち込んでないことを不思議に思っていた。普通ならば2日は自分の殻に閉じこもり、自分の精神をゆっくりと正常に戻すものなのに、刹那は違っていたからだ。

「普通の人だったら後悔とかして精神が沈んでるはずんだけどね」

不思議そうに言い寄るレナ。刹那は笑って答えた。

「レメンのおかげだよ」

「？」

「聞こえたんだ。レメンの声が」

死んだ人間が喋れるわけがない。しかし、刹那が嘘を言っているとも考えづらい。嘘についても意味がないし、第一目が嘘を言ってい

ない。

「そう。レメンはなんて言ったの？」

「ありがとう、って言ってたよ」

「そっか」

それを聞いて、疑問が解けた。同時に、レナもあのときの刹那のように笑った。

やがて光が見えてきた。次の世界だ。次の世界は、果たして……

刹那とレナを、光が包んだ。二人はまぶしさのあまり目を閉じる。だんだんと光が弱まってきたのを察した二人は目を開けた。

二人の目に入ってきたのは、無数の本棚だった。あたりの壁という壁は本で埋まっており、上を見上げてみれば、どこまで続いているのかわからないくらいに本棚が連なっている。

「何……どこ？」

人の気配が感じられない。あるのは本棚による圧迫感だけだった。

「そういえば、レオとリリアはどこに行ったんだ？」

きよろきよろと辺りを見回してみる。しかし、レオとリリアの姿はどこにも見あたらない。襲ってきたのは不安だった。二人の姿が認識できない。どこに行ったのかわからない。

「探しにいく。ここにいても仕方ないし……」

「いや、そこは動かないほうがいいと思うなあ。かわいいちゃん後ろから声が聞こえてきた。レオの声では絶対無い。」

ぱつと振り向いてみる。そこには肩にかかる程度の緑色の髪と、レモンキャンディーのような薄い黄色の瞳をしている若い青年が立っていた。

「うかつに歩いちゃうと迷子になるよ。ここはとおくても広いからねえ」

ふざけた口調だった。まるで町で女に声をかけている男のような、そんな口調。

青年はついてきて、と一言言って刹那とレナに背を向けて歩き出した。二人は顔を見合わせ、青年のあとをついていった。得体のしれないこの青年についていくのは危険のだが、ここにいても仕方ないし、ここを知っていそうな雰囲気を出しているこの青年のあとをついていかなければ青年が言ったとおり迷子になってしまう。黙ってついていくしかなかった。

「すごい数の本でしょ。どれがどれだかわからないよね、これだけあればさ」

あははと笑いながら青年は言った。なんだかなあ、と刹那の調子は狂ってしまうのだった。

しばらく本に囲まれた通路を歩いたあと、青年は本棚に納まっている1つの本に手を伸ばした。ゆっくりと本を開くと、「じじい」と聞きたなれたあの音が聞こえてきた。

「ゲート!？」

「さ、入って入って。お仲間もお待ちかねだよ」

言われるままにゲートに入る。刹那とレナに続き、その青年もゲートに入った。

「なんで、本を開いただけでゲートが……」

「まあまあ細かいことは気にしない気にしない」

楽しそうに言う青年。本当に調子が狂う。

今開けたゲートは、さっき通ってきたゲートと何一つ変わりがなかった。周りには七色の光、ふわふわ浮いているような感じ。まったく同じだった。

そして光が3人を包み、目をくらました。

「さ、ついたよ」

目を開けてみる。そこはさっきの本棚だらけの通路とは違う、広い部屋だった。ソファ、ガラスのテーブル、手頃な棚、それにぎっしりとつまった本棚が一つ。見回してみると、腕を組んでいるレオと、そわそわして落ち着きのないリリア、それに眼鏡をかけ、栗色の髪をした美女を見つけた。

「レオ!リリア!」

「来たな」

「刹那さん、レナさん。やっと来た」

そういつて、二人は駆け寄ってきた。

「連れてきたよ」

「はい、ご苦労様」

そう言うのと、その美女はこちらに歩み寄ってきて、刹那たちに笑いかけながら言った。

「ようこそ、『異次元図書館』に。私はこの図書館の管理人、名はオリアス」

「異次元、図書館？」

「そう、異次元図書館。存在するありとあらゆる次元の世界につながっている図書館よ。まあ立ち話もなんだから、こっちに来て座ってちょうだい。話は長くなるだろうから」

刹那たちに言うと、オリアスは自分の机であろう場所に座った。その机の上はごちゃごちゃしており、彼女の性格がはっきりと現れていた。

刹那たちはその近くにあったソファ―に座った。

「さて、まずは……何が聞きたい？」

「なんで俺たちはここにいるんだ？」

間髪いれず、レオがオリアスに聞いた。それから説明か、とオリアスは苦笑いをした。

「私たちが来るように仕向けたから、よ」

「なぜ？」

「その子が必要だったから」

オリアスの指の先には、他でもない、刹那があった。

「え！？俺！？」

「なぜ刹那があんたらに必要なんだ？」

仰天している刹那を差し置き、レオはオリアスにたずねる。

「ここから少し話が長くなるから……」

いったん話をきり、青年に目を向ける。青年は笑って言った。

「わかったよ、あいつも連れてくる」

「ええ、お願いね」

青年は本棚の一冊を手に取り、ゆっくりと開いた。するとやはりゲートが出てきて、青年はその中に入っていった。入った後のゲートはゆっくりと閉じ、床に落ちていた本は淡い光に包まれ空中に浮き、取り出した部分に再び収まった。

さて、というオリアスの声で、話は戻った。

「昔、ある異次元の世界の話。その世界には神様がいたわ」

「神様？」

思わずリリアが口を開いてしまう。オリアスは笑って頷いた。

「そう、世界を作った正真正銘全知全能の神様」

「馬鹿なことを言うな。そんなのいるわけないだろ」

レオが反論する。オリアスは困ったような顔をした。

「しょうがないでしょ。いたんだから」

「……………それで、なんでその全知全能の神様がその世界に降臨してるんだ」

レオはため息をついてオリアスにたずねた。ここで神の存在を否定しても意味がないと判断したのだろう。

レオの言葉が耳に入ったとたん、オリアスの雰囲気が変わった。さつきまでとは違う、張り詰めた表情。

「その世界は、昔神様を滅ぼそうとして戦いを挑んだ世界の一つだったからよ。もちろん、神様が勝ったけどね」

「一つ？他にも神を滅ぼそうとした世界が？」

「ええ。神を滅ぼそうとした世界は二つ。そのうちの二つよ。もう一つの世界のことはあとで説明するわ」

言った直後、オリアスはいすから立ち上がった。そして刹那たちの

前に立ち、腕組をしたあと、話を始めた。

「その世界にいた神様は人間たちを見張っていたの。もう一度自分を倒しに来られたらたまらないからね。でも、神様は自分ひとりじや見張るのが大変だからつて自分のほかに神を作ったの。創造の神『ガレス』、破壊の神『シヴァ』、死の神『タナトス』、生の神『ヒュプノス』、時の神『ゼール』。神様はそれぞれの神に『神器』を与え、人間たちを見張らせたの。神器はすさまじい破壊力をもっていたから、人間たちは好き勝手できずに自分たちの行動を抑えられるようになった。」

腕を組みなおして、話を続ける。

「人間たちは押さえつけられる、という行為に腹を立てて、もう一度神様に戦いを挑んだの。その戦いはこれにまでない壮絶なもので、何百年も続いたわ」

ん？と声をあげ、レオは疑問をぶつけた。

「おかしくないか？人間が創造主あいてに戦いを挑んでもすぐ敗北するはずだ。それが何百年も続くのか？」

その通りだった。創造主である神をあいてに何百年も戦いが続くわけがない。短期間のうちに勝敗は決まってしまうはずなのである。

「いいところに気がついたわね。なぜ圧倒的な力を持っていたはずの神々が苦戦を強いられてしまったのか。それはね、人間たちが神々の所持している神器を全て奪ったからなの」

「そんなことできるのか？」

レオが疑いの目でオリアスを見た。しかし、オリアスは平然と話を進めた。

「できたのよ。人間たちは魔力を使ってなんとか神器を盗み出した。もちろん、神器一つを盗み出すのにたくさんの命が犠牲になったわ」

「……神器が人間の手に渡って、それから？」

眼鏡をくいつと直し、話を続ける。

「強力な武器を手に入れた人間たちの勢いは増し、形勢は逆転。人間たちは神々を何度も倒す一歩手前まで追い詰めたわ。強力な力を持つていた神々でも、地上の人間のほとんどを相手にして平気なほど強く作られていなかったからね。それでも、神々はいつもぎりぎりのところで逃げていたから、戦いは硬直。追い詰めては逃げられ、攻め込んで撤退する、その繰り返しだった。でもある日、その長い長い戦いは何の前触れもなく終わってしまったの」

「え？勝敗は？」

今度はレナが口を開き、オリアスにたずねた。

「人間の勝利。被害は神様と、時の神。どちらとも一人の人間によって殺されてしまったわ」

「……！？」

4人は驚きで声がでなかった。

創造主ともあるうものが、たかが一人の人間によって負けてしまっ

た。全てを創ったものが、人間というちっぽけな存在に倒されてしまったのだ。こんなことありえるわけがなかった。

「神様が最初に創った人間は誰だか知ってる？」

「ああ。アダムとイヴだろ」

「ええ、その通り。じゃあその二人は人間たちを引っ張っていくため、神様から膨大な量の魔力を授かった、っていうことは？」

「それも知ってる」

「話は少しずれちゃうけど、そもそも魔力って何だかわかる？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レオは答えることができなかった。今まで何気なく使ってきた魔力。その正体がなんだか見当もつかなかった。

「わからないわね？それじゃあ教えてあげる」

腕組みをやめ、笑いながらオリアスは魔力の正体をいう。

「まあようするに、体を動かしている『魂』の力ね。神様が世界を作ることができたのも魂のおかげ。魂は体を動かしてる。だから魔力を使いすぎれば体が動かなくなる。全ての魔力を使ってしまうと心停止、脳停止、とか今ふつうに体の中で起こっていることが全て止まってしまうの」

オリアスの言ったことを4人は理解した。つまり、魔力は魂が持つ

ている力のことなのである。魔力は体を動かしているため、全て使いきれば死に至る。

ふと、レナの頭にあることがよみがえった。自分の世界でサラと名乗っていた女から魔力を吸収され、体が動かなくなったときのことである。そのとき、サラがオリアスと同じようなことを言っていた。通りであるとき動かなくなったはずだ、とレナは苦笑いをした。

「もう一つ質問ね。死んだ人の魂はどこにいったらどうなるか、わかる？」

「………わかんないよ」

リリアがぼそつ、とつぶやく。するとオリアスが笑いながらリリアの頭にポン、と手を置き、そのままわしわしと撫でた。

「ひゃっ！」

「うんうん、素直ね。それじゃ教えてあげる」

そういうとオリアスは手を引っ込め、再び腕組みをする。リリアはとっさにレオの腕にしがみついた。レオはまたか、と言っただけ息をついた。

「死んだ人の魂は、冥界に行くの。そこで前に行った悪いことかを総合的に死の神と生の神が判断し、新たな肉体に魂を宿らせる。つまり、魂は新しく作られるものじゃなくて、もともと存在する魂を繰り返し繰り返し使い続けるの」

「それじゃ神様と時の神を殺した人間って………」

「ご察しの通りよ。アダムの強力な魂の入った人間、そいつが殺したの。人間たちの所持してる神器の半分を使つてね」

はあ、とオリアスはため息をつき、話を続けた。

「そいつは強大な魔力を使い、まずは時の神を殺して『あるもの』を奪つてそのあとに神を殺したの。あまりの出来事に他の神々は対応しきれず、神様をみすみす殺させてしまった」

「……時の神から奪つた『あるもの』って何だ？」

レオが聞くと、オリアスは困った顔をし、手を横に振って答えた。

「わからないのよ。細かいことまで師匠は教えてくれなかったからね」

オリアスの言った『師匠』という言葉が気になったが、今は後回しにすることにした。

「死にかけの神様は最後の力を振り絞り、その世界を崩壊させた。その世界の生きものは全て異世界に強制召喚され生き延びることができた、もちろん神々も他の世界に飛ばされたわ。でも、問題はそのあとに起きたの」

オリアスは刹那たち4人に背を向け、今起きている事実を話し始めた。

「神を殺した人間は自らを全知全能の神と名乗り、異次元の世界全てを崩壊させると宣言したらしいの。異世界に飛ばされる寸前に聞いたってガレスが言ってたから間違いはない」

話を聞いていたレオが口を開いた。

「人間が世界を滅ぼすっていつのか？」

「前代未聞よ。呆れてものも言えないわ」

はあく、と深いため息をつき腕を組み替えた。

「それで、対応策はうってあるのか？」

「もちろんよ。私たちが戦っても勝てないのは目に見えてる。神様を殺したヤツだしね。だから私たちはある人物を探すことにしたの」

「ある人物？」

「そう。それが、刹那君」

「!？」

「最初にも言ったが、なぜ刹那なんだ？」

「魂は繰り返し利用されるって言ったわよね。神様の魂も例外じゃないわ」

「まさか、刹那の魂は……」

レオが恐る恐る聞く。オリアスはもったいぶらず、はっきりと伝えた。

「そう。刹那君の魂は世界の創造主、神様の魂」

それが耳に入ったとたんレオとレナは勢いよく立ち上がった。レオはホルスターに入っていた銃をオリアスに向けて構え、レナは神抜刀を抜き刹那をかばうように前に立ちふさがった。

「ふ、二人とも」

「レナさん！兄さん！やめなよ！」

「刹那をどうする気なんだ？答える！！」

怒りと銃を向けられたオリアスは別におびえた様子もなく、いたって普通にレオに伝えた。

「別に刹那君の魂を取ろうなんて考えてないわよ。怖いからその銃を下ろしてくれないかしら？」

レオはおとなしくと銃を下ろしたものの、銃をホルスターにしまわなかった。少なからずとも警戒しているのである。レナにしてみれば太刀をしまうそぶりも見せず、じっとオリアスをにらんでいた。

「レナ、前が見えない……………」

「黙ってて」

どうやら、刹那の言うことを受け入れるつもりはないらしい。仲間を思う気持ちは大切なのだが、レナの場合行き過ぎている。

「だからそんなことしないって言うてるのに……………まあいつ

か。これから説明するわね」

オリアスは困った顔をして説明を始めた。レオとレナに敵意を向けられたことが少しショックだったらしい。少し落ち込んだような声でゆっくり話し始める。

「簡単なことよ。刹那君がその人間を倒してくればいいの」

「本気で言っているのか？」

「もちろん本気よ。今まで見た中で一番魂と肉体がなじんでるもの。報告によれば初めての世界でいきなり結晶を使ってみたいだし」

「………なんでそのことを知ってるんだ？」

今まで黙っていた刹那が立ち上がり、口を開いた。顔が引きつって、驚きを隠せていなかった。

オリアスは刹那を見て言った。

「それはあの子たちが来てから説明………、って来たみたいね」

すると、「ごごごと」という音が聞こえてきた。音のほうを向いてみるとゲートが開いており、最初にさきほどの青年が出てきて、そのあとに続いて刹那と同じくらいの年頃の頼りない男の子が出てきた。

「連れてきたよ」

「はい、ご苦労様」

「・・・・・・・・・・？ 刹那、どうした？」

レオが急に立ち上がった刹那に声をかけたが、刹那の耳には入っていない様子だった。刹那は青年の連れてきたその男の子のほうにゆっくりと向かっていった。頼りない顔をした男の子。最初の世界で世話になり、そしてその世界の村を焼き尽くしていた怪物を倒すのに協力してくれたことをよく覚えている。

その男の子は笑って近寄ってくる刹那の手をとった。

「刹那さん、あれから大丈夫でしたか？」

その男の子の名を、嬉しさのあまり叫んでしまった。

「ダン！！！！！」

第33話 異次元図書館編2

刹那は嬉しさのあまり、握っているダンの腕を激しく上下に振った。ダンは痛そうな顔をしながらも、刹那と握手をしていた。

ダンの顔を見たとき、刹那の心の中でひっかかっていたものが外れた。ダンのいた世界から次の世界へ向かうときダンをそのままにして行ったことを、刹那はとても気にしていた。もしかしたら死んでしまったのかもしれない、そんなことが頭の中に浮かんできていたものだ。

ダンはいたずらに笑って刹那に言った。

「まったく、死にかけの人間を置いて次の世界に行っちゃうなんて僕が死んだらどうしてくれるんですか？」

「なっ！！あれはダンが突き飛ばしたからだろ！！」

「ふふふ。冗談ですよ、冗談」

「冗談に聞こえないって」

むすつ、としている刹那をあはは、と笑うダン。最初の世界のことが鮮明によみがえってくる。

「知ってるのか？刹那」

「ああ。最初の世界で世話になったんだ」

目を輝かせながら言う刹那は本当に嬉しそうだった。そんな刹那の

顔を見たレオの顔も自然と緩み、微笑みながら「そうか」と言った。パンパン、と二回手を叩く音が聞こえた。オリアスだった。

「さて。全員そろったことだし、話を始めるわよ。座って座って」

オリアスの声で、立っていたレオとレナは再びソファに座った。

刹那はダンのほうをちらり、と見たが、ダンがにっこり笑って「座らないと僕が座りますよ」と言ったので、あわてて座った。

刹那が座ったのを確認すると、オリアスは話を始めた。

「話を戻すわね。なぜ刹那君のことを知っているか。それは、この子たちにあなたを監視させていたからなの」

「そ、そうなのか？ダン？」

刹那が信じられないといった顔でダンを見る。ダンは一度頷いて刹那に言った。

「ええ。オリアス様の言ったとおりです。僕は彼と共にあなたを監視していた。さらに、刹那さんを異世界にとばしたのも僕たちです」

「どうして！！！！」

刹那が大声を上げ、ダンに言葉を放った。

「怒らないでください。あのときは仕方なかったのです。僕があのと刹那さんを異世界にとばしていなければ、あなたはあの木の下で殺されていた」

「だ、誰にだよ？」

「『リバー』という男にですよ。あの男はあなたを殺すために様々な世界を飛び回っている。今こうしている間も、あなたを殺すための『罫』を各世界に張っています」

リバー、という言葉が聞こえたそのとき、誰も気がつきはしなかったがオリアスの雰囲気が悪くなり、悲しい顔になった。

「罫？」

レオがダンの言葉に疑問符を浮かべた。

「ええ。オリアス様から神を殺した人間のことは聞いたかと思いますが、リバーはその人間の部下です。他にも数人部下がいるようですが、全員『神の使い』と名乗り、各世界に刹那さんを殺すための罫を仕掛けています。人数には限度がありますからね。刹那さん自身と接触するのは難しいと考えた上での手でしょう」

「神の使い……」

4人の頭にある人物が浮かんだ。シャドウ、サラ、リバー。自分たちの主の邪魔になるものは排除しなくてはならない。3人の異世界を狂わせていた理由は、刹那を殺すためだったのだ

「僕は最初から刹那さんに全て話し、理解してくれた刹那さんの魔力を発動させるため、あらゆる生物の遺伝子を混ぜた怪物を創り、それを利用しようという計画をたてました。しかし、リバーの出現によってそれは狂ってしまった。リバーによって僕の魔力はその怪物に封じ込められてしまったのです。僕は無力な子供に成り下がり、魔力を得た怪物は暴走。その怪物のせいで、その世界の村人は何人

も死んでいくというかつてない危機に襲われました。ですが幸いなことに、リバーは刹那さんが僕のいる世界にいるということに気がついてはいませんでした。これですぐに刹那さんの命を狙われるということはなくなりました。そこで、僕はあることを思いつきました。多少危険ではあるが、このままその怪物を利用しよう、と」

「まさか、人を何人も殺しているその怪物を刹那に倒させようとしたのかッ???!」

レオが立ち上がり、ダンの胸倉をつかんだ。レオの目は怒りで満ちていた。

「否定はしません。一歩間違えば刹那さんも死ぬということもわかっていました」

ドガッ! ! ! ! ! ! ! !

レオがダンを持っていた銃で殴り飛ばした。耐えられなかったのだ。ダンは本棚に激突し、そのまま脱力してしまった。ダンは口から血を流している。おそらく口の中が切れたのだろう。

「戦いを!! 命のかかった戦いを!!! お前は刹那の意思に反してやらせたのか! ! ! ! !」

「・・・・・・・・・・」

「貴様あ！！！！！！」

レオは、何も言わず黙ってこちらを見つめてくるダンをもつ一度殴ろうと掴みかかるようにした。

「レオ！！！！やめろよ！！！！」

「兄さん！！！！」

「レオ！落ち着いて！！！！」

「うるせえ！！！！こいつは、こいつはなあ！！！！！！」

3人は、怒り狂ったレオを必死で押さえつける。こんなレオを見るのは初めてだった。冷静に物事を考えるレオがこんな風になるとは思っても見なかった。

「な、なにしてるんだよ！あんたたちも止めてくれ！」

刹那がオリアスと青年に呼びかける。が、

「そこは殴らせておいたほうがいいよ。理由があるにせよ、戦いを知らない普通の男の子を戦いに出させたんだからさ」

「その通りね。殴られてもしかたないわ」

「で、でも！！！！」

「あなたも、望んでなかったでしょ？戦う、ということ。」

「違うよ！あの時は自分からいくって言ったんだ！倒せば帰れるかもしれないってダンが言ったから……」

「じゃあやつぱりこいつが刹那を戦うように仕向けたんだろ！！！」

「いや、だから……とにかく、やめろよ！！」

殴ろうとするレオを止める3人。見かねた青年はため息をついてオリアスに言った。

「そろそろ止めたほうがいいんじゃない？話が進まないよ」

「でもどうやって止めるのよ？たぶん無理矢理はがしても無駄だと思っけど……」

「だよねえ〜。どうしよつかあ〜」

ふう、とため息をつき、他人事のように言う二人。だが、決心したのか、オリアスが暴れているレオの肩を掴んで言った。

「ごめん、もう少しあとにして。全部終わったら気が済むまで殴ってもいいから」

「だがなあ！！！！」

「このままだと話が進まないわ。我慢してちょうだい」

「……………ちっ。わかった」

オリアスの言葉で落ち着きを取り戻したレオは、ゆっくりと立ち上がってソファーに座った。刹那、レナ、リリアの三人は安堵のため息を漏らし、再び座った。

ダンがゆっくりと立ち上がり、口の血をぬぐう。ダンの着ている服の袖の部分が少し赤くなった。

「……………脱線してしまいましたね。申し訳ありません。続きといきましょう。刹那さんは僕の創った怪物を見事に打ち負かし、魔力どころか結晶までもを発動させました。そのとき、僕は確信しました。魂と肉体がこれまでないほどに同調している、と」

「……………同調している、ってどういうことだ？」

刹那がダンに問いかける。

「魂の番号を12345、肉体の番号を12345としましょうか。全て番号は合ってますよね？」

「ああ」

「では次に、魂の番号を56789、肉体の番号を12345、としましょう。合っているのは一つもないですよね？」

「ああ」

「その場合、前者と後者では明らかに魔力に差がつかます。魂の備えている魔力は全て統一されているのですが、やどる肉体によって使える魔力の量、強さがはっきりと決まってきました。つ

まり、魂に合っている肉体に宿れば最大限に魔力を活用できますが、全く合っていない場合、魔力は使うことすらできません」

「それじゃあ神様の魂と俺の体って、かなり相性がいいってことなのか？」

「その通りです。無数にある魂と肉体の中でこれだけ相性がいい組み合わせは僕の記憶の中では3通りしかありません。もちろんあなたも含めてね。だからあなたは長年かけて習得するはずの結晶を短時間で発動させることができたのです」

なるほどな、と刹那は頭の中で理解した。

「僕の予想通り、刹那さんは魔力を発動させることに成功しました。しかし、発動したとはいえ、刹那さんはまだ完全に魔力を使いこなせていない。そこで僕は思いつきました。刹那さんを異世界にとばし、ここにたどり着くまでには魔力を使いこなせるようになってもらおうと。ここまで来るためのゲートを指す水晶はあらかじめ渡してありましたからね」

「貴様！刹那を二度も危険な目に！！」

「もちろん危険度のレベルは十分把握した上でとばしました。十分に倒せる敵が存在する世界、実力者、協力者のいる世界。そして、協力者と共に乗り越えてもらわなければならない壁が存在する世界。刹那さんはすべての世界を乗り越えて異次元図書館にたどり着きました。ここまで全て成功でした。僕の言えることはここまでです。残りはオリアス様に聞いてください」

刹那は今、頭の中が複雑になっていた。いったい自分はどれだけの

ことをされてきたのだろう、どれだけ死にそうになったのだろう、と。

「他に聞きたいことはない？」

「……異次元図書館って、そもそも何のためにあるの？」

レナが口を開いた。

「それは私にもわからない。何のために創られたのか、私が創ったんじゃないからわからないわ」

「それじゃ、創ったのは？」

「創造、破壊、生、死、時の神々たち。さらに神々は、その図書館を管理するための新しい『神』を創ったの。次元の神『オリアス』をね」

「それじゃ、次元の神って……」

驚くレナに、オリアスはにっこり笑って自分を指差し、告げた。

「私」

「嘘だろ？」

「ほんと。ちなみに時の神ゼールは彼ね」

「はいはい。時の神ゼール様ですよ」

「……」

4人は、仰天というよりも呆れ返っていた。神というものに、こんなに簡単に干渉することができたということもだが、何よりもこんな人たちが神だということが信じられなかった。(特にあのふざけた口調の青年が)

その様子がおもしろいのか、オリアスは笑いながら言った。

「驚くのもいいけどさ、そろそろ次の質問に移ってくれない？」

納得のいかない4人だったが、いつまでも硬直しているわけにはいかない。リリアは質問をした。

「えと……なんで刹那さんとレナさんの言葉が、わかるの？」

そういえばそうだった。異世界の人間同士が、なんの不備もなく会話していることはおかしかった。

オリアスは再び腕組みをし、話を始めた。

「世界は最初一つだったからよ。もともと異世界なんて存在しなかったの」

「え……」

驚いている4人にかまわず、オリアスは続ける。

「神様は世界を創り、光と闇を創り、海を創り、草木を創り、生き物を創った。でも、それだけじゃ足りなかった神様は人間に知恵を与えたの。人間はその知恵を仲間に分け与えるために言葉を創った。そしてその言葉は知恵と共に世界に広まっていき、世界の人間全て

が同じ言葉を使うようになった、というわけ。」

「じゃあなんで異世界ができたの？もともと一つだったのに」

「知恵を授かった人間たちは、世界を支配しようとしたの。自分たちが一番偉いって勘違いしてね。そこで現れたのが神様。人間たちに新たな知恵を与える代わりに今起こしている自分勝手な行為をやめなさいって人間たちに言ったの。その新しく与えた知恵が『魔力』だったわ。魔力の使い方を会得した人間たちは、神様の言うことを無視して世界を支配しようとしたの。そこで邪魔だったのが神様。人間たちは団結し、神を滅ぼそうとして戦いが起こった。これが最初に起きた神と人間の戦い。もちろん神様の圧勝だったけどね」

だんだんずれてきた眼鏡をくいつと直し、再び話を続ける。

「人間の団結を恐れた神様は自分の世界を無限に裂き、人間たちを異世界に閉じ込めた、というわけ。そうやって異世界は完成したの。まあそのあとに、もう二回戦いが起こるんだけどね。ちなみに、各世界ごとに人間の種族が分かれているとか、お互い対立し合っていると、仲良くしてるとか、色々特徴があるけどね」

レオがはつとしたように言う。

「そういえば神に戦いを挑んだ異世界って二つあったんだよね？もう一つの世界のことが知りたい」

あ、そうだった、とオリアスが思い出す。

「もう一つの世界はね、神様に大陸を分断され、文化、言語、などを別々にされたの。そうすれば意思表示も、団結もできないから。」

「そうなのか」

刹那がふ、と声を漏らす。すると、オリアスは呆れたように刹那に言った。

「何言ってるの。あなたの世界のことじゃない」

「え!？」

「よく考えてごらんさい。大陸分断、文化や言語の違い、目や髪の色の不統一。全部当てはまるでしょ？」

「あ……………」

確かにそうだった。大陸が分断されているし、アメリカにしてみれば目や髪の色も違う。文化だって自分が理解できないようなことを平気でやっている国もある。

「大陸が分断されているのか？刹那の世界じゃ」

「うん。4つ……………くらいにね」

「そんなことが、あったのか……………」

レオは驚きを隠せなかった。大陸が分断なんて信じられないことだったのだらう。裏返せばレオの世界の大陸は全てつながっていた、ということになるが。

「まあそういうこと。刹那君の国は偶然にも異世界共通語で喋って

たつてことになるわね。さて、他に聞きたいことは？」

「……人間の種族っていうのを詳しく知りたい。髪の色や目の色の違いだけじゃないんだろ？」

「そっか。刹那君の世界はそういうの関係ないもんね」

オリアスは腕を組みなおした。

「神様が人間に魔力の使い方教える前までは、人間は全て黒い目と黒い髪をしていたの。でも、魔力を使うようになってから目の色や髪の色に変化が見えてきたのよ。同時に、身体的能力等にもバラツキが見えるようになった。黒や灰色に近い目や髪をしていて、もっとも魔力を使いこなすことのできる魔族、白や青に近い目や髪をしていて、もっとも使う力が神の使う力に近い神族、赤やオレンジに近い目や髪をしていて、もっとも残忍で戦いを好む鬼族、緑や黄色に近い目や髪をしていて、魔力を使わなくても十分に武術で戦える獣族。……こんな感じに種族が出来上がっていったというわけ」

「種族ごとに争いとかはなかったのか？」

「そういうのも最初のころはあったらしいけど、団結して神様を倒そう、っていう考えが広まってからはそういうことはなくなったみたいよ。それじゃ、次の質問」

「あなた達の他の神はどこに？」

レオが口を開く。

「居場所は把握してるけど、正確な位置を教えるわけにはいかないわ」

「じゃあ話せる範囲まででいい。知っておきたい」

「破壊の神と創造の神は互いを危険すぎる存在だと判断して異次元のどこかの世界に自らを封印。死の神と生の神は冥界で魂の裁判を行ってる」

「自らを封印？魂の裁判？」

「破壊の神が神様から与えられた能力は『破壊』、創造の神が神様から与えられた能力は『創造』。破壊は自分の望まないものでも壊してしまうし、創造はどんな危険なものも創ってしまう。そんな危険な能力は必要ない、って言って二人の神々は自らを封印。もうかなり昔の話だけどね」

少し間を空けて、再び口を開く。

「魂の裁判は前に行った悪いことを、良いことを総合的に見て、その魂にそれ相応の罰を与えるっていうもの。何百年も続く苦痛からすぐに転生っていう軽いものまでたくさん罰があるの。でも、一日に来る魂なんて数え切れなくらいあるから、行ったら邪魔になる。私だって会ったことないもの。この説明はおしまい。次の質問は？」

いい加減立っているのがつらくなってきたのか、オリアスはごちゃごちゃと散らかっている机のいすに座った。ギシッ、といすが音を立てたと同時に、刹那の口が開いた。

「あんだ達が神だ、っていうのはわかったけど、ダンは一体？」

「僕の弟子だよ。僕たち神様は自分の気に入った、もしくは魔力の強い人間を一人弟子にしてもいい、っていう決まりがあるんだよ。理由は二通りあってね。一つは自分の仕事を手伝ってもらうため、もう一つは自分の跡を継がせるためなんだ」

「神様って、ずっと同じ人がやってたわけじゃないのか？」

「うん。神様って言っても感情があるからね。もう生きることになった、とか色々あるわけ。神様になったら強制的に不老不死になるからね。長年ずっと生きていくわけだし、死にたいなんていう感情も芽生えてくるのさ。弟子の制度はそのために配慮された、って言うてもいいかもしれないね。まあ、跡なんて継がせないでそのままずっと、っていう選択肢もあるんだけどね」

「まあ、あなたは当分僕に継がせる気なんてないでしょうがね……」

「おお！よくわかったね、かわいい弟子よ！」

あはは、と笑うゼール。はあ、と大きなため息をついているダン。ゼールのことでよっぽど苦労しているようだった。

「オリアスには弟子いないのか？」

刹那が何気なく聞いた瞬間、いすに座っているオリアスの雰囲気が一瞬暗くなった。なにやら悲しそうな顔をし、綺麗なその顔は下を向いていた。

「……………刹那君。そのことは聞かないであげてくれないかな？」

何か事情があるのだろう。刹那はこくり、と頷いた。

「……………さ、次の質問は？」

オリアスが明るく聞いてきた。が、誰が見ても無理をしているとわかる表情をしていた。

「例の人間が、全ての世界を滅ぼそうとしている理由は？」

「わからないのよ。私たちの間じゃ理由については何もわかっていないの。『ギアス』だったら何か知ってるかもしれないけど、居場所がわからないし……………」

「『ギアス』？」

「神様の弟子の名前よ。もちろん自分の仕事を手伝わせるためで、跡を継がせる気なんてなかったらしいけどね。神様が殺されたあと、ギアスは跡を継がなきゃならなかったんだけど、神様を殺した人間に復讐するとか言っつて異世界を回っているわ。今もね」

「今も？」

「ええ。無限にある世界を、ずっとずっと探し回ってるの。ただ復讐するためだけにね」

「……………」

第34話 異次元図書館編3

「あとはない？聞きたいことは。」

「俺はないよ」

「俺ももうない。聞きたいことは全部聞いた」

「私もない」

「私も」

そう、と言ってオリアスはいすから立ち上がり、コツコツ、と床が鳴る音を辺りに響かせ、ゆっくりと刹那の前まで歩いた。そして刹那の正面まで来たところで、オリアスは口を開いた。

「じゃあ、次はこっちから質問。刹那君はこの事実を聞いてどう思いましたか？」

「すごく、驚いた。まさか世界がそんなことになってるなんて思ってたかった」

「では次の質問。事実を知った刹那君はこれからどうしますか？」

「……………その人間は世界を滅ぼそうとしてるんだよな」

「ええ、そう」

「その人間に勝てるのは……、アダムの魂よりも強い神様の魂の入った俺だけ、なんだよな」

「ええ、魔力を完全に使いこなせることができれば……」
「だけどね」

「俺にしかできないことなんだよな」

「少なくとも、私たちにはできない。だから、あなたを呼んだの」

刹那は目を瞑り、頭の中を整理した。

今、自分の知らない世界で大変なことが起こっている。自分を殺すため、それだけのために人々の命を脅かす『畏』が仕掛けられている。自分のせいで、他の世界が滅茶苦茶になっている。原因は自分だ。自分がいるからだ。だったらその畏は、自分が取り除かなくてはならない。

さらに神と名乗っている人間は、全ての世界を滅ぼそうとしている。自分の世界はもちろん、レオ、リリア、レナの世界までも。そんなこと、させない。理由はどうであれ、世界を滅ぼしていいわけがない。

刹那はゆっくりと立ち上がった。オリアスは、刹那のまっすぐな目を見て言う。

「最後の質問です。『答え』を教えてください」

張り詰めた空気、真剣に見詰め合う二人。時間はゆっくりと流れていく。そして刹那はゆっくりと口を開き、自らの『答え』を示した。

「俺はやる。みんなの世界を壊すような真似は許さない。戦う、や
つてやる」

「刹那、お前……」

「戦わないと、みんなのいる世界が壊される。俺そんなの嫌だから
さ」

刹那は驚いているレオに笑いかけた。その表情は、まっすぐだった。
嘘を言っていなかった。本心からの、笑いだった。

「だが！お前は家に帰りたいか？ たんじやなかったのか？ 戦いなんて
ない、平和な生活に戻りたいか？ たんじやないのか？」

「戻りたいさ。ただ、家に帰る前にやることができた。それだけだ
よ」

刹那の決意を聞いたレオは立ち上がり、オリアスにたずねた。

「どうしても、刹那じゃないとだめなのか？」

「勝つためには、ね」

「代わっては、やれないのか？」

「代わることなんてできない。でも、助けてあげることではできる。
支えてあげることではできる」

「……………だつたら俺が刹那を支えてやる」

「レオ？でも親父さん探さないといけないんだろ？」

レオは笑って刹那の肩をがしつ、と掴み、言った。

「いいんだ。そんなの世界を救ったあとにやればいい。お前一人でやらせるには不安なことだしな」

「私も刹那を支えることにする。もともと、そのためにいるようなものだしね」

レオも立ち上がり、微笑んで言った。それに乗されたのか、リリアも立ち上がって、

「私も刹那さんを手伝うよ。怪我とかはしっかり治すから安心してね」

自分の意思表示をした。

3人は決して刹那の過酷な状況に同情して協力をすると言ったわけではない。ましてや世界を救い、英雄と崇められたいと思つたわけでもない。心から刹那を助けてやりたい、他人のことを思いやりすぎて自分が傷つくことを苦に思っていない刹那を守ってやりたい、と思つたからだ。

刹那は自分をここまで想ってくれている3人に心から感謝し、それを口に出した。

「……………ありがとう、みんな」

たった一言。考えればもつといい言葉も思いついたかもしれない、もつと気の利いた言葉が口に出せたかもしれない。でも、3人にはきっちり届いていた。刹那の気持ち、たった一言でも確かに届いていた。

「よかつたわね、支えてくれる人がいて」

オリアスはにつこりと微笑みを浮かべた。

はつきり言って、神を殺した人間を倒すということは刹那一人だけでは無理だ。なぜならば、今刹那の体に入っている魂の元の持ち主、神様でさえ敗れたのだ。世界を創造したという神様でさえも、だ。

魂が転生したからといって、勝てるとは限らない。さらに、神を殺した人間には部下がいる。シャドウ、サラ、リバーの他にも数人いるに違いない。シャドウにしてみれば、殺されるところを見逃してもらっている。相当の実力の持ち主だ。一人では勝てない。一緒に戦ってくれる仲間が必要不可欠なのだ。

ここに来るまでに、こういう仲間が見つかって本当によかった。もしこの3人がいなかったら、刹那は再び一人で罨の張られた異世界を旅することになってしまう。

「それじゃ、付いてきて。『いいもの』あげるから」

微笑を崩さないまま、オリアスは本棚に近づき、さきほどゼールが移動する際に利用した本とは違う本を手を取った。赤い表紙の本をゆっくり開くと空間に穴が開き、ゲートが出来上がった。ためらうことなくオリアスはその中に入っていく。もちろん刹那たちもあとから続く。

「『いいもの』ってなんだろうね、兄さん」

ゲートの途中でリリアがレオに話しかける。あごに手をやり、少し考えたあと結論を出す。

「……………たぶん、これから役に立つものだろう。細かいところまではわからないな」

なるほど、と頷くリリア。

「いいものかあ。なんだろうな、楽しみだ」

わくわくと胸を驚かせる刹那。そんな嬉しそうな刹那の顔を見て、ため息をつきながらレナは言った。

「呆れた。これから大変なことになるっていうのに、よくそんな楽しそうな顔できるね」

「だからこそだろ？ 楽しめるところで楽しんでおかないと。これから先何が起きるかわからないんだからさ」

「……………それもそうか」

レナはしばらく考え、そして納得したようだった。

光が見えてきた。そしてその光はだんだん強くなってきて、刹那たちの体を包み込んだ。

「ついたわよ。これが『いいもの』」

光が弱まってきて、目を開ける。そこには、

「……………家だ」

「それに庭もある、すごい！」

大きく、立派な家が一軒建っていた。周りには庭もあり、所々に黄色い花が咲いて、気持ちよさそうに日光を浴びていた。庭の奥のほうには木々が並べられており、花の咲いている庭とは反対に涼しげな雰囲気を漂わせている。

「ここをあなたたちのベースキャンプとして活用してちょうだい。ここは異次元図書館からしかは入れないから敵がくることもない。異世界だといつ敵が襲ってくるかわからないからちようどいいですよ。結構創るの大変だったのよ、この世界」

「あなたたちが創ったのか？この、世界を？」

レオが不思議そうにたずねた。

「世界なんて立派なものじゃないわ。異次元図書館の空いている空間を利用しただけだからかなり狭いし、創るのにもかなりの時間がかかったしねえ」

「……………でも立派なものだ」

「そう言ってもらえらるとうれしいわ」

レオの言葉を嬉しそうに聞くオリアス。その二人の雰囲気をよく思わなかったリリアは、レオの腕をとって庭に走っていく。

「兄さんあっちに何かあるよ！見てこよ！」

「リリア、お前何あせってんだ？」

「いいから！」

「？ ああ」

さすがのレオも、リリアの心境は読めなかったらしい。リリアに引きずられていくレオは不思議な顔をしていた。その一連の流れを見ていたレナは、家に目をとられている刹那にたずねた。

「ねえ刹那。リリアってレオのこと好きなの？」

「そりゃ兄妹だしな。嫌いだったらついて来ないだろ？」

「そうじゃなくて………やっぱいいや」

レナは本当に呆れたようにため息をついた。刹那はレナが何を言いたかったのか気になったが、深く追求しないようにした。庭を走るようにレオを連れまわしているリリアを見ていたオリアスは、じつと家ばかり見つめている刹那とレナに話しかけた。

「あの二人は庭に行ったから、あなた達は中を見てきたらどう？ 気になるでしょ？」

「いいのか？」

「いいのかって、あなた達の家でしょ。いいも悪いもないわ」

「それもそうか。行こうレナ」

「うん」

その大きな家に向かい、扉を開ける。ガチャ、と音がし、刹那たちは足を踏み入れた。

家の中は外から見たよりもずっと広がった。中央に大きなテーブルが置いてあり、その奥はキッチンになっているようだった。その部屋の壁に8つのドアがついている。テーブルの置いてあるリビングを中心に、他の部屋が存在しているようだった。上を見上げてみると、ライトがついてあった。これで夜も明るくすることができる。

「刹那、このスイッチなんだろう？」

レナが壁にあるスイッチを興味深そうに見つめる。それが上にあるライトのスイッチだと思っていないみたいだ。

刹那がそのスイッチをパチン、といれる。するとやはり上にあるライトが明るくなり、日が指しこんでいない部屋を明るく照らした。

「あ、あれって光るんだ……」

純粹に驚いているレナ。レナの世界にはこういう電気を使う技術がなかったのだろう。その姿があまりにも面白くて、

「ふ、ふふ、あははははは」

「な、なんで笑うの！」

「だって、レナがあまりにも面白いからつい、はははははは」

「も、もう……」

レナは笑う刹那を置いて家の外に出た。すねていたのだろう、頬をすこしふくらませていた。

刹那はライトのスイッチを切り、レナのあとを追いかけた。ガチャ、とドアを開けると、オリアスの近くにみんな集まっていた。あわてて刹那も駆け寄る。

「どうだった？この家、気に入ってくれた？」

オリアスが刹那に笑ってたずねる。刹那も笑顔でかえす。

「とても良い家だった。ありがたく使わせてもらうことにするよ」

うんうん、と満足気にならずき、オリアスはロープに手をいれ、本を取り出した。ゆっくり開くと、オリアスの背後にゲートが出現する。

「今日はここで疲れを癒したほうがいいわ。明日からまた大変になるからね」

「ああ、わかった」

「あと、図書館に戻ってくるときはこの本を使ってね。わざわざ魔力を発動させるのも馬鹿らしいでしょ？」

言い残すと、オリアスはゆっくりとゲートに入っていく、オリアスを迎え入れたそのゲートは何事もなかったように閉じた。残された刹那たちは、これからどうするかを考えた。

「さて、これからどうする？」

「とりあえず腹減った」

刹那が勢い良く言う。そういえば、とレオも腹をさする。

「とりあえずは飯か。いったん家に入ろう」

一同は家の中に向かい、食事をとることにした。オリアスがくれた家まで足を運び、最初に見た大きなテーブルのある部屋に到着する。

「さて、問題は誰が作るか、だな。誰がやる？」

「私やってみたくい」

真っ先に手を上げたのがリリア。

「それじゃ私もやる。たまに自炊してたから、結構上手にできると思っよ」

次に手を上げたのがレナ。こうして料理係はあっけなく決まった。

「それじゃ頼むぞ」

「りょうか〜い」

「まかせて」

二人はキッチンに向かっていった。残された刹那とレオは出来上がる料理を楽しむにしながらいすに座り、ひたすら待つ。

「楽しみだなあ。いったいどんな料理ができあがるんだろうな」

「そうだな……」

期待で胸を膨らませている刹那とは違い、レオはなにやら浮かない顔をしている。

「どうしたんだ？そんな顔してさ」

レオが言いにくそうに口を開く。

「俺とリリアは一応王子と王妃だっていうことは覚えてるよな？」

「うん。ちゃんと覚えてるよ」

「飯は当然担当の料理人がやるんだ。わざわざ俺たちに作らせるよ
うな真似はさせない」

刹那はレオの言っていることがよくわからなかった。否、わかる
うとしなかった。

「あいつ、料理なんてできるはずがないんだよ。それどころか生ま
れて一回も料理道具なんて触ったこともないはずだ」

嫌な汗が毛穴から噴き出してくるのがわかった。まさか、とは思
が・・・・・・・・

「だ、大丈夫だろ？レナもついてるし、何とかなるよ」

「・・・・・・・・・・だといんだがな」

まるで戦争に行く前の兵士を思わせる2人の絶望感はとてつもない
ものだった。刹那は全身から汗が吹き出ており、レオはかなり青ざ
めている。

そのときだった。異変が起きたのは。

「ちょ、ちょっとリア、それ違う!!」

「え？」

ボン!!!!

「おかしいなあ。なんで爆発しちゃうんだろ。もう一回、えい!!」

ボン!!!!!!!!

「リリア！それじゃないよ！！」

「え？『これ』と『これ』混ぜるんじゃないの？」

「こ、こんなの混ぜてどうするの！こんなの混ぜたら危ないよ！」

「ふえ？そうなんだ」

キッチンに置いてあるもので爆発させることができるリリアは、あの意味で天才かもしれない。それにしても大変なのはレナだ。料理に関してはまったくもって無知なリリアの面倒を見なくてはならない。無知どころか迷惑までかけているリリアを、だ。このままでは食事どころか、料理を口に運ぶ刹那とレオの身も危ない。

「……………レオ」

「……………なんだ？」

「……………行く」

「……………わかった」

その後、リリアは刹那とレオによってキッチンを追い出されることになる。もちろんリリアがレオに、初めての料理を邪魔されたことに対しての八つ当たりをしたの言うまでもない。

ちなみに、リリアが二回も爆発させたあの料理は、その後レナが必死で作り直し無事刹那たちの口に運ばれたらしい。

+++++

数時間前の食事が終わった頃、刹那はレナに剣を教えしてくれるよう頼んでいた。これから強大な敵と戦うことになるのだから自分にも戦う術がほしい。だから頼む、と。レナも、自分の訓練にもなるから、と嫌がることなく引き受けた。

だがいきなり自分の武器で鍛錬するということは大変危険だとレナが判断したため、庭にあった木を切り、それを大剣、太刀に似せたものでやる、ということになった。これならば万が一頭や体にぶつかっても斬れることはない。絶対的な安全とまではいかないが、斬れる武器を使うよりははるかに安全だ。

「……………よし、できた！」

「こつちも出来上がり。じゃあやるつか」

「ああ、頼む」

出来上がった木製大剣を振りかぶり、刹那はレナにかかっていった。走るときの勢いをそのまま大剣に利用し、レナめがけて振り下ろす。しかしレナは慌てることなく木製太刀を使って受け流し、目標から外れた大剣はそのまま地面に埋まってしまふ。引き抜こうと刹那が力を込めるが、重みと勢いが災いしたのかぬけない。

すつ、と木製太刀が刹那の首に向けられたところで、レナはため息を漏らした。

「あわてすぎだよ。そんな戦い方じゃ本当に死んじゃうよ？」

「う……………」

何も言えない刹那はゆっくりと木製大剣をぬき、レナの話に耳を傾けた。

「重さを利用して突っ込んでくるのはいいんだけど、状況を考えないとだめ。相手の体勢がしっかりしてたらあっさり受け流されちゃうだけだもの。それと、自分から突っ込んでいくのは相手に隙があるときじゃないとだめ。わかった？」

「ああ。じゃあもう一回」

「うん」

そうやって二人は距離をとり、程よくなったところで互いに武器を構える。

刹那はレナの言いつけを守り、今度は自分からは突っ込まないようにした。剣の達人クラスの間隙があることは滅多にないからだ。しばらくの沈黙。それを破ったのはレナだった。

たた、と刹那めがけて走ってくる。刹那は迎えうつため手に握つてある木製大剣を横にし、防御体勢をとる。縦に切りかかられたらこのまま防御すればいいし、横に切りかかられたら縦に構えなおせばいい。簡単なことだ。

レナはそのまま縦に木製太刀を振るつた。ガツツ、っという木独特の音が響き、しばらくそのままお互い硬直していた。

「よし、このまま押し返して……………」

刹那の頭の中に案が思い浮かんだ。レメンと戦ったときも、一度押

し返して体勢の崩れたところを切りかかったらうまくいった、ということも同時に思い出した。

刹那は一度防御したまま身を後ろに引いた。こうすれば、レナの重心が刹那のほうにくるのでバランスが自動的に崩れる。そしてバランスの崩れた状態のレナを一気に押し返し、追撃の一撃となる縦一閃の木製大剣を……

「うん、よくできたけど……まだ甘いかな？」

あっさりと受け止められ、不意を突かれた刹那の頭にポコン、と太刀がぶつかる。

「いてー！」

頭をおさえている刹那は涙を浮かべながら文句を言った。

「ちえ……結構よかったかな、って思ってたのにあっさり止めやがって……」

「あそこは斬るよりも突いたほうがよかったかな？ 突きは受け止められにくいから追撃には適してるの」

そこまで言うと、レナの顔が少し悪戯な表情をして刹那に言った。

「まあ、あそこで突きがきても受け止めたろうけどね」

「なにを。もう一回だ！！次こそは！！」

「いっよ」

二人の鍛錬を、家の壁に寄りかかっていたのんびりと見ている二人。レオとリリアだ。

「一生懸命だね、刹那さん」

「ああ。そりゃ自分で言い出したことだしな」

「それもそっか」

目をレオから刹那たちに移す。今ちょうど、打ち合っているところだ。一回、二回、三回目でレナが足で刹那の足をすくい、支えを崩された刹那は仰向けに倒れてしまった。レナが刹那を見て笑っているが、それでも懲りずに刹那は向かっていく。一生懸命やっている刹那には申し訳ないのだが、見ていておもしろい。そういえば、とレオに話しかける。

「兄さん、おなか見せて」

「？何だ急に。俺の腹見てもいいことないぞ？」

「痛みがひどくなってきてるんでしょ。肉体強化で痛みを抑えていることなんて見てればわかるよ。あのときは少しごたごたしてたから止血で終わったけど、今なら大丈夫でしょ？」

「……………頼む。実はだいぶつらい」

レメンから受けた傷は、痛みを増していた。なんとか肉体強化で痛みをごまかしていたが、さすがに限界がきたようだった。

「それじゃ中で治療するから入る」

「ああ」

リリアのあとに続き、レオも家の中に入る。テーブルのあるリビングにリリアが座って手招きをしたので、レオも近くに座った。

レオがゆっくりと服を脱ぐ。やはり、穴が開いていた。かなり大きいわけでもなかったが、小さいというわけでもない。大怪我には変わりなかった。

「……………なんでもっと早く言わなかったの。」

「図書館のほうで色々説明とかあったしな。言わなかったんじゃないかって言えなかった。」

「ご飯の前でもよかったのに……………」

呆れた、と言わんばかりの顔でリリアはレオの横のほうに移動し、腹のほうの穴と背中の中のほうの穴に手をやる。

「……………ツ!!」

「ごめんね、でもちよっと我慢して」

痛さに顔を歪めるレオに少し言葉をかける。

リリアの両手が淡い青い光で包まれ、ゆっくりと手を回すように動かす。レオも痛みがゆっくりと引いてきたのがわかった。

しばらく手をかざし、3分ほど経ったところで手を離す。腹に開いていた穴はすっかり塞がっていた。リリアは穴の跡をしばらくじい、と見つめ、立ち上がったと言った

「ケアが必要だね。あと5回くらい……かな？」

「とりあえず塞がったからいい」

「だめだよ。しっかりやらなきゃ」

「わかったよ。よつと……」

立ち上がるレオ。痛みはなくなっていた。服を着て、刹那たちの鍛錬を見に外へ出ようとしたそのとき、

「ねえねえ、兄さん」

「なんだ？」

レオの態度に、リリアは頬を膨らませた。

「なんだ？ じゃないよ〜！ 治してあげたんだからありがとうぐらい言っただけよ〜！」

ここで素直にありがとう、と言えばよかったのだが、からかうことが好きなレオは、

「さてさて、『そんなこと』よりも刹那たちを見に行くかなつと。」

「『そんなこと』ってなによ〜！！ せっかく治してあげたのに〜！！」

「うぐぐ、かなり腹が痛い……。誰かさんの下手な治療

のせいで逆に苦しい……………」

「ひつど〜い!!!!なによそれ〜!!!!」

リリアはわざとらしく腹をおさえるレオにかかっていった。

家の中からバタバタと騒がしい音。当然気になった刹那たちの鍛錬が中断されたのは言うまでもない。

+++++

夕食（もちろんレナが作ったもの）を食べ終えた4人は、部屋割りをすることにした。もう夜なので、あとは各自自分の部屋で時間を過ごす、というレナの提案からだった。

部屋は、現在刹那たちがいるこのリビングを除いて8つある。しかし、部屋といってもベッドがついていて、ちゃんと落ち着けるといふ部屋は5つしかない。残りはシャワールームとトイレとなっているからだ。

もちろん人数分部屋があるし、部屋の造りも広さもそれほど変わりが無いのだが、全員どこでもいい、という答えだったので決めるのに一苦労した。

そして現在、4人は自分の部屋に入り、それぞれ自由に過ごしている。

「広いな……………」

刹那は自分の部屋となった部屋の広さに驚いていた。自分の家の部

屋と比べれば2倍はあるし、天井も高い。壁の色も白で統一され、明るい雰囲気を出している。

部屋の中央にはガラス製の丸いテーブルがあり、部屋の隅には棚がある。ベッドに備え付けられている小物入れの中には目覚まし時計があった。短針と長針のあるごく普通の時計だ。これで寝過ぎすこともないだろう。

申し分ない広さと、色合い。自分の部屋にはもったいないな、と頭に浮かぶほどそれは見事なものだった。

「とっ！！」

感動と興奮で胸がいっぱいになった刹那はベッドに飛び込んだ。ボーン、と音がし、ベッドに体が沈んでいった。とてもふかふかだった。

心地良いのでそのままごろごろしてみる。右にごろごろ、左にごろごろ。

「いって！！！」

見事に転げ落ちてしまった。無様である。頭をさすりながらゆっくり立ち上がると、ちょうどノックの音が聞こえてきた。

「刹那さん、お風呂どうぞ〜」

「ああ、今行くよ」

リアだった。おそらくもうみんなシャワーを浴びたのだろう。刹那は部屋を出てシャワールームに直行した。

ドアを開けてみると、洗濯機と洗面所があった。驚いたことに、刹

那の家で使用しているタイプのものだった。

「レオたちどう思ったかな……」

そんなことを思いながら服を脱ぎ、シャワールームに入る。誰かが使用したすぐあとだったので、まだ湯気がたっている。キュ、と水栓をまわし、温かい湯で体を洗い流す。

「あ~~~~、生き返る~~~~」

疲れ、今までの汗。それらがそれだけ溜まっていたか、今刹那は実感していた。たぶん、これからは今までとは比べ物にならないくらい疲れが溜まっていくのだろう。簡単に予測できることだ。目を閉じ、刹那はしばらく湯を浴びていた。

+++++

しばらくし、刹那はシャワールームを出て自分の部屋にもどった。体が温かいうちに眠ったほうが気持ち良いし、早く眠ることができ

る。ベッドの近くにある目覚まし時計を手取る。短針は10を指し、長針は34を指していた。後ろに手を伸ばし、アラーム時刻を7時にセットする。これでよし。

そのまま電気を消し、ベッドにもぐりこむ。ふかふかのベッドは刹那の体を癒し、そのまま夢の中へと誘う、はずだったのだが、

「ひゃ！な、なにこれ！！」

同じようなことが起こった。リアの部屋からだ。たぶん、レオと同じことをやったのだろう。

リアの部屋のドアをノックし、入る。そこには目覚まし時計をもつてうろうろしているリアの姿があった。

「あ！刹那さん！これ止めて〜！！」

レオ同様、さっ、と刹那の目の前に目覚まし時計を差し出した。レオと同じように7時にアラームをセットし、リアに手渡す。

「明日にはアラームが鳴るからちゃんと起きるよ」

「うん。ありがとう、刹那さん」

にっこり笑ったりリアのいる部屋をあとにし、『今度こそ』眠りにつこう、と決意したそのときだった。

レナの部屋から何かを斬る音がした。

あわててレナの部屋のドアをノックし中に入る。そこには、無残にも半分に切り捨てられた目覚まし時計と、神抜刀を手にしているレナがいた。

「あ、刹那。これ何？いきなり変な音がしたから斬っちゃったんだけど……」

「……」

呆れて物も言えなかった。レオやリアのように驚くのならまだわかるが、『音がしたから』というだけの理由で武器で切り捨てたのだ。

「……レナ、あのさ」

「ん？何？」

「……やっぱりいや。お休み」

「？うん、おやすみ」

刹那は目覚まし時計のことを教えておこうと思ったが、レナが見事にぶっ壊してしまったので教えても意味がないと判断したのだ。

レナの部屋のドアを閉め、今度こそ刹那は眠りにつこうと自分の部屋に向かった。

やわらかなベッドの中に入り、そのまま目を瞑る。数秒とたたないうちに、刹那は夢の中へと入っていった。

「お、やっと起きたな」

「おはよ、刹那さん」

「おはよう二人とも」

刹那も席に着く。それと同時に、レナが朝食を持ってひょっこりキツチンから出てきた。

「あ、刹那起きたの？それじゃこれ食べてて」

「ああ。ありがとう」

「どういたしまして」

レナが刹那の前に自分の持っていた朝食を置く。トーストとサラダ、それにミルクだった。空腹で刹那の腹がぐう、と鳴った。が、まだ口に運ぶわけにはいかない。しばらくしてレナが自分の分の朝食を運んできた。

「あれ？食べてていいって言わなかったっけ？」

「作ってくれた人を置いて食べれないって」

「そう。じゃ一緒に食べようか」

レナも自分の席に座って朝食をテーブルに置いた。

「それじゃいただきます」

「いただきます」

こうして少しだけ遅い刹那とレナの朝食は始まった。レオとリリアがニヤニヤしながら刹那とレナを見ていたのは言うまでもない。

+++++

食事の後片付けが終わったあと、オリアスが使った本を使い刹那たちはゲートの中を移動していた。これからどうするか、という刹那の質問に対し、レオがオリアスに聞いてみればいい、と言ったからだった。

ゲートの中、刹那は隣にいたレオに話しかけた。

「これから俺たちどうなるのかな？」

「どうなりたいんだ？お前は？」

「もっとたくさんの世界を見てみたい。たくさんきれいな場所とか景色を見てみたいな」

「……………そうだな、たくさん世界があるからな。きれいな場所も景色もたくさんあるかもしれない。でもな……………」

「？」

「少なからずとも薄汚れた場所や見たくない景色だって存在する。」

ひよつとしたら二度と見たくない光景だつて何回も目にするかもしれない。……世界っていうのはそういうものだ。数え切れないほどあるんだつたらなおさらな」

「……………ああ」

レオの言った通りだ。きれいな場所や景色があるのであれば、逆の薄汚れた醜い所も必ず存在する。人間同士で戦う世界、弱いものが死に強いものが生き残る世界、上下の激しい世界。これらの他にもまだまだそういう世界は存在するだろう。これから自分たちはそういう世界を旅して回らなければならない。そう思うと、途端に気が重くなった。

「おいおい。別にそういう世界ばかりなんて言っていないぞ。少なからずともある、つてだけの話だ。そんな顔するなよ」

「そうだよな。そんな世界ばかりじゃないよな」

できるだけ前向きに考える。これから世界を回るのなら、楽しみながら回らなければ損だ。

そんなことを考えていると、やがて光が見えてきた。もうすぐ異次元図書館に到着する。その光が刹那たちを包みこみ、眩しさのあまりに目を瞑る。

「あら、おかえりなさい。どう？よく眠れた？」

不意にオリアスの声が聞こえてきた。目を開けると、湯気がたっているティーカップに口をつけてこちらを眺めているオリアスの姿があった。

「ああ、とつてもよく眠れた。良い家がありがとう」

ふふふ、と笑ってオリアスはソファアに座るよう刹那たちに促す。昨日と同じ場所に刹那たちはゆっくりと腰をかけた。

コト、と自分の机の上にティーカップを置き、オリアスは話を切り出す。

「さて、あなた達にはこれから異世界に行つてやつらの仕掛けた『罠』を外してもらつわ。そのまま放置しておくには危険だからね」

ありとあらゆる異世界には刹那を殺すための罠が張つてある。神の魂の入った刹那を殺すための強力なものだ。そのため、仕掛けられた世界の人々の身は常に危険にさらされていることになるのである。

「それはわかつたけど、異世界つて数え切れないくらいたくさんあるんだろ？どこに仕掛けられてるのかわかるのか？」

「確實、とまではいかないけどね。大体ある場所は想定できるわ」

オリアスは、自分の机の上で山のように重なっている本の中の一冊を取り出し、刹那たちの前で広げて見せた。

「何これ？くもの、巣？」

本の中には、網目模様につながっている線、くもの巣のようなものが書かれていた。

くもの巣は普通、糸と糸が何回も何回も重なっている部分は少ない。多すぎれば巣の主のくもが足を取られ、動きにくくなるからだ。だが、この本に書かれているくもの巣のようなものは、糸となつている線が何重にも重なっている部分がたくさんある。くもの巣を書いたものではない。一体これは何なのだろうか。

「異世界はこんな感じでつながってるの。線が何重にも重なってるところが異世界、それらを結んでいる線がゲートね。これから何が言えるかっていうと、一つの世界にはたくさんさんのゲートがあって、それぞれが違う世界につながってる、ってこと」

「それが罨が張られている世界と何の関連性があるんだ？」

「話は最後まで聞く。やみくもに罨を張っても引つかからなければ意味がない。かといって、確実に刹那君が通る世界がわかるわけでもない。だったら、少しでも来る可能性のある場所に罨を張るはず。言ってる意味がわかる？」

「つまりはゲートの数が多い世界に罨が仕掛けられている可能性が高いってことか」

「そういうことね」

パターン、と勢い良く本を閉じ、自分の机に放り投げる。勢いの付いた本は重なっている本の山にぶつかり、ぶつかった本の山は崩れてしまった。

オリアスは構うことなく、びっしりと本が詰まっている本棚に向かった。左から右へすー、と流すようにして本を探す。手が真ん中あたりに差し掛かったとき、オリアスは緑色の本を手に取り、ソファーに座っている刹那に手渡した。

「まずはこの世界の罨を外してきてちょうだい。あなた達が行つてる間、私とゼールは敵の本拠地を調べてるから」

「わかった。じゃあ行ってくるよ」

刹那は、手渡された本をゆっくりと開く。ゴゴゴ、という音が聞こえてきて、空間にゲートが創られた。

刹那たちは順番にゲートに入り込む。そして最後にレオが入ると、ゲートは何事もなかったかのように閉じてしまった。

しばらく刹那たちの入ったゲートを眺め、オリアスは再び本棚に手を伸ばした。

「……………まずはあいつらを起こさないといけないわね。ちやんと時間通りに起きなさい、って言ったのに……………」

ぶつぶつ文句を言いながら、寝坊したゼールとダンの部屋に向かう。師匠と弟子はやっぱり似るものらしい。二人そろって寝坊なのだから。

ゆっくり本を開き、ゲートの中を歩いてオリアスは二人を叩き起こしに行ったのであった。

+ + + + + + + + +

昔々、神様がいました。神様はなぜそこに存在しているのか、そしてなんのために存在しているのかわかりませんでした。ある日、いい加減同じ毎日に飽きた神様は光を作りました。しかし、光だけ作

つても面白くないので美しい大地を作りました。広い土、自然に草木は生えてきました。同時に海もできました。光に照らされ美しくきらめく草木、そして深い呼吸をしているかのように波を立てている海。こうして世界はできあがりました。神様は毎日それを眺め、楽しみました。そしてある日、妙なことに気がつきました。自分も眠るのだ、ということですよ。目を瞑り、光を遮断して初めて眠りにつくことができると理解した神様は、闇を作りました。自分の作った光はずっと照らしているの、照らし続けているその『時間』の半分を闇に覆わせる時間になりました。こうして昼と夜はできあがりました。朝になって起き、自分の作った世界を見渡し、そして夜に眠りにつく。その繰り返しでした。ある日、神様はいいことを思いつきました。自分に似せたものを作ろう、ということでした。一人だけ自我を持つていても面白くない。自分のほかにも自我を持つているものを作ろう、と考えました。自分だけができる物を創造する力。それを使い、自分の姿に似せた初めての生き物を作り出しました。初めてできた人間でした。が、その人間は動きもしないし、なんの反応も見せません。なぜだろうと神様は考えました。考えた末、神様は自分の魂をちぎってその人間にいれました。今度はちゃんと動きました。楽しい、うれしい、苦しい、つらい、などの反応も見せるようになりました。しかし、その人間は一ヶ月もたたないうちに死んでしまいました。なぜだろう、神様はもう一度原因を考えました。簡単なことだったのです。草や木も水を欲しがるように、人間もまた食料を必要としたのです。神様は草を食べるものを作り、そのあとにそれを食べるもの、さらにそれを食べるもの、そして草に栄養を与えるもの、最後に人間を作りました。今度はうまくいきました。世界のバランスは見事にとれ、種類の動物が世界を支配するということはありませんでした。しかし、そんな毎日にも飽きた神様は人間に知恵を与えました。考える、という力を与えました。どんな面白いことになるのだろう、そんな安易な考えでとんでもないものを与えてしまったのです。人間たちはとたんに繁殖しました。

生き残る術を知り、身を守る手段を学び、そして狩るということを覚えさせた。人間が繁殖してきたので、他の生物が減ってきたことに腹をたてた神様は人間に災いを与えました。病気、という災いでず。最初は人間たちもどうすればよいのかわからず、どんどん死んでいきました。いい気味だ、と神様は思いました。しかし、人間たちの知恵は恐ろしくいらい発達していたのです。病気の原因を探り、治療法を見つけ、そしてその病気で他の生き物を殺す術を覚えたのです。さらに、人間たちは伝える能力、すなわち言葉を使い、今までのあらゆる方法や手段を後世に伝えました。そのため人間は栄え、バランスのよかった世界は消えてしまいました。見かねた神様は自らその世界に君臨し、人間にいまの行為をやめるように言いました。人間たちはもちろん嫌だと言って首を縦には振りませんでした。仕方がない、と神様は人間たちに新たな知恵を教えるから今の行為はやめなさい、と言いました。人間たちはその知恵を教えてくれたらやめる、と言ったので、神様は新たな知恵を授けました。それは自分の中の魂の力、自分の肉体を動かしている力を利用するというものでした。その力はとてもすばらしく、今までできなかったことを簡単にできるようにしたり、不可能だと思われていたことを可能にしてくれたりしてくれました。その力は後に『魔力』と呼ばれるようになりまし。力を得た人間たちは素直に神様の言うことを聞き、今までの行為をやめました。しかし、その人間の間である考えが起こりました。神様を倒せ、と言う考えです。神様を倒せば今までの良い暮らしが帰ってくる。邪魔な神様を倒せ。そこで人間たちは協力することにしました。人間と言っても、4種類の人間がいます。闇を好み、もつとも魔力を使いこなすことのできる魔族、光を好み、もつとも使う力が神の使う力に近い神族、もつとも残忍で戦いを好む鬼族、力が強く、魔力がなくても十分に戦える獣族。それらの族長は団結し、神様に戦いを挑みました。しかし神様は圧倒的に強く、人間のほとんどは神様に触れることなく死んでいきました。怒り狂った神様は自分の作った世界を無限に裂き、作った世界とは違う次

元、異次元にその世界の破片を封印しました。こうして異世界は出来上がったのです。異次元に封印された世界に住む人間のほとんどが神様に恐怖し、敬い、服従しました。が、二つの世界だけ、神様に再び戦いを挑みました。あれだけ力の差を見せ付けられたにもかかわらずです。もちろん二つの世界は敗北しました。神様はその世界に罰を与えました。もつとも攻め込んできた世界に与えた罰は、頭脳を退化させ、格種族ごとに言葉をわけ、さらに種族ごとに大陸を分断し、団結できないようにした、というものでした。もう一つの世界に与えた罰は、破壊、創造、死、生、時間を司った神を作り、それぞれに見張らせるというものでした。そして、神様はそれぞれの神に『神器』という強力な武器と強力な防具を授けました。破壊には剣の神器を、創造には銃の神器を、死には鞭の神器を、生には爪の神器を、時間には槍の神器を、自分には自らを守るための防具の神器を、それぞれ与えました。神器を持った神は、神様と同じくらい力を持ちました。が、それぞれの司った神は絶対に神様と戦おうとしませんでした。なぜなら、心の底から神様を尊敬し、忠誠を誓っていたからです。各神が見張りについた世界は平和に時間が流れていきました。しかし、見張りの神の目が届かないところで、再び神様を倒そうという考えが広がっていきました。全ては自分たちが世界を支配するため。水面下、徐々にはありますが、その計画は進行していきました。やがて、人間たちは行動に出ました。と言っても、まともに戦っても勝ち目はないので、見張りの神が所持している神器を盗み出すことにしました。夜中に忍び込み、そして強力な武器、神器を盗み出すことに成功したのです。しかし、神々も黙っているはずがありませんでした。奪われた神器を取り返そうと、本気で人間たちにかかっていったのです。人間たちの犠牲はものすごいものになりました。でも、命がけで手に入れた神器をわざわざ返すような真似はしませんでした。文字通り、本当に必死で神器を守りぬいたのです。そして戦争は始まりました。これまでにないくらい、壮絶な戦争でした。人間たちは神器を使い神々を退けさ

せ、神々も与えられた力を容赦なく人間たちに使っていきました。双方とも実力は同じくらいだったので、長い間決着は着きませんでした。しかしある日、人間の世界で妙な動きがありました。神器がいくつか消えていたのです。人間たちは必死で神器を探しました。神器がなければ、神々とはまともに戦えないからです。調べた結果、一人の青年が盗み出し、単身で神々の拠点に向かったことがわかりました。人間たちはあせりました。神器を駆使し、しかも大人数で挑んでも勝てない神々に、たった一人の人間が敵うはずがない。それどころか、その人間が敗れてしまえば命がけで盗んできた神器が神々の手に渡ってしまう。それだけはなんとしても避けなければなりません。人間たちは残された神器を持ち、その青年を追い神々の拠点にたどり着きました。青年を助けるなどという理由ではなく、神器を取り返すという理由でここまで来たのです。人間たちは神々の拠点となっている王宮に入っていきました。向かってくる敵を倒し、倒し、そしてひたすら進みました。全ては人間の勝利のため。やがて、人間たちは創造主、神様のいる部屋までたどり着きました。ここまで来る間青年など見かけなかったのだから、いるとしたらここしかありません。人間たちは覚悟を決め、突入しました。扉の向こうは、信じられないことが起こっていました。自分たちがどれだけ団結しても、どれだけ時間をかけても、どれだけ踏み込んで、どれだけ犠牲をだしても敵わなかったあの神が、血まみれで地面に倒れていたのです。その近くには、神器を持っている青年。そのときでした。自分たちの後ろから走るような足音が聞こえてきたのです。振り向いてみると、4人の神々が顔を青ざめさせてこちらに向かってきました。人間たちは戦おうとしましたが、神々はそれどころではないのでしょうか、人間たちに構うことなく神の倒れている部屋に入りました。神々は絶句しました。自分たちを創った創造主が、こんなにもあっけなく倒されてしまったのだから。青年はやっと人間たちや神々の存在に気づいたのか、ゆっくりと体を向け、言いました。

「こいつが神を名乗る時代は終わった。今日から、俺が神になる。人間の住む腐った世界をみんなみなぶち壊して、俺が新しい世界を創ってやる」

青年の言葉を聞き、人間たち、神々、共に様々な反応を示しました。頭がおかしいのではないかと疑問符を浮かべる者、笑う者、怪しがる者、戦闘体勢に入る者。青年は無表情、無言で神器を構え、再び言いました。

「貴様らは邪魔だ。俺の理想の世界には、貴様らは必要ない」

青年が神々と人間にかかっていく、そのときでした。急に神様の体が光りだしたのです。神様は生きていました。その場にいたものは驚き、目を丸くして神様を見つめました。ただ、青年だけは驚きの目をしておらず、見下すような目で神様を見ていました。神様は最後の力を振り絞り、その世界を崩壊させました。神々に後を任せるためにも、ここで死なせてはならなかったのです。崩壊した世界の生き物全ては他の異世界にとばされました。神々、人間、神を殺した青年、そして神器。それらも例外なく、様々な異世界に召喚されました。異世界にとばされた神々は困りました。これからどうしよう、と。仇を取ろうと思っても、青年の現在位置が特定できないし、

なによりも自分たちでは無理だ。自分たちを創った神様でも勝てなかったのだから。ならばどうすればいいか？・・・・・・簡単なことでした。勝てる可能性のあるものは、創造主である神様だけ。だったらもう一度戦ってもらえばいいのです。死んだ者の魂は新たな肉体に転生する。神様の魂も例外ではありません。神様の魂が新たに転生した肉体ならば、その青年を倒せるかもしれない。幸いにも、神々は全員一緒の世界に召喚されていました。死の神、生の神がいるから、神の魂の転生先に困ることはありません。問題は、どうやってその者に干渉するか、でした。たくさん異世界、神々はどうやって他の世界に行くのか・・・・・・これも簡単なことでした。他の世界に行く方法。それがなければ創ればいいのです。異世界と異世界をつなく、『道』を。異世界から異世界へとつながる『道』を。神々たちは異世界と異世界をつなく図書館を創りました。創造の神の力によつて土台を築き、破壊の神の力によつて余計なものを削除し、時の神の優秀な弟子によつて異世界間の時間が統一されました。神々は出来上がったその図書館の名を、『異次元図書館』と名づけました。しかし、その図書館を管理するには人手が必要でした。破壊の神と創造の神は関わりたがらないし、死の神と生の神は冥界で魂の裁判で忙しい。残された時の神の弟子も、前ぶれなく神になってしまったので、色々勉強しなければなりません。やらなければならぬことを教えてもらう前に師匠を亡くしたのだから。そこで5人の神は、異次元図書館を管理するための『神』を創ることにしました。自分たちの能力を少しずつ分け合い、結集させ、それ創った肉体の中に解き放ちました。そして、新たな神が誕生しました。次元の神『オリ阿斯』が。次元の神が誕生したことにより、神の魂が転生した人間を探すことが始まりました。死の神と生の神が転生先を知っているので、探すこと自体に時間がかかりませんでした。問題は、神の魂が宿った肉体のほうです。せっかく強大な魂を受け継いでいても、相性が悪く、魔力が発動すらできない人間がほとんどで、たまに魔力を使える人間が現れても、

神様のときの魔力と比べれば象と蟻のようなものでした。神を殺した青年も、神々の意図に気がついたのでしょうか、神様の魂の転生した人間を探すようになったのです。もちろん一人ではなく、同じ思想を持った部下と共にです。異世界崩壊のための準備には時間がかかりません。その間に自分の天敵が現れるのをおそれた青年は、神の魂を宿した人間を探しては殺し、探しては殺し、を繰り返しました。神々も青年の間は、神の魂を宿した人間を探し続けるという硬直状態に陥ったのです。その間約2万3000年。神々の間では生きていくことに疲れ、仕事を弟子に託し、その弟子もまた生きていくことに疲れ、自らの弟子にあとを託すということが続きました。しかも、その長い間で破壊の神と創造の神は自らの存在自体が脅威と自己判断し、どこかの異世界に自らを封印してしまいました。神を殺した青年のほうは、どういうトリックかは不明ですが、長い間姿形を変えず生きていることを確認されていました。長い長い硬直ながらも、神々……、いや、私たちは『希望を』を探し続けました。ただひたすら、ひたすら。世界を崩壊させないため、私たちは探さなければならぬの。それが私たちの神々の仕事なんだから。あなたにも、いずれやらなければならぬ時がやってくるから。

第35話 異次元図書館編4（後書き）

さて、いかがでしたでしょうか？今回の物語は？せかい

とうとう明らかになった刹那の秘密・・・

なぜ刹那が異世界へ召喚されたのか、これから何をしなければなら
ないのか、明らかになりました

しかし、まだ明かされた秘密は全部ではありません

結局のところ、まだ謎だらけということです

さて、次の物語は約束編せかい

『約束』の意味とその強さをお楽しみください

第36話 約束編 1

もしあなた達がこの世界に来てくれなければ
私はあの方との約束を守れなかっただろう

刹那たちはゲートの中を移動していた。もちろん罫を外しに向かうためだ。

そういえば、刹那が異次元図書館にたどり着くまでの世界、一つ一つに罫が仕掛けられていたということを、刹那はいまさらながら実感していた。最初の世界、つまりダンに会った世界ではあらゆる生物の遺伝子を組み合わせ生まれさせた化け物、ラチスが立ちふさがり、次の機械の世界では、国の主軸となっていたAIに入り込んだ厄介なウイルス。その次のレオの世界では、神を殺した人間の部下、『シヤドウ』による罫で、レナの世界でも、神を殺した人間の部下、『サラ』が関わっていた。そして異次元図書館の一つ前の世界では、死にたくとも死ねない男、レメンが立ちふさがった。

彼がなぜそんな体になったのか、刹那たちにはよくわかっていなかったが、自然にああなったとは考えづらかった。

レメンの体を瞬時に回復させる能力は、もともと人間が備えている能力を遥かに上回っている。となれば、その能力は魔力によるものでしかありえなかった。しかし、レナがレメンの体からは魔力が感じられない、と言っていたので、この考えは通らない。

ならば、レメンの体にいったい何をしたのだろうか？いくら悩んでも、今の段階では刹那たちにはわからない。

「そろそろだぞ」

レオの声が耳に届いた。前を向いてみると、光が見えた。もうすぐ到着する。神を殺した人間たちによって畏を仕掛けられた世界に。光が刹那たちを包み込み、眩しさが視界を奪う。しばらく目を瞑り、光が消え去ったのを確認して初めて目を開ける。

そこは廊下だった。ぱつと見る限りではレオの国と同じような作りの城の廊下だった。壁の上のほうにはたいまつがあるが、今現在火は点いてはいない。昼だから点ける必要性がないのだろう。ゆっくりと辺りを見回し、状況を判断したレオは言った。

「とりあえず、隠れたほうがいいな。見つかったら、たぶん捕まる」
もつともな意見だった。城の中ならば、不審人物がいないかどうかの見張りの兵がいてもおかしくはない。幸い、今のところそんな兵士は見当たらないから、今のうちに身を隠せばゆっくりとこれからのことを考えられる。

「わかった。じゃあとりあえず・・・・・・・・・・」

「だ、誰だ！！！」

声のしたほうをばつ、と振り向いた。そこには鎧と兜で身を固めた兵士が驚いたようにこちらを見つめているのが見えた。もちろん一人ではない。二人いる。

兵士は互いにアイコンタクトを取ると、刹那たちのほう目掛けて走ってきた。鎧のせいでスピードが落ちているとはいえ、それを感じさせないくらい速かった。

刹那たちはとりあえず逃げ出した。ここで捕まってしまえば、かなり面倒なことになるからだ。捕まっていきなり死刑、なんて話になつてしまつてはたまらない。

角を曲がりきり、近くにあった階段を上った。決して緩くはないその階段は、後ろにつけてきた兵士たちとの間を空けるには適していた。

階段を上りきったとき、レオはあることに気がついた。

「しまった！これじゃ追い込まれちゃう！」

上に逃げてきてしまった刹那たちは、逃げ道を確保できていなかった。このまま一気に下から大人数で来られては、いくらなんでも捕まってしまう。かと言って、いまさら戻るわけにもいかない。どうすればいいか、それを考えようとした瞬間だった。

キィ、と音がし、近くにある大きな扉が開いた。その中から、桃色の髪の毛をした可愛い女の子が顔を出した。きよるきよると廊下を見渡し、困っている刹那たちを見つけると、嬉しそうに手招きをした。

「兄さん、どうするの？」

リリアが不安そうにレオに聞いた。

「……………このまま行っても捕まるだけだ。まあ行ってみるか。」

レオの案に3人は頷き、その女の子の部屋に入ってしまった。全員入ったのを確認すると、女の子は急いで扉を閉める。ふう、と安堵のため息をつき、改めて刹那たちを見つめ、話しかける。

「ねえねえ、あなたたち。あたしをさらいに来てくれたの？」

「……………は？」

女の子の質問に、疑問で返してしまったのが悪かったのか、女の子は少し口を尖らせてもう一度言った。

「だ〜か〜ら〜。あたしをさらいに来てくれたんじゃないの？」

「いや、違うけど………」

「え！？違うの？」

女の子は驚いたように返し、そしてしょぼくれてしまった。せっか期待していたのに、とでも言いたげな顔だった。

「せっかく外に出られると思ったのに……あ〜！！もう！！」

「そんな輩が現れたら、即刻切り捨てますがね」

奥のほうから若い男性の声がした。よく見てみると、胸当てとマントだけを着込んでいる兵士、いや、騎士が出てきた。兵士でなく騎士と感じたのは、その周りから出ている独特の圧迫感のせいだろう。

「あなたを連れ去ろうとするやつなど、俺が許しません」

「何真面目になってるのよ。もう………」

腕組みをしながらむっ、とうなる女の子を差し置いて、その騎士は刹那たちに言った。

「さて、あなた方は何の用があつてここに足を踏み入れたのですか？」

「話せば長くなるが、とりあえずここには来たくて来たわけじゃない」

「……………どういうことか、説明をしてもらいたいのですが……………」

仕方がない、といった表情でレオが口を開き、今異世界には罨が仕掛けられており、それらを解除するために来たことを告げた。

「……………つまり、あなた方はこの世界の、その……………罨を外しに来た、ということですか？」

「そういうことになるな」

レオは腕を組み、驚いているその騎士にたずねた。

「それで、この辺りで急におかしくなった場所、もしくは国はないか？」

その騎士は女の子のほうを見た。言ってもいいのかを確認しているものだすぐにわかった。女の子はにっこりと笑って、

「いいんじゃない？答えてあげて」

騎士は小さくため息をつき、刹那たちに説明をした。

「……………最近、隣国との友好関係が急激に悪化し、戦争になつていのです。こちらは何の非もないのに、あちらから一方的に戦争を仕掛けてきて……………」

「それだな………。それで現在の状況は？」

「こちら側が追い込まれております。もうすぐ、この城までたどり着かれるかと」

「そんなにまずい状況なのか？」

「……………」

その騎士は、無言でうなずいた。その姿からは、どこからか悔しさを感じ取れたような気がした。

もしその戦争を仕掛けた国が、畏になっているのであれば、戦闘状況が押されていてもおかしくはない。いや、押されていなければおかしいのだ。ちょっとやそつとで外れてしまふ畏など、仕掛けるやつはいない。ましてや弱い畏など仕掛けるやつもない。

「状況はわかった。俺たちも手伝う」

「あなたが我々に加勢するというのですか？」

「ああ、その通りだ」

「……………我々はあなた方に手伝ってもらうわけにはいかない。これはあくまで我々の問題ですから」

「……………いずれにせよ、俺たちはその国に行って畏を外してこないといけない。協力するかしないかはそっちに任せる。それでいいな？」

レオの言葉に、刹那たちは頷いた。

騎士は腕を組み、悩んだ。

今起こっている戦争はこちら側が押されている。今は一人でも戦力が欲しいくらいにだ。だが、そんなことを理由に戦いに巻き込んでもいいものか？しかも、手伝うと言ったのは自分よりも遙かに若い者ばかりだ。将来のある若者だ。できれば戦いなどに巻き込みたくはない。

だが、この者たちはどちらにしても戦いを挑みに行くと言っている。こちらの意見に関わらずだ。

どうしたものか、とうなっている騎士をつんつん、と女の子が突っつき、騎士はにっこりと笑っている女の子のほうに顔を向けた。

「いいじゃん。協力してもらおう」

「………正気ですか？」

「だって、この人たちだけで行かせちゃ危ないもの。それに一緒に戦ってくれるんだったら心強いじゃない」

「ですが………」

「いいの！決めた！私が今決めた！！」

強引に刹那たちと協力することを決め付けると、やはりにっこりと笑って手を差し出した。

「それじゃ自己紹介しよ。あたしはこの国の王女様。名前はイリー」

「俺はこの国の兵士長兼この方の護衛兵のレギスと言います」

王女だったのか、という驚きが顔に出てしまったのか、刹那はイリーに少し睨まれてしまった。

「俺はレオ。この小さいのがリリアで、そっちの剣を持つてるのがレナ。それでその黒髪のやつが刹那だ」

レオがそう言うと、レナとリリアはイリーと握手をし、レオと刹那はレギスと握手をした。

自己紹介が終わると、レギスはレナの持っている太刀に目を奪われていた。長く、細く、すらっとした真つすくなその太刀は、剣を知っているものならば誰もが釘付けになるくらい見事なものだったのだ。

「レナさん。剣のほうの腕前は？」

「え？まあまあ強いと思うけど、どうしてですか？」

「よろしければ手合わせを願いたいのだが……」

「あ、そういうことか。もちろんいいですよ」

「では早速お願いしましょうか。こちらへ」

言うなり、レギスはドアを開けて廊下へと出た。

レナはなぜかふふふ、と笑い、刹那のほうを向いた。

「刹那も来る？色々勉強になると思うよ」

「それじゃ行くこうかな」

刹那が廊下に出たレナを追いかけ、部屋の中はレオとリアとイリー
の3人になってしまった。

「それじゃ、君たちはあたしの話し相手になってもらおうかしら」
にっこりと笑ったイリーに、リアも笑って返した。

+++++

「もうすぐです」

廊下を早足で歩くレギスが言った。その声からは、楽しみで楽しみ
で仕方ないという色が出ていた。

一度上った階段を降り、さらにもう一度下りる。これより下へ行く
階段がないということは、イリーのいる部屋は3階で、ここは1階
ということになる。

1階の廊下を歩いているそのとき、前方から鎧を着込んでいる兵士
が2人向こうからやってきた。それも、先ほど見つかった兵士だ。
兵士は頭こそ兜によって見えなかったが、顔の部分だけは防具がつ
けられていないので、顔だけはしっかりと覚えていた。

「レ、レギス隊長！後ろに侵入者が！！」

「この方たちはイリー様の客人だ。危険はないから安心しろ」

「そ、そうですか。大変失礼しました」

そう言い残すと、兵士たちはそそくさと立ち去ってしまった。

はあ、と浅くため息をついたレギスのあとを、再び刹那とレナはついていった。しばらく歩くと、広い中庭が見えてきた。そこでは兵士たちが、いつでも敵に攻めて来られてもいいよう訓練をしていた。

「あ、隊長。お疲れ様です」

1人の兵士がレギスに気付き、挨拶をする。その兵士のあとに続き、他の兵士たちも挨拶をした。

「みんな、すまないがここをしばらく空けてもらえないか」

レギスがそう言うと兵士達は返事をして動き始め、数秒経たないうちに中庭が空いた。ちなみに兵士たちは廊下のほうで見学している。

「では始めましょうか」

「わかった。あ、刹那。ちょっと……」

レナが刹那に手招きをする。疑問符を浮かべている刹那がレナの近くに寄ると、レナは刹那の耳元で囁いた。

「あの入結構強いから、少し『面白いもの』見せてあげる」

「『面白いもの』?」

「うん。さ、行って」

レナの言う『面白いもの』とは一体なんなのか、刹那はわからなかった。レナとレギスの手合わせで何か勉強になるということはわかっているが、果たして面白いものとは……?」

レギスはレナに練習用の剣を渡したあと、自らの腰にある剣を抜き、構える。レナも渡された剣を抜き、構える。両者の準備は整った。あとは打ち合うだけ。

「最初に言っておきますが、手加減はしませんよ。本気でやるのでそのつもりで」

「わかった。じゃあこっちも遠慮なくいきますよ」

言った直後、飛び出していったのはレナだった。剣を握り締め、防御体制をとっているレギス目掛けて突っ込んでいった。

「ははは！見るよ、あの女！レギス隊長に突っ込んでいったぞ？綺麗にさばかれて終わりだな！」

見ていた兵士の一人が言った。

こうまで自信ありげに言い放てるのは、レギスの相手が女だったということもあるが、何よりもレギスの實力にあった。

レギスの戦法は自ら突っ込んでいく、ということはせず、相手が攻め込んでくるまで待つ、というものだった。動かず相手をじっと待ち、痺れを切らして振るってきた剣をさばき、空いている懐に剣を振り込む。守備型の戦闘方法だ。

その方法を長年取り続けているため、レギスは受け流しが非常にうまい。つまり、今迷うことなく突っ込んで行っているレナの剣をやすやすとさばいて一本とることなど簡単だ、と周りの兵士は思っている。

レギスが射程に入ったのを察したレナは、剣を横に振る。刀身がレギスの肩めがけて振られたと同時に、レギスは剣を斜めに構えた。レナの剣はそのまま斜めに構えたレギスの剣に向かっていき、完全に肩を捉えたはずの刃は進行方向を変えられ、受け流された。

「ハヤッぱりだ。綺麗に受け流してる」

受け流すことを完全に読んでいたレナは、空を切った剣の勢いをそのまま利用して後ろに跳ぶ。横に剣を振るったのは様子を見るためだということ、再び開いたレギスとの間が証明していた。

「様子見……………慎重にやってきてるな」

別に様子を見たからといって戦法を変える気はない。このやり方で何人も葬ってきたし、一度も敗れたことはない。レギスはこの戦法と自分の腕に自信を持っていた。

レナのほうを見てみると、深く息を吸い、そして深く吐くということを繰り返していた。おそらくは精神集中だろう。となれば、終わったあとに何らかの行動に出るはずだ。それまでは防御体制でいたほうがいい。

深く吸い、深く吐く。今度は目を瞑り、もう一度深く吸い、深く吐く。しばらく時間が流れ、あっ！と、レナの目は開かれた。

「刹那！！よく見えて！！」

そうレナが叫ぶと、再びレギス目掛けて走っていった。突っ込んでくるのは前と同じなのだが、速さと剣の握り方が違う。少し短めに持っているのだ。

土を蹴り、前へ前へとただ進む。文字通り、特攻。ぐんぐんと距離が詰まっていき、それぞれお互いの射程に入ったところで、レナは初めて剣を振った。

まるで激しい雨の如くの剣さばき。突きを激しく浴びせ、巧みに剣を使い相手に身動きを絶対に取らせない。仮に動けたとしても、その激しく振るわれてる剣によって八つ裂きにされるだろう。それほど激しく、速い攻撃だった。

へす、げえ……………

刹那はそれ以外に言葉が浮かんでこなかった。自分には到底真似できないと本能が言っているのもあるが、なによりもレナの技に魅せられていたからだ。

やわらかく、それでいて激しい。相手は逃げられず、嵐を恐れる動物のようにただ耐えるしかない。芸術だった。初めて剣の技が美しいと思つた瞬間だった。

レグスは最初のうちは受け流せていたものの、絶えず襲ってくる剣に動揺し翻弄され、徐々に受けきれなくなっていた。それがわかっていたので逃げようとするが、右に逃げようとするれば右から、左に逃げようとするれば左から剣が振られ、後ろに飛び退こうとしても、相手も一緒になって跳ばれるので絶対に逃げれない。

ギイン！！！！

ほんの少しだけの遅れだった。剣の速さについていけず、ほんの少

し剣が遅れたただけだった。あわてて剣を受けようとすると、もう遅かった。剣ははじき飛ばされ、レナの剣は首元に突きつけられていた。完全な敗北だった。

「た、隊長・・・・・・・・・・」

周りの兵士たちも信じられないようだった。毎日目標にしてきた人が、鉄壁とも言われるまでになった人の剣が、突然現れた『女』に敗れたのだ。シヨックが大きかった。

「あなたの戦法・・・・・・・・・・悪いわけじゃないんですが、幅が狭すぎるんです。」

「幅が、狭い？」

刃を鞘に収めながら、レナは言う。

「そうです。確かにあなたは受け流すことに関してはとても優れた能力をもっています。でも、本当の戦いは一つの戦い方じゃ生き残れない。様々な剣技を、相手に応じて使うことができれば相手が相応な実力者じゃない限り負けることはありません。現に、私はその戦法にあなたに勝ちました」

「・・・・・・・・・・」

実力に大きな差があるということ、レギスはレナの話から感じていた。

レナの言うとおり、相手によって戦い方を変えれば負けることはほとんどない。一言に剣技といっても、火と水のようにお互いの相性が良い悪いものがあるのだ。

だが、戦い方を変えると云っても、しっかりとその剣技を会得しなければならぬ。生半可な剣技では、いくら相性がよくても斬り殺されるのが目に見えているからだ。

レナは防御し、相手の攻撃を受け流すという戦法を持つレギスを相手に、速さと手数で勝負をし、そして勝った。レナがもともと速さと手数を使い短時間のうちに決着をつけるという剣技を普段から使っているのならばレギスが敗北するものなんとなくわかる。

だが、レナは別にそういうわけではない。向かってくる敵にはレギスのように受け流しを使い、いつまでも攻めてこない敵には先ほどのように突っ込んでいく。相手によって戦い方が変わり、なおかつその戦い方を完全に会得しているのだ。

一つの剣技を会得するのに一年以上はかかると言われている。そのため、レナのように多種の剣技を会得することはかなり時間がかかってしまう。それを15前後で会得しているとなれば、よほど子供の頃から剣を振ってきたのか、あるいは剣に関しては天才的な能力を持っていることになる。

どちらにせよ、自分よりも強いというのは明確だった。

「勘違いしないでほしいのは、あなたの戦い方を馬鹿にしてるわけじゃないということです。あくまでこれは私の考え方ですから」

レギスは、微笑みながら口を動かすレナがなんだか神々しく感じられた。

レナは自分のほうを見てぼーっとしている刹那の近くまで歩み寄り、笑って聞いた。

「どうだった？私の『抜刀技』？」

「もうすごいってしか言えない。本当にすごかった」

「ふふ、ありがと。でも肉体強化すればもつと速くなるんだね」

「ところでさ、『抜刀技』って何なんだ？」

ああそうか、と口にした後、レナは説明をし始めた。

「『抜刀技』はね、この神抜刀と一緒に先祖代々から伝わってきた剣技なの。抜刀技には

『型』があつて、全部で3つあるの。さっき見せたのは『抜刀技壹ノ型・時雨』」

「へえ〜。それでももう2つは？」

レナは口到人差し指をやり、やっぱり微笑んで答えた。

「それ言っちゃったら面白くないでしょ。いつか教えてあげる」

「それじゃ、楽しみに待ってますかね」

レナの抜刀技を見ることになるのはいつだろうか。そんなことを思っている、向こうからレギスが歩いてきた。少しも悔しそうな顔をしていないのは、芸術とも呼べる剣技に魅せられたからだろう。

刹那とレナのすぐ近くまでくると、レギスは頭をかき、少し照れながら言った。

「参りましたね。一応城一番の兵士と呼ばれているんですが、こちらもあっさり負けるとは」

「いや、レギスさんだってレナの剣を綺麗にさばいてたじゃないですか」

刹那が言うが、レギスは首を横に振り、

「子供の頃からずっと同じ剣技を練習してれば当然ですよ。変えようと思わずここまでやってこれたのも、俺自身がこの剣技を気に入ってたのかもしれないですがね」

子供の頃から練習をしてきた剣技があっさりと破られたのだが、これからもこの戦法でいく。そう刹那には聞こえてならなかった。

「そうだ！レギスさん、刹那に受け流し方教えてくれませんか？」

「いいですけど、俺でいいんですか？レナさんが教えてあげたほうが良いのでは？」

「私よりも受け流し方がうまいじゃないですか。ぜひお願いします！」

「わかりました。じゃあ刹那さん、こちらに」

「わ、わかった」

今レナとレギスが話していたのは自分のことだと気がついて、刹那は慌てて返事をした。

レナに剣を渡され、先ほど凄まじい手合わせをしていた中庭の中央に向かう。レギスはもうすでに剣を抜いていたので、刹那もゆっくりと剣を抜いた。

「あれ？軽いな………」

大剣を使っていた刹那が違和感を覚えるのも無理はなかった。今刹那が手にしている剣は、一撃で相手を葬るという重さを重視する大剣ではなく、手数で相手を翻弄するという軽い剣なのだ。長さも重さも違う剣に少し戸惑ったが、別にいい、という考えで剣を構えた。

「とりあえず、最初は打ち合ってみましょう。それから流し方は教えます」

「わかった。頼む」

しばらくの沈黙。相手が自分から行動を動かすことはない、ということは、先ほどのレナとの手合わせを見ていたからわかる。だから自分から向かっていくしかない。

刹那は剣を両手で持ち、そのまま担ぐようにして走っていった。ぐんぐんと距離は縮み、射程に入ったのを察した刹那はそのまま剣を振り下ろした。が、

「あ……………」

そのままあっさりと受け流され、勢いづいた剣は深々と地面に突き刺さってしまった。慌てて抜こうとしても、その間に首に剣を向けられて終了。本当にあっけなかった。

「……………刹那さん。あなた大剣使いですね？」

刹那の首から剣を離すと、確認するように刹那にたずねる。

「あんなの片手剣の持ち方じゃないし、肩に担いで向かっていくというのは大剣しかありませんからね。慣れていないのなら言ってくれ

ればいいのに」

「時間を無駄にしたくなかったんだよ」

「……………おーい！！誰か大剣持ってきてくれ！！」

レギスが周りの兵士たちに向かって叫ぶ。言われた兵士たちはざわざわと少し騒ぎ始め、しばらくしてから兵士の一人が少し埃のかかった大剣を担いできた。

「お待たせいたしました、隊長」

「悪いな。もう行っていいぞ」

「はっ。では失礼します」

一礼し、その兵士は再び自分の観戦していた場所に戻っていった。レギスは大剣を刹那に手渡し、たずねた。

「サイズはそれくらいでいいですか？」

「ああ。俺の使ってるのもこれくらいだ。ありがとう」

「いえいえ。……………では、始めましょう」

再び距離をとって、お互い剣を構える。慣れている大剣の握り心地に、刹那は安心していた。先ほどの剣とは比べ物にならないくらいしっかりとくる。

強く握り締め、肩にその巨大な刃を担ぎ、レギスに向かっていった。

第37話 約束編2

「見事にやられちゃったね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はあ」

ため息をつくのは頬に赤い一線の入った刹那。レギスと手合わせしていたときに振り回していた大剣が、自分の頬に少し当たって切れてしまったのだ。

「でもまあ、仕方ないんじゃない？あつちは何年もやってきてる人だから」

「だからってあんな負け方はないよなあ・・・・・・・・・・」

先ほどの手合わせのとき、刹那ははつきり言って遊ばれていた。

最初に渡された剣を使ったよりも、動きは良くなったものの、所詮は鍛錬なしの自己流。レギスめがけて何回も何回も大剣を振るうのだが、あっけなく受け流される。しかも、レギスは受け流して隙があるのにも関わらず、わざと首に剣を突きつけず勝敗をじらしていたのだ。

「まだまだだなあ。俺も・・・・・・・・・・」

「そんなことないでしょ。受け流しだつてすぐ飲み込めたじゃない」

「あれはレギスの教え方がうまかったからだよ。わかりやすくてすぐコツがわかったからなあ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そのとき、ほんの少しだけだが、レナの頭にある考えがよぎった。もしかしたら・・・・・・・・と。

レナが急に表情を堅くしたので、刹那は不思議に思った。今の話の中で、何か言っではいけないことでも言ったのかな、という考えも浮かんでくる。

「レナ、どうしたんだ？」

「え、あ！なんでもないよ」

珍しくあわてたレナは、にっこり笑って誤魔化した。その笑顔を見た刹那も、まあいいか、という風になってしまったのだった。

足音が聞こえてきた。見てみると、片付けを終えたレギスが刹那たちのすぐ近くにいた。

「片付け終わりました」

「言ってくれば手伝ったのにさ」

刹那がむくれたように言う。だがレギスは、ふ、と笑って言う。

「いえ、自分からやろうと言っただからこれくらいは当然ですよ」

「ありがとう。じゃ、行こう。レオたちが待ってるかもしれないしな」

「あ、すみませんが刹那さん、先に行っってもらえませんか？ちょっとレナさんに聞きたいことがあるので」

「? わかった。すぐに追いついてくれよ」

疑問符を浮かべると、刹那は中庭に来たときに通った通路を戻り始めた。

ゆっくりと刹那が遠ざかっていき、姿が見えなくなったところでレギスは話を切り出した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・刹那さんは剣を始めてからどれくらい経ちますか?」

「本人が言うにはまだ剣を持ってから一週間も経ってないそうです」

「そうですか・・・・・・・・・・・・・・・・それで、気がついてますか? 本人の剣のセンスの良さに」

やっぱりだった。さっきレナの頭によぎった考えは、レギスの考えたことと同じだった。

「うん。たぶん、私よりも良い才能を持っています。受け流しも見てて面白くなるくらいに早く上達していたし、まだ未熟だけど隙のあるところのないところを見分けるのがとても上手」

「しかも大剣を片手で振ってくる面もある。大剣を軽々と振れる力量とそのセンスがあれば近いうちにとんでもない化け物になりますね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レナはレギスの言葉を返すことができなかった。それが自分の言いたいことと全く同じだったからだ。

そんな予感はしていたのだ。うまく言葉では言い表せないが、今思うと刹那の奥底から感じられる不思議な感じは、いずれ化けるであろうとレナに囁いていたのかもしれない。

話を終えると、レギスは立ち上がった。つられてレナも立ち上がる。

「行きましようか。刹那さんを待たせると悪い」

レギスとレナは刹那の後を追った。何も知らされていない刹那の後を。

+++++

話の終わったレナとレギスは先に行っていた刹那に追いつき、一緒になってイリーの部屋に向かっていた。

さっき何の話をしていたのだろうと疑問が沸いてきたが、私の神抜刀の話だよ、とレナがあっさりと言ったので別に深く聞こうとはしなかった。

さっき下りてきた階段を再び上がり、3階にたどり着く。そしてイリーの部屋の前まで行こうと足を踏み出した瞬間、部屋の中からレオの声、いや悲鳴といったほうがいいか、が聞こえてきた。

「やめる~~~~~リリアあああああああ!!!!!!」

何があったのかは刹那には大体予測できたものの、レオとリリアのそういうことを知らない二人は血相を抱えてドアを開けた。

勢い良く開かれたドアの先には、リリアの口を塞いでいるレオ、むーむーと言葉を発せれないリリア、それを見て腹をかかえて笑っているイリーの姿が目映った。

目に涙が浮かぶほど爆笑しているイリーは、呆れて目を点にしている刹那たちを見つけると、こほん、と咳払いをし、何事もなかったかのように言った。

「あ、あら、お帰りなさい」

「……………イリー様、何にそう笑っていられたのですか？」

「え、いや、ちょっとね、レオとリアの話があまりにもおもしろくてさ」

「……………もう少し姫様という自覚を持ってもらわなければ困ります」

言われたイリーはむっとした表情で即答した。

「そっちだってあたし専属の騎士だってこと忘れてレナと遊びに行つてたくせに何言つてんの!」

「遊びに行つてたわけではありません。手合わせに行つてたんです」
「よ」

「同じでしょ！私を置いてけぼりにしたくせに!」

「ですから……………」

「……………喧嘩はそこまでにして、これからのことを話し合わないか？」

このまま引つ張ると長くなりそうなので、リアの口を塞ぎながらレオは言った。今全員集まっている間に、どこをどう攻めるのかなどを決めておきたかった。

そうですね、レギスがつぶやき、とりあえず喧嘩は収まった。

「とりあえず、現状は良いわけではないということはさっき話しをした通りです。ですから、戦いを引き延ばすのはあまり得策とはいえない。短期決戦が一番良いかと思われます」

「それはわかった。じゃあ俺たちはどうすればいいんだ？」

「あなた達は俺と一緒に敵地に突入してもらいます。あなた達だけに行かせるのも気が引けますからね」

「!? ちょっと!! 何言ってるの!! 何であなたが行かなきゃならないのよ!!!」

レギスの意見を真つ先に反対したのがイリーだった。

「今言っただじゃないですか。俺たちの国での争いに、刹那さん方だけを行かせるのは気が引けるからですよ。そのせいで刹那さん達が死んでしまったら……」

「で、も……」

何か言いたい。言い返したい。だが、言葉が浮かんでこない。レギスの言ったことがもつともなことだからだ。

自分たちには何の関係もない人たちが、自分たちの国の戦いのせいで死んでしまったら、悔やんでも悔やみきれないのは目に見えている。

何も言わず、うなだれているイリーを見て反論してこないことを悟ったレギスは、刹那たちの方を向き、確認を取る。

「刹那さん達もそれでいいですか？」

「それでいい。それで、決行はいつだ？」

少し考えてから、レギスは言った。

「明日にしましょう、明日の朝早く。奴らは日光のない夜のほうが強いんです」

「わかった。それじゃ明日だな」

「ええ。部屋に案内します。付いてきてください」

無言でうなだれているイリーが気になったが、刹那はレギスのあとを付いていった。

廊下の先にある階段を一つ下り、そのまま奥のほうに向かっていく。しばらく歩いていくと、周りのドアよりも少し大きめなドアの付いた部屋があった。

「すみませんが、一部屋しか空いていないんです。あ、でもベッドは4つありますのでご心配なく。では、ゆっくりと……」

部屋に案内するなり、レギスはそそくさと立ち去って行ってしまった。やっぱりイリーのことを気になるらしい。

とりあえず、とレオは部屋のドアを開けた。周りよりも大きめなドアの向こうは思ったよりは広く、これなら4人でも大丈夫だ、とレオはほっとため息をついた。

そんなレオの安心した態度を見たリリアはなぜかむっとした顔をし、レオに、

「兄さん、着替えるところ見ちゃだめだよ」

「見るか、んなもん。見なくても目に入っただけでも失明する」

「何よ！！実はちょっと期待したくせに！！！」

「んな貧相なもん期待すると思つか？あ？」

「ひひゃい！ひひゃい！（痛い！痛い！）」

うるさい口に蓋をするかのように、レオはリリアの柔らかい頬をつねる。つねられた本人のリリアは目に少し涙を浮かべてじたばたしている。非常に面白い。

「仲良いね、二人とも」

微笑んでレオは言うが、二人の耳には届いていない。

・・・その後10分くらいレオとリリアは喧嘩をしていた、というのは言うまでもない。

+++++

刹那たちを部屋に案内したレギスは少し早足でイリーの部屋に戻っていた。

やっぱり、もうすぐで長年待ち続けてきた『約束の日』がやってくる

るというのに、自分から戦地に赴くようなことを言ったのはまずかったか、と心の中で反省し、目の前のイリーの部屋のドアを開ける。しかし、中にイリーの姿は見当たらなかった。広い部屋といっても、イリーが隠れられそうな場所はせいぜいベッドの中くらいなのに、そのベッドもふくらんでいない。入れ違いになって出て行ったのだ。

どこに行ったかは大体予測できる。たぶんあそこだろう。レギスは部屋を出てそのまま来た道を戻り、階段を上がった。こつこつと階段を上り、一番上の扉をゆっくりと開ける。きい、と音がし、屋上に出た。不意に吹いてくる夜風と、明るい月光が妙に心地良かった。

ぐるりと辺り見回してみると、手前のほうで小さくなっている黒い影を見つけた。

「イリー様、風を引きますよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・引かない・・・・・・・・・・」

「そんなこと言って・・・・・・・・・・」

レギスはドアを閉め、座り込んでいるイリーの隣に腰を下ろした。イリーは何も言わず、下を向いていた。

とりあえず、何か言わなければ。そう思ったレギスは少しの沈黙のあと、口を開いた。

「・・・・・・・・すみませんでした」

「何がよ？・・・・・・・・・・」

「もうすぐ結婚式なのに、あんなこと言ってしまって」

「ほんとよ。もっとあたしのこと考えてよね」

結婚式、それは夫婦となり永遠の愛を誓い合う儀式である。この二人は一カ月後に式を挙げる予定だったのだ。

「でも、この戦いが終われば安心して式を挙げられます」

「……………その戦いであなたが死んじゃったらどうするのよ。一人で結婚なんて嫌だよ？」

「俺は死ぬつもりはありませんよ。それにあなたを一人にさせるつもりもありません。あのとき約束したでしょう？」

話は5年前にさかのぼる。そのときの夜も同じように月が輝き、そしてそよそよと夜風が吹いていた。

二人は城の屋上で並んで座っていた。別に恋人同士が漂わせる良い雰囲気というわけでもなく、ただ純粹に月夜を楽しんでいる空気にしかなまればいなかった。

金色に光る月。それに魅せられたかのようにじっと見つめていたイリーは、前触れもなく口を開いた。

「ねえ。レギスって何で兵士になろうと思ったの？」

顔を見せ合わず、月を眺めているだけでも、答えは返ってきた。

「なりたくてなったわけじゃないです。それしか道がなかったんですよ」

「ふうん……じゃあ、あたしの護衛も仕方なく？」

「それは違いますね。俺が志願したんですよ。やらせてください、ってね」

「え？」

てつきり仕方ないから、という答えが返ってくると思っていたイリーは驚いてレギスのほうを向いた。そのレギスは別にもなかったように平然な顔をし、月を見上げていた。その平然としているレギスの横顔に、イリーは目を奪われていた。なぜかは知らない。目が離せなくなっていた。

「どうしたんですか？」

じっと見られていることに気がついたのか、レギスもイリーの方を向く。するとなぜかは知らないがイリーの顔が自然と赤くなり、それを誤魔化すようにバツ、と後ろを向いてしまった。

「何よ……これ……」

胸に手を当ててみる。バクバクと心臓が高鳴っているのが、自分の右手を伝わってわかった。

このようなことは別に今回に限ったわけではない。今までに何回もあったことだ。ほんのさりげなく手が触れたときや、訓練をしてい

るとき顔を見たときにはいつもこうなる。だが、未だ理由はわからない。何回も同じことがあったのにもかかわらずだ。なぜ、どうして。そんなことが頭に浮かんでくるが、それを振り払ってレギスに先ほどのことをたずねた。

「そ、それでなんであたしの護衛になりたいなんて言ったの？」

レギスは困ったように頬をぽりぽりと掻いた。こんなところで言っているものなのか・・・と悩んだ末、レギスをはつきりと伝えた。

「惚れた女くらい自分の手で守ってあげたいでしょう？」

「惚れたって・・・あたしに!？」

「そうですが・・・」

「な、なんで!!??」

あまりの驚きに、イリーは自分の顔が赤いのも忘れてレギスの方を向いて叫んでいた。イリーは本当に驚いた表情をしていた。何で自分なんか惚れたのだ、とその顔が言っていた。

月光に照らされ、イリーの顔色がわかったのか、レギスはやにやと笑いながら言った。

「覚えてないんですか？初めて会ったときのことを。訓練が厳しすぎて気絶したところを介抱してもらったじゃないですか」

「あ・・・あれ、ね」

そういえば一ヶ月くらい前、気まぐれで兵士達の訓練を見に行った

ことがあった。そのときに見にしたのが、呆気にとられるくらいに激しい訓練だった。兵士全員が切っても切れない木の棒を使って目の前の兵士を打ちまくるといふ単純なもののだが、怪我をする危険性がかなり高い。

防具なしでやっている上、四方八方から木の棒が襲い掛かってくるのだ。痛いのが嫌ならばよけるなり防御するなりしろということなのだろうが、これはひどすぎる。

確かにこのやり方ならば、限りなく実戦に近い形でやることができ。周りからの容赦ない攻撃、油断すればすぐ痛い目にあうこと。戦争とほとんど同じだ。

だが、リスクが大きすぎる。これではいざ戦争などになってしまったときに、怪我をして出られなくなる確率が非常に高くなってしまふ。話にならない。

そんなことを思いながら兵士達の乱闘を見てみると、一人だけ自分と同じ、もしくは少し年上の青年が、周りの大人の兵士にも引けをとらない腕前で棒を振っているのが目に入った。

この城には、自分と同じ年代の子供がいない。そのためイリーはずっと友達ができず、一人で過ごしてきた。もちろん専属のメイドたちがいるのだが、皆年齢が離れており、友達とはまた違った関係となっていた。

だが、今見ているあの青年だったら友達になれるかもしれない。年も近そうだし、話が合うかもしれない。イリーの勘がそう言っていた。

と、そのときだった。正面の兵士と打ち合っている青年の後ろに、木の棒を振りかぶった別の兵士がいた。青年は夢中になっているのか気付いてはいない。

勢い良く振り下ろされた木の棒は青年の頭に直撃し、食らった青年はそのまま地面に倒れてしまった。

どさつ、と倒れた音が耳に入った瞬間、イリーは青年の元に駆け寄っていた。周りの兵士は目を丸くしていたが、張本人のイリーはま

まったく気にしていないようだった。

イリーは自分の体よりもずっと大きい青年の体をずると引きずって中庭の端のほうに行き、自分の膝に青年の頭を乗せた。いわゆる膝枕というやつだった。

その後、目を覚ましたレギスは自分が今どうなっているのかを理解し、驚くが、無理矢理イリーに押さえつけられ、半分強制的に膝枕をされたという。これが、イリーとレギスの初めての出会いで、友人となった時のことだった。

「あ後はひどかったですよ。周りの兵士にはうらやましがられたり、ひがまれたりしましたからね」

「だって、初めて友達になれると思った人が倒れるんだもん……
・・もつびつくりしちゃって」

赤くなってうつむくイリーは、今まで見た中で一番可愛かった。見ているうちに、次第に胸が熱くなってくる。やっぱり自分の気持ちには勝てそうもない。

「イリー様」

「な、何!？」

「俺と結婚してくれませんか？」

「へ?」

本当に不意を突かれたようだった。当たり前だ、大事なことなのにさも当然のようにさらっと言ってしまうのだから。

「あの時から、ずっと惚れていました。俺と結婚してくれませんか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今度はちゃんとレギスの言ったことを理解したようだった。その証拠に、イリーの顔がぽーっと真っ赤になっている。まるで完熟したトマトだ。

レギスと合わせていた視線をそらすと、イリーは下を向いて黙ってしまった。自分の気持ち、今の気持ち、どうしたいか、どうなりたいか。イリーは、自分の胸の中でごちゃごちゃと絡み合っているその気持ちを落ち着けようと必死になっていた。

どうしようどうしようとり乱しているイリーを見つめながら、レギスは黙って答えを待った。時々自分のほうをちらりとは見てくるものの、まだ答えは出してくれない。

やがて決心がついたのか、まだ少し赤くなっているイリーはレギスのほうを向いてつぶやくようにそつと言った。

「うん・・・・・・・・大切・・・・・・・・・・してよね」

「ほ、ほんとですか!!!!!!」

レギスがこんな風に興奮しているのは初めて見た。よほど嬉しかったのだろう、顔が笑っていた。

「うん。結婚、しょ・・・」

イリーは、あの時になぜ自分の胸が高鳴っていたのか、今やっとわかった。

自分は知らず知らずのうちに、この『男』を愛していたのだ、とい

うことが、今やっとわかった。

「まあね。結婚する、って約束したもんね」

「俺は約束を破りはしませんよ。必ず終わらせてきます」

あのときのレギスのプロポーズの後、二人はすぐに結婚をしたわけではない。王様に報告に行ったところ、まだ娘をやるには早い！と必死になって断られたため、式を延ばす以外他なかったのだ。

時間があれば娘の考えも変わるだろう。そう思っただけで王様はあのと必死になって断ったが、それは無駄なことだった。今日に至るまでイリーの気持ちは少しも変わっていない、いや、むしろ日が経つに連れその想いは強くなっていったのだから。

さすがの王様も、娘の強い意志（もとい愛）には勝てず、ついにはレギスとの結婚を許してしまった。

結婚を許された二人は手を取り合っただけで喜び、お互い協力して式のことを決めていった。当日はどうするか、どんな式にするかなどなど。そして、ついに式の日が決まった。その日は知っての通り、あと一カ月後。

「………戦いが終わっても、あなたが生きてないと意味ないの。わかってるでしょうね」

「わかってますよ。ちゃんと生きて帰ってくると『約束』します」

「………言葉だけじゃ不安、かな。」

そう言うと、イリーはゆっくりと立ち上がりレギスのほうに向き直った。心なしか、顔が笑っている。

さっきイリーは言葉だけじゃ不安、と言った。となれば何かしてやることは確実だろう。だが、それが何だかわからない。

頭の中でごちゃごちゃ考えていると、イリーがそつと近寄ってきた。いよいよ何かされるな、とレギスの頭の中で思った瞬間だった。

頭の中が真っ白になり、時間が止まったという錯覚に襲われた。

今この瞬間、自分の見間違いでなければ、自分の唇とイリーの唇が重なっている。目の前には目を閉じているイリー。間違いない、今自分は………

しばらくし、イリーがそつと唇を離れた。ぼかん、と呆気にとられているレギスが面白いのか、笑っている。

「えへへ、ちよつとフライング………」

今更恥ずかしくなったのか、イリーは少し赤くなっていた。それを見たレギスも途端に赤くなる。

真っ赤になつて沈黙する二人、見ている分には面白いかもしれない。

「………いい？絶対に帰ってきてよね。約束だよ？」

「………ええ。必ず帰ってきます。約束です」

顔を赤く染めながら二人は約束をした。

満月が美しいこの夜に、大切な大切な約束を。

第38話 約束編3

翌日、まだ日が昇りきらないという時間に、刹那たちとレギスとレギスの引き連れていく部隊は畏が仕掛けられているだろう、隣国の城めがけて馬を走らせていた。朝日が昇っていないうちに馬を走らせたのは、敵の兵は夜に強くなり日が出ているときには若干弱くなる、というレギスの情報からだった。

確かに日が出ているときよりは夜のほうが戦いにくいだが、別に能力そのものが弱体化するわけではない。そのため、相手が特別に強く感じただけなのかもしれない。だが、レギスのはつきりと夜には『強くなる』と断言している。敵国の兵が夜の戦いに慣れているだけなのではないか？とレオが聞いてみたところレギスは、剣を受けたときのあの力は絶対人間のものではない、と言っていた。実際に戦つての情報なのだから嘘のはずがない。

人間の部類は、夜に力が高まるなどということはない。と、なれば『畏』が敵国の兵士に何かをした可能性が高い。急いで畏を解除しなければ、取り返しのことになるかもしれない。

朝日が次第に昇ってきた。山から輝く太陽が顔を出し、刹那たちの顔を照らした。一瞬くらみ、次第に目が慣れてくると、敵国の兵士の前衛が見えた。一列にずらつと兵士が並び、その後ろも同じように一列にずらつと兵士が並んでいる。二重の防衛線だ。おそらく前の一列が破れたときには後ろのもう一列がカバーするようになっていたのだろう。

「まずは俺達で崩します！！刹那さん方は後ろで待機してくださいください！！」

そうレギスが叫ぶと、レギスたちの部隊は前衛の一列めがけて突っ込んでいった。自軍の兵士は敵兵に近づくと馬を飛び降り、剣を抜

いて切りかかる。敵兵も同じように剣を抜き、応戦する。刹那たちは言われたとおり馬を止め、レギス達と敵兵の戦いを見ていた。ひどいものだった。途切れず響き渡る剣の打ち合う音、ときおり聞こえる敵か味方かもわからない断末魔、高く吹き上がる真紅の血しぶき。本当に戦争だった。

「レオ？どうした？」

不意にホルスターから神爆銃を取り出し、右手に持っているレオを不審に思った刹那はたずねた。と、そのときレオの手がパツ、と一瞬光り、カチャカチャという音がして弾が装填された。

「ちよつとな」

にやりとレオが笑って馬から降り、敵軍に走っていったかと思うとぐっと足を曲げ、空高く飛び上がった。

「レギス軍！！目を睨れ！！！」

レオの叫びと同時に、レオの右手の神爆銃から弾丸が飛び出した。弾丸は垂直に下へと落下していき、地面に突き刺さった瞬間、辺りはまばゆい閃光に包まれた。

「う……………」

先ほどの太陽のまぶしさとは比べ物にならなかった。光りが目に突き刺さっているようだった。光りにくらし、しばらく目を閉じていると不意に肩を叩かれた。

「だから目を閉じろって言ったろ」

呆れたようなレオの声が聞こえてきた。目を開けると、敵兵はみんな地面に倒れていた。目がくらんでいたときには自分の視界のほうに気が取られていて、戦闘の音が止んだことに気がつかなかった。

「レオ、さっき何をしたんだ？」

「光属性の弾、つまり『アルテマ』の威力を絞った弾を撃ったんだ。『アルテマ』はもともと光が結集してる代物だからな、威力を落とせばただの閃光弾になる」

「でも、何でそのただ閃光弾であいつらは倒れてるんだ？」

「レギスが言ってる？ やつらは夜に強くなるって。もしかしたらやつらは光りに弱いのかって思ってたやってみれば、こうなったわけだ。まあここまで効果があるとは思わなかったがな」

相変わらずレオの頭の回転には驚かされる。レオはたった一発の弾、それも閃光弾で戦いを鎮めたのだから。

「とりあえず助かりました。では行きましょう。できれば今日中に決着をつけたい」

敵兵が倒れている間に行けば、とりあえずは安全ということでもレギスの部隊はすでに馬に乗っていた。

仲間が少人数であれ死んだのに、悲しみに暮れる兵士派一人もいなかった。戦いが長く続きすぎて誰かが死ぬということに慣れてしまったのだらうか。

レギスを先頭に、再び兵士たちと刹那たちを乗せた馬は大地を蹴り、一同を敵の本拠地、隣国の城に向かって再び前進し始めた。

城自体はもう見えている。となればその城までの距離はそう遠くないはずだ。
思っていた通り、しばらく馬を走らせるとすぐに城の前までたどり着いた。だがセオリー通り、城へと続く立派で巨大な城門は固く閉じられていた。この強固な城門を破るのに時間がかかるのは目に見えている。どうしたものか……

「俺が破る」

刹那はそう言うと馬を降り、魔力を結集させ大剣を精製した。美しく黒光りする大剣をぎゅっと握り締め、刹那は城門に向かっていく。足を曲げ、高く跳ぶと同時に大剣で城門を切り裂き、すぐ近くにあった壁を蹴り横に跳ぶ。その際にも城門に切れ目を入れ、地面に落下する際にも大剣で切る。

刹那の入れた切れ目は四角形型になり、そのまま強く蹴飛ばすとゆっくりと切られた部分の城門が倒れていった。どおん！！と轟音が響き渡り、内部までの道が開けた。

「いくぞ！！！続け！！！」

レギスが火蓋を切り、兵士達は城下町に突入した。

いつもは賑わい、活気で包まれているはずの城下町には、一人いかなかった。家の中に閉じこもっているのかもしれないが、少なくとも外に出ている者はいなかった。だが、これももうすぐ終わる。いや、終わらせる。馬に激しく揺られているレギスは、改めて決意した。

その人気の全くない城下町を通過し、城目掛けて馬を早める。徐々に近づいてくる城に不安と恐怖を覚えた。

ほんの少し馬を走らせると、再びレギスたちの前に城門が立ちふさがった。

城門と呼ばれるものは、外敵からの進入を防ぐためにあるものだ。最初に刹那が破った城門は城下町の侵入を防ぐため、そして目の前にある城門は国の脳といつても過言ではない城の最終防御のためにある。そのためなのか、最初のものよりも立派で強固なものになっている。

誰が破るか、それを考えたのは無駄だった。なぜならば、その城門は破るまでもなく、勝手に開いたからだ。何かの罠かと一瞬警戒したが、開門と同時に敵兵が一気になだれ込んできたので疑問は吹っ飛んだ。罠でもなんでもなし、迎撃のために城門を開けたのだ。

「刹那さん方は俺と一緒に来てください！お前ら！！頼んだぞ！！」

そう言うと、レギスは馬を走らせ向かってきた敵兵を踏み潰すように進んでいく。レギスの進行を阻止する者もいたが、妨害する前にレギスの剣の餌食になってしまった。

刹那たちは言われた通り、レギスの後を追った。敵兵が襲ってくる前に倒れたのは、一番前にいるレオが近づかれる前に射撃しているからだろう。その証拠に、前の方から発砲音が鳴り響いている。城門を突破した刹那たちは馬の足を止めることなく進んでいく。だが、レギスの後を馬で追いつけているうちに刹那は妙なことに気がついた。

城内に兵士がいないのだ。出てきたのは最初のほうだけで、場内には兵士、いや人一人いないもぬけの殻状態だった。

「レオ………これって………」

「典型的な罠だったな。だが、ここまで来て引き返すわけにはいかないだろ」

やはりレオも気がついていて、敵兵が一人もいないというおかしなことに。

だが、刹那とレオの考えとは反対にレギスはどんどん先へ進んでいく。戦いを早く終わらせたい、という気持ちのせいで判断力が鈍っているのか、レギスはこの状況のおかしさに気がつけないでいた。と、そのときだった。先頭のレギスが柱を通り過ぎたと同時に、その柱から不意に人影が出てき、刹那たち4人の乗っている馬の足を斬りおとした。

「な!？」

当然痛みと支える足を失った馬はそのまま地面に倒れこみ、その上に乗っていた刹那たちも地面に叩きつけられる形になってしまった。

「いつて………」

ゆっくり起き上がる刹那。それにつられるようにして3人も起き上がる。

「リリア、怪我は？」

「ううん、大丈夫」

レオは、リリアに怪我がないことを確認した後、すぐさま自分の後ろに移動させ、ホルスターの神爆銃を右手に取る。それと同時に、レナも腰の神抜刀を抜き、構える。

4人の目の前には、両手に剣を持った3人の鎧兵士が立っていた。中世の騎士がかぶっているような顔全体を覆い隠す兜、動きに支障が出る代わりに防御を重視したのがわかるくらい大きな鎧。冷たい金属の塊を纏っている兵士達独特の雰囲気もそうだが、表情が読み

取れないのと微動だにしない分、余計に威圧感を感じてしまう。」

「どうする？このままだと、レギスが危ないかもしれないよ。」

確かにそうだ。この国が乱れている元凶が畏のせいなのならば、国の兵を動かしているのも畏となつていいる人物である可能性が高い。その人物とは、おそらく『神の使い』を名乗る者だろう。

前の世界で神の使いを名乗っていたシャドウとサラは、並の能力者とは比べ物にならないほどの戦闘能力を持っている。となれば、この国にいるかもしれない『神の使い』も、高い戦闘能力を持っていることになる。そんな場所にレギスを一人だけで行かせるのは、あまりにも危険だ。

しばらく悩んだレオは、決断した。

「刹那、レナ、レギスの後を追ってくれ。あとで俺達も追いつく。」

「でも、それじゃレオが……………」

ここで敵兵3人の足止めをすつた本人のレオは、刹那と最初に会つたときに見せた、あの不敵な笑みを浮かべて言った。

「何言つてんだ、俺を誰だと思つてる。すぐ追いつくさ。」

「……………わかつた。レナ、行こう。」

「うん。」

「二人とも、気をつけてね。」

刹那とレナはレオの言つたことを信じ、敵兵の横を通り過ぎようとし

た。が、わざわざ敵が自分の真横を通っているのに攻撃しないわけがない。一番右側の兵士が、刹那達のほうを見向きもしないで手に持っている剣を振り上げ、そのまま異常な速度で振り下ろす。だが、狙われているはずの刹那とレナは、逃げようとも、よけようとも、剣で受け止めようともしなかった。なぜならば、

ズガン！！！！

こうなることがわかっていたから。

レオの放った弾丸は見事振り下ろされた剣に命中し、後ろの方へと弾き飛ばしていた。刹那とレナはその一瞬の隙を逃さなかった。自分達に再び火の粉が降りかからないうちにレギスの進んでいった道を走っていく。

敵兵の3人は刹那とレナのほうを一瞬向いたが、レオの手の中に納まっている銃がチャ、という音が聞こえると、すぐさま戦闘態勢に入っているレオをターゲットに切り替えた。

「いいか、絶対俺の後ろから離れるなよ」

「……………うん」

レオが手に持っている神爆銃の引き金を引き、銃声が辺り一面に響き渡った瞬間、このフロアの戦いは始まった。

+++++

長い長い廊下。そこに響くのは馬の走る音だけだった。もうすぐこの国の王のいる間、いや『畏』が仕掛けられているポイントと言ったほうが正しいか、にたどり着く。

レギスの握っている手綱に汗が染み込んでいく。いよいよこの戦いを終わらせることができる、そう思うと、自然に馬を急がせてしまふのはなぜだろうか。

早くあの人の元に帰りたい、帰って笑って戦いが終わったことを告げたい。進むたびに浮かんでくるその想いがレギスを急がせ、また焦らしていく。もう刹那達が足止めを食らっていることなど、目に入っていないかった。

ふ……………やつと、やつと終わらせることができる……………
……………

馬を走らすこと数分、目に入ってきたのは大きな扉だった。この先に、畏がいる。戦いの元凶が。

レギスは馬から降り、ゆつくりと扉に手をかけ、力を込めて押した。扉はレギスを阻むことなく鈍い音を立て開くが、レギスは怪しむことなくその中へ入っていった。

この国の王の間は、信じられないくらい広がった。横幅、縦幅、そして天井、それら全てが自国のものを上回っていた。だが、別に驚きはしなかった。今玉座から立ち上がっている人物に気を取られていたからだ。

ゆつくりと歩を進める。こいつが元凶、戦争の源。距離を詰めていくにつれ、その人物が男であること、髪の毛が真っ赤であるということ、背に何か長いものを背負っていること、上半身だけ青色の鎧を装備していることがわかってきた。

やがて、もう普通に話しても聞こえるような距離になったところで、

その男はやつと口を開いた。

「驚きました。まさか一人でここまで来るとは、私も予想外でした」
丁寧な口調、棘々しさのない雰囲気。それが男から感じ取れたこと
だった。

「貴様が『畏』というやつか？」

「そうです。私がこの世界の畏ということになっていきます。それで、
あなたは？畏の存在を知っているということは、もしかして……
……」

「残念だが、俺は貴様の目的の人物ではない。貴様が攻めている国
の騎士だ」

「だと思いました。あなたからは魔力が全く感じられませんかね。
そんな無関係な貴方が私のことを知っているとすれば、近くに神の
魂の器がいることになりませぬ」

そう言うと男は背中に手を伸ばし、背負っている長いものを手にし
た。男の手にしたものの、それは灰色の持ち手の先が3つに分かれて
いる槍だった。

レギスはその槍が発している雰囲気、レナの神抜刀と同じことに
気がついた。美しく、それでいて力強い独特な感じ。神器というや
つだろうか。

「関係がないとはいえ、畏の存在を知られてしまったからには死ん
でもらわなければなりません。この『神突槍・魔』の鎧になってく
ださい」

「悪いがそういうわけにもいかない。こっちも全力で相手をさせてもらっ」

そこでレギスは初めて剣を抜き、構えた。じつと相手のほうを見据え、自分は動かず相手がかかってくるのを待つ。

それを見た男はすつ、と槍を構え、そのまま突進していった。レギスにとっては好都合。レギスは剣を構え直し、男の槍の攻撃に備えた。

こうして、『畏』とレギスの戦闘は始まった。強い想いを持つレギスと、刹那を殺すために張られた『畏』の勝敗は、この段階ではまだ誰にもわからない。

+++++

「………こういうタイプか」

「兄さん、どうしよう………」

刹那とレナが見えなくなった頃、レオは敵兵3人、いや、3体に苦戦を強いられていた。

まず、この3体は人間ではない。いくら弾丸を撃つても倒れこまないのは別に驚きはしなかったものの、下半身を吹っ飛ばしてわかったことには正直レオはかなり動揺した。

中に人が入っていないなかったのである。剣を操り、巧みに自分を攻撃してくるのは鎧を着た人間ではなく、鎧そのものだった。

下半身が吹っ飛んだ敵兵は、ほふく前進で自分の下半身の場所まで移動し、手で器用にくっつけ、何事もなかったかのように再び襲い

掛かってくる。さつきからこの繰り返しだ。いくら撃つても撃つても、襲い掛かってくる。敵兵の鎧に無数の弾痕が残っているのが何よりの証拠だ。

レオは、鎧そのものを『アルテマ』で消滅させればいいのでは、と考えたものの、敵3体それぞれがばらばらな方向から襲ってくるため、一気に消滅させることができない。だからといってこんな場所で貴重な『アルテマ』を3発も使用するわけにはいかない。一発精製するために3日間という長い時間を要するからだ。

「……………仕方ないか」

レオは腰のホルスターからもう一丁の『神爆銃・光』を取り出し、中に入っている5発の『アルティマ』を全て取り出して自分のポケットに入れた。これで銃のマガジンは空になった。

レオは取り出した『神爆銃・光』を左手に構え、グリップをぐつ、と握る。すると『神爆銃・光』は一瞬光りに包まれ、カチャカチャと弾が装填された。

これでレオの両手には二つの神器が納まった。右手には美しい黒光りを見せる『神爆銃・闇』が、左手には清い光を放っている『神爆銃・光』が握られている。いつも片方しか使っていないレオの本来の戦い方は両手に銃を持ち、圧倒的速さの連射で相手を押さえつけるというものだったのだ。

レオは左手の神爆銃をチャ、と構え、敵兵3体の間めがけて撃つた。ズガン、という発砲音のあとに、白い銃身から黒い弾丸が飛び出し床に突き刺さる。すると、弾丸が突き刺さった場所を中心に黒いドーム型の空間が出来上がり、敵兵3体はその中にずると引きずり込まれていった。

「兄さん、あれって……………」

レオの本来の結晶能力は全属性結晶化、つまり火、水、風、土、雷、闇、光の属性を持つ弾丸を精製するという能力なのだが、何も属性を持たない弾、すなわち通常弾を精製することと、マガジンに弾丸を装填するということも可能となっている。属性の付加された弾を精製でき、なおかつ勝手に弾丸を装填してくれるこの能力は、銃使いにとつて大変ありがたく、使い勝手の良い能力なのである。

だが、一見バランス力に長けているこの能力にも弱点がある。それは、自己の魔力を他の属性の魔力に変換するため、属性の付加した弾丸を精製するときに時間がかかってしまうということだ。

たとえば、一発がダイナマイトにも匹敵する威力を誇る火の属性の弾でも、魔力を込める時間を減らしてしまえば、ただのライターの火力にも劣る役に立たない弾ができてしまうし、全てを消し去るほどの威力を持ち合わせている光の属性の弾、『アルティマ』も、半端な時間で精製すればただの閃光弾になってしまう。

だが、今レオが連射している弾丸は何の属性も付加されていないため、時間をかけずとも高い威力を持つ弾丸が精製できるのだ。

ほんの1分か2分という短時間のうちに、レオの放った闇の弾丸の効果はなくなってしまった。時間さえかけてゆっくり精製すればもう少し長い時間引き付けておくことが出来るのだが、敵兵3体を鉄くずにするには十分な時間だった。短時間であれ、あれだけの速度でレオに弾丸を撃ち込まれた敵兵はもはや鎧の原型すら留めておらず、辺り一面には恐ろしいほどの弾痕が生々しく残っていた。

強力な重力から解放された敵兵はガラガラと音を立てて崩れ落ちた。敵兵の3体は、もう体を組みなおして向かってくるといったことはなかった。当然だ、体をくつつけるための腕がもうバラバラの鉄片と化しているのだから。

終わったことを悟ったレオは、もう弾丸を装填する光りを放っていない『神爆銃・光』を腰のホルスターに入れ、もう一つの神爆銃を握り締めた。

「リリア、早く刹那たちに追いつくぞ」

「うん！」

二人は走り出した。

もう姿が見えなくなっている刹那とレナの後を追うため。レギスの、そして『畏』のいる所までたどり着くため。

第39話 約束編4

「最初の攻撃にすら耐えられませんでしたか。結構力加減はしたはずなのですがね」

神の使いを名乗る男が手に持っている、先が3つに分かれている『神突槍』には真紅の血がぼたぼたと滴り落ちているくらいべつとりと付着していた。血の主は、今床に倒れているレギスのものだ。レギスはこの男の最初の一撃さえも受け流すことができなかった。それどころか、攻撃を見切ることさえもできなかったのだ。

いや、しかし最初の一撃のとき、実のところ、レギスは突進してきた男の槍の攻撃の筋を見切っていたのだ。正面から臆することなく突っ込んでくる男の持つ槍の矛先は自分の腹。となれば、十中八九自分の腹部めがけて槍が伸びてくるだろう、と。

見切りのついている攻撃ほど怖くない攻撃はない。あとは男の攻撃を待つだけ。自分に向かってくる槍をさばいて隙だらけの首めがけて剣を振り、勝負を終わらせる。

予想通り、男の槍は自分の腹をめがけて伸びてきた。だが、レギスは見切ったはずの攻撃をさばくことができず、男の槍に自らの腹部を貫かれてしまった。

一体、なぜ筋を見切ったはずの攻撃をさばくことができなかったのか？

簡単なことだった。目にも止まらない速度で槍が伸びてきたからだ。いくら攻撃の筋を見切っていても、対応できないくらいの速度で向かって来られればさばけるはずもない。

腹部を貫かれたレギスはそのまま口から血を吐き、槍が引き抜かれたと同時にできた大きな傷を押さえながら倒れてしまった。ドシヤ、と床に体が叩きつけられた音が辺りに響くと、レギスの体から赤い液体が流れ出た。確実に、死んでいる。

「さて、神の魂の器でも迎えに行きますか」

自分の仕事は隣国の騎士を殺すことではない。神の魂の入った器を破壊すること、つまり刹那を殺すことが本来の目的なのだ。死体のあるところでのんびりと待つというのも何だか気味が悪い。

男は血を流し、倒れているレギスの横を通ろうとした。カツカツ、と男が歩いたたびに床が音を立てている。

間もなくレギスを通り過ぎようとしたときだった。

「!?!」

不意に、男は足に圧力を感じた。いや、圧力といっても空気に押しつぶされるような強いものではない。すがりつくような、弱弱い力。

振り向いてみると、そこには確かに死んだと思っていたレギスが手を伸ばし、男の足を掴んで進行を妨害していた。血に染まっている手で。

「死んでいなかったのですか？ずいぶん頑丈なのですね、驚きましたよ」

「……………俺、は……………死な、ない……………」

「？」

「約……………束した、んだ……………必……………ず、戦い……………を、終わらせ、て……………生きてかえ、る……………って、約束……………したんだ……………」

「……………」

「……………」

先ほどの攻撃で即死していなかったことにさえ驚きを感じているのに、レギスが口を聞いていることに男は更なる驚きを感じずにはいられなかった。

魔力のかけらも持っていないため肉体強化で痛みを誤魔化すことができない中、この血まみれの騎士はひたすら自分を倒そうともがいている。勝てないどころか、立ち上がることもさえもできないのに。

「帰っ……………て、絶対……………式を、挙げ
る……………って、約束、した……………んだ。俺、
は……………生き、て……………あの……………
人、の……るに……………帰る、んだ……………」

「式？結婚式のことでしょうか？」

「だ、から……………俺、は……………こん、な……………
……………と、こで……………死ぬ……………わけに……………
……………は、いかな……………いん、だ……………」

「この男……………」

男は、血まみれになりながらも、死に掛けの体になりながらも、強い意志を持ち続けているレギスをただ黙って見つめていた。

話を聞く限りでは、婚約者に生きて帰ってくる、と約束をしたらしかった。愛する人の元へ帰ると、絶対帰るといふ約束を。

男に、ある感情が芽生え始めていた。なんとしてでもこの男だけは生かしてやりたい、愛する人へ帰してやりたい、という感情が。

だが、このままでは約束を果たせないまま力尽きることになってしまふ。攻撃による出血、傷による痛み、男の足を掴むために伸ばした手による体力の消費。生きるためには不利な条件が揃いすぎている。

救ってやりたい、だが救えない。どうしたものか………そのときだった。

「レギス!!!!!!」

扉のほうから大声が飛んできた。ぱつ、と振り向いてみると、黒髪で大剣を背負っている青年と、橙色の髪をなびかせ、細長い紅い太刀を持っている女が肩で息をしながら立っているのが見えた。男は、やってきた二人のうちの青年の方、つまり刹那に何やら黒く、大きな存在感を感じた。もしかや、

「神の魂の器、ですか。もう少し早く来ていればよかったものを………」

「それを知ってるってことは………お前………」

「はい、この世界の畏となっっています。神の使い、名は『レヴァイル』と申します。神の魂の器、名前を伺っても？」

「………刹那、杉本 刹那だ」

「では刹那さん、今から私の言うことを良く聞いてください。私は今回、貴方を殺すつもりでしたが、見逃します。その代わり、この男をなんとしても生かしてください」

「!?!? どういうこと?」

レナが驚きのあまり口を挟む。当然だ。今までの神の使い、つまりシヤドウとサラ（シヤドウのことに關してはレオから話を聞いている）は、刹那を殺すためには手段を選んではいなかったのだから。王になりすまし、国をのつとり、人の命を毛ほどにも思っていない神の使いが、こんな人のこと思いやるようなことを言うのははつきり言つて意外だった。

「そのままの意味ですよ、お嬢さん。今回は見逃しますから、この男を生かして欲しい。それだけです。私にはできない、救つてやれない。だから、その男をお願いします。約束を守らせてあげてください」

そう言うと、レヴァイルは魔力を掌に結集させ空を突いた。ごう！　！！と拳が空気を切り裂く音が鳴り響いた瞬間、ごごご、という音がし、ゲートが出現した。

「それでは私は帰ります。次に会ったときは刹那さん、覚悟しておいてください。全力で殺しにかかりますので」

そう言い残すと、レヴァイルはゲートの中に入っていった。レヴァイルの体が全部入りきったとき、ゲートは再び閉じてしまった。

「レナ、早く治療を！！」

「うん、わかった！！」

二人は血まみれになって倒れているレギスの元に駆け寄った。

刹那は手に持っている大剣を自分の中に戻した後、うつ伏せになっているレギスを細心の注意を払って仰向けにし、レナは手に魔力を

集中させレギスの腹部の傷に当てて止血を施す。

「せ、つ・・・・・・・・・・・・・・・・な、さ・・・・・・・・ん。レ・・・・・・・・
ナさ、ん・・・・・・・・・・・・・・・・」

「レギス、喋っちゃ駄目」

意識はあるものの、レギスはもう虫の息だった。口から漏れる呼吸は本当に微かなもので、顔もだんだんと青白くなっていった。

「どうしよう・・・・・・・・・・傷が深すぎる・・・・・・・・」

レナは声と態度に出さないものの、かなり焦っていた。さっきから止血を施しているのに血が流れ続けて止まらない。傷口を押さええているレナの白い手が、徐々にレギスの真紅の血に染まっていった。ドクドクと、絶えず流れ出る血は、まるで雨が降った後の水溜りのように床に溜まっていく。明らかな出血多量だった。

「レギス！！しっかりしろ！！」

「す、みま・・・・・・・・・・せん、でし・・・・・・・・た。勝
手に、行っ・・・・・・・・た、ばか・・・・・・・・りに」

「いいから！！いいから喋るな！！傷が！！」

刹那はレギスが喋るのを止めようとするが、それでもレギスは喋るのをやめない。息をするだけでもつらいはずなのに、レギスはどうしてここまでして喋ろうとするのか、刹那には理解できなかった。

「あ、の人・・・・・・・・・・に、イリー、様に・・・・・・・・」

伝、えて………ください……。約束、を……
……守れ、なく………で、すみま………
……せ、んでし………た、と………」

「約束？」

「必、ず………生き、て………帰………る、
と………約束………した、んです………。
帰………て、結婚………する、と………
………約束………したん、です………だけ………ど、
もう………駄目、みたい………で
す………。約束、は………守れ、そう………
にも、ありま………せん………」

言った直後、レギスの顔は一気に青白くなった。体も徐々に、徐々に体温を失っていく。

「！？レギス！！すっかりして！！！」

レナが必死に治療を施すも、一向に回復は見られなかった。腹部から流れている血も、必死の止血に関わらず止まらない。呼吸もいつ止まってもおかしくないほど弱弱しくなってきた。もうレナ一人の回復術では追いつかない。助けることは不可能に近かった。治療こそいつも通りだが、激しい動揺を隠せないでいるレナに対して、刹那は妙に落ち着いていた。もうすぐレギスが死ぬかもしれないというのに、刹那は慌てもせず、泣き叫びもせず、ただ黙って何かを堪えるようにしてレギスを見つめていた。

と、刹那は閉ざしていた口を前触れなく開き、そして怒鳴った。

「………そんなの、そんなの『約束』なんかじ

やない！！！！ただの『嘘』だ！！！！レギスはイリーに約束なんかし
ちやいない！！嘘をついたただけだ！！！！！！」

「……………え……………?」

「約束っていうのは、守るためにあるものなんだ！守れもしない約
束はただの嘘になるんだよ！！約束したんだろ！！??帰るって、
約束したんだろ！！！！」

「……………です、が……………もう……………
……………」

「助からなきゃいけないやつが諦めてどうする！！！！生きるんだ
！！レギスが死んだら、イリーは誰と結婚するんだよ！！！！！！」

「……………！！！！！！」

刹那の一言に、レギスは気が付かされた。自分が今、どれだけイリ
ーのことを考えず、自分のことしか考えていなかったのかを、約束
を果たさずに死ぬことは決して許されないことなのだということを、
今レギスは気が付いた。

【一人で結婚なんて嫌だよ?】

【……………戦いが終わっても、あなたが生きてないと意
味ないの。わかってるでしょうね】

【……………いい?絶対に帰ってきてよね。約束だよ?】

自分に言われたイリーの言葉が、レギスの頭の中に蘇ってくる。満

月の綺麗だったあの夜、顔を真っ赤にしながら、つぶやくように誓った約束が、レギスの頭に蘇ってくる。

「へそうだ・・・約束したじゃないか。イリー様に、生きて帰るって約束したじゃないか!!」

自分の体の底から、何やら力が湧いてくるのがわかった。そうだった。約束は守らなければ意味はない。

帰らなければ、

イリーの元に帰らなければ、

生きて帰って笑ってただいまかえりました、と言わなければ。

レギスの青白い顔に、血の気が戻ってくる。冷たくなってきた体も、徐々に温まっていく。

「!!レギス、そう!!がんばって!!!!」

治療魔術の効果は、先ほどとは比べものにならないくらい高まっていた。レギスの腹部に空いていた穴もたちまち塞がっていき、か細くなっていた呼吸も徐々に落ち着いていく。

そんなレギスの様子に安心したのか、レナはほっとため息をついた。

「・・・終わった!刹那、レギスを背中に乗せて!とりあえず戦線を離脱しよう!」

「ああ!!」

治療魔術は、体の自然治癒能力を体力の消費によって増幅させる、というものだ。そのため、治療魔術を施されたレギスは、体力を大

幅に消費したためぐったりしている。早く安全な場所で休ませないと危険だった。

刹那は先ほど仰向けにした時のよう細心の注意を払ってレギスを背負う。異様に体が軽いのは、おそらく血を流しすぎたからだろう。

「がんばれよ、レギス！今城に帰るからな！」

「……………は、い……………」

「刹那、行こう！」

刹那とレナは駆け足で戻り始めた。急いで城に戻らなければならぬいし、何よりも敵兵の相手を引き受けたレオとリリアのことが気がかりだった。刹那たちの進行を妨害した敵兵は、何やら刺すような雰囲気を漂わせていた。冷たくて、暗くて、重い雰囲気。おそらくかなり強いだろう。そんな敵を3体も相手にしているレオを、そしてそのレオと一緒にいるリリアのことが、心配にならないわけがなかった。

そんな刹那の不安も、王の間から少し出たところでかき消されてしまった。

「二人とも無事だったか？」

「刹那さん、レナさん、よかったあ……………」

不安だったレオとリリアが向こう側から走ってこちらに来た。後ろのほうから敵兵が来ないということは、おそらく撃破してきたのだろう。

「それで、レギスは大丈夫なのか？」

刹那の背中に乗っているぐったりとしたレギスを見て、レオがたずねる。さつきよりは大分良くはなったものの、重傷だった傷を治すために体力をかなり消費しているため、レオが心配してたずねるのも無理はなかった。

「傷は塞がったけど、早く城に連れて帰らないと危ないかもしれない
いい」

「……………なら早いとこ戻るか」

レオが言うなり、4人は走り出した。急がなければならぬときに馬がないというのはとてもつらかった。

しばらく走り続け、5人は城門までたどりついた。

そこには傷ついたレギス軍がいて、お互いで治療をしていた。治療をしているということは敵の兵士達を全て倒したということなのだが、なぜなのか敵の骸が見当たらなかった。

「隊長!!」

刹那たちに気が付いた一人の兵士が、ぐったりしているレギスを見て叫ぶ。その声が引き金となり、他の兵士が駆け寄ってきた。

「大丈夫、生きてるよ」

青ざめた顔をしていた兵士達は、レナの言葉に安心したらしく、ほっと胸をなでおろしていた。しかし、その安心もつかの間だった。兵士達もレギスを早く城に連れて帰らなければ危険だということを実感したらしい。

各自呼び掛け合って傷ついた兵士に肩を貸したり、乗り捨てた馬を

手綱を引いて連れてきたりし、城に帰還する準備をできるだけ迅速に行った。その甲斐あって、ものの三分と経たないうちに準備は終わり、あとは戻るだけになった。

「レギス、もうちょっとだからがんばれよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「レギス？」

兵士に用意してもらった馬に乗る前に刹那はレギスに声をかけるが、返事はなかった。返事をするのがつらいということはわかるが、レギスはそれでもか細い声で返事をしてくれた。だが、ここにきて返事はない。嫌な予感がした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・レ、ギス？」

そこで刹那は気が付いた。レギスが自らの体を支えるため、刹那の首にしがみついていた腕が、だらり、と力が抜けて下がっているということに。いや、レギスの体全体の力が抜けている、ということに。

「お、い。冗談だろ！レギス！！レギス！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

返事はなかった。あるのは、刹那の胸の中の心臓の凄まじい音だけだった。

人が死んだ、ということが怖くなって、それが嘘だと信じたくて、

刹那は自分の背中にいるレギスに話しかける。何度も、何度も。

「おい、刹那。何騒いでるんだ。早くしないと」

「レオ、レギスが……レギスが!!」

「……!!?」

陽はもう、沈みかかっていた。

+++++

暗かった。見回しても見回しても、光なんて見つからなかった。ああ、これが死んだ者の行くところか、とレギスは苦笑した。

とうとう、イリーとの約束は守れなかった。ちゃんと生きて帰るって約束したのに、結婚して幸せになろうって約束したのに、自分はこの様だ。弱くて、脆い自分に嫌気がさした。

自分が死んだと聞いたイリーは、一体どんな顔をするのだろうか。泣いてくれるだろうか、悲しんでくれるだろうか。いや、ひよつとしたら嘘つきとか言って怒るかもしれないな。

自分の代わりに隊長は一体誰がなるのだろうか。……
……全員どんくりの背比べ状態だ。きつと喧嘩になるだろうな。

色々な思いが頭の中を駆け巡る中、上から光が降りてきた。とうとうお迎えが来たか。どんな場所でも、こんな暗闇にいるよりはましだ。

その光はレギスを頭から包み込み、レギスは光を纏った状態になった。やわらかなその光は、なんだか心地よかった。周りの暗闇も、その光りに照らされ徐々に明るくなっていく。

「ぎ……………」

光がやわらかく辺りを照らし始めたとき、不意に音が聞こえた。音といっても、誰かの声がぐにやり、と捻じ曲がったような、変な音だった。

「れ……………ぎ……………」

だんだんその捻れが弱くなってきた。変な音も、次第にある人の声だと、わかった。

「れ　ぎ……………す……………」

「　　」
一体どれだけ長い時間、自分の名を呼び続けていたのだろうか。自分の名前が、繰り返し繰り返し呼ばれる。

「れ……………ぎ……………す……………」

声だとはっきりわかったためか、声色から誰だか、またどんな顔をしているかが容易に想像できた。顔を歪めて、涙を流している。そんな顔。

「れ……………ぎ　　す……………」

そつだ。死んでる場合ではない。こんな悲しく自分を呼ぶあの人を、独り残していくものか。約束を、破つてなるものか。

「……………レギス……………」

自分の名をはつきりと言われたそのときだつた。自分を包んでいた優しい光が、突如強いものに変わり、レギスの視界を奪つた。

刺すような強い光がおさまり目を開けてみると、自分がベッドの上に寝かされているということがわかつた。さつきのは夢だつたのか、とレギスは安堵のため息をついた。

辺りをぐるりと見回して、夢の中にまで届いた声の主を探す。その主はすぐに見つかつた。目を真つ赤にしたイリーが、自分の顔を不安そうな表情で覗いていた。張り裂けそうな、少しでも触れてしまえば、たちまち壊れてしまうのではないかというくらい、そのときのイリーの顔は繊細で弱かつた。

「レギス!!よかつた!!よかつたあ!!」

そう言うなり、イリーは自分の胸に飛び込んできた。イリーが飛び込んできたときの重みで、レギスはベッドにぼふつ、と沈んでしまった。傷が痛んだが、今はそんなことよりも自分の胸で泣きじゃくるイリーのほうが気になつた。

「イリー様……………」

「よかつた……………本当に……………よかつた……………」

泣いているのがわかつた。その涙が不安なことが一気に過ぎ去っていき、後からやってきた安心のせいだということも。

そつと、レギスはイリーの頭に手をやり、優しく撫でた。つややかなイリーの髪の毛を、そつと、何度も。きい、と音がし、扉が開いた。目をやると、顔を不安色に染めた刹那たちが見えた。

「レギス！よかった」

「刹那は心配しすぎだよ。ただ気を失っただけなのに、大袈裟に死んだと言っつて」

「あ、あのときは本当にそう思っただよ……」

「ふふ。本当にびっくりしてましたもんね、刹那さん」

どうやらあのとき自分は、血を流しすぎて気絶してしまったらしい、ということ、レギスは刹那たちの会話から悟った。当然だ、死んでもおかしくはないほど流血していたのに、突然気絶しないわけがなかった。

「それよりも、レギス。お前が眠ってた間のことを話しておく」

今まで刹那たちのやりとりを黙って見ていたレオが口を開き、その後のことを話し始めた。

レギスは刹那の背中で気絶した後、3日も眠ったままだった。もちろん治療と呼べる治療は城に帰ってから施されたため命には別状はなく、後は目を覚ますだけなのだったが、いつまで経っても覚まさない。その間、敵国であった国はイリーの国の支援でなんとか復興していた。

レヴァイルは国を牛耳ったあと、国民を城の地下室に監禁していたのだそう。監禁とは言っても、食料も水も寝所も与えていたため、

国民の命が危険にさらされることはなかった。だが、しばらくの戦いのせいで、国民の大半は家を失ってしまい、戦いが終わったあとでも帰る家がなかったが、イリーの国が支援してくれたため、やっぱり国民が困るといふことはなかった。今までの交友関係がものを言った。

レギスはふと、神の使いであるレヴァイルは、無闇に人の命を奪うことは好まないのではないか、ということが頭に浮かんできた。まあ無理もないだろう。

それと、今までイリーの国の兵士達の命を奪ってきた兵士は、レヴァイルがいなくなったのと同時に消えてしまったのだという。消えた、という言葉に、レギスは疑問を抱いた。そこで「兵士からの証言だ」とレオが付け加えた。「詳しいことはまだわかっていない」とも。

「……こんな感じだ。とりあえずだが、もう戦いになることはない」

「そうですね。ありがとうございました、皆さん」

「礼を言われるようなことをしたような覚えはない。これが俺達のやらなければいけないことだからな」

そっけなくレオが言うが、表情は和らいでいた。

「それじゃあ、俺達は行こうか。レギスも大丈夫だってわかったし」

「そうだね。レギス、お大事に」

再び扉がきい、と閉まった。出て行った刹那たちは、何だか笑っているように見えた。広い部屋はレギスとイリーの二人だけとなった。

しばらくの沈黙のあと、イリーは真っ赤にした顔をゆっくり上げ、笑顔でレギスに言った。

「おかえりなさい」

そう言ったあと、イリーの目から涙が流れ、頬を伝って落ち、ベッドのシーツに染み込んでいった。その笑顔はいくら涙が落ちても崩れることがなかった。

一体どれだけ心配をかけたのだろう、どれだけ不安にさせたのだろう。

ばっ、と、レギスはイリーを強く抱きしめた。あと少しでも力を入れれば壊れてしまうのではないかというくらい、イリーの華奢な体を抱きしめた。

「ただいま」

胸の中が、満たされていった。今こうしていることが、今までにないくらい幸せだった。

レギスは心の中で悟った。

もしも刹那たちが来てくれなければ、今こうして腕の中にいるイリーを抱きしめることができなかつただろうと。

もしも刹那たちが来てくれなければ、イリーとの約束を果たすこともできず、自分は死に、イリーを独りぼっちにしてしまっていただろうと。

だが、刹那たちが来てくれたからこそ、自分はこうして今幸せを
みしめることができた。腕の中にいるイリーの不安を取り除くこ
うができた。

全ては運命だったのかもしれない。刹那たちが来たことも、自分が
死ななかつたことも。だが、そんなことはどうでもいい。少なくと
も今は。

レギスはもう一度言った。

「ただいま」

「おかえりなさい」

返事は、しっかりと返ってきた。

「どこへ帰るのか？」

「そうするしかないだろ。罨を外したことは伝えたし、二人きりの

ところを邪魔するわけにはいかないからな」

「お、兄さんわかってるじゃない」

「それくらいはな。さあ、異次元図書館に帰るぞ」

「うん。そうしよ」

扉の向こうで、やり取りは行われていた。どうやら、レギスたちに別れを告げずに帰るらしい。

刹那は懐に手を伸ばし、水晶を取り出す。光にかざし、水晶から出た光の伸びていった場所を黒い大剣で切る。

「ごっこ」という音と共に出現したゲートに入る前に、レギスとイリーの幸せを祈りながら、刹那たちは異次元図書館へと帰っていった。

+++++

それから一カ月後、雲ひとつない快晴の下で、レギスとイリーの式は行われていた。あれからは争いと言える争いはなく、いたって平和な日々が続いた。ようやく、みんなの望んだ国になった。

そんな中、レギスは一人忙しく足を動かしていた。落ち着かないのを誤魔化すためだった。

結婚式本番まではお互いの衣装は見ないことにしよう、というイリーの提案は、レギスの落ち着きを一層なくしていた。

ガチャ、と、扉が開いた音がした。観客の席からは、おお、と感嘆の声が上がった。

コツコツ、と一歩一歩自分のほうに近づいてくるのがわかった。やがてその足音は自分の隣まで来たところで止んだ。

ゆっくりと隣に向き直る。

「・・・・・・・・・・・・・どう？似合ってる？」

はみかみながら、衣装を纏ったイリーはレギスに聞いた。

聞かれた本人のレギスは言葉を失っていた。衣装を纏い、化粧をしたイリーは、まるで一枚の絵のようになっていて、それが確かにそこに存在することが信じられないくらい、綺麗だった。

「き、綺麗です。イリー様」

どうにかそれだけ言うと、イリーはにっこりと微笑んで言った。

「ありがとう。レギスもかつこいいよ」

イリーの言葉は、レギスの耳に入っていなかった。ただ、イリーの姿に見とれていた。

それから式は順調に進んでいき、あとは結婚式の最後に行われる《永遠の誓い》をするだけとなった。

この世界の誓いは、それぞれの想いを相手に伝えたあと、口付けを交わすというものだった。

レギスとイリーはお互い向き合い、自分の想いを頭の中でめぐらせ、そして

「イリー様。俺は・・・・・・・・・・貴方がいなければ、生きてはいけない。俺のそばにずっといて欲しい」

レギスは自分の想いを、正直に伝えた。今度はイリーの番だった。

「もう、ぜえつったい離さない！」

そう言うなり、イリーはレギスに飛びつき、不意なことに驚いているレギスの唇を奪った。観客席から何やら悲鳴やら叫び声などが聞こえてきたが、そんなこと知ったことではない。付けていた唇を離すなり、イリーは微笑んで言った。

「大好きだよ、レギス」

レギスは、それを口付けすることで返した。

空は晴れている。明るく輝いている日光を遮る雲は見当たらない。レギスとイリーの仲を遮るものもないように、空は綺麗に晴れ渡っていた。

+++++

「ただいま戻りました」

「お疲れ様。それでどうだった？」

薄暗い部屋の中、レヴァイルの前にいる青年は機嫌が良かった。前に罨を張りに行ったシャドウとサラは負傷して帰ってきたが、レヴァイルはまったくの無傷で帰ってきたからだ。その機嫌の良い青年は、レヴァイルが罨となった世界のことをたずねる。

「見逃しました。しかし名前と姿を確認したので、次からはしっかりと殺しにかかります。それと、《魔兵》のほうをお返しします」

そう言うとレギスは懐に手を伸ばし、取り出した黒い水晶を青年に手渡した。それを少し細い手で受け取ると、青年は笑って言った。

「うん。それよりも怪我しなくてよかったよ」

「そう言っただけ……ば!!!」

ガツツ、とレヴァイルの頭に何か硬いものがぶつかった。頭をさすりながらゆっくりその方向を見てみると、にっこりと微笑みながら拳を構えているサラの姿があった。にこやかに微笑んではいるものの、怖い。

「あなたは私の言い付けも守らないでどこに行ってたのかしら?」
「?」

「な、何って、畏を張りに行ってたんですよ。我々の仕事でしょう?」

慌てて自分を正当化しようと口を動かすが、サラの表情は不気味な笑顔なままだった。

「ふう〜ん。あなた、『誰の物』だったかしら?」

「……………サラ様のものです……………」
「……………」

「はい、その通り。それで、主人に黙ってどこかに行くのは良いことなのかしら?」

「……………駄目です……………」

「今度こんな勝手なことしたら、どうなるかわかるわよね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい、わかってます・・・・・・・・・・・・・・・・」

レヴァイルの反省した顔を見たサラは満足したのか、不気味な笑顔はまるで子供が親に褒められた時のような無邪気な笑顔になった。

「うん、それでよろしい。あとはずっと私の隣に居れば許してあげる」

「・・・・・・・・・・・・・・・・まあ私もそのつもりでしたが。私で良ければ気の済むまで居ますよ」

サラはにっこりと笑うことでレヴァイルに返した。

それを見つめていた青年は、うんうん、と頷いて微笑んて言った。

「うん、じゃあレヴァイルはしばらく休んでていいよ。必要だったら呼ぶから。サラも、あまりレヴァイルを困らせることしちゃうと逃げられちゃうよ?」

「ふふ、大丈夫。逃げても逃げても、どこまでも追いかけてやるんだから」

いたずらっぽく言った後、サラはレヴァイルの腕にギュツ、と抱きついた。レヴァイルはこそばゆいような、恥ずかしいような、そんな顔をしていた。

レヴァイルは青年に一礼してその部屋を後にしようとしたが、そこで思い出したかのように青年は口を開いた。

「あ、そうだ。レヴァイル、神の魂の器の名前を確認したって言ったよね。教えてもらえない？」

青年の方に向き直り、レヴァイルは畏の世界で出会った神の魂の器である人間の名前を告げた。

「刹那。杉本 刹那、だそうです」

それを伝えたレヴァイルは、今度こそ右腕に抱きついているサラと一緒に部屋を後にした。広く薄暗い部屋には、巨大なカプセルと、青年だけが残された。

第39話 約束編4（後書き）

さて、いかがでしたでしょうか今回の物語は？^{せかい}

今回の物語の中で、約束という言葉が出てきましたそもそも約束とは何なのでしょう？・・・難しいですね

普段何気なく使っている約束

その約束を、あなたは今まで何回破ってきましたか？

それは約束とは言いません、嘘といえます

相手を騙し、失望させてしまう、嘘です

今回、レギスはイリーとの約束を無事に守ることができました

想いの強さからなのか、それとも偶然かはわかりませんが、レギスは約束を守り通したのです

約束は守らなければならないものです

だから、あなたもどうか・・・

・・・話が長くなりましたね

さて、次の物語は絶望編^{せかい}

絶望にも終わりがあるといふ真理をお楽しみください

第40話 絶望編 1

暗闇の中に、僕達はいた

絶望という暗闇の中に

そんな暗闇に一筋の光が飛び込んできた

その光は他の何でもない、あなた達だった

異次元図書館に帰るなり、オリアスは刹那たちに罨が張られている可能性の高い世界に繋がっている本を手渡した。一刻も早く異世界中の罨を取り除かなければならない、という一心で、刹那たちは疲れが溜まっているのにも関わらず、次の世界へと向かった。

いや、本当はそんな立派なことを考えて刹那は次の世界への本を受け取ったわけではないのかもしれない。次の世界はどんな世界なのだろうか、どんなものがあるのだろうか。純粋な好奇心が、刹那たちを異世界に向かわせたと言ってもいいかもしれない。本を開くと出現するゲートの中で、刹那はレナにたずねた。

「そつえばさ、何でレヴァイルはレギスを殺さなかったんだ？」

「私に聞かれてもわからないよ。でも、何でだろうね」

腕組みをして考えるレナ。思い当たることは、2つあった。1つ目、単なる気まぐれ、いつも殺していたから、たまには生かしてみよう

か。そんな感じの、本当にただの気まぐれ。

2つ目、もしかしたらだが、レギスがレヴァイルによって新しい畏になったのではないか、という考えだった。初めて異次元図書館を訪れる前の世界で、傷つけても傷つけても再生し、また自ら死のうとしても決して死ねず、あのときに刹那が殺していなければ永遠に苦痛に耐えて生きていなければならなかったかもしれない青年、レメンと同じように。

しかし、レナの頭に浮かんだこれら2つの考えが、レヴァイルの意図だとは限らない。レナの予想通りなのかもしれないし、もしかしたらこれ以外の考えかもしれない。レナはレヴァイルではないのだから。

そうこうしている間に、次の世界の光が見えてきた。その光はだんだん大きく、近くなっていき、刹那たちを包み込んだ。

+++++

「はあ………」

ため息をつくのは、11、12そこらの少年だった。ため息をつくのも無理はない。まだ成長しきっていない肉体なのに、あれだけの重労働をさせられるのだからため息くらいは出る。

変化が起こったのは3年も前の話だった。平和だった村にいきなり

やってきたのは黒マントを羽織った男。いや、やってきたというよりも現れたといったほうが正しいか。

その男は笑って懐に手を伸ばし、黒い水晶を取り出した。すると、その水晶が不意に光を放ったと思ったら、突如ぞつとするほどの数の兵士と一体の全身鎧で覆われている巨大な男が現れたのだ。

黒マントの男はその巨大な鎧男に黒水晶を手渡すと、笑いを崩すことなく空間に開いた穴の中に入り、そして消えた。絶望という置き土産を残して。

それからもう、地獄としか言えない日々が続いた。まず最初に奴らがやったことは、働き手にならない邪魔者、つまり老人やまだ授乳期の子供を殺すということだった。

悲惨だった。反乱を起こす気をなくさせるためなのか、みんな目の前で剣で切りつけられた。胴体から離れる肉片、飛び交う血、耳をつんざく叫び声。耐えられずに吐いた。腹の中にあるものを全て地面にぶちまけた。

自分は吐くだけだったが、殺された者の家族はそれだけでは済まなかった。ある者は耐え切れず発狂し、ある者は怒りのあまり自傷を繰り返した。地獄絵図、まさしくこの光景が相応しかった。

次に奴らがやったことは、今日までずっと行われてきた行為、肉体重労働だった。奴らの親玉、つまり巨大鎧男の本拠地の建設から、武器の生産まで様々なことをやってきた。武器を生産したのは、おそらく兵士が他国への侵略のためだろう。

もちろん、村の住民はそのまま言うとおりにするわけがなかった。逆らおうとする者、倒そうとする者はたくさんいた。幸い武器もある、人手もある。作戦も、自信もあった。そこまではよかった。だが、失敗した。明らかな戦力の差だった。

当然、反逆に加わったものは皆殺し。もちろん見せしめのため村人全員の前で。それ以来、反逆はなくなつた。戦えば間違ひなく死ぬ、それをわかつていながら戦おうとする勇氣のある者、いや、馬鹿な者は村人の中にはいなかった。なんだかんと言つても、やはり死というものは怖い。現に、自分も死を恐れこうして奴隷として働いている。

弱い自分に嫌気がさした。戦つて死んだ村人達に申し訳なく思つて眠れない日もあつた。だが、こうするより他なかつた。やっぱり、死ぬのは怖いから。

「はあ………」

今日何度目かわからないため息をつき、少年は肩の荷物を背負い直す。いつになれば解放されるのだろう、そんなことを思いながら、と、そのときだった。以前にも聞いた、ごごご、という音が耳に入った。音のしたほうを振り向いてみると、空間に穴が開いていた。その穴にも見覚えがあつた。黒マントの男が出てきたのと同じものだ。

嫌な汗が額から流れたのがわかつた。黒マントの男と同類のやつが出てくるに違ひない、そんな考えが頭をよぎつた。

すつ、と4人の人間が穴から出てきた。最悪だ、おそらく殺される。逃げようにも、なぜか足が動かない。

4人のうちの一人がこちらに向かつて歩いてくる。銀髪を赤いバンダナで押さえている男だ。腰には何やら筒のようなものを下げている。おそらく異国の武器だろう。ああ、もう駄目だ。

男が口を開く。少年は、聞こえてきた男の言葉を疑つた。

「ここら辺で何か急におかしくなったことはないか？」

この4人が自分たちの希望であることを、この時少年は思いもしなかった。

++++

次の世界で刹那たちが最初に見たものは、体にあっていない荷物を背負っている少年だった。その少年は、化け物でも見たかのように顔を引きつらせてこちらを見ている。いくら空間から人が出てきたとはいえ、この驚き方は異常だ。過去にも例があったのだとすれば、この世界にも畏があることになる。
レオは少年に歩み寄り、たずねる。

「ここら辺で最近何か急におかしくなったことはないか？」

たずねた途端、少年はその場へたり込み、あ、あ、と顔をさらに引きつらせながら脂汗を流していた。やはり、この驚き方はなんだかおかしい。

「俺たちは別にお前をどうこうするつもりは」

「レオ!!」

刹那の声で、レオはぱつと振り向いた。甲冑に包まれた兵士が2人、

腰の剣を抜きこちらに走ってくる。その兵士を見た途端、少年は頭を抱えガタガタと震え始めた。やはり、この世界にも……

レオが銃を抜くのも早くレナが神抜刀を抜き、敵兵にかかっていった。レナは兵士達の剣をかくぐり、手に持っている紅い刃が足を切り裂いた。足は体を支えている柱のようなもの、傷つけられれば立っていることは困難なはず。当然、足を切りつけられた兵士達は倒れこむはずだった。

だが、兵士はうめき声一つ漏らさず、一人は油断をしているレナに、もう一人は一瞬の出来事にきよとん、となっているリリアに切りかかっていった。

へえ！？

てっきり戦闘不能になっていると思いついていたレナは隙を突かれてしまった。後ろから来る剣、とっさに体をよじって受けようとする。が、急に兵士の体が、まるで糸が切れた操り人形のようにぐったりとなり、その場にバタリと倒れこんでしまった。

「レナ、大丈夫か？」

「刹那……」

通りで、とレナは思った。倒れている兵士の背中には刹那の大剣の一本線があった。刹那が助けてくれたのだ。（もつとも、刹那の助けがなくとも大丈夫であったらうが）一刀両断していないところを見ると、やはり手加減したのだらう。殺すよりは、と思った刹那の気持が手に取るようにわかった。

だが、一つおかしな点がある。その兵士の体からは血が出ていなかったのだ。うめき声一つ上げず、ただ倒れている。

ズガン、と、レオのほうから銃声が聞こえた。レオもリアを守るため神爆銃を抜き、兵士の左胸を狙い撃ちしていた。その兵士も何も言わず、ただその場に倒れ伏した。

「レオ、この兵士達って……」

スチャ、と腰のホルスターに神爆銃を収めると、レナが疑問をレオに問いかけるのが同時だった。

レオは少しだけ倒れている兵士を見、結論を出した。

「ああ、人間じゃないな。血が出てないし、鎧の中に『体』がない」

その通りだった。倒れている兵士達の傷を見てみると血が出ていない。通常であれば必ず出ているはずだ。それに、兵士達の纏っている鎧は空洞となっている。中に何も入っていない証拠だ。

「あれ？兄さん、光ってない？」

不意に兵士達は体から黒い光が放たれた。闇を思わせる黒い光は兵士達の体を包み、その光がおさまったと同時に、その空洞の鎧はその場から消えてしまっていた。

物が一瞬にして消えるという手品のような光景に、刹那はすっかり驚いてしまった。

「き、消えた？」

「この国にも罫がある可能性が高いな」

もつともな意見を提案したレオは、腰を抜かして驚いている少年に歩み寄った。事情を聞くためと少年の体に傷がついていないか確かめるためだ。不意に近寄られた青年に恐怖し、少年の体がビクリと跳ねた。

レオはなるべく怖がらせないようにしゃがみ込み、目線を少年に合わせた。もちろん微笑みを浮かべておくのも忘れてはならない。

「大丈夫か？」

想像とは違う言葉をかけられた少年は一瞬驚き、そして答えた。

「……………うん」

「立てるか？」

「……………立てる」

少年が立ち上がると、レオも立ち上がり、そして再びたずねる。

「さっきも聞いたが、こちら辺で何か急におかしくなったことはないか？俺たちはそれを解決するために来たんだ」

少年はとりあえず、この空間から現れたこの4人が敵ではない、ということを判断した。目から敵意が見られないし、何よりも自分達の敵である兵士を葬ってくれたのだから。

自分達が戦っても決して勝つことのできなかつたあの兵士達を、いとも簡単に倒してくれたこの人たちなら自分達を救ってくれるかもしれない。そんな考えが、自分の頭をよぎった。

だが、ここで事情を話すことはできなかった。また他の兵士が駆けつけてくるかもしれないからだ。

少年は「ついてきて」と一言言うと、自宅のほうに走り出した刹那たちも顔を見合わせ頷くと、少年の後を付いていった。

第41話 絶望編2

しばらく走ったあと、刹那たち4人はたどり着いた少年の家の中にいた。家の中は定期的に掃除されているためか、ゴミなど一つも落ちてはいなかった。

床に座っている刹那たちと向かい合うように、少年もまた座っていた。先ほどの怯えてきっていた表情はすっかり消えていて、今度は少し戸惑いが顔に浮かんでいた。

少年が口を開かないので、先にレオが口を開いた。

「まずは俺たちのことを話しておく。さっき見たとおり、俺たちは空間の穴からやってきた。その穴はこの世界じゃない別の世界に繋がってる。言いたいことがわかるな？」

こくり、と少年は頷いた。

「この世界じゃない別の世界に繋がっているということは、つまりこの4人は違う世界、異世界からやってきたということだ。」

「俺たちが異世界からこの世界にやってきた目的は、様々な世界に仕掛けられた『畏』を外すことだ」

「・・・・・・畏？」

「そうだ。いきなり俺たちみたいに空間の穴からやってきて、平和に暮らしていた人たちに害を与える存在だ」

その一言でピンときた。今自分たちの村を支配している存在こそが、まさしく『畏』なのだ。

少年は刹那たち4人に、この村のことを話し始めた。

3年前、いきなり空間の穴から黒マントを羽織った男が、今この村に存在している兵士を置いていったこと。自分の両親を含めた村人が、自分の前で虐殺されたこと。いつ死んでもおかしくないほどの肉体労働を強いられていたこと。

少年が話を終えたあと、真っ先に口を開いたのはリリアだった。

「ひどいよ……こんな子供にまで……」

気持ちは痛いほどわかった。両親を目の前で殺され、今日まで体に合わない肉体労働を続けてきたのだ。かなり、かなりつらかっただろう。

レオは少年の頭に手を置き、優しく撫でたあと、笑って言った。

「もう大丈夫だ。今まで、よくがんばったな」

久しぶりにかけられた温かい言葉に、少年は目に少し涙を浮かべ、頷いた。

「そういえば、自己紹介がまだだったな。俺はレオ、あの小さいのがリリアで、そっちの剣を持つてるのがレナ。それでその黒髪のやつが刹那だ」

「……僕はドレン。よろしくね」

そこで初めて少年、ドレンは笑みを浮かべた。こうして笑っていれば年相応の可愛らしい笑顔をしているのに、今までこの世界の罨のせいで死んだような顔をしてきたかと思うと、怒りが胸にこみ上げてくる。一刻も早く、罨を外さなければならぬ。4人は、そう強く思った。

「それで、この村にいる兵士達の中心となっているやつは居所はわかるか？」

少年はこくり、と頷いて立ち上がり、窓のほうに歩み寄った。刹那たちも同じように窓のほうに近寄る。

「あっちの方に、大きな砦が見えるでしょ？あそこの中にいるよ。ただ、砦の中は複雑になってるから、たどり着くのにかなり時間がかかったやつ」

「そいつの正確な場所はわかるか？」

「うん。僕達を作ったから、ちゃんと覚えてるよ」

そう言うと、少年は奥の部屋から紙と羽ペンを持ってきてテーブルに置き、砦の見取り図を書き始めた。

「門を抜けると、砦の入り口があるんだ。入ると中央に階段、右と左と奥に通路があるからそこを左に進む」

ドレンは入り口から通路に向かって線を引き始めた。こうすれば、迷う心配はない。

「そのあとは奥に進んで、階段があるけどそこは無視して奥に進んで。奥に進むと右と左に通路が分かれるから、そこを右。進むと階段があるから上って2階に上がる。2階に上がったらそのまま奥に進んで」

すらすら、と軽快にペンが紙走る。線は綺麗に書かれ、わかりやす

いように進むべき道を作っていく。

「奥に進むと右、左、奥つてまた道が分かれるからそこを右に進んでそのまま奥。あとはひたすら分かれる通路を左に進んでいけばたどり着けるよ」

ペンが最後にたどり着いた場所は、見取り図の中で一番大きい部屋だった。なるほど、確かにこれは複雑だ。たどり着くのにかなり時間がかかってしまう。

「これで大丈夫なはずだよ」

「ありがとな。これでお前達を助けてやれる」

微笑を浮かべ、レオはもう一度ドレンの頭を撫でた。
ドレンはへへ、と笑うと「そうだ！」と立ち上がった。

「お兄ちゃん達今日は泊まっていたよ。もう日が暮れるしさ」

窓を見ると、もう日が沈みかけていた。間もなく夜になる、そう太陽の沈み加減が知らせていた。

「それなら、遠慮なく泊まっていくなにか」

「でもレオ」

刹那は、自分の言葉を途中で切った。レオの意図に気が付いたからだ。少年の顔は、今一番輝いて見える。自分達を『仲間』だと判断したからだ。長年一人で生きてきた少年の寂しさが、自分達がいることで和らいでいることは明白だった。その少年の笑顔を今ぶち壊

すような真似を、レオはしたくないのだ。

だが、畏の居場所は割れている。場所がわかっていて、なおかつその行き方までわかっている。畏を外してこの世界を去るのも時間の問題だ。だったら、その短い間だけでも一緒に居てやりたい、今まで一人で生きてきた少年に人がすぐそばにいたことの温かさを知ってもらいたい。その一心で、今晚泊めてもらうことを決意したのだ。

「うん、そうだね。今晚はここに泊めてもらおうか」

「それじゃ、今晚の夕食は私が作るよ。腕を振るっちゃうからね」

リリアも、レナも、レオの意図に気が付いたようだった。少年の表情を少しでも明るくしようと、そういう雰囲気を作っている。

「うん！お姉ちゃん、ありがとう！」

満面の笑みを浮かべるドレン。そのときの表情は、おそらく今までで一番輝いていた。

だがその笑みがすぐに壊れてしまっても脆いものだということを、4人は知らなかった。

+++++

夕食が終わり少し話しをした後、ドレンの用意した部屋で寝ていた

レナは外の異変に気が付いた。

「？」

物音が聞こえた。それも、眠りを妨げられるような大きな足音だ。ざ、ざ、という足音が耳に入った。それも一人のものではない。多数が一齐に歩き出す音だ。

その異変に、横で気持ちよさそうに寝息を立てていたリリアも気付いたようだった。

「レナさん、どうする？」

不安げなりリアの声。それを逆転させる答えは見えていた。

「刹那たちが寝てる部屋に行こう」

「………うん」

その部屋にレオがいるからなのか、リリアの声は先ほどの不安に満ちた声とは違い、落ち着いた雰囲気を感じられた。

2人は布団から起き上がると部屋を出、刹那、レオ、ドレンの寝ている部屋へと向かった。自分らの部屋のすぐ隣にあるのだから、行き着くまでに10秒ともかからなかった。ドレンに失礼だが、狭い家はこういう部分に利点あるから良い。

きい、と音を立てて戸を開けると、刹那はまだ寝息をたてて寝ているドレンを守るように抱き、レオは銃を抜き、いつでも撃てるようにしているのが見えた。

「来たか」

入ってきたのがレナとリリアだったからなのか、少しだけレオの表情が和らいだ。

ドレンを起こさないようにゆっくりと歩を進め、レナとリリアは刹那とレオのほうへ近寄った。

「夜襲……だよね？」

「十中八九な。とりあえず、ここを出る」

囲まれている中、じっとしているのはあまり得策とは言えない。このまま様子を見ていたとして、一撃必殺の攻撃（爆殺など）を仕掛けられてしまえば何も出来ないままあの世へ行くことになってしまふからだ。ここは視界の悪い夜の性質を利用して脱出するのが一番の策だった。

「正面から出るような馬鹿な真似はできないな……。となれば、上か」

ずっとレオが顔を天井に向ける。外には敵のバリケードがある。正面から出る、壁を突き破る、は敵と戦うことになってしまふから駄目だ。だが、屋根に上がって肉体強化を施した足で敵を跳び越えてしまえば大丈夫だ。闇に紛れ、音をできるだけ立てないように跳べば、敵に気付かれることもないかもしれない。

だが、屋根にどう上がるかが問題だった。屋根に上がるには一旦外に出なければいけない。2階があればなんとかなるかもしれないが、この家は1階までしかない。

天井を弾丸で撃ちぬくのは？
発砲音で気付かれてしまふ。駄目だ。

レナと刹那の剣で斬って穴を開けるのは？
これも駄目だ。斬った残骸が落ちてきて気付かれてしまう。

さて、どうしたものか……。そのときだった。

ガシャァン！！！！

窓ガラスが割れる音が闇に響き渡った。外から敵が侵入してきたのだ。

先手を打たれてしまったため、もう脱出することができなくなってしまった。

「予想よりも早く入ってきたな……。ん」

脱出することが不可能になってしまったのに、レオは落ち着いていた。これからどうすればいいか、それがわかっているからだ。ズガン！と発砲音が響いたあと、ドサツ、と敵が倒れこんだ。この暗闇の中、レオは正確に敵に弾丸を放っていた。恐ろしいくらいの集中力と技術力だった。

「先手を打たれたならしょうがないな」

そう言うと、レオは手にしている神爆銃の銃口を天井に向ける。ズガガガン、と3発の弾丸が飛び出すと、弾丸の当たった部分の天井が落ちてきた。これで屋根まで一気に行ける。

「さあ、行くぞ。このまま皆に向かう」

そう言うと、レオはリアを抱きかかえそのまま高く跳んだ。続いてレオと、あれほどの騒音が響いたのにも関わらず爆睡しているドレンを抱きかかえた刹那が屋根に跳ぶ。跳んでいるときに気が付いたのだが、弾丸の3発で屋根が壊れるものなのかという疑問が刹那に湧いてきた。が、それはあとでたずねることにした。今は聞いている暇はない。

屋根に着地し空を見上げてみるが、月や星は一つも出ていなかった。雲が空を覆っていて、それらを遮っているのだ。夜襲するにはもってこいの天候だった。

「明るいうちに確認しておいてよかったな。皆はあっちのほうだ。一気に跳んでこの包囲網を脱出する」

闇から声が聞こえた。やっと目が慣れてきて、その声の主であるレオの顔がわかった。

レオの言葉に従い、この家を囲んでいる敵を跳び越えようと足を曲げたそのときだった。爆発音が鳴り響き、自分達の足場である屋根が吹き飛んだのだ。

「な!？」

爆風に吹き飛ばされる刹那たち。それほど火薬の量が多くなかった

のが幸いし、爆風に包まれて死ぬことはなかったが、それでも刹那たちはそれぞれバラバラの方向に吹き飛ばされてしまった。戦闘が不慣れな刹那、戦闘手段がないリリアにとっては最悪な出来事となった。

第42話 絶望編3

「いてて……………」

ドレンをかばうようにして地面に叩きつけられた体の確認をしてみる。痛みはあるが、動けなくなるくらいのものではない。次にドレンを見てみる。どういう寝つきをしているのか、まだ寝息を立てて寝ている。

即座に立ち上がると同時に目に入ったのが、先ほどまで自分達がい
た爆発により激しく燃え盛っているドレンの家だった。屋根の上だ
からよかったものの、家の中にいるときに爆発していたら 間
違いなく死んでいただろう。

少しだけ身を震わせ、今時分が何をしなければならぬかを考える。
そうだ、レオたちと合流しなければならぬ。

「ん…………ん……………」

「ドレン、起きたか」

眠たい目をこすり、ゆっくりと目を開けたドレンは、自分の目に入
った光景に一瞬で目が覚めた。自分の家が燃えている、意識を覚醒
させるには十分な光景。

「せ、刹那兄ちゃん、何で、何で家が燃えてるの？」

「夜襲だよ。それよりも、レオたちと合流しないと」

刹那の言ったその言葉は途中で遮られることになった。炎上している家の周りにいた敵が刹那とドレンの存在に気付き、かかってきたからだ。炎の光で、その敵が兵士であるということがわかった。そして、その数も。

「なんて数だよ……」

夜襲のセオリーは気付かれないようにするということだ。そのため、敵に気づかれないように少数で向かうことが望ましい。だが、この兵士達は違った。ただ殺すためだけに仕掛けたのだとはつきりわかる人数だった。眠りを妨げられるほどの足音を鳴らした理由が、今やっとわかった。ぱっと見るだけでも、向かってくる兵士は100以上、確実にいる。まともに戦える自信はなかった。

「刹那兄ちゃん、どうするの!？」

「………とりあえず逃げよう」

敵が迫ってきているのに、わざわざ立ち止まってどうしようなどと考える馬鹿はいない。刹那はドレンを肩に担ぐとすぐさま肉体強化を施し、全力で逃げ出した。ただ、どこに向かって逃げているのかは、わからない。

+++++

爆風に吹き飛ばされ、地面に叩きつけられる寸前にうまく受身を取ったため、レナの体に痛みは微塵もなかった。体に痛みがないということを確認したレナは辺りを見回してみる。ドレンの家を燃やしている炎のおかげで見やすくなったというのがいささか腹立たしい。

炎の明かりに照らされレナの目に入ったものは、ドレンの近くの民家の中に入ろうとしている兵士達の姿だった。おかしい、ターゲットは自分達のはずだ。なぜ関係のない民間人を襲う必要があるのだ？ いや、もしかしたら違うのかもしれない。何か事情があつて乗り込むだけなのかもしれない。

レナのその考えは、民家の中から聞こえてきた悲鳴によつて否定された。空気を振動させるような高く、そして目の前の恐怖に怯えている、そんな悲鳴。耳にそれが入るなり、レナの足は動いた。悲鳴のしたほうの家目掛けて走る。

家の前までたどり着き、開いている扉をくぐつた先には兵士3体と子供を抱きしめ、恐怖に顔をゆがめている女がいた。よかつた。まだ殺されていない。一瞬だけ安堵し、そしてすぐに腰の神抜刀を抜き、こちらの存在に気が付いていない兵士3体のうちの1体を頭から一刀両断する。兵士は断末魔も上げず、血も出ず、ただその場に音を立てて倒れこみ、黒い光に包まれて消えた。来たときに倒した兵士と同じようだった。

ようやくレナの存在に気が付いた2体は手にしていた剣をレナ目掛けて振るが、遅かった。兵士達の両刃の片手剣は、レナの体に触れることなく持つている腕ごと地面に落ちた。レナの神抜刀が兵士達の剣を持つているほうの腕をあっという間に切り落としたのだ。

兵士達は残った片方の腕で剣を拾おうとするが、レナの神抜刀が兵士達の首を落とすほうが早かった。一太刀で二つの首をうまく落とすと、先ほどの兵士と同様黒い光に包まれて消えてしまった。

ものの10秒と経たないうちに兵士達3体を倒したレナは、呆然とこちらを見ている女と子供に声をかけた。

「私が出たら戸を閉めて鍵をかけて絶対に開けないで。それと、また兵士達が入ってきたら叫ぶこと。そしたらすぐ駆けつけるから、いい？」

「は、はい！」

女の返事を聞くと、レナは家を飛び出した。他の家も同じようなことになっていれば助けなければならぬからだ。目を閉じて神経を耳に集中させる。悲鳴が聞こえたら即座に行くためだ。

..... 悲鳴は聞こ

えない。まだ兵士達が来ていないのか、それとも悲鳴を上げさせる間もなく殺しまわっているのか。答えがわかったのは目を開けて、目におびただしい数の兵士が村の外から入ってからだ。どうやら先ほど葬った兵士達は一番最初に村へ乗り込んだらしい。

なぜ一斉に来なかったのだろうか？そんな考えがレナの頭によぎったが、今はそんなことを考えている暇はない。この大群とも呼べる兵士達をなんとかしてでも撃破しなければならぬ。そうしなければ、おそらくこの村の人々は殺されてしまう。それだけはさせるわけにはいかない。

レナは手にしている神抜刀を力一杯握り締め、大群に向かっていっ

た。

+++++

「に、兄さん……どこ……?」

できるだけ、小さい声で兄であるレオの名を呼ぶ。ここで大声を上げて呼ぶものならば、近くを徘徊している兵士達に一発で居所がばれ、最悪殺されてしまう。リリアは素手で戦う術を持っていないのだから当然だ。

「兄さん……返事……してよ……」

声は先ほどよりも小さくなった。不安に駆られて自然に体が縮こまってしまう、うまく声が出せないのだ。

いつ襲われるかわからないという恐怖、夜であるための暗闇による恐怖、レオの存在感がないという恐怖。3つの恐怖がリリアを襲う。

「兄……さあん……ふええ……」

少しだけ、涙が出てきた。レオがそばにいないだけで、闇がこんなに怖いものだとは思わなかった。

何とか寂しさからくる恐怖だけは何とか打ち消そう、そう決めたりリリアは右手の甲で涙を拭く。

「ん……………あ！」

ゴシゴシと目をこすり涙を拭いたあと、リリアにある考えが浮かんできた。

レオは確か皆に向かうようなことを言っていた。ならば、刹那もレオも、そしてレオもそこに向かうはずだ。皆にたどり着けばみんなと会えるかもしれない。

「……………よし！」

決心はついた。向かうは、この世界の罫のいる皆。だが……………
・ ・ 悲しいかな、リリアは皆の方角を覚えてはいなかった。いや、
正確には先ほどの爆発のおかげでど忘れしてしまったのだ。

「……………え〜っと……………あれ？」

果たして無事にたどりつくことが、そしてレオたちに会うことはできるのだろうか？

+++++

レオは今現在民家の屋根を足場として利用し、皆のほうへと全速力で向かっていった。

戦闘能力が高いレナはともかく、ドレンと一緒に刹那と、武器も戦闘術も持ち合わせていないリアのことが気になったが、この闇の中探すことは非常に困難だ。探すには名前を呼ぶなりなんなりしなければならぬ。そうならば、敵に見つかる可能性が非常に高くなる。

ならばどうすればいいか………簡単だ。おそらくみんなこの世界の罨がいる皆に向かうはずだ。ならば、

「行くしかないよな」

1軒、また1軒。強化した足で屋根を踏みつけ、そしてまた次の1軒に飛び移る。下には兵士達がいるから、屋根を飛ばせば妨害されることもなく向かうことができる。

「………見えた」

遠くに見える小さな光は、おそらく見張りが不審人物を見つけやすいように焚いている炎だろう。その炎のおかげとすべきか、皆の外部がうっすらだが見えた。

「行くか………」

そうつぶやくと、レオは止まることのない足をさらに動かし、皆めがけて歩を進めた。

第43話 絶望編4

「はあはあはあ……………」

「せ、刹那兄ちゃん……………」

肉体強化、刹那の体力はそれによって約2倍に増幅されている。体内の魔力が活性化し、皮膚、筋肉、そして内臓器官を強化しているためだ。

だが、刹那の体力は今尽きようとしている。当然だ。体力が2倍になるといつても、所詮『もともと』の2倍程度にしかない。異世界にやってきてから大分体力がついたとはいえ、刹那の体力が低いことには変わらない。

そのため、ドレンを脇に抱え闇雲に逃げ回っていただけの刹那の体力は尽きかけていた。足も遅くなってきている。追いつかれるのは時間の問題だった。

刹那は何を思ったのか、急に立ち止まって抱えているドレンを下ろし、魔力で大剣を形成し、構えた。

「刹那兄ちゃん!？」

「ど、ドレン……………はあ、皆の場所は……………はあ、わかるよな……………。俺はここで足止め、はあ、してるから……………先に行っててくれ……………」

「で、でも……………」

不安そうに声を発するドレン。兵士達はもうそこまで迫ってきていた。

「大丈夫、だ……はあ、何とか切り抜けるから……はあ、先に行け……」

「……うん、わかった」

刹那の思いに答えたかったのか、ドレンは刹那のほうを一度だけ振り向き、そして駆け出した。

刹那は足音でドレンが背のほうに向かったことを察すると、駆け足で向かってきた兵士達に向かってかかっていった。

「うおおおおおおお……!!」

+++++

レナは全身に炎を纏いながらゆっくりと辺りを見回した。

「……」

人々の住んでいる民家のほうから離れて戦ってよかった、そう思わずにはいられなかったくらいの有様だった。辺りは一面炎の海。そして辺りには重なるようにして倒れている兵士の残骸。その

残骸ときたらひどいものだった。

鎧のところどころが炎の熱で溶けており、それが冷え固まって変形しているもの、四肢をバラバラにされて、動けなくなったところを心臓一突きとはつきりわかるようなやられかたをしているもの、様々だった。

全滅したのをしっかりと見極めてから、レナは神抜刀に魔力を送ることによって出した炎を消した。先ほど纏っていた炎はこの炎だったのだ。とたん、兵士の残骸達が黒い光に包まれ、そして消え失せた。これで村は大丈夫だ。

レナは神抜刀を鞘に納め、そして砦のほうを向いた。ここからはよく見えないが、走っていけばいずれ見えるだろう。そしておそらく、みんなもそこにいるはず。

選択肢は1つしかなかった。レナは砦のほうに向かって走り出した。

+++++

目立たないようにと思って林の中に入ったのは失敗だったと、リリアは後悔した。歩いてても歩いてても、一向に砦が見えない。それどころか、時々顔に植物の葉がぶつかったり、木の根に足を引っ掛けて

転んでしまったりで、リリアはすっかり参ってしまった。

「……………ひっく……………ひぐ……………」

暗闇の恐怖と、時折起こるハプニングによる仰天のせいで涙が出てくる。鼻をすすり、嗚咽を堪えながら何とか歩くが、皆はやはり見えない。

「兄さん……………」

心の中でレオを呼ぶが、もちろんのこと来てくれるはずもない。自分が寂しがり屋なのを実感できた。

暗闇の中を歩くのはもう嫌だ。そんな考えが頭に浮かんできた。前は見えないで転ぶわ、顔に当たる葉も気持ち悪いわ、嫌なこと尽くしだった。

だが、歩くのをやめるわけにはいかなかった。ひよっとしたら皆はもうすぐそこで、そこにレオがいるかもしれないと思うと、足は止まらなかった。

「……………行く……………」

そう心の中でつぶやき、リリアの足は自然と前へと進んでいた。

+++++

砦の入り口から少し離れた林の中にレオは隠れていた。いや、隠れているというよりは、出ていくタイミングを見計らっていると言ったほうがいいのかもしれない。

入り口には兵士が2体。いずれも武器を構え、ただ黙って立っている。レオほどの実力があれば、頭を狙って撃ちぬくのはそう難しいことではない。ならば、なぜレオは銃を撃たずに隠れているのだろうか？

刹那たちを待っているのである。

今ここで出てしまえば、砦の中に行かざるを得なくなる。銃声を聞きつけた他の兵士が駆けつけてくる確立が高いからだ。刹那たちと合流する前にそういうことになるのは、あまり好ましくない。

神爆銃の装填部分を確認しているレオの耳に剣を抜いた音が聞こえてきた。金属と金属が擦りあうような、シャツという音。

銃を構え、見張りの兵士達のほうを見る。そこにはドレンがいた。兵士が剣を抜いてかかって来ているのに動きもせず、ただその場に立ち尽くしている。レオは一発で理解した。動かないのではなく、『動けない』のだと。襲ってくる死の恐怖に体が押さえつけられているのだと。

右手に持っている神爆銃の銃口を兵士に向け、引き金を引く。続けてもう一発。弾丸は勢い良く飛び出して兵士達の額に当たり、そのまま頭を貫通した。

撃たれた兵士達は何も言わずその場に倒れこみ、黒い光が体を包み込んだあと消えてなくなっていた。

レオは林から出て、一瞬の出来事にきよとなっっているドレンに

歩み寄った。

「ドレン、大丈夫か？」

「あ！レオ兄ちゃん！うん、何ともないよ」

ドレンは無事だったらしい。体を見てみても、外傷らしい外傷は見当たらない。

「それで、刹那はどうした？一緒じゃないのか？」

「……それが……」

ドレンは先ほどのことをレオに話した。兵士の数が多すぎて追いつかれてしまったこと、自分の身を案じて一人で足止めをしたこと、ここに向かえと言われたこと。

「……なるほどな」

「レオ兄ちゃん……」

「心配しなくても、あいつなら大丈夫だ。危なくなったら逃げるだろうしな。それより、今は畏を外さなければいけない。お前はここに残って身を隠している。いいな？」

「え！？む、無茶だよ！一人で行っても死ぬだけだよ！」

今までドレンたちは、畏の圧倒的な力によって押さえつけられてきた。反抗するにしても、武器、戦略、人力はあるのに決定的な戦闘力が足りないため、いつも失敗に終わった。

この世界の罨の力。ドレンは嫌というほど味わっていた。だが、レオはその圧倒的な力を持つ罨の主にも、たった一人で挑むといっている。無茶だった。

「僕達みんなでかかっても駄目だったのに一人で勝てるわけないよ！」

死なせたくない、初めて会ったのに助けてくれたこの人を死なせたくない、久しぶりに人の温かさに触れさせてくれたこの人を死なせたくない。

必死に説得を試みるドレンの頭にポンツと手を置き、言った。

「……大丈夫さ」

先ほどの行ったらすぐに死ぬ、というドレンの考えは消えてしまった。なぜかはわからない。だが、その一言でドレンの不安は消え、代わりに妙な安心感を覚えた。この人なら、大丈夫……そんな感覚。

「じゃあ行くからな。さっきの銃声でそのうち兵士が集まってくるから早く林に隠れ」

「ぼ、僕も連れて行って!!」

「?何言ってるんだ。駄目に決まってるだろ」

「だって、罨の場所わからないでしょ?」

そうなのだ。ドレンに書いてもらったこの皆の地図、兵士達の夜襲のせいで家に置いてきてしまったのだ。

「だから、連れて行って！」

「………わかった。絶対俺から離れるなよ」

「うん……」

ドレンの返事を聞いたあと、二人は皆の中へ向かっていった。

第44話 絶望編5

ズガン、ズガンという神爆銃の発砲音が響き渡る中、レオとドレンは砦の中を走っていた。砦の構造を知っているドレンがいるおかげで複雑な内部に迷うということとはなかったものの、倒しても倒しても奥からドンドン出てくる兵士達によって進行は妨害されていた。壁に隠れ、身をできるだけ隠しながら狙い撃つ。弾丸は何人かの兵士の頭と心臓部分を貫通し、撃たれた兵士は消える。先ほどからその繰り返し、進むことができなかった。

「っち」

「どうするの？レオ兄ちゃん？」

レオの背中に隠れながら、不安そうにドレンがたずねた。当然だ、砦に突入したもののあまり進行していないうえ、長時間足止めを喰らっているのだから。

レオはもう一つの神爆銃、『光』を手に取り、中に入っているアルテマを全て取り出した。そしてグリップをぐっと握り弾を補充すると、その場にしゃがみこんだ。

「ドレン、乗れ」

「え？・・・うん」

ドレンがレオの羽織っているマントの上から背中に乗ると、レオは立ち上がり、そして、

「いいか！！絶対離すなよ！！」

敵めがけて特攻をかけた。肉体の強化のおかげで風のような速さとなって敵に突っ込み、両手の神爆銃で敵を撃破していく。引き金を引くたびに、弾丸は確実に敵兵の心臓を撃ちぬいていく。レオの腕の良さを物語っていた。

「左に行つて!!」

背中から聞こえるドレンの言うとおりに砦を進んでいく。奥からは、絶えることなく兵士が出てくる。

「その階段は無視して!!」

神爆銃を連射し、通行のスペースに邪魔な兵士だけを一瞬にして撃破する。心臓を撃ちぬかれた兵士を足蹴にし、前へと進んでいく。

「その分かれ道を右に!!」

進んでいくと、階段があった。その階段から、数え切れないほどの兵士がなだれ込んできた。

「この階段を登つて!!」

ドレンの声がレオの耳に入るなり、レオの足は動いた。凄まじい速さで走っていったかと思うといきなり跳び、兵士の頭を踏みつけて2階までたどり着く。2階にたどり着いたレオは、そのまま奥に進む。

「その通路を右に進んでそのまま直進して!!」

言われたとおりに直進する。前から来る兵士の数も多くなってきており、レオの人差し指の速さも加速する。

「あとはずっと左に進んで!!」

右左分かれた通路を左に進み、前と左に分かれた通路も左に進む。レオはどんな通路も左、ただ左に進んだ。当然のように進行を妨害してくる兵士達もレオの神爆銃によって撃たれ、撃破されていく。

しばらく進んだそのときだった。前に、扉が見えた。この皆の中で扉を見るのは、これが初めてだ。だとすれば、ここが罠の居所となるのだろうか。

「ここだよ、レオ兄ちゃん」

ドレンの声で、疑問が確信へと変わった。

レオは扉めがけて勢い良く床を蹴り、そのまま頑丈そうな扉を蹴破る。ドンツという音が響き渡り、中に二人は突入していった。

広い、とは少し言い難いこの部屋の中央に、『それ』は立っていた。全身が赤と黒の鎧で覆われており、表情が確認できない。言葉も発することなく、他の兵士と鎧の色こそ違うものの、ほとんど同じだった。だが、決定的に違うのはその大きさだった。ぱつと見、自分の5倍はある身長に、がっしりの度を越えている横幅。巨体、その言葉を形にしたようなものだった。

「……………お前が、この世界の罠か？」

レオの口から確認の言葉が漏れた。だが、それに対する返事は返ってこない。微動だにせず、ただその巨体の鎧はその場に立っていた。

「おい、聞こえているだろ！答え」

「人に物をたずねる際には自らの名を名乗ることが常識のはずだが」
巨体の鎧の中から、声は聞こえた。男の声だった。

「何だ、聞こえてたのか。俺の名前はレオだ。お前は？」

「我は神の使い、名は『ベガ』。そなたの言ったとおり、この世界の畏になっっている」

畏という言葉が耳に入った瞬間、レオは右手の中にある神爆銃の銃口をベガに向けた。だが、向けられたベガ本人は未だ身動き一つせず、その場に立っていた。

「……いつまでそうしているつもりだ？こっちは引き金を引くだけでお前を倒せるんだぞ？」

「生憎だが、今我は武器を持ち合わせておらぬのでな、そなたと戦うことはできぬ」

「なら、大人しく引き上げてくれるのか？」

「まさか。それでは畏の意味を成さぬ。別の者を残し、我は主の下へ帰還する」

そう言うとベガは、今まで自らの巨大な手に隠し持っていた黒い水晶を、その部屋を照らしているたいまつ光にかざした。

途端、ベガの目の前にゲートとは少し違う黒い穴が出現し、中から

大量の兵士達が出てきた。その兵士は留まることを知らず、蟲のようになどんどん湧いて出てくる。

「私の部下全員がこの穴から出てくる。何体出てくるのかは我もわからぬ。そなたがここで全て撃破することができれば、この世界は救われるだろう。……逃げることが許されぬぞ。そなたが来た扉の向こうにも同じものを設置した」

兵士が流れ込むようにどんどん出てくる穴の向こうからベガの声が聞こえる。

「ではさらばだ。健闘を祈る」

その言葉を最後に、ベガの声は聞こえなくなった。残されたのは文字通り、大量の兵士だった。

「あ……あ……」

ドレンは目の前の兵士の数に絶望し、ぺたりとその場へたり込んでしまった。前方にも後方にも兵士は存在し、圧倒的な数だと見ただけでわかった。自分たちにはもう、逃れる術はないことは明確。さらにこの大量の兵士を撃破することも不可能。

いや、逃げることだけなら可能だろう。目の前にいるレオだけならば。天井でも壁でもどこでもいい。銃で壊して脱出することくらい、簡単にできるだろう。

だが、自分が一緒ならば話は別だ。自分が邪魔で本来の実力を出せず、脱出などできない。刹那たちが助けにくるのを待つとしても、それまで耐え切ることができない。無理だ。助からない。

ならばどうすればいいか……。

「レオ兄ちゃん……僕はいいから、逃げて……」

こう言うしかなかった。自分はいいから、と。

「……何でそんなことを言うんだ？」

「この数じゃ……勝つのは無理だよ……。だから、レオ兄ちゃんだけでも逃げて……」

レオは何も言わなかった。ただ黙ってドレンの話聞いていた。兵士の方は出続けているものの、襲ってくる気はまだなかった。

「楽しかった……、久しぶりに食べるみんなとの夕ご飯も、すつごくおいしかった……。だから、僕はもう……。いいから……」

「何言ってるんだ？何でお前はそんなことを言うんだ？」

「だから勝つのは」

「無理か？俺はそんなに弱くないぜ」

「……え？」

「この状況が絶望と言うのなら、それを今俺が変えてやる。この状況を逆転させてやる」

レオがそう言い終わると同時に、兵士達は剣を構え、一斉に前後方からかかってきた。まるで雪崩のように兵士が連なり、少し進む

だけで轟音が響き渡る。こんなものを、こんな『絶望』を逆転しようと言うのか？……無理だ。いくら強くても一人でこの数相手に、しかもこの狭い場所で戦うのは圧倒的に不利だ。囲まれて一斉にかかられるのが目に見えている。

そのときだった。神爆銃を握っているレオの両手が、光を放った。カチャカチャと弾が装填される音がしたかと思うと、レオは兵士が迫ってくる前後に一発ずつ撃った。

ドン！ドン！と、2発の弾が撃ちだされ、鋭く風を切り裂いて飛んでいった弾丸は、最前の兵士の少し前の床に突き刺さった。瞬間、黒いドーム状の空間が形成され、兵士達はその空間に吸い寄せられていった。レオの結晶能力、『全属性結晶化』の1つである、闇属性の弾だ。その黒いドーム状の空間の中は凄まじい引力の塊であり、兵士達を次々と引き寄せていく。

その引き寄せられた兵士達めがけて、神爆銃の銃口から弾が2発飛び出していった。弾は凄まじい引力の空間の中に閉じ込められている兵士に当たった瞬間、轟音を響かせ、爆発し、吹き飛ばした。火属性の弾である。短い時間で作ったためあまり威力は高くないが、その中の兵士を全部消し去るのには十分だった。

引力の空間に捕らわれ、爆発によって葬られた兵士達の数は決して少なくはない。だが、葬られた数よりも、襲い掛かってくる兵士の数が圧倒的に多い。葬った数など、相手にしてみればそれほど意味を成さないのだろう。

レオは少しだけ銃のグリップを握りなおすと、前後からくる兵士めがけて再び引き金を引いた。だが、今度の弾は今までと少し違った。銃口からは弾ではなく風が、いや、斬撃が飛び出したのだ。その斬撃は、まるで巨大な剣を横になぎ払ったかのように兵士達の腹部を綺麗に切り裂いて進んでいった。風属性の弾である。風は時として

鋭い刃となり、人の体を傷つける。レオの魔力はその風の刃を巨大化、威力を増幅させていたのだ。

風の刃のおかげで大半の兵士に壊滅的なダメージを与えることはできたものの、まだ攻撃が足りない。兵士達はまだこちらへと直進してくる。

「これが最後の一発になるかな・・・」

そう思いながら、両手の神爆銃の引き金を引く。風属性の弾と同じく、銃口から飛び出たのも弾ではなかった。弾の代わりに出たものは、雷を圧縮させた球体だった。大きさを人ひとりの頭ほどしかないが、アルテマを除く全属性の中で頂点に立つほどの威力を持ち合わせている代物。

だがその威力とは反面、ターゲットまで飛んでいく速度が遅いのだ。例える物ならば人が全力疾走するようなもの。良い点があれば、必ず悪い点は存在するものだ。

しかし、だ。この欠点は、今回は心配しなくともよい。なぜなら、撃った先にいる兵士達はかわすことが可能なにもかかわらず、たまたまずぐ突っ込んできているからだ。これでは、自ら当たりに行くようなもの。当然、レオの放った雷の球体は兵士にぶつかることになる。迷うことなく突っ込んでくる兵士に球体がぶつかったときだった。

球体は形を変え、まるで魚を捕らえる網のように兵士達を覆った。その形は、闇属性の弾が形成する黒いドームによく似ていた。違うのは圧倒的な大きさと、それが電気によって形成されているということだった。

兵士達がすっぽりと覆われた瞬間、豪雨のように雷が兵士達に降り

注いだ。凄まじい轟音だった、耳の鼓膜が破れるのではないかというくらいに凄まじい轟音だ。上から、右から、左から、斜めから、あらゆる角度から雷は襲ってくる。しかも、その雷はレオの魔力によって強化されているのだ。自然に起きる通常の雷とは、威力がまるで違う。この中は、上空に存在する雷雲の中の数十倍の威力に匹敵するのだ。その常識を超えた雷に、兵士達の鎧は砕け、溶け、焦げていた。

嵐のような時間が過ぎ去り、ようやく雷で形成された空間は消えた。中の兵士達は、ひどいものだった。あまりに雷を受けすぎたために、粉々といってもいいほどに鎧が砕け散っていた。

それを確認したレオは兵士が出てきていた黒い穴をばつと見る。

もう出てきてはいなかった。やはり、最後の雷属性の弾で倒した兵士達が最後だったのだろう。黒い穴は徐々に閉じていき、その場はしばらく沈黙に包まれた。

「レオ!!!!!!」

扉の向こうから聞こえてきた刹那の声のおかげでその沈黙は破られた。見てみると、そこには肩で息をしている刹那と、神抜刀を手にしているレナ、そして目に涙を浮かべ、服装がボロボロになっているリリアの姿が見えた。3人とも無事だったのだ。

3人のことを確認したあと、レオも自分達のことを報告した。

「俺たちのほうも大丈夫だ、かすり傷1つしてない。それと、この世界はもう大丈夫だ。罨はすっかり外した」

「……………じゃあレオが1人で？」

「まあな。ちょっと大変だったが何とかなった」

そう言うと、レオはペタリと座り込んでいるドレンに歩み寄った。ドレンは口を少し開け、呆気に取られたようにぼーっとしていた。レオはドレンの目線に合わせるようにしてしゃがみこみ、にっと笑って言った。

「ドレン、腹減ったな。家に帰ろう」

「……うん!!!」

気がつくど、辺りは明るくなっていた。絶望と言う名の夜が明け、希望という名の朝がやってきたのだった。

+++++

罨を解除した刹那たち一向はその後、ドレンの村でパーティというものを行っていた。

もう大丈夫だ、自由になったんだ、絶望から解放されたんだ。それを聞いた村人は一斉に歓声をあげ、喜んだ。長年の拘束から解放され、まず最初にやったことはやはり喜ぶことだった。あまりにもこの事実が嬉しくて、嬉しくて、とにかくこの喜びを皆と分かち合いたかった。

そこで開かれたのが、解放を記念して催されたパーティだった。飲みすぎると毒になってしまふ酒や、めったに食べない肉などがテーブルにずらりと並び、村人が全員で肩を組合い、踊りを踊ったりもした。刹那も、レオも、レオも、リリアも、ドレンも、そして村人達も、夜が明けるまで騒ぎ続けた。

そして、絶望と呼べる日々が終わりを告げてから1日が経過した。パーティで夜通しだったのがつらかったのか、村人は地べたに体を横にして眠っていた。幸せな夢を見ているのだろうか、表情が緩んでいた。

「そろそろ行くか」

レオのその一言で、刹那たちはうん、と頷いた。罨は外したのだ、もうここに留まるわけにはいかない。村人達の幸せそうな寝顔をちらっと見てから、刹那たちはパーティ会場を後にした。

ゲートの位置は会場のすぐ近くだったので、それほど移動に時間はかからなかった。いつも通り刹那が黒い大剣を形成し、ゲートの位置を斬る。そのはずだった。だが、

「兄ちゃんたち!」

ドレンの声がしたのだ、疲れて眠っているはずのドレンが。レオはどうする?という刹那の無言の問いに、首を横に振って答えた。待て、というレオの答えが刹那に届くと、刹那は握っている黒い大剣を魔力に戻し、自分の体へと戻した。

レオは、ドレンの元に歩み寄った。やはり、一晩ぶっ通しで騒いでいたため、疲れたような顔をしている。

「もう、行っちゃうんだね……」

ドレンは悲しそうに俯いて言った。

「罨は外したからな。もうここに居ても意味はない」

はつきりとレオは悲しむドレンに言った。だがその言葉とは逆に、レオの表情は悲しげだった。家族も兄弟も居ないドレンを1人にさせるのはあまりにも酷な話だったからだ。昨日今日は自分達が居たからよかったものの、これからはそうはいかない。

異世界の旅に連れて行くという選択肢もあつたものの、ドレンのよくな戦闘能力も回復能力のない子供を連れて行くわけにはいかない。仮に連れて行ったとしても、他の世界の罨からの攻撃から身を守るだけの存在、邪魔になるだけだ。

それをドレン自身もわかっているのか、「連れて行って」などということは言わなかった。自分が行くと邪魔になる、それを十分この世界の罨との戦いで理解していた。

「レオ兄ちゃん、あのね……」

連れて行ってとは言わない。だが、この一言はどうしても言っておきたかった。

「僕も、レオ兄ちゃんみたいになるよ。どんな絶望からでもきつと這い上げられるんだって、みんなに教えてあげる存在になりたい。強くなつて、人を絶望に突き落とすようなやつから、みんなを守ってあげたい！」

ドレンは、悟ったのだ。

もしも、この人たちが来てくれなければ、自分達は永遠に罠から解放されなかっただろうと。

もしも、この人たちが来てくれなければ、絶望は無限に続くものだと信じなければならなかっただろうと。

だが、この人たちが来てくれたからこそ、自分達は罠から解放された。絶望にも終わりがあることを知り、希望だって望めば必ず叶うことだと知ったのだ。

自分も、こういう人間になりたい。絶望が自らを支配し、嘆いている人を救い、希望と言うものは幻想などではないということ教えたいと。そう思った。それを聞いたレオは満足そうに微笑んで、

「そうか。……大丈夫、お前ならやれる。強くなって、希望ってやつを教えてやれ」

このレオの一言で、決心はついた。

「うん!!」

みんなの希望の星になりたい。そう強く思った。

+ + + + +

それから、5年の月日が流れた。ある町に賊が入り込み、支配しているという。この賊、食料や金品を奪うそこの賊とは違い、町を拠点としてあちこちで悪さをするという前代未聞の賊だった。

町の住民は反逆したものの、賊の人数とその力に敗北し、今はただの奴隷となつて働いている。普通の民から一変して賊の奴隷だ、自分らの不運を噛み締める他無かった。

他の国も、この町の賊を捕らえようとしたが、何せ強い。軍を派遣してもあつさり壊滅、希望と呼べる軍さえ歯が立たなかつた。

軍を失つた国は賊の的に相応しかつた。四方八方から攻められ、城壁が崩壊。そのまま侵入を許すが、何とか王座は死守していた。まさに、絶望と呼べる状態だった。このまま王座を奪われれば、この世界は終わりだ。王権を賊に奪われ、力で解決する無法地帯となつてしまう。

誰もが絶望の淵に立たされたそのとき、1人の青年が国にやってきた。腰にはこの世界では珍しい銃、体全体を覆うマントを羽織っている旅人のような格好だった。

「ここか……」

そう呟くと、青年はゆっくりと城門をくぐり、城下町に足を踏み入れる。だが、

「おおおい、どこに行く気だ坊主」

「こつからは立ち入り禁止なんだけどなああああああ？？」

当然賊の見張りに見つかる。2人の屈強な賊はそれぞれ斧と槍を肩に担いでおり、明らかに青年を威嚇している。

青年は少し笑って、腰の銃を抜いた。

「見てる？レオ兄ちゃん。今僕、この絶望を……」

「やる気がこのやるおおおお？」

「殺つちまおうぜええ。最近腕がなまってなまってしょうがねえ」

「希望に変えて見せるよ！！」

青年は戦う。終わらない絶望は無いのだと教えるため。

青年は戦う。希望というものは信じていれば必ずやってくると教えるため。

青年は戦う。かつて自分を救ってくれたのと同じように、自分もまた救うため。

+++++

巨大なカプセルが存在する薄暗い部屋。そこで巨大な鎧男、ベガと青年が向き合っていた。

「ただいま戻りました、主」

「うん、おかえり。それで、接触はできた？」

「申し訳ございません。連れの者としか接触できませんでした。何しろもう魔力のほうぐが底を尽きかけておりまして……」

「え！？駄目だよ！！そんな体で報告に来たら！！もう戻っていいよ。さあ、早く行った行った！！」

「ありがたきお言葉を。ではお言葉に甘えさせていただきます」

「いいから早くー！！」

青年は少し慌てながらベガの体を押しドアに向かわせた。が、

「主、『魔兵』のほうをお返しせねば……」

「いいから早くしてー！！」

「しよ、承知しました。回復後必ずお返しします……」

「早くつたら!!」

背中を押されながら早々と部屋を立ち去る。

「それにしても、あの銀髪の男……、ヤツと姿が重なってならぬ。……今度話でもしてみるか……」

部屋を出る直前、ベガの頭にそんな考えがよぎった。

薄暗く広い部屋にはただ巨大なカプセルのみが残された。

第44話 絶望編5（後書き）

さて、いかがでしたか？今回の物語は^{せかい}？

今も、そしてこれからも続くと思われた絶望・・・それを打ち破つてくれた存在

それはドレンにとっては暗闇の中の光に等しい存在でした

貴方の長い人生にも耐え難い苦痛や困難が待ち受けていることですよ

そんなときは思い出してください

終わらない絶望などないのだと・・・

さて、次回の物語は殺戮人形編^{せかい}

楽しく、そして恐ろしい人形劇をどうぞご覧ください

第45話 殺戮人形編1

面白い事ってのはやっぱり良いことだ
この世界を自分達の手で救う
十分すぎるほどおもしれえじゃねえか

辺りはガツ、ガツ、と木のぶつかり合う音が響き渡っていた。

「そこだっ！！！」

「甘い！！そこはもう少し距離を縮めてから！！！」

刹那の掛け声に、レナの説明するような声。そう、2人はオリアスから貰った拠点となっている家の広い庭で剣の訓練を行っているのである。大剣の形の木をもともせず、軽々と振ってくる刹那の攻撃を、レナが剣で受け流す。このような訓練をもう1時間近く行っているのである。肉体強化していないのによく続くものだな、と感心せずにはいられないほど中身の濃いものだった。

「！？つく！！！」

「うん！上手によけたね！！」

4人はドレンの世界の罠を外したあと異次元図書館に帰還し、次の世界に行くための準備をしていたのだが、オリアスに「疲れが溜まっているだろうから」と言われ、1日だけ休みを貰ったのだ。

その間、レオはホルスターを改造し弾丸を入れられるようにした。威力の高い弾はどうしても作るのに時間がかかってしまったため、あらかじめ威力の高い弾を作っておき、ホルスターに保存できるようにしたのだ。神爆銃・光の中に入っているアルテマも、このホルスターの中にしまうことができ、いちいちアルテマをマガジンから出してから弾丸を込める、という作業を短縮することができる。

リリアはレオのそばに居てじい〜とレオの作業を見守っていた。

（レオが時々茶化してしょっちゅう喧嘩になっていた）

そして、刹那とレナは先ほどからやっているように剣の訓練をしている。と言っても、正確に言えば刹那がレナに剣を教わっているの、一種の授業と言ってもいいかもしれない。

「っふー！！」

「そこは間合いを詰めないとだめ！！」

横になぎ払うように木を振るが、間合いが遠すぎたためあっさりとレナは避けてしまった。大剣は重さゆえに、こういう振り方をすると大きな隙ができる。レナはその隙を逃さず、刹那に急接近し、無防備の刹那の横腹に木を叩き込む。

「っちいー！！」

確実に入っていた間合いからの、しかも加減しているとはいえレナの攻撃を、刹那はとっさに回避し距離をとった。レナは剣の達人だ、

そのレナからの一撃を回避した刹那は肩で息をしながら木を肩に担ぎ、そのままレナに突っ込んでいった。

防御の構えも、迎え撃つ構えもしていないレナに接近したことを目で確認すると、担いでいた木を振り下ろす。走ってきた分の速さが加わり、その一撃は通常よりも早く振り下ろされる。だが、その木はレナに当たることなく地面に突き刺さる。レナが回避したのだ。

慌てて距離をとろうとしても木が地面からぬけず、結局レナが刹那の首に木の先端を当てることで、訓練は終了した。

「刹那、今度から肩に担いじゃだめ。一撃が大きいけど、かわされたら終わりだからね」

「わかったよ。今度からは使わないようにする」

負けたことを根に持っているのか、刹那は少し不機嫌そうに返事をした。

刹那が地面に突き刺さっている木を抜き取ると、レオとリアが家から出てきてこれからもう一戦やらかそうとしていた刹那とレナに言う。

「そろそろ訓練を切り上げる。図書館に行くぞ」

少し残念そうに木を地面に置き、レナは家の壁に立てかけてあった神抜刀を手に取る。

「あゝあ、もう終わりか。もう少しやりたかったんだけどなあ・・・」

「でも時間は時間だし、そろそろ行かないとオリアスさんが怒っち

やいますよ」

太陽のように笑いながらリアはなだめるように刹那に言った。刹那がもう一度やりたいと言ったのも、わかるといえばわかる。あの肩に担ぐ一撃さえなければ……それさえなければ……

「あせらないあせらない。一気に詰め込むとかえって混乱するでしょ？これくらいペースがちょうどいいの」

「はいはい、わかりましたよ。せんせ」

ふそれに、私が教えなくても大丈夫みたいだしね」

刹那は、この前訓練したときよりも数段強くなっていた。訓練したからといって、ここまで強くなるというのは考えにくい。おそらくレギス、ドレンの世界で行った『実戦』のおかげで強くなったのだろう。

前の訓練でレナの動きを読めず、あっさりと剣を受け流されて負けていたものの、今回は動きを読めるようになっており、勝敗が決するまでずいぶんな時間がかかった。達人レベルのレナ相手にだ。そのことが、刹那がものすごい勢いで成長しているということの証明となった。

「レナ、ぼーっとしてないで行こう。もうレオとリア行っちゃったぞ」

「あ、ごめん。行こ、刹那」

少しだけ遅れてゲートに入る。もちろんのこと、図書館で待っていたレオとリアにからかわれたの言うまでもない。

+ + + + +

オリアスから受け取った本を開き、出現したゲートの向こうは薄暗い森の中だった。薄暗いのは多すぎる木の葉のせいで太陽が遮られているためで、決して夜というわけではない。

「今度は、森か……」

「うう……」

リリアは森の薄気味悪さのあまり、レオの腕にしがみつく。夜に林の中を進んでいた前の世界と重なってしまつて、気味悪さが倍増した。

はあ……とため息をついているレオに、刹那は話しかけた。

「なあ、どつするんだ？どつちに進めばいいんだ？」

「……わからないな。だが、進むよりも先にやることがある」

「？」

言うなりレオは銃を手に取り、レナは神抜刀を鞘から抜いた。疑問

符を浮かべていた刹那も大剣を形成し、レオとレナ同様に戦闘体勢に構えた。

そう、一見は物静かな森の中でも、こちらを狙っている異様な気が漂っているのだ。まるで、獲物を見つけた肉食動物のように、じりじりとこちらに近づいてきている。

戦闘能力のないリリアを隠そうとするが、相手の敵が見えない以上うかつな動きはさせられない。刹那、レオ、レナの3人はリリアを隠すようにして背中を預ける形にする。こうすれば、少なくともリリアが狙われることはない。敵の中心いる者をわざわざ狙うという無駄なことはしないはずだからだ。

一秒一秒の時間が、とても濃い。時間はあまり経っていないはずなのに、何時間も立っているような錯覚に襲われる。相手が出てこないのだから、今は待つしかなかった。

だが、その錯覚は突如終わりを告げた。ガサガサと茂みから音がしたかと思うと、いきなり2つの影がまるで風の如く襲い掛かってきたのだ。

「ちい!!」

レオが向かってくる影に銃を撃って牽制をする。弾丸は向かってくる敵の進行方向少し前の地面に突き刺さり、身の危険を感じた1つの影はとっさにレオとの距離をとった。

「っは!!」

もう1つの影は、接近してくる前にレナが攻撃した。襲ってくる影を両断するつもりで振った神抜刀の綺麗な刀身は空を切り、これ以上の接近は無理と判断した影は、最初の影の隣まで跳び距離をとった。

そこでやっとその影の正体が明らかになった。人間の男だった。し

かも、金髪で目が緑色だから獣族だ。ただでさえ身体能力に長けている獣族が肉体強化を施したのならば、さっきのような動きも領ける。ただ、武器がなかった。攻撃はおそらく拳と蹴りのみ。

「結構やるぜ、こいつら。どうやって攻めるんだ？」

「挟み撃ちにして攻撃を絶やすことなく、つてのはどうですか？兄
い」

「おもしれえ、そいつでいこうぜ！」

似通った2人の獣族は刹那たちを中心に分かれ、打ち合わせしたとおり挟み撃ちにする形になった。このままではまずい、リリアを守っている以上動きが取れず、狙い撃ちにされる！

「させるか！！」

「来やがったな！！やってやるぜ！」

獣族の1人のほうに、刹那がかかっていった。狙い撃ちをさせる前に接近戦に持ち込めば、自分達には不利に働かない。そう考えた上での行動だった。

「あなたは私が相手！！」

「女性の剣士ですか。いいでしょう」

接近戦で狙い撃ちを封じ込めるといふ刹那のやり方に従い、レオが行こうとする前にレオも獣族の1人にかかっていった。レオを行かせなかったのは、銃は接近戦に向いていないとわかっていたからだ。

2人が獣族の相手をして動きを止めている間、レオは茂みのほうを指差し、リリアにそこへ行けと無言の指示を送る。それに気が付いたのか、リリアはこくりと頷きこそこそと茂みのほうへと向かっていった。

それを見届けたレオは銃を刹那が相手をしている獣族のほうへ向けた。殺すつもりはない、俊敏さの源を、足を撃つだけだ。

素早く動き、大剣で防御している刹那を翻弄している獣族の足を狙った。

獣族は正面から拳を振るつたあと、足をほとんど曲げずに跳び刹那の後ろへと回り込む。着地する前に蹴りを食らわそうとするが、刹那の防御が早かったため当たるには至らなかった。

攻撃パターンはそれだけだった。正面からの攻撃の後、不意に後ろへ回りこんで攻撃するものの刹那が防御する。その繰り返し。実に単調な攻撃だ。これなら足を狙うのも難しくはない、着地する寸前は足の動きが止まる。その一瞬を狙えばいい。

正面から攻撃にし、ほとんど足を曲げないで跳び着地するその寸前、

「もらつた！」

レオの右手の神爆銃から弾丸が発射された。着地する足めかけてグングン空を切り飛んでいく。当たった、このときはそう思った。だが、

「！？おつとお！！」

獣族はとつさに身をよじり、着地を一時遅れさせた。瞬間、当たるはずだった弾丸は足をかすめるだけで、そのまま地面に突き刺さった。

「な、に？」

弾丸は獣族の死角から飛んでいった。見えているはずがない、ましてやよけるはずがないのだ。なのに、なぜ回避できたのだ？ 獣族は後ろへと跳び、一旦刹那との距離をとった。それが見えたのか、レナが相手をしているもう1人の獣族も同様に距離をとる。

「場外からの攻撃は危ねえだろ。こりや、こつちも本気でいくしかねえぜ!!」

「殺すわけじゃないですからね。ちゃんと手加減は……」

「わあってるって!そんなじゃいくぜ!!」

その言葉と同時に、獣族の魔力が爆発的に増幅したのがわかった。魔力が具現化し、黄色の色が獣族の体から染み出てきているのが目に見える。

魔力は普通、体から染み出るものではない。血液と同様、体の中で作用するものだからだ。しかし、結晶を形成するときは例外で、体から一度魔力を意図的に出してから形成する。

だが、この2人は違う。意図的に体から出しているわけでも、結晶を作ろうとしているわけでもない。勝手に体から染み出ているのだ。おそらく、あまりに膨大な魔力が体という器に入りきれっていないのだろう。

この獣族が一体何をしたのかはよくわからない。ただ、言えることは2つある。1つは確実に自分達よりも魔力が強くなった。そしてもう1つ、確実に追い込まれた。

「うっし!準備万端!いくぜ!!」

「勢い余って殺した、なんてことないようお願いしますよ」

さつきまでとは速さがまるで違った。最初に戦ったときの動きを風と例えるのならば、今の動きは突風だ。同じ風でも、速さと威力が桁外れに違う。

突風の如く特攻してきた獣族は、再び刹那とレナに分かれて攻撃を開始した。その1人は刹那に飛び蹴りを食らわせた後、すぐさま拳の連打に移った。

「おらおらおらおらおらおらあ！！！」

「つく！！！」

防御をしているのに、痛みが刹那の手を襲った。防御しているのは刹那の結晶である黒い大剣、強度はそこら辺の金属などとは比にならないくらい硬い。なのに、この獣族の拳から伝わる衝撃は結晶を乗り越えて刹那の手に届いてくる。ありえないことだった。防御しているからこの程度で済んではいるが、直接当たってしまえば骨は粉々に碎け、筋肉は潰され、血管は破れるだろう。

「ん？・・・こいつ、目の瞳孔が開ききってる？」

接近戦で近距離にいる獣族の1人の目が異常なことに、刹那は気がついた。完全に開ききった瞳孔、いくら薄暗いといってもこの開き方はおかしい。それに、目に光が灯っていない。開ききった瞳孔に、光が灯っていない目。そう、それはまさしく死人と同じ目だった。

「何ぼけつとしてやがる！！！」

「！？」

目に意識を取られていたほんの一瞬だった。獣族の拳は大剣の防御をかわし、刹那の腹部に突き刺さる。瞬間、肉体強化を施しているのにもかかわらず激痛が襲い、意識が次第に遠のいていく。刹那の体を支えている膝が折れ、そのまま地面に倒れ込んだ。

「刹那っ！！」

倒れた刹那を気遣い、レナは刹那のほうを向く。敵を、しかも自分よりも強い敵を相手にしているときにする行為ではない。

「余所見はしないほうがよかったのに」

当然のこと、レナも刹那と同様に腹を殴られて気絶してしまった。2人を撃破した獣族の次の目標はレオとなった。レオはもう1つの神爆銃の中へ弾を入れ、構える。途端に、獣族の2人が一斉にかかってきた。

「ははははは、あとはお前だけだあ！！！」

「兄い、油断はしないでくださいよ」

突風の如く接近してくる2人、だがそれよりも早く、レオの銃からは弾丸が飛び出していった。いくら2人の接近速度が速かるうが、神器から発射される弾丸には及ばない。はずだった。だが、

「！？おっと、外れだぜ」

回避されてしまった。弾丸は獣族に当たることなく地面めがけて深く突き刺さった。それを見届けたレオはニヤッと笑い、言った。

「かかったな」

「何い!!」

「む!？」

地面に刺さった弾丸はそこを中心にして巨大な黒いドーム状の空間を作りだした。そう、獣族めがけて撃つたのはフェイクで、闇の弾が作りだす空間に引きずり込み、身動きを取れなくするというのがレオの策だったのだ。

しかも、今撃つたのは魔力を長時間練りこんだ上等の弾。当然、今まで撃ってきた闇の弾などとは比べ物にならない引力が辺りを襲う。

「刹那!レナ!」

気絶している2人を回収し、近くの木にしがみつくと。無闇に動く、自分までも引力の空間に引きずりこまれてしまうからだ。

獣族の2人は何とか引きずり込まれまいと足を踏ん張り、その場にとどまっていた。だが、レオの作り出したドームの引力も凄まじいものだ。獣族の足場となっている地面が少しずつ抉れていった。

「なかなか、面白えじゃねえかよ!!」

「ですが、まだ甘いですね」

口調が丁寧なほうの獣族はずっと左手をかざした。すると、手のひらに少しずつ微量の電気が溜まっていき、球体になった。球体が拳大程の大きさになると、獣族の手からは雷が轟音を上げて出、引力を引き起こしている黒いドームの中心に向かって進んでいった。

バリバリと電気を起こしながら、そして引力に決して逆らわず雷は

進み、レオの弾丸が突き刺さった場所に落雷した。

どおおおおおおおん！！！！！！

轟音が辺り一面に鳴り響いたと同時に黒いドームは消え失せ、引力もなくなった。

「ば、馬鹿な！弾丸を破壊して引力を止めただと！？」

動きを封じ込めた隙を狙って追撃の弾を撃つ前に、引力を放つドームは消えてしまった。弾丸を破壊して効果を止めるという斬新な方法に、レオは驚きを隠せずにはいられなかった。

「戦いに、隙を作りだす驚きは無意味です」

「がっは……………」

驚いている一瞬の隙、獣族の1人は見逃さなかった。突風のように加速し、そのままレオの腹部へ拳を食らわす。

ひくそつたれ……………」

心の中で呟き、そのままレオも気絶してしまった。

戦いに不慣れた刹那ならともかく、戦闘能力に長けているはずのレオとレナまで倒されてしまった。こんなこと、こんなこと……………」

「刹那さん！レナさん！兄さああああん！！！！」

リリアの声は薄暗い林の中悲しく響き渡り、いつまでも木霊していた。

第46話 殺戮人形編2

決して浅くない眠りから目が覚めた刹那は、質素な家の中、しかも自分がわらの上で寝ていることに気がついた。なんだかチクチクしていて、あまり良い心地よさではなかった。布団、ベッドなどの柔らかい寝床に慣れている刹那は、このわりに不快感を覚えずにはいられなかった。たまらず起き上がるうとする。

「いつて！」

腹部に痛みが走る。先ほど殴られたところだった。痛みがこれほどひどいものだということは、威力もそれだけ強かったということだ。気絶するくらい打撃だったのだから当然と言えば当然なのだが・・・

「刹那、大丈夫？」

いつ部屋に入ってきたのか、いつの間にかレナがそばに立っていて、刹那のことを心配そうに見ていた。

「ああ、大丈夫だ。それより、あれからどうなったんだ？」

「それは僕が説明します」

刹那がレナに問いかけた瞬間ドアが開き、先ほど戦った獣族の1人が入ってきた。魔力の規模のほうは戦ったときと比べずいぶん小さくなり、少なくともこれから一戦やらかそうなどという気配は見られなかった。

「レオさんから話は聞きました。．．．．先ほどはいきなり襲つてすみませんでした。てっきりこの頃現れている殺人鬼かと思つたもので．．．．．」

「殺人鬼？」

「ええ。最近、我々一族が次々と殺されているんです。その犯人を捕らえようと見張っていたら、あなた達が現れたというわけなんですよ」

人がほとんど来ないところに見知らぬ人間がやってきたら、当然誰もが警戒心を抱かずにはいられないだろう。つまりはそういうことだ。こんな森の中、しかも滅多に人は来ないのにいきなり空間から見慣れない服装の人が現れたのだ。これを警戒せずに、一体何を警戒すればいいのだろう。

「殺人鬼、か．．．．」

刹那はこの獣族の話から、その殺人鬼がこの世界の罨だということに気が付いた。殺人鬼と呼ばれるくらい沢山殺しているのだ。身体能力の高い獣族を次々と殺して回れるのは相当の実力者、つまりは罨ということになる。

「じゃあその殺人鬼捕まえるの、俺たちもて．．．．」

「はいはいはい、診察の時間よ～～～！」

「お邪魔しますね～」

刹那の言葉が、突如遮られた。何事かと見てみると黄緑色の髪の毛

を後ろで一本に束ねた女の子と深い緑色の長い髪の毛をした女の子
2人が入ってきた。目は黄色、この2人も同じ獣族だ。
ズカズカと部屋に入り込むと、髪を束ねた女の子は刹那の額に手を
当て、うぐんと唸ってから容態を尋ねた。

「どっか痛いところない？正直に言ってごらん！」

「え、ちょっと腹が……がぼっ！！！」

「鎮痛ざあ〜い投与お〜」

長い深緑の髪の毛の女の子は刹那の声が耳に入るなり、刹那の口に粉薬
と水を一気に流し込んだ。流れてくる水と粉薬の味はお世辞にも良
いとは言えない。粉薬特有の苦さのせいで、刹那は顔をしかめた。

「おなか痛いって言ったよねえ〜。はい見せてねえ〜」

「え！？あ、ちょー！！！」

「ほら！動かない動かない！！！」

髪を束ねたほうの女の子は刹那を羽交い絞めする形を取り、長い深
緑の髪の毛の女の子は刹那の服を捲くり上げ、腹を出す。見事に
あざができていた。痛いのも無理はない。
ふむふむ、と唸ると、長い深緑の髪の毛の女の子はどこから出したの
か、白い布を取り出し患部にぺたっと貼り付けた。

「うわっ！？冷た！！！」

「湿布だよ〜、しっかり効くから安心してねえ〜」

「はい治療終わり〜！！！！お邪魔しました〜！！」

まるで嵐のような女の子達だった。あまりのことに、刹那も一体何をされたのかよくわからなかった。ただわかることは、先ほどまであった痛みはもう微塵もないということだった。

はあく、と深いため息をつき、獣族は額を手でピシヤリと叩いて口を開いた。

「……………あちらのほうで説明します。立てますよね？」

扉のほうを指差し、上半身だけ起き上がっている刹那に言う。

「ちょっと！あんな凄い力で殴られたんだから立てるわけないですよ！？」

レナが獣族の無茶な言動に反論する。気絶するくらいの力で急所である腹部を殴られたのだ。立てるはずがない。

「いや、大丈夫だよレナ。もうなんともない」

「……………ホントに？」

「ホントだつてば」

刹那が笑いながら立ち上がったので、レナはしぶしぶ獣族の言うことに従ったのだった。

扉の向こうまで歩くのには、本当に何の支障もない。先ほどまで痛みがあったのが嘘のようだった。

扉の戸に手をかけ、ゆっくりと押す。きい、と音がして開いた扉が

「とりあえず、僕の名前は雷光です。こっちは僕の兄です」

「おう、俺は雷牙っていうんだ。よろしくな」

遅すぎる自己紹介も終わり、この場に居る6人は木製のイスに座り込み話をしていた。

自分達の事情を説明した後、落ち着きのない雷牙を何とか黙らせ、雷光は自分達のことを話し始めた。

話によると、先ほど聞いた殺人鬼というのはつい最近こちら辺に現れたらしい。1人でいる獣族の心臓を一突きにして即死させる、それが殺人鬼のやり方らしい。

始めの頃はたいした警戒もしていなかった獣族も、被害が多くなつていくに連れ何らかの対策を取らざるを得なくなっていた。そこで考え出されたのが、その殺人鬼を撃破するということだった。そして討伐部隊と称され、村と隔離されたこの場所にいるのがこの2人、雷兄弟だ。

同種族の仲間が次々と殺されているのにも関わらず、その危険度を無視して討伐に向かわせるという無茶苦茶な案には、ある裏付けがあった。

いくら獣族ももとの身体能力が高いとしても、それだけで戦いに向いているとは言えない。例えるのなら体操選手。身体能力は高いが、必ずしも体操選手全員喧嘩が強いとは限らない。

だが、雷兄弟は違う。獣族の中でも接近戦、肉弾戦のエキスパートだ。風のように速く、雷のように高い攻撃を持ち合わせた、いわば人間兵器。この2人ならば、倒せる。そういうことらしかった。

「つまり、雷牙と雷光はこの世界の罨を外すために村から離れて、罨のターゲットを自分達に移させようとしてるわけなんだな？」

「その殺人鬼の正体が刹那さんの言う罨だとしたら、そういうこと

になりますね」

話はまとまった。この2人はこの世界の罫を外そうとしている、それを手伝わないわけにはいかなかった。刹那は自分達も手伝うと雷光に話したら、雷光はあっさり承諾してくれた。早いうちに罫を外したい雷兄弟にとってはありがたい増援だった。

交渉と言えいいのか、それを終えた刹那たちは次に雷兄弟への質問に移った。その最初の質問が次のものだった。

「あの時、雷牙と雷光の魔力が増幅したとき、目が変になってたけど、結局のところなんだったんだ？」

「刹那さん達は『眼』をご存知ないので？」

刹那たち4人が全員首を縦に振ったので、雷光は説明を始めた。

「眼というのは……何て言うのかな、結晶でいう潜在能力のようなものです」

「まあ、肉体強化の潜在能力みてえなものだ。『眼』を使えば通常の肉体強化よりも体が強化できるし、何よりも肉体の潜在能力も解放できらあ」

「肉体の潜在能力？」

眼により、体の強化が著しくなるのは理解できた。だが、雷牙の言った『肉体の潜在能力』というものが理解できなかった。

「刹那、俺の弾丸と一緒にだ」

「あ、そうか」

レオの結晶は弾丸、潜在能力は全属性結晶化。普通に結晶を作るのなら何の属性も持たないただの弾となってしまうが、潜在能力である全能力結晶化を使うことによって、火、水、土、風、雷、闇、光の7種類の弾丸を作ることが可能なのである。

つまりだ、雷兄弟の言っている『眼』を使えば肉体に潜在している能力を使うことができる、ということになる。

「それじゃあ、雷牙と雷光は？」

「ええ。もちろん肉体の潜在能力を引き出すことができます」

「はっはっはっは！！まあ、狩りの成果が出たってやつだな」

「狩りの成果？」

リリアが首をかしげながらたずねる。なぜ狩りをして『眼』を開くことができたのだろうか、それがよくわからない。

「『眼』はですね、開眼するには条件があるんです。しかもその条件は個人個人違いますね、僕達兄弟の条件は『命が危険に晒されること』でした。あのときは危なかったなあ……」

雷光が夢中になって話してくれたことは一昔の狩りの話だった。

その日は大雨で、足場がとにかく滑ってやりにくかったらしい。泥に足を取られ、激しく打ち付ける雨によって視界は遮られる。

これも全ては生きるためだった。雷兄弟一族の掟では、その日食べる分しか狩らない、ということが決められている。そう、取りすぎで自然のバランスを崩さないようにするためだ。しかも、その日に

食べる分しか狩らないということは食料を貯めておくことができない。もちろん、畑などはあるものの、基本的に雷兄弟は畑には頼らず自分で取って食べるため、こんな日でも狩りに出かけざるを得ないのだ。

ばしゃばしゃと音を鳴らしながら、雷兄弟は獲物である巨大狼を追う。ときどき見失いそうになるものの、何とか離されないようにくつついていく。肉体強化をしているのに追いつけない、信じられない速さだった。追跡に夢中になっている矢先だった。

逃げていた巨大狼がくると180度方向転換をし、追いかけてきた雷光に体当たりしたのだ。激しい雨のせいで視界が悪くなっているのと、全速力のスピードで追いかけていたせいで巨大狼の突然の体当たりをかわせない。

不意打ちのせいで防御体制を取っていなかった雷光は無様に吹っ飛ばされ、地面に倒れた。それを見た雷牙は雷光のもとに近寄ろうとするが、信じられない速さで突っ込んできた巨大狼の噛み付きをかわせず、1本1本がまるで鋭く尖ったナイフのような歯で横腹を深く噛まれる。

ギチギチと、ゆっくりと喰い込んでくる歯。その歯が内臓に達したときに、『眼』は開いたのだという。

「………というわけなんです。僕と兄いは双子で開眼条件は同じでしたから、自動的に同時開眼したんですよ」

「双子かあ……通りで兄弟にしてはそっくりだと思った」

リリアがにこつと笑うと、雷光もつられてにこつと笑う。

「でもよく死ななかったな。重傷じゃなかったのか？」

レオが口を開く。その問いに答えようと雷牙が口を開くが、不意に

聞こえてきた女の子の声に邪魔された。

「そりゃあたし達の治療のおかげ!!」

「そうそう私達が手術してなかったら死んじゃってたんだよあ」

やってきたのは手に籠を持った2人の女の子だった。先ほど刹那に薬を飲ませた、湿布を張ってくれた本人達だった。

「もうびっくりしたんだから!!夕ご飯遅いなあ〜って待ってたら血だらけだもん!!雷牙なんて痙攣してたし、ホントびっくりしたなあ〜」

「そおそお、面白かったよねえ」

あははは、と笑いあう女の子。雷光は、ふうとため息をついた。

「紹介します。僕達討伐隊の補助員としてついてきた風姉妹です」

「あたし風蘭!!よつろしくね〜」

「私はねえ、風花ってゆうんだよ。よろしくね〜」

「ちなみに風花が姉さんで、風蘭が妹だぞ」

雷牙の補足がなければ間違えるところだ。風花が姉だとは……、はつきり言ってしまうえば、姉としての威厳というやつが足りない気がする。ぽやくつとしていて、なんだが頭の中がお花畑で埋め尽くされている感じた。風蘭のほうは明るくて、しっかりしている感じ。わからない人に風蘭が姉だ、と言われれば絶対に間違ってくる

その威厳というやつがなかった。

「……………さらに言っておきますね。風蘭さんは……………怒ると凄いですよ……………」

「……………だな。昔怒られたときは洒落にならなかった……………マジで殺されるかと思った……………」

「ええ、私そんなに恐くないよ」

風花が必死に否定するが、雷兄弟の表情からそれが真実だと嫌でも伝わってきた。その表情は、なんとというか、体の隅々にまで染み込んだ経験のようなものが自然と顔に出ているような、そんな感じだった。よほど風花の怒りは恐ろしいのだろう。

風花はふうふうと頬を膨らませながら手にした籠の中から薪を取り出した。

「おなか減ったでしょ？ご飯にしよう」

気の抜けた風花の声で、その場は昼食の場になった。

第47話 殺戮人形編3

昼食は雷牙が捕ってきた魚になった。木の枝を削って尖らせた棒を魚に突き刺し、焚き木の火の近くに刺して焼く。塩味加減はお好みで、心持少な目がいい具合。

食事が済んだ後は何のひねりもない話し合いになった。内容は自分達のこと。お互い知らないことが多すぎたので、かえって盛り上がった。その中でも盛り上がったのは、雷兄弟の昔話だった。

「あの時のでっかい鳥はやばかったぜ！くちばしが鋭いのなんの！」

「でも結局兄いが1人で倒したんですよね。……風蘭さんさえいなければ僕だって……」

「な、なによ！！怖かったんだからしょうがないでしょ！！」

狩りの話には雷兄弟のほかに風蘭が出てきた。好奇心旺盛な風蘭は毎日毎日飽きもせず雷兄弟の狩りについていったのだという。

ほとんど雷光の背中で震えているだけなのだが。

「いつもいつもついてきては肝心なところで僕の背中に隠れて……僕だって狩りしたかったのに……」

「う……」

「あははは。でもさあ、風蘭もたまには役に立ったでしょお？」

「たま〜にだけだな、死に掛けたときの治療はありがたかったぜ」

「治療？」

そこで一旦話は途切れ、風姉妹の治療の話に方向転換した。風姉妹は得意気に胸を張りながら、自分たちのことを答えた。

「あたしたちが雷兄弟のお供で来たってことは知ってるでしょ？でも、何の役にも立たないただの女の子が、殺人鬼討伐に借り出されるわけないからね」

「私たちはねえ、戦いはできないけど傷に治療を施すことはできるの。だからねえ、私達はこうやって雷兄弟についてきたんだよお」

「そなんだ、風花さんも風蘭さんも治療術使えるんだね」

「でも、こっちのほうなだけどね」

そういうと、風蘭はポケットから小さなケースを取り出した。パカッと風蘭がケースを開けると、中には小さな針や細い糸、それに見た目ですぐにわかるほど鋭いメスなど、様々な医療道具が詰まっていた。

「私達の血筋は、何でか知らないけど魔力がちいとも使えないの。だから小さい頃から両親から医療を教わってるからねえ、手術のほうの治療の達人なんだよお」

「そうそう！だから村のほうにある『風治療院』っていう病院もあつたしらがやってんの！」

「へえ、それじゃ痛みがあつという間にひいたのは風花と風蘭が

作ってくれた薬と湿布のおかげなのか」

「そうだよお、だからすぐ効いたでしょお。即効性の強いやつだからねえ」

にっこりと笑って風花が言った。確かに薬を飲み（正確には飲まされた）、患部に湿布を張った（正確には張られた）すぐ後に痛みは消えてしまった。即効性が強いといっても、これだけ効くとなれば調合した人の腕が良いとしか言いようがない。

「お、夕日だ。もうこんな時間になっちまったか」

いつの間にか空は紅に染まっていた。白いはずの雲も、青い空でさえも夕日の光で綺麗な紅色になっていた。

やがて自然豊かなこの森にも夜が訪れ、雷兄弟の小屋に明かりが灯った。

+++++

雷牙は目を覚ました。朝だからではない。まだ夜中だし、か

といて変な物音が聞こえたわけでも、殺気を感じたわけでもない。ただ……目を覚ましたときに嫌な予感がした。それだけだ。

昔から雷牙の勘はよく当たる。狩りの獲物を探するときも、雷牙が向かった方向にはほぼ確実にいたし、獲物との戦闘でも大体ここに攻撃してくるということがわかってしまう。だから、今夜目が覚めたのもただの偶然ではないのかもしれない。

雷牙は、隣で深い眠りについていて雷光を起こさないように部屋からそっと抜け出し外に出た。外は静かな夜風が吹いており、空には少し欠けた三日月が浮かんでいた。虫のリリリ、という鳴き声も綺麗に響き渡り、近くにある川も小さな音でゆっくりと流れていた。見た限りでは怪しいところ、不審なところはどこにも見当たらない。いたって静かな夜、先ほど感じた嫌な予感の外れたのだろうか。

そう思うしかなかった。いくら勘のいい雷牙でも外れるときももちろんある。ほぼ確実とは言っても、100%当たるわけではないのだ。

今回はその外れがきてしまったのだらうと、雷牙は家の中に入ろうとした。まだ夜だし、眠い。もう一眠りしよう。

家の戸に手をかけた瞬間に、雷牙はその嫌な予感がまだ胸の内から消えないことに気がついた。気のせいなんだ、と自分に言い聞かせてもその予感は消えるどころか、ますます強まっていく。

「ん？」

雷牙は、月に照らされて出来た自分の影の他にも影ができているのに気がついた。自分の影よりも小さい4つの影。バツと後ろを振り向く。そこには、

「人形……か？」

自分の身長半分もない小さな人形が4体、一列に並んで空中に浮かんでいた。しかもその人形はそれぞれ武器を持っており、一番左の赤い服を着た人形は小刀を両手に、次の黒い服を着た人形は両手に大斧を掲げ、次の桃色の服を着た人形は大槌を肩に担ぎ、一番右の青い服を着た人形は大剣を両手で持ち刃を開いたり閉じたりしていた。

雷牙の嫌な予感は外れてなどいなかったのだ。見事的中していて、

今日の前にいる露骨な武器を持っている人形が、自分の戦うべき相手だと雷牙の勘が告げている。

「こいつらが殺人鬼、かよ……とんでもねえ人形だな!!!」

先手必勝が雷牙の信条、ゆえに雷牙は一瞬にして『眼』を発動させて4体の人形に特攻していった。『眼』のおかげで体の奥底から魔力が溢れ出し、雷牙の肉体は凄まじく強化される。特攻したときの速さも、まるで突風。雷牙はその勢いを利用して空中にいる赤い服を着た人形に突撃する。

ゴッ!と鈍い音がしたあと、赤い服の人形は雷牙の突撃をもろに食らって地面に叩きつけられ、勢いのせいで服が破れ、腕やら足が取れていたりと、首がひん曲がったりしていた。

よし、と雷牙が思えたのもつかの間。残りの3体の人形が雷牙に襲い掛かってきたのだ。どういう原理かは知らないが、人形達は空中にいるはずなのに一瞬で加速し、そのまま勢いに任せて雷牙に武器を振るってきた。

雷牙から見て左が大斧を、真ん中が大槌を、右が大鋏を持った人形が急接近してくる。だが、肝心の雷牙はといえば空中にいるため身動きが一切取れない。このままでは、接近してきた人形達にやられる。

「っへ、まだまだだな!!!」

雷牙はにやりと笑うと、先に接近してきた左の黒い服の人形を右側に蹴っ飛ばす。左にいる人形が右側に吹っ飛ばせば当たり前のことなのだが、真ん中、左の人形も黒い服の人形に巻き込まれる。

雷牙を襲ってきた人形は一塊になって近くの木の下に激突し、雷牙の蹴りの威力がまだ生きているのか、その木を易々とへし折ってし

まった。倒れた木は地面には倒れず、他の木に引つかかってしまっ
たせいで音はさほど立たなかった。
空中から着地し、『眼』を解除した雷牙は、人形達の手ごたえのな
さに疑問を抱かずにはいられなかった。

「……変だぜ、こんなに弱えはすがねえ……」

この程度の弱さならば、普通の獣族でも十分に撃破できるはず
だ。不意討ちを狙われたとしても、被害者の中には獣族でも実力の
ある者も含まれている。そんな獣族があっさり和不意討ちされるの
はおかしい。

「……何だ……」

雷牙は自分の中の嫌な予感が、まだ消えていないのに気がついた。
もうおかしいことだらけだった。中途半端な強さの人形、原因を倒
したはずなのに消えない嫌な予感。さっきの突進と蹴りで間違いな
く人形達は壊れたはずだ。『眼』を発動した体で人形に攻撃したの
に、壊れないはずがない。現に、最初に突進して倒した人形はぼろ
ぼろになっていた。他の人形も同じ素材でできていたのなら、雷牙
の蹴りで確実に壊れたはず。

なのに、なぜこんなにも嫌な予感がするのだろうか。わからない、わ
からない、わから

「!?!? うぐあああ!!?!?」

不意に、左胸に鋭い痛みが走る。腹を見下ろしてみると、刃が腹を
貫通していた。そして、ゆっくりと後ろを向く。そこには、最初に
撃破したはずの赤い服の人形の腕が浮いていて、その手に持っている
小刀で思い切り突き刺しているのが見えた。

その瞬間、雷牙は全てを理解した。獣族がどんどん葬られていることも、自分の中の嫌な予感が消えないことも……。

「くそつたれがあ……」

目の前が真っ暗になり、雷牙はその場に倒れた。ズボツと小刀が抜けた音を最後に、雷牙は完全に意識を失った。

+++++

雷牙の突然の叫び声を聞きつけた一同は、外で血まみれになって倒れている雷牙を発見した。見てみると、左胸から血が流れ出ていた。それはまるで、貯水タンクに大きな穴を開けられたかのような勢いだった。傷口を見る限りでは、おそらく心臓を一突きにされている。即死だろう。

風姉妹と雷光は雷牙の体を仰向けに治すと、そのまま治療に移ったようだった。

「安心して、雷牙君は死んでないからあ」

刹那たちの顔色が蒼白だったのに気がついた風花は、雰囲気合っていない笑顔で言った。だが、何の効果もないことは明らかだった。

心臓が一突きされたのだ、死んでいないわけがない。

「風蘭、心臓は動いてるよねえ？」

「うん！大丈夫！ちよつと脈が速いだけ！」

「それじゃ縫合しちやおう」

「頼みましたよ、2人とも」

雷牙のことを風姉妹に頼んだ雷光は、雷牙が死んでいないことに驚いている刹那たちのほうに歩み寄った。

「雷光、雷牙が死んでないってどういうことだ？心臓を貫通したら即死するはずだぞ？」

レオが少し強めにたずねてきた。無理もない、あの雷牙の出血量からして心臓を串刺しにされているはずだ。心臓を貫通して生きている人間など、『レメン』くらいのものだ。普通の人間が生きているなど、ありえない。

レオの問いに雷光は即答した。

「簡単なことです、兄いの心臓は普通の人と逆の位置にあるんです。いや、心臓だけじゃない。臓器と言う臓器が、普通の人と逆になつてるんです」

「臓器が逆に位置している、ということか？」

「そうです」

雷光の話によれば、臓器が逆になっている、ということは非常に稀なことらしい。雷牙は不幸、いや、幸運にもその稀なことのおかげで死を免れたわけだ。

それと、臓器が逆になっている人は体が弱いのだとも雷光は言った。昔、まだ狩りなどしていなかった頃のことだが、雷牙はとにかく病気がちで、外に出ることなどできないほどだったのだという。

今の雷牙からは想像のつかない話だった。

その虚弱だった雷牙の専門医だったのが、風姉妹の両親だった。

雷牙のかかる病気は風邪というわかりやすいものからまったく未知のものから様々で、そのたび病気に合った薬を調合するのは普通の医者では無理だった。だが、風一族だけは違った。どんな病気でも必ずと言っていいほど薬を飲めば症状は治まったし、さらには虚弱だった雷牙の体を至って普通の健康体まで回復させることに成功したのだ。雷牙が狩りに出ることができたのも、体術の才能を開花させたのも、全ては風一族のおかげだと言っても過言ではない。雷光が話している間に、雷牙の治療は終わったようだった。もう治療道具を片付け始めているところだった。

「みんなあ、縫合終わったから小屋に運んでくれるう〜?」

風花の間延びした声から、雷牙は無事だということをみんな理解したようだった。

第48話 殺戮人形編4

風姉妹と雷光は、雷牙の治療が終わったあと眠りについていたのだが、刹那たちは看病していた。至って普通に呼吸をし、別に何ともなさそうに見えるのだが念のため、ということだった。

そして、深夜の頃に気絶していた雷牙が目を覚まし、現在に至るわけだ。

「いや〜っはっはっはっは！！油断したぜ！！まさか壊した人形からやられるとは思わなかった！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「な〜んか変だなあ〜って思ってたら後ろからドスツだぜ？ありやわからなかったなあ！！隙を突かれたぜ！！はっはっはっはっは！！」

「はあ・・・・・・・・・・・・・・・・」

気絶から目を覚ました雷牙は、とても怪我人とは思えなかった。なんとさえばいいのか・・・・・・・・とにかくうるさい。元気なのはよくわかった。怪我が大したことないのも喜ばしいことだ。だが、夜中にこの声の大きさはうるさい。

「ちよあつとうるさいかなあ〜？ねえ〜雷牙く〜ん」

上半身を起こした状態の雷牙の後ろから幽霊のように現れたのは、寝付いたはずの風花だった。につっこり笑っているが・・・・・・・・恐かった。当たり前だ、気持ちよく寝ているところを叩き起こされ

て機嫌のいいやつがいるののか。

人の笑顔を恐いというのは失礼なはずなのだが、風花の笑顔は例外だった。その証拠に、雷牙の顔が一気に蒼白になり、体をガタガタと震わせ始めたのだ。

「雷牙く〜ん？あんまり騒ぐとねえ、傷口が開いちゃうんだよあ？私達が縫合してあげたところを、雷牙君は台無しにしたいのかなあ？」

「いや…………あの……………」

風花と雷牙の性格が、どちらとも反転していた。いけいけタイプである雷牙がおどおどしだし、ぼやくっとしているはずの風花がいけいけになっってしまったのだ。

「つまりい、私が何を言いたいかわかるかなあ？雷牙く〜ん？」

「いや…………その、黙れと……………」

「わかってんなら大人しくしてろや」

風花の口調が変わった瞬間、空間が凍てついたような錯覚に襲われる。風花の顔からは笑顔が消え、雷牙にしてみれば体中から汗をだらだらと流していた。

「……………はい」

何とかそれだけを絞り出すと、雷牙はそのままベッドにバフツと倒れこんだ。

「あゝ、雷牙君やつぱり体に負担がかかったんだねえ。眠らないといけないからみんな行こっかあ」

再び笑顔になった風花はしれつと言つと部屋を出て行った。それを見送ったあと、刹那が口を開いた。

「雷……牙……?」

「わりい、頼むから寝たことにしてくれ……。今度騒いだら本当にあいつ怒るから……」

さっきの風花はまだ完全には怒っていなかったらしい。さっきのが爆発すれば……。ちょっと寒気がしたような気がしてブルッと震えた。

雷牙のことを思い、一同は全員部屋から出た。いや、雷牙のことよりも、ここにいればまた風花が来てしまうから、ということのほうが大きかった。

「それじゃ俺たちも寝よう……。か?」

刹那がそう切り出そうとしたが、レオとレナが何やら考える素振りをしていたので中断した。

「どうしたんだ2人とも?」

「ちょっとこの世界の罫が気になってね」

「ああ。雷牙の言つてた人形つてのがどうもおかしくてな」

雷牙は、バラバラに壊したはずの人形から攻撃を受けた、と言つて

いた。バラバラ、ということも腕、足等が胴体から離れている状態をおそらく指しているはずだ。そして、人形は手に武器を持っていた。もちろん雷牙の胸を突き刺した武器だ。この2つの点からすれば、雷牙は胴体から離れた腕から攻撃を受けたことになる。もっとはつきり言えば、雷牙は『人形ではない他の誰かから攻撃を受けた』ということになる。

腕は普通、自分の意思によって動くものだ。脳から脊髄、脊髄から神経、神経から筋肉へ、動くという信号を送らなければ動くわけではない。

つまり、人形は自分の意思で動いているのではなく、誰かが操っていることになる。それでなければ、胴体から離れた腕が攻撃するはずないのだから。

これが怪しいのだ。人形を操っているのが神の使いなのだったら相当の実力者のはず、ここそこ影から攻撃などしなくてもいいはずだ。直接出てきて攻撃、それで終わりのはずなのに、なぜ人形を使うなどという回りくどいことをするのかわからなかった。

「明日でいいじゃない兄さん、レナさん……私もう眠いよう……」

リリアが大あくびをしたのを合図にして、レオとレナは考えるのをやめた。

「そうだね、明日対策を立てても遅くないもんね」

「それじゃ寝るか」

こうして、この日は終わる。次の朝からどうなっていくのか、何が起るのかはわからない。

+++++

「今日は何だか曇りだな……」

「そうだね、雨が降りそう」

朝、刹那はレナに起こされて外に向かった。レナが刹那を起こしたのはもちろん訓練のためだった。いつもならばベースキャンプである家でやるのだが、なぜここでやるのだろうか？刹那は不思議に思ったが声には出さなかった。レナに何か考えがあると思ったからだ。もちろんその考えまではわからないが。外はどんよりと曇っていた。雲が厚いせいか日光が射さず、薄暗かった。朝からこんな天気なのか、と刹那は少しため息をついた。こんな綺麗な森なのに、その朝の光が射し込む光景が見られないのは残念だった。

「ほら刹那、ぼくっとししないで」

「あ、ごめん」

レナは我に返った刹那に丸太を手渡した。大きさと長さは大体刹那の使っている黒い大剣ほど。持ち手の部分はレナが削ってくれたのか、細くなっていてちょうど握りやすくなっていた。こんなレナの気配りが、刹那は結構好きだった。

レナも自分の太刀くらいに削った木を手に持ち、構えた。

「そろそろ刹那にも『技』を覚えてもらわないとね」

「技？」

「うん。私の『抜刀技』も技。一瞬の隙を突いて出すことで相手にとっては不意打ちになり、戦闘を一瞬で終わらすことができる、技。それは刹那に覚えてもらおうと思って」

「それじゃレナの『抜刀技』を覚えてくれるのか？」

刹那は今まで、レナの抜刀技を1つしか見たことがない。それが『抜刀技壱ノ型・時雨』だ。

激しい雨のような剣さばきで相手を強制的に防御体制にし、そこから生れる防御の穴を突く技。激しい雨をかわせる人間がこの世にいるか？いない。その雨を防ぐには傘で自分の頭上を覆うしかない。つまりはそういうこと。かわすことのできない剣さばきは敵を強制的に防御させ、その場から動けなくする。そういう技だ。

「だめ、抜刀技は私の技だもん。刹那には教えてあげない」

「な、なんだそれ……」

まるで子供だ。お菓子の袋を持っていて、一個ちょうだい！と言われても、自分で買えばの一点張りでお菓子を独占する子供と同じレベルだ。

刹那は呆れながら、レナにたずねた。

「それじゃ俺の技ってどうなるんだ？」

「刹那、思い出してみて。レメンの世界のこと」

刹那は、少しだけ顔に影を落とした。無理もない、あの世界は刹那にとつて………酷すぎた。

死ねないレメン、それを殺したのが刹那。永遠の苦しみから救ったのも刹那。刹那自身後悔はしていないが、どうも胸が痛んだ。

「私もレオも、レメンにやられたときのこと。刹那がレメンを打ち倒したところを私はちゃんと覚えてるよ」

レメンが一瞬の間を見せたあのとき、刹那の大剣は黒く光り、レメンの体はその黒い大剣から放たれた衝撃波に吹っ飛ばされた。もしかして、そのときのことだろうか。

レナは刹那の表情を読み取ると、笑って言った。

「たぶん刹那の考えてるときのこと。あれはもう立派な技。だからレメンとの戦闘は一瞬で終わったでしょ？」

未熟な腕だった。レナから訓練を受けていないまだ未熟な腕。絶対勝てるはずのなかった敵。それなのに、レメンの一瞬の間で全てが終わった。その間に刹那が技を叩き込んだおかげで勝てた。技とはそれほど重いもの。一瞬で全てが決まってしまう、それはまさに一枚しかない切り札。

本来、技はRPGのゲームのようにポンポン出してはいけない。ここぞという時に出さなければ意味がない。ターン制で、相手がかわさない限り当たるなどという戦いなど、この世にはないのだから。相手が準備万端なときに技など出してみる、射程から離れたところから技など出してみる、絶対に防御される、絶対に回避される。ポンポンと何の策もなく出してみる、それこそ見切られて絶対に当た

らなくなる。

レナは技の重みを知っていた。だから抜技なんて滅多に使わずに、基本の斬りと突きしか出さなかった。

「今まで刹那に基本しか教えなかったのも、技が重いから。だけど、技を刹那が会得できれば戦いの視野はずっと広がる。これからの戦いには絶対必要になってくる」

「……わかった、技を会得しても滅多に使わないようにする」

「うん。それじゃ始めるよ。まずは体を温めないかね」

刹那とレナはそのまま木を構え、双方突撃していった。激しいように見えても、本人らはアップのつもりだ。これが普通なのだ。

ガツツ、ガツツ、木のぶつかり合う音が響き渡る。その音は2連でつながっていたときもあれば、1回鳴ったきりしばらく音がしなるときも、いつまで音が続くのだろうと思わせるくらいに長いときもあった。音を聞くだけでわかる。2人がどれだけ激しい『アップ』をしているのが手に取るようにわかる。

刹那がレナが飛び退いたのを目で確認した瞬間、刹那は地面を蹴りレナに急接近する。その勢いを使って手の大剣を横に薙ぎ払うように振る。

刹那の丸太はブオン！と空振りし、刹那は接近をやめた。むやみに接近すれば、レナからの反撃を食らいかねない。その判断からだった。

再び距離をとって仕切り直しとなり、刹那とレナは丸太を構えて対峙する。目を見て相手の動きを読み、自分がどう動いてどう攻撃するかを頭の中で想定する。

じり、じり、と少しずつ距離を縮めていく。大きく、一気に距離を縮める行為は攻撃すると相手に教えるようなもの、故に少しずつ接

近し間合いに入ったところで初めて突撃する。
もう少し……あと一步……入ったッ!!

「うおおおおお!!」

刹那はレナに特攻していった。肉体強化は施していないためそれほど速くはないが、接近し攻撃するには十分すぎるほどの距離だ。

レナは構えたままの格好で動こうとしない。おそらく自分の攻撃を待っているのだろう。絶好のチャンスだ。

このチャンスにやることは決めていた。最初にフェイントをかけて、その次に本命の一撃をお見舞いする。

接近したときの勢いを使い、両手に持っていた丸太を片手に持ち替え、思い切り突く。この至近距离だ、かわせるはずがない。刹那の思った通り、レナは回避をせず、突きを防御しようと攻撃に合わせ丸太を横に構えた。

ひっかかった!!

レナが防御に費やす時間を刹那は見過ごさない。そこがレナに出来る唯一の隙だ、逃してなるものか。

刹那は片手で持っていた丸太を再び両手に持ち替え、薙ぎ払うように丸太を横に振った。横の薙ぎ払いは非常に避けにくいものだ、だから横の薙ぎ払いは後ろに飛び退いてかわすか、防御するかの2つが一般的である。

レナも例外ではない。この距離で、しかもこの速さで避けることは出来るわけがないし、防御しようとしてもガードが間に合わない。だから刹那はフェイントを使ったのだ、レナの防御が崩れるこの一瞬のために。

決まった、刹那はそれを疑わなかった。絶対に命中した、と本気で思った。

「はっ！！！！」

「いでっ！！！」

レナは丸太を持っていた刹那の手を蹴り、丸太を弾き飛ばす。

足からの攻撃とは完全な盲点であった。横薙ぎ払いの形をとっていた刹那の攻撃は崩されてしまった。武器は手から離れ、レナの間合いに確実に入っている。これはもう致命的だった。先ほど刹那

那の攻撃である横薙ぎ払いをやられたら絶対に命中する。

レナの手に蹴りをいれ、刹那と同じように武器を弾き飛ばすという方法も、もちろんないわけではない。だが、刹那はそこまで頭が回らなかった。やっちなまったなあ、ということしか頭の中になかった。だから、そこでレナが攻撃しても防げないのも当然だった。ポカツと間の抜けた音がし、刹那は頭を抑えてうずくまる。

「いででで………」

「あそこでじつとしてたら絶対負ちゃう。だからあの場面ではどんな小さくてもいいから抵抗すること」

「わかったよ………いでで………」

ううう、と頭を抑えて悶絶する刹那を見て、レナは自然に笑いがこみ上げてきて、くすり、と笑った。理由はよくわからない、別に刹那のその様が面白かったとかそういうのではない。ただ何となく………そう、何となくだ。

刹那は顔を上げ、レナが自分を見て笑っているのがわかると、口をへんの字にして文句を言った。

「何だよ、笑うことないじゃんか」

「ごめんごめん」

全然反省していないが、一応謝ったのでまあいいか、と刹那は立ち上がった。

「さて、体が温まったところで……」

「うん、それじゃやろうか。じゃあ刹那、結晶を作って」

レナに言われると刹那は丸太を捨て、意識を集中した。

もう結晶の作り方には慣れた。自分の魔力を黒い霧と置き換えて頭の中でイメージしてから結晶を作るという手間もなくなった。刹那にとって結晶を作るということは、もはや手を動かすことと同等のことになってきていた。体の一部を動かすことがごく自然なことであるように、呼吸をするのが当たり前であるように、結晶を作るということも『当たり前』なのだ。

刹那の手に黒い大剣が握られる。同時に体が軽くなり、肉体強化が施される。

「準備できたぞ」

「うん、それじゃ始めるよ」

第49話 殺戮人形編5

「違う、あの時の技じゃない。黒い光が出てないもん……」

「出てないって言われてもなあ……」

何度大剣を振ってみても、いくらレナの言ったことを忠実にこなしても、あのときの黒い光は出てこなかった。試行錯誤しようにも、自分が今できることを全てやったため考えが浮かんでこない。困ったなあと、頭を掻きながら刹那はため息をついた。

もうじきみんなが目を覚ます。そうなればこの世界の罫を外す話になってしまい、技の習得どころではなくなってしまう。

何とか今のうちに技を習得し、この世界の罫と戦うときに出せるようになっていなければならない。そうすれば、戦闘能力が低い自分だって何とか役に立つことができるかもしれない、そういう考えからの訓練だった。

でも、習得できないものは仕方がない。前にリリアから聞いた話によると、結晶の潜在能力は長い間の訓練によって会得できるものらしい。おそらく、レナの言っている黒い光は結晶の潜在能力

を指しているのだろう。それならば、レメンと戦ったあの時に何かの拍子で偶然発動してしまったのだと説明がつく。偶然出したものだから、どうやって出したのか理解できないのも納得がいく。

「やっぱり、まだ技を習得する時じゃないんじゃないか？」

「そうかな……刹那ならいけると思っただけど……」

思いもよらないレナの評価に刹那は内心嬉しくなったが、表情には

出さずそのまま続けた。

「買いかぶりすぎだよ。あせらない、ってのがレナの口癖だったろ？」

「まあ、そうだけどね」

「それなら決まりだ。その時が来るまで、レナから教わった基本で何とかしていくよ」

レナは何だか納得のいかない顔をしていたが、刹那の言ったことがもっともだったのでしぶしぶ了承した。

刹那が結晶である大剣を体の中へ魔力として戻すと同時に、ぐうという音が鳴った。腹の虫だった。そういえば、もうじきみんなが目を覚ます頃だ。朝食が出来上がるまでまだ時間がありそうだった。

「腹減ったなあ……」

「そうだね、それじゃ戻ろっか」

訓練を終えた2人は、揃って小屋に入ろうとする。それと同
時だった、中から爆発音が聞こえてきたのは。

ポオオオオオオン！！！！！！

敵の襲撃かと思った。この爆発音、ただ事ではない。きっとこの世界の罠に襲撃されたに違いない、そう思った。

レナは何も言わず、小屋の戸を蹴り破り突撃していった。刹那もあとを追いつき、先ほどもしまったばかりの大剣を再び出して手に握り締めた。

小屋自体はそれほど大きくはない。せいぜい普通住宅の2階がない感じの広さだ。だから、先ほどの爆発音がどこからしたのか、簡単に予想がついた。

レナは神抜刀の鍔に親指を掛け、いつでも太刀を抜けるよう準備をしていた。ここで戦うという気は十分だが、不安要素ももちろんあった。屋内、つまり狭いところで戦うということだ。

剣や刀、太刀等は振るってこそ効力を発揮する代物だ。もちろん突き刺すこともできるだろうが、それでもやはり斬るという攻撃には到底威力は及ばない。日本刀はなぜ切れ味がいいのか？相手に突き刺すためではない、斬るためだ。

斬る事が太刀、剣の真価。だが、狭いところではどうしても振るスペースが限られてしまう。それはつまり、自由自在に振ることができず、自分達が不利な状況になってしまうということだ。それだけで心配だった。

ポオオオオオオン！！！！！！

再び聞こえる爆発音。聞こえた場所は………キッチンのほう

だ。

「へえ、キッチン？も、もしかしてツ！！！！」

嫌な汗が出てきた。心なしか、血の気が引いていくような感じもする。恐る恐る刹那のほうを向いてみる。 顔面蒼白、まさにその言葉がふさわしかった。

そう、レナと刹那の考えていることは同じだった。少し前、オリアスから貰った家で同じような音を聞いたような気はしていた。そして、その音源はキッチンから。この2つからの状況から想像できることはただ1つ。

「「「リアあああ！！ストップストップうううううう！！！！」」

刹那は大剣を瞬時に体内へ戻し、とレナは神抜刀の鐔に掛けていた親指を外して同時に叫び、そして同時にキッチンへと飛び込んでいった。

キッチンの中は……大変なことになっていた。爆発のせいでキッチンの壁には黒いすすのようなものがこびりつき、床には得体の知れない緑色やら紫色やらのゲル状の液体が広がっていた。

ある意味、下手なお化け屋敷よりずっと恐かった。

その中には、1つの笑顔。こんな惨状にはとても似合わないようなひまわりのような笑顔をしているリアが立っていた。リアのつけているピンクのエプロンはヘドロのような色が付け足されており、せっかくのうさぎさんの顔が台無しになっていた。 うさぎ？ あれって熊じゃないの？

「あ、刹那さんにレナさん。今ご飯作ってるから待っててね」

ちよっと待て、今なんて言った？朝食？毒物の間違いじゃないのか？

ちなみに朝食後……

「朝食がまともで本当によかった……」

「レオの言う通りだ。飯がこんなにうまいのは初めてだぜ……」

「ですね。おいしく感じますよ、本当に」

「でも、魚焼いただけだよな？」

「刹那、そこは触れないでおいてあげないと……」

「みんなごめんねえ……私がリアちゃんに頼んだせいでえ……」

「姉さん、あたしが起きれなかったせいでもあるんだから、そう謝らないでよ」

「ちょっと……!!!!何それ……!!!!全面的に私が悪いってことじゃないの……!!!!」

こんな感じになったことを報告しておこう。

第50話 殺戮人形編6

昼食が終わったあと、話を切り出したのはレオだった。

「さて、これからどうするか、だな。まさか昨日みたいにのんびり
つてわけでもないだろう」

「ええ、今日で決着をつけようと思います」

昨日のことで、敵がどういった姿をしているのか、また何体なのか
がはっきりとわかった。姿は人形、雷牙の話だとそれぞれ武器を持
っているらしく、数は4体。壊しても襲ってくる可能性があるため、
粉々に粉砕しなければならない。

そして、こちらの人数は8人。戦闘員は5人、回復員は4人。数が
合わないのは、レナは戦いも回復もできる優秀な人材だからだ。

敵が4人でこちらは8人、つまり敵一体に2人で戦うことになる。
そう、こちらは現在有利な状況なのだ。この状態のうちに畳み掛け
なければならぬ。

「2人組で戦います。メンバーを決めましょう」

組はできるだけ戦い方を熟知している、戦闘員と回復員がいい。

例えの話だが、雷牙とレオが組になったとしよう。お互い会ったば
かりでお互いの戦い方の深さを知り得ていないし、何よりも一緒に
戦ったことがないのでやりにくい。

それに、万が一戦いで負傷したとして、2人は回復、治療する術を
持ち合わせてはいない。致命傷を回復するのが遅れてしまえば取り
返しのつかないことになってしまう。

「ああ。なら俺たちのほうのメンバーは、刹那とレナ、俺とリリアだ。3人とも問題ないな？」

刹那とレナはいつも一緒に訓練していて互いの攻撃パターンなどを理解しているはず。それに、刹那の戦闘経験不足もレナの実力が補ってくれる。この組は問題ない。

レオとリリアも、小さい頃一緒に父親と訓練していたからこちらのほうも大丈夫だ。問題ない。3人とも頷いてレオの問いに答えた。

「僕達のほうのメンバーは、兄いと風花さん、僕と風蘭さんです。問題ないですよね？」

「ああ問題ねえぜ」

「うん……風花がちゃんと治療の役に立つかが心配い」

「な！？ちよつと姉さん！！あたしだってちゃんとやれるよ！！」

「ホントかなあ〜？」

「本当だつてば！！！！」

一同は風花と風蘭のやり取りを見て笑い、すぐに表情を引き締めた。不意に、レオがテーブルに弾丸を4つ置いた。薬莢の部分が赤くなっている。おそらく火属性の弾丸だろう。

「1組につき1発持っていけ。こっちが分かれてても、敵が分かれてるとは限らない。1組のところに集中攻撃される可能性がある。そつだった場合、これを離れてる木にでもぶつける。大爆発が起き

て一発で居場所がわかる」

こちらが2対1で戦う気でも、敵もそうであるとは限らない。運が悪ければ3対2になる可能性もあるし、敵全員を2人で戦わなければならぬことになる。

それを避けるため、レオはそれぞれの組に弾丸を渡したのだ。万が一の場合は弾丸を爆発させれば居場所がわかる。そうなればほぼ戦いは2対1になる。つまり、敵が分かれて戦おうが集まって戦おうが、自分達の有利な状況は変わらないのだ。

「それじゃ行きましょう」

雷光の言葉で皆は席を立つて小屋を出ようとしたが、不意に雷光が雷牙を呼び止めた。

「あ、ちょっと兄い。これを」

「お、わりいわりい。忘れてたぜ」

雷光が投げて雷牙に渡したものは、金色に輝く鉤爪だった。手の甲から手首までを保護する役割を持つ籠手に、先が折れ曲がっていて切り裂きやすく仕上げてある爪。

仕上がり具合や見た目は普通の鉤爪。いや、違う。ただの鉤爪はこんな雰囲気などない。なんと言えばいいのか、神々しい・・・とでも言えばいいのか？何とも言えない、言葉では表現できない威圧感がある。

「雷牙、それって？」

「ああ、これか？昔じつちやから貰ったヤツだよ。何だったかな・・・

「……えつと……」

「『神裂爪・龍』です。爪は立ちはだかる敵を容赦なく切り裂き、籠手は爪では葬れない敵を砕く攻撃のみに特化した武器、そして数ある『神器』の中でもっとも射程が短いとされているものです」

神器、その単語を聞いて納得した。やはりこの鉤爪、神裂爪から感じた神々しいような、そんな雰囲気は気のせいではなかったのだ。

「ああ、そうだったそうだった！！んでお前のやつが……」

「『神裂爪・虎』です。まあ兄いのやつと同じですよ」

雷牙の神裂爪の籠手は濃い緑色だが、雷光の籠手は濃い黄色だ。色から容易に龍と虎のことが想像できる。

敵に臆することなく、敵軍に突っ込んでいく龍。相手の出方や動きを、ぎりぎりまで見てから反撃する虎。まさしく雷兄弟だ。

雷牙と雷光にびったりだということを理解して雷兄弟の祖父は2人に神器を渡したのだろうか？ たぶんわかっていて渡したのだろう。

「まあ、つけるのは後でいいだろ。めんどくせーし」

「駄目ですよ兄い。小屋から出た瞬間に出くわしたらどうするんですか？」

「出ねえって。出ても刹那たちに任せりゃいいだろ」

「はぁ……どうなっても知りませんよ」

ため息をついて、雷光は自分の持っている神裂爪を左手にはめ、籠手のほうについている紐を口で引っ張り固定する。

神裂爪は、よく見たら『龍』が右手用で『虎』が左手用だ。対となっている2つが1つになることで両手用になり、1人でも戦闘力が上がるようになっていたのだろう。

そのことから、神裂爪は1人用の武器なのだとわかる。その神器を2人で分けたから、1つずつという形になってしまったのだろう。

雷光が紐を結び終わると、一同は今度こそ小屋の外に出た。天気は刹那とレナが訓練していたときと変わらず曇り。しかもだんだんと雲が厚くなってきたのか、さっきよりも薄暗いような感じがした。敵を探索しているときに降ってきたら厄介だ。なるべく早く決着をつけたい。

「敵は見つけ次第撃破、2体以上現れたときはレオさんから渡された弾を使って仲間を呼ぶこと。それでは行きましょう」

一同はさっき決めたメンバーで散り散りになって探索し始めた。

刹那とレナは北のほうへ、レオとリアは東のほうへ、雷牙と風花は南のほうへ、雷光と風蘭は西のほうへ、それぞれ移動し始めた。

第51話 殺戮人形編7

刹那たちの向かった北のほうは草原だった。曇りなのが残念だが、晴れていればとても美しい場所なのだろう。爽やかな風も吹いているし、小鳥も綺麗な声で囀っている。

「いいところだな、ここ」

「そうだね。でも刹那、敵を探してることを忘れないで。油断したら駄目だよ」

「わかったよ」

レナの言うことももつともだ。美しい景色に見とれている場合じゃない。今自分達は敵を探しているのだ。ぼーっとして見逃した、なんてことあってはならない。

気を引き締め、改めて敵の探知に専念する。もしかしたら今の瞬間だってこちらを狙っているのかもしれない。そうだ、油断は禁物だ。不意を突かれて襲撃される可能性だって否定できない。

刹那が探索に集中したのを認めると、レナはそのまま草原の中へと進んでいった。刹那もそのあとに続く。

最初のほうは草も足もとくらいまでしか伸びていなかったが、奥に進んでいくにつれてだんだんと草の身長が高くなってきた。今はもうすでに腰のところまで伸びている。このまま進んでいけば、自分達は草によってすっぽりと隠れてしまうのだろうか？

「刹那、ここからは特に注意して。草に敵が隠れてるかもしれない」

「わかった。気をつける」

レナに注意を促され、改め2人は歩を進める。

敵は人形だと雷牙は言っていた。人形はほとんどが人間の身長よりも低いものだ。今この時点でも、十分隠れることができる。

何が言いたいのか？そう、敵は隠れることができる。だから、

「!？ つは!!」

このように隙を突いて奇襲だつてできる。

今レナを襲った攻撃は刃物のようだった。弾き返したときに金属音がしたし、何よりもいきなりの奇襲で少しダメージを食らったせいで足から出血している。傷口はもちろん刃物による切り傷。だが、とっさに弾いたのが幸いしたのか掠り傷程度で済んだ。まともに食らっていたら戦闘不能だけは避けられないところだ。

「レナ!!」

「大丈夫、掠っただけ。それよりも……」

皆まで言わなくともわかった。人のことよりも自分のことを心配しろと言っているのだ。戦闘に長けているレナでさえ弾くのがやっとだった。それがもしも戦闘に不慣れな刹那だったら、足の一本は持つていかれかねない。

「……」

大剣を形成し、息を殺して相手の出方を待つ。普通ならば草むらの中を移動しているのだからがさがさ、と音を立てるはずなのだが、それが無い。だから、相手がいつ、どうやって攻めてくるのかわからない。相手の攻撃に一瞬で反応して、一瞬で仕留めるしかない。

「・・・・・・・・」

いつ攻撃をしてくるのかわからないのが、これほどもどかしいものとは思わなかった。決して解いてはならない緊張感、早く決着をつけなければならぬという焦燥感、いつ襲ってくるかわからない恐怖感。それらが一気に刹那の心を襲ってくる。

「!?!?!?!」

再びレナが声をあげる。だが、今度は弾き返すことができなかった。神抜刀に凶器が当たらなかったのだ。

ひゅっ、という音が風を切り、凶器がレナの足を切り裂いた。足をやられたせいでバランスを崩し、レナはたまらず転倒する。

「レナ!?!」

「・・・・・・・・」

肉体強化のおかげであまり痛みは感じないが、やられたところが致命的なところだった。それは踵から膝にかけて裏側に存在し、歩行や走行などに使われる重要な腱。それがなければ歩行はおろか立つことすらできない。その腱の名は、『アキレス腱』。レナはそこを損傷していた。

レナはすぐさま治療術を傷に施すが、もはや戦闘などできないことは自分でもわかっていた。自分の治療術は確かにすぐに傷をくっつけることができる。だが、それはあくまで応急処置でしかない。傷を瞬時に完治させることなど、レナにはできないのだ。つまり、アキレス腱を回復したとしても戦うことはできない。足を動かそうとしても、神経系のほうまで再生できていないから動かすことができ

ない。

表情は冷静を装っているものの、レナは内心あせっていた。自分は戦闘の役に立てない。つまり、今襲ってきている敵を、刹那に任せることになる。

確かに、刹那は日々自分との訓練で以前とは見違えるようにはなつた。だが、それはあくまで訓練の中での話。実践と訓練とは勝手が違う。

しかも、状況が明らかに不利だ。この背丈の高い草のせいで敵の動きが認知できない。つまりは、相手に好き勝手やらせることになる。何もできないでみすみす戮られるのが目に見えている。今から刹那は、そんな不利な状況で戦わなければいけないのだ。

助けを呼ぼうかと思つたが、それは無理だとすぐにわかつた。レオの弾丸は衝撃を与えて初めて爆発する。だから、レオは弾丸を渡す際に近くの木にぶつける、と言つたのだ。

だが、この草原の周りには弾丸をぶつけられるようなものがない。地面に叩き付けようにも、自爆するだけで意味がない。遠くに放り投げたとしても、まともな衝撃が加わらないで不発するのも目に見えている。

結局、刹那が1人で戦うしかない。それは刹那もわかつているようだった。負傷したレナを守ろうと、必死で戦おうとしている。

……仕方ない。こんなこと言いたくはなかつたが、言うしかない。

「……刹那、今から私の言うことをよく聞いて」

「？」

「いい？私はもう戦えない。でも、刹那だつて戦えない」

「どづいことだ？」

「こんな視界の悪いところで戦っても、刹那には勝ち目がない。だから、逃げて」

「!？」

「敵は今も私達を狙ってるはず。こんなことをしている間にも、私達は相手に攻撃のチャンスを与えてるの」

「.....」

「だから逃げて。このままだと、2人とも死んじゃう」

良い判断だ。このままだと相手に好き勝手やらせてしまうことになる。そうすれば必然的に2人は撃破されてしまうことになる。

だが、ここで刹那が逃げれば撃破されるのは1人。つまり、レナは駄目でも刹那だけは生き残れる。2人死ぬよりも、1人だ。そつちのほうがいいに決まってる。

だが、その案を刹那が素直に受け入れるか？

「いやだ。ここで逃げたらレナがやられるじゃないか。俺が戦う、俺がレナを守るよ」

「.....やっぱり、言うと思った」

自分が助かるための犠牲など、刹那が受け入れるはずがない。刹那の性格から容易に想像できたことだったが、刹那の口から出た言葉で想像から確信に変わった。ただ、最後の守る、という言葉だけは完全に不意打ちだった。おかげで少し間が空いてしまった。刹那が逃げない以上、どの道生き残るには刹那が戦って勝つしかない

い。だが先ほど言ったとおり、見えない敵を相手に戦うということ
は不利以外の何物でもない。加えては刹那の経験不足。この2つが、
勝利条件をより難易度の高いものにする。

だが、その2つのうち1つでも崩れれば勝利する確立はぐっと高く
なる。刹那の経験不足はどうしようもない。いまさら何をしようと
補うことなどできない。

となればもう1つのほう。相手を認知できるようにすればいい。だ
が、こんな広くて隠れやすい草原にいる敵をどうやって見つけ出す？
簡単だ。草が邪魔をしているんだ。たら草を除去すればいい。だが、
どうやって？

「刹那、ちょっとこっちに来て」

「ん？ああ、わかった」

レナは何とか片足だけで立ち上がる。歩行は無理でも、立つことく
らいだったら片足でもできる。

抜き身の神抜刀を地面に突き刺すと、レナは目を瞑り深呼吸を繰り返す。
深く吸って、深く吐く。精神統一だ。新鮮な空気を体

に取り込み、酸素の抜けた腐った空気を外に出すレナの集中法。

しかし、妙だとは思わないだろうか？なぜこんなときに集中をする
必要があるのか？集中したところで、レナは戦いに参加することは
できない。ならばなぜ？

レメンの世界で、レナがレメンの攻撃を炎の壁で防御したのを覚えて
いるだろうか？命中すればただでは済まないビームのような攻撃
を、いとも簡単に防御してみせたあのときを。そう、レナは神抜刀
に自らの魔力を込めることで炎を自由自在に操ることが可能なのだ。
便利で強力そんな行為にも、もちろんリスクはある。大規模な炎で
あればあるほど、込める魔力は多くなければいけない。つまり、こ
の草原を焼き払うために必要な炎を出すには、時間がかかってしま

うのだ。

そのため、レナは今集中して神抜刀に魔力を注いでいる。一秒でも早く必要な分の魔力が神抜刀に満ちるようにと。

深呼吸をして精神統一したのもこのためだ。普通の状態からと、集中しながら魔力を込めるのでは全然違う。集中したほうが、

神抜刀に魔力が満ちるまでの時間が短くなるのだ。

・・・次第に魔力が満ちてくるのがわかる。もうすぐ、もうすぐでいける。

レナのほうは順調にことを運びつつある。だが、敵も大人しく待つてくれるわけがなかった。今刹那たちは身動きが取れない状態にある。今レナの集中が途切れてしまえばあつという間にためていた魔力は神抜刀から抜け出し、再びやり直さなければならなくなるし、刹那は集中状態のレナを守らなくてはならない。

刹那たちにとっては危機の極み、敵にとっては絶好のチャンス。この絶好のチャンスを、敵が待つてくれるか？いや待たない。こんな大きい隙など、他にあるものか！！今攻めないでいつ攻めてくる！！不意に、ひゅつと風を切る音がした。間違いない、レナを襲った攻撃だ。刹那は音と勘を頼りに大剣を振り上げる！！

「うおおおおおおお！！！」

振り上げた際、その勢いのあまりぶおおおおッ！！という音がした。刹那の大剣は周りの草を切り、起こした風で切れ切れになった草を空に舞い上げる！！そのときだった。

ひ・・・！！？

大剣から、草のものではない手ごたえが伝わってきた。それはカンツという、軽い金属のような感覚だった。敵による攻撃を切り払うことに成功したのだ。

刹那は大剣を上には振っている。そしてその大剣に当たったとなれば、必然的に空中に打ち上げられることになる。つまり、今空中に上がっている物体は、自分達を狙ってきた凶器だ！！

刹那は顔を上げ、虚空に待っている凶器の正体を見る。それは、

「・・・・・・矢？」

刹那の言葉に疑問符がついたのは、空に舞っている矢があまりにも短かったからだ。弓道の矢でも、あれの倍はある。とにかく短いのだ。

しかし、その疑問は少し考えてみただけですぐに解決された。今こちらを狙ってきている敵が雷牙の言っていた人形のうちの一体なのだったら、このサイズは納得できる。

空中の矢が重力に任せて地面に落下する。くるくると何回も回転しながら地面にカラッと落ちた瞬間、刹那の後ろのほうから熱気が感じられた。

「レナ?!」

慌てて振り向く。そこには不敵な笑みを浮かべているレナが、炎を纏っているのが見えた。炎はレナを中心に渦を巻いているような感じになっていて、それがたまたまなく幻想的だった。

「刹那・・・・・・いくよ!!!」

レナがそう言うのと渦を巻いていた炎が一筋となり、まるで1匹の龍の如く草原を駆け巡る!!!炎を纏っている龍はまさに名の通り、

炎龍!!!

華麗に草原を舞い、辺り一面はすぐ炎の海になった。波のように小さな炎が勢いを増し、高潮のように炎は草原を飲み込む!!!

だが、刹那のレナの地点だけは炎が襲ってこない。炎の熱気は肌に触れても、炎自体が触れることは決してない。当然だ。自分の主を焼け焦がすなど、この炎龍はするわけがないのだから！！

炎の海を翔る炎龍は、まるで生きているかのようにだった。回り、うねり、そして焼き尽くす！！

その炎龍が直に通った場所は焼け爛れた大地しか残らなかった。大地に生えていた草は燃えカスすら残らない！！炎龍は地獄の炎で全てを燃やし、消し去る！！

「・・・・・・・・・・」

熱気と炎は次第に落ち着いてきたものの、それでも刹那は熱かった。額からは汗がにじみ出ており、服は汗ばんでいる。これだけの炎の熱に当てられれば当然だ。

炎はもう焼くところを失ったせいかわ、次第に火力が衰えていき、先ほど果敢に辺りを燃やし尽くしていた炎龍もいつの間にか消え失せていた。

辺りは熱のせいで水分を奪われたパサパサの土しか残っておらず、自分達を覆い隠していた草原も全てとまではいかないが、十分戦えるくらいには燃えてなくなっていた。

視界を遮っていた草がなくなったことにより、今まで自分達を攻撃してきた敵の正体がわかる。やはり、人形だった。手には人形の大きさにふさわしいサイズの大鋏が握られており、早くかかってこい、と言わんばかりにその鋏を閉じたり開いたりしている。

着ている服は青色。顔はいたって無表情で、その表情で鋏を動かしているのがとても不気味だった。

「・・・・・・・・・・」

いつでもいける、戦える！！

刹那は大剣を構えると、そのまま突撃していった。もちろん
肩に担いでの一撃必殺を考えているわけではない。相手の出方を伺
いつつ、自分が攻撃できるチャンスを見極めるやり方だ!!!

「うおおおおおおお!!!」

第52話 殺戮人形編 8

レオとリリアの向かった東の方は森だった。背の高い木々たちが日光を遮り、昼間なのに薄暗い気味の悪い環境を作り上げていた。

その森に響き渡る銃声。そう、レオとリリアの組はすでに敵と遭遇していたのだ。敵はもちろん人形。黒い服を着ており、肩には人形とは不釣り合いな大斧が担がれている。

大斧という武器は斬る、というよりも切る、ということのほうに使われることが多い。薪を割るときや、壁を破壊するなど、人ではないものを切る、あるいは壊すときに使われるのがほとんどだ。

だが、いくら人を傷つけるための道具じゃないと言っても、攻撃的かつ凶悪な武器なことに変わりはない。一撃必殺という項目においては、大剣にも劣らないだろう。そんな武器で体を攻撃されたのならば、終わりだ。

加えてはこの人形の速さだ。大斧という重いものを担いでいるのだからスピードが落ちているはずなのに、この人形はのろくなるどころかさつきから素早くなってきた。そのせいで弾丸がさつきからかすりはすれども命中までは至らない。

障害物も何もない広い見渡しのいいところだったら、この程度の速さは全く問題にはならない。いくら素早いといっても、この世界に初めて来たときに見せ付けられた雷牙と雷光の速さにはおよばないのだ。

だが、ここには障害物がある。察しているように、ここら一带に存在する背の高い木だ。数多い障害物がレオの射撃を妨げているのだ。だからいつまでたっても、レオの弾丸は命中しない。そこら辺をうるちよろしている人形に当たらない。

ちっと舌打ちをして、2度目の弾丸装填を行う。レオの手が光り、かちやかちやという音がして弾丸が装填された。

「今度は木から出てきたところを狙ってみるか」

そう考えたレオは人形の隠れた木のほうへ銃身を向け、いつでも弾丸を放てるように引き金に人差し指をかけた。

と、そのときだった。人形が隠れている木が軋み、こちらに倒れてくる――！

「!? リリアッ!!!」

「きゃッ!!!」

自分の後ろにいたリリアを抱きかかえ、横にダイブする。

その瞬間、木はレオとリリアのいた場所に倒れてき、凄まじい音を立てたあと沈黙した。

さっきからもう3回目だ。木に隠れては、こちらのほうへその木を切り倒してくる。あんな小さい人形でも、十分この大木を倒すことは可能なのだ。

このままでは長期戦になる。自分の攻撃となる弾丸は命中しないし、相手は大木を倒しての一方的な攻撃をしてくるが、回避はできる。

どっちの攻撃も当たらない硬直状態に陥るのは明白だ。

相手は飛ぶように木々の間を駆け巡っている。弾丸が命中しないのは、レオが人形を認知し、発砲するまでの間で再び木の後ろに隠れてしまうからだ。木々の間はおよそ2メートルちよつと。確かに、これは当てづらいし命中しにくい。

「すうー………はあー………」

深呼吸をして気持ちを落ち着ける。

あせっては駄目だ。冷静になれ。集中するんだ。人形がいつ出てくるか、どこから出てくるか、それだけわかればいいんだ。あせるな、

集中しろ。

そう自分に言い聞かせた瞬間、目の前の景色が『歪んだ』。まるでプラスチックが高熱にでも当てられたかのように、ぐにゃり、と。

+++++

ドオオオオオオオオン！！

耳を劈くような轟音が雷牙の耳に入り、その音に周りの木にとまっていた鳥たちが驚き、羽を広げて一斉に飛び立っていった。

こんな轟音、自然には出ない。人が意図的にやる以外、出るわけがない。となれば、一番怪しいのは自分達。おそらく、どこかの組が敵2体と鉢合わせのだろう。と、なれば、敵と戦っていない自分達はその現場に行かなくてはならない。

「風花、行くぜ！！」

「うん、わかったあ」

雷牙は風花に呼びかけると、肉体強化を自らに施した。ふ、と体が軽くなり、筋肉も鉄のように硬くなる。もちろん、このまま走ればすぐに現場に到着するだろう。

だが、忘れてはならない。雷牙の隣にいる風花は肉体強化などできないのだ。雷牙との速さはあまりにも違いすぎる。置いていかれるのが目に見えている。

じゃあどうすればよいのか？簡単だ。

「よっつと」

「お、高いねえ」

雷牙が風花を運んでやれば良いのだ。そうすれば、身体能力の低い風花でも雷牙と同じ速度で移動ができる。

だが、肝心な運び方はどうすればよいのだろうか？抱っこはまずいし、お姫様抱っこってやつも雷牙には少々抵抗があった。とりあえず、一番無難なおんぶという形をとった。

「ほらほらあ、早く行こお」

「わかったわかった」

少し時間を食ってしまった。急がなければ……。

雷牙は自分の体を最大限に使い、全速力で爆音のしたほうへ向かった。目の前にある大木は乗り越え、邪魔な岩などは拳で砕き、最短距離の直線ルートで走り続けた。もちろん他にも邪魔なものはあるが、いずれも飛び越えるか壊すかのどちらかだった。

そして、3本目の大木を飛び越えたあと、雷牙と風花は爆発の現場へとたどり着いた。小川が流れていて、周りにはあまり木のないひっそりとしたところだった。その近くには、焦げてボロボロになった木があり、爆発がここであったということを知っていた。

レオの弾丸を爆発させた人物を探そうと、雷牙は近くの人気を探り出した。しばらく、身動き一つせずに音と気配を感じ取ろうとする。長年やってきた狩りの成果だ、あっけなくその人物は見つかった。

「雷光！！」

「兄い！！」

戦闘に夢中だったせいか、爆発させた主の雷光は全く雷牙と風花の存在に気がつかなかった。当然だ、2体の敵を同時に相手しているのだ。2対の人形はそれぞれ手に大槌、小刀を持っている。

それに加えて風蘭の護衛だ。茂みに隠しておくわけにはいかない、なぜなら戦っている最中に人形の片方にやられるかもしれないからだ。よって、今雷光は風蘭を背負ったまま戦闘している。理由はさっきの雷牙と同じだ、身体能力の低い低い風蘭でも同じくらいの速さで移動できるからだ。

しかし、いつまでこのままというわけにはいかない。敵は2体、しかもこちらは風蘭を背負っているためとても戦いにくい状態だ。長期戦になれば、間違いなく雷光側が不利になる。

「雷光！！風蘭をよこせ！！俺が連れてく！！」

風花と風蘭がいればどうしても戦闘に集中ができなくなる。守らなければならないからだ。

なら、風花と風蘭を安全地帯に置いてくればどうか？・・・少し危険だが、すぐこの人形2体を撃破してしまえば問題ない。大丈夫、のはずだ。

「兄い！！任せましたよ！！」

「え！？きゃああああああああああ！！！！」

雷光はそういうと、背中の風蘭を思いつきり雷牙のほうへと放り投げた。まるで人間大砲のように飛んでいった風蘭は、雷牙に勢いを殺されながら上手く受け止められた。

同時に、風蘭の口から怒声が飛び出る。

「ちよつとおおおおお！！！！弱い女の子放り投げてんのよッ！

「!!怪我したらどうするのよッ!!!!!!!!」

「・・・それだけ喋れば十分でしょう。兄い、できるだけ早く戻ってきてくださいね」

「おう、死ぬんじゃないぞ」

それを言い残すと、雷牙は両脇に風花と風蘭を抱えその場から離れていった。

残された雷光は、とりあえずこの2対1という状況を何とかして耐えなければならなかった。

第53話 殺戮人形編9

刹那が戦っている人形はとにかく攻めてきた。刹那の大剣が自らに振り下ろされるよりも先に攻撃を仕掛け、刹那の大剣による攻撃を封じている。

刹那の結晶の大剣は重量のある武器である。その重さが唯一の持ち味であり、最大の欠点の重量系の武器である。

大剣はその重さゆえに一撃の威力は凄まじいものになっている。その攻撃に勢いをつけてしまえば、まさに鬼に金棒。並大抵の防御など意味を持たない。

だが、裏を返してしまえば攻撃速度の遅い武器となる。確かに、一撃はかなりの高威力を持つているものの、次の攻撃までの速度が異常に遅い。つまり、隙の大きすぎる武器なのである。

対する人形の武器は大剣。大の文字がついているだけに、その大きさは刹那の上半身くらいの大きさだ。切れ味も鋭く、そこら辺の岩くらいなら両断できるくらい研がれている。

この2つの武器、分が悪いのはもちろん大剣である。理由は至って簡単、大きさと重さの違いだ。

人形の大剣は確かに普通のサイズよりも大きい。だが、それでも大剣よりは小さくて軽い。小回りもきくし、鋭さゆえの威力だって持ち合わせている。重さのある大剣相手には言うまでもなく有利だ。

戦いの状況を見ても、人形が有利なのは一目瞭然だった。刹那は大剣を横にして迫り来る大剣を防ぎ、人形は手数で刹那にダメージを与えようとしている。

攻撃は最大の防御とはよく言ったものだ。見ての通り、刹那は人形の攻撃に手も足も出ないでいる。ただただ攻撃を防いでは後退をするだけだ。人形への反撃なんてもつてのほかだ。

「・・・・・・・・」

刹那自身も、この状況がまずいということはわかっていた。相手は雨あられに攻撃をしてくるが、自分は防御しているだけ。このままだといずれ自分のほうに隙が出来てしまいかもしれない。

刹那は防御しながら頭の中で必死に打開策を考えた。何かないか、何かないか、と。こんな状況でも考えられる余裕があることに、少し驚いてしまった。

刹那がこの状況下で考え出した案は次の2つだ。1つはレナから援護してもらい、その隙に人形を破壊する。もう1つは人形の隙を突いて反撃する。

1つ目のレナから援護してもらおうこと。考えた案の中では一番効果的な案だが、これは駄目だ。なぜなら、これが原因でレナに予先が向いてしまうかもしれないからだ。今レナは戦えない、その状況で襲われてしまったら・・・・アウトだ。

もう1つ、人形の隙を突いて反撃すること。これもやはり無理だ。相手は人間ではない、人形だ。戦っていてわかったのだが、攻撃するたびに威力が上がったり下がったりするなんていうことはない。攻撃と攻撃の間だって一定だ。隙なんて出来るわけがない。

正直、打つ手が見つからなかった。このままだと先に自分が折れてしまう。でも打開策が見つからない。考えても考えても、さっきの2つ以外の案は浮かんでこない。

「・・・・・・・・まずい」

心なしか、腕が疲れてきたような錯覚がしてきた。人形の一撃も、最初よりも重く感じる。だんだん自分の体が重くなってきたのもわかる。早目にケリをつけないと負ける。

・・・そうだ、新しい案を考えるんじゃないかと、考えた案を發展させてけば・・・

刹那は早速先ほど考えた案を発展させようと考え始めた。1つ目の考え、レナに援護を求めるのを発展させてみる。……駄目だ、発展させるにしてもレナに頼っている時点でもうこの案は使えない。それならば、2つ目の案だ。人形の間隙を突いて反撃をする、それを発展させてみる。

人形は機械的に攻撃を繰り返している。威力もスピードも間隔も全て統一されているから隙が生まれるということはほぼない。……ここだ。ここを発展させる。

相手は隙が生まれることはほぼない。それならば……隙を作る、というのはどうだろうか？

さっきから自分は防御体制しかとっていない。いや、とっていないではなく、それしかできない、と言ったほうがいいか。どっちにする、さっきから行動を統一している。

そこで、だ。何らかのアクションを起こせば、人形は突然の自分の行動に少しでも驚くのではないか？だとしたら、その隙に一撃を放てる可能性だつて必然的に出てくる。

やってみる価値はあるんじゃないのか？

そうだ、やらなければこの状況を抜け出すことはできないのだ。やるしかない、やらなければならない。

人形の機械的な攻撃を受け、さらにもう一度受ける。そして次の攻撃が来た瞬間、刹那の体は動いていた。足を使い、地面に散らばっている草の灰を蹴り上げる！！

「!？」

人形は突然視界に入ってきた黒い物体に驚き、機械的に行っていた攻撃を一瞬だけ止めてしまった。……その一瞬だ。その一瞬で十分だ！！

刹那は横に構えていた大剣をそのまま薙ぎ払うように人形へ斬りかかった。横一闪、確実に人形を両断できる軌道だ！！

だが、ここで誤算が生じてしまった。人形が思ったよりも早く斬り返してきたのだ。大剣よりも早く、軽い大剣が刹那の首元めがけて襲い掛かってくる！！！！

まずい、これはまずい。この速度じゃあ、一瞬だが人形の攻撃のほうに先に命中してしまう。しかも狙いどころが最も致命的な首だ。首は多くの血液が循環しているのに加え、心臓に近い位置に存在している。そこを刃物などで切りつけられたら・・・言わずともわかるだろう。血の噴水の出来上がりだ。

「ぐッ！！！！」

刹那はもう攻撃のモーションに入っている。いまさら回避運動などできっこない。何とかして人形よりも先に攻撃を決めるしかない。でもどうやって？

知るか！！やるしかない！！

「うおおおおおおお！！！！！！」

気合を入れ、力を大剣の握り手に込める。だが、そんなことをしても速度は変わらない。人形のほうが、速い！！！！

刹那の大剣を避け、もはや攻撃を遮るものなどない大剣はそのまま刹那の首元へ進んでいく。

そのとき、刹那の大剣に変化は起きた。

「・・・・・・・・え？」

黒い刀身から黒い光が放たれ、人形に凄まじい衝撃波を与えたのだ。

それも一度きりではない。数え切れないほどの衝撃波を食らっているのは、まるでガトリングに連射されたかのように撥ねる人形が証明していた。

衝撃波を食らい、隙だらけの人形の胴の部分に刹那の大剣が襲い掛かる。刀身の黒い刃は、まるで濡れた紙を切るかの如く人形を両断した。

上半身と下半身に分かれて飛び、人形は無様に地面に叩きつけられた。

「はぁ・・・はぁ・・・」

まだまだ、まだ油断はできない。雷牙の言っていたことを思い出せ、こいつはまた襲ってくる。

刹那は緊張を解かないまま大剣を構え、いつでも斬りかけられるように体制を低くする。だが、

「え・・・!?!」

半分になった人形は、そのまま土に変化してボロボロになったと思うと、そのまま地と一体化してしまった。その場には、人形の持っていた大剣だけが残された。

「・・・」

まだ、まだ解いちゃいけない。あの剣が襲ってくるかもしれない。そう頭に思い浮かべ、刹那は大剣をじつと睨み付けた。来るなら来い、いつでも大丈夫だ。

と、不意にその大剣が空中にす、と浮いた。同時にだんだん刃先のほうから消えていった。それはまるで雪が溶けるように、ゆっくりと消えてしまった。

さすがに気を張り詰めていた刹那も、人形と武器がなくなったことで安心したのか、結晶を体内に戻し、足を負傷しているレナの元へ向かった。

「何とか勝ったよ、大丈夫だったか？」

「……………」

「？」

レナは何やら口をぽかんと開けて刹那の顔をまじまじと見つめていた。豆鉄砲を食らった鳩のような驚き方だった。

「刹那、できたよ！できたじゃない！！」

「な、何がだよ……………」

「技だよ技！あの人形に使ったじゃない！！」

レナは興奮して刹那に話すが、刹那は頭に疑問符を浮かべながら首をかしげるばかりだった。技、と言われても一体何のことやらさっぱりわからない。そういえば勝手に人形の体が撥ねたような気がしたが、たったそれだけだ。気になる点はそれしかない。

……もしかしたら、それが技なのか？他に気になる点がない以上可能性はこれしかない。相手の体を吹っ飛ばすような攻撃、それが自分の技なのだ。……しかし、

「でもさ、俺意識してやったわけじゃないぞ？ただ勝手に出ただけだよ」

あの時、刹那の頭の中には技のことなど存在しなかった。ただ敵である人形を叩つ斬ることしか頭になかった。だからあの時出たのは技ではない。自分の意思で出したものではない、ただのまぐれ攻撃に過ぎない。

「大丈夫、あとでみっちり訓練するから」

にっこり微笑んだレナに、刹那は思わず見とれてしまいそうになったが、それよりも先に口を動かす。

「そ、それよりもさ、早くレオ達のところへ戻ろう。人形に苦戦してるかもしれない」

「うん、そうだね。行こ……ッ痛……」

「レナ!？」

「ご、ごめん。ちょっと無理みたい……」

レナは歩き出そうとするが、足に激痛が走りその場に座り込んでしまった。やはり、アキレス腱という歩くのに重要な部位に深刻な傷を負ったのがまずかったのだ。このままでは歩くことができない。レナがこうでは移動の仕様がなない。どうしたものかと刹那はその様子を見てしばらく考え込んだ後ぽんと手を叩き、レナの肩と足を手でそつと持ち上げた。……まあ言わなくともわかるだろう。お姫様抱っこってヤツだ。

「よし、じゃあ行くぞレナ」

「え?ちょ、ちょっと……」

レナが何かを言う前に、刹那はぱっと加速していた。向かう先はレオ達の元。その速度はまるで風のように。

・・・なんだろう、この感じ。温かくて、優しいこの感じ。自分以外の体温がこんなに温かいなんて・・・。

レナは刹那の腕に抱かれながら、ふとそんなことを思ったのだった。

第54話 殺戮人形編10

レオは生まれてから一度も眩暈や貧血などを起こしたことがない。食べるものだって、王子だったからこそ良く、義父との訓練で体も動かしていたから、眩暈や貧血など起こりうるわけがないのだ。しかし、レオは今生まれて初めて眩暈を覚えていた。焦点がうまく定まらず、周りの景色もぐにやりと曲がって見える。レオは初めて起こった未知の感覚に、たまらず片膝をついてしまった。

「兄さん？」

リリアが心配そうに声をかける。

戦いの途中なのに片膝をつくなんてそうそうあることではない。ましてやこちらが不利な状況なのだ。そんなことをしていれば、敵は容赦なくかかってくるのはわかりきっている。

それに、レオは人形から攻撃を受けた様子はない。体を見ても傷らしい傷は全く見当たらないし、服だって破れていない。となれば、攻撃以外の原因でレオは片膝をついていることになる。・・・心配にならないわけがなかった。

何回もリリアが声をかけても、レオは一向に返事をしなかった。ただ黙ってどこか一点を見つめているだけだった。

「兄さん！！どうしたの！！」

叫びに近い声をあげるが、やはりレオは何とも言わない。本当にどうしちやっただらう、とリリアの不安は徐々に増していった。

そのとき、前方のほうからギギギ、という木の軋む音が聞こえてきた。ぱきぱきと枝の折れるような音もする。・・・間違いない、人形が木を切り倒したのだ。

リリアはまずレオを抱いて飛び退こうとした。しかし、自分の力じやレオを抱けても飛び退くことはできない。それに気がついたときには、巨大な大木は自らの目の前に迫っていた。いまさら自分だけ逃げるなんてことはできない。リリアはレオにぎゅっと抱きつき目を瞑った。

「・・・・・・・・・・？」

ところが、いつになっても大木はぶつからない。それどころか、ギギという木の軋む音もなくなっている。おかしいな、と思ったりリリアは恐る恐る目を開けてみる。そこには、

「兄さん!..!」

「・・・・・・・・・・」

片手で大木を受け止めているレオの姿があった。だが、何だかいつもと違う。体から白い光が染み出している。それに、いつもより圧迫感が強い。空気中の酸素濃度がいきなり下がったように、息苦しくなった。

「兄さん？」

恐る恐る声をかけてみる。さっきは返してくれなかったが、今度はちゃんと返事をしてくれた。

「ああ、大丈夫だ。ちょっと、慣れるまで時間がかかった」

す、とレオの顔はリリアのほうへ向いた。・・・いつも見ているレオの顔に、少し違和感があった。何だろう・・・なんかいつもと違

う……。

じっとレオの顔を見ていたリリアは、その違和感の正体に気がついた。目だ。瞳孔が開ききつていて、色が違う。

この変化には覚えがあった。そう、この世界に来たときに襲ってきた雷兄弟が使った、あの『眼』と同じだ。……レオは、『眼』を発動させたのだ。

「最初は眩暈かと思ったんだ。でも、違う」

レオはゆっくりと立ち上がった。その瞬間、体から染み出すくらいにしか出ていなかった魔力が、まるでダムが決壊したかのように溢れ出てきた。

威圧感はや最高潮、味方であるはずのリリアでさえも恐怖を覚えるくらいだった。

「ゆっくりになったんだ。動いてるもの全部がな。それに、いつもより精神状況がいい。余計なことなんて考えれない。今まで初めてだ、こんなに集中できるのは」

そう言うと、レオはゆっくり銃を構えて、撃った。人形は今、木の陰に隠れている。当然だが、当たるわけがない明後日の方向に弾丸は飛んでいった。

しかし、そのタイミングを見計らってきたかのように木の陰に隠れていた人形は飛び出し、当たるわけのない弾丸を右肩に受けた。

人形の肩は砕け、右腕はそのまま地面に落ちたが、人形本体は何事もなかったかのように木々の間を飛び交い、レオを翻弄しようとしていた。

……だが、『眼』を発動したレオの前には無駄なことだった。レオは再び人差し指を動かして弾丸を発射する。弾丸は当たるはずのないおかしなところへ飛んでいくのだが、なぜか絶妙なタイミング

で人形が飛び出し、今度は額に弾丸を受けた。頭は砕け、人形は地面にドサツと倒れた。同時に人形はボロツと崩れてしまい、そのまま土に同化してしまった。

それを確認したレオはようやく銃を下ろし、体から溢れ出ていた魔力も水を塞ぎ止めたようにピタツと止まった。同時に体の力が抜け、レオはガクツと膝をついてしまった。

「兄さん！大丈夫?!」

リリアが駆け寄り、レオの体を支える。レオの全体重がリリアの腕にかかってくる。ぐったりしていて、本当に力が入っていないようだった。

「ああ……、ちょっと、疲れた……」

ふう〜、と深くため息をつく、レオはリリアに体を預けるとそのまま眠りについてしまった。リリアは少し戸惑っていたが、すぐに膝を折り、レオの頭を太ももに乗せてやった。

それにしても、あのレオがこんなに疲れてしまうなんて少し驚きだ。それくらい『眼』は体力の消耗が激しいのだろう。それだけ深く眠っている。……これは当分起きそうにない。

「はあ……」

小さなため息をついたあと、リリアはどんどん厚くなっていく雲を見上げながら、これからどうしようか、と考えていた。

+++++

「わりい！！待たせた！！」

「本当ですよ。一撃当てられたじゃないですか」

雷光は遅れてきた雷牙に、自分の右腕を見せながら文句を言った。雷光の右腕は肘のところに大きな切り傷ができていて、そこから血がたらたらと流れていた。

雷光が戦っていた人形は2体。1体は両手に小刀を持った赤い服の人形。もう1体は小さな体には似合わない大きさの大斧を担いでいる黒服の人形。

雷光の体術は兄の雷牙より劣るが、それでも十分な実力を持ち合わせている戦士である。相手の動きを読むのも、反撃するのも、攻撃するのも、回避するのも、幼い頃からの狩りで自然と上達しているため、多少の相手だったら無傷で勝利することも可能になっている。だが、雷光は戦いの初っ端から手傷を負ってしまった。さすがの雷光も、2体相手、それも武器を持った動きの速い人形相手に無傷は無理だったのだ。

そして、雷光が傷を負った最大の原因、それは・・・人形が「飛んだ」ことだった。

高く跳び、落下してくるところを狙って攻撃をしようとするのだが、

落ちてくるはずの人形がそのまま空中でピタツと止まり、そのまま自由自在に動くのだ。動きに一貫性のない空中戦など、雷光には初めての体験であったため、不意の攻撃に反応できずあっけなく攻撃を食らってしまい現在に至る。

2体の人形は空中で自分達の様子をうかがっているのを見て、雷牙は雷光が傷を負った原因を理解した。・・・そして、空中の敵は厄介だということも。

だが、相手はそんなことお構いなしに攻撃してくるだろう。自分達が有利な状況にあるのに追い討ちをかけないヤツなどいない。こちらが少しでも隙を見せた瞬間、人形達は襲ってくるだろう。

「雷光よお、こりゃちよいとマジになんねえとやべえんじゃねえのか？」

「確かに、空中戦じゃ相手に分がありませんからね。『眼』を使って、一気に畳み掛けましょうか」

「ああ。そんじゃ、俺が叩き落とすからとどめ頼むぜ」

雷牙の言葉と同時に、2人は『眼』を発動させた。外だというのに瞳孔が開ききり、体中から魔力があふれ出る。力がみなぎり、全身に自然と力が入ってしまう。・・・準備は万端だ。

まず、雷牙は足をグツと曲げ、空中で様子を見ている人形のほうめがけて跳んだ。地面を抉るほどの力で空中へ突進した雷牙はあつという間に人形に接近し、人形達はそこで初めて動きを見せた。

人形はそれぞれ別方向に空中移動し、とりあえず雷牙の突進をかわした。空中へ突進した雷牙はそのまま人形を叩き落すことなく落下していくはずだったのだが、人形はそれを見逃さなかった。

雷牙はもちろん空中を自在に飛び回ることなどできない。当然のことながら、空中には足場がないため落下地点を何とか変える、なん

ということは無理だ。・・・何が言いたいかということ、雷牙は地上に足がつくまで何もできない、ということだ。

もちろん体をひねって攻撃をギリギリでかわすなどのことはできるだろうが、それだけだ。しかも、攻撃をかわすと言っても大振りですぐ避けにくい攻撃を繰り返されたらもうどうしようもない。かわせないのだ。

人形達はそのことを理解しているのか空中を滑るように移動し、手にしている武器を構えて雷牙に襲い掛かった。赤服の人形は小刀を逆手に持って切りつけようと、黒服の人形は斧で叩き切ろうと、それぞれ武器を構えた。

・・・いきなりだが、ここで話を変えさせてもらう。「眼」を発動させたものは肉体の潜在能力を解放できる、と雷牙が言ったことを覚えていたのだろうか？

潜在能力・・・なぜそのことを雷牙は知っているのか？・・・そう、雷牙はその潜在能力を解放できる段階に至っているのだ。だからそのことを知っていたわけだ。

『眼』を発動させた雷牙の潜在能力は、『第六感超強化』である。人には五感というものが存在する。目による『視覚』、鼻による『嗅覚』、舌による『味覚』、耳による『聴覚』、皮膚による『触覚』がそうだ。だが、もう一つだけ隠れた感覚が存在する。・・・『勘』というやつだ。

雷牙は生まれつき勘がいい。狩りのときの獲物探しだって勘を利用して発見していたし、昨日だって小屋の近くに人形達がいたことを勘が知らせてくれた。その勘が、さらに強化されるのだ。

ここで戦闘の話に戻る。雷牙は襲ってくる人形達が攻撃をしてくるのが、自らの勘によってわかっていた。普通の勘でだ。まだ『第六感超強化』は使っていない。

人形が自分に向かってきた瞬間、雷牙はここで初めて『第六感超強化』を発動させた。使った理由は簡単、人形が攻撃してくるのはわかるが、体のどこをめぐらして攻撃するのがわからないためだ。それ

さえわかれば、攻撃をかわせはしなくとも死にはしない。
すでに広がっている雷牙の瞳孔がさらに開き、目が一瞬にして黒ずむ。これこそが潜在能力を発動させた証だ。

ふ．．．赤服は心臓、黒服は首か．．．

雷牙の勘が冴え渡り、人形達の攻撃は予想通りの箇所に来た。赤服の人形は片手の小刀を心臓目掛けてシュツと伸ばし、黒服の人形は大斧を振り上げ首を落とそうと切りかかってきた。

赤服の攻撃は仕方ない。胴体を的にしてきたのなら空中で身をよじつても肩や腹部に刺さるだろう。だが、黒服の攻撃は避けられる。狙った場所が首だからだ。胴体と比べてかわすのがずいぶん簡単だが、かわさなければ終わりだ。

人形達はほぼ同時に攻撃を仕掛けてきた。雷牙から見て赤服人形は右方向、黒服人形は正反対の左方向から向かってきた。

人形達が落下中の雷牙に武器を繰り出す。．．．雷牙は予想通り、と言った表情をし、体をよじった。．．．そのあとも直感通りだった。黒服人形の大斧はかわせたが、赤服人形の小刀は心臓には刺さらなかったものの、わき腹の部分をずぶつと貫いた。

「う．．．ぐ．．．」

雷牙は痛みを感じなかった。いや、少しは感じていた。ただ、思ったよりも痛くなかった、というのが本音だった。．．．雷牙はここまで計算していた。すなわち、自分の体になんらかの攻撃をされる、ということまで。

わき腹を貫いた赤服人形は、血の滴っている小刀を雷牙から抜こうとしたが、思いがけないことが起こった。雷牙が、人形の腕を掴んだのだ。掴んだ右手には神裂爪が装着してあったため、握り手の部分から器用に手を出していた。メキメキ、と人形の腕から軋

む音が鳴った。

さらに雷牙はもう片方の腕で黒服人形の頭を掴んだ。雷牙の握力は凄まじいもので、掴まれていた黒服人形の頭は指の圧力でへこんでいた。

赤服人形と黒服人形は間髪いれず雷牙に反撃しようと武器を振りかざしたが、それよりも早く雷牙は雷光のいる地面へと両手の人形達を投げ飛ばした。

「うらああ！！雷光！！いったぞおおおお！！」

人形達はまるで弾丸のように落下したかと思えばそのまま周りがクレーターのようにへこみ、大砲か何かを撃ちこまれたかのように地面を抉っていた。

・・・そして、そこに待っていたのは『眼』を発動させた雷光の姿。雷牙と同様体から魔力があふれ出ていて、瞳孔が開いている。さすがは双子の兄弟、といったところだろうか。

「さて、それでは手早く済ませましょうかね」

そこで雷光の瞳孔はさらに開き、全身が青白い光と化した。これが雷光の肉体潜在能力『全身雷化』である。文字通り全身が雷になる、という単純なものだが、その雷が問題なのだ。

落雷というものがある。万が一その落雷が避雷針などの道具を持ち合わせていない人間に直撃したらどうなるだろうか？よっぽどがない限り、即死する。そんなのはわかりきっている。

だからこそ、雷光の『全身雷化』は危険なのだ。落雷は意思がないから直撃するのは確率ということになる。だが、雷光には意思がある。自分で考え、そして動くことができる。

つまり、『全身雷化』を使用している状態の雷光は、『意思を持つた雷』なのである。自分で動くことができるから、その身である雷

を敵に直撃させることは難しくはない。ただ触れるだけでいいのだから。

雷光は雷牙の投げた威力のあまり、変な形になっている人形達のところへ急ぎ足で向かった。・・・人形はちょうど動き出そうとしていたところだった。

「おっと、そうはさせませんよ」

雷光は立ち上がるうともがいている赤服人形の頭に触れた。瞬間、バチッ！とはじけるような音がしたかと思つたら、赤服人形は炎に包まれていた。・・・凄まじい電熱による発火である。

服と同じ色の炎を人形が纏つたのを見届けると、続けざまに黒服人形にも触れた。今度は頭ではなく、肩に触れた。

やはりバチッ！とはじけるような音がし、黒服も炎に包まれた。人形達は炎を体に纏い、そのままがいて、炭になった。・・・もう動き出そうとはしなかった。

「おう、終わったか」

「あつけないものでした。あつという間に炭ですからね」

雷牙が地面に降りてきたときには、もう2人は『眼』を解除していた。

『眼』は一時的に身体能力を凄まじく増加させるが、その分肉体の疲れや魔力の消耗が激しくなる。体から魔力が染み出しているのが何よりの証拠だ。

肉体の潜在能力を使っても同じことが言える。ただでさえ体力、魔力の消耗が激しい『眼』。加えて肉体の潜在能力の発動・・・つまり、この2つを使った瞬間ものすごいエネルギー消費になる。そのため、戦わないとき以外は『眼』を発動させない、というのが

普通だった。

つまり、この2人は戦闘が終わったと確信しているから『眼』を解除した、ということだ。・・・まだ、そこに敵がいるということも知らずに、だ。

雷牙と雷光が敵の存在に気がついたのは、その敵が喋ったあとだった。

「あらラララ〜。アビスの可愛いお人形さん達がみんな壊されちゃッタねエ〜」

変な口調の声は2人の後ろから聞こえてきた。バツと、勢い良く振り向いた。そこには、人が立っていた。頭にかぶせてある真っ白なシルクハットから長い緑色の髪の毛がはみ出していて、その背中には膝が隠れるくらいのシルクハットと同様、真っ白なマントがあった。顔には仮面がついており、その仮面は中央に線が入っていて、右目のあるほうが真っ黒に塗りつぶされて、左目のあるおうが真っ白に塗りつぶされているという、奇妙なデザインをしていた。敵を視認し、慌てて戦闘体制をとろうとした雷牙と雷光をなだめるように、そいつは言った。

「慌てない、慌てない。アビスは君らと戦おうなんて思っていないヨ」
「ならば、何をしにわざわざ出てきたのですか？」

雷光はいつでも飛びかかれるよう体制を取りながら、たずねた。

「いやいや、お人形さんたちが全部壊されちゃったからサ。もう帰るだけだシ、その前に挨拶でもしておこうかなッて」

言うなり、そいつはマントと両腕を大きく広げ、言った。

「僕は神の使イ、名前は『アビス』。お人形さんを操る愉快なヤツさ」

アビスは言い終わったかと思うと、礼儀正しく腰から上半身を曲げてお辞儀をした。それは、まるでシヨーが終わったあとのマジシャンのようだった。

「神の使いだとお？」

「やはり、刹那さんたちの言ったとおり・・・」

2人の言葉に反応したのか、アビスはお辞儀したまま顔を上げると、少し驚いたように言った。

「あら？知ツてたの？それじゃ神の魂の器と愉快ナ仲間達はこの世界にいるのかナ？」

「・・・だとしたら、どうします？」

「何もしないヨ。お人形さんもうないシ、戦っても面白くないからね。さっさと帰るヨ」

そう言うと、アビスは指をパチンと鳴らした。すると、ゴゴゴ、という音がし、アビスの目の前にゲートが出来上がった。目の前のゲートに入ろうとするアビスに、雷牙は言った。

「おい、誰が逃がすって言った？」

「逃げるのニ、いちいち許可がイるのかナ？」

「知るかッ!!」

雷牙はパツと地面を蹴り、右手の神裂爪の握り手をグツと握り締め、ゲートに入ろうとしているアビスめがけて突っ込んでいった。だが、

「ツグ!!?」

いきなりガツンツと、何かが凄まじい勢いで雷牙にぶつかってきた。雷牙はあっけなく吹っ飛ばされた。・・・アビスにしか注意を払っていないかったため、気がつかなかったのだ。

「に、兄い!!」

「いでで・・・なんだ？何がぶつかったんだ・・・？」

雷牙は自分の体にぶつかってきた物体の正体を見ようと視線を移した。・・・それは紛れもなく、先ほど自分が空中にいたところを叩き落とし、雷光が炭にしたあの人形だった。

炭と化したその人形は、ボロボロと崩れていつている足で必死に体を支えていた。首も曲がって、いつ落ちても不思議じゃなかったし、腕なんてさつきぶつかってきた衝撃でもげている。・・・なぜ、ここまでになつて立てるのだろう、と2人は思った。それは感嘆ではなく、驚きだった。

信じられない、と言った目で人形を見つめている2人に、アビスは笑って言った。

「お人形さんは炭になつてもアビスの可愛いお人形さんだよ。アビスは『人形師』。その子らを動かシ、自在に操れる楽しくも不気味な道化師・・・サ」

アビスはそう言い残すと、ゲートをくぐってしまった。入った瞬間にゲートが閉じたので、雷牙と雷光はどうすることもできなかつた。ガチャツと、軽い崩れるような音がした。音の原因は炭と化したあの人形だつた。おそらく、アビスがいなくなつたから、だろ。もう人形達は、本当に動こうとしなかつた。雷牙と雷光はしばらく沈黙し、そして破つた。

「……とりあえずは、終わったのか？」

「……終わつたんでしょ。あのふざけたヤツが人形を動かしていたのなら、殺人鬼となつているその人形も、もう人を襲うこともないはず。」

「まあ、終わつたつてことだろ。簡単に言えば」

「まあそうですが……。それより、早いところ風花さんと風蘭さんを迎えに行きましょう。」

雷牙は頷くと、そのまま先に行く雷光のあとを追つていった。ぼつぼつ、と空からは雨粒が落ちてきた。次第に雨の強さは増していき、同時に雨音も激しくなつていった。

第55話 殺戮人形編 11

歩けないレナを運んでいた刹那と、深い眠りについてレオを膝枕しているリリアが合流したのは雨が激しくなった頃からだった。リリアはこんなに雨が激しくなっても目を覚まさないレオをどうしようか、とあたふためいていたが、そこに現れてくれた刹那に何とか頼み込んでレオを運んでもらうことになった。

「……まあもちろんのことなのだが、刹那の両手は今塞がっている。レナを抱き上げているためだ。レオを抱えるには、レナを片手で抱えるしかない。つまり、片腕にレオ。片腕にレナ、という形になるのだが……」

「……刹那、これはあんまりじゃない？」

「仕方ないだろ。レオ寝てるし、我慢してくれ」

レオは肩に担がれているが、レナは違う。レナは刹那の脇に抱えられていて、まるで米俵か何かのような扱いになっていた。これではあんまりだ。レナが文句を言うのも仕方ない。

「……つぷ……」

「ちょ！ちょっとリリア！今笑ったでしょ！」

「い、いえ……そんな……つくつく……」

堪えられず、リリアが笑い出してしまった。腹を抱えてうずくまるようにして笑っている。レナは顔を真っ赤にして手足をじたばたさせた。……はずかしさを隠しているようなつもりだろうか。可愛

いものだ。

「ああ、ほら。レナ、暴れるな。リリアも笑ってないで早く行こう。もう雷牙たちが待ってるかもしれない」

「は、はい・・・ぷっくくく・・・」

「~~~~~!!!」

「だから暴れるなつて。痛い痛い！！叩くな叩くな！！」

そんなこんなで、眠っているレオと暴れているレナを抱えて、笑いながらついてくるリリアと共に、刹那たちは小屋へと帰還したのだ。

+++++

小屋へ戻った刹那たちが最初に見たものは、雨で体が濡れたまま正座している雷牙と雷光と、腕組みをし、笑いながら青筋を立てている風花の姿だった。

「・・・あの、ええつと・・・」

小屋に入ったのはいいものの、これからどうすればいいか刹那にはわからなかった。少なくとも、報告会をしよう、などと言い出せる雰囲気ではないことだけはわかった。

刹那の声で気付いたのか、風花は表情を崩さないまままで刹那たちのほうに振り返った。・・・ぞくつとした。

「戻ってきたんだあ。どうだったあ？」

「え、あ、何とか倒したけど、レオがちよつと眠ってるんだ」

「そっかあ。それじゃ隣の部屋の布団に寝かせておいてえ」

「お、おい。それって俺の・・・」

雷牙の反論は、風花がイスを蹴り飛ばした音で遮られた。イスが壁に叩きつけられる音を聞いて、風花以外全員の体がビクツと撥ねた。

「何か言ったあ？雷牙くうん？」

「い、いえ・・・、なんでもないです」

「・・・あ、あのさ？な、何で雷牙と雷光が正座してるんだ？」

おそろおそろ風花に聞いてみた。そのときの刹那は、まるで外国人にでも話しかけるようにビクビク、おどおどしていた。

風花はにっこりとしたまま刹那の問いに答えた。

「この2人ったらひどいんだよあ？雨がザーザー降ってきてるのにいつまでたっても迎えに来ないしい。風蘭なんて風邪ひきそうにしてたから歩いて帰ったのお。そしたらね、何でかこの2人が先に小屋に着いてるんだよあ？おかしいよねえ。おかしいよねえ！ 迎えにくるはずだったよねえ！！ それなのに何であたしたちが置いてけぼり食らってんのかなあ雷牙君！！！！」

風花は言い終わると同時にパンツとテーブルを拳で叩く。・・・雷牙と雷光はまたもやビクツと体が撥ねていた。

風花の言い分は大体わかった。たぶん、雷牙と雷光は戦いに風花と風蘭を巻き込みたくなかった。だから安全なところに避難させた。でも、待っても待ってもいつまで待っても雷牙と雷光が迎えに来やしない。あの2人のことだから戦闘に負けるわけないし・・・。そう考えて待っているうちに雨が降ってくる。最初はポタ、ポタ、という程度だったが、次第に強さが増し、降水量も多くなってくる。その寒さに耐え切れず、風蘭は体を震わせくしゃみをした。・・・もうこれ以上待ってられない。震える風蘭を支えながら風花は小屋に戻る。

そこにいたのが・・・っという感じだろうか。風蘭がないのは、おそらくベッドに寝かされているからだろう。

「あ、あの・・・俺たちちょっと疲れたから休んでいいかな・・・？」

「ああ、刹那君たちお疲れ様あゝ。ゆっくり休んでねえ」

「お、お前達！！俺たちを見捨てないでくれえええ！！」

「そ、それじゃおやすみなさい・・・」

すぎるような、雨の日に捨てられた子犬のような、そんな感じのする雷牙の目つきをかわし、刹那たちはそそくさとその場をあとにした。・・・本能的にわかっているのだろう。ここにいたら・・・命が危ないと！！

部屋に残された雷牙、雷光、そして・・・にっこりと笑っている風花。これからどうなるかは、誰も知らない。

第56話 殺戮人形編 12

翌日、刹那たちが起きてテーブルのところへ向かうと、そこには目の下に隈のできている雷牙と雷光、にこやかに朝食を運ぶ風花と風蘭の姿があつた。風蘭はもう大丈夫みたいだつた。意気揚々と皿を運んでいる。

「あ、みんな今起こしに行こうかなって思ってたんだ！」

「おはよお、よく眠れたあ？」

「あ、うん……」

ちらつと雷牙と雷光のほうを見る。風花はああああ、と頷きながら言った。

「大丈夫だよお、もう誤解は解けたからあ」

「誤解？」

「うん。実はねえ、私たちが帰ったときと雷牙君たちが探し回つたときにすれ違いがあつてねえ、いくら探してもいないから小屋に帰つたんじゃないかって戻ってきたら、ちょうど私達が帰ってきたつてわけえ」

「……それを説明するのにどれくらいの間がかつたことか……」

「なんか言つた？ あ？」

「なんでもないです！」

「……一体この一晩のうちに何があったのだろうか？想像するのも恐ろしいことがあったのは確かだが、……本当に何があったのだろうか。」

「ほ、ほらほら！早く席について！ご飯だよ！」

気を取り直して風蘭がぼくと突っ立ってる刹那たちに呼びかける。風蘭のその声で、ようやく刹那たちは椅子に座った。それから何度か風花と風蘭がキッチンを往復し、テーブルの上に全ての朝食が揃ったところで、風花が言った。

「それじゃあ、いただきませう！」

朝食は始まった。

+++++

「……というわけで、アビスというやつはこの世界から去っていききました」

「なるほどな。わかった」

朝食が終わり、そのあとは報告会ということで、それぞれ人形のパートナーごとに自らの仕事内容を報告していた。

最初は刹那とレナのペア。次がレオとリリア。最後が雷牙たちのまとまったグループ。つまり、これで全ての報告は終了したことになる。

全員の報告を聞いて、腕組みをしながらレオは言った。

「・・・とりあえず、罨は外せたみたいだな」

「ですね。やはり、原因はアビス・・・神の使いだったのですね」

「ああ。でも、もう大丈夫だろう。おそらく、もうこの世界に罨を張られることはないはずだ」

「そうですね。安心しました」

レオと雷光の会話が終わり、ようやくその場の空気が緩んだ。ほっとため息をつく人もいた。

そんな中、雷牙がレオに話しかけた。

「なあ。お前ら、これからどうすんだ？」

「帰るさ。罨はこの世界だけにあるわけじゃない。もっと世界を旅して回らないといけない」

「なら、俺も連れてってくんねえかなあ？」

雷牙の申し出に、当然驚きの声上がる。雷光も風蘭も例外ではなかった。

「に、兄い?!」

「ちょ、ちよつと雷牙! あんた何考えてんのよ!?!」

2人は雷牙の言葉に反論するが、風花だけはじつと雷牙の顔を見ていた。

へへ、つと雷牙が笑って言った。その顔は、これからまさに遊びに行こうと新品の靴を履いている子供のような顔だった。

「だってよお! 面白そうだろうが!?!」

「・・・え?」

「異世界の旅だぜ?! こんな面白そうなこと、他にねえだろ?! かあ〜!! わくわくするぜ!?!」

「「・・・」

その場にいる一同は、言葉を失っていた。理由は言うまでもない、呆気にとられてしまったのだ。

刹那たちに付いていくという理由が、面白そうだから。正直というか、なんと言うか・・・、そんなおかしな理由に、呆れられずにはいられなかった。

だが、そんなことはわかっていたかのように、風花が笑って言った。

「それじゃあ、私も行こつかなあ〜」

「ね、姉さん?!」

「だってえ、雷牙君1人だけずるいもん。やっぱり楽しいことはみんなで楽しまないとねえ」

雷牙もぽかんとしていたが、やがて笑って風花に「んじゃ一緒に行くか」と言った。風花は笑って頷いた。

本当にこの人は、と一言呟き、雷光はレオに言った。

「あの、迷惑でなければ同行させてもらえないでしょうか？足は引つ張りません、罾を外すお手伝いもします。一緒に連れて行ってくれませんか？」

「・・・俺は構わない。お前らは？」

レオが刹那とレナとリアのほうを向いてたずねる。レオへの返事に、時間はかからなかった。

「俺はいいと思う」

「私も、刹那と同じ」

「私もいいと思う。仲間が増えて楽しくなりそうだし」

意見は一致した。

雷牙と風花は刹那たちの了解が出たからか、嬉しそうにはしゃいでいる。それをうらやましそうに眺めているのは、反論しか言っていない風蘭だった。

「風蘭さんも行きましょう」

「え？」

「旅です。きつと楽しいですよ。色んな景色や人に出会えるまたとない機会です」

「でも……」

「……今まで、ずっと一緒だったじゃないですか」

「……うん」

「だから、行きましようよ。みんなで」

「……うん」

そう、雷牙、雷光、風花、そして風蘭はいつも一緒だった。小さな頃から、遊ぶときも、食べるときも、寝るときも、ずっとずっと一緒に過ごしてきた。家族だった。これだけずっと一緒にいるのだから、家族同然だった。

風蘭は決心したのか、レオを見つめて言った。

「あたしも、行く」

みんなの顔に、笑顔が浮かんだ瞬間だった。

+++++

「やア」

「ああ、おかえりアビス。人形はどうしたの？」

「みんなに壊されちゃったんだ。また作らないといけないからめんどうだねエ」

両手を曲げ、やれやれ、とアビスは首を横に振った。

人形が壊されてしまったと聞いたマリスは残念そうに言った。

「そつか。それじゃしばらく人形劇は見れないんだね」

「残念ナことにネ。作り次第見せてあげるヨ」

「楽しみにしてるよ。それで、どうだった？」

「直接接触はできなかつた。その前に人形壊されタから、帰ッてきちヤツた」

アビスの報告を聞き終わると、青年は子供のような笑顔で言った。

「そつか。ご苦労様、あとは休んでいいよ」

「いや、また行くことにするヨ。代わりの人形ヲ調達しないトいけないシ。それニ……」

「それに？」

「人形の分の仕返しもしないとイけないしサ」

そう言うと、アビスはシルクハットを取ってお辞儀をするしたあと、真っ白なマントを翻してその場を後にした。

部屋に残された青年は、奥のほうで動いている巨大なカプセルを眺めた。ゴオーと、小さい音がしていて、それが確かに動いていることがわかる。

「……よお」

不意に後ろから声がした。振り返って見ると、

「シャドウ。どうしたの？」

「……別に、なんでもねえよ」

「……そっか」

それだけ言うと、青年は再びカプセルのほうを向いた。シャドウから見た青年の背中は何だか寂しげで、少し悲しかった。

「……早く、生き返るといいな」

「うん、ありがとう」

会話はそこで途切れ、部屋は沈黙に支配された。

第56話 殺戮人形編12（後書き）

さて、いかがでしたでしょうか？ 今回の物語は^{せかい}？

新たな仲間4人を加えた刹那たちの物語は、これから新たな局面を迎えることでしょうか。

それがどのようなものなのか？ それは、見てからのお楽しみ。

さて、次回の物語は^{せかい}戦争編。

戦争を終わらせるためにとった男女の物語をどうぞお楽しみください。

第57話 戦争編1

一同はオリアスから貰った家でこれからのことを話し合っていた。雷牙、雷光、風花、風蘭の4人が仲間に加わったことで人数は8人となっていた。そこでその人数を見たレオはある提案をした。パーティを2つに分断し、罨解除の効率を上げよう、というものだった。確かに、この方法ならばより早く罨を外すことができるし、人数が多くなっていい。8人で旅をするとなれば、宿や食料の確保が難しいからだ。8人より4人のほうが、どう考えても確保が楽になる。話を聞いた一同はその意見に賛成し、頷いた。

「さて、気になる決め方だが、くじにしようと思う」

「くじ?」

「ああ。ここに枝がある。短いのと長いのだ。それでパーティを決めたいと思う」

言うなり、レオは手を差し出す。手には枝が握られており、もう一つの手で下のほうを隠し、長さをわからないようにしていた。

一同はレオの手から枝を一本ずつ取り、最後に余った枝をレオが取った。組み合わせは次の通りとなった。

第1組、刹那、雷光、リリア、風蘭。

第2組、レオ、雷牙、レナ、風花。

もの見事、というほどうまく散らばったようだった。まだ冒険したことのない人との旅、刹那は少し嬉しかった。一体、このメンバー

でどんな世界を旅するのだろうか、と。

でも、なぜか・・・ちよつぱり寂しかった。なぜだか理由はわからない。ただ、何だか足りないような、そんな感じだった。

でも、とりあえず組み合わせは決まった。あとは図書館のほうへ行き、オリアスから新しい世界の本を貰えばいい。

「それなら行くか。みんな、うまくやれよ」

レオの一言で、一同は図書館へと向かったのだった。

+++++

道ってというのはやっぱり自分で決めるもんなんだ

人が人の道を決めることができるんだったら

俺はこいつを絶対に連れては行かなかっただろうからな

刹那たちの組が降り立った世界は、争いをしているようだった。ゲートの場所が町から少し離れたところで、そこから町の様子が見えた。・・・何やら、武器を作っているようだった。火薬のにおいも充満している。それで十分だった。武器を作っているのは使うためだ。武器が使われるのは、戦うときしかない。この世界も、戦争をしているのだ。

「ねね、あれって何作ってるんだろ！」

「・・・火薬のにおいですから、銃火器、ですかね」

「？　じゅうかきって何？」

「武器ですよ。・・・まあ、僕たちの世界では珍しいものですからね」

「それじゃあ何で雷光さんが知ってるの？」

「レオさんから教えてもらいました。火薬を爆発させて弾丸を発射するものや、そのまま火を出すものとか、色々な種類があるって」

鉄砲や火炎放射器のことだろう。どちらにしても、人を殺す道具だ。そんなものを作ってる町に入りたくはないが、情報収集をして罠の有無を確認しなければならない。

「町に行こう。情報を集めないといけないし」

刹那の一言に頷き、一同は町へと歩き出していった。

町の入り口で、2人の武器を持った男がだべっていた。見張りのようだが、こんなに不真面目にやっついては見張りの意味がない。

でも、まともに仕事をされて怪しまれれば少しめんどろなことになる。ここはうまくやり過ごして、とっとと町に入ってしまうのが一番だ。

町の中は、外から見たよりもずっと工業が発達していた。ガタン、ガタン、と機械の音が絶える事無く聞こえ、時折聞こえるフシュー、という蒸気の声で武器の1つが出来上がる。その繰り返しだった。作られた武器は箱に詰められ、工員の人がシールのようなものを張

ってベルトコンベアに流す。そこから先の作業は工場の奥で行うの
で見えないが、おそらく何か移動用の物の荷台に乗せて運ぶのだろ
う。戦争のために、わざわざ。

「さて、どこで情報を集めますか？」

「ん〜・・・そうだな・・・ん？」

「どうしたんですか？」

「いや、あそこ。ほら」

「何か人が集まってんね。何やってんだろ」

刹那の言うほうを見ると、そこには人だかりが出来ており、ガ
ヤガヤと何か騒いでいるようだった。何について騒いでいるのかは、
人ごみが邪魔でよくわからない。

「ちょっと見てくるよ」

そう言っつて、刹那は人ごみの中に飛び込んでいった。

人ごみの中は老若男女問わず色んな人がごたごたとしており、何を
そんなに夢中になっているのか、壁のほうに行こうともがいていた。
刹那も何とか壁のほうに行こうとはするが、どうも人が邪魔になっ
ていけない。右から行こうとすれば右に人が来るし、左から行こう
とすれば左に人がくる。・・・これではいつまでたっても壁のほう
に行くことができない。

よし、と、刹那は人と人之間に手を入れて少し隙間を作り、その間
に無理矢理体をねじ込んで入り込んでいく。

ふ……お！

ひたすらひたすら進んでいくと、壁に大きな紙が貼り付けてあった。人々がこんなに集まるくらいだ、どんな内容なのだろう、と思つて目を凝らして見て見る。だが文字が少し小さくて見えにくい。もう少し寄つてみようとするが……

「うお……！」

突如人ごみが崩れだし、集まっていた何人かが刹那の上へのしかかった。少なくとも十人くらいは乗っているだろうから……大体600kgくらいだろう。そんなのに、刹那が耐えられるわけがない。

ぐぐぐぐぐぐぐ……ぐえ……

どいてくれ、と言おうとするが、呼吸ができず声が出せない。それに加え、刹那の上ではなにやら口論が始まっていた。

「おい……誰だ押しやがったやつは……！」

「うるせえ……いつまでもいるから悪いんだろ……！」

「ああ……？なんだその口の聞き方は……？」

「なんだ！やんのかよ！どうせ最終戦が始まつちまえばみんな死んでしまつんだ！やるんだつたら盛大にやっつてやるぜ……！」

ひい……息……が……ぐ……ぐ……ぐ……

そんなのどうでもいいから早くどいてくれ、と言いたかったが、やはり喋れない。そのうえ呼吸ができないのだから、刹那が気絶するのも無理はないことだった。

「ん……おい！！下敷きになってんぞ！！」

「え？……おい！！やべえ！！気絶してる！！」

「運べ運べ！！！！」

第58話 戦争編2

「刹那さ〜ん！起きてえ〜！」

「……………ん？」

目を開いて最初に見たのはリリアの顔だった。手の平で何回か頬をぺちぺちやっつて少し痛い。

ふう、と一呼吸し、起き上がる。ベッドだった。

「あ、起きた起きた。大丈夫？ 刹那さんったらもう気絶しちゃって家に運ばれたんだよ？」

「気絶？」

「うん。いきなり人ごみが倒れちゃって、みんな刹那さんの上に乗っちゃって」

……………リリアの言葉で思い出した。まるで水の中にいるかのように息ができず、そのまま重さに任せて気絶していった。……………もう二度とあんなのはごめんだった。

そういえば、ここはどこなのだろう。錆付いた金属の骨組みが見える天井と、自分寝ているベッドの他にまだ空きのあるベッドがたくさん並んでいる部屋を見る限りでは、ここがどこだかさっぱりわからなかった。

「……………ここはどこだ？」

「うん、兵隊の待機所だつて。刹那さんが倒れたから、みんなが運んでくれたんだよ」

なるほどな、と刹那は思った。兵隊の待機所というくらいだから、やはりこの世界は戦争をしているのだ。

「雷光と風蘭は？」

「外にいるよ。何でも鉄の臭いが駄目なんだつて」

・・・山育ちの人は鼻が利くのだろうか。なんとなく理由は納得できた。

「ん、誰だ？」

目の前の入り口から、男が顔を出してこちらをのぞいていた。男は頭に青いバンダナをしていて、茶色や黒色の染みがついた作業服を着ていた。無精髭を生やしており、煙草も吸っている。まさに大人という感じの男だった。

プカプカと煙を吐き出しながら、男は刹那の寝ているベッドに近寄った。

「で？ あんたら何やってんだ？ まだ召集はかかってないぞ」

どうやら、男は刹那たちを兵隊か何かと勘違いしたらしかった。こんなところで寝ているのだから、あたりまえだ。

「あの、実は・・・」

リアは男に事情を話した。人々にのしかかれて気絶し、ここに

運ばれてきた、という刹那の悲惨な事件を。

男は煙草をポッケに入っていた灰皿でもみ消し、刹那たちに言った。「なるほどな。でもここは軍人達の待機所だ。こんな場所で寝てもらっちゃ困る。寝るんだったら俺の家に来い」

「え？ いいのか？」

「構わないさ。こんなところで寝てられるほうがよっぽど迷惑だ。上司から怒られるのは俺だからな」

どうやらこの男は、この待機所の責任者の人間らしい。責任者であるがゆえ、刹那たちをこのまま見過ごすわけにはいかないのである。男はそのまま部屋を後にし、外へ出た。もちろん刹那とリアもあとに続く。

外では雷光と風蘭が鼻をすすりながら町の様子を眺めていた。……鼻をすすっているのは、おそらくこの町の鉄の臭いのせいだろう。

「あ、刹那さん。気がつきましたか」

「大丈夫？ あたし診てあげよつか？」

「大丈夫だよ。それより、今からこの人の家にお邪魔することになったからついてきてくれ」

雷光と風蘭に説明している刹那を見て、男は目を丸くした。

「おいおい、こいつらもかよ。俺の家はそんなに広くないぞ」

「お願いします。連れなんです」

「・・・仕方ないな。来い」

渋々男が納得し、一同は男の家へと向かったのだった。

+++++

「着いたぞ、ここだ」

目の前には、本当に小さな家があった。大きさで言えば、自分達のベースキャンプであるあの家の3分の1くらいだ。屋根も錆が目立っており、壁もところどころが剥がれているところもある。・・・小さくてぼろい、確かにこれでは入れそうにもない。

「・・・小さいね」

「そういうのは聞こえないように言っもんだぞ」

リリアが言ったことを、男は聞き逃さなかった。リリアは慌てて口を押さえるが、言ってしまったので意味がない。

だが、男はリリアの言ったことはまるで気にせず、家の戸を開けて言った。

「さ、入れ」

4人は男の後に続いて恐る恐る中に入る。

中には、何もなかった。テーブルも、イスも、ベッドも、キッチンも、生活に必要なものがまったくなかった。ただ、部屋の真ん中にぼつんと階段があった。上り階段ではない、下り階段だ。

男は刹那たちに手招きをすると、そのまま下っていった。

下り終えた階段の先にあったものは、上の部屋なんかよりもずっと広い空間だった。外装も上の部屋よりも立派なものだし、たくさん個室もある。・・・地下にこんな広い空間があったとは。

「おーい!!! ラクシー!!!!」

「あいよ」

男がそう言うと、奥の部屋から1人の女性が姿を見せた。年齢はこの男と同じくらいだろう。髪はピンクのショートで、やる気のない目をしている。体が小柄で、背はメンバーの中で一番小さいリリアより低かった。

そのラクシーと呼ばれた女性は、頭を掻きながら男に尋ねた。

「ん? 何さ」

「俺じゃなくてこいつだ。こいつ、何か色々あってな、寝たいらしいから準備頼む」

「あいよ。それじゃあんだ、こつち来な」

「え、いや、俺はもう大丈夫なんですけど・・・」

「? どゆことよ、ザイン?」

「俺にもわからん。大丈夫だって言うんだから、大丈夫なんじゃないのか？」

「なんだ、大丈夫なのか。そんじゃ、とつとアタシたちの愛の巢から出てけ」

「・・・愛の巣って言うんじゃない。それに、客に出てけなんて言うな」

「照れんなよ。本当のことだろ」

「あ、あの。すみませんが、今この辺りで何が起こっているんですか？武器を作るのに、町1つまるまる使うなんて、普通じゃないですよね？」

恐る恐る、雷光がたずねてみた。雷光が言ったことを聞いた2人はお互い顔を合わせると、不思議そうにたずねた。

「お前ら、どこから来た？」

「・・・ちよっと、旅をしまして。だから何が起こっているのかわからないんですよ」

旅をしている、という雷光の言葉で2人は納得したようだった。それなら、この状況を理解できないのも仕方ない。そんな表情をしていた。

「まあ、武器を作ってる時点で気がついてると思うが、戦争をやってる。もう何十年もだ」

「町ごと武器工場になってんのは、武器の生産が追いつかないため。それだけ戦争は世界中に拡大してる。だから、あんたらみたいにくこの戦争を知らないっていうのはとっても珍しいことなんだよ」

事情を聞いたとき、2人が不思議そうな表情をしたのも頷けた。世界中で戦争をしているのだから、知らないほうがおかしい、ということだ。

「最近、何か変わったこと、とかありませんか？ 例えば、敵軍の戦力が急激に強まった、とか」

「そういうのはないな。ただ、そろそろ決着が着きそうなんだ。長い戦争も、もうすぐ終わりになるさ。・・・ま、状況説明はこれくらいでいいだろう。次は、自己紹介としようか。ここで会ったのも、何かの縁だろ。俺はザイン、この町の総責任者だ」

「アタシはラクシー。こいつの嫁さんだよ。ちょっと聞いてくれる？ こいつねえ、結婚して2年経ってんのにまあだ襲ってこないんだよ？ 信じられる？ 本当に男なのかねえ・・・」

「余計なことは言つな。それじゃ、お前らのことを聞かせてもらおうか」

「えっと、俺は刹那」

「あたしは風蘭」

「リリア、って言います」

「雷光です。僕たちはみんな孤児でして、小さい頃から力を合わせて細々と暮らしてたのですが、色んな町や人たち、それに文化を見てみたくて、ずっと旅をしているんです」

・・・よくここまで口が回るものだった。雷光があまりに本当のことのように喋ったので、ザインとラクシーはすっかり信じ込んだようだった。

短い自己紹介のあと、ザインはポケットから煙草を取り出して口に銜えて火を点けた。すうくと吸い込んだあと、ふうくと吐き出す。煙が充満し、ラクシーはたまらず手でパタパタやって煙が来ないようにしている。

「ちょっと、煙いんだけど・・・」

「我慢しろ」

「まったく・・・」

「あの、ちょっと聞きたいんですが、さっき壁の所で人が集まったみたいですが、何があったんですか？」

間に割って入った雷光の言葉。ザインはもう一度煙を吸い込んで吐き出すと、話し始めた。

「命令文書だ。全軍突撃命令だとさ」

「ぜ、全軍突撃命令？」

「ああ。この戦争がずっと長くやってるのには理由がある。自分達の切り札を出し惜しみして、使えないモンからどんどん使っていっ

だからだ。おかげで、こんなに戦争が長引いちまったわけだ。だが、それももう限界。お互い、もう余力なんて残されてない。だから、もう切り札を使うしかないってことだ」

「まあ、その切り札がこの町の兵隊さん達、ってわけさ。アタシの住んでるこの町は、武器工房と同時に軍の選抜特別訓練所やってんの」

「・・・つまり、軍の中でも優秀な人たちを集めて訓練している、ということですね？」

「ああ、そうよ。ま、その一員に、アタシの旦那さんも入ってるわけだけどね。しかも、教官だってさ」

刹那たちは、一斉に煙草をふかしているザインのほうを向いた。普通の人よりも顔が怖いかもしれないが、教官をやっているほど戦闘に長けていそうには見えなかった。しかも、パツと見まだ20代くらいの若者だ。そんな若い人が、教官などという上の立場に立っているものなのだろうか？

ラクシーは胸を張りながら、自分の夫のことを自慢し始めた。

「アタシの旦那はさ、すごいんだよ。この国は実力主義だからほとんどん上の階級になっていつちやってさあ、給料もほとんどん上がっていったんだよ。それでね、元帥の階級まで貰える話になったんだけどさあ、そうなればアタシと一緒に過ごす時間が減る、とか言っただけ断ったんだよ。アタシのためにだよアタシのため。本当に嬉しかったね、そりゃあもう生きてて2番目くらいに嬉しかったよ。あ、ちなみに1番目はザインから結婚しよう、って言われたことね。あ、んときも嬉しかったねえ。もう思わず抱きついて思いつきり抱きしめたらさ、ザインったらもう苦しくて気絶してやんのさ。あはは、

本当にだらしなかつたねえあのときは。でもそんなザインが好き！
」

「・・・お前話長い。刹那たちなんて呆れてるじゃないか」

その通りだった。刹那たちはもう途中から何を言っているのかわからなくなったのか、口を開けてぼかん、としていた。まあ、早口を通り越したマシンガントークに、耳がついていけないのも無理がなかった。・・・悔りがたし、愛の力。と言ったところだろうか。と、そこで雷光が疑問に思った。全軍突撃、ということはまだか・・・。

「ザインさん、あなた、もしかして・・・」

「ああ、もちろん俺も出る。明日が全面戦争の日だ。張り紙に書いてある」

思った通りだった。全面戦争となれば、これが最後の衝突となるだろう。つまり、両国とも絶対に負けられない戦争なのだ。その戦争に、教官クラスが駆り出されないわけがない。ザインが出撃しなくてもよい、という理由など、どこにもないのである。でも、そうなったらラクシーはどうなるのだろうか？ ただ1人寂しくザインの帰りを待ち続けているのだろうか？

「あのさ、ザイン。あとでちょっと話しがあるんだけどさ・・・」

「？ わかった、あとでな。それより、お前ら、宿は取っているのか？」

「あ、いえ、まだ取っていませんが」

「だったら家に泊まれ。こんな日に宿のほうに行けば間違いなく戦争行きだぞ。宿にも長官クラスのやつがうるついでるからな。無理やり引っ張っていかれるぞ」

ザインの言うことも一理あるが、そもそもこの世界の通貨を持っていない。金がないのに、宿なんて取れるわけがない。・・・ここはザインの好意甘えることにしよう。

ザインに宿泊のほうをお願いすると、ザインはちょいちょい、と手招きして奥の部屋のほうへと歩いていった。

ついていった先には、大きな空間があった。真ん中には口の字に長テーブルが並べられており、1つのテーブルにつき、イスが3つ並んでいる。・・・どうやら会議室のようだった。でも、こんなところにどうやって寝ればいいのか？

「悪いな。ここしか大きめの部屋がないんだ。後で布団を持ってきてやるから、しばらくくつろいでろ」

そう言うとザインは部屋から出て行き、会議室には刹那たち一行が残された。

ザインが行ったのを確認し、雷光が話しを切り出した。

「この世界、どう思いますか？」

「俺は、畏は張られていないと思う。変わったことがない、っていうのがその証拠だと思うし」

「でも刹那、あたしらが来たときに決戦なんて少しおかしくない？」

「偶然だと思うよ、風蘭さん」

「僕もそう思います。あくまで僕達がこの世界に来たのは偶然です。たまたま合ってしまっただけだと思います」

「ん、そっかあ。そうかもしれないなあ」

風蘭も、何とか納得したみたいだった。

刹那たちのたどり着いた結論は1つだった。変わったことがない、とザインが言っている以上、現時点でこの世界には罠が仕掛けられていない。

簡単な判断だ、と思うかもしれないが、こればかりはどうしようもなかった。仮にザインの言っていた全面戦争が罠だったとしても、それを確かめるには危険を冒さなければならぬ。

今までの国は銃火器など使ってはならず、剣や弓などの古い武器ばかりを使っていたため、刹那たちは結晶などを駆使して確かめることができたが、この世界は違う。剣や弓などという甘っちょろいものは使わず、より殺傷力のある銃火器を戦争で使うのだ。

銃による戦争は、剣や弓を使った戦争よりもはるかに危険だ。射程だって剣よりもあるし、攻撃の速度だって弓よりも速い。

銃を使う戦争は、死者の数が半端ではない。どんな熟練した兵士でも、銃の前では無力だ。経験はもちろん役に立つが、死ぬときはあっさり死ぬ。逆に、新米の兵士でもうまくいけば何人も敵を葬ることだって可能かもしれない。・・・それが銃を使った戦争だ。それは、大博打のようなものだった。自分の命を賭け、相手の命を貰う。これを博打と言わず何と云えばいいのか？

それは刹那たちにも言える。いくら肉体の強化をできるからと言っても、額に鉛玉を当てられて生きていられるわけがない。避けようとしても、弓よりも速い弾丸を避けるなどということはとても難しい。しかも、それが四方八方から放たれるものならば蜂の巣になるのはわかりきっている。・・・そんな危険を冒すわけにはいかない

のだ。

「決まり、ですね。罿が張られていないのですから、できるだけ早いうちに帰還しましょう」

「でも、帰るのはせめて明日にしないか？せっかくサインに部屋を借りたんだし」

それもそうだ、と雷光は刹那の言葉に頷いた。

こうして、刹那たちはこの世界に一日留まることになったのだった。

第59話 戦争編3

「それで、話つてのは？」

ザインが刹那たちに部屋を案内したあと、椅子に座っているラクシーに声をかけた。・・・何か大切な話だろうか？いつものやる気のない顔と違って真面目な顔をしていた。

「あのさ・・・夜逃げしない？」

「何馬鹿なこと言ってるんだ。借金なんてしてないだろ」

「だって・・・明日になったら、あんた戦争に行くじゃん」

「・・・そのことなんだがな、今日の深夜に行くことにした」

「・・・は？」

ラクシーは、いきなりのザインの言葉に驚いた。全軍突撃は、明日のはずだ。それなのに、なぜ深夜にザインが敵地に赴く必要があるのか、さっぱりわけがわからない。

「まず、俺が最初に奇襲をかけて戦力を削ぎ落とす。ま、実力なら十分にあるから、5分の1くらいは削れるだろ。そのあとにこの国全体の軍隊と敵国の軍隊が衝突。戦力の減った敵軍はあっけなく負けて、俺たちの勝利ってわけだ」

「で、でもさ。それじゃあんた死ぬじゃん」

「ああ、死ぬな」

なぜ・・・なぜこの男は、こんなにもさらつと言えるのだろうか？
どうして、死ぬということが怖くないのだろうか？ どうして、
逃げ出そうとしないのだろうか？

「だったらなおさらだろ?! 逃げようよ!! 2人で!! 別に
便利なところじゃなくてもいいし、寒いところでも暑いところでも
いい!! あんたと一緒ならどこでもいい!! だから、一緒に逃
げよう!!」

ラクシーは、叫んだ。叫ぶように、ではない。本当に叫んだ。その
声は、何だか少し震えていて、心の奥に突き刺さるような、そんな
声だった。

ラクシーの説得を聞いたザインは、煙草を一本取り出して口に銜え、
火をつけずに言った。

「・・・俺が、どうして結婚してるのにお前に手を出さないかわか
るか？」

「・・・あなたにそんな度胸ないからでしょ」

「生まれてくる子供と、お前のためだ。いつ俺が軍に召集されるか
わからない。そんな中で、子供ができたら、お前と子供2人で暮ら
さないといけない。父親の顔を知らない子供が生まれてきて、その
子供が大きくなるにつれて、自分と周りの子供たちの違うところに
気がつくんだ。自分には、父親がいない、どうしてなんだろうって
な。疑問に思った子供はお前に聞く、どうして俺には親父がないん
だ、ってな」

そこまで言い終えると、ザインはポケットからライターを取り出して銜えていた煙草に火をつけた。もくもくと天井に上る煙は、いつもよりゆっくりのような感じがした。

「そうなれば、お前も子供も悲しい気持ちでいっぱいだ。いいことなんて、何一つありはしない。だから、俺はお前に手を出さなかったんだ。自分達の子供が悲しむことを知ってるのに、一瞬の感情で子供を作りたくなんてなかった」

煙草を深く吸い、ふう〜つと煙を吐き出す。煙草の先端から、重さに耐えられなくなった灰がぼろつと落ちた。

「別の相手を探せ」

「……え？」

「体を手をつけなかったのはそういう意味もある。戦争が終わってから出会う、俺なんかよりもっといい男のためにとっておけ。そして、そいつの子供を産んでやれ。父親も母親もいる、幸せな子供を産んでやれ」

パシッ！！

乾いた音が部屋いっぱいに広がった。

その音がして少し経ってから、ザインは右頬に痺れるような痛みに気がついた。

何が起こったのかわからなかった。ゆっくりと、ザインはラクシーのほうに向き直った。・・・ラクシーは、目に涙を溜めていた。少し上がっている手から、ザインは自分がラクシーに叩かれたことがわかった。

ラクシーの目から涙がこぼれたと同時に、口を開けてラクシーはそつと言った。

「ばか・・・」

ぎゅつと唇を噛みながら、ラクシーは自分の部屋に走っていき、叩きつけるようにしてドアを閉めた。

・・・ザインは、これいいのだ、と思った。悲しみは時間が癒してくれる。

ラクシーは自分のことを愛してくれている。自分を失ったラクシーは深い深い悲しみに襲われるだろう。それはもう立ち直れないくらいなの。

でも、月日が流れて、国が平和になって、治安も安定して、争いなんて起きない世界になったとき、ラクシーの悲しみは癒されるだろう。そして、そのときに現れるだろう。ラクシーと一緒にいてくれる自分に代わる大切な存在が。

自分で勝手に納得し、ザインはテーブルにあつた灰皿に短くなった煙草を押し付けて火を消した。・・・これから準備をしなければならぬ。忙しくなる。

ザインは、まず武器を移動用の車に詰め込むことから始めた。車は家の外にあつたため、家の中に隠してある大きめの銃火器を全て一人で運び出さなくてはならなかった。・・・肩に武器を担いで階段を上っている途中、額から汗が流れ落ちた。相当の重みが肩にかかってくる、それはもう重いというより痛いという感じだった。銃火器の金属が肩にめり込んできて骨に当たる。痛みに耐えて車に運び込んだ。

運び終えた後は車のタイヤ交換だった。もともとそんなに使う機会がなかったので、タイヤがボロボロになってしまっていて、どうやっても使えそうになかった。

ザインの車は大きめのほうだ。当然タイヤも大きい。だから、その大きなタイヤを地下から転がしてくるのにかなりの時間がかかってしまった。・・・一回だけ、階段を踏み外してタイヤが転がっていつてしまったが、壁にぶつかる前に追いついて止めることができたので、何とか音を立てずに済んだ。

次に、車の点検。先ほども言ったが、車を使う機会はそうない。ちゃんと良い状態でなければ長い距離は走れない。

車のエンジンをかけてみるが、ブルルル・・・と鳴るばかりで一向にエンジンがかからなかった。おかしいな、と思って給油計を見てみると、0になっていた。もう一度地下に降りてガソリンを持って来、給油タンクになみなみと注いだ。そのあとにもう一度エンジンをかける。・・・今度はちゃんとかかった。

運転席に乗り込んでライトを照らしてみる。これは大丈夫だった。ちゃんと光る。これで夜中でもちゃんと運転できる。

戦地に赴く足も、武器も準備できた。あとは・・・ラクシーのことと今泊まっている旅人達のことだった。旅人達は・・・たぶんラクシーがうまく説明してくれるだろうから大丈夫だ。難しいのは、ラクシーのほうだった。何て言って、何と書いて別れればいいものか・・・。

はっ、と我に返り、頭をブンブン振って今の考えを消す。そうだ、さっき別れは告げたくないか。これ以上何かを伝えるのは自分の自己満足だ。ラクシーのためじゃない、自分のためにしかならないじゃないか。

ザインは、ラクシーには何も言わず、何も書かないで家を出ることにした。

地下に戻り、刹那たち宛の手紙を書いたあとザインは自分の部屋に向かい、自分の机の上にある、はしゃいでいるラクシーとむすつと

している自分が写っている写真を手に取った。ずっと前、そう、結婚するよりも前に撮った写真だ。そのため、お互いが少し若い。ザインはまだ髭なんて生えてないし、ラクシーは髪が少し長いままだ。そしてそれを見て何かを思い出すようにして微笑んで、静かにその写真を胸ポケットにしまった。思い出の詰まった薄っぺらい、でも、とても大切な紙切れを。

準備は・・・全て整った。もうここにいる意味はない。まだ深夜ではなかったが、早く出て悪いということもないはずだ。ザインは階段を上ると、準備していた車の運転席に座ってキーを回してエンジンをかけた。そして、アクセルを踏む直前に、一度だけおんぼろで狭い自分とラクシーの家を見た。結婚して、ずっと2人きりで住んできた家。たくさんの思い出が詰まっている家。そんなこの家も、もう戻ってくることはないのだと思うと寂しくなった。

ザインは名残惜しそうにアクセルを踏み、この地を後にした。愛する人のために、この戦争を終わらせるため。

第60話 戦争編4

朝起きて、居間のほうに行ってみると一枚の紙がテーブルの上に乗っていた。メンバーの中で一番最初に起きた雷光はその手紙に目を通すと、すぐさま呑気に寝ている刹那たちを起こしに向かったのだ。

いきなり雷光に叩き起こされた3人は、一体何事かと雷光に尋ねた。雷光は3人にテーブルの上にあった紙を見せた。3人はその紙に書いてあった文章を見て、急いで外に飛び出した。

『今日中に決着をつける。もうたぶんこの家には帰ってこない。いや、絶対か。俺は死に行く。ラクシーはたぶん部屋の中で悲しんでいるだろうが、今はそっとしておいてやってくれ。時間が経てば大丈夫だ。それから、家はもう自由に使ってもいい。どうせ帰ってこない。好きにしてくれ。』
ザイン

階段を駆け上がり、勢いよくドアを開けた。刹那たちの目に飛び込んできたのは、細長く続いている4本の跡だった。雷光と風蘭、そしてリリアにはこの跡が何なのかわからない。刹那ただ1人が、この跡の正体を知っていた。

「これは……なんでしょうか？」

「……車のタイヤの跡だ。ザインは、もう戦争に行ったんだ……」

「いくら車といえど、ここまで深い溝の跡がつくわけがない。よほど重いものを車に詰め込んだのだろう。加えて、手紙に残した言葉。・十中八九、間違いない。車には、大量の銃火器が積まれていたのだ。」

「急げば、まだザインを止めることができるかもしれない。いや、間に合わなくても手を貸すことくらいはできる。そう思った刹那は、だっと走り出そうとしたが、雷光に阻まれた。」

「刹那さん、あなたどこに行くつもりですか？」

「どこって、ザインのところだよ。今から向かえば間に合うかも。・・・」

「間に合って、どうするんですか？」

「決まってるだろ?! 助けるんだよ!!」

刹那は信じられないといった声をあげた。恩を着せてくれた人を、わざわざ見殺しにしようとする雷光が信じられなかった。

刹那の言葉に、雷光はどう説明すればいいか考えた。いや、説明したいことはわかっているのだが、頭の中でうまくまとまらない。

すると、雷光に代わってリリアが説明を始めた。

「刹那さん。私達は、異世界に張られた罫を外すために旅をしている。この世界に罫は張られてない。だから、もうこの世界に私達は関わっちゃいけないの。戦争のことはこの世界のこと。罫のことに関連しないでしょ?」

「それは・・・そうかもしれないけど、でも！」

「仮に、仮にね刹那さん。この戦争、こっちの国の人が一方向的に仕掛けてて、相手国を滅ぼそうって考えてたらどうするの？ そうなったら、刹那さんは奪略国に手を貸すことになるんだよ？ 何の罪もない、ただ自己防衛のために戦争に出てた人をたくさん殺すことを手伝うことになるんだよ？」

「う・・・」

リアの言うことはもっともだった。罨の張られていない世界ならば、自分達が干渉する必要はない。干渉などするものならば、自分達も世界を狂わせている罨と変わらなくなってしまふ。

そして、この国が奪略国の場合、自分達は自己防衛のために戦っている民を殺す手伝いをする事になってしまふ。そんなのは嫌だ。それこそ、『神の使い』と同じ行為だ。絶対にするわけにはいかない。

だが、刹那はどうしても助けに行きたかった。そう、あれはレギスとイリーの世界のことだ。戦いに行くレギスとそれを待つイリー。ザインはレギスと似ていた。愛する人を守るため、死地に向かう。自分達がいたから何とかレギスは生きてイリーの元に帰ることができたが、今回は違う。レギスは生きて帰るつもりで戦いも赴いたが、ザインは死ぬ気だ。もう帰ってこない、と手紙にはつきり書いてある。

残されたラクシーは、どうなるのだろうか？ 夫に先立たれ、その苦しみに泣くのだろうか？ 時間が癒してくれるなどという根拠のない悲しみに浸るのだろうか？

「・・・わかった、助けには行かない。・・・ラクシーが心配だ、行く」

「わかりました。では・・・」

「た、大変!!」

息を切らしながら、風蘭は言った。・・・さっき刹那たちが口論している間に、ラクシーの部屋に行ってきたのだ。

風蘭は手に持っていた紙を刹那たちに差し出して言葉を続けた。

「ラクシーの部屋に手紙が!!」

雷光が真っ先に手紙を取り、目を通した。その背後から、刹那とリアモ覗き込む。

『アタシは待つのが嫌いだからサインに付いていくことにします。あとはよろしく、もう戻ってこないのよ』

・・・短い文章だったが、とにかくラクシーも戦争に行ったことはわかった。2人の住んでいたこの家は、一夜にして無人となってしまった。

「・・・はあ」

軽いため息をついたのは刹那だった。だが、それ重く苦しい気持ち吐き出すためのため息ではなく、安心したときに出るため息だった。

正直、よかった、と思った。だって、死ぬとしても2人一緒だから。戦争に行つて死ぬのはとても悲しいことだけど、2人が一緒に死ぬ

ばラクシーが悲しむこともない。だから、よかったと思った。

「・・・帰ろつか、みんな」

リアリアが言った。そうだ、帰ろう。この世界は、もう大丈夫なのだから。

刹那は思った。たぶん、2人は死なない、と。戦争が終わっても2人は死なず、一緒に平和な世界を生きていると、そんな気がした。

+++++

見えてきた、いよいよ最終決戦の地だ。相手の陣を見る限りでは静かなものだ。おそらく、休息しているのだろう。そこを一気に叩く。もう後には引けない、ここまで来てしまった以上もう戻ることはできない。

乗っていた車から降り、その車に引かせていた荷物にかかっているシートを取る。この中に積んである銃火器を遠距離から撃ち、接近してきたときにはいう形をとろうマシンガンで蜂の巣にしようと前から決心してきたのだ。それに何度も何度も荷物を丹念にチェックしてきた。

だから、中の荷物に間違いがあるなどザインには想像できなかった。間違いと言っても、武器を全部忘れてきたとかそういうものではない。銃火器もあるし、大量の弾丸もある。だが、1つだけ、いや正確には1人だけ余計なものがあった。

「ラ、ラクシー、なんで・・・」

「ついてきた。やっぱ、私……あなたがいないと駄目だわ」

頭を掻き、照れくさそうにてへへ、とラクシーは笑った。昨日散々言ったのに、自分1人で行くってあれほど言ったのに、ラクシーはついてきた。

ザインは呆れ顔をしていたが、一変、無表情になって言い放った。

「お前は後悔することになるぞ。お前はこの道を選んだことを、行き先が地獄だつてわかってるこの道を選んだことを絶対に後悔する」

「……しない」

口を閉ざし、黙っていたラクシーがザインの後に続けて言った。

「私が選んだのは戦いで死ぬ道でも、ましてや地獄に通じてる道でもない」

迷いのない真っ直ぐな目でザインの目を見て、ラクシーは言った。

「私が選んだのは、あなたの隣にいる道。あなたに惚れたあの日から、私はずっとあなたの隣にいるっていう道を決めたんだ。あなたの子供産んで、家族みんなで幸せに暮らして、死ぬまですっと一緒にいるんだ。あなた以外の男なんて死んでもごめんだよ。あなたじゃなくちゃだめなんだ。だから、あたしはあなたの隣にいる道を選んだ。……自分の決めて進んだ道なのに、何でその道を選んだことを後悔しなくちゃいけないのさ？」

言い返せないザインに、ラクシーはふぶん、と胸を張って言ってや

った。自分の選んだ道を、ザインに言っただけでやめた。

ザインはそのときに悟った。

もしも、人の道を自分が変えることができるのなら、ラクシーに破壊の道を選ばせなかつただろうと。

もしも、人の道を自分が変えることができるのなら、決して生き残ることのできない戦いに愛する人を連れてなど来なかつただろうと。

だが、人の道を自分が変えることができなかったからこそ、ラクシーはザインの隣にすることができた。愛する人を1人戦場に行かせず、2人一緒に戦場へ向かうことができたのだ、と。

ザインは折れたのか、はあとため息をつくなり、荷物の中にある銃火器の1つをラクシーに投げ渡した。

「お前は俺の隣にいるって道を選んだって言ったよな？」

「ああ、言っただけ」

「じゃあ、俺が歩いていく道はお前が歩く道になるんだな？」

「ああ、そうだぞ」

ザインはこの戦いを終わらせるつもりだった。自分の命を引き換えにし、両国に平安をもたらすつもりだった。だが、そういうわけにはいかなかった。自分が死ねばラクシーはどうなるのだ、という心の声がザインの考えを変えた。

ザインは銃火器を手に取り、敵陣に長い銃身の先の銃口を向けた。

「俺の歩いていく道は、この戦いに勝って生きることだ。お前も同じだ、この戦いに勝って生きる。そして戦いが終わった後、俺の子供を産んでくれ。男と女1人ずつな。どっちも俺似のやつを頼む」

「あいよ！ 私の旦那さん！！」

同時に引き金を引いた瞬間、ザインの銃口からは巨大な火の塊が飛び出し、敵陣に入ったところで大爆発した。畳み掛けるように、ラクシーの銃の口から無数の弾丸が絶え間なく飛び出す。こうして、この世界最初で最後の大戦争が幕を開けた。

この戦いの幕が閉じたあとの話だが、結果は引き分け。ザインとラクシーの奮闘は、大して意味を持たなかったとのこと。戦争の主力が破られ共に戦力の喪失、このまま続けても意味がないと、至極当たり前のことに気がついた両国は平和条約を結んだのだった。

ちなみに、戦争後のザインとラクシーの行方は不明となっている。死んだところを見たという証言もないし、生き延びているところを見たという人もいない。

2人は一体どうなったのだろうか？ わからない。

最後の戦いで共に戦死したのか。あるいは生き延びて、小さな村の小さな家で2人の子供に囲まれて幸せに暮らしているのか、わかる由もない。

+ + + + +

遠くで誰かが呼ぶような気がする。それは何とも言えない不思議な声。肉声じゃない、囁くような、天から降ってくるような、そんな不思議な声。

.....

聞き取れない。でも確かに声はするのだ。不思議な声で、自分に語りかけてくる。それがわかっているのに、どうしても聞こえない。

.....

次第に声はつきりしてきた。もうすぐ聞こえるだろう。その声の正体も、自分に何を語りかけてくるのかも。

.....聞こえるかい？

ああ、やっと聞こえた。その不思議な声がやっと聞こえた。聞こえたんだから返してやらないといけない。

「ああ、聞こえる」

・・・よかった。

「・・・俺は、誰だ？ お前は、誰だ？」

そして、その声の主に尋ねる。自分は何者か、語りかけてくるお前は何者か、と。

・・・君は君さ。他の何者でもない。

「そうか」

別に自分のことはどうでもよかった。なぜこんなところにいるのか、なぜ体がないのか、なぜ体がないのに考えることができるのか、喋ることができるのか、そんなことはどうでもよかった。

ただ、気になるのは自分に語りかけてくれる存在。それが何者なのか、ただそれだけが知りたかった。

「お前は、誰だ？」

・・・気になる？

「ああ、気になる」

・・・その前に、君に聞かないといけないことがあるんだ。

「何だ？」

・・・今から僕は世界を創る。

「世界だ？」

・・・そう、世界だよ。今の世界は腐ってる。全て壊して、新しい世界を創るんだ。誰も傷つかない、誰も苦しめない、誰も悲しまない。誰もが幸せな毎日を送れる、そんな世界を創るんだ。

「・・・で？」

・・・君に協力して欲しい。

「断ったらどうする？」

・・・そのときは仕方ないさ。君を普通の世界に転生させる。普通の人として、普通に生きるんだ。

「俺が協力すれば、何か得があんのか？」

・・・それはわからない。新しい世界に何が待っているかわからないからね。それが君にとって得なことなのか、わからないんだ。

「・・・それなら、お前にとっては得なのか？」

・・・うん。そうなるように創るんだ。いや、創ってみせる。きつと、きつと創ってみせる。

「根拠は？」

・・・ない。でも自信はある。僕は創ることができる。全てを壊して、新しい世界を創る。

「・・・何がお前をそうさせる？」

・・・憎しみと、怨みと、悲しみ、だね。つまらない理由だと思っ
かもしれないけど、僕にとってはそれが全てなんだ。僕は、この世
界を創った神を絶対許さない。僕が神になって、新しい世界を築く。

「・・・いいだろう」

・・・え？

「協力してやる。お前の創る世界を見てみたくなった。俺を使え。
利用しろ。倒れそうになったら寄りかかれ、上に行きたきや踏み台
にしる、落ちたくなかったら手を掴め。俺がお前の手足になってや
る。邪魔なやつはみんな俺が壊す。俺が・・・」

・・・ありがとう。でも僕は、協力を求めただけで、利用するとか、
そういうんじゃないんだ。みんな協力して、みんなで創るんだ。
僕らの望む理想郷を。

「・・・わかった」

・・・それじゃあ、君を君の体に入れるよ。

「その前に、聞いておくことがある」

・・・なんだい？

「俺の名前とあんたの名前だ」

・・・忘れてたね。君の名前はシャドウ。僕の名前は

「・・・ん？ 夢、か」

ベッドの上で、シャドウは呟いた。懐かしい、一番最初にあった出来事がそっくりそのまま夢になっていた。・・・慣れない睡眠なんてするもんじゃねえな、と、シャドウは起き上がった。

右腕はもう十分回復している。元通りになったし、以前のように動かせる。おそらく戦闘のほうも問題ないだろう。

念のため、右の拳をグーパーさせてみる。・・・よし、ちゃんと動く。あいつの技術能力には感謝しねえとな。失った腕を、トカゲが尻尾を再生させるのと同じように回復させる驚異的な技術は、全異世界を探してもここだけだろう。

「うし・・・行くか」

シャドウは立ち上がり、自動で開いたドアをくぐると、神の魂の器を破壊するため再び異世界へと赴くのだった。

第60話 戦争編4（後書き）

さて、いかがでしたでしょうか今回の物語は？^{せかい}

どの世界にも戦争はあるものです

理由は実にくだらな^いことなのか

あるいは引いてはいけない大切なことなのか

いずれにせよ、戦争が起こる根本的な理由は『感情』であります

感情さえなければ大量の命が失われる戦争などしないはずですからね

さて、次回の物語は操り人形編^{せかい}

あの罫が再び襲い掛かる様をお楽しみください。

第61話 操り人形編1

やっぱりあいつは優しすぎる

何であの時俺を殺さなかった……

あの時俺を殺していれば

あいつが死ぬことなんてなかったのに……

レオ達が向かった世界は、都会だった。王国とか、町とか、そんな古い都市ではなく、刹那の世界がもう少しだけ発展したような感じの大都会。

時間は夜であるからか、人の姿はほとんどない。あちこちには高層ビルが立ち並んでおり、街灯が夜の暗闇を照らしている。しかし・
・不気味だった。街灯のおかげで暗闇が和らいでいるものの、人がいないだけでこれだけ不気味になるものとは知らなかった。

都会の不気味さを感じている4人だったが、何よりも初めて見る高いビルに目を奪われていた。それもそのはず、4人の世界はこの世界よりも発展はしていないのだ。こんな建築物、見る機会などなかったのだろう。どうやって建てたのだろうか？ なぜこんな高い建物があるのか？ などと、それぞれ考えながら興味深そうにビルを見上げていた。

「……ん？」

何か黒い物体が、見上げているビルから落ちてくる。・・・何だ？
暗くてよく見えない・・・。目を凝らして見てみるが、周りが暗くてどうしても見えない。

その物体は自分達めがけて落ちてくる。このままだと誰かに直撃してしまうかもしれない。そう思ったレオがみんなに避難するように呼びかけようとしたそのときだった。

その黒い物体のほうから、パパパパ、という重なった銃声が聞こえてきた。銃に詳しいレオは音を聞いただけでわかった。軽くて連なっている音を出しているこの銃は・・・マシンガンだ。つまり、黒い物体は自分達にマシンガンを発砲し、攻撃したということだ。

「っち、いきなりか・・・!!」

レオは舌打ちをし、ホルスターに入っている神爆銃を両手に取り、構えた。レオの手がぼう、と黒く光り、マガジンの中に一発の弾丸が装填される。瞬間、レオは引き金を引き、閥属性の弾丸を自分たちよりも少し離れた地面に発射した。

マシンガンの特徴は、短い時間で何発もの弾丸を撃てる連射性能。だが、連射できるといっても狙いは確実ではない。連射の代償として、狙いの性能はハンドガンに比べればずっと低い。

だが、それを利用した撃ち方として弾幕を作り出す、というものが挙げられる。単発としての命中率は低くとも、弾幕ならば話は別だ。この撃ち方ならば広範囲に弾丸が撃てるし、命中率だって格段に上がる。

レオはそれをわかっていて弾丸を放った。広範囲に撃たれたのなら避ける術がない。かといって防げるというわけでもない。だったら、『弾幕そのものを自分達から逸らせばいいのだ』。

地面に打たれた弾丸は黒いドーム状の空間を作り、空中から放たれた弾丸は軌道を変更し、全てその黒い空間に入っていた。・・・

弾丸そのものはあまり重量がないので、レオが短時間で作った弾丸でも簡単に引き付けることができたのだ。

弾丸を全て飲み込んだドーム状の空間は弾の効果は切れて消え去った。それを確認すると、一同は弾丸をばら撒いてきた原因である落ちてくる物体に目を向けた。街灯の明かりが暗闇を照らす範囲に物体が入った瞬間、その物体の正体は明らかになった。

「・・・ああ？ 人かあ？」

落ちてくるものは物体ではなく、人。暗闇に紛れていたのは身に着けている黒い服のせいだろう。黒いフードは顔から頭をすっぽり隠しているため、顔からは男か女か判断できないが、ガツシリとした体から男を連想させる。その男が真っ直ぐに伸ばしている手には・・・自分たちを撃つてきた小型のマシンガンが握られている。丸くて細い銃口に、銃全体が角ばっている。弾丸を一回で大量に放てるような構造になっていることは、ハンドガンよりも大きいサイズそのものが物語っていた。

男は落下しながらも、もう一度レオ達にマシンガンの銃口を向け、引き金に指を当てた。そして指を引き、弾丸が発射されるという一瞬のタイミングで、男の手からマシンガンが離れた。

いや、離れたというのは正しくない。弾かれた、もしくは破壊された勢いで吹っ飛ばされた、というのが正しいか・・・そう、レオが反射的に神爆銃で男のマシンガンを撃つたのだ。時間がほんの一瞬しかなかったため、何の属性も付加されていない弾だったが、男の手から銃を奪うには十分。男は武器を失ったまま落下してくるようになる。そこで、捕獲する。

「・・・」

フードで表情がわからないが、男は武器を持っていないというのに

動揺した態度は見せなかった。このまま落下すれば敵の中心に突っ込むというのだ。……おかしい、何か隠しているのか？
隠す？ 武器を……隠している？

男が懐に手をつっ込んだ瞬間、雷牙は足を曲げ、男に向かって跳んだ。……勘が働いたのだ。懐に手をつっ込んだ以上、何かを出してくるのは十中八九間違いない。それを……防ぐ！！

自分の間合いまで跳んだとき、男はやはり懐から武器を取り出した。俗に言う、サバイバルナイフだ。鋭く研がれたナイフは、暗闇の中でも光ほど磨きあがっていた。

男は迷うことなく、その鋭いサバイバルナイフで雷牙に切りかかった。空中にいる以上、身動きが取れない。こんなに近い距離だ、身をよじってかわすことなど不可能。つまり、目の前にいる敵にほぼ確実に命中させられるということを前提に、男は切りかかったことになる。

……だが、そこに生まれる油断と隙が命取りとなった。

「おらぁッ！！！！」

「！！？」

絶対命中するという一瞬の隙を、雷牙は逃さなかった。自分を切りつけに振るわれたナイフの軌道に、自らの足をうまく合わせて男の手首を蹴り、ナイフを弾き飛ばした。鋭利なそのナイフはくるくると回転しながら飛んでゆき、コンクリートでできたビルの壁に深々と突き刺さった。

「ッしゃああ！！」

「！！？ ツが……」

蹴りの勢いを使い、雷牙はそのまま男の腹部に拳を入れた。男はた
まらず声をあげ、そのまま脱力し、落下していった。

「よっと」

そのまま落ちていけば、この男の体は容赦なく地面に叩きつけられ
る。それを避けるため、雷牙は気絶している男を空中で抱きかかえ
て着地した。

「そんで、何でこいつは俺たちを襲ってきたんだ？」

「それはわからないが……」

レオは銃を構えて、ビルの一角に銃弾を打ち込んだ。ビルの壁に弾
丸が突き刺さり、1つの穴が開いた。

「出て来い。なぜ俺たちを襲う？」

レオがそう言うと、弾丸がめり込んでいるビルの陰から男と同じ格
好の女が出てきた。全身が覆われているのに女だと理解できたのは、
小柄で体が華奢だったからだ。

女は顔を隠していたフードを取る。……歳はレオよりも少し
下くらいだろう。幼い顔立ちには似合わない鋭い眼光をしている。
その目でこちらを睨みつけている。威嚇のつもりだろうが、レオは
別に動じた様子を見せず、落ち着いた声で女に言った。

「なぜ俺たちを襲う？俺たちは別に何もしてないし、何もしよう
としていない」

「……こんな時間に外を出歩いていて、何もしようとしてい

ないなんて信じられない」

「だからそれは……………」

「だから、排除する」

レオの言葉を無視して一方的に喋ると、女はすつと体勢を低くし、腰のホルスターにセットされていた拳銃を取り出した。手にした拳銃は、男の放ってきたマシンガンタイプではなく、単発式のリボルバータイプのもだった。

女は一瞬で銃を構え、弾丸を放とうと人差し指に力を入れ、発砲しようとした。だが、

ズガンッ！！！！

女の拳銃は弾丸を発射せずに女の手から離れた。レオがグリップの底を狙い撃ったのだ。

レオの銃は神器で、弾丸は結晶だ。並の金属で出来た銃など、その2つの前では紙で作ったおもちゃに等しい。拳銃は弾き飛ばされるというよりも、分解されながら女の手から離れていった。

「……………」

「もう一度言う。俺たちは何もしてないし、何かしようともしてない。俺たちはこちら辺に着いたばかりでこの町のことがよくわからなかったんだ。どうすればあんたと戦わずに済むんだ？」

女はレオの問いに答えず、じつとレオ達を睨みつけていた。レオも言うことは言ったのだから何も言わない。他のメンバーも同じだ。お互い何も喋らず、硬直状態が続いた。

数秒か、はたまた数分か経った頃、鋭い視線をレオ達に注いだまま、女は口を開いた。

「……夜に出歩かなければいい」

「そうすればあんたらと戦わなくていいのか？」

「そうなる。私達はこの町の警護をしているから、あなた達みたいな夜遅くに出歩いている人間を始末する必要があった」

「なるほどな。そんじゃ、こいつはあんたの仲間ってわけか？」

雷牙は抱えている男を差し出すようにして女に尋ねた。

「……そう。返してもらえる？」

「ほらよ、気絶してるだけだから安心しな」

女は男を雷牙の腕から受け取ると、器用に背中に背負い込み、そのままレオ達に背を向けて歩き出した。先ほどまで敵視していたレオ達に、背中という隙を見せて堂々とだ。これは……もう敵意がない、ということなのだろうか？

「おい、ちょっと待ってくれ。俺たちはこれからどうすれば」

「適当に宿を取って今夜は大人しくしていればいい。真っ直ぐ行って突き当たりにあるはず」

それだけを言い残して、男を背負った女は闇の中へと消えていった。女の気配が完全に消えたところで、風花が最初に口を開いた。

「……なんだったの？ さっきの女の子？」

「警護してるって言ってたよな。そんじゃ、この世界には何かあるってことじゃないのか？」

「それは早とちりすぎだと思う。警護なんて、町じゃ当たり前。私の世界も、夜は絶えずに見張りを立ててたよ」

レナの言う通りである。夜は薄暗く、敵が来ても認知しにくいため奇襲にもってこいの時間帯である。そのため、いつ敵が来てもいいように、夜は絶えず見張りを立てておかなければならない。見張りを立てず敵に侵入され、あっけなく町を制圧されて国をのっとられました、ということになっては遅いからだ。

しかし、見張りはそういつた外敵からの侵入を防ぐためだけに存在しているのではない。国内や町中で起こる事件、犯罪行為を抑制する効果もある。例えば放火をするとする。時間帯はやはり人気のない夜を選ぶ。ならば場所は？ もちろん見張りのこないところや、目の届かないところでやるだろう。理由は簡単、見張りに見つかれば全てが台無しになるからだ。

つまり、見張りがあるだけで放火できる場所は少なくなるのだ。見張りがいなければどこで放火しても構わないのに、見張りが居れば

途端に場所が限定されてしまう。

だから大半の国は夜の警護は欠かさない。雷牙の言うように、外敵がいるから、というだけで一時的だけ見張りを置く国はそうそうない、とレナは言っているのだ。

「……とりあえず、移動しよう。この国の警護があいつら2人だけとも限らない。他のやつらに見つかればまた面倒なことになるぞ」

レオの言葉に一同は頷き、その場を後にした。

第62話 操り人形編2

散々話し合った結果、明日に町で話しを聞きこみ、何も情報が得られなかったらこの世界を去ろう、ということになり、レナと風花は隣の部屋へと戻っていった。

「ふあゝ……………。夜になると、何もしなくても眠くなるぜ……………」

大きな欠伸をして、雷牙はベッドに潜り込んだ。そんな雷牙を見て、レオは呆れたように言った。

「おいおい、俺たちは図書館の世界が昼のときにこの世界に着いたんだぞ？ 寝るのにはまだちょっと早くないか？」

「んなこと言ってもなあ……………。日が落ちると自然に眠くなるんだよ。それによ、朝にならなきゃどうせ俺たちは動けねえんだろ？ だったらやっぱり寝るしかねえじゃんか」

「……………まあ確かにそうだな」

「だろ？ んじゃ、そういうことで俺は寝るぜ。おやすみ……………」

「……………呆れたやつだな」

レオがそう言ったその瞬間だった。

ゴオオオオオオオオン！！！！！！

爆薬か何かで爆破し、建物が崩れ落ちるような轟音が町中に響き渡った。……こんな音、普通出ない。意図的にやらなければ絶対起きない音だ。何かあったに違いない。そう思い、レオは窓から町の様子を窺った。

「……………っち、やっぱりこの世界にもいやがったか」

すでに、町は火の海だった。先ほどまで物静かな町だったと言っのに、こんな短時間のうちに変わってしまうことに驚かされる。警護が回っているというのに関わらず、見つからないままここまでやるなんて、並大抵のやつにはできっこない。十中八九『畏』の仕業だろう。……今回の畏は相当の『やり手』だ。このまま何もしなければ、きつと町はもっと酷いことになる。せめて、これ以上の被害が出ないように防がなければ……………！！

「おい、雷牙！！ 起きろ！！」

「んあ……………？ もう朝か？」

「何寝ぼけてんだ！！ 戦闘だ！！ とつとと起きろ！！」

『戦闘』の単語が耳に入ったせいか、雷牙はぱっとベッドから起き上がり、枕元の小さなテーブルから神裂爪・龍を手に取り、5秒もかからない速さで装着した。・・・どうやら、寝起きは悪くないらしい。

「いつでも行けるぜ」

「よし。あとはレナと風花だが・・・来たか」

そう言った瞬間に勢い良くドアが開けられ、戦闘準備を済ませたレナと風花が入ってきた。

「敵だよね？ どうする？」

「やっぱりいゝ、罨あゝ？」

「たぶんな。それじゃあ役割分担だ。風花とレナは町の負傷者の治療を頼む。俺と雷牙は罨を撃破する。何か質問は？」

レオがそう言うと、レナが手を上げて言った。

「私も戦えるけど、どうする？」

「そうすると、風花を守るやつがいなくなる。罨が俺と雷牙とすれ違いになって、無防備な風花を攻撃されたらアウトだからな。それに、レナは魔術を使って回復させることができるだろう？ たぶん、今回は負傷者がかなり多い。そう意味でも、レナには治療班に当たってもらった」

「わかった」

「もう質問はないな？ よし、それなら俺と雷牙は罾を討伐に向かう。2人とも、頼んだぞ」

そういい残し、レオと雷牙は部屋を出た。……これ以上、罾に好き勝手させるわけにはいかない。早く撃破しなければ……。

「雷牙君」

「ん？ 何だ？」

雷牙が部屋を出る寸前のところで、風花が口を開いた。何だろう？ と、雷牙は振り返る。

「怪我しないようにねえ」

「……おっ」

そう言って、雷牙は今度こそレオと罾の討伐へと向かった。

「それじゃ、私達も頑張りましょうか。たくさん怪我人がいそうですし」

「うん。ああ、それとねえ」

「はい？」

「敬語止めてねえ？ 慣れなくてえ」

「・・・わかった。それじゃ行く、風花」

「うん」

++++

どこにいるかわからない敵をでたらめに探すよりも、勘が人一倍優れている雷牙に任せるほうがよっぽど見つけるのが早い。迅速に敵を撃破しなければならぬこの状況の中、雷牙の勘に頼るのは当然の判断だった。

「雷牙！！ 敵の位置は？！」

「あっちだ！！ あっちにいる！！」

レオの期待通り、雷牙の勘は恐ろしく冴え渡っており、すぐさま撃破すべき敵の位置を察した。しかし、いくら勘が冴えているといっても、敵が何体いるのか、どんな敵なのかまでは、直接視認するまでわからない。

雷牙の言う方向へしばらく走り続けていた2人だが、レオがしびれを切らして叫ぶようにして雷牙に聞いた。

「くそツ！　まだか?!」

「まだまだ!!　そんなにカツカすんじゃねえ!!」

レオがあせるのも無理はない。今移動しているこの瞬間にも、どんな犠牲者は増え続けている。先ほどまで静かだったこの町を、数分で火の海にした『畏』を、一刻も早く撃破しなければならぬ、という思いが、常に冷静沈着のレオの精神を乱していた。

「ん?!」

「どうした雷牙!!　敵か?!」

「違う!!　人だ!!　人が倒れてる!!」

雷牙の指差した方向には、1人の男性が倒れていた。腹を押さえ、微かに呼吸をしている。・・・生存者だ。レオと雷牙はすぐさま倒れている男性に近寄り、腹の傷に障らないようにそつと抱き起こした。

「おい、大丈夫か!　何があつた!」

「は、反逆だ……。見回りのやつらが、裏切りやがつた……。町に火を点けて、たくさん人を切り捨てた……。くそ、何でだ……。全然そんなことするやつらには、見えなかったのに……」

「?!　そいつら、反逆を起こすようなやつじゃなかったのか?」

「ああ……。むしろ、積極的にこの町に尽くしてるやつばっ

かりだった……。なんで、あんなことが……………」

そう言うと男性は脱力し、そのまま動かなくなった。レオが手首を触ってみるが、脈の動きは感じられなかった。

レオはそつと男性を寝かせると、すつと立ち上がった。

「……………レオ、これって洗脳か？」

「断定はできないが、そういった能力だろうな。傷つける意思のない人間を無理矢理動かして一般人を傷つける、最低な能力だ。……………ほら、来やがったぜ」

そう言うと、レオは銃を構えた。その方向から、銃を持った男が3人やってくるのが見えた。

「どうするよ？」

「気絶させるのが一番か。頼めるか？」

レオの持っている銃は気絶させるのには不向きな武器である。飛び道具だし、もともとレオは格闘があまり得意ではないから、男たちを殴ったところで気絶させるのは難しい。ここは慣れている雷牙に任せるのが一番だ。

「任しとけ！」

雷牙は勢いよく男たちの方へ走り出した。もちろん、男たちが黙って雷牙を接近させるわけがない。一斉に雷牙目掛けて手に持っている銃を構え、人差し指にかかっている引き金を引こうとする。が、

ズガガガン!!!

レオが男たちに撃たせる前に銃を狙撃し、雷牙を援護する。そのことがわかっていたのか、雷牙は男たちに急接近し、それぞれ腹、頭、首に掌底を叩き込む。雷牙も、それで決まったと思ったのだろう。レオの方へと引き返した。

しかし、男たちは倒れなかった。雷牙の掌底を食らったというのに、も関わらず、腰の剣を引き抜いて雷牙の後ろ

「雷牙!!! 後ろだ!!!」

「何!!!??」

雷牙の振り向いた先には、確かに気絶させたはずの男たちが、腰の剣を抜いて襲い掛かってくるのが見えた。

おかしい。確かに気絶させたはずだ。どこか力加減が間違っていたのだろうか？ もしかしたら、力が弱すぎたのかもしれない。・・・いや、そんなはずはない。むしろ強すぎたくらいだ。あれだけの力を込めて殴れば、いくら訓練した人間だって普通に気絶する。肉体強化できるのなら話は別だが、殴ったときの肉質はごく普通の柔らかいものだった。

それならば、なぜだ？ なぜこいつらは気絶しないで向かってこれるんだ？

「つち!!」

考え込んでいる暇などない。もたもたしているところつちがやられてしまう。雷牙は一旦男たちとの距離を取った。とにかく、打開策を考えなくては……。

「どうする?! 倒れねえぞ!!」

「……たぶん、『催眠』か『操作』のどつちかだ」

「んあ? なんだそりゃ?」

「畏の能力だ。意識があつて反乱を企ててるんだつたらさっきの前の掌底で気絶してるはず。それなのにあいつらは気絶するどころかダメージなんかお構いなしに向かつてくる」

言われてみればそうだ。気絶させるつもりでやったのだから、それなりのダメージは食らっているはず。加えて、掌底を入った場所は腹部だ。内臓が詰まっている箇所には衝撃が加わったら相当なダメージがいくはずなのに、この男たちは構うことなく向かつてくる。これはどう考えてもおかしい。レオの言うとおり、畏が『催眠』をかけているか『操作』しているのだろう。

「『催眠』にせよ、『操作』にせよ、本体を叩けば効力は失せるはず。逆を言えばこいつらを相手しても本体には何の影響もない」

「じゃあ逃げるしかねえのかよ?!」

「そついうことだ!! 突っ切るぞ!!」

勢いよく走り出したレオの後から雷牙が続き、2人は男たちの間を
潜り抜けて先へと進む。

男たちは2人の後を追うが、追いつくことはできない。肉体強化の
全力疾走に、普通の人間が、ましてや操られている人間が追いつけ
るわけがない。

2人は全力で走り出す。炎の中心へと、畏が待ち受けている炎の中
へと。

第63話 操り人形編3

「はぁ・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・」

サリアは逃げていた。逃げるしかなかった。戦うことなどできなかった。武器を向けることなんて絶対できなかった。だから、ただただ無様に敵に背を見せ走るしかなかった。

「はぁ・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・」

炎はだんだんと広まっていつており、サリアの逃走経路を徐々に狭めていった。もう辺り一面は火の海で、右を見ても左を見ても炎しか見えない。逃げる道は今走っている道一本しか存在しない。横に行こうものならばたちまち全身を炎に包まれてしまう。

「ぐ?!・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・はぁ」

サリアの走っている道は足場が悪かった。建物が崩れたせいで、そこらじゅうに瓦礫やら機械やらが転がっていて、いちいち躓いてしまう。普段だったら躓くなんてことはないのだが、今は足元を見ている余裕がなかった。前しか見れなかった。後ろから追ってくる敵を見る余裕だつてなかった。

「ウフフふ。逃げるねエ。遠慮せずに攻撃すればいいのにネ」

後ろからそんな声が聞こえるが、無視した。今はそんなのに構っている暇などない。とにかく逃げなければ。逃げて、考えなければ。何でもいい、打開策を考えなければならぬ。

だから、走らなければならぬ。迫ってくる敵から逃げなければな

らない。少なくとも、今は。

「……でも、ちょっと追うのも飽きてきたかなア？」

アビスが動かすと、『人形』が手に持っている銃でサリアを撃った。前ばかりしか見ていないサリアに避ける術などない。銃弾はサリアの足を掠めた。……外れたのではない。わざと掠めさせたのだ。

「?!」

右足の不意な痛みに驚き、サリアは転倒した。そして、自分を撃つよう『操作』したアビスを睨みつけていった。

「……卑怯者」

「何がだい？　そう思うんなら、遠慮せず攻撃デも何デもすればいいじゃないノ？」

「……できるわけ、ない」

そう、サリアは攻撃しなかったのではない。できなかったのだ。アビスが『操作』している『人形』は、自分を先ほど撃った『人形』は、

「……もう限界だ、覚悟決める。いいな、サリア」

紛れもない、自分のパートナーである、ライツだったからだ。

アビスはライツを操作して、サリアを襲わせたのだ。

面白半分で。

ゲームか何かを楽しむかのような、

何も抵抗ができない小動物を

へらへら笑いながら追い詰めるような、

そんな感覚で。

「・・・嫌。絶対、嫌」

首を横に振って、サリアは拒否した。

サリアは今まで、任務という任務をこのように拒否したことなどなかった。上の命令には逆らってはいけないということもあったし、やらなければならない、という義務感のせいでもあったが、とにかく任務は確実に遂行することを心がけていた。それがサリアの性格だったし、それがサリアの全てでもあったからだ。

任務こそが全て。上の命令は絶対に聞き入れ、反論したり拒否したりしてはならない。今までサリアはそうやって生きてきた。考えるのは上の仕事、自分は何も考えず、ただ命令に従っていればいい。

それが信条だった。

パートナーであるライツは、身分はサリアよりも上だ。つまり、ライツの言うことは絶対。反論してはならないし、拒否するなんてことも許されない。上の命令は絶対だからだ。

でも、今回ばかりはライツの命令は聞き入れることができなかった。理由はなぜだかわからない。どうして今回の命令が聞けないの自分でもよくわからない。だけど、聞けなかった。聞きたくなかった。今までこんなことなかったのに、命令に反することなんて何一つなかったのに、それがどうして今回に限って？

「サリア、お前に拒否権はない。これは命令だ。お前は俺の言ったことを実行しなければならない」

「……嫌」

「……命令だ、サリア」

ライツは銃を構えながら……いや、正しくは『構えさせられながら』言った。

「俺を爆弾で吹っ飛ばせ。跡形もなく消し去れ」

自分の人差し指からライツの体に繋がっている『糸』を弄びながら、アビスは愉快そうに笑った。

「言うコトが過激だねエ。でもまあ、それが一番効果的かもしれないネ。僕ノ『糸』は僕ガ解除シようヨシナければ外れないシ、爆発か何かデ手足ガないヤツに八使えナイからネ」

「……たぶんそいつの言うとおりで。さっきから体が勝手に動い

ちまうし、一向に外れる気配がない。このままだと、俺はお前を殺してしまう。だからその前に殺れ。殺られる前に殺れっつのは、俺たちの間じゃ常識だろ？」

ライツが何とかして自分を殺させようとするが、サリアは首を横に振るばかりで一向に行動しようとはしない。

ライツは本気であせった。このままでは、自分のパートナーを自分の手で殺しかねない。それだけは、絶対に避けなければならない。今まで組んできた大切なパートナーを自分の手で殺すなど、あつてはならない。絶対だ。

それを避けるにはサリアがライツを殺さなければならぬのだが、サリアはどうしても動いてくれない。……ライツはサリアの頑固な性格を知っている。一旦自分の中で行動を決定したら梃子でも動かない。サリアの説得は半ば無理だと諦めているのだ。

しかし、それならば一体どうすればいいか？ ……簡単だ、サリアがやらないのなら自分がやればいい。ライツ自身のホルスターにも手榴弾が入っている。これのピンさえ抜ければ自爆できる。しかし、しかしだ。どう足掻いても体が動かない。腕に力を入れても微塵も動かないし、足に力を入れても、強い力で押さえつけられているかのようにビクともしない。……『糸』から逃れることは不可能なのだ。今のライツはアビスの操り人形でしかない。どう抵抗しても、人形は自らを操っている人形師には逆らえないのだ。

「……ウーん、さすがに硬直状態も退屈になってきたネ。そろそろ、『終劇』といこうかな？」

少し飽きてきたアビスが、『糸』の繋がっている人差し指を動かした。

瞬間、ライツが銃の引き金に手をかけている人差し指に力が込められた。……まずい、このままでは引き金が引かれる。サリアを、

第64話 操り人形編4

「!？」

「くそつたれ!! 遅かったか!!」

レオと雷牙がその現場に到着したときにはすでに遅かった。自分たちを襲ってきた男が、パートナー目掛けて銃を構えていて、そのパートナーは地面に倒れて大量の血を流していた。そして、その後ろには見覚えのある姿が、アビスの姿があった。

アビスはやってきたレオと雷牙に気がついたのか、仮面を向けて言った。

「ン? あア、君力。ちょっと遅かったネ。もうその子八死ンじゃったよ?」

「てめえ!! アビス!!」

雷牙は怒声を上げるが、アビスまるで動揺しない。むしろ、激昂している雷牙の反応を見て楽しんでるようにも見えた。

レオは腰のホルスターから銃を抜くと、静かに、しかし目には怒りの炎を灯しながらアビスに尋ねた。

「・・・聞きたいことがある。お前がこの世界の罠か?」

「ン? そツちノ人は初メましテだネ。ソの通り、僕ガこの世界ノ罠だヨ」

「・・・その女はお前がその男に殺させたんだな?」

「うん、そうサ。僕ガやらせた。どうしてワかったノ？」

「男の体から光の糸が出ている。そして、その糸はお前の人差し指に繋がっている。お前がやらせないで、一体誰がやらせたというんだ？」

「くフフフフ、ちょっとワかりやすかつタカナ？」

アビスは両手の指をレオと雷牙に見せ付けるように広げ、指の先から光を纏った糸を出して見せた。ただ、両方の手が同じ糸というわけではない。右の指、つまり男と繋がっている指のほうは黒っぽい光だが、左の指は白っぽい色をしている。

「これが、僕ノ結晶サ。右手ノほうの糸八神経二電気信号ヲ送ツて無理矢理自分ノ脳内で思ツた通りの動きをさせることが出来ル。ただ、こつち八人間と力動物トか、生きテる物ニしか使えナイ。物体に八神経ないからネ。左手ノほうの糸八そういう物体ヲ直接操るこトが出来ル糸サ。例えバ、ほラ……」

アビスは左手の指の糸を近くの瓦礫に伸ばして繋げた。それを確認したアビスが指をくいっと曲げると、かなりの重量があるはずの瓦礫がいとも簡単に持ち上がった。

「こウいうこトが出来ルんだヨ。でも、糸一本じゃこの程度ノ重量が限界だネ。5本繋げればもツと重イ物が持テるシ、操リノ精密度も上がる。ドウ？ 理解シタ？」

「……とりあえず、お前の能力はとんでもなく卑怯なものだつてことはわかった。赤の他人を自分の都合で操って、自分は影で

あまりの怒りに、言葉がうまく出てこなかった。自分が浴びるはずの弾丸を、無関係な男に受けさせ、それを見て笑っている。ふざけるな、こんな手があるものか。操っている男が苦痛で表情を歪めているのに、自分は平気な面をして、まるで劇か何かを楽しむかのような余裕を見せている。……こいつ、本当に血が通っているのか？ 温かい血の通っている人間なのか？ 怒りを露わにしているレオの様子を見て、アビスは笑いをこらえるようにして言った。

「何ヲ怒ツてイルんだイ？ その男ヲ傷つけたのハ僕じゃない。君じゃないか。それを一方的に僕ノセイにしないデモraithたいネ」

「てめえ、よくもいけしゃあしゃあとツ！！ てめえが盾に使ったんだろぅがツ！！！」

「くフ、でモ傷つけたのハそツちじゃないカ。僕ガヤツたわけじゃない」

「う……あが……」

男は表情を歪めて苦しんでいた。傷口からは大量の血が出ており、男の顔もだんだん青ざめてきたように感じられる。操られていて身動きがとれないため、傷を圧迫して止血することもできない。

操っている本人であるアビスを倒せば問題ないのだが、おそらくどう攻め込んでいても男を盾に使い攻撃を逃れようとするだろう。どんな攻撃をしても、男は確実に傷ついてしまう。一体、どうすればいいのだ……！！

必死に考えるが、怒りで熱くなっているレオの頭ではいい考えなど浮かばない。落ち着かなければならないということはわかっているのだが、どうも頭に上った血がそれを邪魔する。早くアビスを倒さ

なければならぬのに、その焦りが、レオの精神に揺さぶりをかける。

「くффффフ。どうしたノカナ？ 早く僕ヲ倒サナイと、この男ガ死ンジャウヨ？」

「この、下種野郎……！！」

打つ手がなく、そのまま2人は立ち尽くすしかなかった。苦しんでいる男を救うことなどできず、どうすればいいかを考えていることしかできなかった。それを見て、アビスは笑う。心の底から、本当に愉快そうに、嘲笑う。

「……下がってる」

そのとき、大量の血を流し、激痛に苦しんでいる男が、腹の底から搾り出すように言った。男の言葉には重みがあり、死ぬ覚悟を決めたような、そんな感じの声だった。

言われたレオと雷牙は男の言葉の意味が理解できなかった。下がっている、ということとはつまり、危険が及ばないよう自分から離れている、ということだ。何の危険かは、おそらく男の攻撃によるものだろうということは簡単に予想がつく。……それがおかしいのだ。男はアビスの糸に捕らわれている。身動きどころか、指1本たりとも動かせないはずなのに、レオと雷牙を巻き込んでしまうような大規模な攻撃ができるわけがない。

その考えはアビスも同じようだった。首を横に傾け、疑問を抱いているようなポーズを取る。

「？ 一体何ヲするつもりだい？ そんな動けない体でサ」

「……………動けるさ、動いてみせる」

「動いてみセル？ はハは、そんなこと無理に決まッイルじゃないカ。神経二電気信号ヲ流シテ強制的ニ操ッているンダヨ？ 動けれわけ……………！」

アビスは、驚きのあまりそれ以上言葉が口から出てこなかった。なぜならば、絶対に動けるわけがないと思っていた男が、ゆっくりとだが、アビスのほう目掛けて歩いてくるのだ。手に……………手榴弾を持って。

「道連れだ……………。死なばもろともってやつだ…………。貴様だけは、貴様だけは、絶対に許さん…………。ここで、始末する」

「……………ツく、言うコとを聞かナイ。でモ関係ナイ、1本じゃ駄目だッたら増やすまでダからネ」

そう言うと、アビスの残りの4本の指の先から新たな糸が伸びてきて男の体にくっついた。男にくっついていて糸は全部で5本。つまり、男にかかる負担は5倍に膨れ上がる。

男は腹部に風穴が開いている。体力的にも、そして糸の本数的にももう動けるわけがなかった。素直にアビスの人形になるしかなかった。……………でも、

「!？ なぜだ？ なぜ動けれ？ 糸ガ5本も絡ミ付イテいるのニ、何で動ける?!」

「……………知るカ」

男は盾となるようにアビスの近くにいたため、アビスが手榴弾の射

程圏に入るのにその時間はかからなかった。あとはピンさえ抜けば……吹っ飛ばせる。こんな大惨事を引き起こしたアビスを粉々にできる。だが、そうなったら男も無傷ではいられない。もちろん、死ぬ。

「レ、レオ!!! どうする!!!」

「今考えてる!!!」

自分が走って男から手榴弾を取り上げようとしても、もうこの距離じゃ間に合わない。むしろ、もっと離れなければ被爆してしまうくらい距離だ。

アビスを撃つて男より先に殺すことも考えたが、男がちょうど邪魔になっていて撃てない。少し動いてアビスだけ狙ったとしても、たぶん無駄だ。避けられる。

……色々考えたが、駄目だった。もう男を救う手段はない。

「こうなッたら、離れるしか……」

「させねえよ……」

男はアビスの腕を掴み、逃げられないようにした。男の握力は死ぬ寸前だというのに全く衰えておらず、アビスは振りほどけない。

にやっと笑い、男は口で手榴弾のピンを取った。

「は、離せ!!! 離すんだヨ!!!」

「……やなこと。言つたる? 貴様だけは絶対に、許せんと……。許さん……、貴様だけは、この俺が死なす……。サリアを殺したお前だけは……!!!」

手榴弾が……光った。

「レオ!!」

「くそつたれ!!」

慌てて飛び退いた瞬間、すさまじい爆音が聞こえてきた。同時に、激しい爆風が辺りの瓦礫を吹き飛ばす大爆発が起きた。レオと雷牙も瓦礫に混じって吹っ飛び、辺りの炎さえも吹き飛んだ。瓦礫が砕け、粉塵が辺りを舞った。

しばらくして粉塵のせいで見えなくなっていた視界も落ち着き、レオと雷牙は立ち上がって辺りを見渡した。……ひどいものだった。本当にあんな小さな鉄の塊1つでこうなったのか？ と思うくらい、辺りの瓦礫は粉々になっていて、男とアビスがいたであろう場所は路面が抉れて土が露出していた。……こんな破壊力のある手榴弾の近くにいた男とアビスは、十中八九粉々になっているだろう。生きているなんて、絶対にありえない。

「……終わった、のか？」

「・・・たぶんな。一番、俺の気に入らない終わり方だ」

被害にあった男1人助けられず、自分たちは何も出来ず、拳銃の果て男の自爆という形で幕は閉じられた。・・・誰かが犠牲になって終わる。レオはこんな終わり方が大嫌いだった。

辺りは静かで、何も聞こえてこなかった。さつきまで燃え上がっていた炎も消え、騒ぎが起こる前の静けさを取り戻していた。

その静かな空気を、1つの声がぶち壊した。粉微塵になって死んだはずのあいつの声が、静寂をぶち壊した。

「・・・危ナかった。左手ノ糸を総動員させて無理矢理引ッペがシてなかつたら、間違イなく死ンデたヨ」

「な、に?!」

「生きていただと!?!」

アビスの、声だった。男が自爆して、命をかけて殺したはずのアビスの音が、空から降ってきた。

アビスの左手の糸は、右手の神経信号を出す糸とは違い、物理的に物にくっついて動かすことができる。先ほど1本の糸でかなりの重量がある瓦礫を持ち上げるほどの力を持った糸を5本も使い、男を強引に引き剥がしたのだ・・・! 男の死は・・・まったくの無駄死にだったのだ・・・!!

「でも、腕1本と足1本八吹ツ飛ばされたからネ、今日ノ所は引き上げさせてモらうヨ。じゃあネ、バイバイ・・・。ウフフフフフフフフフフフフフフフフフフフ」

神経を逆なでする笑い声を最後に、アビスの声はしなくなった。

「出てきやがれッ！！ これだけのことやっというて逃げんじゃねえよッ！！！！ ああ？！」

雷牙の声は虚しく木霊し、アビスの声はいつまでたつても返ってこなかった。・・・逃げられたのだ。これだけのことをやらせておきながら、逃がしてしまったのだ。

「クソ野郎があああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

雷牙は激昂し、腹の底から怒声を上げた。何もできなかった無力さと、みすみす人を死なせてしまった怒りの混じった声で、喉から血が出るくらい思い切り叫んだ。まるで、怒り狂った獅子のように。レオは、食い破って血が出るほど強く唇をかみ締め、必死に自分の感情を押さえつけていた。押さえつけないければ、永遠に冷静でいられなくなるような、そんな感じがしてならなかったから。

第65話 操り人形編5

あの恐ろしい『人形劇』から1日が経過した。町を焼き尽くしていた大海のような大きい炎も

無事鎮火され、逃げ惑っていた人々はすでに町の復興作業に入り始めていた。

あの事件の怪我人は玲奈と風花を始め、町の医療班が迅速に行動してくれたおかげで、ほとんど一命を取り留めることができた。怪我人は軽傷のものから重傷のものまでいたが、いずれにしても命だけは助けることはできた。

命が助かっている一方で、死者は数え切れなくらいに膨れあがった。現在確認されているだけでも100人以上は確実に死んでいて、これから瓦礫を除去するにつれ、下敷きになっている人間や、生きながら炎を身に纏い焼け死んだ人間が倍以上になるだろう、というのが、救助班の見解だった。

レオたちはもうこの世界にいる意味はない、と判断した。『畏』はもういないし、復興作業は自分たちがいなくとも無事にやれるだろう、ということからだった。

「・・・こんなに後味が悪い世界は、初めてだな」

『畏』は退けることはできた。しかし、それは自分たちの力ではない。1人の悲しい男の命と引き換えに追い払ったに過ぎない、残酷な結末だ。

自分たちは無力だということを実感させられた世界だった。自分たちにもつと力があつたなら、男を死なせずに済んだかもしれない。男に女を殺させずに、自分の手で殺させずに済んだかもしれない。・・・全ては、自分たちの無力さゆえの結果だ。今回自分たちは、何もできなかった。

もつと力をつけなければならぬ。そうしなければ、世界なんてとてもじゃないが守ることなどできない。神の使いのように人を傷つける力じゃなく、人を守るための力が欲しい。毎日の平凡な日々を送っている人々に、これからも平凡という当たり前すぎて気が付かない幸せを過ごしてもらうために。

「・・・帰るか。刹那たちも戻ってつかもしんねえしな」

一同は黙って頷き、ゲートを潜ってこの世界をあとにした。もう2度と、こんな悲しい結末は迎えないようにしよう、という強い思いを抱いて。

+++++

「ただいま。帰ったヨ」

「おかえ・・・・・・・・また、そんな無茶して・・・」

ため息をつきながら、青年は負傷しているアビスに言った。

「油断してネ、やらしちゃったよ。でも、すぐに直ルと思うから、大丈夫サ」

「それならいいけど、あまり無理しないでよ？」

「まア、忠告は受け取ッておくヨ」

さつきよりも深いため息をつき、青年は部屋の奥にあるカプセルに向き直った。・・・そのまま静寂が辺りを包み込む。

「・・・もうそろそろ行くヨ。じゃあネ」

「うん。無茶はしないようにね」

ドアを開け、アビスは青年のいる部屋をあとにした。誰もいなくなつたのを見計らい、青年はカプセルに向かって話し始めた。

「・・・みんな、どうして無茶ばかりするんだろうね。僕に心配をかけるのが楽しいのかな？」

カプセルからはもちろん返事は返ってこない。それでも、青年は話しかけるのを止めない。

「大切な仲間だからね。傷ついて欲しくないんだ。すぐ治るのはわかってるんだけど、やっぱりね。心配なんだよ」

「・・・再び、静寂が部屋の中を支配した。」

第65話 操り人形編5（後書き）

さて、いかがでしたでしょうか？ 今回の物語は^{せかい}？

今回は残念な結果となってしまうました。守れた人を守れず、加えてアビスも逃すという最悪極まりない終わり方です。

一体レオたちは今回の世界で何を痛感したのか？ そしてそれを次の世界へと繋げられるのか？

今回の物語は魔界^{せかい}編。

魔族と神族を中心とした世界をお楽しみください。

第66話 魔界編1

刹那たちはベースキャンプにて、お互いに世界のことを報告しあっていた。

「・・・今回は、お互い納得のいく結果にはならなかったみたいだな」

レオがそう言うと、一同は俯いてしまった。当然だ、お互い納得のいく結果ではなかったのだ。無駄に人の命を失ってしまうという結果を、喜べるわけなどない。

しばらく沈黙が辺りを包み込んでいたが、それを振り払うようにレオが再び口を開いた。

「まったく引きで組を決める。こうしてる間にも被害が大きくなってるかもしれないからな」

そう言つて、レオは前に決めたときのように木の枝をそれぞれに差し出した。決まった組は、以下の通りだ。

第1組、刹那、レオ、リリア、風花。

第2組、雷牙、雷光、レナ、風蘭。

うまく戦力は分散できた、が。刹那はまたしてもレナと離れてしまった。それが何だか残念でならない。・・・理由は、わからない。ただなんとなくそう思っただけで、特に意味はない。

「よし、今回はこの組み合わせだ。・・・みんなうまくやれよ。今

度こそ、誰も犠牲者を出さないようにだ。これ以上『畏』に好き勝手やらせるわけにはいかないからな」

一同はレオの言うことに強く頷き、異次元図書館へと向かったのだ。
った。

++++

どんなことがあっても後ろを振り返るな
何が何でも前を向いている
誰にも負けない強い心と勇気を持って
・・・大丈夫、お前ならできるさ
なんたってこの俺様の息子なんだからな

刹那たちが向かった世界は、何だか薄暗い世界だった。辺りは何だか知らないが荒れ果てていて、所々地面が抉れているのが妙に目立

つ。

植物は木どころか草もほとんど生えていなかった。あるといえば、岩の下のほうにくっついていて緑色の苔くらいだ。この荒れ果てた様……この世界、もしかして……。

「……レオ。もしかして、もう手遅れだ、なんてことないよな？」

恐る恐る、レオにたずねる。レオはふっと笑って、心配している刹那に言った。

「それはなさそうだな。見るよ」

レオが指差した方向には、大きな町があった。その町に人がたくさん住んでいる、ということとは、ここまで聞こえる活気あふれる人々の声からすぐ理解できた。

刹那はほっと胸を撫で下ろし、安堵のため息をついた。……実際に心配症の刹那らしい行動だった。

「それじゃ、この世界つてもともとこんな感じだったこと？」

「断定はできないがな。とりあえず、行ってみれば全部わかるだろ」

「楽しみですね、どんな町なのかな？」

にこにここと、笑顔で言うリリア。好奇心旺盛の血が騒いでいるのだろうか？ またあちこち引っ張りまわされなければいいのだが……。

とりあえず、刹那たちは町へと向かうことにした。リリアがもう町に向かう、ということ的前提に歩き出している、ということもあるが、何よりも情報を集めなければ『畏』の存在も確認できない。情

報が今一番刹那たちに必要なものなのだ。

リリアを先頭に、刹那たちは町へと歩き出した。町までの距離はそんなになかったから、2、3分で町の入り口へ辿り着くことができた。入り口には、大人の背丈ほどもある大鎌を担いだ門番らしき男が2人立っていたが、旅人です、食料を調達したいので通してもらえないでしょうか？ のような嘘をつけばすんなり通してもらえはすだった。……が、その予想は見事に裏切られることになる。

「き、貴様……！！ なぜ『神族』がここに?!」

「攻め込んできやがった!! くそつたれ!!」

男2人が顔を紅潮させ、レオとリリアにかかってきた。まさかいきなり問答無用にかかってこられると思ってもみなかったレオは、きよんととして動けないでいるリリアを抱き、とっさに男2人から距離をとった。

男の1人が振り下ろした大鎌が、レオの髪の毛を掠った。……こいつ、本当に殺す気がかかってきている。距離をとっていなければ、大鎌が脳天を貫いていただろう。めんどろな事になったな、とレオはため息をついた。

「お、おいあんたら! 早くこつちに来い! 殺されるぞ!」

「おい待て! 1人は魔族じゃないぞ!」

「神族じゃなけりゃいい! とにかく、早く神族のやつを殺さねえと!」

男たちはそう言うのと、刹那と風花には目もくれず、レオとリリアに

襲い掛かっていった。……おかしい。なぜこの男たちは刹那と風花を狙わず、レオとリリアだけ狙っているのだろうか？

そういえば、神族とか魔族とか口にしていたような気がする。言葉から察するに、おそらくレオとリリアが『神族』だから、という理由で殺しにかかっているのだろう。……冗談ではない。なぜそんなくだらないことでレオとリリアが殺されなければならないのだ。

「おい！ あんた達！ 止めろよ！ その2人は俺たちの仲間なんだよ！」

たまらず、刹那が横から口を出す。その必死な声が耳に入ったのか、男たちは顔を向けずに言った。

「んなわけねえだろ！ 何で敵が仲間なんだよ！？」

「お前たち、騙されてるぞ！ 殺されちまうぞ！」

「だ、だから何でそうなるんだよ！」

もう、男たちは刹那の言葉に耳を傾けるつもりはないようだった。刹那の言葉を見殺し、男たちは再びレオとリリアに襲い掛かっていった。

「リリア！ しっかり抱きついてる！ 絶対力を緩めるな！」

「は、はい！」

レオの言うとおり、リリアはレオの首にぎゅっと精一杯の力でしがみついた。さらにレオがリリアの腰に手を回して固定する。これで多少激しく動いても大丈夫なはずだ。あくまで力を緩めなければ、

だが。

男たちとレオとリアの距離は次第に縮まっていき、やがて男たちの持つている大鎌の射程圏に突入した。間髪いれず、男たちは同時に大鎌を振り下ろす！

「つちいー！」

「ぎゃ………！」

寸前のところで大鎌を回避し、レオは後ろに跳んで再び距離を取った。

普通ならば、レオのホルスターに入っている神爆銃で足を撃ち抜き、戦闘不能にってしまうのだが、そうするわけにはいかない。この男たちは操られているわけでも、『畏』による敵でもないのだ。下手に傷つけることなどできない。

だが、いつまでもこうして避けているわけにもいかないだろう。正直、この男たちは戦闘に慣れている。大鎌を振り下ろすスピードを見ればわかる。かなりいい腕だ。今は何とか回避できているが、どれくらい持ちこたえられるかわからない。

それに、回避しているだけでは何の解決にもならない。ここでやり過ごすことができたとしても、結局町に入ればまた同じことを繰り返さなければならなくなってしまう。つまり、情報収集をして、この世界に仕掛けられている畏の有無を確認できない、ということになる。

「ど、どうしようー!? どうすればいい、風花?！」

「うん………とりあえず、話し合わないといけないと思うな」。兵隊さんの武器を壊しちゃう、とか」

相変わらず間延びした口調だが、風花の表情は真剣そのものだった。この状況がマズイ、ということをも風花もわかっているのだろう。風花の案を聞いた刹那はこくつと一度だけ頷き、意識を集中させ黒い大剣を形成した。

レオは男たちの攻撃を避けるので精一杯だ。リアがいるため、攻撃に移ることができない。つまり、男たちの武器を破壊することができない。

だったら、刹那がやるしかない。幸いなことに、男たちは刹那を傷つける気は全くないため、刹那にまで気を配ってなどいない。うまくやれば、何とか武器を破壊できるかもしれない。

勝負は一瞬。男たちに気づかれれば、おしまいだ。できるだけ速く近づき、一瞬のうちに大剣を振るって武器を破壊する。・・・やる、やってみせる。

ぎゅつと大剣を握り締め、刹那は肉体強化を施した足で思い切り地面を蹴った。

第67話 魔界編2

「……ん？」

男が後ろから接近してくる刹那に気が付いた。

だが、もう遅い。すでに刹那は大剣を振っている。

刹那の振るった大剣は黒い風のように大鎌を通りすぎると、男の持っていた大鎌はスパッと綺麗に切断された。

「な、何を!!！」

間髪入れず、もう1人のほうの大鎌も切断する。再び黒い風が大鎌を通り過ぎ、カラン、と斬った鎌の刃は地面に落ちた。……これで、男たちの武器は破壊した。もうレオとリリアを襲うことはできない。

「な、何をするんだ!! ふざけるな!!！」

「ふざけてるのはそっちだろ！ 俺たちの仲間だつて言ってるじゃないか！ 何でいきなり殺すような真似をするんだよ!!！」

刹那の言葉を聞いた男たちは、はあ？ と、心の底から理解できない、と言わんばかりの表情をした。

「何で、って……お前、何言ってるんだ？」

「神族は敵だろうが。殺さなけりゃこっちが殺されるんだぞ」

「だから、何でって聞いてるだろ？ どうして神族なんだよ？」

男たちは顔を見合わせたあと、再び刹那に顔を向けて質問をした。

「お前、どこから来た？　ここの国のやつじゃないだろ」

「国のやつだったら神族との関係は知ってるはずだからな。それを知らんということは、お前はここの国の人間じゃないってことだ。・
・どこから来た？」

いきなりの質問に、さっきまで喧嘩腰だった刹那は口ごもってしまった。助けを求めるように、ちらっとレオのほうを見る。

レオは腕の中のリリアを解放すると、ゆっくりと男のほうへと歩み寄った。

「・・・俺たちは、異世界からやってきた」

「だろうな。でなきゃその魔族が言ってることの説明がつかないからな」

男たちがあっさりと納得したことに疑問を覚えたのか、レオは男たちに尋ねた。

「ずいぶん簡単に信じるな。異世界から人がやってくることはそんなに難しいことじゃないのか？」

「いや、そうわけじゃねえよ。単に異世界の存在を知ってただけだ」

「魔王様の息子の魂も、異世界に飛ばされたという事実もあるからな。貴様らの思っているほど、異世界の存在は空想上のものじゃないということだ」

「？ 魔王様の息子さんの魂が何だつて〜？」

風花がのんびりとした口調で男に尋ねる。

「いや、別に何でもない。それより、お前たち中に入るのか？」

「入れてくれるんですか？ さっきは私と兄さんに攻撃しかけてきたのに・・・」

頬を少し膨らませ、拗ねたようにリリアが言った。まあ、殺されかけたのだ。これくらいは怒って当然だろう。

「それについてはすまなかった。こつちもちよつと警戒していたんでな」

「警戒つて、やっぱり神族に？」

「まあ、な」

そう言つて、男はギィ、と軋んだ音を出して門を開けた。中からは賑やかな声が聞こえてきて、町の雰囲気は明るい、ということを知り、那たちに知らせていた。

「とりあえず、俺の後ろを歩いてきてくれ。そうすりゃ、騒がれることもないだろうからな」

「俺たちをどこに連れて行く気だ？」

「城だ。神族のお前たちを好き勝手歩かせちゃ町民が混乱する。と

りあえず、お前らには魔王様に会ってもらうことになるな」

「魔王に会うつて、そんなこと許されるのか？」

「異世界から来たというくらいだからな。魔王様も面会を拒むまいよ。・・・すぐ戻る。それまで頼む」

「あいよ、できるだけ早く帰ってこいよ」

そう言うと、男は門を再び閉めた。開けっ放しになどしておけないから当然の処置だ。

「じゃあ行くぞ。ついてこい」

一同は頷くと、男を先頭に町を歩き始めた。

町の中は、先ほどの予想通りやはり賑やかだった。広い通りに様々な種類の店が並んでおり、どれも見たことのないような商品を店先に置いていた。人々は、その商品を物珍しそうな目で見たり、店員に値段の交渉をしたりしていた。

他にもたくさんの方が通りを歩いていて、何かおかしいことが起きている風には到底見えなかった。

「あれ？ 兵隊さん、後ろに神族がいますよ？」

レオとリリアに気が付いた小太りのおばさんが、実に興味深そうな目をして寄ってきた。それを皮切りに、店の商品に夢中になっていた人々もどんどん集まってきた。

「え?! 神族?! うっそマジ?! 本物?!」

「おゝ、結構可愛い娘じゃん。どう彼女、俺とお茶しに行かない？」

「うっわ、いい男ね〜…………。神族にもこんなかつこいい男がいたんだ〜…………。」

「がやがや、とあつという間にレオとリリアが人ごみの中に隠れてしまった。……門番の男たちは見るなり敵意を示してきたのに、町の人たちは全く逆だ。もの珍しそうに見つめてきて、敵意なんて全然ない。おかしい、と思わずにはいられなかった。あまりにも対応が違うすぎる。」

レオとリリアは、人々に群がられて質問攻めにされていた。どこから来たのか、何でここにいいのか、今暇か、ちよつとそこでお茶でもしないか、など、質問してくる内容は人それぞれ違ったが、ただ1つだけ共通している部分があった。

「男も女も、質問してくる人全員が魔族なのだ。誰かが獣族だとか鬼族だとか、そうわけではなく、全員一貫して魔族。髪が黒くて眼も黒い、真正正銘の魔族だった。……そこで刹那たちは初めて理解した。ここは、魔族しかいない町なのだ。」

パンパンと、男は2回手を叩いて言った。

「みなさん、そのへんにしてやってください。こいつらを今から魔王様のところに連れて行かなければならないので。」

「あら〜、残念ねえ。もっとお話し聞きたかったのに…………。」

「でもま、いつか。本物の神族見れたし。」

「つちえ〜。こんな可愛い娘を諦めるだなんてよ〜。」

「残念、また今度か。」

人々は口を揃えて不満を漏らした。表情からは心底残念だという気持ち
持ちが伝わってきて、いかにレオとリリアが受け入れられているか
を教えていた。

男は愛想笑いをし、少し急ぎ足でその場をあとにした。また同じよ
うに珍しいから、という理由で時間を食いたくないのだろう。刹那
たちもすぐさまそのあとに続いた。

「……あれが、お前たちがこの町をうまく歩けない理由だ。
珍しいがって寄ってくる。本物を見るなんて、最近じゃありえんから
な」

しばらく歩いた後、男がポツリと呟いた。

男の言葉に疑問を持ったレオは、先ほどから気になっていたことを
尋ねた。

「……それはわかったが、どうしてあんと対応が違うんだ？
あんたは敵意があったが、町民は別にそんな気はない。どうい
うことなんだ？」

「簡単なことだ。神族と戦争してるっていう実感が湧いてないだけ
だ。神族と戦ってるのは俺たち兵士だけだし、魔王様のご意向で神
族は完全な悪役にはなっていない。神族は最低な種族だ、とか、ク
ズだ、とか、そういうことを広めて戦争の士気を高めようとしてい
ない。むしろ神族の良いところばかりおっしゃっていた。だから町
民は敵意を出してこない。お前たちに対する敵意も湧かない。意味
がわかるか？」

「なんとなくはわかったかなあ」

風花がにこにこしながら答える。

つまりはこういうことだ。戦争はこの国の兵士が最前列に立っているため、国民には戦争をやっているとう実感が湧いていない。今日もどこかで神族と戦争をやっているんだな、という他人事みたいにしか思っていないのだ。

さらに、この国の王である魔王は、国民に神族のイメージを低下させるような政治を行っていない。神族を徹底的に悪者に仕立て上げ、国民の神族に対する意識を無理やり変えさせ、それを戦争に利用する、ということを行っていない。

むしろ逆で、神族を持ち上げるような発言をしている。・・・どうしてそこまでして神族を庇うのか、あまり理解できなかった。戦争中に相手のことを考えるなど、普通はありえないことだからだ。それなのになぜ・・・？

刹那がそのことを考えてながら歩いていると、不意に男が刹那たちに声をかけた。

「ここだ。ここが、魔王城だ」

第68話 魔界編3

そう男は言うが、城なんてどこにもない。左を見ても、右を見ても、あるのは広い空き地だけ、城なんて存在しない。

「城？」

「ああ。今から開けさせるからちよつと待て」

そう言うと、男はダンダン、と強く地面を踏みつけた。何も無い、ただ草が生えているだけの地面を意味もなく何度も踏みつけた。．．．すると、

ゴゴゴ．．．．．

音を立てて地面が盛り上がり、横に動いた。．．．ここが入り口だった。外側のほうには取っ手も何もなかったので、どうやら内側から開ける仕組みになっているらしい。動いた地面の下には空洞があり、その下には案内をしてくれた男と同じ服装の兵士がいた。男の足音に気が付いて、この下の兵士が開けたのだろう。

と、いうことは、だ。地面がこうやって開いた、ということとはつま

りこの男が言っていた魔王城は、地上ではなく地下にあるということになる。……城とは見えるところにあるものだと思っていた4人は、すっかり不意をつかれてしまった。

「……………なんだ、そいつら。神族もいんじゃないか。なめてんのか？」

下にいる兵士は敵意を剥き出しにし、顔を怒りで歪めながら吐き捨てるように言った。……神族に対する怒りは、やはり町民の人々とは比べ物にならないようだった。

そんな兵士の言葉に少しの怯えも見せず、男はため息をついて言った。

「こいつらは異世界からやってきたやつらだ。俺たちが戦争している神族とは違う」

「違うだ？ 神族はみんな同じだろうがよ。何にもやっちゃいねえ俺たちを平気で殺すやつらばかりだろうがよ！」

「……………いい加減にしろ」

「あ？」

先ほどの兵士とは代わって、今度は男のほうが凄みを利かせた声で言った。

「餓鬼みたいなことをいつまでも言ってるんじゃない。こいつらは違う、と言ってるんだ。うだうだ言っていないでとつとそこを退け」

「あんだと？ その神族のより先にてめえから始末してやろうか

? あ?」

「やれるものならやってみろ。貴様のようなゴミクスなどあつとい
う間に地獄へ送ってやる」

「ま、待ってくれよ!」

互いに腰の剣を抜こうとしたところで、刹那が慌てて止めに入る。

「2人はそんなことしない! 無闇に人を殺したりなんてしない!
絶対だ! だから、その、うまく言えないけど、仲間同士で争う
なんてことしないでくれよ!」

「あ? なんだてめえ、魔族のくせに敵の神族を庇うのかよ?」

「敵じゃない! 俺の仲間だ!」

「.....」

しばし、刹那と兵士が睨みあつ。お互い一步も譲らず、目で語り合
っているかのようにだった。互いの意見を視線のみでぶつけ合う。
しばらくし、兵士はちつと行ってから渋々這い上がってきた。

「.....とつと行け」

「え?」

「行けって言うてんだ。2回も同じことを言わせんじゃねえよ」

そう言い捨てて、兵士は刹那たちに背を向けた。

これは・・・わかつてくれた、ということなのだろうか？ レオとリリアが害のある存在ではないと認めてくれた、ということなのだろうか？

「・・・お前ら、ついてこい。あまり長い時間ここを開けておくわけにはいかん」

男は地下へと入ると、少し急ぎ足で通路を歩いていった。もたもたしていると置いていかれてしまう。刹那たちは慌てて後を追いかけたのだった。

+++++

城の中は、先ほど通ってきた町とはまったく違う世界のようなだった。兵士たちが刹那たちに向けてくる視線が違う。明らかに、殺意が込められている。今にも切りかかってこられそうな異常な雰囲気、すっかり刹那は萎縮してしまっていた。

「・・・」

右を見ても、左を見ても、見えるのは殺意を向けてくる兵士たち。視界に入れるだけで殺してやる、という心の内がビリビリと伝わってくる。・・・殺意を込められた目で見られているのは、後ろにいるレオとリリアだということにも関わらずだ。

もしもこの城に用がなかったら、刹那は一刻も早くこの場から立ち去っていただろう。殺意に溢れかえったこの場から全速力で逃げ出

していただろう。こんな居心地の悪いところに、誰が好き好んで
いるものか。

「・・・安心しろ、刹那」

「え？」

後ろから、レオが話しかけてきた。あんなに殺意が込められた目で
見られているというのに、いたって平然と、笑いながら。

「見てみる、着いたみたいだ」

レオが指差した方向には、今まで先頭を歩いてきた男の足元。そこ
には城の入り口と同様、地下への扉があった。だが、入り口と決定
的に作りが違う。パツと見頑丈そうだし、鍵穴も付いている。いか
にも王室への扉、という感じだった。

男は鎧の中へ手をつ込み、中に入れておいた鍵を取り出すと鍵穴
に挿して回した。カチャ、という音がして、男は続けて3回間を空
けず扉を蹴った。

それが合図だったらしい。ギ、っと音がして、内側から扉が開かれ
た。入り口と同様、内側からでないといけない仕組みになっている
らしかった。

扉の下にはやはり服装が同じ兵士がいて、何も言わずにすつと道を
開けてくれた。殺意は目に籠っていたものの、これで無駄な口論や
戦いをしなくてもいい。

男は兵士に一礼すると、扉をくぐって下へと続いている階段を降り

て行った。刹那たちも同じようにして兵士に一礼すると、男の後を追って階段を降りて行った。

短い階段を下り終わると、そこには誰も座っていない玉座が見えた。どうやらあの扉は直接王のいる間へと繋がっていたらしい。玉座が何よりの証拠だ。

だが、誰も座っていない、ということがどうもおかしい。近衛兵は玉座を囲むように存在しているというのに、肝心の王がどこにもいないのだ。王がいないのなら、兵士もここを守護する意味はないはず。それなのに、なぜ………？

「魔王様はどちらへ？」

男が近くにいる近衛兵に尋ねる。

尋ねられた近衛兵はやれやれ、とため息をついて、男の後ろを指さして言った。

「……後ろにいらっしゃる」

「……ばらすなよ、つまんねえの」

「「「「?!?!?!」「」「」」

刹那たちが驚いて振り返ると、いかにもといった感じの王冠とマントを羽織った男が立っていた。目も髪も、心なしか周りにいる兵士よりも黒いような気がする。口調とは裏腹に、高貴な雰囲気を感じさせるその風貌は、さすがは王というだけのことはあった。

「おお、こりゃ珍しいな。生で神族なんて久しぶりに見たぞ。はっ

は！」

周りの兵士が殺気を出しているのに対し、王は実にフレンドリーにレオとリリアの肩をバシバシ！と力強く叩く。演技とは到底思えない笑顔を浮かべて。

「っと、そっちは……初めて見る髪の色と目の色だな。珍しい」

「私たちの世界ではあ、大して珍しくはないんです」

「おおそうか！なるほどな、はっはっは」

物珍しそうに眺められても、風花は嫌な顔をせず笑顔で王と接していた。風花は嫌だったら嫌だと言う性格だ。こつこつと見つめられるのは誰だって嫌なものだ。それなのに風花が嫌がらないのは、王の気軽な性格がいいからだろう。

「最後に俺たちと同じ魔ぞ……？」

「？」

王は刹那を見た瞬間顔色を変えた。うまく表現はできないが、驚きと、喜びが入り混じったような表情。あえて表現するとすれば、失くしてしまったものを長年探し続け、それをようやく見つけたときのような、そんな感じの表情。

「こん、なことが……ありえる、のか……！！」

「え？あの……」

「ありえない……。だが、目の前にいる……。！！ 間違
いねえ！！ 間違いねえぞ！！」

王の喜びぶりを不審に感じたのか、近くに居た兵士はおそろおそろ
王に尋ねた。

「……。王、いかなされましたか？」

「……。いかなされたって、戻ってきたんだよ！ 早くマリア呼
んで来い！」

「は？ ですが女王様はお昼寝を……」

「いいから叩き起こせ！！ そうですねすぐ連れて来い！！ いいな？
！」

「か、かしこまりました」

王に気圧されたのか、兵士は慌てて玉座の奥の通路を走っていった。

「よし！！ そうですね、お前らは宴の準備だ！！ 盛大にいくぞ！！
おら、とつととしろー！！」

「……か、かしこまりました！！」「」「」

一斉に兵士たちが散り、バタバタ、と部屋から出て行った。……
一体、何なのだ？ 意味がわからない。どうして刹那を見てここま
で王が豹変したのか、そしてなぜ宴を開くのか。全然理解できない。

「……なぜこんなことを？」

レオが王に尋ねる。

王は静かに、答えた。

「……戻ってきたからだ」

「何が？」

「……俺の、息子がだ」

第69話 魔界編4

「息子？」

「ああ、息子だ。．．．そいつだ、間違いねえ」

「お、俺？」

王が指さしたのは他の誰でもない、刹那だった。

いきなりお前は俺の息子だ、と言われても、刹那には両親がいる。実は血が繋がっていないなどということなんて聞かされたことなんてないし、へその尾だってちゃんと見せられた。近所の人に、父親に似てきた、ということも言われたし、性格がお母さんそっくり、と言われたこともある。

つまり、だ。刹那は両親と血が繋がっている、ということだ。それなのに、この王は自分の息子だと言う。．．．さっぱりだ。

「まあ、いきなり言われても困るわな。マリアが来たら説明する」

「マリアって、やっぱり．．．?」

「ああ。俺の妻。んで、お前の母さん」

．．．だめだ。説明がないとさっぱり理解できない。どうということだ？ 意味がわからない。

「お連れいたしました!!」

頭を抱えている刹那をよそに、先ほど女王を迎えに向かった兵士が戻ってきた。後ろには、やはり髪と目が普通の魔族よりも黒い、上品そうな女性がいる。王族は一般の魔族よりも髪と目の色が濃いから、その女性が女王だということは一発でわかった。

だが、不機嫌なのか、顔が物凄く歪んでいる。眉の間にしわが寄っていて、美しい顔も台無しになっていた。

「……何でしょうか？ 今すつごく機嫌が悪いです。用件ならさっさと済ませてください」

「そう言っな。こいつを見てみる。お前なら、わかるはずだ」

「？ 同じ魔族の……おと、この……!?」

「……わかったか？ 俺たちの息子だ」

女王は頷くと、たたたと刹那のもとに走り寄って……刹那を抱きしめた。

「え?! は?! え?!」

「う……ふええええん……」

と思ったら、いきなり泣き出してしまった。子供のように泣き声をだして、思い切り。

刹那はもうわけがわからなかった。魔界を統べる王にいきなり息子だ、と言われ、加えて女王には抱きしめられてこっぴど泣かれて

いる。・・・もうわけがわからなすぎて頭がおかしくなりそうだった。

「・・・あんた、そろそろ刹那に説明してやってくれないか。混乱してるし、俺たちとしても事情が知りたい」

「おおそうだな。嬉しくて嬉しくてすっかり忘れてたぜ。あゝ、刹那？　でいいのか？　ちよっとマリアはそのままにしてやってくれ。動揺しててな、落ち着くまで頼む」

「それはいいけど・・・」

刹那だつて年頃の男、女性に抱きつかれるのはちよつと抵抗があった。本当だつたら離れて欲しかったが、こつ泣かれてしまつては言い出すことなんてできなかつた。・・・仕方ないが、このまま聞くしかない。

「んじゃ、説明たゝいむといくか。まず最初に聞いておくか。人は死んだらどこへ行くと思う？」

「？　えつと、・・・」

「冥界だ。そこで死の神による魂の裁判を受けて、生前犯した罪を償う。そしてその後転生、だろ」

刹那がまごまごしている間に、レオがすんなりと答えてしまった。・・・そういえば前にオリアスから話を聞いたことがある。

「その通りだ。人は死んで魂になり、冥界へと飛んでいく。そしてまた転生。その永遠の繰り返し、つてわけだ。同じ魂が繰り返し繰

り返し死んで転生してるから、異世界中の魂の数は増えもしないし減りもしない。あらかじめ数が決められてるんだ。だがな、それに例外があるんだ」

「例外？」

「ああ。この世界はな、魂が冥界に飛んでいかないんだ。どういうことかさっぱりわかんねえんだけどな」

「どづいつことだ？」

「つまりな、この世界で死んだ者はこの世界に転生してるってわけだ。冥界に飛んで他の世界に転生しないで、この世界に留まり続ける。そうやってこの世界で魂のサイクルをやってるってわけだ」

「……それはわかったけどお、それと刹那君がどう関係あるんですかあ？」

「刹那はな、本当は俺たちの子供として生まれてくる予定の魂だったんだ。魂は母親の中に赤ん坊が出来たと同時に肉体に入るからな。マリアが妊娠したって言ったときは嬉しくて大臣たちと朝まで飲んだもんだ」

「……そこでようやく合点がいった。生まれてくる予定だった魂だから、息子と言われるのも筋が通る。だが、1つだけ気になる点がある。」

「何で、俺はこの世界に生まれてこなかったんだ？」

「戦争がな、始まったんだ。天界とな。なんかよく知らねえが、仲

良くやってたのにいきなり攻め込んできてな。……それで、だ。普通に殺してくるんだったらまだマシだったんだが、ちょっと洒落にならない攻撃をやってきたんだ」

「？ それは？」

「魂そのものを壊す、って武器だ。うちの兵士の何人かはそれにやられてる。魂が壊れたら、魔界には転生できない。壊れた魂は粒子になって冥界に運ばれて、結果的に魔界の人口が1人減っちゃうことになる。そうやって、天界の連中は魔族を根絶やしにするつもりらしい。ふざけてるだろ？ そのときは天界との接触を断っていなかったからここまで攻め込まれる可能性があつてな。俺たちは泣く泣く魂を異世界へと逃がしたってわけだ。……もちろん、マリアの腹の中の子供は死んだがな」

「………1つ、いいか？」

「どうした銀髪の。わからねえところでもあつたか？」

「刹那の魂は………ちょっと特別なものでな。色んな世界に転生している。だから、この世界だけに何度も転生しているはずがないんだが」

「さっき言ったろ。『この世界で』死んだものは『この世界に』転生される。お前たちみたいに、異世界から来るやつもいれば、この世界から出て行くやつも行く。……まあ滅多にないがな。ごく稀にそんなやつもいるんだ」

と、いうことは、刹那以前に神の魂を保持していた者はどういう経緯かゲートをくぐり、そしてこの世界で死んだ。生まれ変わった神

の魂は魔界で何度も何度も転生し、そして異世界へと再び旅立った、
ということになる。

第70話 魔界編5

「ぐす……ご、ごめんなさい。取り乱しちゃって……」

「あ、いえ、別にいいですけど……」

落ち着いたのか、マリアは抱きしめていた刹那を解放し、袖で涙を拭った。涙を拭き終わると、マリアはにっこりと微笑み、刹那に尋ねた。

「お名前を、教えていただけますか？」

「刹那です。杉本 刹那」

「刹那ですか。よいお名前を両親にもらったものですね」

マリアは刹那の頭を何度も何度も撫でると、腕組みをしている王に尋ねた。

「それで、メルゼ様。これからこの方たちはどうなさるのですか？」

「さあ？ わからん。歓迎会はやる予定だがな」

「まあ！ それは素晴らしいですわー！」

手を合わせ、まるで幼い子供のように屈託のない顔で笑うマリア。その顔を見ると、刹那たちがこの世界にやってきたことを心の底から喜んでいることがわかる。本当に、嬉しそうな笑顔だった。

心から喜んでいゝる2人を落胆させるようで悪いが、本当に宴などしている時間などない。こんなことをしている間に、どんどん魔界と天界の争いの激しさを増しているかもしれないのだ。それはこの2人だつて望んでいないことだろう。

「あなたたちも困るだろう？　このまま争いが長引けば、国が混乱するかもしれない」

「ん……そうなんだけだよ」

メルゼは先ほどのレオと同じよう、非常に言い難そうに言った。

「お前らが加担してこの戦いが終わるくらいの戦争だったらよ、もう終わつてんだよ。今更たかが4人増えたところで、戦況は変わらねえ」

「……それは、俺たちが弱い、ということか？」

「早い話そうこつた。まだ年端のいかねえ子供が加わつたところで、戦争は何も変わりやしねえ」

「……聞き捨てならんな。俺たちだつて自分らの能力を計れないほど力不足じゃない。それなのに、役に立たない？」

「ああ。行つても死ぬだけ、命の無駄だ」

緊迫したぴりぴりとした空気が辺りを包み込んだ。レオは自分たちの能力を見下されたことに怒りの炎を灯し、メルゼはまいつたな、と言いたげな顔をしていた。2人の間に深い溝ができたような、そんな感じの空気だった。

「・・・なら試してみるか？」

「そういうことになるのか・・・。まあ、いいがな」

「レオ！！ そんなことしても！！」

ここで刹那がレオを止めに入った。こんなところでメルゼと争っていても、何のメリットもない。双方が傷ついて終わるだけのくだらない茶番だ。そんなことしても、この世界の罫を外すことにはならない。

だが、レオは刹那の言うことに耳を貸さなかった。無言を貫き、ゆっくりとホルスターの神爆銃を手を取った。

「兄さん！！ 止めて！！」

リリアも傷つくことを心配して止めに入るが、レオは止まらない。手を光らせて弾を補充し、メルゼを睨み付けていた。・・・いつかかっていてもおかしくない。プライドを傷つけられて憤慨しているのはわかるが、まさかここまでとは。

「・・・みなさん、こちらへ来てください。ここには巻き込まれます」

マリアがうんざりした顔でため息をつき、刹那たちを誘導しようとする。・・・確かに、ここには巻き込まれるかもしれないが、今は避難するよりもやる必要があるはずだ。

「でも！！ 止めないと！！」

「そうですね。2人を止めないとお」

「マリアさん、何とかできないんですか？ このままだと、兄さんが……」

「……ごめんなさい。あの人はもう止まらなと思います。それに、レオさんも。止めるだけ無駄です」

「でもそれだと……！」

「心配なさらなくてください。たぶん、手加減しますから死ぬことはないと思います」

手加減をするということは……レオが負けるということだろうか？ そんなはずはない、レオは強いのだ。これだけは自信を持って言える。あの強さに、今までどれだけ助けられたことが。

それだけにレオが負けるなどということは……ありえない。絶対に。

「行きましょう。そろそろ、始まります」

3人は納得がいかなかったようだが、いつまでもグズグズしているとレオとメルゼの争いに巻き込まれてしまう。メルゼの実力はわからないが、レオの戦闘力はかなりのものだ。ここにいると、とんでもないことになる。

マリアの後についていき、3人は王の間を抜け出した。

+++++

もう一度王の間に戻ってきたのは、間を出てから10分くらい経ってからだ。決着はついていた。……レオが方膝をつき、メルゼが細長い剣を咽に突きつける、という形で。

「……俺の、負けか」

「当たり前だ。伊達に王様やってんじゃねえんだ。俺が負けるってのがありえねえんだよ」

へっ、と誇らしげに笑い、メルゼは剣を消した。……こんなものでレオが負けたなんて到底信じられないくらい、その剣は何の変哲もなかった。まるで、そこら辺の兵士が持つてそうな、普通で平凡な剣。

レオは立ち上がり、刹那たちのほうへと歩いてきた。自分の敗戦の悔しさを噛み締めるようゆっくりと。

「兄さん、怪我は？」

「それは大丈夫だ。なんともない」

言葉の通り、レオの体はどこも傷ついておらずいたって平気のようだった。ということは、メルゼはレオの体に剣を振るわず勝利した

ことになる。

「へえ、レオが負けるなんてねえ、ちょっと驚き」

「・・・俺もまさか負けるとは思ってなかったからな」

「でも、本気じゃないんだろ？」

刹那がおそろおそろそう尋ねる。レオは渋い顔をして答えた。

「まあ、な。『眼』は使ってなかったが・・・使ったとしても勝てるかどうか」

『眼』を使えば、戦闘力は飛躍的に上昇する。体も軽くなるし、筋力も大幅に増強される。加えて魔力だつて強くなる。その眼を使っていない、ということはやはり本気ではなかったということだ。

しかし、それはメルゼも同じことだ。使えるはずの『眼』をわざと使ってこなかったのかもしれない。『眼』を使わないレオに合わせ、自分も『眼』を使用なかったのかもしれない。・・・レオはそのことを言っているのだ。お互い『眼』を使わない状況で、レオは敗北した。ならば、覚醒して間もない『眼』を使ったところで勝てる見込みは少ない。

どう転んでもレオが負けたという事実が、刹那にとってショックだった。おそらく、メンバーの中では最も実力があるであろうレオが、こんな短時間のうちに負けてしまつとは・・・思わなかった。

「メルゼ様、お怪我は？」

「ん〜…………ちよつと服に穴が開いたくらいだ、安心しろ。ほれ」

穴の開いた部分をヒラヒラと振り、はははと元気に笑うメルゼ。それを見て、マリアはほつとため息をついていた。

「でもま、これでわかつたろ。俺に勝てないお前らじゃ…………すぐ死ぬ」

「……………」

レオはメルゼの言葉に何も言うことができなかつた。その通りであり、反論の余地がなかつたからだ。勝つて結果を残すことができたのならまだいい。しかし、レオは負けたのだ。何と言われようと、文句は言えない。レオは、ただ黙ってメルゼの話聞いていた。

「天界は甘くない。俺にすら勝てないお前らじゃ行くだけ無駄なんだ」

「……………」

「天界に行くのがお前らの仕事かもしれない。でも、死に行くこととはお前らの仕事じゃない。そうだろ？」

「……………」

第71話 魔界編6

はあくため息をつき、メルゼは言った。

「・・・訓練、してみるか？」

「・・・？ どういうことだ」

「あまりにも必死そうだったんでな。行かないといけないんだろう？」

「・・・ああ」

「だが、お前はまだ弱い。一番貫禄ありそうなお前が弱いんじゃない、どうせ刹那だつて強えはずがねえ。」

残りの譲ちゃん2人は戦闘能力なんぞ持ち合わせちゃいねえしな」

「あれ〜？ それ、お話ししたっけ〜？」

きよとん、といった様子で風花がメルゼに尋ねる。風花とリリアの2人は自分たちのことを何1つ語っていない。戦闘能力を持ち合わせていないことも、もちろん喋ってなどいない。ならばなぜ？

「のほほんとした嬢ちゃん、お前は魔力がほとんど感じられない。戦闘能力どころか、身体能力さえもあげられねえんじゃないのか？」

「ん〜・・・その通り〜」

「そんでもって、そっちの髪の毛の長い譲ちゃん。」

お前からは魔力が感じられるが、荒々しさが全然ねえ。たぶん、治療系の魔術くらいしか使えねえだろ」

「は、はい。その通り、です」

驚いたことに、メルゼは魔力を感じただけで2人の特徴を見破ってしまった。多少なら刹那やレオも感じるができるが、相手の能力を読み取るほど敏感に感じることはできない。

「んで、レオ・・・でいいよな。レオはさっき戦ったからわかるとして、刹那。

お前は攻撃型だろ？　なんか魔力が尖がってる感じがするし・・・何か、ざわざわする。

禍々しいっていうか、毒々しいっていうか、暗い感じがするからな」

「・・・合ってる」

後の禍々しいと毒々しいというのは少し納得できなかったが、攻撃型ということは紛れもない事実だ。現に、刹那は魔術こそ使えないものの、結晶を形成して攻撃するのだから。

「かなり戦闘の訓練をすりや魔力を感じる力が自然についてくる。ま、言ってみれば魔力の訓練をするわけだからな」

ということほだ。それができなかった刹那とレオは、まだまだ魔力の訓練不足ということになる。ただひたすらに戦闘を重ねてきただけで、特に魔力を意識して戦ってきたわけではないのだから当然ではあるが・・・訓練不足という事実は大きな衝撃だった。

「知らなかったか？」

「・・・ああ。まったくな」

「ならよかった」

「？ 何がだ？」

「知っててできないよりは、知らないでできないほうがいいだろ？
努力して会得できる可能性が出てくるわけだからな。」

「もちろん、やるだろ？ 訓練。天界に行くんだから、かなり鍛えねえとならねえが・・・」

刹那とレオは顔を見合わせて、そして頷いて見せた。

力不足など、あつてはならない。戦う力がなければ罷だつて外せないし、運悪く『神の使い』と鉢合わせになってしまったときに、抵抗もできずあつけなく殺されてしまつかもしれない。

戦闘能力を持たない風花やリリアを守つてやることもできないだろ
うし、自分の身だつて当然のことながら守ることなどできやしない。
行き過ぎた力は破滅をもたらすが、最低限度の力は身につけなければならぬ。

そう、今ここで。

「そうと決まったら・・・おい！ 衛兵！ 出てこい！ いるんだ
ろ？」

「はっ！！ 聞ここー！！」

扉の影から出てくる衛兵。メルゼとレオの戦いに巻き込まれるかもしれないというのに、この衛兵は扉の近くに待機していたのだ・・・
・敬意に値する忠誠心だった。

「宴会中止！　んでもって、兵士たちの練習所を空けてくれ！　すぐだ！」

「はっ！！　ただいま！！」

衛兵は敬礼をし、すぐさま扉を出て行ってしまった。

「さて、刹那とレオは俺についてこい。マリア、譲ちゃん2人頼むな」

「任せておいてください」

「よし。んじゃ行くか！」

気合の声と共に、刹那とレオはメルゼのあとをついていったのだ。た。

+++++

兵士の練習場は、訓練所というよりも闘技場というほうが似合っているような雰囲気があった。周りはまるで、選手が逃げ出さないようにと言わんばかりの高い壁で覆われており、それを楽しむために用意されてある観客席も無数

に存在していた。

当然ながら観客は1人もおらず、居るのはメルゼに刹那、そしてレオの3人だけだった。

「んじゃ、始めっか」

ぐっと背伸びをした後に、メルゼは言う。

「まずレオ。正直言って、お前の体術のほうはかなりのもんだ。教えることはねえ」

「なら、俺は何をすればいい？」

「魔力を鋭敏に感じ取れるようにすればいい。お前ならそれができるだけでかなり強くなるはずだ。

魔力がうまく感じ取れるようになってくれば、例え相手が物陰に隠れようがはっきり動きをとらえることができる」

確かに、銃を使うレオにとって相手の動きがはっきりわかるようになるということは、戦略の幅がかなり広くなることを意味する。物影から出てくる方向を予測してあらかじめ弾を撃っておいたり、何より敵を見失うということがない。メルゼの言うとおり、賢いレオはそれだけでも強くなれてしまう。

「具体的には、どうすればいいんだ？」

「そうだな。・・・ほれ」

懐を探り、メルゼは1つの小さな玉を取り出してレオに手渡す。

「それに魔力込めてみるよ」

「？ ああ」

言われた通りに、手渡された玉に魔力を込めてみる。

ガラス玉のように透明なそれは、魔力を込めた瞬間白く濁り、ゆっくりと空中へと浮かんだ。

「・・・これは？」

「まあ、町で売ってるおもちゃさ。込めた魔力の属性ごとに色が変わって、さらに自分の周りをぶかぶか浮かぶ機能付きだ。面白えだろ、これ」

「・・・面白いかどうかは別として、こんなものが何の役に立つんだ？」

はつきり言って、訓練中にこんなものが目の前にぶかぶか浮かんでいたら目障りで仕方がない。

メルゼはこんなものを出して、一体どうしようというのだろう。

「ほんの少しだが、こいつは魔力を放出している。・・・わかるか？」

「・・・いや、わからない。本当に出てるのか？」

「確かに出てる。こいつの魔力を感じ取るんだ。『眼』はもちろん使っちなよ、意味がなくなるからな。・・・まあ、座って落ち着きながらやってみろ」

「わかった」

言い残し、レオは宙に浮いているおもちゃと共に端の方へと移動した。

これから始まるであろう、刹那とメルゼの訓練の邪魔になるまいという、レオの配慮からだった。

「さて、次は刹那、お前だな」

メルゼの言葉に、刹那はゆっくりと頷く。

第72話 魔界編7

「何はともあれだ。ちよいと戦ってみるか。全力で来いよ？」
ふつと笑いながらそう言い、メルゼは魔力を凝縮し、細長い剣を形成する。

刹那も無言で黒い大剣を形成し、そしてメルゼと対峙する。

・・・レオよりも強いメルゼ。今の自分が勝てるわけがない。だから、全力を出す。やるだけやって、そして自分に足りないものを見出す。

「準備ができたらいつでもこいよ」

挑発的な態度でそう言って、メルゼは剣を肩に背負う。

・・・そこまで言うなら、こちらだって黙っているわけにはいかない。やってやる。やってやるさ。

ぐつと足にありつたけの力を込め、そして刹那は余裕で剣を構えているメルゼへと突進する。メルゼの目の前に接近すると同時に体を回転させ、そして大剣を横に薙ぐ。

「おっ！　そこで横薙ぎか！」

感心したようにそう言い、メルゼは肩に背負っていた剣を縦に構え、刹那の重い一撃を防ぐ。

・・・軽々受け止めるだろうな、とは刹那も思っていた。いくら重い一撃でも、所詮は未熟な刹那の力技。熟練された腕前を持つメルゼなら、止めることくらいならわからない。

だから、刹那は次の攻撃を考えていた。強引に体を前に持っていき、そして今度は縦に振り下ろす。切り返しの速いこの連撃でちょっとでも動揺を誘えたら、という防がれることを前提とした牽制の技だ

った。

「おお、つとと……」

瞬時に地を蹴り、メルゼは一旦刹那との距離を取る。

……切り返すこともできたろうに、メルゼはそれをしなかった。完全に刹那の力を見るだけの戦い方だった。

「……いいな、悪くねえ、いい太刀筋だ。我流か？」

「いや、仲間に教えてもらってる」

「そゆことか。いい先生だよ、そいつは」

からから、と笑って、剣の腹を再び肩に乗せる。……早く向かってこいという、無言の催促だった。

やるのは今しかない、と刹那は感じていた。メルゼは油断している。刹那を格下だと思つて気を抜いている。瞬時に懐に飛び込んで、そして技を放てばいい。

雷牙たちの世界で、アビスの人形に放つたあの一撃。刹那は、レナとの訓練で少したが技を出すコツを掴んでいた。

形成した魔力の結晶に、再び魔力を送り込むのだ。そして斬る一瞬に、帯びた魔力を放つ。

何度も繰り返した行為を頭にイメージしながら、刹那は大剣に魔力を込める。……言葉にすれば簡単だが、一瞬でも気を抜けばたちまち結晶が解除されるという繊細な行為だ。刹那はいつも以上に冷静になり、体中の魔力を結晶に集中させる。

「ん？ 何だ、そこまでできたのか。どれ、いっちょ見せてみるよ」

刹那の魔力の動きが見えているのか、メルゼは子供のように無邪気に笑いながら剣を構える。

刹那の技がどれほどのものなのか、それを知りたくてうずうずしている。まさにそんな感じだった。

・・・いいさ、それなら、見せてやるっ!!

「つつあ!!」

気合と共に地を蹴る。

開いていたメルゼとの距離はぐんぐん縮まってゆく。

けれどメルゼは動かない。ただ剣を構えて立っている。

・・・受ける気だ。それも、全て受け流す気である。回避されることはまずない。

メルゼの目の前まで接近し、そして刹那は大剣を全力で振り下ろす。それと同時に、結晶の魔力を全て解放させる。

放たれた魔力は無数の黒い風に変化し、メルゼに襲いかかる。

「っ!?!」

驚愕したメルゼは慌てて刹那の大剣を受け止める。

だが、もう遅い。無数に放たれた刹那の魔力はもはや止まらない。流星群のように降り注ぐそれは、すべてメルゼに命中していた。

当たるたびにメルゼの体は撥ね、それが1発1発の威力の高さを証明していた。

「ぐ・・・ふんっ!!」

切羽詰まったような声とともに、メルゼが剣に魔力を込める。同時に、メルゼの剣が高速で『回転』し始めた。

それを、刹那は見たことがあった。道路の工事でよく使われている、

回転しながらアスファルトを粉碎する重量のある道具。それは……ドリルだった。

高速回転したメルゼの剣は、受け止めている刹那の大剣を容易に弾き返す。押し返す力も、技術もいらぬ。純粋な回転の力だけで、メルゼは刹那の大剣を退けた。

「んつく……!？」

予想できていなかったことなだけに、刹那は思わずバランスを崩してしまふ。弾かれた大剣の重みに振り回されてしまい、無様に尻餅をついてしまふ。

すぐさま立ち上がってメルゼとの距離を取ろうとするが……もう終わりだった。メルゼが目の前に立っていて、刹那の首元に剣を突き付けていた。剣は回転したままで、戦闘体制だつてまだ解かれていない。ここから逃げ出すのも、攻撃するのも、もう無理だった。

「……まさか、『崩天剣』を使えるとは、思ってなかつたぞ」

不意にメルゼが口を開き、そんな言葉を口にする。

「? 『崩天剣』?」

「ああ。その技、自力で身に付けたろ?」

「……そうだけど、どうしてわかるんだ?」

剣の回転を止め、メルゼは剣を魔力に戻す。

完全に戦闘体制を解いた状態で、メルゼはおもむろに話し始めた。

「2世代前の王が、その技を使ってたんだ。独裁主義のやつでな、

歴代最悪の王だった。
止めようにも強くてな、手も足も出なかった。この国は、やつのやりたい放題だった」

遠い目をしながら語りメルゼは、どこか寂しそうで、そして悲しそうだった。

「その最悪の状況を救ってくれたのが、天界さ。見かねたやつらが鎮圧しに来たんだ。

かなりの人が死んだが、それでようやく恐怖政治は終わりを告げた。

・・・俺の爺さんの話だ」

・・・それでか、と刹那は思った。

自分の身内の過去。そしてふるまい。死んで当然な行いをしていたとは言え、

自分の祖父が殺されるということは、幼いメルゼにしてみればかなり衝撃的な出来事だったのだろう。

ふと、メルゼは刹那の目を見て・・・ふつと笑った。

「そいつの魂が、今のお前の魂さ。だからだろうな、それが使えるのは。」

「・・・そう、なのか」

ひょっとしたら、自分のメルゼの祖父のようになってしまうのか、などと思ってしまう。

悪い行いをした魂が入っているのならば、そうなってしまいう可能性もあるのではないか？

そう思わずにはいられなかった。今の話を聞いただけに、なおさら。

「・・・不安がるこたあねえさ。問題は魂じゃなくて、肉体のほうだ。考えるのは体だ。悪事を働くのだった体だ。お前がそうしようって思わなけりゃ、どうってこたあねえ」

にっつと笑って、メルゼが頭に手を置いてくる。

「・・・父親とは、こんな感じなのだろうか。温かくて、大きくて、頼りがいのある存在。」

物心つく前に父親が他界した刹那にとって、『父親』を経験するのは初めてのことだった。

「ま、そんなことはいいか。とりあえず、お前の力はわかった。確認するが、『眼』は使えるか？」

「いや、俺は使えない。どうすれば使えるようになるんだ？」

「人それぞれ、だ。俺にはわからねえよ」

強くならなければならぬこの今の状況。戦闘の力を格段に上げる『眼』を使うことができないというのは、実に歯がゆいものだった。レオも、雷牙も雷光も使えるのに、自分は使えない。どんどん取り残されていく感じがして、荷物になってしまいう気がしてしまう。それがたまらなく、嫌だった。

「とにかく、だ。使えねえもんを使おうとするより、使えるものより完璧なものに仕上げたほうがいいと思わねえか？」

「・・・そうだな。そうするよ」

メルゼの言う通りだ。使える方法をあてもなく模索するよりも、今

会得している『崩天剣』を自在に操れるようにしたほうがいいに決まっている。

『眼』に関しては、開眼の方法を模索したところで身につけられるかどうかなどわからないのだから。

「そうと決まれば、だ。お前の使う『崩天剣』、そいつをスムーズに発動させることを重点的にやりつつ、反撃と受けの訓練をやる。基礎は十分でき上がってるから、あとはお前自身がどこまで実力を伸ばせるかだ。みっちりやるから覚悟しろよ」

無言でこくりと頷き、刹那はそこでやっと立ち上がったのだった。

第73話 魔界編 8

魔力のコントロールは、口で言うほど簡単ではない。一般人はその存在に気がつくこともなく一生を終えることもあるくらいだし、気づいたところでうまく操ることができないというのもざらにある話だ。

そんな中、刹那は魔力の存在に気がつき、それをコントロールして結晶である大剣を形成することに成功したわけだが、その大剣を維持したまま、技である『崩天剣』を放つというレベルになると、さすがにコントロールできなくなってくる。

先ほどメルゼ相手に放つことができたのも、魔力を大剣に集中する過程でメルゼが邪魔をしてこなかったから成功しただけであって、魔力の集中を邪魔されたとすれば、放つことは絶対に不可能だった。つまり、今の刹那が『崩天剣』を放つためには、多少の時間と、敵の妨害がない状況が必要なわけだ。

こんな厳しい条件では、実戦で『崩天剣』を使うことはできっこない。強力である『崩天剣』の準備が整うまで待つてくれる敵などどこにもないのだから、そんなことは当然だ。

ならば、刹那が実戦で『崩天剣』を使うにはどうすればいいのか？

答えはシンプルだ。大剣に魔力を込める時間を短くし、さらに集中の際に邪魔されたとしても、それを継続することができればいいのだ。

上記のことが可能になれば、刹那は戦闘中に『崩天剣』を自在に使用することができるようになり、刹那自身の火力も大幅上昇するという寸法だ。

ここで最初の話に戻る。魔力のコントロールは難しい。やろうと思つてコントロールできるものではなく、じっくり時間をかけてやらなければならないものだ。

その点に関しては、神の魂を持った刹那も例外ではなく、メルゼとの訓練中に魔力を大剣に集中しようと試みるものの、攻撃を受け止めるたび大剣に集中していた魔力が分散し、再び集中しなおす羽目になる。

それどころか、大剣に魔力を集中することばかりに気を取られ、メルゼに大剣を弾き飛ばされることもしばしば。これでは、『崩天剣』を使わないほうが遥かにマシだと刹那が思ってくるのも、無理のない話だ。

826

「.....」

メルゼに完膚なきまで叩きのめされた刹那は、魔界特有の厚い雲で覆われた空を見上げるように背を地につけ、大の字になって転がっていた。

形成したはずの大剣はすでに魔力となつて刹那の体内へと戻っており、戦意はもう完全に喪失している様子がうかがえる。

長時間の訓練による疲れと、思うようにならない魔力のコントロールのせいだった。これだけやって、上達の兆しがまったく見えないとなれば、誰だってこうなる。仕方のない話だった。

「おいおい、大丈夫か」

「・・・大丈夫だよ」

メルゼの声に返事をし、刹那はむくりと上体を起こした。

精神的にも、肉体的にも、もう限界がきていることを、メルゼは刹那の表情から受け取った。

「確かになあ、はつきり言ってちつとも上達しねえ。

反撃と受けはちよつとずつうまくはなつてきてるが、肝の『崩天剣』はまったく使えないままってきたもんだ」

「・・・維持できないんだよ。剣を受けるたびに魔力が散っちゃつて、またやり直し。いい加減、やってられないよ」

はあ、とため息をひとつ、刹那は吐き捨てるように呟いた。それを見かねたのか、メルゼがちよいちよい、と親指である方向をさした。

「あれ、見てみるよ」

親指の先にいるのは、胡坐をかいて目を閉じているレオだった。

もうずっとあんな感じた。刹那とメルゼが初めて剣を合わせてから今に至るまで、レオは姿勢1つ崩さず、ただひたすら目の前に浮かんでいる玩具から漂っている微量の魔力を感じ取るうとしていた。

姿勢を継続しているということは、レオもまた刹那と同様、行き詰まっているということになる。

「魔力に関することなんて、本当は一朝一夕でものにできるもんじやねえんだよ。

時間だつてかかる、根気だっている。魔力を使って強くなるってのは、そういうことなんだ」

「・・・ああ」

刹那は、結晶である大剣を形成するにあたって、あまり苦労した思いをしなかった。

多少なら時間がかかったものの、この1日中ぶっ続けでやった訓練に比べれば遙かに短い時間でものにできた。

力を手に入れることは時間がかかるということも学ばなかった刹那。

今そのときがきているのかもしれない。時間をかけて、じっくり洗練する時が。

「強力な力をすぐ自分のものにできる奴は天才くらいだ。それも、とびっきりのな。」

「そんなやつはこの世にはいない。だから、俺達は努力をしてるんだよ」

「……」

「って言っても、誰だつてうまくいかなきゃ不貞腐れる。」

今日はひとまず切り上げるとするか。暗くなってきたしな」

「……いや、もうちょっとだけ、やるっ」

「んっ」

「もうちょっとだけやるっ。もうちょっと、だけ」

ゆっくりと立ち上がって、刹那は大剣を形成する。

先ほどまでの疲弊しきった表情はどこにもない。目にも生氣が戻っている。

「・・・」

ふっと笑って、メルゼも剣を構えた。

第74話 魔界編9

刹那が再びやる気を取り戻し、メルゼとの訓練を再開して2時間ほど。

いい加減、刹那の体力が限界だと悟ったメルゼは今日の訓練を終わらせ、ぐったりしている刹那を横で支えながら、身動き1つ取らなかったレオと共に城へと戻っていった。

「どうだ？ ちったあ上達したか？」

メルゼが、ふとそんなことをレオに尋ねる。

「いや、悪いがさっぱりだ。突破口が全然見えん」

ふっと笑って、レオはそう返す。

「意外だな。全然不貞腐れてねえじゃねえか」

刹那がそうだったように、てっきりレオも同じように不貞腐れていると思っていたメルゼにしてみれば、レオの態度は意外以外の何物でもなかった。

・・・本当は何かコツを掴んだのではないのか？

そう思ってしまうくらい、レオは不敵に笑ってみせたのだ。

「変なやつだな」

「そんなことはないさ。久しぶりなんだよ、こうやって苦労するのは」

そう言つて、レオはまた笑う。
似てるな、とメルゼは思った。若い頃のメルゼ自身と、そっくりだった。

無我夢中で訓練をこなしていた日々。つらくても、厳しくても、その結果が自分の力になれば、苦労などいとわなかったあの頃。限界がきた時も諦めず、ただひたすら限界の向こう側へ行こうと必死になつて努力をしたのを鮮明に覚えている。・・・結果は散々なもので、結局限界を超えることなどできなかつたのだが。

「はは、まあ頑張れや。若いんだからよ、どんどん力を吸収するのもいいさ」

「ああ、言われなくてもそうするさ。俺は、もっと強くないといけないからな」

「目標もあんのか。ますます頑張れ」

メルゼとレオはお互いの顔を見合わせ、そして笑つた。
月明かりも何もない夜道を、少しだけ離れた城が放っている光だけを頼りに、2人は歩き続けた。

・・・ちなみに、疲れでぐったりとした刹那は2人の話を聞くことも叶わず、そのままメルゼに引きずられたままだった。

+++++

城の中。3人がやってきたのは食堂である。休憩も何も取らなかつた3人だが、城へやってきたことで空腹を思い出し、ここへやってきたわけだ。よくよく思い返してみれば、よくもまあここまで補給なしでやってこれたものだと思息が出る。

食堂の中には兵士たちがちらほらと見えており、仲間同士で会話しながら楽しく食事をしていた。ピークが過ぎ、人がほとんどいないといううまい時間帯に來ることができたら良かった。

「あ、魔王様。訓練のほうは終わりましたんで？」

「まあな。お前らもお疲れ、こっちは気にしねえで気軽に食っててくれ」

「あいあい、了解です」

「・・・ところでメルゼ様。そのお客人、大丈夫なので？ 何だかぐったりしてますが・・・」

おそるおそる、兵士の1人が刹那を指差す。

指の先の刹那は非常に疲れ切っており、一時的な睡眠と覚醒を繰り返しており、うつらうつらと船を漕いでいる状態になっていた。休憩もなしにぶっ通しでやれば誰でもこうなる。加えて最後の刹那の居残り時間。限界だったスタミナを最大まで削った直後の激しすぎる訓練。気を失っても仕方がないほどの疲労を、この状態で留めているだけ大したものだ。

「ん、まあ大丈夫だろ。飯食べれば治るって。おら刹那、しっかりしろ。飯だぞ飯」

垂れている刹那の頭をペシペシとメルゼが叩く。刹那はよほど疲れたのか、ただ呻き声をあげるだけで、一向に頭を上げようとしない。無理に起こしたとしても、すぐに眠ってしまうだろう。夕食はなしで、このまま眠らせるのが一番いいのかもしれない。

問題は、誰が寝室まで連れていくかだ。レオは疲れているし、この兵士たちに頼むのも忍びない。となれば、消去法でいっても刹那を運ぶのはメルゼ、ということになる。もちろんメルゼ自身も疲れてはいるが、客人にそんなことをさせるわけにはいかない。

「仕方ねえ、置いてくるか。悪いがレオ、飯はちよつと待っていてくれや。すぐ戻るからよ」

「ん、すまないな。場所がわかってれば俺が行ったんだが・・・」

「はは、客人にんなことさせらんねえって」

笑いながら刹那を持ちかえ、そのままメルゼは食堂を出ようとした。のだが・・・。

「あ、メルゼ様。やっぱりここにおられましたか」

ようやく見つけた、と言わんばかりに、マリアがやってきた。だが、一緒にいるはずのリリアと風花の姿が見当たらない。

「よおマリア。嬢ちゃんたちはどうした？」

「2人とも、もう眠っていますわ。もういい時間ですもの」

「まあな。そういえばお前、俺のこと探してなかったか？」

「ええ、練習場に行つてからずっと帰つてらっしやらないので、そろそろかと思つてここに」

さすが夫婦というだけあつて、マリアはメルゼの行動を十分に理解しているようだった。

「それで、どちらに？」

「ああ、刹那がダウンしちまつてるから、寢室に運ぼうとしてんだ」

「まあ……でしたら私がやりますわ」

さも当然、と言わんばかりに、マリアは手を叩きながらそう言う。

「は？ お前、運べんのか？」

「運べますわ。それに、今日は1日中メルゼ様に刹那くんを取られてしまいましたし、1晩くらいは我が子の寝顔を見ていたいですもの」

心の底から愛おしそうに、マリアは刹那のうな垂れている表情を見つめた。長年会えなかつた我が子。異世界のどこかで元気で生きてくれればそれでいいと、1度は会うことを諦めた我が子。それが目の前にいる。血こそは繋がってはいないが、それでも自分の子供だ。マリアがそう主張をするのも、親として当然の権利だった。

「あゝ……悪かつた。じゃあ頼む」

そんなマリアの気持ちを無視して、1日中刹那を独占していたこと

に罪悪感を覚えたのか、メルゼは大人しく抱えている刹那をマリアに預ける。マリアは本当に嬉しそうに刹那を抱え込み、そして支えた。

「見た目より重いですね。ふふ、頼もしいですわ」

息子の成長を、自分の手で感じる事ができるのが嬉しいのか、マリアはそう呟いた。嬉しそうなのその表情は幸せそのもので、涙をうつすらと浮かべているほどだった。

「それでは、刹那くんを連れて行きますわね。レオさん、どうぞ遠慮なさらず、ごゆっくりしてくださいね」

「はい。刹那を頼みます」

「息子ですもの、当然ですわ」

マリアはレオとメルゼに深々と頭を下げ、そのまま食道を出て行った。

第75話 魔界編10

夜も更け、兵士の大半が眠りについた頃。今までずっと気絶のような状態でいた刹那は、今になってようやく目を覚ました。

「ん………」

何だか花のような優しい香りに包まれた刹那は寝ぼけ眼を擦り、辺りを見渡す。明かりも何も点いていない部屋は当然ながら真っ暗で、周りの物が何も見えない。唯一わかるのは女性の物と思われる、小さな寝息だけ。自分の近くから、それは聞こえてくる。

暗がりを見つめているうちに、だんだんと目が慣れてくる。と、自分の足元に、誰かが突っ伏しているのが目に入った。……さっきから聞こえてくる寝息の主は、どうやらこの人らしい。誰だろう。そう思い、暗闇の中必死に目を凝らし、その人物を見ようとする。が、

「ん……、あ、起きられたんですね」

顔を覗く前に、その女性が起きてしまった。

その声と、暗闇の中のシルエツトで、その人物が誰だかわかってしまう。この人は、初対面時に刹那を抱き締めながら泣いていた、この国の女王、マリアだった。

「！ あ、はい」

慌てて返事をする。マリアの声は何だか穏やかで、暗闇で見えにくいはずの表情も簡単にわかってしまう。今マリアは、微笑ん

でいる。刹那を見て、ただ幸せそうに。

「えっと、レオたちは？」

「皆様は他の部屋でお休みにいられてますよ。刹那くんは、無理を言って私の部屋に運ばせていただきました」

「私の部屋って・・・じゃあこのベッドって・・・!!」

理解した瞬間、刹那の顔が徐々に赤くなってくる。どおりでベッドからいい匂いがしてくるはずだ。優しく、花のようないい香り。そんな匂いが染みついた、毎日マリアが寝起きしているベッドに、自分は寝ている。

気恥ずかしさのあまり、とっさにベッドから逃げ出そうと刹那だったが、額をマリアのものと思われるすべすべの手で押さえられる。

「そんなに慌てて、どうしたのですか？」

「い、いや・・・、だって、ここってマリアさんの・・・!」

「ふふ、いいじゃありませんか。だって、親子ですもの」

親子だから。

そのたった一言で、刹那は急に大人しくなった。今のマリアの心情を理解してやれないほど、刹那は無知でも間抜けでもない。出ようとしたベッドに再び戻り、そしてマリアのほうを見つめた。

光がほとんどないこの部屋でも、目さえ慣れれば少しでも物が見えるようになる。闇の中に溶けそうな儂さと切なさを持った美女の顔

を、刹那はただじつと見つめていた。

「・・・本当に、よかったです」

「俺が、この世界に来たことですか？」

思ったことを、素直に口にしてみる。

「それもですけど、あなたが立派に育ってくれていて」

「でも、血は繋がってませんよ？ それでも、俺を息子だと思っているんですか？」

言ってから、しまった、と思った。刹那は純粹な疑問からそう尋ねたが、今の聞き方だと、息子という扱いをされて不満を持っている、と捉えられてしまうかもしれない。

だが、刹那のちょっとした心配をよそに、マリアは笑いを含みながら刹那の疑問に答える。

「私たちの世界では、刹那くんの世界ほど、血の繋がりにこだわっていないんです。それが文化と言いますか、常識と言いますか・・・いずれにしても、刹那くんと血が繋がっていなくても、私とメルゼ様にとつては大事な大事な子供なのです」

マリアが答え終わるなり、きゅゅ、という可愛らしい音が響く。誰がどう聞こえようと、腹の虫の音だった。

その音を隠すように、慌てて刹那が腹を隠す。いくら昼食と夕飯を食べていないとは言え、大事な話をしているこの時に、腹の虫が鳴り響くというのは何とも間抜けだった。

バツが悪くなり、刹那は下を向いてしまう。

「そうでしたね、ご飯、まだでしたもんね」

全てを見透かしたように、マリアが言った。

この包み込むような温かさに、刹那はくすぐったいような感覚に襲われる。

「・・・すみません」

かろうじて、それだけ呟く。

「いえいえ、お腹が空くのも無理はないです。・・・でも、もうコック達も眠っている時間ですわね」

首を傾げマリアは悩み、そしてすぐに名案を思い付いたと言わんばかりに手を打った。

「そうですね！ 私が作ればいいんだわ！」

「え、マリアさんがですか？」

少々顔を引きつらせ、刹那は恐る恐る尋ねる。女王と言った地位の高い人物は、専属のコックがいるため滅多に料理などしない。レオやリリアがそうだった。

だからこそ、不安になる。少し前のリリアが厨房に入ったときの悲劇がまた繰り返されるのではないかと、心配で心配でたまらない。

不安いっぱいの刹那を安心させるように、マリアが笑いながら言う。

「大丈夫ですよ。そんなに不安にならなくとも、ちゃんとできますわ」

「・・・すいません、昔ちよつと大変なことがあったもので」

「あらあら、大変だったのね。それじゃ、行きましよう？」

刹那の目の前に、マリアがすつと手を出してくる。手を繋いで行くうと、そう言っているのだ。

少々迷いながらも刹那はマリアの手を取り、そしてベッドから立ち上がった。

2人は並んで部屋を出て、食堂へと向かう。離さぬようしっかりと手を繋ぎ、マリアが刹那を先導しているその姿は、仲の良い親子そのものだった。

+++++

食堂に着き、すぐさまマリアは料理に取り掛かった。

颯爽と厨房へ向かっていくマリアのその様は、名のある兵士が戦場へと赴くよう、何だか格好よくて、頼もしかった

刹那はというと、テーブルへと着き、料理が運ばれてくるのをただ待っているという状況になっている。

「マリアさん！何か手伝いましょうか?!」

さすがに黙って待っているだけでは悪いと思ったのか、厨房にいるマリアに聞こえるよう、刹那は大きな声を出す。

「いいえ、ゆっくり待っていてください」

間延びした声が、厨房の中から聞こえてくる。どうやら、これがマリアの精一杯の声のようだった。

マリアにこう言われては、無理に手伝いに行くのも気が引けた。言われた通り、料理が出来上がるまで待たせてもらうことにしよう、と刹那は自分に言い聞かせた。

待っている間、厨房から小気味良い様々な音が聞こえてくる。包丁がまな板を一定のリズムで叩く音、何かを煮込んでいるような音、流れる水の音。それらの音は互いに綺麗に混ざり合い、オーケストラのようなハーモニーを奏でていた。

その安心するような音に刹那はすっかり夢中になってしまい、聞こえてくる音からマリアが何をしているのかを、目を閉じて想像していた。

「……何だか、懐かしいな」

自分が幼かった日々を、ふと思い出す。

空腹を我慢し、母親の料理をしている後姿を、ただじっと眺めていたあの頃。

何を作っているのかと聞いても、母親は刹那に一切知らされず、テーブルに運ばれて初めてわかる日ごとの献立は、何だかプレゼントの箱を開ける時のようなドキドキ感があつたのを、よく覚えている。そして今も、まさにその時と同じ気持ちだった。マリアが何を作っているのか予想できず、漂ってくる匂いだけを頼りに料理を想像するだけ。何が運ばれてくるのだろう、という期待が、刹那の胸をいっぱいにした。

「お待たせしました」

声と同時に、料理の乗った大皿をマリアが運んでくる。湯気と共に流れてくる匂いは徐々に強くなってきたいて、刹那の空の胃袋を刺激した。

2つの大皿が刹那の目の前に置かる。一方はカットされたパンの皿で、もう1つは野菜と肉をいためた、いわゆる肉野菜炒めだった。ただ、肉野菜炒めに使われている肉や野菜は、どれも見覚えのない種類で、どんな味がするのだろうか、刹那の好奇心を非常に強くすぐるものだった。

「えっと、その、食べていいでしょうか？」

念のため、マリアに尋ねる。

「ええ、もちろんですわ」

にっこりとしたマリアの了承を得て、刹那は手を合わせた。

「いただきます」

丸半日、何も胃袋に入れなかった刹那の食欲は凄まじいもので、ものの10分とかわからず2つの大皿は空になってしまった。刹那自身も、こんなに食べられるとは思っていなかった。残さず食べるようにしたいとは思ったものの、量が結構あったため、ほんの少し残してしまうかもしれない、といった覚悟はあった。

思ったよりも腹に入ったのは、刹那の異常な食欲でもあったが、最大の理由は料理の味にあった。生きてきた中で一番うまい、とまではいかないものの、優しくて、ほっとするようなその味は、刹那の食欲を増進させ、そしてすべてを平らげるまでに至るものだった。いわゆる、お袋の味、というやつだった。

「ふう〜・・・ごちそうさまでした」

「お粗末様でした。それにしても、よく食べましたね。てっきり残すかもしれない、って思ったんですけど？」

いたずらっぽく笑い、マリアはそう言った。

男にしては細いほうに入る刹那の体型の、一体どこにあれだけの量が収まるのか。マリアにしてみればそれは不思議でもあり、また全部残さず食べてくれた嬉しさでもあった。

「あ、いえ、あまりにおいしかったものですから」

「あら、そうですか。それならよかったです」

柔らかな笑顔を浮かべるマリア。もしお伽噺によく出てくる天使が

実在するとしたのなら、その天使の笑顔は間違いなくマリアの笑顔と同じものだと思う。

じっと、マリアが刹那の顔を見つめてくる。笑顔のまま、しかし何も言わず、無言のまま。

「えっと・・・顔に何かついてますか？」

気恥ずかしさを誤魔化すように、刹那はマリアに訊いた。

「ええ、パンのかけらがついてますわ」

「え？ ど、どこにですか？」

あたふためいて、刹那は顔に手をやる。頬にやり、顎にやり、ただパンクズらしき物体の感触は伝わってこない。

「ここ、ですよ」

一言だけそう言って、マリアが刹那の口元に手をやる。小さなパンの欠片。マリアは手の中にあるそのパンクズを、

「！？」

何の躊躇もなく口へと運んだ。

「ん、今日のパンも、よく焼きあがってますね」

さも何でもないかのように、マリアは笑った。

突然のこの行為に、刹那は思わず顔を赤くしてしまう。ならないわけがなかった。それがマリアのような美人にされたのならなおさら

だ。

これではまるで恋人同士ではないか、と思わずにはいられない。マンガやテレビでよく見るお馴染みのシーンが、たった今日の前のマリアにされたのだ。

顔に血液が集まってくるのが、嫌でもわかってしまう。恥ずかしくて、マリアの顔をまともに見ることができない。

「あ、あの、どうして・・・」

「？ 何がですか」

何のことやらさっぱり、と言った具合に、マリアは切り返してくる。声にはからかいの色など微塵もなく、どうして刹那がそこまで恥ずかしがっているのかわからないというニュアンスさえある。

「だから、その・・・」

「？・・・ああ、今のですか？」

ようやく気がついたのか、マリアがそう刹那に訊く。

「えっと、はい」

「別に恥ずかしがることなんてないじゃないですか。だって、私たちは

母子なんですから。

その一言。

そのたった一言で、刹那はようやく自分の勘違いに気がついた。マリアは、親子水入らずのこの時間を、ただ純粹に過ごしたかっただけだったのだ。

料理を作ったのも、愛する息子に腕を振るいたいと思ったから。

刹那の食事の様を終始見ていたのも、じっくりと成長した息子を見たかったから。

刹那の口元のパンクズを食べたのも、愛しい息子の世話を少しでも焼きたかったから。

団欒を目的とするマリアの行為を、刹那は恋人がするような行為だと勝手に勘違いし、マリアのしたかったことを履き違えていた。

「長い間、私はずっと思い続けてきました」

「俺のこと、ですか？」

「はい。男の子か、女の子か。明るいのか、暗いのか。元気なのか、病弱なのか。それを想像するたびに、私は泣きました」

マリアの血の繋がっていた子は、死んだ。いくら血縁の概念が薄くとも、我が子が死んで哀しくないわけがない。

それを紛らわすたびに、マリアは夜な夜な窓辺に立り、異世界で生きているであろう我が子を想い続け、そして哀しみに明け暮れた。どんな人物でもいい。極悪人だろうが、大犯罪者だろうが、そんなの知ったことではない。愛する我が子だ。健康で、そして『生きて』くれていれば、それだけでよかった。

「16年です。まさか、こんな形で息子と再開できるとは・・・正直思ってもみませんでした」

「そう、ですか」

マリアの長年抱き続けてきた想いに、どうにか応えてやりたかった。何でもいい。この人のために、何かをしてやりたい。

「俺にできること、ありませんか？」

「できること、と言いますと？」

「何でもいい。できることなら、本当に何でも」

血は繋がっていないなくとも、母である。その母の願いならば、可能な限り叶えてやりたかった。

「それならば1つ」

マリアが、笑顔を崩さず、刹那をまっすぐ見つめて、遠慮がちに言う。

「お母さん、と呼んでいただけませんか？」

ずっと望んで止まなかったマリアの素朴なたった1つの願い。

息子に、そう呼んでもらいたい。

1度だけでいい。多くは望まない。それだけでいい。

それが、マリアの長年望み続けてきた、唯一の願望だった。

「……母さん」

躊躇いがちに、刹那はそう呼んだ。

「はい」

マリアも、笑顔でそれに応える。

「母さん」

2度目。今度は躊躇いなどない。

「はい・・・はい・・・」

嬉しそうに、本当に嬉しそうに、マリアは刹那の呼びかけに応えた。心が温かいもので満たされていき、マリアは笑顔のまま、泣いていた。

・・・温かい。

母と呼ばれることが、こんなにも温かいものだとは、知らなかった。

「お母さんは・・・ここにいますよ・・・」

面を下げ、マリアは満たされた心を表すかのように、涙を流し続けた。

高まった気持ちがり落ち着くまで、ずっと。

第77話 魔界編12

真つ暗な闇が薄れ、太陽の昇らない薄暗い朝が訪れる。魔界での目覚めは、雨の日の朝のようで、あまり好きになれそうにもなかった。だが、極端な疲労によってもたらされた深い睡眠は、刹那の体力をあっという間に回復させ、そして内から湧き出てくるやる気を滾らせていた。

昨日のあの無様な結果に、刹那は満足などしていない。もっと強くなりたかった。足を引っ張るような存在ではなく、むしろみんなを引っ張っていけるような強さを、今の刹那は求めていた。

「・・・よし」

パンツ！ と頬を叩き、ベッドから起き上がる。全身の凝りをほぐす様に体を伸ばし、窓辺に立つ。朝日はなかったものの、そこそこ明るい空は、いつ雲が切れて光が降り注いできてもおかしくはなかった。運がよければ、朝日を拝めるかもしれない。

「んん・・・あら、お目覚め、ですか？」

寝ぼけ眼を擦りながら刹那に話しかけてくるのは、昨日ずっと泣いていたマリアだった。ちなみに一緒にベッドで寝ていたわけではない。

マリアはそれを希望してやまなかったのだが、さすがにそれだけは勘弁してくださいと、刹那が必死になって断ったおかげで、となり合わせのベッドで寝る、というところまで妥協してくれた。

「はい、おはようございます」

「よく眠れましたか？」

「とてもよく眠れました、ありがとうございます」

「それは何よりですわ」

くすつと笑って、マリアが言う。何が面白いのか、マリアはそのまま刹那の顔から視線を外そうとしなかった。

「えっと、マリアさん。レオたちはどこへ？」

恥ずかしさをごまかすかのように、刹那は話題を変えた。

「もう、お母さんとは呼んでいただけなのですわ」

悲しそうに笑いながら、マリアは視線を下げた。仕方ないと思って
も、未練が残っているような、楽しい夢が終わってしまったかのよ
うな、そんな表情だった。

「あ、いえ、あの・・・」

「ふふ、冗談ですわ。そんなに慌てないでください」

狼狽を隠せない刹那に、いたずらっぽくマリアが笑う。

「みなさんは、もう食堂へと向かったと思いますわ。私たちも参り
ましょう」

言い終わるとベッドから起き上がり、そして刹那へと歩み寄る。す
っと手を差し出して、にっこりと笑ってマリアは言った。

「手、繋いでくださる？」

「・・・もちろんです」

そっとマリアの白い手を取り、きゅっと握り締める。

ちよつとでも力を込めたら、ポキンと折れてしまいそうな指だった。そして、冷たい。だからこそ、自分の体温で温めてあげたいと思った。

「さあ、行きましょう。みんなが待っています」

マリアの言葉に頷き、2人は部屋を後にした。

++++

食堂の前までやってくると、食欲をそそる匂いが漂ってくる。同時に、兵士たちの声や食器の音も耳に入る。賑やかで、楽しい朝餉の場だった。

そういえば、と刹那はふと思った。食堂というのは、兵士たちのような、王族よりも低い地位の者たちが利用する場のはず。それなのに、なぜメルゼもマリアも、ためらわずにこんな場所へと来るのだろう。普通ならば、王族だけの集まりで食事をするはずなのに。

「マリアさん、この国は王族も食堂を利用するんですか？」

「いえ、本当は利用してはいけないんです。謀反の可能性も0ではありませんし、毒が盛られてたら惨事だと、今まで言われ続けて大変でしたわ」

苦笑いしながら、マリアは言う。

「じゃあ、どうしてなんですか？」

「だって・・・みんなと一緒にのほうが楽しいではありませんか」

屈託のない笑顔で、そう言い切った。

「それに、みんな私たちのことを慕ってくれております。そのようなことをする人物などおりません。いたとしても、それは仕方のないことなのです」

「何でですか？」

「私たちの政策や人望、人柄などに原因があったからです。国民万人に慕われるということは大変難しいことですが、なるべく皆に好かれなくてはなりません。それができなくて殺されるのであれば、それは仕方のないことなの

です」

上に立つものの、運命なのだろうか、それは。

上に立って、下の者たちのために必死に頑張って、期待に答えられなければ殺されても構わないという覚悟を持つことが、王の定めなのだろうか。

「・・・俺にはわかりませんよ」

王への理不尽さと不平さに不満を露わにしながら、刹那は言った。それを、マリアは笑う。

「大丈夫ですよ。みんな、良い人ですから」

完全に信頼しきっている目を、マリアはしていた。絶対にそんなこととはあるわけないと、信じてやまない瞳だった。

「さ、行きましょう。みなさんが待っていますよ」

握った手をやさしく引つ張られる。刹那は何も言わず、マリアに連れられて食堂へと入った。

中は兵士たちでいっぱいだった。どこを見回しても鎧を着け、笑い

ながら食事を口に運ぶ姿しかない。中には、朝だというのに酒を飲んでいいる輩もいた。

そんな中、ひときわ目立つのはメルゼたちのテーブルだった。というのも、レオとリリアの2人が銀髪で、風花が深緑の髪をしていたため、黒髪だらけの食堂では目立って仕方なかったのだ。

「やっぱり、目立ちますよね・・・」

「ふふ、助かりますわ」

短くやり取りをし、刹那とマリアはそのテーブルへと向かう。

「あゝ、マリア様おはようさんです」

「はい、おはようございます。今日も頑張ってくださいね」

「いやあ！ 今日もお美しい！ 目の保養になりますよー！」

「ふふ、ありがとうございます。貴方だって格好がいいですわ」

「あゝ王女様、一緒にどうですか？ ひくっ」

「朝からは遠慮しますわ。体に気をつけながら飲んでくださいね」

あちこちのテーブルから飛んでくる声。我先に、と夢中になっている兵士たちに、マリアは丁寧に1人1人に声を返していた。そっけなく返すのではなく、声に親密な色を込めて。

刹那は、そんなマリアの様子をただ黙って見ていた。頭にあるのは、先ほどの言葉。

『みんな、良い人ですから』

その言葉に、偽りはなかった。あるのは真実だけだった。もちろん、今声をかけているのは兵士だけで、この城の中にいる人や城の外の国民の反応は見えていないからわからない。だが、何となく想像はつく。行く先々で声をかけられ、それを笑顔で返すマリアの姿が。

刹那には政治や国のことなどわからない。だが、それでもかすかに思うのだ。これこそが、本当の国の在り方ではないのか、と。

そんなことを考えて呆けているうちに、メルゼたちのいるテーブルへと到着する。食事はすでに準備されており、あとは食べるだけという状態なのにも関わらず手がつけられていないのは、みんなの配慮からだろう。

「お、起きたか。仲良く手え繋いで、ご機嫌だなマリア」

「ええ。とても」

メルゼの一声に笑顔で答え、そこで刹那の手をそつと離す。しつとりと汗ばんだ手のひらが外気にさらされ、ひんやりとする。

「あゝ刹那くん。おはよ」

「うん、おはよ」

風花は、うつら、うつら、と船を漕いでいた。

寝足りなかったのか、それとも単に意識の覚醒が遅いだけなのか。

「おはようございます、刹那さん。昨夜、ちゃんとマリアさんと仲良くしてましたか？」

ふと、リリアがそんなことを聞いてくる。おそらく、マリアが刹那の所に行ったということを知っているのだろう。期待のこもった目で、リリアは刹那の返答を待っていた。

「ああ、団欒って感じだったよ」

ありのままを答える。昨日のあの2人きりで過ごした時間。温かくて、落ち着く時間。それが団欒でないのなら、一体何だと言うのだろうか。

「よかった！　ね、兄さん！」

「ああ。いい時間だったろ？　刹那」

「とてもな。すごくいい時間だった」

思っていたことを素直に話す。それを聞いていたマリアは、何だか泣きそうになっていた。

会話もほどほどに、刹那とマリアは席についた。これで全員が揃ったわけだが、まだ朝食には手をつけない。これから話し合うことがあるからだ。

「さて、とだ。まあこれでみんな集まったわけだ。今日のことを話し合おうか」

話を切り出したのはメルゼ。こりこりと頭を掻きながら話を始めたから、何だか締まらないような気がしたが、とりあえずは置いておく。

「刹那とレオは、わかってるな。昨日の続きだ。いつ開くかわからんからな」

「？ 開く？ 何が開くんだ」

メルゼの話を区切り、レオが発言する。開く、という聞きなれない単語のせいだった。

「あ、言ってなかったな。天界と魔界の道のことだよ」

あっけんからんと、メルゼは言う。

「俺たちのいる魔界は地上にあるが、天界は空に浮いてんだ。今戦争が激化してねえのも、その道が塞がってるからなんだ」

「塞がってる？ こちらからは開けないのか？」

「あっちのほうは科学力はあるからな。」

天候のコントロールされちまって、なかなか開けてくれねえんだよ」

「天候……。それが天界への道と関係あるのか？」

「あるさ。その道を塞いでんのは、雲だ」

窓を指さしながら、メルゼは続ける。

「この国独特の薄暗い天気は、長期間続く曇りのせいだ。つっても、年中曇りつてわけでもなくてな、月1程度で晴れ間が見えるんだ。

その時に天界からお迎えが来て会談とかするわけなんだが、天候をコントロールされちまって、もう2年くらい晴れを拝めてねえってこった」

戦いが長引いたのも、国民たちが戦争に無頓着なのも、すべては雲にあった。それが長期間ずっと天界への道を閉ざしているのであれば、戦争が激化するはずもない。戦争中だというのに、城内がここまで穏やかなのも、きっとそのせいなのだろう。

「こつちから行くことはできないのか？」

「空を飛ぶモンなんてうちじゃあねえからな。移動はいつつも天界任せだったし」

「天界側の連中が、雲を無視して攻めてくるといふことは？」

「ねえな。そもそも自殺行為だしな。あの厚い雲の中は、雷の嵐だ
って聞かされた。」

無理に突っ切るうとすれば、感電しておしまいだ」

説明の限りでは、天界の連中が雲を除去しない限りは攻めてくるこ
とはできず、刹那とレオの訓練は邪魔されない、という結論になっ
た。

だが裏を返せば、どんなに早く訓練を終え、それぞれの求める技能
を会得したところで、天界への道が開かれなければ、この世界の罨
を外すことはできないことになる。それでは、いつまで経っても他
の世界の罨を外すことなどできない。罨によって苦しむ人々の時間
が長くなってしまふのだ。

「レオ、どうするんだ？」

レオと同じことを考えたのか、刹那は多少不安そうにレオに聞く。
腕を組んでため息をつくど、レオは仕方ないと言わんばかりにぼつ
りと呟く。

「・・・何か、考えておくさ」

答えを後回しにするような答えだった。

それも無理のないこと。時間をかけずに、存在しない移動手段を思いつくことなど、到底不可能だ。あせらず、じっくりと考えれば、何かいいアイデアが浮かぶかもしれない。それが、今のレオの考えだった。

「何だか、長引きそう？」

いかにも能天気そうに、風花が小首を傾げる。

「みたい、ですね」

それとは対照的に、しゅん、と頂垂れるリリア。反応は人それぞれだったが、いずれにせよ何とかしなければならぬ切実な問題だということには変わりなかった。

「まあ、次だな。嬢ちゃんたちは、今日どうすんだ？」

リリアと風花のほうを向いて、メルゼが尋ねる。

昨日はマリアが1日中付きっきりだったが、2日連続部屋の中だといくらなんでも退屈なはず。考えがなければ、メルゼはマリアと一緒に街に行つて楽しんでもらおうと思っていた。

「2人ともがよければですが、街に行きませんか？」

そうメルゼが思っていた矢先に、マリアがぼん、と手を叩いて嬉しそうに提案する。

仲の良い夫婦は、考えていることも同じようだった。

「私は街に行きたいです！　ここに来てから、ずっと行ってみたかったんです！」

ガタン！　と勢いよく椅子から立ち上がり、リリアがやや興奮気味に言う。探検が好きで、好奇心があふれ返っているリリアにしてみれば、エサを前にお預けをくらった犬のように、もう待ちきれないという状態だったのだろう。

「私も～行きたいかな～。どんな感じなのか～、ここに来るまで見れなかったし～」

風花もリリアほど興奮はしていないものの、見たことのない街へと出かけることに賛成してくれた。あまり科学の発展が目覚ましくない世界出身の風花にしてみれば、見たことのないもとをみる事ができるということは、とても魅力的のようだった。

「うっし、話は決まったな。男連中は訓練で、女連中は街に遊びに出かける、と。」

マリア、嬢ちゃんたち、頼んだぜ」

「もちろんですわ」

お互い顔を見合わせ、そして笑う。どうやら、話はまとまったようだった。

「んじゃ、食うか。待たせて悪かったな」

メルゼの言葉と同時に、朝食の時間が始まった。

++++

地上より遙か上空に位置する天界。

島のようなサイズの大陸が浮遊しているその国は、3つのエリアから成り立っている。

何の能力も持たない一般人が暮らす、下層部。

魔界へと攻撃を仕掛ける兵士たちが集結している、中層部。

そして、この天界を動かす王族や補佐たちの住まう、上層部。

人口としてはもっとも下層部が多く、次に中層部が多い。上層部に至っては、天界の人口の1%も満たないという、少数の聖族が生活している。もちろん、生活の水準もそれぞれ違う。どの層が一番低く、そしてどの層が一番高いのかは、もはや語る必要もないだろう。

その天界には、1つの国家機密があった。上層部の人間も、極わずかしかり得ず、一昔前に共存していた魔界の王たちも知り得ないという、重要極まりない秘密だ。

・・・天界には『神女』が存在している、ということだった。

その神女は、天界が空に昇るよりもずっと前に存在し、天界という国を作り、空に浮かばせるという案を実現させ、そして今に至るまで国を動かしてきた、実質の指導者だった。表の権力者たる王は、その神女の言葉に従い、そして国を動かす『駒』でしかない。

年も取らず、いつまでも若々しいその姿は、ただの人間でしかない聖族にとって『神』以外の何物でもなかった。

「神女様、お告げを」

薄暗く、ひんやりとした、まるで牢獄のような部屋の中、1人の男が玉座に堂々と腰かけている神女の前に跪き、言葉を待っていた。

この男こそ、国民によく知られている王、マキージャ。国民に対する指導力も半端ではなく、自身も切れ者という、王にふさわしいと

いう世辞がやまない有名な男だった。

だが、それは神女の存在がわかっていない、下層部や中層部の人間の勝手な噂にしか過ぎない。この男が、いかにも王らしい王だと言われる所以は、神女の指示によるものだった。

ここまで来られたのも、すべては神女の賜物である。この男に地力など塵とも存在せず、助言という飾りでしか力を発揮することのできないマキージャは、祭り上げられた道化師であり、どうしようもない愚者でもあった。

ならば、なぜ神女がこの男を王に抜擢したのか。どうしようもないこの男を。

答えは至極簡単、賢い者は扱い難いからである。マキージャのような愚者であれば、謀反も何も考える知恵も度胸もない。機械人形のように言われたことをこなす愚者は、王という飾りをつければ最高の駒になるのだ。

「・・・攻める」

凜とした、それでいて幼さが残る声で、その無情な1つの命令が下される。

「今、でいじまいますか？」

神女の逆鱗に触れぬよう細心の注意を払いながら、マキージャがお
そるおそる尋ねる。

「・・・時は満ちた」

マキージャのような小物の声など耳に入らぬかのように、問いを無
視して神女は続ける。

「・・・攻めろ」

もう1度だけ、神女がそう告げる。

「か、かしこまりました」

深々と礼をし、そしてマキージャは逃げるようにして部屋を後にし
た。

第78話 魔界編13

魔界にやってきたものの、街も何も見る暇がなかったリリアと風花だったが、マリアと一緒に街へと出られたおかげで、自分たちの世界や、この旅で訪れた世界では見たことのないような商品などを、じっくりと見ることができた。

メルゼがレオに訓練のためと言って渡した、魔力を込めて動くという種類の玩具もたくさん店頭に並んでおり、その種類の多さと動きの奇抜さに、リリアと風花は夢中になっていた。

「すごいすごい！　すごく跳ねてます！」

「わは～。こっちはうねうねしてるよ～。風蘭が見たら泣いちゃうかも」

玩具を手にとって、まるで幼い子供のようにはしゃいでいるその姿を、マリアは微笑みながらただ黙って見ていた。傍から見れば、親子が仲良く買い物に来ているようにしか見えない。

店の店主も、魔族以外の客と、滅多に街へと降りてこないマリアが見れて嬉しいのか、売り物のはずの玩具を好きなようにされても、まったく何も言わなかった。むしろ、どんどん触ってくれと言わんばかりである。

「お嬢ちゃんたち、面白いかい？」

ぷかぷかとタバコを味わいながら、店主は尋ねる。

玩具を見慣れている魔界の子供らよりも、よっぽど面白い反応をしている2人に、そう聞かすにはいられない。

「はい！ とっても面白いです！ 私の世界には、こんなありませんでしたよ！」

「うんうん、私の世界も、こんなすごいものはなかったね」

お世辞ではなく、真実を素直に口にする。

リアの世界は玩具こそあったものの、魔力を込めて動きだすような高等なものは存在しなかったし、風花の世界に限っては玩具すら存在しない。そのため、こういったものを見るのは非常に楽しく、そして物珍しいのである。

「ははは、そりゃよかったよ。そっぴやマリア様、護衛はついてないんで？」

店主の言うように、マリア達の周りには護衛兵が1人たりとも存在しない。たまに街中の警備の兵がちらっと見えるだけだ。

「ついでおりませんわ。必要ありませんもの」

にっこりと笑い、マリアはとんでもないことを平気で口にした。

城の中以上に、危険で満ちた街。いくら平和で治安が安定していると言っても、危険な思想を持つ連中がいけないと言い切れない。王権を奪取しようとする連中が、いつ襲ってくるかわからないのだ。

「いや、マリア様はもちっと自分のことを考えないと、まずいんじゃないんですかい？」

「ふふ、側近からもそう言われておりますわ。でも、本当に大丈夫なので、「心配なく」

何を根拠にそんなことを言うのか、店主にはさっぱりわからなかったが、本人のマリアは不安の色などちっとも見せず、完全に安心しきった表情をしていた。

「いいな、これ。可愛いな、欲しいな……」

魔力を送ると、ちょこちょこ一人で歩く、毛むくじらのぬいぐるみを抱き上げながら、リリアが残念そうに唸る。この世界の通貨を持ち合わせていれば購入することもできただろうが、生憎持ち合わせがない。珍しく、可愛い（？）人形を手に入れることができないのが、残念でならない。

「えっとねえ・・・りゅちゃん、それ、可愛いのか？」

若干引きつらせた笑顔を浮かべながら、風花がリリアに尋ねる。当然というか何と云うか、リリアと風花の可愛さの基準は違うようだった。もっとも、リリアの基準が著しく常人からずれているだけなのだが。

「とっつっても可愛いじゃないですか！ このごわごわした毛！ つぶらな瞳！ 大きな足！ もう100点満点を上げたいくらいのが可愛さですよ！ あとりゅちゃんって何ですか？」

熱狂的な説明のあとに、ふと気がついたのか、リリアがついでのように尋ねる。今まで呼ばれたことがない呼び方だったのだろう、頭に疑問符を浮かべて首をかしげている。

「リリアだから、りゅちゃん。可愛いでしょ？」

「あゝ、なるほどです」

疑問が氷解してような表情をし、そして腕の中のぬいぐるみを風花に差し出す様にして見せつける。

「それで風花さん！　これはすごく可愛いんです！
もう、今まで見た中で一番可愛いかもしれなです！　そう思いま
すよね！」

「い、いや、私はちょっと、どうかなあって・・・あはは」

「いえっ！　きっと可愛いと思ってくれるはずです！　ちゃんと見
てください！」

この素晴らしい線の太さと曲線を！　やわらかく見せつつ、それで
いてたくましい腕を！

可愛いんです、愛らしいです！　ね！　そう思うでしょ！」

どこかの宗教に勧誘するような勢いで語り、風花に迫る。

そんな風花はというと、割と本気で引いていた。当然である。清楚
で、大人しそうだというリリアのイメージは今や完全に崩壊し、可
愛いとはかけ離れた不気味極まりないぬいぐるみを熱狂的にアピ
ルする様は、呆れを通り越して怖いくらいだった。

「リリアさん、それ、そんなに欲しいんですか？」

マリアがにこにここと笑いながら、風花に迫るリリアに尋ねる。
その声で少しだけ冷静になれたのか、リリアは残念そうに言う。

「はい。この世界のお金があればいいんですけど・・・ないから仕方ないです。」

「こうやって抱っこしてるだけで十分ですよ」

そうは言うものの、リリアは名残惜しそうにぎゅっとぬいぐるみを抱き、離そうとしなかった。傍目は不気味でも、リリアにしてみればお気に入りである。手には入らずとも、せめて抱き心地や触り心地を十分に味わっておきたいのだ。

「よろしければ、買って差し上げましょうか？」

「え！？ いいんですか！」

思いがけない提案だった。棚からぼたもちとはまさにこのこと。突然の幸運に、リリアは興奮を隠しきれない。

「構いませんわ。1つまででしたら、何でもプレゼント致します」

「じゃあこれお願いします！」

ずっとマリアの目の前に、毛むくじゃらのぬいぐるみを差し出す。迷いなど微塵もなく、チャンスとばかりに目をきらきらと輝かしていた。

「ええ、わかりましたわ。風花さんもお選びくださいな」

「あ、はい。えつと。．．．じゃあこれお願いします」

風花が選んだものは、先ほど手にとっていた蛇の玩具だった。言わずもかな、風蘭を驚かせるためのものだ。可愛い可愛くないは2の次らしい。

「はい、わかりましたわ。この2つはおいくらですか？」

小さな可愛らしい財布を懐から取り出してマリアが値段を尋ねるが、店主は手を振りながら言う。

「もらってやってくださいよ。どうせ売れ残りですし、誰も買わない商品ですから、構いやしませんよ」

「まあ、そうですね。でも、お金を払わないと悪いですわ」

「いやなに、あの娘たちの喜ぶ顔が見れたらそれでいいですよ。近頃の子供は可愛げがなくてねえ、こんな玩具なんかには見向きもしねえもんですから」

「そうですね……。それでは、ありがたく頂戴致しますわ。ありがとうございます」

深々と頭を下げるマリアに、店主は当然恐縮する。

「よしてくだせえよ。正直、処分に困ってたところなんですから」

「ふふ、そうですね。それはよかったですわ」

満面の笑みを浮かべながら、マリアはリリアと風花のほうに向き直る。

「では2人とも、ちゃんとお礼を言ってくださいね」

「おじさん、ありがとうございます！　こんな可愛いぬいぐるみをくださって！」

「は、ははは、いや、構わんよ。……可愛いかはわからんが」

「ありがとうございます。これで妹をびっくりさせられます」

「ああ、ほどほどにな」

純粹に喜ぶ2人の少女を見て、店主の類は思わず緩んでしまう。いつかこういう風に、幅広い種族が自分の店に訪れ、そして満足そうに商品を持って帰る様を見るのが、この店主の夢だった。

天界と戦争中の今となってはその夢の実現は難しくなってしまったものの、こつやって異世界からの旅人の笑みを見られれば、それで満足だった。

「さて、そろそろ参りましょうか。まだまだ、行くところはありますよ」

「はい、わかりました。おじさん、本当にありがとうございました」

「ありがと〜。とても嬉しいです〜」

「そりゃこつちのセリフだ。気をつけてな」

リリアと風花の2人にそう言ったあと、店主はマリアに深々と頭を下げた。敬意の表れである。

マリアはそれを見て微笑み、そして店を2人の客人と共に後にしようとした。

「あれ？」

だが、空を見上げてそう言ったりリアを皮切りに、

「？ どうして？」

届くことのなかったはずの太陽の暖かい日差しが、

「晴れ！？ そんな、まさか……！」

魔界全土に燦々と降り注いでいった。

「……ありゃ、何だ？ 落ちて、きてやがる」

その日光に紛れた形で、

青く広がった空の彼方から、

渡り鳥のような無数の黒い小さな物体が、

街と城の両方を目掛けて、

次々と落下していったのを、

魔界に住む人々全員が、

呆気に取られた様子で見入っていた。

第79話 魔界編14

訓練中であつた刹那たち3人は、何の前触れもなしに開けた青空に驚愕していた。

天界の支配下にあるあの厚い雲が、自然に消え失せるなどということとは絶対がない、と今朝話したばかりである。それがこのように快晴に近い状態の晴れになつたのであれば、天界側がわざと雲を取り払つたとして考えられない。

加えて、徐々に今自分たちがいる城と、マリア達が徘徊している街に降下してきている、無数の黒い物体。刹那とメルゼは何なのかわかつていながつたが、レオだけはその正体がかめていた。これは、幼いころから遠くの的を狙い撃つ訓練を続けてきたレオの視力が、常人に比べて著しく成長したためである。

その黒い正体は、人だつた。純白の厳つい鎧を纏い、十字に刃が重なっている槍と持ち主の体格の同等のサイズの盾を構えているその様は、まさに聖騎士の名に相応しい姿。太陽の光が背後から差し込んでいるせいで、真っ白に染まっている騎士の大群は、正体不明の黒い物体としか人々の目には映らなかつたのだ。

「メルゼ！ あれは天界の兵隊だ！」

「あにい！？」

レオの言葉に驚くものの、城と街、2つの部隊に分かれ始めた騎士たちを見て、メルゼの思考はようやく再起動した。

「誰がいるかあ！！ いるなら来いっ！！」

びりびりと耳に突きささるような怒鳴り声をあげ、近くにいるはずの兵士を呼ぶ。声の大きさもあってか、すぐさま兵士の1人が駆けしてきた。

「はっ！ どうなされましたか」

恭しく膝をつき、メルゼの言葉を待つ。

「城の守りを固めると守備兵長たちに伝えてこい！ 時間はろくにねえから、なるべく早く！」

「御意！」

メルゼの命を受けた兵士はすぐさま立ち上がると、そのまま城の中へと駆けて行った。

「……まずいな」

天界の騎士たちが城へ攻め込んでくるまでに残されている時間など、たかがしれている。おおよそ3、4分と言ったところだ。そんな短い時間の中をいくら急いだところで、準備が整っていない状態で戦わざるを得ないということは、目に見えた事実だった。

兵の人数だけは勝っているとしても、相手は地面を空に浮かばせることのできるほどの技術を持った天界。何か手ぶらで攻めてくるとは考えにくい。おそらく、1人ずつに『魂を破壊する』あの武器を持たせているはずだ。初めてあの兵器を見てから何十年と経っているから形状も変化しているかもしれないし、もっと恐ろしい機能も搭載しているかもしれない。

何にせよ、戦況が不利なのは変わりない。いや、それよりも心配なのは国民だ。城よりも遥かに守りの薄いため、街は多大な被害を受けることになる。

今から城の兵を向かわせる余裕はない。それどころか、全兵士を城に招集しても足りないくらいだ。となれば、取るべき選択肢は、ただ1つ。

「刹那、レオ、やってくれるか？」

「もともとこっちはそのつもりだ」

言いながら、レオは銃をホルスターから取り出す。表情にも一切の

迷いはなく、言葉通り本当に最初から『やる』つもりだったらしい。

「俺もやるよ。どこまでやれるか、わからないけど」

漆黒の大剣を手にしたまま、刹那もまたレオと同様にそう答えた。自信なさげに答えるのは、今回の訓練でメルゼに何度も負かされたせいだろう。

2人の了承を得たメルゼは1度だけ頷き、そして言う。

「ああ、2人とも頼む。1つだけ、魂を破壊する武器にだけは気をつける。当たったら最期だぞ」

メルゼは魂を破壊された者を目の当たりにしているため、その恐怖を十二分に理解している。だからこそ、その武器の脅威を知らない刹那とレオに言葉だけでも伝えておきたかった。『知らない』ということは、それだけで脅威となるからだ。

「もう俺がその武器を見てからもう十何年経ってる。形状は変わってるだろうから、あえて言わないでおく。教えたら油断するだろうからな」

「やられる前にやれ、ということか？」

「そういつことだ。何かされると思ったら、される前にやるんだ。敵よりも、まず自分の命だからな、よく覚えておけ」

「わかった」

「……」

メルゼの言うことを素直に了承したレオとは対照的に、刹那は無言で頷くだけだった。

「よし、ならお前たちはここを頼む。一步も城に侵入させないつもりで頼む」

「あんたはどうするんだ？　ここでやるんじゃないのか？」

「いや、ここはお前たちと兵士たちに任せる。俺は……」

瞬時に魔力を活性化させ、メルゼは城壁の上へと跳ぶ。同時に結晶を形成し、細長い剣を握ったまま、叫ぶように言う。

「街のほうに行く！」

それだけを言い残し、メルゼは人々の待つ街まで全力で跳ぶ。空から落ちてくる天界の騎士たちを単独で撃墜せんと、メルゼはただ必死に跳んだ。

+++++

長い間、晴れることのなかった魔界の空が、何の前触れもなしに晴れ渡ったことに驚愕の色を隠せていない城下街の人々とは対照的に、マリアだけはその晴れが意味することを理解し、焦りの表情を浮かべていた。

あの分厚い雲が取り除かれたことにより、天界が何らかの動きを見せないわけがない。天候を操っているのは天界だという情報を、マリアだっってわかつている。それくらいなら容易に想像できる。

さらに、空から落ちてくる物体。時間と共に姿が顕著になってきているそれは、もはや誰が見ても天界から舞い降りた敵でしかなかった。呆気に取られ、動くことを忘れていた人々も、敵の出現に混乱してわけのわからない行動を取る可能性だっである。

となれば、マリア自身が取るべき行動も、おのずと限定されてくる。とにかく、冷静になった皆を家の中へと待機させなければならぬ。本来ならば安全な城へと避難させたいのだが、敵がやってくる時間

を考えれば、そんなことをしている暇などない。

「みなさん！ とにかく家の中へと入ってください！
何があつたとしても、決して外に出てはいけません！」

そう叫び、動けないでいる人々に避難を促す。呆気に取られていた人々も、マリアの透き通るような声で我に返り、そしてざわつきだした。何があつたのかわからないまま、動くことなどできない、ということだろう。

「ま、マリア様あ、何があつたんですか？」

若い女性がマリアの元に駆けて来て、不安そうにそう尋ねる。それを皮切りに、周囲にいた人たちもマリアの元へ集まる。さながら、大木に集う小鳥たちのようであった。

「何年も晴れなかった空が、いきなり晴れたのです。何か不吉なことがあるかもしれません。」

念のため、皆さんは家の中へと隠れていてください。と言っても、いつも通りではダメですよ。
万が一に備えて、地下に入ってください。その際、決して外に出てはなりません。よろしいですか？」

こんな時にもマリアは笑顔を絶やさず、なるべく不安を煽らないよ

う心がける。その笑顔のせいもあってか、マリアの周りにいる人々も、別に大したことではないのだろう、と落ち着きを取り戻し、徐々にではあるが家の中へと避難していった。

次々と人々の避難が完了し、外には兵士たちしか見当たらなくなつた頃に、おずおずとリリアが話しかける。

「・・・マリアさん、これってもしかして・・・」

「ええ、察しの通りです。敵が攻めてきたようです」

「えっと、私たちって、もしかして危ない状況なんですか？」

「ええ、ですから、一刻も早く戻りましょう。非戦闘員である私たちがいれば、邪魔になります」

リリアと風花は、戦闘手段を持っていない。となれば、逃げ回るこゝとしかできないということになる。そうなれば、兵たちの手を一々煩わせることになり、敵の攻撃を受ける際の邪魔にしかならない。それを悟っているマリアは2人を急かし、城へと急ぎ足で向かう。早くしなければ、敵が来る。

「？ マリアさん！ あれっ！」

不意に、リリアが驚きの声を上げ、空を指さす。
何事かと思い、マリアはリリアの指の先をしてみる。

晴れた空の青さとは不似合いの、黒い王族の服を纏ったよく見慣れた男が、細長い剣を肩に乗せて家々を足場に跳んでいくのが見えた。

方向は、街へ接近している無数の騎士たち。凄まじい速さで移動している彼の性格を熟知しているマリアは、その男が何をしようとしているのかを容易に想像できた。

おそらく、単独で天界の奴等を撃破しようというのだろう。街の兵たちはあくまで防衛のために置き、攻撃だけはメルゼだけが行う。そうすれば、万一メルゼが敵を逃したとしても、防衛している兵士たちが何とかしてくれる。

相変わらずの無鉄砲さに、マリアは呆れてため息しかできない。ちよっとは『それ』を見守らなければならない者のことを考えて欲しいものだと、思わずにはいられない。

「1人ですか……それって、危ないんじゃないんですか？」

さすがに単騎で敵の群に突っ込むことを不安に思ったのか、風花がマリアにそう尋ねる。

「……危険ですわ、もちろん。でも、そういう危ないことを平気でやるのが、あの人なんです」

口ではそう言っているが、マリアの表情に不安の色はまったく見えない。それはまるで、子供のわがママを仕方なく聞くことにした母親のような顔だった。決してメルゼの行動を快く思っているわけではないが、無事に帰ってくることを信じているような、そんな表情をしていた。

「さあ、参りましょう。メルゼ様が相手をなさっているうちに、早く」

マリアの言うことに2人は頷き、城へ向かって歩を進める。一刻も早く、この客人を安全な場所へと避難させなければ、という使命感に駆られたマリアは、とにかく急ごうとする。

だが、ふと自分たちを追い越していく無数の小さな影に気がつく。背中に冷たいものが走り、まさかと思いき空を見る。

「……!?!? 別部隊が!」

マリアの目に入ってきた物は、メルゼが相手に向かった街の部隊とはまた違う、城へと向かっている別部隊。眩い太陽に紛れ、上など向かず前ばかり向いて走っていたマリアには、その姿を捉えることなどできやしなかった。

その別部隊が城に向かっているという事実。それは、もはや城は安全ではなくなってしまうことを示している。メルゼは街の外で迎

え撃とうとしているが、城の兵士たちは城の敷地内で迎え撃とうとしている。これでは城に行ったところで、巻き込まれてしまうのが関の山だ。

「マリアさん……お城は？」

不安に駆られたリリアが、小動物のように微かに体を震わせながらそう尋ねる。それは、自分たちが安全な場所に避難することができなくなってしまったことの不安ではなく、城の中にいるレオと刹那のことを心配した上の不安であった。

「……おそらく、2手に分かれたようです。街と、城とで。

街はメルゼ様が、城は刹那くんたちが迎え撃つ、という算段だと思います」

「それだと、刹那君たちが矢面に立たされる、ってこと？」

「……その通りです。ごめんなさい、そんな危険なことをさせるつもりはなかったのに」

きゅつと唇を噛み、悔しそうにマリアは言った。我が子と客人を、みすみす危険な目に遭わせてしまったことの後悔であった。

「あの2人なら、大丈夫だと思うよ」

この状況で、風花は別に何でもないように呑気な声を上げる。

「刹那君もレオも、どっちもちゃんとした力があるから、そんなに心配しなくてもいいと思うよ？」

それに、無理なら無理でちゃんと引き際がわかるだろうしね」

確かに、それは風花の言う通りである。刹那は戦闘の経験が浅いものの、レナやメルゼと言った強者との訓練を受けている。さすがにその2人には劣りはするが、決して弱いわけではない。現に、雷牙たちの世界では『人形』の1体を撃破してみせたのだ。それを考えれば、そこら兵士よりよっぽど強力のはずである。

レオのほうだって、何度もこういった戦闘は経験しているし、実力だって申し分ない。さらには戦闘において重要なことである冷静さも持ち合わせている。決して無理はせず、撃破が難しいとわかったら退くことのできる判断力もある。

「りーちゃん、心配なのはわかるけど、あんまり不安がると2人に失礼だよ」

「それは、そうですね・・・」

そうは言っても、簡単には割り切れないものがある。不安なものは仕方ないのである。

「風花さんの言う通りです。今の私たちにできることは、安全な場所へ避難することだけです。

さあ、行きましょう。ほとぼりが冷めるまで、民家の地下へ隠れさせていただきますよう」

だが、ここで心配していたところで何も起こらない。みすみす敵的になるようなものである。どんなに心配でも、不安でも、今はそうするしかない。

今にも泣きだしそうな表情のままリアは、マリアの言うことに素直に頷き、風花と並んで先導するマリアの後ろを付いて行った。

第80話 魔界編15

敵は空から襲ってくる。

そのことがわかって以上、地上の入り口である城門を固めても意味がないと判断した城の兵の大半は、城壁の上へと移動していた。もちろん、城門の守りもまったくなく、というわけではなく、兵力の3分の1ほどは城門の守備にあてがっている。万一に地上から攻めてきたときのため、というわけだ。

兵士たちの迅速な行動もあり、天界の騎士たちが接近する前に兵の配置が済んだわけだが、準備万端とまではいかなかった。魔界の技術力はあまり発展しておらず、重火器の存在が皆無のため、遠距離の武器は弓矢ということになるのだが、兵士1人に行き渡る矢の本数が足りないのだ。

前持って大量に作っておけばこういった事態は避けられたのだが、ないものねだりをして仕方がない。腹をくくって、兵士たちは少ない矢を持ち、城壁へ上った、というわけだ。

状況の悪さに右往左往している兵士たちとは違い、刹那とレオは妙に落ち着いていた。

レオに限っては戦闘の慣れが生じているため、戦いに関する緊張感がほとんど抜け落ちていたのだが、刹那はそうではない。

運が悪ければ最悪死んでしまう可能性もある戦闘にこれから参加するというのは、特に理由もなく、大丈夫だろう、と前向きに考えていたのだ。戦闘の慣れというわけでもなく、自信でもなく、刹那自

身もよくわからない安心感。戦闘が始める直前、刹那はそんな奇妙な感覚に浸っていた。

「・・・怖いかな？」

黙っていた刹那に、レオがそう尋ねる。
騎士たちも、先ほどよりかなり接近していて、もう戦闘が始まるまでの時間がほとんどないこと示していた。

「いや、別にそういうわけじゃないんだ」

「ほお、大したもんだ」

「レオはさ、怖くないの？ 戦うのって」

あまりに平然としているレオ。その姿に恐怖など微塵も感じられず、刹那はそのことに疑問を抱いていた。

「俺は怖いさ。戦うのも、あまり好きじゃない。本当はな」

「え？ そうなの？」

あまりに意外な一言に、刹那は驚く。
その勇ましく、頼りがいのある風貌に、恐怖という曇りがあるなど、
全然知らなかった。

「ああ。俺だって、怖い物くらいある。それが戦闘だ。殺すのも、
殺されるのも、俺は怖い。
今回も同じさ。これから始まることが、俺は怖い」

「・・・そっか」

いくら頼りがいがあるとは言え、レオも人だ。傍から見て完璧であ
っても、実際は欠陥がある。レオはまさに、そんな感じだった。今
の今まで、レオに怖いものがあるなんて、気付かなかったのだから。

「・・・お喋りはここまでだな」

両手に持っていた銃に弾丸を込め、レオは真剣な声でそう言った。
その言葉に、刹那は無言で頷き、体内の魔力を黒い大剣に形成する。
両者とも準簿は万端。兵士たちのほうも、弓を構え、矢をつがえる。
空気が静まり返り、緊張感が辺りを包み込む。一同は徐々に接近し
てくる騎士たちから目を離さない。1歩、また1歩と、戦いの時は
迫る。

そして、兵士たちの弓の射程圏内に騎士たちが侵入したと同時に、

「今だっ！ 放てえい！」

兵士長の怒声を合図とし、各兵士から矢が放たれる。

まるで豪雨のような大量の矢が騎士たちの方向へと飛び、兵士たちは次の矢をつがえてまた構える。矢がなくなるまでその行為は繰り返され、矢が切れたら剣や槍に持ちかえるのだらう。

矢はぐんぐんと騎士たちへ接近していき、その矢尻が分厚い鎧に当たる直前、騎士たちは持っていた槍を、円を描くように回転させ、襲ってくる大量の矢を次々と叩き落しながら城へと接近していた。

「・・・矢の1本も当たらんか。これは手強いな」

苦い表情を浮かべ、レオが唸る。

人数こそは少ないものの、あの大量の矢を、盾も使わず槍1本で防ぐほどの実力を持ち合わせた騎士たちを無傷で倒すことは、相当の難易度になるに違いなかった。多少の傷は覚悟しなければならぬかもしれないと、レオは改めて気を引き締めた。

兵士たちは手元の矢を必死に撃っていたが、その矢は高速回転した

槍によって防がれ、ついには底をついてしまった。そして、騎士たちに与えられた傷は皆無。矢による攻撃は、どうやら無駄だったようである。

「どれ、撃ってみるか」

すっと、レオが左手で握っている銃の先を、騎士の1人に向けて構える。どうやら、この位置から狙撃するつもりらしい。

「防がれるんじゃないのか？」

あの大量の矢を防いだ騎士たちに、弾丸が防げないとはどうも思えない。先ほどのように、叩き落とされて終わりなのではないかと、刹那は不安になる。

「まあ、この距離なら防がれるだろうな」

「じゃあ、撃たないほうがいいんじゃないのか？ 弾だって、まだ節約しないと」

「弾は魔力の蓄えがある限りは心配ない。それに、これは実験さ」

「？」

何の実験かを聞こうとする前に、レオはすでに引き金を引いていた。火薬の弾ける音と共に弾丸が発射され、それは騎士の1人目掛けて飛んでいった。

当然その弾丸を防ごうと、騎士が槍を構え、そして高速回転させる。だが、

「!?!」

防いだ槍は呆気なく弾丸によって破壊され、そして鎧の一角をも破壊することに成功していた。

騎士は傷つけられた鎧の部分をしばらく見つめ、そしてそのあとに弾丸を撃った張本人であるレオを睨みつけた。予想外だった結果が気に入らず、その怒りの矛先を向けられた、というところか。

「・・・普通の槍で、結晶の弾丸を防げるわけがないだろう」

やっぱりな、といった様子で、レオは銃を下した。

武器である結晶は、鉄やその他の金属をいとも簡単に切り裂き、打ち砕き、そして貫く。それができないのは、同じ結晶か神器のみ。

先ほどの騎士が持っていた槍と鎧は、レオの弾丸で呆気なく壊れた。

ごく普通の槍と厚いだけの鎧だからだ。ということは、騎士側にしてみればレオの攻撃を防ぐ手段がないということを示唆している。唯一できることとすれば、回避することだけ。いくら強力でも、当たらなければどうということはないのだから。

「レオ、今のうちに撃っておかなくていいの？」

せっかく弾丸が通用するとわかったのだから、今のうちに撃てばよいのではないか。刹那はそう思い、レオにそう尋ねた。

「この距離だと避けられる。さっきので防げないことはわかっただろうからな。

もう同じことはしないだろう。それを続けてたら、お前の言う通り、弾の無駄になる」

命中する距離になったら撃つ、と言いたいのだろう。

だが、その機会はレオが思ったよりも早く来るようだった。

「!?!? 速度が……!!」

レオの弾丸に何を感じたのか、騎士たちは揃いも揃って城へ向かう速度を上げた。それは、今までの速さの倍以上。まだ接近するまで余裕のある距離が空いていたのに、その距離がぐんぐんと狭まって

いく。

「・・・っち、特攻か」

「特攻？」

「俺の弾丸を防げないと理解して、特攻をかけてきたんだ。のろのろ動いていたらやられるからな」

「でも、それだと普通逃げるんじゃないのか？」

危険を察知したら逃げるとするのは当然の行為だ。誰もが傷つくことを望まないし、死だつて望まない。命が惜しいのなら、敵陣に突っ込まずに逃げるべきなのだ。それなのに、騎士たちは恐れを知らないかのように、ただ突っ込んでくる。おかしいではないか。

「逆だ。殺されたら、兵力を削ぐことができないだろう？だから突っ込んでくるんだ。死ぬ前に、ってな」

「！？ そんなのって！！」

「そのことをどう思うかはお前の自由だ。だが、今はなるだけ余計なことは考えるな。・・・来るぞ」

言うなり、レオは銃口を騎士たちに向け、連射した。無数に発車される弾丸は、途切れることのない銃撃音と共に騎士たちへと襲いかかる。

当然、騎士たちは避ける。先ほどの遅い動きでは避けられなかっただろうが、今は違った。弾丸が命中する直前に急加速した騎士たちは、レオの放った弾丸をいとも容易く避け、そのまま城へと急接近する。もうすぐ槍の射程圏内に入る距離まで来ていた。

「刹那っ！ 迎え撃つぞっ！」

「わかった！」

レオの怒声に返事をし、大剣を構える。隣りで鳴っている銃の連射音を聞きながら、刹那は自分へと向かって来ている1人の騎士をじっと見ていた。

顔まですっぽりと覆われた兜を装備している騎士の表情はわからず、ただ無情に手にしている槍を構え、そのまま凄まじい速さで突進してきた。先ほどの移動の速度とは段違いの速さに、一瞬面喰ってしまふ。レオの弾丸を避けた速さよりも、さらに速い。

だが、大丈夫だ。あまりの驚きに、自身の体が硬直してしまっよう

な驚きはまったくくない。確かにその速さで迫られ、槍を突き立てられたら、確実に絶命するだろう。それが怖くないと言えば嘘になるが、それがたまらなく怖いというわけでもない。

刹那は、自身が驚くほどスムーズに大剣を振るい、突進してくる騎士に合わせて槍を大剣で流し、そして・・・

「ふっ!!」

大剣の持ち手で、騎士の横腹を思い切り殴った。

騎士の体を覆っていた荘厳な鎧はまるでガラス細工が砕けたかのようになり破壊され、その柔らかい横腹を大剣の柄がえぐっていた。それと同時に、手に伝わってくる何かがへし折れるような感覚。おそらく、肋骨辺りが折れたのだろう。それが、とてつもなく嫌な感じだった。

「・・・かつ・・・が・・・」

声にならない声を上げ、騎士は脱力する。いくら魔力で強化した体で行った攻撃といっても、柄の部分で殴られたくらいでは死なない。襲ってくる激痛に悶絶しているか、それに耐えられず気絶するかのいずれかだ。

・・・初めてやったにしてはうまくできたかもしれない。

殺さず、そして勝つ刹那の考えた戦い。死を与えずとも、襲ってこなければ十分なのだ。だからこれでいい。命を奪うだなんてことは、もう刹那にはできなかったし、そうしたいとも思わなかった。

「刹那っ！」

レオの声で我に返る。何事かと思って振り向き、瞬時に体が動いていた。

「!? くっ……」

騎士の1人が、槍で突いていた。間一髪のところ回避したものの、刹那の頬には赤い一筋の線が走っていた。もしレオの声がなかったら、頭部を貫かれていたことだろう。背筋が凍る。これは、レオとの訓練ではないのだ。

「ふんっ！」

伸びてきた槍を手で掴み、籠手で覆われた騎士の手元を、重いきり蹴飛ばした。

「ぐ、が・・・！」

魔力によって身体を強化していれば何事もなかっただろう。だが、この騎士は身体の強化をしていなかった。体術の経験も浅く、体重の軽い刹那の蹴りなど、本来ならば牽制くらいにしかなれないのに、この騎士は相当な痛みを感じている。それが何よりの証拠だ。

痛み故に、騎士の手から槍が離れる。表情こそわからないが、兜の中の顔が歪んでいることが容易に想像できた。

その一瞬が、チャンスだった。

「っ！」

手元を蹴った足を折りたたみ、もう片方の足で顎の辺りを蹴りあげる。そのたった一撃の蹴りで、騎士の兜は熱したプラスチックのようになぐにやりと歪んだ。

蹴られた騎士の顔面は空へと向き、刹那は上げた足をその顔面へと叩きこむ。例えばそれが兜という防具があっても、今の刹那には無意味である。騎士は蹴りの勢いに呆気なく地面へと打ちつけられ、そのまま動かなくなってしまった。死んでいないということは、時折聞こえてくる小さな呻き声が証明してくれた。

第81話 魔界編16

「はあ、はあ・・・」

たった2人。たった2人相手しただけなのに、もう何十キロも走ったかのような疲労感が全身を襲う。体中が酸素を欲しがっており、それを取り入れるために刹那は過呼吸気味に空気を吸い込んでいた。訓練と、実戦。人の命をやり取りする戦いの重さを、刹那は改めて実感する。剣を振りぬく瞬間こそそのことを忘れられるものの、その後的一步間違えれば相手の命を奪ってしまったかもしれないという『恐怖感』を思い知る。最初に抱いていた気持ちなど、今となってはどこ吹く風だった。

その凄まじいストレスは、たった数秒のこのやり取りで刹那の体までをも蝕んでいた。相手の命のことを考えず、自分のことしか考えていなかった昔とはもう違うのだ。

相手のことを考えられる余裕ができてしまったことは、刹那の成長を示す確固たる証拠である。だが、なまじ成長した分、最初に大剣を振るったときよりも、戦いにおいてストレスがたまりやすくなってしまうた。成長したことによる、戦いへの弊害がこれだった。

「はっ・・・はっ・・・はっ・・・」

吸っても吸っても、まだ足りない。どれだけ酸素を消費すれば気が済むのかというくらい、体は空気を求めている。これでは戦いに集中できない。呼吸することに夢中になってしまえば、戦闘への意識が薄れるのも無理のないことだった。

「はっ……はっ……ぐ……」

ついに刹那はその場にしゃがみ込む。異常に体が重く、そして動かない。先ほどまでは聞こえていた、他の騎士たちを相手にしているレオと城の兵士たちの怒声や、武器と武器が打ち合う金属音が、まったくといっていいほど耳に入らず、耳鳴りのようなキーンとした音だけが、刹那の頭の中で響いていた。

「っ！　っ！」

レオが、刹那に向かって何か叫んでいた。叫びながらも、銃を撃つのをやめない。ただ乱射しているようにしか見えないレオの銃は、騎士たちの肩や腕、足の関節を正確に狙い撃ちしていた。見事で、実に鮮やかな腕前だった。

そんなことをボーっと考えていた刹那は、レオの聞こえない叫びの意味に気付かない。レオの緊迫した表情から吐き出されるその怒声は、刹那の危機を知らせるものだとということに、刹那は気付かない。

「.....」

ようやくレオの叫びに疑問を持ち、刹那は顔を上げる。

「・・・つつぁ！」

同時にくる、肩への激痛。

痛みを感じた部分に目をやると、真っ白な長い刃が肉を貫通しているのが見えた。

その刃は貫くことに特化した鋭く尖ったもので、それが槍の刃ということを、刹那はようやく理解した。

「っー！」

だが、それに気がついた時には、もう手遅れだった。

槍を刹那に突き刺した騎士は、手元の槍を手放し、そして腰に差しである十字の剣を抜いて縦に斬りかかる。槍を抜いて再び突きかかるよりも、剣で攻撃するほうが早いと踏んだのだろう。

「！？」

慌てて応戦しようとするものの、先ほどまで動かなかった体が、今になって急に動くわけがない。頭を両断されることだけは防ごうと、

身をかわすだけで精一杯だった。

だが、それも完全回避というわけではない。必死に横へと体を逸らしたものの、刹那の左肩口から肘までの肉が、まるで鈍にかけられた木のように削ぎ落されてしまった。

「う、ぐっ!」

当然ながら走る、激痛。骨から剥がれた皮膚と肉からは鮮血が泉のように溢れだし、真紅の血液にまみれた桜色の内面に伸びている無数の神経が外気に触れ、それが痛みを増幅させる要因の1つになっていた。

魔力を傷口に一瞬で集結させ痛みを和らげるものの、騎士はそんな刹那を容赦なく蹴り飛ばす。

「っ!」

鉄の塊に覆われた足は、刹那の腹部に深くめり込む。身体の強化をし、攻撃に対する耐性は多少強まっているものの、さすがに訓練されただけあって多少の強化などものともせず、騎士の蹴りは刹那にダメージを与えてくる。蹴りの勢いで大剣をも手放し、それは再び黒い霧となって虚空に消えていってしまった。

「う、あ……!?!」

力一杯蹴られた刹那はわずかな浮遊を感じ、そのまま吹っ飛ばされる。飛ばされたその先には、何も無い。刹那を受け止めてくれる壁も、地面もない。ただ落下しているのみである。あるとすれば、刹那の全身を砕くであろう地面だけだ。

いくら訓練したとはいえ、魔力による身体の強化を施していない騎士の蹴りよりも、高い城壁の上から落ちたほうが、ダメージが大きいに決まっている。今、刹那が身動き1つすらほとんど取れないというこの状況ならばなおさらだ。受け身すら取れず、重力に任せて落下し、そして打ちつけられる。そんなことをされれば、確実に死ぬ。

「……………」

騎士はそんな刹那に目もくれてやらず、剣を携えて蟻の如く沸いている兵士たちを駆除しようと城内へと侵入する。撃破を確信したのか、もう刹那のことは目に入らないかのように背を向けて。

「刹那あああつ!!」

今になって、レオの叫びがようやく刹那の耳に入る。落下する刹那を救出に向かおうと必死に向かおうとするが、レオの実力を認めた騎士たちがレオの元へと駆けつけ、それをさせない。寄せ付ける前に倒すというスタンスだったレオも、一斉に近付かれたものではその

すべてを戦闘不能にすることは叶わず、結果近距離の戦いを強いられることになってしまう。

「……………」

そんなレオの戦う姿を見ながら、刹那は慣れない浮遊感に包まれながら落下していった。心なしか、落下の速度がゆっくりになっているような気がする。死ぬ前には走馬灯が見えるという類のものだろうかと、くだらないことを考え、刹那は苦笑した。

「動いて、くれたら、なあ……………」

せめて受け身を取れるくらいまでに身動きができたなら、まだ助かったかもしれない。だが、それも叶わぬこと。頭で動いてくれと念じても、体は言うことを聞いてくれない。落下する速度はさらに遅くなり、頭に浮かんでくるのは……………ただ1人の表情。

「レナ……………ごめん」

そこで浮かんだのがなぜレナの顔だったのか、そしてそれは何に對しての謝罪なのか、刹那にもわからなかった。ふと浮かんでくる、レナの笑顔、必死な顔、困った顔、嬉しそうな顔。たくさんの感情を表情に表したレナの顔が、まるで流れるかのように次々と浮かんでくる。

ふ……どうしてだろ

疑問に思うが、別に理由なんてどうでもよかった。最期に綺麗なあの表情が見られたのだから、今から死ぬことも、そんなに悪くないように思えた。

死はもつと怖いものではないのか、と長年思ってきただけに、刹那が今覚えている安らぎにも似たような感情は、少しだけ意外だった。

ふ……まだかな

とつくに地面に叩きつけられてもいいはずなのに、刹那はまだ空中にいた。そこでやっと、それはおかしいのではないかという疑問に至る。いくら走馬灯とはいえ、この滞空時間は少しおかしいのではないか。

地面のほうを向いてみる。そこで、刹那は驚愕した。重力に従い、そして自身を打ち砕くはずの地面は一向に近付いておらず、刹那は空に留まっていることを自覚する。落下していないのだ。まるでそう、浮かんでいるかのよう。

「な、なんで……!」

驚きのあまり、思わず身をよじる。左へ、そして右へ。それをして、刹那はよつやく気がつく。

「体が、動く？」

先ほどまではまるで鉛のように重かった体が、なぜか動く。ストレスによって蝕まれたおかげで万全の状態というわけにはいかないが、体はもう悲鳴を上げてはいない。傷口の痛みも、なぜかほとんど感じない。少なくとも、戦うには問題は何もなかった。

それに、何だか体がいつもよりも軽い気がする。力も有り余っており、まさに今まで体を押さえつけていた鎖から解き放たれたようだった。

「・・・行こう」

先ほどまでの、相手の命を奪ってしまうのではないか、という不安はもうなかった。今感じている圧倒的な力さえあれば大丈夫。自分のことを心配する必要性が薄れた分、相手のことに気を遣うことができる。先ほどまでのストレスだって、感じることもなくなってなくなる。

だから、行こう。

今すべきことは、前にいた位置に戻ることだった。ほんの数秒で、戦局はどんどん変わっていく。ただ闇雲に突っ込んでいったところで、的になるのがオチだ。

だから、元の位置に戻って状況を確認する。慌ててしまえば何にもならない。とりあえずは冷静にならなければならぬ。

だから、元いた場所に戻りたいと、そこへ行きたいと、そう『頭に思い浮かべた』。

「・・・う、わっ！」

瞬間、突然突風に煽られたかのように、刹那の体が舞い上がった。実際には風など吹いてはおらず、体を浮かせている何らかの力が動かしているのだが、今の刹那はそのことに気がつかない。自分の手足を動かしているようなあまりに自然な感覚のため、疑問に思わないのだ。

半ばつんのめるようにして元いた場所に着地し、そして辺りを見渡す。天界の騎士たちの大半はすでに城内に侵入しており、城の中にいる兵士たちが束になって騎士たちを撃破しようと団結していた。

それはまるで、巨大な昆虫を相手に戦う兵隊蟻のようだった。個々の力は弱くとも、集まり合って力を合わせれば、多少の強者ならば打ち倒せる蟻。城壁の上から見た絵図は、まさにそれだった。

城内は何か対応していて硬直状態に持ちこんでいるものの、少し離れた城壁の上で戦っている1人の男は、若干焦りの表情を交えながら3人の騎士を同時に相手していた。

3本の槍を手持ちの銃を使って上手く避けているものの、その場から逃げれば追撃をもらい、攻撃する暇もないという劣勢であった。

ここでもう1人騎士側に助けが入れば、さすがのレオもやられてしまふ。

だからこそ、真っ先に駆けつけなければならぬのは、レオの元だった。

「レオっ！」

名を呼び、再び刹那は飛ぶ。まるで背中に羽でも生えているかのように刹那は自在に空を駆け抜け、その最中に大剣を再び形成する。もちろん、飛んでいる勢いに任せてでたらめに大剣を騎士目掛けて振り下ろすような真似はしない。やるのは騎士ではなく、その手に持っているものだ。

「ふっ！」

レオに向かって伸びている3本の槍。漆黒の大剣はそれらを見事に両断することに成功する。余りに余った力は底を知らず、先ほどまでの剣を振る速度がふざけていたのではないかと思うくらい、今の刹那は速く、そして強かった。

「！？ 刹那っ！」

驚いた声で名を呼ぶレオに構わず、刹那は騎士たち3人に目掛けて

横一文字に蹴りを放つ。もちろん力の加減はしている。命には関わらない程度のダメージで済むはずだ。

「ぐ……」

「……あ、が」

「う……」

三者三様の呻き声と共に、騎士たちはその場に倒れ伏してしまう。何も無理に吹っ飛ばさずとも、当たり所が悪ければこのように立ち上がらなくするのは簡単なことだ。激痛を抑制する術を知らない騎士たちは、ダメージを与えてやればすぐに動かなくなる。命を奪わずとも、勝てるのだ。

「レオ、無事？」

「それは俺のセリフだ。まあ、助かったよ」

ふっ、と笑い、レオが何やら嬉しそうに言う。

「刹那、お前、いいもの背中に付けてるじゃないか。似合ってるぜ」

「え？」

レオに言われて、ふと刹那は自分の背中を見てみる。

そこにあっただのは、2対の黒い翼。まるで天使のような羽を持つそれは大剣と同じく漆黒の色をしていて、禍々しさしか感じられない、まさしく悪魔の翼であった。

これを見て、刹那はようやく先ほどの空中浮遊に合点がいった。おそらく、無意識のうちはこの翼を動かしていたのだろう。死を覚悟していたのに、心の奥底ではまだ生きたいと思っていたなど、皮肉もいところだった。

「……もしかして、俺、『眼』が」

背中黒い翼を目にした瞬間からふと思っていたことを、ぽつりと呟く。

「そういうことだ。瞳孔も開いてるし、お前もさっきよりは体が動くだろ？」

「うん、さっきとは全然違つよ」

手にしたいと願っていた念願の『眼』。きつかけはおそらく、先ほどの『死の自覚』。窮地に立たされた刹那が、無意識のうちのそれを発動させてしまったのかもしれない。まったくもって、思わぬ副産物だった。

何にせよ、強大な力を得ることはできた。それを利用してこの場を鎮めればいい。迅速に、被害を出さないように、そして命を奪わないように。

「お前がそうだったんなら、俺もちんたらやってるわけにもいかないな」

言うなり、レオも刹那と同様、『眼』を発動させる。蒸気のようにレオの体から染み出ている魔力が、その証だった。

「最初から使ってればよかったのに」

刹那がもつともなことを言う。初っ端から『眼』を使用していれば、もっと早く肩がついたはずなのにと、若干責めるような口調で。

「疲労が著しく蓄積するんだ。使ったところで短時間のうちにこの戦いが終わるとも限らないし、長引けば疲労で動けなくなっちゃう。お前が落ちたときには使おうと思っただが、

魔力の気配がずっと空に浮きっぱなしだったから、あえて使わなか

「 たんだ 」

魔力による気配の探知。レオは訓練していた内容を、いつの間にか会得していたようだった。本当は刹那のことを思うあまり、必死になって探知をした結果なのだが、それをレオは言わない。そして、刹那もそのことには気がつかない。

「 そっか。じゃあ、倒れる前に終わらそう 」

「 ああ、とつとな 」

言葉を交わし、2人兵士たちと戦闘を繰り返している騎士たちを制圧しようと、城内へと降り立ったのだった。

『 眼 』 を発動させた2人に、魔力を使う術を知らない騎士たち。

結果は、歴然であった。

第82話 魔界編17

城下町に存在する建物の上で、戦闘は繰り広げられていた。

敵の数は約30。数多い熟練の騎士を、メルゼ1人で相手をする戦況は、劣勢の一言に尽きる。

騎士の半分が槍を使った近距離戦でメルゼを攻撃し、もう大半が問題視されている『魂を壊す武器』で遠距離から攻撃する騎士たちにはほとんど隙はなく、撃退のしようがこれっぽっちも見当たらない。もちろん、『眼』を使えばこの包囲網を突破することは不可能ではない。敵の数は30人。『眼』を使用した状態で戦えば短時間で決着がつき、スタミナ切れで窮地に立たされることはない。

だが、メルゼは『眼』を使うことはできない。なぜならば、すでに『使った後』だからである。

今こそ30人前後の騎士たちではあるが、戦闘開始直後の人数は現在の3倍。『眼』を使い、初っ端から全力で戦った結果、騎士の兵力を1/3まで落とすことに成功したのだが、そこまでだった。力を使い果たしたメルゼにはもう戦う術はなく、今のように敵の攻撃を避けるので精一杯。隙を見て逃げ出そうにも、この敵数と体力の少なさでは無理だ。

「はっ……くっ……」

結晶である剣を形成することもままならず、メルゼはただの反射神

経だけで回避していた。槍を払うこともせず、防御することもせず、ただひたすら避けるのみ。誰が見ても、限界は明らかだった。ぜいぜい、と苦しそうな呼吸と、全身から噴き出る汗で水滴を垂らしているその姿は、見る者に憐れみの情を与えるであろう。

だが、それでも騎士たちは止めない。手加減など微塵もせず、全力で槍を振るう。遠距離から放たれる『魂を壊す武器』から放たれる光の玉のような攻撃にも構うことなく、ただメルゼを追い詰める。『それ』当たっても、鎧に細工を施してあるためか、影響など全然見られない。攻撃手段のないメルゼの唯一の希望であった自滅策も無駄であった。

メルゼが『眼』の使用を止め、そして数十分続いている硬直状態。だが、次第にそれは流水のように解け始める。一方的になぶられているだけのメルゼの体力はもう底を尽きかけており、騎士たちの攻撃は止むことがない。数で圧倒され、そして己も疲労困憊。じつと耐え、何かの機会をうかがっていたメルゼの足に、

「う……？」

騎士の槍が、深く突き刺さった。

衝撃がきて、それからじわりと襲ってくる激痛。それを和らげようと魔力を裂傷部分に集中させるが、『眼』の使用によって消費された魔力は予想以上に膨大なもので、その激痛が和らぐことはなかった。

「あ、つく・・・」

当然、体勢が崩れる。疲労と足の激痛の2つのせいで、いとも簡単にメルゼは膝をついてしまふ。素早く立ち上がるうとするが、できない。足はまるで、泥沼にはまったかのようにびくりとも動かなかった。

その隙を、騎士たちは逃さない。動きが止まったメルゼ目掛け、一斉に槍で襲いかかる。その背後からは遠距離の援護攻撃。もはやメルゼの前方に、逃げ道はない。

「く、そ・・・」

苦し紛れに、メルゼは身を翻し、屋根から身を投げた。それはすべてを諦め、死を悟ったからではない。ここに留まれば確実に死ぬ。ならば、この屋根から落ちるしかないと踏んだからである。

もちろん、受け身のとれないメルゼに取って、落下の際に伴うダメージは相当なものだ。だが、それで死ぬわけではない。それならば、選択肢は1つしかない。

しばしの浮遊感がメルゼを襲い、そして勢いよく地面へと叩きつけられる。痺れるような痛みが全身を襲うが、騎士たちからの攻撃は何とか避けられた。槍も、そして例の武器の攻撃も命中してはいない。

だが・・・本当にここまでだった。屋根から落ちるといふ行為などほんの一時しのぎ。屋根の上の騎士たちからの追撃を食らうまでのわずかな時間、延命したに過ぎない。

痛みにこらえながら、何とか這いずって移動しようとするものの、それも無駄なことだった。屋根の上の騎士たちは、死ぬ物狂いで移動しているメルゼ目掛けて槍を投げ込む。わざわざ降り立って突き刺ささないのは、騎士たちの嗜虐心からか、それとも投擲の確実性からか。

「・・・う」

メルゼもそれに気が付き、迫ってくる槍を視界に入れる。迫ってくる槍の凄まじい速度は、刺さったらまず確実に絶命することを示唆していた。

回避する術も、防御する術も、もうない。向かってくる無数の槍に全身を貫かれて、それで終いである。せめて、せめてもう少しだけ体が持つてくれたら戦況はまったく変わったかもしれないが、それはくだらない負け惜しみ。『もし』という言葉など、悔いを残すためだけのものにしか過ぎない。

眼前に迫りくる槍。

メルゼは、死を覚悟した。

そこに吹く、一陣の風。

「っ！」

突風の凄まじさに、メルゼは思わず目を閉じる。

それとほぼ同時に聞こえる、金属がへし折れる鈍い音。

視界を睨によつて遮られているメルゼには、今一体何が起きているのかわからない。

激しい突風もようやく止み、メルゼは状況を把握するために目を開ける。

目の前には、よく見慣れた女性の後ろ姿。その高貴な服と黒くて長い髪の毛の持ち主を、メルゼは見間違えることなどない。

お辞儀をするようにスカートの裾を掴んでいた細い指先が離れ、その女性はメルゼに向き直る。

「メルゼ様、遅くなって申し訳ございませんわ」

「マリ、ア……」

呻くような声で、メルゼはその名を呼ぶ。
それに応えるかのように、マリアはしゃがみ込み、ポケットから白いハンカチを取り出して、血と汗でまみれたメルゼの顔を、いたわるように優しく拭いた。

「あの2人、は・・・？」

マリアがここにいるということは、すなわちリリアと風花と離れているということになる。防衛の手段を持たない2人のことが気がかりで、メルゼはそうマリアに尋ねた。

「心配には及びませんわ、安全な場所に避難させてあります。大丈夫です、あとは私にお任せください」

マリアが、いつもの笑顔でメルゼに言い聞かせる。温かく、優しいその笑顔は、傷つき、疲弊しきったメルゼにとって、計り知れない安心感があった。

だが、忘れてはならない。マリアは、今敵に背中を向けているのだ。命をかける戦いで敵に背中を向けることは、攻撃して殺してくれと言っているようなもの。

当然、騎士たちはマリアのその隙を逃さない。腰の剣を抜き、マリアに斬りかかろうと屋根から飛び降りる。頭上まで振りかぶった剣を振り下ろそうとする騎士たちの腕に、力がこもっているのがわか

る。

そして剣の射程圏。マリアを真つ二つにしようと、騎士たちは一斉に剣を振り下ろした。

瞬間、騎士たちは一斉に横へと吹っ飛んだ。

轟音が鳴り響き、連なる家々を貫通しながら勢いに任せて飛んでいく。

切り刻まれるはずだったマリアはいつの間にか腰をあげており、すらりと伸びた美しい脚は、地面から垂直に伸びていた。

傍から見れば何が起こったのかわからないその状況。当然ながら、その様子を見ていた騎士たちにも理解などできるわけがない。

だが、ただ1人。メルゼだけはその理由がわかっていた。吹き飛ばされた騎士たち。それらは、マリアによって蹴り飛ばされたのであった。

温厚な性格とその端麗な容姿からは想像もできない蹴りは、騎士の鎧を砕き、肉をえぐり、そして戦闘不能にまで陥れた。手加減など微塵もせず、それはただ相手を倒すだけ考えて放たれたものであった。

「……お行儀の悪い方々。どうやら、死にたいようですね」

その聖母のような笑顔に、影が落ちた。

愛する夫をここまで傷つけた騎士たちへの怒りと、メルゼがこうなるまで駆けつけることのできなかった自分自身への怒り。その2つの怒りがマリアの体を動かし、そして力を増幅させる。

見る者を安心させる笑みはもうどこにもなく、貼り付けられた仮面のような笑顔は、もはや恐怖以外の何物でもなかった。

「待、て……殺す、な」

かろうじて、メルゼはそれだけ言った。今のマリアなら、本気でやりかねない。『血の雨』という比喻を平然とやってのけそうな雰囲気、目の前の聖母は醸し出していた。

心配しているメルゼを安心させるよう、マリアは再びしゃがみ込んで、その額を撫ぜる。

「わかっておりますわ。命を奪うような真似は致しません。ただ……」

撫でていた額から手を放し、マリアは『眼』を発動させた。マリアの憤怒を具現化したかのように溢れだす魔力の量は計り知れず、どこまでも禍々しいそれは、見るものの背筋を凍らせる類の恐怖を兼ね備えていた。

「貴方に傷を負わせた罪深さを知らしめることくらいは、お許しく
ださい」

それだけ言つて、マリアは屋根まで一気に跳んだ。そのあまりの速さに、屋根に残っていた騎士たちはその姿を完全にはとらえきれず、まるで瞬間移動でもしたかのような錯覚に陥る。

その驚いている騎士たちを尻目に、マリアは渾身の力で放った拳を、騎士の1人に叩きこむ。

「つ!!」

声をあげることも許されず、騎士は無様に吹き飛ばされた。パラパラと拳の先端から落ちる鎧の欠片が、その威力の高さを物語っていた。素手のはずであるマリアのその白く美しい手は、騎士たちの使っているような平凡の武器よりも、遥かに高い攻撃力を持ち合わせていた。

「・・・さて、次は貴方達ですわ」

冷やかなその言葉で、その場に居合わせた騎士たちはようやく我に返り、腰の剣を抜いて斬りかかる。遠距離に位置する騎士たちも、『魂を壊す武器』でマリアを狙い撃つ。

マリアは自らに降り注がれる刃の雨をいとも容易く避け、カウンターで蹴りと拳を周りの騎士たちに叩き込んだ。その威力は凄まじく、当たった部分に骨があればそれを砕き、肉があれば容赦なく突き破る。急所こそ外しているものの、騎士たちの体から噴き出る血で、マリアの白い服は、真っ赤に染まっていた。

動きの速さと、攻撃の重さ。近距離の攻撃すら当たらない今のマリアに、遠距離の攻撃が当たるわけがない。光の玉のような攻撃を簡単に避けつつ、近距離で攻撃してくる騎士たちを次々と制圧していく。

その姿は、まさしく鬼神。誰にも止められず、そして何がどうなっているのか理解する前に攻撃され、沈む。風のように騎士たちの間を移動し、そして鉄球でも落とされたかのような攻撃を仕掛けるマリアを捉えることなど、この場にいる人間ではできやしない。

ものの数秒で接近戦を仕掛けていた騎士たちを撃破し、今度は離れた距離にいる騎士へとマリアは攻撃を仕掛けようと、足元に落ちていた騎士たちの剣を手に取り、それを容赦なく投げつける。

投げられた剣はまるで投げナイフのように騎士の1人目掛けて飛んでゆく。その速度は『魂を壊す武器』から放たれる攻撃よりも速く、あまりの速さに面喰っている騎士の腿に、鍔の部分まで深々と突き刺さった。その激しく燃えるような痛みで騎士は悶絶し、その場に倒れてのたうち回る。

そんな騎士の姿に目も暮れず、マリアは再び足元の剣を、騎士の1人に投げつける。先ほどと同様にそれは凄まじい速さで飛んでゆくが、一直線に飛んでくる平凡な遠距離の攻撃に当たるほど、騎士たちは無能ではない。

剣の飛んでくる軌道はわかっているのだから、それからちよつともずれてしまえば命中することはない。騎士は身を右に倒し、飛んできた剣は騎士の元いた場所を通過してそのまま飛んで行った。

攻撃を避けた騎士は、すかさずマリア目掛け、持っていた『魂を壊す武器』を放とうと狙いを定ようとす。が、その的であるマリアが見当たらない。見まわしてみても、あの恐ろしい鬼神の姿が目に入らない。

「・・・上、ですよ」

騎士の頭上から降ってくる言葉。それに驚き、騎士は慌てて顔を声のしたほうへと向ける。瞬間、顔面に重い衝撃が襲いかかり、騎士は勢いよく屋根に叩き伏せられた。

マリアも、直線的な攻撃が2度も連続で命中などしないことを予測できないほど無能ではない。剣を投げた瞬間に空へと跳び上がり、騎士の頭上へと降り立ったのだ。剣を投げ、それを避けされることで、攻撃をさせずに撃破するという手段である。

残りの騎士たちを見る。圧倒的すぎるその力に騎士たちはそこで初めて恐怖した。マリアから感じ取れる驚異的な力と、それを増幅させている憤怒は、もしかしたら死ぬことよりももっと恐ろしいもの

なのかもしれない。

それを目の当たりにした騎士たちは、狂ったかのように『魂を壊す武器』を乱射する。錯乱状態にある今の騎士たちは、もはやマリアを撃破するという目的を忘れ、ただ目の前の恐怖から逃げ出そうとしているだけだった。

そうなつてしまえば、あとは簡単だった。冷静さを失った攻撃が、マリアに命中するわけもない。次々とでたらめな方向へと放たれる光の玉を避け、騎士に接近する。錯乱した騎士には、もう逃げるといふ選択肢を選べる余裕は存在しない。

呆気なく距離を縮められ、そしてマリアは容赦なく拳を振るう。もちろん急所は外すが、それでも戦闘不能にさせるには十分すぎる威力だ。

1人を潰し、さらにもう1人潰し、そしてまた1人潰す。

何度かそれを繰り返した後、もう立っている騎士は誰1人としていなかった。敵をすべて戦闘不能に陥れたことよってマリアの怒りも収まったのか、先ほどよりは冷静になっていた。

「おしまい、ですわね」

腕を組んで、今なすべきことを考える。

今倒した騎士たちは、もう立ち上がれない。傷つけた自分が断言できる。生きてはいるが、わざわざ戦うことなどできっこない。そう

いう『箇所』に攻撃したのだから、動こうにも動けないはずである。それならば、今成すべきことはただ一つ。メルゼを城へと運ぶことだ。

怪我は槍が1つ脚に刺さっただけで済んだが、問題は使用した魔力の量だ。生命の源のようなものである魔力を、体が動かなくなるまで使用したとなれば、メルゼの生命活動の維持に関わる。

血にまみれた腕と手を服で拭い、マリアは倒れているメルゼの元へと向かった。

第83話 魔界編18

天界からやってきた騎士の攻撃を防ぎ、そして鎮圧させてからまる5時間。いつもなら暗闇に沈むような時間帯であるのだが、厚い雲が払われた今、魔界全土に眩い月光が降り注ぎ、そのおかげで街の人々も、夜遅くまで自らの家の改修作業に取りかかれたようだった。

何も知らされていなかった人々であったが、いざ事情を説明してみると持ち前の明るさと許容力の大きさとそのことに領き、進んで後始末をしてくれた。といつても、修復箇所はマリアが騎士を叩きこんで破壊した家が大半であり、その他は何もしなくても問題がないほど修復の余地がなかった。

その修復作業には地下に隠れていたリリアと風花も加わり、街の人々と混じって汗を流していた。リリアの容姿はこの騒動の原因である神族のものであるが、街の人々は異世界の旅人であるということを知っていることに加え、被害者の人以上に働いたこともあり、よそよそしい態度も取られず、騎士たちの責任を転嫁しようともせず、ひたすら自分たちのために働いてくれたリリアに感謝した。

風花もリリアと同様、作業を人一倍頑張り、働き、笑顔絶やさなかった。マリアのような聖母を連想させる類の笑顔ではなかったが、無邪気で子供のようなその笑顔は、作業に疲れた人々の気力を回復させるに至った。

後先を考えず、みすみす家を破壊してしまったことを、マリアは人々に詫びた。許されるべき行為ではないと、マリアは本当に申し訳なさそうに謝罪したのだが、守るべきである国民の家を破壊した怒りよりも、家々を貫通するような大穴を、あの華奢で上品なマリア

が開けたことに人々は驚いたようであった。

原因がメルゼを傷つけられたことだと知らされると、国民はやっぱりかと笑いながら、あっさりとマリアを許した。メルゼを送り届けたあと、真つ先に国民へ説明したのはマリアであるのに加え、改修作業も自ら進んで行い、さらにメルゼに対しての『惚気』を聞かされては、いくら家を破壊されたからといって本気で怒る人物など、この街のどこにもいなかった。

倒された騎士たちの安否であるが、総勢200名のうち、死者は兵士たちが相手をした20人程度で、残りの騎士たちは怪我こそしているものの、しっかりと生存している。それらは全員牢へと入れられたわけだが、メルゼの判断でひとまず捕虜という形で生かしておくことに決められた。むやみやたらに殺すのは性に合わないことに加え、武器のない騎士たちが今更何をしようの問題なかったからである。

例の『魂を壊す武器』は、1つ残らずメルゼの目の前で壊された。1人1つずつ持ち合わせていたということと200個すべてを壊すことには骨が折れたが、その苦勞をしてまでも破壊しなければならなかった。こんな恐ろしい武器をいつまでも保管しておいたのでは、万が一乱心者が現れた場合、とんでもないことになりうるからである。

そして、月ももう西の空に傾き始めた時間になって、ようやく天界の攻撃の処理を終わらせることができた。街の護衛にあたる兵士の数も通常の倍以上増やし、夜間の攻撃にも十分備えた後、メルゼと刹那たちはやっと合流したのだった。

現在位置は、メルゼの部屋。間一髪でマリアが救出したとは言え、

戦闘による膨大な魔力の消費と肉体の疲労はメルゼの体の自由を奪うことになってしまった。結果、メルゼはしばらくベッドから起き上がれず、この部屋にて話し合いを行うことになったわけである。

「寝たままで悪いな。どうも、しばらく起き上がれそうにねえ」

ベッドに寝ていたメルゼが、照れたように薄く笑ってそう言う。言葉を発するだけでもつらいのか、表情にいまいち元気がないように見える。

「それはいいんですけど・・・まさかマリアさんが『あれ』をやったなんて・・・」

「はい、私もあそこまでやるつもりはなかったのですが・・・」

刹那の言葉に、マリアがしゅん、とうなだれる。

怒りに任せて街を破壊したことを、マリアは心底後悔しているらしく、そのことを許された今でも良心に痛みが走るようであった。

「マリアさん、とっても強かったんですね！ 私、びっくりしました！」

きらきらと目を輝かせて、マリアを見るリリア。その目はまさに、

幼い子供がヒーローでも見るかのように純粹で、穢れのないものであった。

「い、いえ、そんなことは決して・・・」

「謙遜することはないだろう。接近戦の極意つてのを、できるならご教授願いたかった」

マリアの言葉を遮り、レオまでがそんなことを言い出す。どうやら聖母のような表情をしているマリアがあそこまで強いということが意外だったらしく、心からの賛美の言葉を送っていた。

「はいはい、マリアさん困ってるからそこまで。今話し合ってるとはそれじゃないよね？」

その話題を転換させるように、風花が呑気にそう言う。確かに、今はそういった類の話をしている場合ではない。天界からの襲撃があった今、自分たちは何をすべきかを話し合わなければならないのだ。風花の言葉の裏を読み取った一同は頷き、それぞれ空気を引き締める。

「それじゃ、真面目なお話、といくか」

それを皮切りに、話は始まった。

「今回の天界からの騎士たちは、たぶん先行軍だ。これから本群が攻めてくるに違いねえ」

「なぜそう言い切れる？」

レオがメルゼの言葉を疑問に思い、それを口に出す。

「人数があまりにも少なすぎたからだ。天界の軍隊があればだけのはずがねえんだ。

きつと、すぐにでもあれ以上のやつらが押し寄せてくる」

あれ以上……。大打撃といっても過言でないあの被害を与えたあの騎士たちよりも、さらに強く、そして多い数の騎士が攻めてくる。

一応はそれらを鎮圧はできたとはいえ、その騎士の大半を倒したメルゼがこうなってしまうては、もはや撃退することは難しいだろう。各個が奮闘し、実力を十二分に発揮したとしても、多勢に無勢。大量の群で、押しつぶされるが如く蹂躪されるのは目に見えている。

「なら、どうするんだ。ここで待ち受けるわけにはいかないんだろ
うっ」

レオがそう尋ねる。

その問いに、メルゼは仕方なし、といった具合に言う。

「やられる前にやれ、だな。攻めてこられる前に、攻めるんだ」

そのメルゼの言葉に、一同はしばらく呆然とする。

天界と魔界。天と地にある2つの国。まったく逆に位置する国同士なのに、天界だけが一方的に攻撃を仕掛けてこられるのは、地形に理由がある。天界はただ降りてくるだけでいいが、魔界が天界に向かうとなればそう簡単な話にはならない。上がるうとしても、重力がそれを許さないのだ。

そのことをわかっているはずなのに、メルゼは天界へ攻める、と言っている。不可能だということを知っているはずなのに、そう言っている。

「・・・何か考えがあるのですか？」

訝しげに、マリアがそう言う。マリア自身も、天界へ攻め込む方法などないと重々わかっているのだろう。

マリアの言葉にメルゼは無言で頷き、そして刹那を見る。

「刹那。お前、『眼』を発動させたら、真っ黒な翼が生えるんだっ
たな」

「ん？　そうだけど・・・って、え？」

予感めいたものがあつたのか、刹那は驚愕の声をあげる。
空にある国。そして飛行できる翼。この2つが導き出す答えは、1
つしかない。

「刹那、お前が移動手段だ。それしかない」

その場にいた一同が、揃って刹那を見る。目には驚愕の色が浮かんで
おり、そしてそれは刹那さえも驚くべきことであった。

確かに、空中に位置する天界へと向かうのならば、飛ぶことのでき
る刹那の能力はうってつけであり、飛行手段のない魔界の人間が天
界へ行くことのできる唯一の方法だ。

だが、問題がある。それも、複数の。それを、レオがメルゼに突き
つける。

「刹那が飛べても、1人しか行けないだろう」

「『眼』を使つてる時は、普通に身体強化するよりもずっと強くな
る。」

鉄板か何かを刹那が担げば、その上に乗って何人かは行けるだろう」

「それでも、行ける人数なんてたかが知れている。その人数じゃ、天界を落とすことなんて無理だ」

「正面からぶつかればな。だが、隠密裏に行動すればそうとも言えない。誰にも悟られないようにして、そしてお前らの目的を果たせばいい。戦いの原因がその『畏』だとしたら、そうすれば全部が全部丸く収まるはずだ」

「……『眼』を使っている間は、著しく魔力を消費する。」

刹那に、天界まで行けるような魔力はない。途中で力尽きる」

「わかってる。ここから天界まで、かなりの距離がある。レオ、お前の言う通り、刹那の魔力じゃそこへはたどりつくことはできねえ。だから……その距離を縮める」

「？ どうやってだ」

「大砲を使う。この国で一番でかくて、破壊力のあるやつだ。それに刹那が入って打ち上げれば、まともに飛んで天界へ行く距離の半分で済むはずだ」

「・・・そんなことをして、刹那は無事で済むのか？」

「問題ない。対爆撃用の防具を付けてもらうつもりだし、身体の強化と合わせれば大丈夫だ」

「・・・・・・・・」

もうレオの口から問題点が拳がることはない。思い浮かんだ問題はすべて解決され、そして今、天界への攻め込むための方法がここに確定された。

その作戦の肝である刹那は何やら不安げな顔をしていたが、それしか方法はないと割り切っているのだろう、しきりにうんうんと頷いていた。

「行くメンバーだが・・・刹那、レオ、マリア。お前ら3人で行ってくれ」

その言葉に驚愕したのは、マリアであった。まさか自分の名を呼ばれることなど、思ってもみなかったと言わんばかりの表情で、マリアはメルゼを見つめ、その真意を尋ねる。

「あの、メルゼ様。私はここにいて、あなたをお守りしなければならぬのですが・・・」

「作戦が成功しなけりゃ、この国は終わる。お前がいくら必死になったところで、天界の軍が押し寄せてきたら殺される他ねえ。だから行ってくれ。お前がないのといるとじゃ、戦力がまるで違う」

「……」

メルゼの言葉は正しい。軍が押し寄せる前に天界へ赴き、争いの種を取り除かなければ、この国は滅ぶ。メルゼの言う通り、マリアは強い。そのマリアがメンバーに加わるのと加わらないのでは、状況がまるで違う。だから、マリアは行かなければならない。

理屈ではわかっている。だがしかし、マリアは傷ついたメルゼを放置してここを離れるわけにはいかなかった。メルゼのそばを離れることが不安なのである。

できれば、ずっとそばにいて、万が一敵が攻めて時は、全身全霊を掛けて守ってやりたい。ここまでボロボロになるまで国のために戦ったメルゼの、自分の愛する最高の夫のそばに居たい。マリアが天界に行くことを渋った原因が、それだった。

「……頼む」

そのマリアの顔を見つめて、メルゼが言う。心中は察しているのか言い訳など言わず、ただ一言、それだけを言っただけを待ってマリアの返答を待

った。

ほんの少しだけ沈黙し、マリアは顔をあげた。

「かしこまりましたわ。行きます。行って……この国を守ります」

真っ直ぐにメルゼの目を見定め、マリアはそう言った。先ほどの不安でいっぱいだった表情はもうなく、いつもと変わらぬ、柔らかな笑顔でそれは彩られていた。

「ああ、よろしく頼む。……すまん、マリア」

「いいえ、お任せください」

互いの表情を見て、そして2人は薄く笑った。その2人は、今どのような感情でいるのかは、その場にいる者にはわからなかった。

「出発はいつだ？」

レオが、再びメルゼに尋ねる。

「今すぐだ。時間も深夜を過ぎててちょうどいいし、遅くなればなるほど天界のやつらに時間を与えることになる。だから早ければ早

「いほづがいい」

今こうしている間にも、天界は魔界へ攻め込む準備をしているに違いない。いや、もう実は準備はできていて、攻め込む機会をうかがっているかもしれない。猶予はもはや、ほとんどないと考えて間違いないのだ。

「マリア、準備のほうを頼む。刹那、レオ、お前らは準備ができるまで休んでおけ」

言葉に3人が頷き、マリアが部屋を出ていく。おそらく、刹那を飛ばす大型の大砲の準備だろう。

「えっと・・・あの、すみません。私たちは、どうすればいいんですか？」

恐る恐るリリアがメルゼに尋ねる。刹那とレオは天界へ、では残った自分と風花は何をすればいいのか、それがわかっていないようだった。

「作戦の無事を祈っていてくれ。安心しろ、例え軍が攻め込んできても、お前たち2人だけは絶対守ってみせる。大事な客人だからな」

そうメルゼに言われて、リリアはしゅんと項垂れる。

ただ待つているだけ。先行軍が攻めてきた時も、リリアたちは戦いが終わるのを黙って待つているだけだった。心配で、怖くて、何もできなくて、ただ無事でいますようにと祈ることしかできなかった。

そして、今もその時と同じ。この世界の『畏』を外そうと、天界へと乗り込もうとしている3人をただ黙って見送ることしかできない。何かしたいのに、何もできない。ただ無事に帰ってくるようにと、祈ることしかできない。

「・・・お留守番か。わかってたけど、やっぱり心配だねえ」

はあく、と風花は長い溜息をつく。3人を心配しているのは何もリリアだけではない。風花もまた、見送るだけという立場に己の無力さを感じずにはいられないようだった。

「こういうことは何度もあったろ？俺たちは乗り越えてきた。だから、今回もきつと大丈夫だ」

様々な世界を旅し、その度に危険な目に遭ってきたが、戦ってきた刹那とレオはいずれにしても命は落とさなかった。無傷でこそ済まなかったが、状況をしっかりと判断し、決してパニックを起こさず、そして窮地を乗り越えてきた。だから、今回もきつと無事に帰ってくる。傷を負わず帰ってくることは難しいかもしれないが、必ず生きて帰ってみせる。

そういつた意を込め、レオは2人を説き伏せる。ただ穏やかに、語りかけるように。

レオの言いたいことを理解したのか、2人は顔を見合わせて渋々頷いた。それでも、やはり心配なのは変わりないようだった。

「それじゃ、決まりだな。みんな、よろしく頼む」

メルゼが頭を下げてそう言う。

その言葉に、誰も、何も言わず、ただ頷くことで己らの決意を表明した。

第84話 魔界編19

現在位置は、城の屋上。準備はすべて整い、天界へと出発する時間となった。

先刻の戦いで消費した魔力は完全には戻ってはいないが、それでも戦えないほどではない。休んでいたときにリリアが回復術をかけてくれたこともあり、体調はだいぶマシになっていた。

失われた魔力こそ回復はしないものの、体の疲れを取るという点だけではリリアの回復術は一級品の効果であった。

万全の状態で行けないのが心もとないが、嘆いていても事は始まらない。今できる最高の仕事をすれば、自然と結果はついてくると信じなければならぬ。それが今できることだった。

「んっ……やっぱり、行きたいねえ」

今さらになって、風花がそう呟く。

力のない者がが行っても3人の邪魔になることくらいはちゃんと理解しているのだが、それでもやはりそう言わずにはいられない。待っていることのつらさは、いつになっても慣れないものだ。

「……………」

打って変わって、となりにいるリリアは何も言わず、ただ心配そうな顔をするのみである。

リリアだって、風花以上にこの3人についていきたい。大事な人が危険な所へ行くのを、ただ見送ることしかできないつらさは、味わったものでなければわからないのだ。

でも、それを口にしたところで自体は変わらない。そのことがわかってから、だからリリアは何も言わない。我慢するしかない。

「準備は整いましたか？ お二方」

マリアが真剣なまなざしでそう尋ねてくる。いつもの笑顔はすでに消えており、これから自分たちがすることの重大さを真摯に受け止めている様子であった。

「いつでも行けるよ」

「ああ。行くっ」

2人ともが頷いたのを確認し、マリアが近くににいる兵士に目配せをした。

「では、刹那さん。これに入ってください。あ、対爆撃用の防具を

つけるのも、忘れないでくださいな」

パンパンと、兵士が巨大な大砲の筒を叩く。月の光に照らされ、黒光りしているそれは、背筋が凍るくらいに恐ろしげな雰囲気醸し出して、ひよっとしたら発射と同時に自身の体がバラバラに吹き飛んでしまうのではないかということがふと頭によぎってしまう。

「・・・あの、俺大丈夫ですよな？」

念を押す様に、刹那は兵士にそう訊く。

「軽い火傷くらいならするかもしれませんが、大怪我はしねえはずです。中の砲弾を足場にして飛んでもらうんで、熱は全部砲弾が受けてくれます。防具も付けてもらってますし、あとは普通に身体強化をして、タイミングを見計らって『眼』を使っただければ大丈夫です」

不安に対する返答と手順を聞いた刹那は長く息を吐き、大砲の近くに投げ出されている防具を足に付ける。サイズは少し大きいけど、ごっこつした丈夫なその作りは、ちよつとやそつとの衝撃では壊れないような頼もしさを刹那に実感させてくれる。

防具もしっかり付け終わり、いよいよ大砲の中へ脚から入っていく。テレビやマンガで見た人間砲弾を、自ら実践することになるとは、本当に夢にも思っていなかった。緊張と少しの恐怖心を胸に抑え込

み、刹那はその身を大砲に収める。

刹那が奥へ入っていったのを確認した兵士は、大砲の横に取りつけられたハンドルを回す。キュルキュルと音を立て、発射口は徐々に天界の方向へと上がっていき、そして止まった。

「方向はこんなもんか……。マリア様、申し訳ないんですけど、この鉄板をかぶせてくれますか？ 俺だと、高くは持ち上げられないので」

「かしこまりましたわ」

言われた通り、マリアは大砲の台の近くに置かれている分厚い鉄板を、身体強化を使って持ち上げる。確かに、この重さだと普通の人間では束にならないと持ち上がらない。手から伝わってくる重量感が、そのことをマリアに告げていた。

鉄板の中心部を大砲の発射口に乗せる。これぐらい分厚ければ、いくら大砲が強力でも衝撃に耐えることができるだろう。

「よし、じゃあマリア様とレオさん、鉄板の上に乗ってください」

頷き、レオとマリアは軽く跳んで鉄板の上に乗る、そして衝撃に備えてしゃがみ込む。

兵士は準備が万全であるかどうか脳内で確認し、そして納得したよ

うにしきりに頷く。どうやら、すべての準備は整ったようだった。あとは、この大砲を放つだけ。

「よし、万端だ。じゃあ点火します、カウントするので衝撃に備えてください」

言うなり、兵士は大砲の後ろに回り込み、手に持っていた着火剤を使って導火線に火を付ける。火花を散らしながら導火線は短くなつていき、大砲に迫っていく。

「カウントします！ 5・・・4・・・3・・・」

導火線の長さを計算して、兵士が数字を叫ぶ。

「みんな～・・・しっかりね～・・・死んじやいやだからね～・・・」

元気がない間延びした声で、風花が声を掛ける。

「兄さん、刹那さん、マリアさん、どうか無事で・・・!」

すぎるようにして、リリアが呼びかける。

「2・・・1・・・発射っ！」

カウントが終わり、兵士がそう叫んだと同時に、腹に響くような轟音が辺り一面に鳴り響く。静かだった夜の空気が震え、そして巨大な大砲の発射口を塞いでいる鉄板ごと空中へと撃ち出された。撃ち出された衝撃で鉄板が歪み、刹那の手がめり込むが、何とか耐えてくれたようだった。

「っ!!」

撃ち出された衝撃が、砲弾越しに刹那の足へと伝わってくる。ビリビリと痺れるようなそれは、丈夫な作りであるはずの防具をも通り越していた。身体の強化をしていなかったら、中の骨が砕けて使い物にならなくなってしまったかもしれない。

空へと放たれた刹那たちは、天界への距離をぐんぐんと縮めていく。速度と高度に比例して冷たくなっていく風を身に受けながら、刹那は『眼』を発動する機会をうかがっていた。

そして、その時は来る。勢いよく飛んでいた砲弾も、重力には逆らえない。徐々に速度は落ちていき、ついには空中で一時停止してしまう。これが落下する前触れだということは、万人が周知済みのことだろうと思う。

そのタイミングを、刹那は逃さない。瞬時に『眼』を発動させ、足

元の砲弾を足場にし、なるべく高く跳ぶ。足が砲弾から離れた際、落下していく砲弾のことが気になったが、幸い落下地点は国から離れた何も無い大地。これならば被害は出ないだろうと安心し、刹那は集中する。

背中に、漆黒の翼が生えることをイメージする。脳内で描かれたそれは魔力によって徐々に形成されていき、具現化に成功する。発動が遅いのはまだ慣れていないためなのだが、今はその発動速度で十分だった。

ばさっ、と漆黒の翼を一度だけ小さく羽ばたかせ、緩やかに加速していく。『翼』の使い方は、先の戦いでわかったつもりだ。決して簡単ではないが、難しくもない。

本来あるはずのない部分を動かすというものという一見難しいものではあるが、同時にそれは髪の毛や爪などといった自分の意思で動かせない器官とは違い、自在に動かせることが可能である構造であるため、一度使ってしまったえば体が覚えてくれるのである。

緩やかに、ひたすら緩やかに刹那は加速していく。『翼』の最高速度を刹那はまだ出したことはないが、先ほどの砲弾の速度よりも遙かに速いことくらいはわかる。急激に速度をあげてしまえば、今刹那が持ち上げている鉄板の上にいるレオとマリアを振り落としてしまいかもしれない。だから、徐々に速度をあげていく。

ゆっくり速くして、ゆっくり速くして・・・刹那の飛ぶ速度は、今や先ほどの砲弾の倍以上の速さになっていた。それでも、加速は止まらない。どこまでも速くなっていく刹那は、もう止まることができないのではないかと錯覚する薄ら寒さを覚えるようになっていた。

「刹那っ！ 見えたぞっ！」

レオの大声で我に返り、進行方向に大きく翼をはばたかせてブレーキを掛ける。羽ばたきによって生み出された突風は凄まじかった速度を急激に落とし、そして停止させる。

落下しないよう最低限の風を羽ばたきで作り出し、その場に留まったのを確認した後、刹那は辺りを回す。

そして、すぐに『それ』を発見する。小さな島のような大地の上に聳え立つ、荘厳ながらも見事な街景色を描いている天界を。空中都市という言葉が一番しっくりくるそれは、見る者に感嘆のため息をつかせる。

「どこに降りればいいっ！」

鉄板の上にいるレオに訊き返す。

降りるといつても、天界の国はそこそこの広さを持っている。降りる箇所を指定してもらわないと、いくらなんでも着地することなどできない。

すぐにそれを指定することができればいいのだが、レオは口をつぐんでしまう。指定したくとも、天界の構造を知らないレオは無暗に刹那に指示することができない。下手をして敵の多い所に降りてしまえば、すぐに奇襲を見破られてしまうからだ。そうなれば、自分たちの身はもちろん、魔界の人々の命をみすみす敵に差し出してし

まづような結果になってしまう。

「天界の王が住まえる場所は上ですわっ！　一番上を目指してくださいっ！」

レオの代わりに、マリアが刹那に叫ぶ。

天界も王国という構造をしているため、国の脳である王がこの争いの原因である可能性が極めて高い。となれば、刹那とレオが目的としている『罨』も、その王の近くに存在していると考えるのが普通である。

「わかったっ！」

マリアの声が耳に入り、刹那は再び背中の翼を羽ばたかせて移動する。マリアの言う上とは、おそらく天界で最も高い所に位置する建物のことだろう。

城というより宮殿に近いその建物の周りには、一見して見張りなどついてはおらず、侵入は簡単そうであった。魔界からの襲撃など、あるわけがないと高をくくっているのだろう。

あっという間に宮殿の屋根へと辿り着き、そこへ着地する。音を立てないように出来る限り慎重に降り、ゆっくりと鉄板をその場に降ろす。

「刹那、大丈夫か？ 疲れてないか？」

レオが刹那に声をかける。天界への距離が縮み、『眼』と『翼』を発動させる時間こそ短くなったものの、相当な負担がかかったことは事実である。

レオに話しかけられて、そこでようやく刹那は『眼』を使うのを止めて一息つく。背中の『翼』も黒い霧となって消えていき、著しかった魔力の消費から解放されたようだった。

「正直・・・かなり」

肩で息をしながら、刹那は力なく笑う。天界からの襲撃の時に『眼』を使い、そしてここへ来る手段としてまた『眼』を使っただけで、疲れないわけがない。心なしか、顔が青ざめているようにも見える。

「どうやら、戦うことは無理そうですね。立えますか？」

「それも・・・ちょっと厳しい、かも」

申し訳なさそうに言うが、仕方がない。メルゼのように、動くこともままならなくならないだけでもマシだった。魔力を使い切れれば、そこには死が待っている。魔力は生命の源だからだ。それならば、ここで無理をさせてはいけない。絶対にだ。

幸い、ここは兵士たちの目には届くことがない。見張りという概念もなく、敵である刹那たちに対しては無頓着であるからだ。ここに居れば、見つかるということはずまないだろう。

「刹那、お前はここで待ってる。俺たちが何とかする」

「・・・わかった。頼むよ」

無理をして笑みを浮かべて、刹那がそう言う。本当はレオとマリアと共に行きたいのだという気持ちはあったが、ここで行っては迷惑がかかるくらい承知している。これ以上『眼』を発動させたら体が動かなくなってしまうかもしれないし、ただの身体強化で戦うにしても『罫』とぶつかれば魔力の少ない刹那がやっぱり足手まといになる。

何もせず、ただここでレオとマリアの帰りを待つことが、一番良いということを理解できないほど、刹那は成長できてなどいなかった。現在の自分の状況も、戦力もしっかりとわきまえている。作戦を成功させるのなら、行ってはいけない。刹那自身、そのことを一番よくわかっている。

「よし、じゃあマリアさん、行きましようか」

「ええ、参りましよう」

レオとマリアは互いに顔を見合わせて頷き、そして身体の強化を施した後、屋根から飛び降りた。その姿を、刹那は唇を噛みしめながら、黙って見送っていた。

第85話 魔界編20

宮殿への侵入を成功させたレオとマリア。宮殿の周辺こそ騎士たちの見張りがなかったものの、さすがに内部となれば話は違った。

数は少ないものの、魔界へ攻めてきた先行軍と同じような銃装備が施された騎士が、念入りに見回っている。何度も後ろや左右を見回しては、何歩か歩いてまた見回すということを繰り返し、本来ならば来るはずのない侵入者への対策をしている。

「・・・念には念を、ということでしょうか」

小声で、レオがマリアに己の憶測を言う。

通常ならば、魔界の人間が天界に侵入してくることなどあり得ない。空を飛ぶ手段がないためだ。だから、こうした見張りはそもそも不要のはずなのだが、それなのにわざわざ騎士たちを徘徊させているのは、やはり万が一のことを危惧してだろう。現にこうしてレオとマリアが宮殿内に侵入しているのだから、見張りを置くという行為は正しかったと言ってもいい。

「らしいですわね。でも、数自体は少ないのですから、そう苦労はしなくてもよさそうですね」

別にどうということもないかのようにマリアが微笑む。もっと人数

が多ければ苦勞をしたかもしれないが、この程度の数ならば別にどうということはない。

「行きましょう」

「ええ、わかりましたわ。この時間なら、王は眠っているでしょうから、まずは寢室ですわね」

天界に何度かやってきたことがあるマリアは、この宮殿の造りを理解している。さすがに熟知しているとまでは行かないが、重要な部屋場所くらいなら頭に入っている。何も知らないレオが先導して行くよりも、マリアに先頭に行くのは当たり前だった。

魔界の城に勝るとも劣らない廊下の広さは、見回っている騎士の目から逃れるために隠れるは十分過ぎるほどであった。騎士の視線を確認し、その死角をくぐって徐々にだが寢室までの距離を縮めていく。

見張りの騎士たちももちろん念を押して見張っているわけなのだが、やはり心のどこかに来るわけがない、という油断があるせいかどうかどうしても隙が生まれてしまう。その隙について細心の注意を払いさえすれば、宮殿の中を移動するということはさほど難しいことではなかった。

「・・・手慣れているな」

ふと、レオがそう漏らす。一国の王妃であるマリアが、こういった専門的な行動に手慣れているということは驚きであり、何よりも意外であった。

レオの言葉に、マリアは昔を懐かしむようにして種を明かす。

「小さい頃、メルゼ様と街へ行こうと2人で城を抜け出したことが何度かありました。周りの大人たちは危険だからと言って出してくれませんでしたから」

「・・・その時の経験か」

マリアの答えに、思わずレオは苦笑してしまう。そういえばと、自身にも同じような経験があったことを思い出したからであった。大臣に耳がタコができるほど街に行ってはならないと言いつ聞かされ、それでもマリアの手を引いて城からこっそりと抜け出した日は、今でも鮮明に覚えている。

「城の中に籠ってばかりだと、息が詰まって嫌になるからな」

「ふふ、同じでしたのね、私たち」

お互い少しだけ微笑んで、そしてその笑顔を消す。お喋りはここま

でだと2人とも気がついたのだろう。

目の前にある神聖さを感じさせる造りのドア。言わずもがな、この天界を治めている王の寝室である。最も守るべき場所だということに見張りをつけていないのは、部屋の主が命令したのか、それともまた別の意図があつてのことだろうか。

「……ここか」

「ええ、そうですね。では参りましょう」

特に臆するということもなく、マリアはドアのノブに手を掛ける。罾などを警戒していないのは、万が一発動したとしても回避か防御できる自信があるからなのだろうか。

音を立てないようノブを回し、そして開く。現在はもう深夜。当然こんな時間に王が起きているはずはなく、部屋は真っ暗だった。その中に2人は素早く入り、そして再びドアを閉めた。

暗闇に目が慣れるのにはそれほど時間はかからず、あっという間に周りがつつすらと見えるようになる。部屋の中には見慣れた豪華なクローゼットや机など置かれており、いかにも王族の部屋らしい家具が勢ぞろいしていた。

マリアは迷うことなく、ある場所へと歩を進めた。そう、王であるマキージャのベッドである。非常に大きなベッドで、部屋の4分の1を占めているその中には、侵入者が自分の部屋に入ってきていることなど気づいていない呑気なマキージャが深い眠りについている。

「もしもし、起きてくださいませ」

眠りから覚めてもらおうと、マリアはマキージャの体を揺さぶる。確かに、天界に『畏』が存在しているとすれば、王であるこの男に話を聞くのが一番確実で手っ取り早い。だが、あまりにも大胆すぎる。別に悪いことではないのだが、もう少し慎重にいつてもいいのではないかと、誰もが思わずにいられない。

「ん・・・誰、だ」

「お久しぶりですわマキージャ様。マリアにございます」

「・・・！？ マリア、マリアだと」

いるはずのない人間の名を聞いて驚愕し、叫びそうになったマキージャの口をマリアがとっさに押さえつける。今ここで叫ばれては、今までの隠密行動が台無しになってしまう。それだけはさせるわけにはいかない。

「お静かに。私が来たのは貴方にお聞きしたいことがあるからです。答えてくだされば、手荒な真似はいたしませんわ」

事態を読み取ったのか、マリアの言葉にマキージャはこくりと首を縦に振ることです承の意を示す。今ここで抵抗しても、力のない自分には何もできないということ悟ったのだろう。今ここで叫べば騎士は駆けつけてくれるだろうが、その場合マリア達に殺されてしまつかもしれない。マキージャは、命が惜しいあまり、声を出すと
いう真似はしなかった。

だがマキージャのその目は、屈服したときに見せる特有の弱弱しいものでは決してなく、睨みつけるような反抗の色を灯していた。これが、今できる精一杯の抵抗だった。

「・・・わかっていただけたようですね」

微笑みを浮かべ、マリアはマキージャの口から手を離す。手が口から離れてもマキージャは叫ぼうとはせず、ただ黙ってマリアからの質問を待つ。

「それでは、お聞きします。なぜ、急に戦争を仕掛けられたのですか？ 今まで共存してきたというのに、いきなり理由もなく攻めてくるのにはそれなりの理由があると思いますが・・・」

「・・・」

マリアの質問に、マキージャは答えない。それだけではどうしても答えるわけにはいかないのだ。魔界に攻撃を仕掛けるといふ命令を下

したのは、天界の重要機密である『神女』。マリアに戦争の原因を喋るといふことは、『神女』の存在を知らせてしまうことだ。だから喋らない。王という名の張りぼてであるマキージャの今すべきことがそれであった。

「……もう一度言います、なぜ戦争を仕掛けられたのですか？」

「……」

頑なに、ただ頑なに発言することを拒むマキージャ。その態度にマリアが痺れを切らしたのか、仕方ないため息をつく。

「忠告いたしますわ。喋らなければ、少々痛い目に遭っていたきます」

「……」

マリアの忠告を無視し、マキージャは沈黙を守る。その面構えは、絶対に喋らないという頑強な雰囲気かひしひしと伝わってくるようだった。

「……じめんなさい」

そう謝ると同時に、マリアがマキージャの鼻を摘む。そのせいで呼吸ができなくなったマキージャは口を開け、そこへマリアが間髪いれずベッドのシーツの端を口に放り込み、顎を押し上げて噛ませる。そしてマリアは、マキージャの右足の脛の部分を、魔力で強化された腕で容赦なくへし折った。

「っんぐが!!」

バキンっという嫌な音と共にマキージャの顔が激痛で歪み、呻き声がシーツ越しに聞こえてくる。

あらかじめマリアがシーツを噛ませたのはこのためだった。激痛を与えれば喋る、ということは拷問の類を知っていれば周知のことであろうが、それをしてしまえば十中八九叫び声をあげられる。それを防ぐためにシーツを噛ませておき、激痛のせいで出る叫びを最小限に抑える。マリアのしたこの行為は、周囲の騎士に悟られることもなく激痛を与え、聞きたいことを白状させるには最良の手段だと言えよう。

激痛に悶えるマキージャを、マリアは憐れみのこもった表情で見つめ、そして言う。

「言うてくださったほうがお互いのためです。言わなければ、今度は指を1本1本細かく折らせていただきます。・・・私も、極力ことういことをしたくないのです。どうか理由を教えてくださいませんか」

言い終え、マリアはマキージャの口からシートを取る。基本的には温厚であるマリアは、こうした苦痛を与えることを好まない。それが例え敵であるマキージャに対してもだ。できることなら早いうちに喋ってもらえればありがたいが、強情なマキージャはそれをしない。やりたくはないのに、やらなければならない。それが、マリアの心を痛めつけていた。

「い、言えぬ。絶対に言えぬ・・・」

だが、マキージャはマリアのことなどお構いなしに喋ることを拒む。傍から見ても、どんな苦痛を与えようが喋ろうとしないのは明白だった。いくらマリアが心を痛めようとも、マキージャには関係ない。ただ己の守秘義務を果たすのみである。

「・・・言わない』じゃなくて、『言えない』のか？」

今まで口を閉ざしていたレオが、マキージャの言葉に反応する。マキージャも、レオの言葉の意味がわかったのか、しまったという表情を隠せないでいる。

「それだとまるで、守秘義務があるみたいじゃないか。自分の意思で起こしたのなら、そんなことをわざわざしなくてもいいだろうに。大方、誰かに命令されたってところか？」

「し、知らぬっ！ そんなこと私は知らぬぞっ！」

「嘘をつくのが下手だな、凶星なのが見え見えだぞ。ポーカーフェイスも満足にできないようじゃ、王は務まらないぜ？」

「ぐ、くぬ……」

言い返すことができず、マキージャは唇を噛みしめて押し黙る。この行為が、レオの言葉を肯定することになる。十中八九、この戦争はマキージャが起こしたのではなく、第三者がマキージャを操っていたのだと、レオとマリアは悟った。

「貴方が引き起こしたわけではなかったのですか」

「……そうだ、私が起こしたものではない。国民の命を著しく失わせる戦争など、誰が好き好んでやるものか……」

マキージャは、苦々しく吐き出すように言った。

魔界と今まで共存してきたのに、理由もなくいきなり戦争を吹っ掛けるなど、本当はマキージャも望んではいなかったのだ。戦争で勝利しても得る物はないに等しいし、何よりも騎士たちを駒扱いして

命をむざむざ散らせることなどしたくはなかったというのが、マキージャの本音であった。

「よかったですわ。貴方の意思ではなくて」

ほっとしたように、マリアが咳く。命を軽々しく扱う行為を、目の前のマキージャが望んでいないということがわかって安心したというところであるうか。

「お前は戦争をしたくはなかったんだろ？ だったらどうして戦争なんて始めたんだ。誰かに唆されたとしてもお前は王だろう、面と向かって断つてやればよかったじゃないか」

もつともなことをレオが言い出す。

王政で国を治めているとすれば、その国の最大権力者は王であるマキージャだ。側近の誰かが戦争をしようと示唆したとしても、それを好まないマキージャが拒否すれば絶対に軍は動かないはずである。牢などに幽閉され、勝手に始められたというのならわかるが、こうしてやつれてもおらず、錠だつてされておらず、今マリアが足の骨を折るまでは健康体そのものであるマキージャが幽閉されていたとはどうしても考えづらい。

それならば、なぜか。

納得のいく答えを得ようと、レオはまっすぐにマキージャの目を見た。

「・・・私は、張りぼてだ。王など、ただの飾りにすぎぬ。この国の実質的な指導者は・・・『神女様』だ」

ついに、マキージャの口から『神女』の言葉が出た。国の重要国家機密を漏らしてしまったということは、もうレオとマリアに隠し事はできないと判断したためだろうか。

「神女？」

「この天界がこうして空に浮かぶより遙か昔から生きておられる、我々してみれば神のような存在だ。その存在は明るみになってはおらず、知っているのは私を含めて10人に満たない」

「・・・そいつが、魔界に戦争を仕掛けろって命令した、ってわけか」

マキージャの告白のおかげで、すべてに合点がいった。おそらく、マキージャの言う神女こそこの世界の『畏』なのだろう。遙か昔から今まで生き永らえるという人間離れしたことも、『畏』であるならば納得だ。

「神女様は巧みに国を操ってこられた。だが、同時にやり方が強引だった。国を良い方向へと導こうとはしていたが、反乱分子は疑惑の段階で全て処分した。反論を許さず、自分の思い通りに国を動かしてきた神女様に逆らうことのできる者など、この天界には存在しない。居るのは、私のような従順な駒だけだ。本来王に相応しい器を持たない私がこの座に着いているのも、神女様が操りやすい愚か者であるという理由だからだ・・・」

今までの神女の所業を、マキージャは次々と愚痴のように漏らした。王に任命されたということは、その者の無能さが認められたという何よりの証拠。長い間、マキージャは己の劣等感を抱きながら過ごしてきたのだろう。駒であるということすらに言い聞かせ、ただ言う通りにしていればいいのだと余計なことは考えず、人形のように神女の言う通りにしてきたのだ。

「その神女つてやつは、この世界にいるべき人物じゃないんだ。だから、倒さなくてはいけない。居場所を教えてください」

「.....」

レオの言葉に、マキージャは初めて迷いを見せる。本来ならば、何があっても神女の居る場所を喋るべきではないのだが、やり方が強引過ぎる神女にそのまま権力を預けていいものなのかと疑問に思うところもある。

それに、まだマキージャは魔界へ向けて進行しようと準備をしている軍隊に攻めろ、という命令を出してはいない。神女の命令に従って軍隊を攻めさせれば、天界の人間、魔界の人間を問わず甚大な被害が出ることは間違いない。

心の内で揺れているマキージャの背を押すように、マリアが優しく語りかける。

「貴方も、たくさんの方の命が失われることを望んではないのでしょうか？ その神女様の言う通りにしたところで、何の利も得ないではありませんか。ただいたずらに人々が傷つけ合い、その果てには何もないのですよ？ そんなの、あんまりだとは思いませんか？」

「……………」

「私は国民のためにここまでやって参りました。国民を大事に想っているのは、貴方も同じはず。飾りでも、貴方は王なのです。王ならば、国民のために尽くさなければなりません。戦争を止めるために、協力してください」

言うことはすべて言ったのか、マリアはその後何も言わず、押し黙っているマキージャの答えを待つ。協力してほしいと、心の奥底から願いながら。

「……………王座の、王座の下に神女様は居られる」

ぼつりと、咳くようにしてマキージャが言った。

「そこに、居る」

もう一言だけ言って、再び口を閉ざす。言うことはもうすべて言ったのだろうか、マキージャはもう何も言おうとはせず、無表情のままマリアに折られた足をさすっていた。何を問われても何も答えないだろうということとは、その様子から容易に予想できる。

「ありがとうございます。よく決心をしてくださいました」

答えを得たマリアは頭を下げ、レオのほうを向いて目配せをする。視線を向けられたレオは頷き、2人はドアのほうへと向かう。マキージャを気絶させるなどして口封じをしないのは、する必要などないとわかっているからである。

ドアを開ける直前、マリアはドアを見つめたまま言った。

「貴方は自分を愚か者だと言いました。王になるべき人間ではないと。でしたら私も、そして魔界の王であるメルゼ様も同じです。不手際もありますし、どうすればいいのかわからなくなる時だってあります。でも、上に立つべき人間は、何よりもまず下々のことを第一に考えなければならぬと思うのです。その点で言うならば、神

女様よりも貴方のほうがよっぽど王に相応しいと思いますよ」

呟いたあと、マリアはドアを開けて部屋の外へと出た。その後についてレオも部屋の外へと出てドアを閉める。神女の居場所を突き止めた2人の成すべきことは、もはや言うまでもない。

たった1人だけ部屋に取り残されたマキージャ。その心には、マリアの呟いた短い言葉がいつまでも反響していた。

第86話 魔界編21

マキージャから神女の居場所を聞き出したレオとマリアは、これまでと同様に宮殿の中を巡回している騎士たちの視界から逃れ、玉座のある部屋、つまり王の間へと歩を進めていた。

マキージャの寝室と王の間の距離はそんなに遠くはないのだが、王の間に近付くにつれて見張りの騎士の数が心なしが多くなっている。数が多ければ、それだけ敵の目を欺くのが難しくなってくる。四方から向けられる警戒の目を潜り抜けるといふその行為は、至難の業という言葉がふさわしかった。

天界の軍が魔界へと進行開始する明確な時間がわかっておらず、できるだけ急いで事を成さなければならぬということとは重々承知していたが、それにかまけて散漫な行為をして見つかってしまったのは元も子もない。時間はかかっても、騎士たちの目に触れぬよう慎重に行動するほうが賢明であることを、レオもマリアも理解していた。

幾度なく騎士をやり過ぎし、物陰に隠れ、気配を消し、レオとマリアは進行してゆく。ここまで見張りが多くなつてくると、隠密の手ほどきなど全く受けていない2人が進行するにはかなりの難易度ではあるものの、魔力による身体強化が功を奏し、騎士たちの目を何の問題もなくやり過ぎし進むことができた。

そして、たどり着く。玉座のある王の間へと。

だが、同時に問題が発生する。

「・・・見張り、それも1人じゃないな」

王の間を仕切っている常人の2倍の高さはあるのかという荘厳極まりない巨大な扉の前に、4人の騎士が立ちはだかつていたのだ。他の騎士たちとは違い、色々な場所を巡回しようとはせず、王の間の前だけという限定された場所のみを見張っている。

他の場所に行かず、その場を離れないとなれば、王の間の扉を開けることはできない。その扉を開ける段階でどうしても見つかったしまうからだ。他の場所から入ろうにも、この嚴重ともいえる見張りたちの目を再びかいくぐって入る新たな侵入場所を探すのも難しい。それに、探したところでそんな箇所があるのかどうかわからない。

「・・・どうしましょうか、レオさん」

不確かな可能性に賭けるよりも、目の前にある確固たるものに賭けることは当然だが、扉の前にいる騎士がそれをさせてはくれない。マリアは、目の前に最短のルートがあるのにただ見ていることしかできないことが歯痒くてたまらなかった。

「進むしかない。見つかる危険性を冒してまで戻るわけにはいかないからな」

「でも、あの方々・・・動きませんわ。ここで待っていても同じではないでしょうか」

「動かないなら、動いてもらうまでさ。マリアさん、これを」

そう言つて、レオはマリアに手を差し出す。その上には薬きょうの赤い1つの弾丸が乗っていた。銃というものの自体が存在しない魔界で育つたマリアは、初めて見る代物に首を傾げながらそれを受け取る。

「それを、向こう側に思い切り投げてくださいませんか。できれば、常人の目には見えないくらいの速さで」

王の間とは反対方向に存在している壁に指をさし、レオがマリアにそう指示する。その意図が理解できないマリアは、とにかく言われた通りにするしかなかった。

一瞬で体中を駆け巡っている魔力を活性化させて身体を強化し、レオに指示された方向を見て手渡された弾丸をきゅっと握りしめる。そしてマリアは、腕を不格好に折り曲げ、手の中の物を渾身の力で放り投げた。

マリアの手から離れた弾丸は、レオの指示した通りに凄まじい速さで飛んでゆく。レオの神器、『神爆銃』から放たれる速度こそ越えることはできないものの、それでも常人の目には到底映らない速度である。

騎士たちは、自分たちの視界内に異物が飛んでいることに気がつく

ことなく、平然と前を向いている。その騎士たちを尻目に弾丸は対面している壁への距離を縮めていき、そして命中する。それと同時に起こる、大きな爆発。

「な、何だっ！ 何が起きたっ！」

目の前で何の前触れもなしに爆発したようにしか見えていない騎士が声を張り上げる。突然起こった出来事に混乱し、そしてうろたえる。

「敵襲だ！ 敵が攻めてきた！」

根拠のないことを叫び、爆発した方向へと一心不乱に駆けだす、4人のうちの1人。傍から見ても錯乱していることは明らかである。敵襲など、空高く浮かぶ天界には本来あり得ない所業なのだから。

その1人の騎士につられ、他の騎士たちもその後を追って爆発した場所へと向かう。到着した先の壁には大穴が開いており、その周辺は真っ黒に焦げている。それが、いかに爆発が強烈だったかを騎士たちに教え、戦慄させる。

その大穴をくぐり、お互いに顔を見合わせて外へと移動する。慌てふためいている騎士たちが、落ちている破片から壁は内側から爆破されたということを推測できるわけがない。壁を破壊した張本人がまだ中にいるというのに、騎士たちは外に敵がいるということを疑うこともできない。

「うまく、いったようですわね」

「そのようです。それにしても助かりました。俺の銃であれをやる
と、発砲音で感じられるもので」

「そうでしたの。お役に立ててよかったですわ」

「ええ。・・・それでは行きましょう、もうじき騒ぎになるでしょ
うから」

レオの言うことにマリアが頷き、2人は扉の前へと移動する。荘厳
な扉ではあるが、施錠などの処理は微塵もされていない。そのよう
なことができない造りであるから、わざわざ騎士を4人も配置させ
た、ということだろうか。

手をかけて音が出ないように少しだけ扉を開け、その隙間から中へ
と侵入する。最初にレオが、次にマリアが入り込み、そして扉を再
び閉める。

薄明るかった廊下とは違って真っ暗な王の間。しばらくは何も見え
なかったが、時間が経てば周囲の様子も徐々に見えてくる。広い空
間の奥に、一段高い場所に位置している豪華な椅子。王族であるレ
オとマリアが見慣れているそれは、まさしく玉座だった。

目の慣れた2人は、扉からずいぶん離れている玉座へと近づく。遠目から見るだけではわからなかったが、所々に細かくも美しい装飾が施されていた。張りぼて用の王座にしてはずいぶん手が込んでいると感心してしまう。

「この下にいるとは言っていましたわね」

まったく恐れなど知らぬかのように、マリアがおもむるに玉座に手を当てて力を込める。思っていた通りと言うべきか、玉座はゆっくりとスライドし、地下へと続く階段が露わになった。マキージャを操り、戦争を招いた原因である『畏』へとたどり着く道が、今開かれたのだ。

「行きましょう、早いとこ終わらせないといけない」

「はい」

短いやり取りを終えた後、この王の間よりもさらに暗い地下への階段を下りていく。

独特のひんやりとした空気が体中を包み、それが一層気を引き締めてくれる。コツ、コツ、という靴が階段を叩く音も、心なしか心地よく思えてくる。

階段は思ったよりも短かった。時間にして数十秒という、極めて短

い時間で地下の大部屋へと降り立ってしまふ。てつきりもつとかか
ると思つていただけに、2人は何だか拍子抜けしてしまつた。

「ここか・・・」

天井に吊るされている無数のランプのようなものによって生じる薄
暗い光で包み込まれている部屋を目の当たりにし、レオがそう呟く。
上の王の間とほとんど同じ広さと造り。一見しただけでは、違いが
よくわからないくらいだ。

「・・・天界の者じゃない。魔界からやってきたか」

凜とした声が、広い空間に響き渡つた。

声の源は大部屋の奥に位置する、豪華で大きな玉座。それに腰かけ、
レオとマリアに声をかけたのは、刹那と同じくらいの年齢であろう
少女であつた。

短い髪に、真っ白なローブに包まれているその小さな神女は、その
名にふさわしい神々しさを放っており、天界の上層部の連中が称え、
崇め、そして言いなりになることにも納得できるほどの雰囲気醸
し出していた。

「お前がこの世界の『畏』だな」

足を止め、レオが玉座の少女に確認を取る。

「そう呼ばれたの、本当に久しぶり。もう何百年もこの世界に留まっていたから、忘れるところだった」

無表情のまま、言葉を繰り出す神女。言葉の響きには懐かしさを感じさせる抑揚は一切なく、機会のような無機質な、極めて冷たい言い方だった。

「貴方が神女様ですわね？ この戦争を引き起こしたのも、貴方？」
レオに次いで、マリアも質問をする。言葉には棘があり、いつものように優しく語りかけることはしない。することなど、できなかった。

「そう。私は神の使い、名前はジエノ。遙か昔にこの世界に降り立って、そして今まで天界を支配してきた。魔界に戦争を仕掛けたのは、天界も魔界も統一してしまえば、神の魂の器が世界に侵入した時もわかりやすくなるから。そうすれば、先々代の魔界の王の時のように勝手に討伐されることもない。もう少しで統一できるところだったのに、残念」

大して残念そうではないように神女は言う。それに反応を示したの

は、マリアだった。

「……どうのことですか？」

「言葉通り。先々代である魔王の魂は、私が求めていたもの。こういった立場に着いているからそのことに気がつくのにずいぶん時間がかかった。でも、簡単に手は出せない。魔王は強かったし、人望のある人。強引に手を出そうとしても私1人ではさすがに無理だし、天界の軍を率いても魔王1人の力が強すぎて歯が立たない。だから……狂わせた」

「狂わせた？」

「そう、狂わせた。先々代の魔王が、いつからおかしくなり始めたかを覚えているか」

「……天界での会談の帰りからおかしくなつたと聞いていますわ」

「会談で出した料理の中に劇薬を混ぜるよう命じた。思いのほか薬は効いて、魔王はすぐに狂い始めた。あとは簡単だった。いくら魔王が強くとも、魔界の兵と天界の兵、両方で叩いてしまえば問題はない。多勢に無勢、まさにこのこと」

ジェノの言葉に、マリアは衝撃と驚きを隠せない。この戦争のみならず、国中を恐怖のどん底に叩き落とされたあの恐怖政治を引き起こしたのも、目の前にいるジェノ。真実を知ったマリアが仰天するのも無理のない話であった。

「ただ、失敗した。頃合いを見て私が出て行って魂を奪取しようと思ったけど、予想していたよりもずっと早く魔王は討伐された。だから、今後そういうことのないよう、天界と魔界を統一しようと思った。この戦争はそのため」

戦争という行為が命を著しく失わせる行為だということを、長い間裏の権力者として君臨してきたジェノが知らないはずがない。知りながらも戦争を引き起こそうとしているのだ。人の命を何よりも重んじるマリアにしてみれば、信じられない行為に他ならない。

「今度は私の番。『畏』の存在を知っているということは、器もこの世界に來ているということ?」

質疑に応答しているだけだったジェノが、初めて質問する側に回る。もともとこの世界に滞在する理由はそれなのだ。聞いておくのは当然のことである。

「ああ、來ている。ただ、この場にはいない」

「やられる可能性を考慮して、安全な場所に避難させてるということ?」

「残念ながら違う。お前が差し向けた先行軍と戦ったせいで魔力をかなり消費してな、戦えなくなってるだけさ」

ジェノの質問に、レオは嘘をつくこともなく正直に答えた。居場所さえ言わなければ、別に本当のことを言ったところで問題などないのだ。嘘を言わなかったのは、質問したことを正直に話したジェノに対しての礼儀のつもりだった。

「なら、まだこの世界に滞在しているということ。そうならば話は早い。あなた達を始末した後、虱潰しにこの世界を探させれば済む話」

言い終わってジェノが玉座から立ち上がり、身に余るほどの大きさであるローブから小さな手を出す。その手に握られているのは、先端に尖った刃先がついている、何やら不思議な模様を刻みこまれた白濁の棒であった。それが武器であることはジェノの態度でわかるが、果たしてどのようなものなのかまではわかりかねない。

「踊り狂って」

先ほどまではなかった殺気が漂い始め、それが戦闘開始の合図だと

教えてくれる。疲弊しているレオとマリア、相手は万全の状態であるジエノ。状況は芳しくはないが、数だけでは勝っている。それを生かせば、ジエノの能力が未知数でも十分勝機はある。

「そうはしません。お前にはここで消えてもらっぞ」

「度重なる人の命を弄ぶ貴方の行為、許すわけにはいきません。不本意ではありますが、武力で終わりにさせていただきます」

レオが腰の2ホルスターから丁の銃を抜き、マリアが拳を構える。この世界の『畏』との戦いが開始された瞬間であった。

++++

レオとマリアがジエノの居る地下へと侵入する少し前。魔力を消費し、疲労していた体を休めていた刹那は、何の前触れもなく突如鳴り響いた爆破音に驚いていた。

「な、何だ？」

音のした方に目をやってみると、綺麗な黄金比を築いていた宮殿の

壁に大穴が開いているのが見え、近くにその破片と思われる塊がころころと転がっているのがわかる。

隠密行動をしなければならぬはずなのに、こんな大胆な行動を取る2人の意図がわからなかったが、何か考えがあるのだろうと思っ
て無理やり自分を納得させる。

「・・・大丈夫、かな」

その爆発のせいか、今まで考えなかった2人の安否が急に気になり始める。

戦闘に関しては手慣れている2人ではあるものの、相手は神の使い
できるだけ考えないようにしている『最悪なシナリオ』が、絶対に
起こらないという保証などどこにもないのだ。

そのことがわかっていのに、今刹那はこうして敵の目につかない
ところでのうのうと休息を取っている。2人が今も戦っているかも
しれないのだ。そのことを考えると、途端に今の休息が恥ずかし
く思えてきて、拳句には罪悪感さえもが襲ってくる。

「・・・行きたいな」

それが刹那の本心。行って、そしてレオとマリアと共に『畏』と戦
いたいというのが、刹那の本心である。

だが、魔力の消費は今までにないくらい激しいものだ。『眼』が使用できるようになってからまだ1日も経っていないのにそれを多用し、現にこうして戦うことなどできないほど魔力を浪費したのだから。

そんな状態で行っても、邪魔になるだけ。レオとマリアが『畏』の元へ行く前に、自らの行きたい願望を押しとどめ、無理やりそれを自身に納得させたのも、邪魔になりたくない一心からであった。

でも、やはり納得しきれてはいなかった。2人が戦っているのに、自分だけが休んでいるなどできない。共に、『畏』と戦うべきなのだ。そうすれば、万が一『最悪のシナリオ』が起こっても、後悔しないで済む。やらないでそれを迎えるのと、やるだけやってそれを迎えるのでは全然違う。

「……行こう」

重い体を、無理やり立ち上がらせてみる。先ほどまでは具合が悪く、吐き気さえしたものの、少し休んでみれば随分と楽になっていた。もちろん、戦いにおける『眼』の使用できる時間はかなり短くなってしまうが、それでも2、3秒程度の使用ならば問題はない。短時間の休息でここまで魔力を復できた自分の体に、今は感謝する他ない。

「爆発があつたのは、あの辺りだから……近くに何かがあるってことだよな」

レオがあれだけの騒ぎを意図的に起こしたとなれば、あの近辺で『そうせざるを得ない状況』があったからに違いない。そうでなければ、わざわざこの静寂を崩し、敵に感づかれるような真似に説明がつかないからだ。大方、敵の目を一時的に逸らすためだろう。

とすると、あの爆発した先に『畏』がいる可能性が高い。そこへ行けば、レオもマリアもいる。刹那自身、戦いに赴くことができる。

幸い城内の騎士たちは、先ほどの爆発は外からの攻撃だと思ったらしく、穴の開いた壁の外側に集結しつつある。つまりそれは、城内の警備が策のように潜り抜けやすくなったということ。チャンスは今。行くとするならば、それは今しかない。

「よし、行くぞ！」

自分を奮起するようにそう気合を入れ、刹那は宮殿内部へと侵入していったのだった。

第87話 魔界編22

レオとマリア、そしてジェノ。3人は、お互いの敵を見つめながら微動だにしなかった。敵の能力がわからない以上、下手に動くことはためらわれることは当然。うかつに攻撃を仕掛けて、そして何かをされてはたまったものではない。

特にマリアは、武器を持たず、己の拳と脚のみが武器という典型的な接近戦を重視する戦法であるため、余計に慎重にならざるを得ない。レオのような遠距離の攻撃とは違い、1発が外れたときの隙が大きく、そこを狙い撃たれてはどうしようもないからである。

そしてジェノも、手にしている白濁の棒を握りしめながらレオとマリアを見つめているだけ。持っているその棒を振りかざすこともせず、その場から動くわけでもなく、ただじっと2人の出方を待っている。

重く、そして底冷えしたその空気の中。ただ待っているという状況に痺れを切らし、1番先に動いたのは、レオだった。

「ふっ！」

ほとんど膝を曲げずに床を蹴り、横へと飛びながら牽制するかのよう
うにジェノに数発の弾丸を叩きこむ。外れても防がれても構わない、
ジェノがどんな出方をするのかを見ることができればいいという考
えからの攻撃だった。

レオの銃から放たれた弾丸。それは目標であるジェノに向かって真

っ直ぐと飛んでいき、命中することは間違いないと確信させてくれるほどの直線を描いていく。

そこでようやくジエノが動き出す。眼前に迫りくる弾丸を必要最小限で避け、手にした棒を握りしめる。それは攻撃の予兆である可能性が高い。その短い棒で一体何をしてくるのか、それを見極めようとレオは目を見開いた。

ジエノが握りしめた白濁の棒を振り下ろす。瞬間、その棒の先から光が伸びる。蛇のように細長く、不気味な緑色の光だった。見ただけでわかる。その独特とまで言える特徴てきなその形状は・・・鞭。細いながらも強烈な打撃を与えることが可能な、立派な武器である。

「ちいっ！」

舌打ちをしながら、レオがジエノからの攻撃を避ける。目標を失ったその鞭はレオの代わりに床を破壊し、鈍い音と粉塵を巻き上げながらも逃げるレオを追い続ける。

まるで蛇。どこまで逃げようが追撃は止むことなく、まるで生きているかのように、攻撃を回避し続けるレオを追い詰めていく。

「隙だらけですわ」

ジエノが手にしている鞭でレオを攻撃して間を狙って駆けだしたマリアがぼそつと呟く。間合いの遠いレオを攻撃している時に生じ

たジェノの大きな隙を逃すほど、今のマリアは甘くない。

拳を振り上げ、マリアは攻撃しようと急加速してジェノとの距離をさらに縮める。

見る限りでは、ジェノの武器は手にしている鞭のみ。攻撃の目標をレオからマリアに変えたとしても、今更間に合うわけがない。マリアの攻撃が先に通ることは明白であった。

だが、それはあくまでレオを攻撃している鞭がマリアに向かってくればの話。ジェノの能力を知らないマリアの勝手な計算に過ぎない。

「えっ!?!」

驚きの声と共に、マリアの足が止まる。

眼前に迫ってくるのは、レオを攻撃しているものと同じ緑色の光。

くるはずのない、ジェノの攻撃。

「っ!」

ほぼ反射的に身を逸らし、間一髪のところまでジェノの攻撃を避ける。だが、完璧には避けきれない。マリアの体の代わりに、身に着けていた高貴なドレスの端が、鞭によって消し飛ばされる。体に直撃していればと思うと・・・ぞっとする。

その威力にも十分驚かされたが、何よりも驚いたのはくるはずのない『第2の攻撃』だった。鞭は通常1本のはず。その1本は、今もなおレオを追尾し続けている。なら、今マリアを攻撃した鞭は、何なのだ？

そのカラクリは、懸念を抱いたマリアが拍子抜けするくらい単純で、そして予想外のことだった。

「・・・残念、当たると思ってた」

そう呟くジェノの持つ、白濁の棒。その先から出ている、『2つ』の緑色の光。

簡単な話だった。マリアを襲った鞭は、現在レオを攻撃しているものではない。新たに形成された、もう1つの鞭だったのだ。

「ただの鞭じゃない、『神器』か」

襲いかかってくる鞭の攻撃をかわしながら、レオが言う。

最初は1本しかなかったはずの鞭が、後になって2本に増えていることの奇妙さ。そしてその威力。同じものを所有しているレオには

わかる。ジェノの持っている白濁の棒。それはまさしく、神器であるのだと。

レオの言葉に、攻撃の休めることなくジェノが答える。

「そう、『神器』。魔力を込めることによって鞭を自在に形成と操作ができる、『あの人』が私にくれた大事な宝物。名は、『神撃鞭・骨』」

ジェノの鞭を振るう力に拍車が掛かり、レオと MARIA は逃げ惑うことしかできない。攻撃しようと接近するものならば容赦なく鞭に撃たれ、かといって遠くへ離れても追ってくる。

接近戦でしか攻撃できない MARIA はもとより、遠距離が主体であるレオでさえも攻撃のタイミングを計りかねているようだった。

「……このままだと埒が明かん」

逃げていられるだけでは何も解決しない。ただいたずらに時間を浪費するだけである。こちらから何か動き出さなければ、この戦局が変動するということはずまない。

だが、ジェノに攻撃しようにも、逃げに徹した今の状況下でジェノを狙い撃ちすることはかなり難しい。何発か撃てば命中する軌道に撃ちこむことは可能だが、先ほどのように避けられるのは目に見えるている。

攻撃に移るためには、まずジェノの攻撃を止めさせなければならぬ
いという考えにレオがたどり着くまで、さほど時間はかからない。
そして、すぐさまそれを実行する決断をし、決行する。

「ふんっ！」

変わらず追ってくる鞭を避けながら、レオは銃と一体化しているマ
ガジンを開け、中の弾丸を全部破棄する。弾丸を新たに精製してい
る時間さえも惜しい。あらかじめ精製しておいた薬きょうの黒い弾
丸を1つ、ホルスターに付属している小さなポケットから取り出し、
空のマガジンにセットして間髪入れずにジェノへ向けて撃つ。うま
くタイミングを掴めたのか、弾丸は真っ直ぐとジェノの方向へ飛ん
でいく。

「マリアさん！ 離れてっ！」

レオの声にマリアが反応し、一時的に『眼』を発動させる。羽のよ
うに軽くなったマリアは、鞭の攻撃を風のような速さで潜り抜け、
瞬時にジェノから離れることに成功する。魔力の消費を抑えるため、
距離を取った後は『眼』の発動を止めるのも忘れない。

レオの放った弾丸は確かにジェノ目掛けて飛んではいるが、弾丸の
軌道を完全に読まれてしまっている。先ほどと同じく、回避される
のは必然。それはレオもわかっている。だから、『避けられても構
わない弾丸』を撃つただ。

予想通り、ジェノは弾丸を必要最低限だけ動いて回避する。弾丸はジェノには命中せず、その足元へと被弾する。それでいいのだ。命中せずとも構わない。近くに当たればそれでいい。

「？」

足元の違和感に気がついたのか、ジェノはかわした足元の弾丸へと目をやる。そして驚く。その弾丸を中心に、黒い円が広がっていたのだ。それは徐々に円から球へと形を変えてゆき、ジェノを包み込む。

「・・・っ」

ジェノが慌てて脱出を試みるが、もはや遅い。その弾丸から発生される『ある力』によって動くことができないのだ。

その力とは、すなわち重力。レオの放った弾丸の属性は闇。相手を引きつけ、そして押しつぶす底知れぬ力。弾丸を中心にして作用するその能力は、目標から弾丸が外れようが関係ない。近くにさえいれば、射程圏内なのである。

「く、う・・・」

マリアは床に足を食いこませ、その重力に引っ張られぬよう必死に耐える。レオの忠告がなければ、マリアもあの重力の球の中で押しつぶされていたことだろう。

レオの重力による攻撃は、何もジエノだけに作用するものではない。放ったレオ自身も、そしてマリヤにも作用する。命中せずとも効力は発揮するが、強力すぎるその力は十分な距離を取っていても引き寄せられないようにするのが精一杯。故に、今攻撃されれば避ける術がないという諸刃の攻撃なのである。

幸いジエノの攻撃である鞭は消え失せていた。それは、レオの攻撃が命中したと裏付けるものであった。あれだけ強力な重力の中で、攻撃してくる余裕などできるわけがない。押しつぶされ、圧縮され、そして戦闘不能に陥っているに決まっている。

弾丸の効力が切れたのか、凄まじかった重力も収まり、黒い球が徐々にその色彩を失っていく。見えなかった内側の様子とジエノのダメージの具合を見ようと、レオとマリヤは目を凝らした。黒い球の中に浮かぶ光景。それを見た2人は・・・戦慄する。

「な!？」

マリヤの表情が、驚愕の色に染まる。

「馬鹿な・・・、直撃したはずだ・・・」

次いで、レオが信じられないと言わんばかりに目を見開く。

2人が見たもの、それは……。

「……油断した。もう少しで死ぬところだった」

凄まじい重力をまともに受けたはずなのに、あるうことが無傷でいるジェノの姿だった。

その周りには、重力の爪痕である引き寄せられた瓦礫の破片や、隕石でも落ちたかのような穴がしつかりと残っている。それらはレオの放った弾丸の威力の高さを十二分に証明してくれているのに、肝心のジェノには効果がまったく見られない。

考えられるのは1つ。何らかの手段を使ってレオの攻撃を防いだのだ。そうでなければ、あの重力の塊の中で無傷でいられたことに説明がつかない。

「甘く見てた。少しだけ真面目にやる」

そう言うなり、ジェノは持っている神器に魔力を込める。魔力を鋭敏に感じるができるよう訓練してきたレオには、うっすらとわかってしまう。ジェノの注いでいる魔力の量が、先ほど込めていた量とは比べ物にならないほどの膨大な量だと。

「2本じゃダメだった。それなら、数を増やすまで」

ジエノの言葉通り、『神撃鞭』の先からは、無数の緑の光が伸びていた。それは、一際太くなっている1本から枝分かれした状態で派生していて、まるで大木を連想させるような雄々しささえも感じられる。

「・・・殲滅させる」

第88話 魔界編23

「・・・殲滅させる」

一言だけそう言って、ジエノが『神撃鞭』を振るう。初動で加えられた力は鞭の先の方へと伝わっていき、それが徐々に強くなっていく。小さかったしなりは大きくなり、弱かった威力は増幅していく。本数が増えても1本1本の威力は決して小さくはならず、追尾してくる昨日は欠落していない。

「くそっ!!」

迫ってくる鞭を避けようと、レオは咄嗟に横へと跳ぶ。だが、新たに形成された無数の鞭が回避行動を許さない。避けた方向から、挟み撃ちにするように別の鞭が襲いかかってくる。

「ふざけやがって・・・!」

愚痴のようにそう呟き、『眼』を使用する。通常の身体強化では、襲ってくる無数の鞭を避けることは無理だからだ。

全身から真っ白な魔力が噴き出し、体が軽くなる。四方から向かっ

てくる鞭を潜り抜けるようにして次々と回避し、銃に新たな弾丸を補充しようと手を光らせる。

独特な金属音が銃から鳴り、マガジンに弾丸の補充を確認した瞬間、レオはジエノへ向かって弾丸を放った。逃げ惑っている今、集中して狙い撃つことなどできない。見つけ出したわずかな隙をつき、ジエノに向かって連射するだけが精一杯だった。

「無駄」

当然、闇雲に等しいレオの弾丸など、ジエノに当たるわけもない。マガジン中が空になるまで撃っても、すべて避けられてしまう。下手な鉄砲でも数を撃てば当たるとい言葉があるが、ジエノに数を撃っても無駄なのである。

「く・・・」

そして、再び襲ってくる鞭の攻撃を避けるレオ。攻撃をしてもかわされ、魔力の消費が著しい『眼』を使った状態でジエノの攻撃を回避し続ける状況は、あまりにも不利である。このままでは、自滅は免れない。

先ほどのように、ホルスターに付属しているポケットから、あらかじめ精製しておいた弾丸を取り出して再び撃てば、この状況からは脱することは確かにできる。だが、できない。そんなことをしている余裕はもはやないのだ。一瞬でも鞭から目を離そうものならば、

無数の鞭に叩き伏されるのがオチである。

「……長期戦は、危険ですわねっ」

レオと同様、『眼』を発動させて攻撃を避け続けるマリアは、今の状況がいかにも不利かを理解していた。ただでさえ戦う体制が万全でないのに、『眼』をずっと使い続けては、敗北するのをただ待っているも当然。

ならば、攻めていかなければならない。攻撃を避け続けているだけでは何も変わらないのならば、勇猛果敢に攻めて行くべきなのだ。

レオの攻撃が通らないことは実証された。だが、マリアはまだ攻撃をしていない。今は鞭を避けることに集中しているものの、先行軍との戦いで見せた鬼神の如き力をまだ発揮してはいないのだ。

可能性は十分ある。『眼』による身体強化を十分に発揮し、そして急接近して拳と蹴りを渾身の力で叩きこめば、いくらなんでも沈む。沈まなければ、沈むまで接近戦を続けるまで。

「行きますわよ」

覚悟を決め、マリアが行動を起こす。床を抉るほどの力で床を蹴つたと同時に、マリアの姿がぶれる。高速で移動していて、目で追いつけないのだ。

「・・・驚いた」

意外そうにそう呟き、ジエノは鞭を振るう。

だがマリアに当たることはない。いくら攻撃されようと紙一重で避け続け、鞭と鞭の間を縫うようにしてジエノへと接近する。もはや神業と言っているほどの身体能力の飛躍ぶりに、ジエノは心の中で感嘆のため息をもらした。

「・・・でも、やっぱり無駄」

攻撃しようと、マリアが凄まじい勢いで接近してきているのに、ジエノはその場を動かなかった。動く必要がなかったからである。例え接近してきたとしても、『神撃鞭』に魔力をさらに注ぎ込んで新たな鞭を形成し、襲わせれば済む話だからだ。

これまでことごとく鞭による攻撃を避け続けてきたマリアならば、絶対に避けてくる。その避ける方向を他の鞭にほんの少しだけ操作させれば、ジエノは動かずして接近してくるマリアを遠ざけることが可能になる。

その時が来るのを、ジエノは『神撃鞭』に魔力を込める。形成はまだしない。形成するのは、マリアが十分に接近した時。作業自体は、最初に鞭の本数を増やした時と同じである。

「覚悟は、いいですわねっ！」

そして、マリアがすべての鞭をかわし、ジエノの元までたどり着く。この世界の争いの種であるジエノに渾身の攻撃を加えようと、マリアは床を蹴った。

「・・・残念だったね」

その瞬間を、ジエノは逃さない。マリアが接近するのを見計らって新たな鞭を形成し、そして襲いかからせる。普通ならばこの突然の攻撃をこの近距離で避けることなどまずできない。だが、『眼』を発動させた状態のマリアならばそれも可能にする。

目の前からくる突然の攻撃、その周辺から襲ってくる数え切れないほどの鞭。ただ、マリアの背後だけは意図的に逃げ道として空けさせてある。そうすれば、マリアは迷うことなく後ろへ跳ぶことを選ぶはず。結果的に距離を空けさせることができるというわけだ。

「それは、こちらのセリフですわっ！」

だが、マリアはジエノの思惑には乗らない。ここまで接近して、逃げるなどしなかった。勇敢にも、その鞭に向かって拳を繰り出す。魂胆は明らか、鞭を殴って強引に道を開けさせるつもりだ。

もちろん、力と力を正面衝突させればマリアの拳が碎かれるのは歴

然。それならば、殴るべき場所は鞭の側面。そこを殴れば、鞭の力を拳に受けることなく吹っ飛ばすことができる。

直線的に拳を出すのではなく、ややフック気味に横から鞭を殴ろうと拳に体重を掛ける。眼前に迫ってくる鞭に物怖じせず、マリアの拳は鞭の側面へと伸びて行く。

そこで、誤算が生じた。

「え……？」

命中した。確かに、マリアの拳は向かってきている鞭に命中した。

しかし、拳に手応えがまったくない。まるで空振りでもしたかのよう、拳に反動がこない。

「……予想外だったけど、嬉しい誤算」

吹き飛ばすはずだった鞭は、拳が当たっていないかのように勢いを

失わず、マリア目掛けて直進する。

驚きで体が硬直しているマリアに、向かってくる鞭を避ける術などなかった。迫ってくる鞭を防ごうともせず、あっさりとダメージを受け入れる。

同時に走る、右肩への激痛。骨の砕けた音が内部から聞こえ、右腕が雷にでも打たれたかのように痺れる。

「っ!」

痛みで我に返り、マリアはジェノとの距離を取ろうと後ろへと跳ぶ。だが、他の無数の鞭が無傷では済まさない。大半の攻撃こそは外れたものの、少なくとも5本の鞭がマリアに命中する。頭に当たらなかったのは、もはや運がよかったとしか言えない。

「あ、く・・・っ!」

痛みを悶えながら、何とかその場を脱出することに成功する。

ジェノが意図的にマリアの背後を空けていたことが幸いし、マリアは袋叩きにされるといって最悪な状況だけは避けることはできたが、戦う力をすべて削ぎ落されたのは言うまでもない。打たれた箇所は魔力を集中して痛みを和らげてはいるが、もう満足に戦うことなどできない。

「・・・愚か、でしたわ」

苦悶の表情を浮かべながら、マリアはぼそつと呟く。受けたダメージは、息をするだけでも全身に激痛が走る痛烈なもの。喋られるだけでも大したものだった。

「原因は、この鞭をよく確かめなかったことにある。現段階の鞭はまだ物体化していない。ただ魔力を鞭の形にしただけ」

「現、段階・・・？ まだ、上がある、と？」

満身創痍なマリアには、もう鞭は伸びない。放っておいても、何の脅威にならないということを知エノは悟ったのだらう。マリアを追っていた鞭は、すでにレオを追いまわしている鞭と合流している。

「そう、まだある。今の鞭を形成している魔力をさらに凝縮して、完全に物体化させるというもの。威力も、今のものとは段違い。だから、この鞭に打たれたあなたはまだ生きている。これが物理化したものだったら、もう死んでる」

「・・・先ほどの、仕組み。あれは、魔力だからすり抜けた、と？」

「そう。私の魔力の属性は風。触ることは許さず、一方的に風圧で敵を蹴ることのできる便利な属性。だからあなたの拳はすり抜け、

代わりにダメージを受けた」

先ほど起きた奇妙な出来事。そのからくりを、マリアは後悔しながら理解していた。あらかじめ鞭に触れられるかを試していれば、まだ戦うことができたはずなのにといい悔恨の念が頭に浮かんでこない。

「もうあの男が動けなくなるのも時間の問題。手も出してこない、ただ逃げてるだけ。もうじき自滅する」

ジェノの言葉は真実であった。レオは『眼』を発動させているのも関わらず、ジェノによる鞭の攻撃を回避できていない。襲ってくる鞭の本数が多くなったのに加え、『眼』の発動による魔力の著しい消費のせいで体が思うように動かせないためである。

鞭がレオの体の至る所をかすり、その度レオは襲ってくる痛みには歯を食いしばって耐える。傍目から見ても、もう限界がきているのは明白だった。呼吸が荒々しくなり、体の動きも鈍くなっていく。時間が経過するにつれてレオは疲弊していき、鞭によるダメージが蓄積していく。

もはやどうすることもできない。ジェノに攻撃することもできず、まともに攻撃を避けることもできない。時間は決して有利に働かず、いたずらに体力を減らし、傷を増やしていくだけ。勝利の光は、もう完全に消え失せていた。

そして、その時は訪れる。

「ぐうあつ!!」

レオの腹部に、鞭による痛恨の一撃が加えられる。内臓までダメージが届いたのか、レオは口から血を吐き出しながら勢いよく壁に叩きつけられた。勢いのあまり壁は崩れ、その中にレオは埋もれてしまふ。銃を握ったままの血にまみれたレオの右腕が、その瓦礫の中からだらしなく伸びていた。

「・・・意気込んだ割には、大したことなかった」

レオを戦闘不能とみなしたのか、ジェノは『神撃鞭』への魔力の供給を止めて鞭の形成を解く。死んでこそはいないだろうが、傍から見てもレオは戦闘不能ということが明らかだからだ。もはや何の脅威にもならない。

「まだ、やるの?」

立っていることがやっとのマリアに、ジェノはそう尋ねる。レオの

ことはもう眼中にないようであった。

「……もちろん、ですわ」

痛みに耐えながらも、マリアは拳を構える。

虚勢を張っているのが見え見えだった。戦う力も、体力も、もうほとんど残っていないのが丸わかり。そのマリアを動かすのは国民に対する想いなのか、それとも別の何かなのか。

「……構わないけど、勝ち目はないことはわかってる？」

「わかって、ますわ」

「奇跡でも期待してるの？」

「期待しなければ、やっていけません、わ」

そう言って、マリアは笑う。少しでも自分に余力が残っていると思わせるために、痛みをこらえて。

「そう……。なら、下がってたほうがいい。邪魔になるだろうか」

「？」

ジェノの言ったことが、マリアには理解できなかった。やるのは自分だというのに、なぜ下がらせるのか。そして、邪魔になるといふのは一体何のことなのか。

答えは、すぐにわかった。

「マリアさんっ！ レオっ！」

マリアの背後から聞こえる、青年の声。

その声で、今ここに入ってきた人物がわかってしまう。

なぜ、どうしてここに来たと、そう思わずにはいらなかった。

来たところでどうしようもない。2人掛かりで勝てない相手に、その青年1人で勝てるわけがない。

現れたのは、奇跡などではなかった。

絶望だった。

第89話 魔界編24

見張りの騎士がないほんの短時間を使い、この大広間まで進んできた刹那が見たものは、息を呑んでしまうほどの悲壮たる光景だった。至る所に攻撃の爪痕を残している内部に、疲労困憊満身創痍の MARIA、極めつけはレオの物と思われる、瓦礫の中から伸びている血にまみれた腕。

その光景を見て、刹那は一瞬で理解する。レオと MARIA は、もう敗北寸前なのだということ。自分が来なければ、MARIA もレオと同じようになっていたかもしれないということ。

「・・・あなた、器？」

ジェノが刹那にそう尋ねる。

「・・・そうだ。お前が、この世界の『畏』なのか？」

話しかけられたことに一瞬だけ戸惑ったが、キッと睨み返ししながら刹那が答えた。

「そう、私は神の使い。名前はジェノ。来てくれて助かった。探す手間が省けたから」

『神撃鞭』に再び魔力を込めながら、ジェノはそう答える。込める量は先ほどと同じ膨大な量。無数の鞭を形成し、一気に蹴りをつけようという腹である。

「俺も、来てよかった。来なかったら、後悔してたろうから」

確かな事実である。爆発で騎士たちが混乱していたあの時、ここへ来る決断をできなかったら、たぶん刹那は悔やんでも悔やみきれないほどの後悔をしていただろう。一方は大事な親友、一方は血の繋がっていない母親。一歩間違えていれば、その大切な人達を見殺しにするところだった。

「・・・マリアさん、大丈夫ですか？」

戦闘に入る前に、刹那は目の前のマリアに呼び掛ける。身につけている王族の服は所々擦り切れていたり破れていたりしていて、その隙間から痛々しいほどの痣になった皮膚が見えているマリアだが、幸いなことに致命傷は受けていない。そのことに、まず刹那は安堵する。

「どっつして、来たのですか・・・」

刹那に背中を向けたまま、マリアは絶望を隠しきれない声色でそう

言った。

その問いの答えを、刹那は歯切れ悪く答えた。

「後悔したくなかったから、です」

「……勝てませんよ？」

ジェノの実力を嫌というほど味わったマリアには、刹那1人の力では到底敵わないということをも十分わかっていた。加減されていてこの様である。戦う状態が万全だったとしても、おそらく勝てなかつただろう。

そんな相手に、疲弊している刹那をたつた1人で立ち向かわせることは、もはや見殺すことと同義。手助けをしたくとも、満足に体を動かせないのではそれすら敵わない。マリアが刹那の出現に絶望したのは、それが原因だった。息子が傷つき、疲弊し、そして弱っていく様を、ただ見ていることしかできないということを、マリアは悟ったのであった。

「……わかってます。それでも、戦えば何か起きるかもしれない」

覚悟したような重みのある声色で、刹那は自分に言い聞かせるように言った。

確かに、目の前の敵は強大だ。血まみれのレオと、ぼろぼろのマリアを見ればそれがよくわかる。勝算も0に近いかもしれない。

それでも、刹那はマリアと同じように、奇跡が起こることを信じて戦う道を選んだ。それしか、3人とも生き残る道はないからだ。

「逃げなさいと言っても、聞かないでしょうね……」

「決意は固いので」

迷うことなくそう答える刹那の声を背中越しに聞いて、マリアも覚悟を決めた。

共に戦うことはできないが、情報を与えることならできる。こちらからは触れることは許されず、ただ一方的に攻撃されるだけというあの鞭の性質を伝えなければ、同じようにダメージを受け、そして敗北することは確実。

刹那に顔は見せず、マリアは口を開く。

「……あの方の持っているあの棒は、『神器』というものらしいです。その魔力を込めることで」

「じゅめん、マリアさん。言わなくていい」

「？」

刹那の言葉に、マリアは疑問を覚える。敵の情報を知らせようというのに、それを言わなくていいということはどういうことなのか。

「先入観が入るとかえって攻めづらくなるから、知らないままのほうがいい。それに俺、正面からぶつかっていくから、能力を教えてもらってもあまり意味がないんだ」

刹那は自身の剣の未熟さを知っている。相手がレオとマリアを打ち負かしたジェノならば、今更小細工をしたところで一笑に付されることはまず間違いない。第一、ジェノの能力を知ったところで、刹那がどうできるという保証などどこにもない。

それならば、無謀と言われようが正面から向かうのが一番である。小細工も、策も何もなし刹那にできるのは、ただそれだけである。

だが、マリアは納得できない。刹那が未熟であることはわかるし、真っ正面から行くのが一番いいということも理解できる。しかし、それだと本当にマリアは何もできない。唯一できることを刹那に拒否された今、邪魔にならないよう隅で小さくなっていることしかできないなんて、あんまりだ。

「……何も出来なくて、ごめんなさい」

自分の力のなさに半ば絶望し、マリアはただ一言だけそう刹那に言った。

当然、刹那はマリアを責めない。責める理由など、どこにもない。

「とんでもないです。心配してくれて、ありがとうございます」

「・・・何か、考えはありますか？」

手助けすることは諦めたが、それでもやはり心配だ。駄目なのはわかってはいるが、どうしても聞かすにはいられない。

「特にはないですけど、やることは1つしかないんです。だから、あとはぶつかるだけです」

「そう、ですか・・・」

もっと聞きたいことはあるが、いくらなんでも往生際が悪すぎる。それを悟り、マリアはようやく刹那に向き直った。向き直って、そして笑う。強大な敵を前にして不安に駆られているであろう刹那に少しでも安らぎを与えようと、マリアは全身を襲う痛みに構うことなく微笑みかける。

「いきなさい、刹那」

いつも刹那を呼ぶときは、後ろに『くん』とつけて読んでいたマリ
ア。そんなよそよそしい呼び方を止め、息子の背中を押す様な『母
親』の声で刹那にそう言った。

時間にして2、3秒。刹那をじつと見つめて、そしてマリアは再び
背を向けた。向かう先はレオの元。一撃のみとはいえ、胴に攻撃が
入ったのだ。早く手当てをしなければと、マリアは体を引きずるよ
うにして歩いて行った。

「……ありがとう、母さん」

心の中でマリアに感謝の言葉を呟き、そしてジェノを睨む。不思議
な話だが、あれだけ強大に感じていたジェノも、今はそれほど脅威
を感じられない。マリアの笑顔が、ここまで心を強くしてくれると
は思っていなかった。

「……終わったなら、かかってきて。すぐに終わらせるから」

ジェノが口を開き、刹那の攻撃を促す。あくまでも先には攻められないらしい。マリアの時と同様、接近したところを鞭で叩くつもりだ。

反撃されることは目に見えてはいるが、刹那は一度決めたことを取り消すつもりは毛頭なかった。『眼』もよくて5秒ほどしか使用できない今、短期決戦を挑むほか刹那に手はないからである。その短期決戦に求められるものはただ1つ、一撃必殺である。

未完成で、威力もどの程度のものなのか深く理解していない欠陥品ではあるが、刹那はその一撃必殺の技を持ち合わせていた。

それはすなわち、メルゼとの訓練で掘り起こした『崩天剣』。

魔力を大剣に集中し、それを放つことでメルゼさえも怯ますことのできた技だが、膨大の魔力を注ぎ込む時間がどうしても利便性を欠いてしまう。メルゼとの訓練でそのことを十分に理解していたが、『眼』の発動を可能にした刹那はあることを思いついていた。

魔力が目に見えるほど活性化させることのできる『眼』を使用した状態で大剣に魔力を集中させたら、もしかしたらそれほど時間をかけずに『崩天剣』を放つことができるのではないか、というものだ。

もちろん実際に検証したわけでもないから、あくまで予想の域を出ることはない。もしかしたら、『眼』を発動しても魔力を注ぎ込む速度は変わらないかもしれないが、それでもやらないよりはよっぽどマシだ。

「・・・行っても、いいかな」

「構わない。いつでもいい」

ジェノは特に刹那の攻撃を警戒するような真似はせず、先ほど同じ構えのまま待つ。刹那からは何の脅威を感じられないためか、特に警戒した様子は見られない。

「はあっ！！」

短く気合を入れ、刹那は『眼』を発動させた。

体中を駆け巡っている魔力が活性化し、刹那の体から蒸気のようにそれが噴き出す。闇を思わせる真っ黒な魔力を集中させ、刹那は大剣と翼を形成した。武器となる大剣を握り締め、高速移動を可能にする漆黒の翼を広げる。

次の勝敗で全てが決まるといふプレッシャーが、刹那の心臓を躍らせる。鼓動の音が大きすぎて、もうそれしか耳に入らない。だが、迷いはない。恐れもない。目の前の敵を相手に、刹那はもう向かっていくことしか頭になかった。

息を大きく吸い込み、止める。同時に、広げた背中の翼を羽ばたかせる。背後に突風が巻き起こり、刹那はジェノに向かって一直線に飛んだ。

「頼むから、成功してくれよな・・・」

心の中でそう呟きながら、刹那は大剣にありつただけの魔力を込める。体内から噴き出ている黒い魔力が大剣に集中し、もともと闇のように黒かった色がさらに濃くなっていく。光さえも吸収しそうな深淵の色は、『崩天剣』を放つ量まで魔力が溜まったことを証明していた。

「よしっ！」

予想していた通り、通常では使い物にならない未完成だった『崩天剣』も、『眼』を使用すれば強力な戦力になった。あとは大剣に溜まった魔力を、射程圏まで近づいてジエノに放つだけ。

「・・・寄せない」

さすがのジエノも、刹那の『崩天剣』が命中することを恐れたのか、早めのうちに鞭を形成した。レオとマリアを襲った時と同数の鞭が瞬時に形成され、それが刹那目掛けて襲いかかる。上、下右、左、そして前。唯一の逃げ道は後ろだが、加速した刹那はもう後戻りできない。

「くっ!!」

ジェノの攻撃に一瞬だけ驚くが、それでも刹那は速度を緩めない。緩めたところでもう遅いということを理解しているからだ。攻撃されるよりも先に攻撃するのが、手段としては一番だ。

しかし、今のジェノとの距離では『崩天剣』を当てることはできない。このままだと、攻撃が届く前に鞭に叩かれてしまう。鞭の威力はもう知っている。一撃でも当たったら、その時点で終わりだ。

前から迫ってくる鞭を、大剣で防御しながら強引に進んだところで、弱っている刹那には大剣越しに伝わってくる衝撃には耐えられない。鞭をかわそうにも、小回りが利かない刹那の翼では、襲ってくる無数の鞭をかわしきることは無理だ。となれば、道は1つ。迫りくる目の前の鞭を剣で弾き、その隙についてジェノに攻撃を仕掛けることだ。

「だあっ!!」

その考えにたどり着いた刹那は、迷うことなく鞭を目掛けて大剣を振るう。『崩天剣』はまだ使う様子はない。鞭を弾いた後に、もう少しだけ近づいて放つつもりだ。

だが、刹那は知らない。

ジェノの鞭に、物理的な攻撃は与えられないということだ。

鞭を空振りしたら、もう最期なのだということだ。

「それはダメえっ!!」

鞭の特性を知っているマリアが叫ぶが、もはや遅い。勢いのついた大剣は止まることはない。

何も知らない刹那は持っている大剣を渾身の力で振り抜き……

そして、弾くはずだったジェノの鞭を……通過した。

第90話 魔界編25

「え・・・!？」

思いがけない現象に、刹那が声をあげる。マリアの時と同じ、命中したはずなのに手応えがないことに驚きを隠せないようだった。ジエノの鞭の特性を知っていなければ、無理もないこと。現に、マリアはそれが原因で戦闘不能に陥ったのだ。

だが、刹那が本当に驚いたのは、その次に起こった現象だった。

「あ、れ？」

刹那の振るった大剣が通過した鞭。手応えなど皆無で、本当に存在するのかという疑問すら抱かせる、ジエノの『神撃鞭』から形成される鞭。

それらが、まるで古びた建物が自然に倒壊するかのように、『崩れた』。

「!?!」

そのことに1番驚いたのはジェノ。鞭の形成を解いていないはずなのに、いきなり無数の鞭が1本も残らず『崩れた』のだ。当然、鞭の操作はできない。ボロボロと崩れていく鞭はだんだん細かく分解していき、終いには雪のように床へと降り注ぎ始めた。

突然の現象のせいか、ジェノは身動き1つしなかった。目を見開いて、ただ驚愕するのみだった。

刹那も同じように驚きはしたものの、ジェノのように驚きっぱなしではなかった。確かに、起こった出来事は確かに奇怪なものであるが、今は驚いている場合ではない。ジェノが呆気にとられている今こそ、攻撃の好機。

「ふっ!!」

翼の羽ばたきを再開させ、刹那はジェノへ急接近する。もはや刹那の進行を邪魔立てする鞭は存在しない。加速に加速を重ね、とにかく一瞬でも早く『崩天剣』の射程に近付こうと懸命に翼を羽ばたかせる。

「くっ……」

ようやく頭の切り替えをしたジエノが動き出す。再び『神撃鞭』に魔力を込め、進行してくる刹那を撃墜しようと瞬時に鞭を形成する。先ほどより本数は少ないものの、一瞬で形成したにしては十分過ぎるほどの本数であった。

だが、やはり遅い。ジエノが呆気に取られたほんの少しの時間に、刹那は『崩天剣』の射程まで接近していた。

「はぁあっ!!！」

気合一閃。声をあげて大剣を振ると同時に、刹那は集中していた魔力を解き放つ。

全力で注ぎ込んだ漆黒の魔力は、もはや風などという生ぬるいものではなく、『波動』と呼ぶにふさわしい強力なものだった。その衝撃によって刹那は後ろへ吹っ飛び、結果的にジエノと距離を取る形になる。

「っ!!！」

刹那の放った『崩天剣』は、防御したところで無意味。避けるしか、ダメージを逃がす手段はない。それを本能的に感じ取ったのか、ジエノは声にならない声をあげ、とっさに身をねじる。

だが、ジェノの回避行動もむなしく、漆黒の波動はジェノの左腕と左脚を巻き込みつつ進行し、背後の壁さえも抉っていく。

『崩天剣』の破壊力は凄まじく、近くの床や壁の素材を砂のような大きさまでに砕き、ジェノのものと思われる肉片や血飛沫もそれに混じって舞い上がっていた。同時に、生臭い鉄の嫌な臭いが辺りに漂い始める。

「う、ぐ……がつ!!」

声にならない声をあげ、ジェノは引き千切れていく腕と脚の痛みに耐える。波動は連続した打撃のようなダメージであり、それらが何度も何度も体にぶつかり、肉や骨を分解していく。

1発目で肉の組織が破壊され、2発目で骨から離れ、3発目で粉々になる。骨も同様だ。ミキサーにかけたかのような粉塵となり、原形を保つことができない。

刹那の『崩天剣』、最初に使ったときよりも遥かに威力は上がっている。『眼』を使うことにより噴き出した膨大な魔力を全力で集中させた結果であることは明白であるが、それにしても強力すぎる。すべてを粉微塵にするほどに危険な黒き波動は、収まる様子を見せず、壁をどこまでも抉り進んで行った。

「……油断、した」

額に脂汗を浮かべ、その場にしゃがみこんだジエノが呟く。

残った右腕で左肩の裂傷部分を押さえて必死に止血しているが、指と指の間かどうしてもあふれ出てしまう。もちろん魔力を集結させる応急法を使用しているのだろうが、傷は想像以上に甚大なものらしく、息を荒くしながらそれに耐えている。激痛が襲っているはずなのに、顔色一つ変えないだけでも大したものだった。

「鞭が、まさかあんなことに、なるなんて・・・思わなかった」

「・・・俺だって、思わなかったよ。本当に、死ぬかと思った」

ジエノの言葉に、刹那が本心で答える。もしも襲ってきた鞭が『崩れて』いなくなったら、ジエノのようになるのは刹那だったかもしれない。今更ながら、背筋に冷たいものが走ってくる。

「・・・ごめん」

「？ どうして、謝る」

「わからない。わからないけど・・・謝らないといけない気がする」

「・・・愚か。優男に負けたなんて、みんなに笑われる」

そう言いながら、ジエノは手のひらに魔力を集中させ球を形成する。攻撃性のない、本当にただ魔力を集中させただけの球だった。

その球を、ジエノは空間に放つ。瞬間、地鳴りのような断続した低音が部屋内に響き、同時に空間に小さな穴が開く。その穴は徐々に巨大化し、やがて人が通れるような大きさまでに広がる。

刹那たちが幾度なく潜り抜けてきた、ゲートである。

這うようにして、ジエノはゲートの元へと移動する。床に血液を流しながら体を引きずり、動くたびに走る激痛に歯を食いしばって耐える。

刹那は、顔を歪めながらもこの場から逃亡しようと必死になっている。ジエノを、ただ悲しそうな顔で見つめていた。止めを刺すなんてできなかった。元から命を奪うようなことするつもりはもとよりなかったが、弱っている相手に剣を突き刺すような真似は、どうしてもできなかった。

ようやくゲートにたどり着き、ジエノは何とか片足だけで立ち上がる。そのままゲートに入って逃げるかと思いきや、不意に刹那に向き直り、そして言った。

「・・・なぜ、止めを刺さなかった？ 機会なら、あったはず」

「さっき、マリアさんと話してるとき・・・あなたは攻撃しようとしなかった。あのときあんたが殺す気だったら、俺は死んでた。だ

から・・・」

そこから先が、言えなかった。考えを言葉にできず、刹那はそのまま押し黙る。

「・・・つくづく救えない。いつか、あなたは後悔する」

それだけ言い残して、ジェノはゲートへと入っていく。入った後に再び地鳴りのような音が響き、ゲートはゆっくりと閉じていった。断続的な低音が止み、部屋は何事もなかったかのように静寂に包まれる。とりあえずは危機を脱したのだと、刹那は安堵する。

「・・・終わ、った」

全身の力が一気に抜け、そこで刹那はようやく『眼』の使用を止める。同時に大剣と背中の翼も黒い霧となって形を失い、魔力の元である刹那へと吸い込まれていった。

緊張から解放されたせいか、その場に座り込みたいという衝動に駆られるが、まだそうするわけにはいかない。2人の元へと行かなければならないからだ。

荒い息をつきながら、刹那はレオとマリアの元へと歩く。レオはすでに瓦礫の中から救出されており、マリアの膝の上に頭を乗せられていた。わずかに上下しているレオの体を見て、生きているのだと

安心する。

「マリアさん、レオのほうは大丈夫ですか？」

一応、容体のほうをマリアに尋ねる。

「……………」

ところが、マリアは刹那のほうを向くだけで何も言わない。表情から読み取れる感情は、驚き。何に驚いているのか刹那にはよくわからなかったが、とにかくレオの容体を訊かなければならない。

「マリアさん？」

「……………え？ あ、はい」

ようやくマリアが刹那の言葉に反応する。

あのマリアが、ここまで驚くところを見せるなんて、刹那にとっては少し意外だった。

ともあれ、訊かなければならないことを早く訊かなければならない。

「レオの容体はどうでしょう？ 致命傷は受けてはいないようで

すけど・・・大丈夫なんでしょうが」

「はい、命は大丈夫です。出血していた部分は止血しましたし、特に腫れあがっている部位もないようです。ただ、内部のダメージに限っては何とも言えないので、専門医の検診が必要になると思います」

「そうですか・・・。よかったです」

ダメージこそ受けはしたものの、命が助かって何よりだ。安堵のため息をつき、刹那は崩れるようにその場に座り込む。不安なことがなくなり、力が一気に抜けてしまったのであった。

「・・・よかったです」

ぼつりと、マリアが言う。その言葉は誰にでもない、刹那に向けられた一言だった。

「よかったです・・・」

もう1度言う。マリアは本当に安心したような表情を浮かべ、胸に手を当てながらため息をつく。

「・・・心配かけて、すみません」

頭を下げて、刹那が謝る。紙一重の戦いだっただけに、マリアが抱いた不安は生半可なものではないことを悟ったのだろう。謝ったあとは、何も言わずにマリアの答えを待った。

「いえ、生きてくれただけで十分です。本当に・・・死ぬんじゃないかって、不安でした」

「俺も、正直死ぬかと思いました。あの鞭の束が消えてくれなかったら、絶対に生きていなかったと思います」

先ほど起きた、不可解な現象。意図的に起こしたわけではなかっただけに、刹那は驚きを隠せない。九死に一生という言葉を、ひしひしと噛みしめていた。

「刹那くん、歩けますか？」

「はい、歩けますけど・・・どこに行くんですか？」

「上です。戦争の終わりを報告して、レオさんを運んでもらわなければなりません」

マリアはそう言うが、刹那は天界の者が自分たちに好意的に接してくれるとは思えなかった。この世界の『畏』であるジエノが裏で動かしていたとはいえ、天界の人々が魔界に攻撃を仕掛けたということとは事実。魔族を根絶やしに、という考えが刷り込まれていないとは断言できない。

「・・・大丈夫、でしょうか」

胸の内を明けるように、刹那は一言マリアに言った。
その言葉にマリアは微笑み、そして答える。

「大丈夫です。誤解が解けたのならば、天界の方々が危害を加える理由などないはずです」

マリアの信じきった微笑みを向けられた刹那は、もう何も言うことができなくなってしまう。不安ではあるが、マリアの言う通りにするしかない。反対したところで、マリアも考えを変える気はないだろうから。

「それでは、参りましょう」

膝の上に乗せているレオの頭をゆっくりと床に降ろし、マリアは立

ち上がる。

刹那もそれに倣って立ち上がり、そして2人は上へ続く階段へと向かって歩いて行った。

階段を登り終え、刹那が玉座を退かそうと手を伸ばす。重さが手に伝わってきて、ゆっくりと玉座が持ち上がった。

王の間に明かりが点いているのか、隙間から徐々に光が入り込んでくる。暗闇に目が慣れていたためか、刹那は思わず目を細める。

「……明かり、点いてたっけかなあ」

そんな疑問が刹那の頭をかすめる。確か、ジエノの元へと行く最中に通った王の間は、光がまったくと言っていいほど差し込まない暗闇が広がっていたはず。普通ならば、こんな光が差し込んでくるはないのに、一体なぜ？

「……まさか」

嫌な予感がした。刹那は様子確かめようと、急いで階段を上がって王の間へと出る。

そして刹那が見たものは、予想通り最悪の光景だった。

「・・・マジ、か」

地下へ続く階段のある玉座を取り囲むようにして、武装した大勢の騎士が待機していた。いつでも戦闘が始められるように武器を構えていて、どの騎士も1人残らず刹那を睨みつけている。

明らかな殺意を向けられ、刹那はまだ戦いが終わっていないことを理解した。ジエノを倒しても、まだこの大人数相手に戦闘を繰り広げなければならぬ。傷ついたレオとマリアの分まで、1人で。

「くそっ！」

先ほどの戦いで使用した『眼』のおかげで、ただでさえ少なかつた刹那の魔力は空寸前にまで減少していたが、そんなこと気になどしてはいられない。せつかくこの世界の『畏』を倒したのに、ここで倒されるわけにはいかなかった。

瞬時に大剣を形成し、そして構える。これだけ数が多ければ、刹那がどう頑張ろうとも不利な戦いをせざるを得ない。戦いの途中で魔力が尽きてしまう可能性も十分あるが、それでもやらなければならぬ。

刹那が戦闘態勢へ入ると同時に、騎士たちも武器を構えて刹那の攻撃に備える。1人残らず刹那へ憎悪のこもった視線を送り、殺気を放っている騎士たちは、まるで肉親が殺されたに等しい感情を抱いているようにも思える。

膝を曲げ、刹那は騎士たちへ突っ込もうと足に力を込める。その力を一気に爆発させ、加速しようと思った矢先、刹那の肩に優しく手が置かれた。

何事かと思つて振り向くと、そこには困つたような笑みを浮かべているマリアの姿が。この状況なのに怯えもせず、戦おうともせず、ただマリアは笑っていた。

「刹那くん、待ってください。もう、私たちが戦う必要はないじゃないですか」

「で、でも」

「いい子ですから、武器をしまってくださいな。大丈夫、彼らは襲つてはきませんよ」

どうも納得ができなかったが、マリアの言いようのない優しげな言葉に、刹那は言う通りにするしかなかった。大剣の形成を解き、丸腰になる。戦う気はないということアピールするようにして、刹那は手を広げた。

だが、騎士たちの殺意は収まらない。刹那とマリアは戦う意思はないのに、それでも武器は向けられたままだ。いつ襲いかかれても不思議ではなかった。騎士のうち、誰かが1人でも攻撃してくればこの均衡は崩れ去り、戦う術を放棄した刹那とマリアは無抵抗のまま翻られることは明らかだった。

「・・・お前たちもだ。その方たちは、戦争の原因ではない。武器をしまえ」

その騎士たちの中から、1人の男の声が響く。重みのある、静かな威圧感のある声だった。

瞬間、騎士たちの殺気が嘘のように消え失せ、構えていた武器をしまう。たった1人の声で、あんな憎悪にまみれていた騎士たちが大人しくなったことが、刹那は何を意味するのかわからなかった。

周りを囲んでいた騎士たちが、声のした場所から今刹那たちがいる玉座までの道を開ける。全員の動作は惚れ惚れするほど揃っていて、それが騎士たちの統率力が強いかを教えてくれる。

その開けた道からこちらへ向かって歩いてくるのは、足を負傷しているのか、杖をついている1人の男。刹那には見覚えがないが、マリアにはあるその男は、マキージャだった。

「マキージャ様、これはどういうことでしょうか？」

「……決心をしたのだ。戦争を終わらせる決心をな。騎士たちを集め、すべてを話した。そしてここへ来たが……遅かったようだな。申し訳ない」

マキージャの説明で、この騎士たちの集まりように合点がいった。この刹那たちを排除するために来たのではなく、この下にいるジェノを倒すべくここへやってきたのだ。先ほど向けられた憎悪のこもった視線も、刹那が戦争を引き起こした張本人なのだという勘違いから生まれたものなのだろう。

「とんでもありませんわ。お気遣い、感謝いたします」

「……して、すべて終わったのだろうか？ 我々はもう、戦わなくともよいのだろうか？」

無益で、後には何も生まれない戦争。ただ無駄に命を費やすだけで、意味のない戦争。それがようやく終わったのだということを確認したくて、マキージャはマリアに問いかける。

「はい、すべて終わりました。私たちはもう、戦わなくともよいのです。戦う理由は、もうないのですから」

マリアは笑顔のまま、不安そうな表情を浮かべているマキージャに返した。

戦争の元凶であったジェノをこの世界から追い返した今、もう天界と魔界が争う理由などどこにもない。戦争の起こる前の共存してきた日が再びやってきたことを、マリアはマキージャに伝えた。

「・・・そうか」

ぼつりと、マキージャが言った。

「・・・よかった」

もう一言だけ言って、マキージャは表情を和らげた。

それでようやく、その場に居合わせた騎士たちも争いの終結を理解する。歓喜の叫びをあげ、手を取り、そして鎧越しに抱き合っていた。涙する者までいた。天界も魔界と同様、戦争などしたくはなかったのだということを知って、刹那はほっとため息をついた。

マリアは、戦いが終わったことを喜ぶ騎士たちを見て、何も言わず、ただ笑っていた。

その内にある感情は、安堵と喜びの他ならない。

第91話 魔界編26

戦争の終わりを告げた後、甚大なダメージを受けたレオとマリアはすぐさま医務室へと運ばれることとなった。ジエノから受けた傷は思っていたよりも大きく、医師の診察では1週間は絶対安静らしかった。レオは内臓の裂傷があつてしばらくは動けず、マリアに関しては各部位の粉碎骨折があるため、魔界に帰るのはずいぶん先になるとのことだった。

ただ、刹那だけはジエノの攻撃を受けていなかったのが幸いし、1日休んだだけで動けるようになった。問題は魔力の著しい消耗だけであり、特に怪我らしい怪我をしていなかったため、刹那は戦争が終わったことを報告しようと魔界へ向かうことにした。

天界のほうで乗り物を用意してくれるという話も上がったのだが、まだ魔界は戦闘態勢を解いてはない。そんな中、わざわざ天界の乗り物で降り立ったとなれば、高い確率で攻撃されるかもしれないということ、刹那は自身の『翼』で魔界へ降りていくことになった。魔界に降り立ち、戦争の終わりを報告しようと刹那はメルゼの元へと向かった。天界へ向かう前はベッドで安静にしていたメルゼだが、リリアと風花の治療のおかげで歩けるくらいには回復していた。話を聞くと、2人の治療はこの国の医師が腰を抜かすほど高性能なものだったらしい。

刹那から戦争の終わりと、レオとマリアの安否を聞いたメルゼは、見ている人間が呆れるくらい大袈裟に喜び、そして城中にそのことを言って回った。

噂が広まるのは思っていたよりもずっと早く、戦争が終わったことはあつという間に国全体に広がった。人々は大いに喜び、そして盛大な催しをすべく準備を始めた。戦争が終わって嬉しいのは、天界も魔界も同じようだった。

報告が終わったあと、刹那はリリアと風花と共に天界へと再び向かった。メルゼの怪我をあれだけ早く治したのだから、レオとマリアの容体も診てもらいたかったというのもあるが、何よりも2人の強い要望があつての同行だった。

手段は最初に天界に向かった時と同じく、鉄板の上に2人を乗せ、刹那が飛んで運ぶというものだった。今度は十分に魔力があつたため、あの巨大な大砲に入るといふことはしなくていいよかつたらしく、振り落とされたらどうしようというリリアと風花の不安は杞憂に終わった。

2人を連れて天界へと戻ってきた刹那だが、宮殿に降り立った瞬間ものすごい数の神族に囲まれ、しばらく身動きを取ることが叶わなかった。戦争を終わらせた張本人である刹那は、もはや英雄に近い存在として天界の人間に認知されていた。話では、レオとマリアも同様な扱いを受けたらしい。

何とかその場から逃げ出した3人は、レオとマリアが收容されている医務室へと向かった。刹那の報告では無事だということ知らされていたものの、やはり心配だったらしい。レオとマリアの元気そうな顔を見て、リリアと風花は涙ぐみながら胸を撫で下ろしていた。

再会のあと、2人は傷ついたレオとマリアの治療にすぐさま取りかかった。リリアの回復術と風花の手術は天界の医療の最先端を遙かに上回っており、魔界の医師と同様、レオとマリアを診察した医師

も舌を巻くほどの技術力だった。

最悪でも1週間は絶対安静と診断されたレオとマリアだったが、リアと風花の治療が思いのほかよく効き、1日でベッドから起き上がれるほどにまで回復した。過去に両断された刹那の腕を後遺症も残さず綺麗に繋げたリアの回復術と、それが届かない内部までメスで切り進め、体内に吸収される素材の糸で繋げる手術にかかれれば、そんなこと造作もないことだった。

治療は続けられ、そして3日が経った。レオとマリアの傷は完全に癒え、その間に天界と魔界の両国で平和協定が結ばれた。もう2度とこういった悲惨な出来事が起きないよう、全力を尽くしてお互い支え合おうと、メルゼとマキージャは手を取ったのだった。

その後、マキージャは王位から身を引くということを天界の国民に発表した。これからよくなっていく国の頭脳が、無能で愚かな者ではいけないという理由からだった。ジエノがいなくなった今、愚者が王である必要などにもない。よりよく国をまとめてくれる新たな人物が王になったほうがよほどマシだと、マキージャは惜しげもなくあつさり王位を破棄した。

だが、国民は反対した。もちろん他の者に王位を継がせたほうがいいという声も上がらなかったわけではないが、それでもマキージャにこのまま国を治めてもらいたいという声が圧倒的に多かった。

理由としては、マキージャが愚者であるという発言は自己申告であるため、本当にマキージャがどうしようもない能無しであるかどうかは自分たちが判断する、という国民の声があがったことが挙げられる。

マキージャは王であることは愚者の証だと言うが、国民からしてみれば今までマキージャは王の鏡としてしか映ってこなかった。ジェノの言う通りにして今まで行動してきたなどというマキージャの言葉にどうも合点が行かず、その立派な王であるマキージャを失脚させたがる天界の人間はほとんどいなかった。

そして何よりも、王座にしがみつくような真似をしなかったマキージャの潔い態度が国民の胸に響いたことが大きかった。王位など、これからの天界の将来を考えれば安いものだと言わんばかりのその態度に国民は感服し、結果マキージャを支持する人間が増えることとなった。

マキージャは最初こそ渋ったものの、国民の熱意に負け、国の再興に全力を注いでいくという決意を表明した。愚者であると自分で言っているマキージャだが、ジェノの言う通りではあるが、この国の政治をこなしてきた経験はあるのだ。あとはその経験を生かし、国民と協力しながら国を作っていくだけ。自分で思っているほど、マキージャは無能ではないのだった。

戦争の締結から、5日が経った。両国とも落ち着きを見せ、驚くべきことに国民同士の交流をも始めていた。神族も魔族も、どちらも相手国を恨むことをしなかったことが幸いし、敵国に乗り込んでテロ行為をしようと考えている人間はほぼ皆無であるため、問題なく交流を深めることができていた。戦争が起こる前の情景も、ようやく取り戻すことができたというわけだ。

この世界の『罨』であるジェノを追い返し、平和を取り戻した今、もう刹那たちがここに留まる理由はなくなった。他の神の使いが仕掛けた『罨』に苦しんでいる世界へと、旅立たなければいけない。刹那たち一同は、この世界へとやってきたときに通ってきたゲート

の位置する場所へと集合し、そして同行してきたメルゼとマリアに別れを告げる。

「本当に世話になった。おかげで、色々これから課題が見つかることができた。感謝する」

腕を組み、そして刹那たちを見て名残惜しそうな表情を浮かべているメルゼに、レオがそう告げる。ジェノを相手に弾丸をほぼ無力化されたレオには、まだまだ学ぶべきことがたくさんある。今回の世界は、そのことを痛感させられた実に収穫の多いものであった。

「世話になったのはこっちのほうだ。お前らが来なかったら、たぶん今頃この魔界は火の海だったろうからな」

はははと笑いながら、メルゼがそう言う。解決したから笑いごとで済むが、刹那たちが来なければと思うと、メルゼの言葉も馬鹿にはできない。

「……でも本当によろしいのですか？ もっと色々持って行っていただいても、こちらは一向に構わないのですよ？」

謝礼を頑なに受け取ってくれない刹那たちに、今一度マリアが確認をする。これだけ偉大な功績を残したというのに、それに対する褒美を与えられないということは、何とも心苦しいものであった。

「俺たちは褒美が欲しくてやったわけじゃないから、いらないです。それに、もらえるものはもらいましたから」

リアと風花のほうを向いて、刹那が答える。2人の腕の中にあるのは、それぞれ毛むくじやらのぬいぐるみと蛇の玩具。それを持っている2人の嬉しそうな顔とまったく異なる。

「はいっ！ 私はもうこれがあればとっても満足ですっ！ ずっと大事にしますっ！」

ぬいぐるみに頬ずりをするリアは、誰が見ても幸せそうな表情を浮かべていた。本人の言う通り、このぬいぐるみさえあれば他の褒美などいらないのだろう。

「私もこの蛇の玩具で満足です。妹が寝てる時に枕元にこっそり置いておくのが今から楽しみです」

にこにこしながら頭の部分を指でなでている風花も、言葉に偽りがないように思える。考えていることはあまり褒められたものではないが、こんな玩具でも風花は心から喜んでいるようだった。

「そうですか・・・」

残念だという顔をマリアは浮かべるが、無理に持たせることはできない。刹那たちに受けた恩が計り知れないものであるが故に、マリアは残念でならないらしい。

会話が途切れ、そしてほんの少しだけ無言になる。お互い、別れの時間が迫っていることを悟っているのだ。わかっているからこそ、しみりとした空気になってしまうことは仕方がない。

その空気を感じ取り、レオがメルゼとマリアに告げる。

「『罨』はもう外れたし、平和にもなった。あとはこの世界の人間の管轄だ。俺たちは、この世界から退場させてもらう」

「・・・そうか」

レオの言葉に、メルゼが短く答える。短い間とはいえど、共に剣を合わせた仲。そして、息子である刹那をつれてきてくれた、大事な客人。これほど惜しくて仕方がないという別れは、メルゼが生きてきた中で初めてのことであった。

レオが銃を構え、弾倉に1発の弾丸を込める。ゲートのある位置は記憶している。人差し指に力を込めて引き金を引き、その位置へと弾丸を撃ち込む。

地鳴りのような低音が響き、空間に小さな円が出現する。それが徐

々に広がっていき、やがて人の通れる大きさにまで形成されて穴となる。異次元図書館へと続くゲートである。

「本当に世話になった。いつまでも、この平和を守ってくれ」

「ああ。お前も、頑張れよ」

「本当に、ありがとうございました。道中、お気をつけて」

短いやり取りをかわし、レオはゲートへと入った。姿はもう見えな
い。ゲートの中の歪んでいる空間は、レオをあっという間に目的地
へと運んだようだった。

「それじゃ、次は私が行きます。メルゼさん、色々とお世話になり
ましたっ！ マリアさんも、このぬいぐるみ、プレゼントしてもら
えてとても嬉しかったですっ！ 2人とも、ずっと仲良くしてくだ
さいねっ！」

「おう。体、治してくれてありがとな」

「リリアさんも、ありがとうございました。娘ができたみたいで、
とても楽しかったですわ」

ひまわりのような笑顔を浮かべながら2人とやり取りをし、レオに次いでリリアがゲートへと入っていく。ゲートへと入る際に、腕のぬいぐるみを強く抱きしめたのは、リリアなりの寂しさの紛らわし方だったのかもしれない。

「それじゃ〜私も行こうかな〜。メルゼさん〜、刹那さんとレオがお世話になりました〜。マリアさんも〜、町に連れて行ってくださりありがとうございます〜。とても楽しかったです〜」

「はは、世話になったのはこっちだったの。妹、あんま驚かしてやんなよ?」

「はい、私もとても楽しかったですわ。短い間でしたが、ありがとうございます〜」

風花も2人に別れを告げ、元気よく手を振りながらゲートへと入っていた。メルゼとマリアも、笑いながら手を振り返し、風花を見送っていた。

残ったのは、刹那だけ。何か気のきいた言葉の1つや2つでも言えればいいのだが、どんなことを言ったらよいのかわからず、黙りこくってしまう。

「・・・ほんと、運がよかった。いくら喜んで、足りなくて仕方

ねえ」

先に言葉を発したのはメルゼだった。表情は笑顔のまま、まるで独り言のように呟く。

「あんなに喜んだのは、マリアが結婚を承諾してくれたとき以来だったっけな。本当に嬉しくて、いねえはずの神様に感謝したもんだ」

メルゼの言葉に、刹那は何も言えなかった。こんな時に、何と声をかけたらいいかなどわからなかった。ただ黙ってメルゼの言葉を受け取り、そして刻んでいく。

「・・・刹那」

不意に、メルゼから名を呼ばれる。そのことに驚いてろくに返事もできないでいるうちに、メルゼが言葉を続けた。

「これからお前は、色んな出来事に巻き込まれて、色んな人と関わって、そして色んな敵と戦っていくだろう。楽しいことばかりじゃねえかもしれないし、悲しいことだらけかもしれないねえ。だけどな・・・」

刹那の肩を力強く掴み、いつにない真剣なまなざしで刹那を見つめ、

そして言った。

「どんなことがあっても後ろを振り返るな。何が何でも前を向いている。つらくてどうしようもなくても、歯を食いしばって、それでも前へ進んでいけ。・・・大丈夫、お前ならできるさ。なんたって・・・」

この俺様の息子なんだからな」

肩を掴んでいた手が離れ、その手が頭に乗せられる。くしゃくしゃと乱暴に頭を撫でられ、刹那はされるがままになる。温かく大きなその手は刹那に安心感を与え、同時に別れを告げる言葉ではないメッセージであることを悟る。

刹那の頭を撫でていた手を下げ、メルゼは真剣な表情を和らげる。笑っているのに寂しそうなその表情は、どことなく儂げな雰囲気醸し出していた。

「・・・マリア、次はお前の番だ」

「・・・はい」

メルゼの言葉にマリアが頷き、刹那に歩み寄る。表情はあくまで笑顔。しかし、奥底の悲しみは隠せていない。刹那には、マリアが今にも泣きだしてしまいそうにさえ見えた。

何も言わず、ただ笑顔で刹那を見つめているマリア。

そのマリアが、不意に刹那に抱きついた。

初めて刹那を見たときと同様、抑えられない感情を行動によって表すかのように、マリアは刹那の体を自身の細い体で力一杯抱きしめた。

「もう、行ってしまつのですね」

震えた声で、マリアが言う。

「・・・はい」

「もう、離れなければいけないのですね」

「・・・はい」

「刹那・・・あなたはあまりにも、温かすぎた。私の心を満たしてくれて、そしてこんなに早く行ってしまふなんて・・・あんまりです」

表情を見せず、マリアは心の内を言葉にして吐き出す。マリアにしてみれば、失った息子を再び失うに等しい別れ。刹那という光の訪れはあまりにも唐突で、あまりにも短すぎた。もうすぐ放さなければならぬ腕の中の存在が、愛おしくて仕方がなかった。

「・・・すみません」

刹那は、そんなマリアにそう謝るしかなかった。何を言ったところで、マリアの悲しみは癒せない。刹那にできることは、ただ一言謝ることだけだった。

「・・・あなたが謝る必要は、これっぽっちもありませんよ。温もりを、ありがとうございます」

言い終え、マリアがゆっくりと刹那から離れる。己の悲しさを悟らせまいと精一杯の笑顔を作るが、目が赤くなっていることはどうも隠せていなかった。泣き顔を見せることなく、別れの時でも笑顔で

いるマリアの何と強いことか。

「離れていても、血がつながっていなくても、私たちは親子です。あなたの無事を、ずっとこの世界で祈り続けています。だから……だからどうか、お元気で」

こらえきれず、マリアの頬に一筋の涙が流れる。どうしても抑えきれなかった。熱い物がこみ上げてきて、それが涙になって流れていく。

それでも笑顔は崩さない。泣き顔なんて情けない表情を、息子である刹那に見せるわけにはいかなかった。母としての、そして見送る者としての義務だった。

「さ、もう行け。仲間が、お前を待ってるぞ」

メルゼの言葉に刹那は無言で頷く。

2人に背を向け、刹那はゲートへと近づいた。入ろうとして手を伸ばし……そして再びメルゼとマリアに向き直る。やり残したことがあったからである。心の内をめぐっているこの温かな感情を言葉にし、それを伝えるということが。

出来る限りの笑顔を作り、息を吸い込み、そして刹那は言う。

「いってきます！ 父さん！ 母さん！」

言葉自体はともありふれたもの。毎日、町のどこかで必ず耳にする当たり前な言葉。

だが、メルゼとマリアは違った。そんな当たり前の言葉なんて今までろくに聞いたことがないし、息子から言われるといったことも初めてのことだった。

胸に温かい物が満ちてきて、そして理解する。この当たり前の言葉は、子を1度亡くした自分たちにとって、とても貴重なものだ。目の前の刹那からこの言葉を聞くことは、もうないであろうということ。

「ああ・・・行って来い」

「いって、らっしやい・・・刹那・・・」

2人に見送られ、刹那は背を向ける。もう振り向くことはしない。迷うことなくゲートへと足を踏み入れ、そしてこの世界から退場す

る。

見計らったかのように刹那の入ったゲートは小さくなっていき、地鳴りのような音をあげながら消えていった。虚空に開いていたはずの穴はもう存在せず、音も静まった。まるで何事もなかったかのように、刹那たちの別れは呆気ないものだった。

「……行っちゃったな」

「そうです、ね」

短く、メルゼとマリアは言いかわす。おそらく、刹那とはもう2度と会えないだろうということは2人とも心のどこかで理解していた。もともと刹那はこの世界の人間ではない。『畏』がなくなって今となっては、その刹那がここに来る理由などもどこにもない。

「寂しいか？」

「……当然ですわ。でも」

涙をハンカチで拭きながら、マリアは言う。

「1度会えましたから、私は十分です。本当ならば、巡り会うこと

などなかったのですから」

数ある世界。その世界の中から、刹那たちはこの世界を選んで来てくれた。それは必然ではなく、まったくの偶然。その偶然はマリヤにとつてこの上もなく幸運なことで、2度と味わうことのない刹那の温もりを知ることのできた貴重なものだった。

「・・・そうか」

一言だけメルゼが言って、2人の間に沈黙が生まれる。お互い、胸の内で描いていることは違つたろうが、ただ共通していることは刹那のこと。これからどんなことが起こるかはわからないが、それでも笑顔でいてほしいと願わずにはいられなかった。

「うつし！ 帰るか、マリヤ！ まだやらなきゃならねえことがたくさん残つてらあ！」

湿っぽい空気を吹き飛ばす様にメルゼが言った。もう姿を見ることはできずとも、もう会うことが叶わずとも悲しむ必要などない。どこにしようが、何をしようが、刹那とメルゼたちは繋がっているのだから。

「・・・はいっ！」

マリアもメルゼの言葉に同意し、とびきりの笑顔を浮かべる。悲しみの色はもうない。悲しむ必要などないのだから。

空は青く、どこまでも透き通っている。雲は1つも存在せず、刹那たちが命懸けで勝ち取った白く神々しい空中都市だけが煌めいていた。

+ + + + +

「ほつ〜く」

部屋に入りながら気だるそうに言うのはサラ。何か嫌なことでもあったのか、やれやれと言わんばかりに長い髪の毛を指に巻きつけている。

「何の報告？」

当然のことながら、ずっとこの部屋にいた青年には、サラが何に不

満を抱いているのかわからない。そのことを聞きたいがため、青年はサラに先を続けるよう促す。

「ジエノよジエノ。やあつと帰ってきたと思ったら瀕死状態だったわ。今は治療中」

「・・・ジエノが？ 本当？」

よほどジエノの力量を信頼していたのか、青年は驚きを隠せないでいる。

「ホント。何があったのかって訊いても、油断したの一点張り。まったくもう・・・こんなに心配してるんだから話してくれてもいいと思わない？」

不満げに口をとがらせながら、サラは青年に愚痴をこぼす。

「ははは。やっぱりさ、お姉さんには心配かけたくないんじゃない？」

「どうだか。あゝあゝ、昔はもっと可愛かったのに」

「ずっとサラの後ろにくっついてたからね。あの頃も、懐かしいなあ」

微笑みながら、青年は設置されている巨大なカプセルへと向き直る。今までふさげが入っていたサラも、それを見てうつむいてしまう。

「・・・失敗続きで、悪いわね」

「ん？ ああ、気にしなくていいよ。時間なら無限にあるんだから。僕だって、君たちだけにやらせて・・・ごめんね」

「・・・私たちの仕事だもの。謝られても困るわ」

「ごめん・・・色々」

それ以上何も言い返せなくなって、サラは押し黙る。恩人に報えていない今の状況は、はつきり言って芳しくない。何とかしなければならないと、今更ながらサラは痛感した。

「・・・もう行くわ。ジエノも、後でこっちによこすから」

「うん、お願い」

青年の返事を聞いて、サラはその場を後にした。

1人残された青年。目の前のカプセルに手を置き、物思いにふける。その青年が何を思っているのかは、誰にもわからなかった。

第91話 魔界編26（後書き）

今回の物語はいかかでしたでしょうか？

共存してきた天界と魔界。神の使い、ジエノによって引き起こされた戦争が原因で仲を離れた両国も、刹那たちの活躍で見事に元通りとなりました。罨を外す、という点では、素晴らしい結果だったのではないのでしょうか？

さて、次の物語は異種編。

類稀なる体質と目を持った、哀れな少女のお話をどうかお楽しみください。

第92話 異種編1

種族？ そんなの関係ないわ
アタシはもうそんな鎖には囚われない
自分のあるがままに生きる
それをあの人たちは教えてくれたから

満月に限りなく近い、少しだけ欠けた月の薄明かりだけを頼りに、
褐色の肌をした少女が夜の道を駆け抜けていた。草花を踏みしめ、
束ねている長くて黒い髪の毛を揺らしながら、後ろから迫ってくる
村の人間から必死に逃げる。

追いつかれれば、おそらく少女は殺される。村人の形相は凄まじい
物で、たった1人の少女を相手にしているのに殺気を隠せないでい
るからだ。もう何度も味わってきた恐怖を一身に受け、少女はただ
走った。

「待ちやがれえっ！！ 今日こそはぶっ殺してやるからなあっ！」

「生かしてきてやった恩も忘れやがってっ！ この『化け物』があ
！！」

冗談で言っているわけではない本気の怒声が、静かな夜の空気を震
わせる。1人のか細い少女を、松明と武器を持って追いかける村人
たちは、傍から見れば暴挙でしかなかった。1人1人が罵詈雑言を
少女の背中に浴びせ、手に持っている武器を力強く握りしめている
その様は、まるで獲物を追いかける獣のようでもあった。

「はっ、はっ、はっ・・・」

息を切らしながら、懸命に走る少女。追いかけてくるのは大の大人
なのに、少女は足が村人たちの接近を許さず、空いている距離を徐
々に大きくしていく。生きたいという本能からくる力なのか、それ
とも別の何かなのか、そんなことはわからない。

少女と村人たちの距離は大きくなり続け、終いには姿が見えなくな
るほどにまで離れてしまう。これ以上追っても意味がないと判断し
たのか、村人たちは苛立ちながら足を止めた。

「ちきしょうっ！ あの小娘がっ！」

「今度会ったら、バラバラにして畑に撒いてやるからなあっ！ 覚

えてろよおっ！！」

もうずいぶん遠くへと行ってしまった少女に聞こえるよう、大声で少女に暴言を吐いた後、村人たちは揃って踵を返し、自分たちの村へと帰っていった。逃がしてしまったことの苛立ちは隠し切れておらず、手に持った武器に当たり散らしていた。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

もう追いかけてくる村人はいないというのに、少女は走り続けている。見えない恐怖から逃げるように、少女はただ走る。

走って、走って……もうどれくらい走ったかわからないくらいの距離を走った少女は、ようやく足を止めた。汗で張り付いた髪の毛を手で掻き上げ、己が走ってきた道を振り返ってため息をつく。

もう何十回と繰り返されてきた命懸けの鬼ごっこだが、依然として慣れることはない。何度も捕まりそうになったり、何度も死にそうな目に遭ったりしてきたが、今回のようにあっさり逃げ切れたのは運がよかったとしか言えない。

「……何で、アタシだけ」

ぼつりと呟いて、少女は住处へと帰ろうと止めていた足を動かす。今夜は心も体もとても疲れていて、一刻も早く藁の中で眠りたかつ

た。

「あ、れ……？」

しかし、少女の足は再び止まってしまふ。動けと頭で命じてもぴくりとも動かず、力が抜けて膝から崩れていく。距離こそは走ったが、まだ少女の体力には余力がある。倒れるほど疲労は溜まってなどいないのに、なぜ？

「あ……忘れて、た……」

倒れる原因など、少女にはすぐわかってしまふ。このしばらくの間、食料を村人たちから奪うことだけに目がいつていて、肝心な『あれ』をしなかったからだ。

体が鉛のように重くなり、少女はその場に倒れこんでしまふ。村から離れているとはいえ、ここで倒れてしまふのはまずかった。眠っている間に、ひよっとしたら散歩か何かでやってきた村人に捕獲されてしまふかもしれないからだ。

「ここ、は……まず、い……」

気力を振り絞って意識を保とうとするが、無駄であった。少女の意識は機械の電源のように一瞬で途切れ、柔らかな草の上に体を預け

ることになってしまう。

この危険な状況の中、少女は穏やかな寝息を立て、深い深い眠りについてしまった。いつになれば目が覚めるかはわからない。月光に照らされて露わになる少女の寝顔は、年相応の本当に可愛らしいものであった。

++++

「おっっ!! 何か馴染みのある風景じゃねえかあ!!」

ゲートをくぐった先の風景を見た雷牙が、心からの歓声を上げる。どこを見回しても、あるのは眩い太陽に照らされている美しい自然。同じような自然環境の中育ってきた雷牙は、しばらくぶりに見たその光景に心から感動する。

「そうですね。僕たちの世界を出てからもうほんの少ししか経っていないのに、何だか懐かしい気持ちになります」

雷光も雷牙の言葉に賛同し、新鮮な空気を吸って背伸びをする。森の空気の中で育った者である2人の兄弟は、目的も忘れてこの場の

風景と空気を味わっていた。

「あんなにはしゃいじゃって……。本当にバカなんだから。ね、レナもそう思うでしょ？」

やれやれとため息をつきながら、風蘭がレナに同意を求める。風蘭のその問いに、レナは含んだ笑いを見せて言った。

「ふふ、風蘭……。あの2人が羨ましいんですよ」

「へ？ あ、いや！ 別にそんなことないってばっ！ ホントに！」

慌ててレナの言葉を否定するも、本心ではないことなど丸わかりだ。やっぱりか、という表情を浮かべながら、レナも背伸びをする。

「はしゃいじゃってもいいのに。こういう所、好きなんですよ？」

「そりゃ嫌いじゃないけどさ……。さすがにあいつらみたいにはしやげないって」

そう言って、風蘭が2人のほづに目をやる。

雷牙と雷光はもうその場の空気に順応してしまったのか、先にある原っぱに寝転がっていた。ぐるぐると体を回転させながら動く2人のはしゃぎようは、風蘭が真似るにはちよつと抵抗がある。

「でも、故郷の世界と同じ雰囲気なんですよ？　せつかくなんだから、今の内に色々楽しんでおいたほうがいいと思うよ」

「まあそうなんだけどねえ・・・」

それでも抵抗があるのか、風蘭はなかなか羽を伸ばそうとしない。腕を組みながら転げまわっている雷牙と雷光を羨ましそうに眺めているだけで、特に何か行動に移そうとはしなかった。

「ま、あたしは遠慮しとく。別にそこまで懐かしくもないし」

そっけないふりをしているが、どうも本心とは逆らしい。原っぱにいる2人と同じように転げ回りたいという衝動を抑えられず、足をびくびくと可愛らしげに動かしている。

「素直じゃないなあ・・・」

くすくすとレナが笑う。何だか、こういう風蘭の態度がものすごく可愛らしくて仕方がなかった。風蘭がじとつと睨んでくるが、それ

でもレナは笑うことが止められない。

あゝもう！ と一言だけ言って、風蘭が何とか話題を変えようと柔らかな黄色の髪の毛を指で弄る。

「あたしはともかく、レナはどうなのよ。素直になれてるの？」

風蘭にそう言われて、少しだけ考えてレナが言う。

「私は、そうだね・・・時と場合による、かな。素直になる時はなるし、なれない時もあるの」

「ふうん。確かに、レナは素直だろうね。最近、元気がないですって顔に出てるし」

「？ そんなことないよ。特に体調悪いつてわけでもないし」

思いがけない意外な言葉だったのか、レナが少しだけ戸惑い気味に答える。

「体調が悪くないならいいんだけどね。初めて会ったときと比べて、何だか笑顔が暗いつていうか、寂しそうな顔してるからさ」

目の前ではしゃいでる男2人はどうやら気がついてはいないようだったが、同じ女である風蘭にはレナの笑顔の微妙な変化に気がついてしまう。どこか寂しげなレナは、何だか水を満足にもらえていない花のような感じがしてならない。

「・・・そう見える?」

「見える」

レナの問いに、風蘭がはっきりと答える。あまりに風蘭に迷いがあったので、レナは少しだけ驚いてしまう。

「悩み事? あるなら聞くけど」

「・・・気になっていることはあるんだけど、今はとりあえずいいかな」

「? どうしてよ。あたし、頼りにならない?」

「そういうわけじゃないんだけど・・・2人とも、いなくなっちゃってるし」

「え? あっ!?!」

レナの言葉で、風蘭がようやくそのことに気がつく。先ほどまで原っぱではしゃいでいた2人の姿はどこにもなく、話しているうちに取り残されてしまったのだということを、風蘭は今更ながら理解する。

「うわあっ！ あの2人、乙女2人残してどこに行ってるのよ！！」

「だ、大丈夫だよ。そんなに遠くには行ってないはずだから、今から行けば間に合うよ」

「よし！ じゃあ行く、レナ！ あゝ、あの2人はホントにも……」

肩下げている医療用のバッグをがちゃがちゃと鳴らしながら走りだした風蘭に続いて、レナも走りだす。野生育ちは伊達ではないのか、風蘭の足は想像以上に速かった。普段から剣を振るって鍛錬をしているレナも、少し本気を出さなければ追いつくことができない。雷牙と雷光の狩りについていったことの賜物だった。

「あ、いた。やっぱりあまり離れてなかったみたい」

2人がはしゃいでいた原っぱを越え、レナと風蘭は呆気なく2人を

発見した。ただ、何か様子がおかしい。先ほどあれだけはしゃいでいたというのに、何かを観察するように2人ともしゃがみ込んでい

る。
「・・・何かあったのかな」

「まあ、行ってみたら早いわね。とつとと行きましょ」

レナと風蘭は顔を見合わせ、雷牙と雷光の元へと向かう。ひよつとしたら、この世界の『畏』につながる何かを見つけたのかもしれないと思っただからである。

草花を駆け抜け、レナと風蘭は一直線にその場へと駆けつけた。

「2人とも、何か見つけたの？」

駆けつけたレナが、しゃがみ込んでいる2人に尋ねる。何を見ているのかは、2人の体で見えなかった。

「いや、何かっていうか何というか・・・」

困ったように、雷牙が立ち上がって発見した『者』をレナと風蘭に見せる。そこにいたのは、草むらをベッドに深く眠っている少女だった。ぱつと見る限りでは、レナたちと同年代か、それに近い年頃であることはわかった。

特徴的な長く、黒い髪の毛は古びた紐で束ねられており、決して裕福な生活をしているわけではないためか、所々穴のあいたボロの服を纏っている。土にまみれた褐色の肌と、少しやせ気味な体型は、そのことを裏付ける何よりの証拠だった。

その少女を見て、真っ先に声を上げたのは風蘭だった。

「あ、あんた達！　いくらなんでもはしゃぎ過ぎでしょうがっ！　女の子になんてことしてんのよこのバカッ！！」

「ち、違っつて！　そこに倒れてたんだよ！」

風蘭の怒鳴り声に、雷牙が慌てて説明する。どうやら、はしゃいでいて突き飛ばしたという類のものではなかったらしい。それならばと、風蘭はため息をついて納得する。

「この女の子、怪我とかしてるのかな」

眠っている少女を見て、レナが心配そうな声を出す。いくらのだかだとはいえ、こんな人気のない所で故意に野ざらしになっているとは考えづらい。もしかしたら怪我で動けないのではないかという考えが、レナの頭をよぎった。

「いえ、血の臭いはしませんから外傷はないかと。ただ、何か病気

で動けないという可能性は十分あります」

雷光たちの鼻ならば、血の臭いも嗅ぎわけることが可能であることは周知の事実であるから、外傷がないということは間違いない。怪我がないことに少しだけ安堵の色を表情に出したレナだが、まだ安心はできないと表情を引き締める。

「それじゃ、とりあえず木陰にでも運びましょうか。直射日光に当てるわけにもいかないし。雷牙、あんたこの子運んで。雷光、あんたは綺麗な水を汲んできて」

医療に心得のある風蘭が2人に指示を出す。この少女が病気を原因に倒れたとすれば、ここに放置するのはあまりにも危険。体温を上昇させる直射日光を避け、綺麗な水を用意しておくのは的確な判断であった。

「確かに、この自然の中の水なら大丈夫でしょう。風蘭さん、道具を」

「はい、これ。近くににいるから、汲んだらまた戻ってきて」

雷光に催促され、風蘭はその手に折りたたまれた簡易のバケツを手渡す。サイズこそ普通のバケツよりは小さいが、持ち運びができる柔らかな素材で出来たそのバケツは、持ち運べる量が限られている

バッグの中に入れるにはうってつけの代物だった。

そのバケツを受け取り、雷光は走り出した。遠くで水の流れる音を確認していたのか、向かう先には迷いが一切見られなかった。

「んで、どこに運ばいいんだ？ あんま遠くには行かねえんだろ？」

すでに背中に少女を背負った雷牙が、運ぶ場所を風蘭に尋ねる。言われた風蘭はきよろきよろと辺りを見渡し、視界内に入った一際大きい木を指さした。平たい位置にあるその大木は、斜面にある木よりもずつと寝かせやすいだろうという判断だった。

「あそこかな。お願い」

「うっし、任せな」

なるべく振動を与えないように、雷牙がゆっくりと歩いて行く。普段の行動が荒っぽい雷牙が、こんなことができるとは少し意外でもある。

「レナは、あの子が起きたら頑張ってもらおうかな。本人にしかわからない傷があるかもしれないから、お願い」

「わかった。任せておいて」

レナの快諾に、風蘭が頷く。正直な話、患者自身の回復力に依存して効力が高まる縫合や投薬よりも、裂傷部の治癒力そのものを高める回復術のほうが、傷の治療には効果的なのである。

もちろん、回復術の届かない深部に傷があるならば話は別だが、それ以外ならばほとんど治癒できてしまう幅の広い治療法を優先させるのは当然だった。

やることはやった。あとは少女の目が覚めるのを待つだけ。

2人は、雷牙が向かった大木の元へと歩き出した。

第93話 異種編2

大木の下へと運ばれた少女はその根元へと仰向きに寝かされ、3人は寝息を立てて体を上下させているその姿を心配そうに見ていた。目覚める様子はまだない。起きるかどうかも定かではないが、今はこうしておく他ない。

「・・・本当に起きんのか、こいつ」

訝しげに少女を見つめていた雷牙が、医療道具の鞆を整理していた風蘭に尋ねる。不安そうな素振りこそ見せないが、やはり雷牙も内心は心配しているらしい。

「わからないわよ。起きるって信じるしかないでしょうが」

無責任に聞こえる風蘭の言葉だが、そうするしかないのだから仕方がない。できることがあるならば、とつくに動いている。そうしないのは、やることが明確ではないからだ。

病でこの少女が倒れていたとしても、その病がどういうものであるのかわからなければ何もできないし、怪我をしているわけでもないから治療もする必要がない。風蘭の言う通り、今はこの少女が目覚めるのを待つしかできないのだ。

「そっかよ」

雷牙もそれがわかってしているのかそれ以上何も言わず、木の根を枕にして横になった。ただ待っているよりも、居眠りをして時間をつぶすことを選んだらしかった。

「ほんつとに呑気なやつ。この子が起きたら起きてもらうつからね」

喋るのも億劫になったのか、風蘭の言葉に雷牙が手を振って応える。幼少の頃からの付き合いだけに、雷牙がこうすることは大体予想していたが、それでもため息は止められない。もう少し緊張感というものを持ってもらいたいものだ、心の底から思ってしまう。

「雷牙って、いつもこんな感じなの？」

「その通り。呆れるでしょ？」

風蘭が笑いながら、レナの問いに答える。雷牙のこういった行為にはもう慣れているのか、特に目くじらを立てているような口調ではなかった。呆れを通り越してしまった、というところだろうか。

「ちょっとだけね。でも、休むときにしっかり休むのはいいことだと思っよ」

「確かにそうだけどさあ……やっぱり無防備なんだよね」

手元にあつた小さな石を掴み、眠っている雷牙の頭に放り投げる。放物線を描いた小石は見事に雷牙の頭に命中するが、当たった本人は特に気にした様子もなく眠り続けていた。

「ね？」

同意を求めようと、風蘭がレナに視線を向ける。

「まあ、うん。あはは……」

レナも雷牙がここまで無防備だとは思わなかったのか、フオーローできず苦笑いを浮かべるしかなかった。攻撃ともいえない攻撃だから防いだりしなかったのだと、自分にそう言い聞かせて納得させる。

そんなレナに、風蘭がちらっと視線を移す。気がついたレナが振り返って、首を傾げた。

「どつしたの？」

「さっきの話さ、今ならいいんじゃないかなって思ってた」

先ほどレナが言っていた『気になること』。雷牙と雷光のせいで聞きそびれてしまったが、今なら時間がある。本人にとっては取るに足らない問題かもしれないが、それでも仲間の悩みなら聞いてあげたかった。

「えっと・・・聞いてもらっていいの？」

「いいよ、仲間だし。力になれるんなら、やっぱりなりたいからね」

「・・・ありがとう」

気を遣ってくれる風蘭に対して、レナが礼を述べる。悩みを聞いてくれることに対してはもちろん感謝しているが、何よりも『仲間』という言葉が戸惑いもなくはつきりと言ってくれたことにレナは喜びを感じずにはいらなかった。言葉というものは偉大だと、改めて実感させられる。

ここまで言ってくれる風蘭ならば、もう遠慮する必要はない。レナは自身が抱いている『気になること』を話そうと、口を開く。

「・・・刹那、うまくやってるかなって」

「あゝ、あっちのチームのことか。心配なの？」

「それもあるんだけど・・・何してるのかちょっと気になって。それだけ」

レナの『気になること』はそれで終わりだった。確かに、聞く分には内容も薄く、大したことがないように思える。向こうのチームの安否を心配するのもこれといっておかしなことではないし、そのこと自体ごく普通のことであるから、特に深刻な悩みではないと捉えることができる。

「ふん・・・」

納得のいかなそうな声で風蘭がレナを見る。悩みの内容とレナの表情との関連性に、どうにも合点がいかなかったらしい。

「どっしたの？」

怪訝そうな表情をしている風蘭に、レナがそう尋ねる。

「いやさ、すいぶん刹那のこと気にかけてるんだなと思って」

「別に心配なのは刹那だけじゃないよ。レオもリリアも、風花のことも心配だし」

「あんだ最初、刹那の名前しか出さなかったじゃない」

「……………」

風蘭のもつともな言葉に、レナがたまらず押し黙ってしまう。向こうのチーム全員のことを心配しているのならば、最初の言葉は『刹那』ではなく、『向こうのチーム』にすべきだったのだ。

もちろん、レオ、リリア、風花の3人のことを心配していないと言えは嘘になる。大切な仲間だから、心配することは当然のことだ。怪我のことはもちろん、『畏』に苦戦を強いられていないかなど、不安の種は尽きることがない。

「……………そうかもしれない。もちろん、他の3人のことも心配だけ」

それでも、レナが一番心配し、気にかけているのは刹那のことだった。実戦の経験は浅いがそれなりの実力も持ち合わせているし、レオもいるから心配する必要などないのだろうが、どうしても気になつて仕方がなかった。

「やっぱり、剣を教えるから？　みんなが集まったとき、いつも訓練してたし」

剣に関しては師弟関係と呼べる刹那とレナの間柄だからこそ、教え
たレナは刹那のことが心配なのかもしれない。そう思い、風蘭が口
に出す。

「そういうわけじゃないと思う。・・・ごめんね、自分でもよくわ
からないの」

「んっ・・・そっかあ」

弱ったなと言いたげに風蘭は髪の毛を弄り、そのまま人差し指に巻
きつける。

レナの力になりたいのは山々だが、肝心な理由がわからなければど
うしようもない。悩んでいる本人であるレナ自身がわからないと言
うのならば、風蘭が理解するのは難しい。

何か他に理由はないかと必死に頭を働かせ、考える。レナがなぜ一
番刹那を気にかけているのか。真っ先に思い浮かんだ師弟関係にお
ける心配が理由でないとすれば、他に挙げられるものは一体何なの
か。

考えて、考えて・・・ふと思いついたことを風蘭が口にする。

「レナさ、もしかして刹那のこと好きなんじゃないの？」

「え？」

「だからさ、刹那のこと好きなんじゃないのって。それだとほら、ちゃんと筋が通るじゃない」

風蘭の言う通り、レナが刹那に対してそのような感情を抱いているとすれば、刹那のことを一番に気にかけていることに説明がつく。ふと思いついた割には、なかなか的を射ている答えだ。考え付いた風蘭も、少しだけ得意げな表情をしている。

「私が、刹那のこと・・・好き？」

「だと思っよ。ってか、あたしにはそれしか考え付かなかったけど」

「好き、私が・・・？」

レナが自分自身に問いかける。こんな話、風蘭に言われるまで考えようともしなかった。元いた世界では恋慕の情を抱くほどの男はもとより、同年代の友人すらいなかったし、異世界へと旅立った後も、『畏』を外すことに集中してそれどころではなかった。

それにも関わらず刹那が気になっているということは、やはり……。

「ち、違うよ！ 刹那とはそんなんじゃないよ！」

自身の中に抱いている感情に気が付き始めたのか、レナは慌ててそのことを否定する。刹那は仲間であり、剣を教えている弟子でもある。故にそのような感情を持つべきではないと判断したためか、自身の中の感情を認めようとはしなかった。

だが、明らかに嘘をついているのは歴然。珍しく頬を朱に染めているし、忙しなくあちこちへ視線を動かしている。風蘭に負けず劣らずわかりやすいようで実に微笑ましい。

「すつごくわかりやすいから。別にそんなに無理して否定しなくてもいいのにさあ」

「ううゝ・・・」

「ま、これではつきりしたじゃん。めでたしめでたし！」

「めでたくないよぉ・・・。私、どんな顔して刹那と話したらいいか・・・」

もはや隠すことも、押しつぶすことも、誤魔化すこともできなくなってしまう刹那への感情。それを知ってしまったレナは、風蘭に打ち明ける前よりもさらに困惑してしまう。言葉にした通り、どんな顔をして刹那に接すればいいのか・・・。考えただけでも不安になってしまう。

「ん・・・、うん・・・」

不意に、聞こえてくる声。

刹那への対応を考えてもじもじしていたレナと、その様子を見て楽しそうに笑っている風蘭は、すぐさま表情を引き締めて声のしたほうへと視線を向ける。

声の主は、先ほど運んできた少女の物だった。年相応の可愛らしい声を出しながら身をよじらせ、背筋や手を伸ばして全員の筋肉をほぐしている。見ている分には、病気などにかかっている風には見えなかった。

「雷牙っ！ 雷牙っ！ 起っきなさいっての！ 女の子起きたよ！」

呑気に寝こけている雷牙を、風蘭が怒鳴りつける。

「うおう！ 了解！」

その声が耳に入ったのか、まるで雷にでも打たれたかのように跳ねるようにして雷牙が起き上がる。眠るのも早ければ起きるのも早い。さすがは大自然の中で育ってきただけのことはある。

「ん……ん」

寝ぼけ眼を数回擦り、そこで少女はようやく目を開けた。

開かれた目の色は2つ。

血のような赤色と、闇のような黒色。

「この子、目の色が・・・」

「こんなの・・・初めて見た」

少女の目の色の違いに、驚きを隠すことのできないレナと風蘭。生まれて初めて見る奇怪な瞳に2人とも目を奪われ、少女に体の具合を聞くことも忘れていた。本来ならばあつてはならない事態ではあるが、このような珍しいものを見たのであれば仕方ないことだった。

「お、起きたか。気分はどうだ？」

そんな2人とは正反対に、雷牙は特に目の色の違いを気にした様子もなく、平然と少女へ容体を尋ねる。気にしていないと言うよりも、そもそも目の色が違うことに気が付いていないのかもしれない。雷牙の鈍さには、ほとほと呆れてしまう。

「・・・・・・・・」

少女は答えず、ただ問いかけた雷牙の顔をまじまじと見ていた。頭から足へと視線を移し、そして再び頭へと戻る。見たこともないような服装だったからか、少女の目は雷牙から離れることがない。

「お、いい、聞いてんのか」

一向に返事をする気配がない少女に、雷牙が声をかける。少女の目が覚めたことは実に喜ばしいことであるが、肝心の容体を聞いていない。何事もなければよいのだが、そうでないとしたら一刻も早く具合を聞きださなければならぬ。

「……………」

だが、少女は口を開かない。ここまで黙られては、本当に意識があるのかすらも怪しい。ただ目が開いているだけで、本当はまだ意識がないのかもしれない。そういう病気であるという可能性も、絶対ないと言い切れるわけではないのだから。

先ほどからうんともすんとも言わない少女。不意にその細い体が力を失い、雷牙のほうへと傾く。

「お、おい！ 大丈夫かよ」

自分のほうへと倒れてくる少女の体を、雷牙が慌てて抱き止める。やはり体の具合は良くなかったらしい。少女は自分の顎を雷牙の肩に乗せ、弱弱しい呼吸を繰り返していた。

「おい風蘭、どうすんだよ！」

未だに呆けている風蘭に向かって雷牙が叫ぶ。気は失っていないが、この少女が衰弱していることは目に見えた事実。一刻も早く専門家である風蘭に対処法を聞き、処置しなければならない。

「え？ あ！ ご、ごめん！ えっと、とりあえずこっちに寝せて！」

ようやく我に返った風蘭が、少女を抱いたままの雷牙に指示する。何はともあれ、診てみないことには話にならない。寝かせるのが、弱っている様子の少女を診察するには一番だった。

「おう、任せ いでえっ！！！」

「は？」

「肩！ 肩！ 何か刺さってる！ いでででで！」

風蘭の指示通りに少女を寝かせようとした雷牙が、突然肩の痛みを訴える。よほど痛いのか、少女に負荷がかからない程度に体を動かして、その痛さをアピールしている。

いきなりの雷牙の発言に、風蘭は怪訝な顔をしながらも様子を見ようと近寄る。別に刺さるようなものは肩になかったのに、どうしていきなり刺さるような痛みが走ったのかわけがわからなかった。ひよつとして虫にでも刺されただけじゃないのかと、勝手に予想を立ててみる。

「どじよ?」

「ここ! ここ! こいつが顎乗せてるほうの肩!」

必死になって指をさし、早く診てくれと言わんばかりに大声をあげる。

半ば呆れたようにため息をつき、風蘭は言われた通りに少女が顔を預けているほうの肩へそつと手を置いた。少女のほうを先に診なければならぬというのに、どうしてこいつはこつても大袈裟なのだろうと思いつつも、雷牙が指さしている部分をしぶしぶと診てみる。

「え……」

痛みの原因を見た風蘭が、声にならない声をあげた。てつきり虫が何かに刺されたのだろうと思っただけに、『これ』が痛みの原因だったことに若干引いていた。

「おい！ どうなったた！」

風蘭の声色に不安を覚えたのか、雷牙が肩の様子を聞こうと言葉を促す。

「え〜つとねえ〜・・・」

答えたいたのは山々だが何と言ったらいいものかと、風蘭がぼりぼりと頬を搔く。

「その〜・・・あんたの肩をね」

「おお！ 肩がどうなってんだ！」

「その子、噛んでる。ってか、あんた血、吸われてる」

「はあああああ!？」

驚き、慌てて雷牙が肩をしてみる。風蘭の言う通り、痛みが走った肩には白い歯が刺さっていて、少女はそこから溢れだす鮮血を、実に嬉しそうな表情をして飲んでいた。喉が渴いていたのかどうかは

知らないが、とにかく勢いがいい。全身の血液をすべて飲み干さんと言わんばかりだ。

「どうすんだよこれ！」

「吸わせとけばいいんじゃないの？ その子、すっごく嬉しそうだし。飽きたら放してくれるでしょ」

「無責任過ぎんだろ！ 俺、干からびるっつもの！」

「そうなる前に離れるよう、ちゃんと手伝ったげるわよ」

痛みの原因である少女を何とかして引き離してもらいたい雷牙であったが、顔を綻ばせ、喉を鳴らしながら自分の血を飲んでる少女を見ていたら、途端に引き離す気が失せてしまった。

風蘭の言う通り、飲むだけ飲んだら放してくれるはず。少し痛い但我慢してやるかと、雷牙はため息をついた。

「・・・飲み終わったら、ちゃんと事情話せよな」

なぜあんな人気のない場所で倒れていたのか。どうして血を吸うのか。そして、この世界の『畏』についての情報。聞きたいことなら

ば山ほどある。一刻も早く聞きたいが、この少女の気が済むまで血を吸わせてからでも遅くはない。

そんな雷牙の話を、聞いているのかいないのか。少女は頷くこともしせず、ただ黙々と血を吸い続けるだけであつた。

その光景を、離れた所で見ている人物が1人。

「……どういふ状況なんでしょうね、これ」

片手に水の入ったバケツを持った雷光は、目の前で起こっていた現状の把握に努めながら、4人の元へと歩き出した。

第94話 異種編3

水を汲み、帰ってきた雷光に風蘭が今の状況を説明し終えたのを見計らったかのように、少女が雷牙の体から離れる。吸血行為が終了のだろうか、満足そうな表情をしている。

「ふう、ごちそうさま。久しぶりだったから、ちょっと吸いすぎたかも。ごめんごめん」

あまり反省はしていないような態度で、少女は雷牙に手を合わせる。血をたらふく吸ったせいかどうかはわからないが先ほどの衰弱した様子はまるで見られず、赤い舌を出しながら謝るその姿は健康そのものと言つに他ならない。

「・・・で、俺の体がまるで鉛みてえに動かねえわけだが」

「あ、やっぱり吸い過ぎたか。当分は動けないと思うよ。本当にごめんね」

やっぱりかと言いたげに、もう1度少女が謝る。何か心当たりがあるようだった。

「雷牙、貧血じゃないの？ あんだけ血、吸われたんだからさ」

「うんにゃ、違う。ふらふらしてねえし、息切れもねえ。ただ、体が動かねえだけだ」

風蘭の言葉に、雷牙がはっきりと答える。

食事をする際にはいつも狩りを行い、猛獣と呼ばれるほど凶暴な動物と幾度となく戦ってきた雷牙は、何度も何度も深い傷を負い、その度にそこから流れ出る血によって貧血を起こしてきた。

身を持つてその症状を味わってきた雷牙が言うのだから、体が動かなくなっただことは貧血が原因ではないことは確かである。それならば、一体何が要因で体の自由が効かなくなってしまったのか。

割と深刻な顔をしながら原因を頭の中で探している雷牙に、少女が申し訳なさに言う。

「実はね、さつき血と一緒に『マリヨク』っていうのも吸ったんだけど……たぶんそれが原因」

血液と共に魔力も吸った……。それならば、雷牙の体が動かなくなっただということにも説明がいく。

魔力とは体を動かす原動力。多量に消費してしまえば雷牙のように動けなくなるし、体内にある魔力がすべて尽きてしまえば最悪死に至る。雷牙の体が動かなくなってしまったということは、それだけ

大量の魔力を吸われてしまったということだ。

それを聞いた雷牙が、訝しげに少女を見て口を開く。

「どうしてそんなことする必要があんだよ。何か事情でもあんのか？」

血液と魔力を直接口から吸うという行為は、あまりにも常識を逸脱している。輸血や回復術による間接的な魔力の補充ならば十分納得できる方法だが、少女の選択した吸血行為だけはどうしても理解できない。

「それは……」

事情を話そうと口を開きかけた少女が、雷牙の周りにいる3人を見回す。服装を見て、雰囲気を見て、敵意を抱いていない『村人』以外の人間であるということを確認し、最後に素性を尋ねる。

「一応聞いておくけど……。あなた達、こちら辺の人じゃないわよね？」

「ああ、そうだ。まあ、旅人ってやつだ。俺は雷牙」

「あたし風蘭」

「僕は雷光と言います」

「……………」

3人が名を名乗っている中、レナ1人だけが未だに驚いた顔をして挨拶をすることも忘れていた。目の色が違い、吸血行為をする少女。驚愕する理由としては十分過ぎるが、いい加減我に返ってもらわなければ話が進まない。

「…………レナさん？　大丈夫ですか？」

「…………え？　あ！　ごめん！」

雷光の声でようやくレナは我に返った。ちなみに、目の色が違うと気がついてから、今の今までずっと驚いて喋ることすらできなかった。

「私はレナ。あなたは？」

「アタシは、ルウネ。…………よかった。村の人たちじゃなくて」

少女　　ルウネの表情が和らぎ、安心したような顔を見せる。話を聞く限りでは、やはりこの辺りに村があるらしかった。雷光も水を汲みに行った際にそのことがわかっていたのか、村という単語が出た瞬間、やはりといった感じで眉を動かしていた。

雷牙たちが自分の敵ではないと確信したのか、ルウネはようやく先ほどの吸血行為の理由を話し始めた。

「アタシは、そういう体だから。定期的に血と・・・その魔力を吸わないと、動けなくなっちゃう体質なの」

「それでは、あなたがあんな人気のない所で倒れていたのは・・・」

「最近、ちょっと忙しくて・・・。血を吸うのを忘れてたの」

なるほどと、雷光は頷く。ルウネが倒れていたのは、病でもなく怪我でもなく、血を吸うことを忘れていたからであった。重い病気などではなく、ほっと胸を撫で下ろす。

体質という言葉聞いて、雷牙が口を開く。

「体質だったら、村のやつらに協力してもらえばいいんじゃないかねえのか？　事情を話せば問題ねえだろ」

雷牙の言うことには一理ある。体質であれば、自分ではどうしようもできない。自分の血を吸ったところで意味を成さないのだから。

それならば、助けを求めるしかない。自分で解決できなくとも、人に助けてもらえればそうとも限らない。特にルウネの場合ならば自分以外の血を吸えさえいいのだから、他人が助けられないということはないはずだ。

雷牙の言葉を聞いたルウネは寂しそうに笑い、そして言った。

「・・・それはできないの。アタシ、村の人たちにすごく嫌われてるから」

「嫌われてる？ 村のやつらにか？」

「うん、そう。みんなが言うんだ。薄気味悪い目をしやがって、ってさ」

確かに、ルウネのように左右の瞳の色が違うということは非常に稀である。それは数ある世界の中で幸運の象徴だと主張する異世界もあるだろうが、どうやらこの世界はルウネの目を忌み嫌うべきものとして扱っているようだった。

「アタシが生まれてきたときは、もうひどかったらしいんだ。目の色が違う子なんて不吉だって村の人たちが言って、それで一度殺されかけたんだって。その時はお父さんとお母さんがかばってくれて、何とか助かったみたい」

覚えてはないけどね、と付けたして、ルウネは笑う。雷牙たちは、悲しそうな微笑みを浮かべているルウネにかけるべき言葉が見つからなかった。口を閉じたまま、ただ黙ってルウネの話に耳を傾ける。

「でも、お父さんもお母さんも疫病で死んじゃって・・・それがおかしいの。疫病を撒いたのはお前だって言われて、村のみんなからぶたれて、石を投げられて、唾を吐かれて。本気で言ってるんだよ？ 冗談なんかじゃなくて、本気でアタシのこと殺そうとしてさ。それで逃げちゃった。だって怖いんだもん。殺されたくもなかったしさ」

懐かしむようにしてルウネは話すが、決して笑いごとなどではない。疫病などという自然なものは、人が操ることなどできるわけがない。工業や医学の発達した世界ならばともかく、このような世界ならば論外だ。

確かに、自然の災害は人々の行いの善し悪しに関係なく訪れる。悪いことなどしていないのに、なぜこんな目に遭わなければならぬのだという不満の捌け口が必要なのもわかる。だがそれを、不吉な目を生まれ持ったからという理由でルウネのような少女に向けるのは筋違いだ。ルウネは、何も悪いことなどしていないのだから。

「村の外に住むようになって、1人。それはそれで構わなかったけど、血と魔力はもらわないといけない。今まではお父さんとお母さんにもらってたけど、その2人はもういないし。しょうがないから夜に出歩いている村の人からもらったのよ。何か知らないけど、アタシ小さい頃から力も強くて足も速かったから、気絶させるくらいはわけなかった。食料も奪ったこともあったっけ」

ルウネ自身は気付いていないようだが、人体の仕組みに詳しい風蘭は、ルウネの吸血の理由の正体に何となくだが気付き始めていた。おそらくだが、ルウネは知らぬ知らぬのうちに魔力を消費し、身体を強化している。それが、ルウネが無意識に引き起こしているのか、それとも体が勝手に魔力を消費しているだけなのかはわからないが、その可能性は高い。

通常、消費された魔力は休息を取ることによって回復する。だが、それはあくまで魔力の使用をやめている状況での話。常に身体の強化をしている状態でも、魔力が回復していくという便利な機能は、今の人体には付属されてはいない。そのため、魔力を消費することを止めなければ、魔力が回復することはまずないと言っていい。

それが、ルウネの吸血行為に結びつく。強制的に身体強化を施されている状態であるルウネは、休息を取ったところで魔力の回復はない。そのため、吸血行為という名目の魔力の補充を行う必要がある。長期間吸血をしなければ、ああして倒れてしまうくらいの消費力だ。そうでもしなければ、彼女の魔力が追いつかないのだろう。

「そんな理由で、アタシは村の人の助けは借りられませんってこと。」

でも、あなた達が来てくれて本当に助かったわ。正直、もうだめか
と思ったし」

雷牙たちの暗い雰囲気を感じ取ったのか、ルウネが明るく話そうと
努める。その様子は、もう半分慣れているような感じさえした。も
う何年と殺気を感じ取り続け、罵詈雑言を浴びてきたのだ。慣れで
もしないと、精神的に持たないのだろう。

「それで、あんた達は何でこんな所に来たの？ 辺鄙な場所だし、
ここらは観光名所っていうわけでもないのにさ」

4人は顔を見合わせ、迷った挙句、本当のことを話すことにした。
身の上を明けてくれたルウネに嘘を言うのは何だかためられるし、
何よりも『罫』のことを尋ねに村に行った所で村人たちと平和的な
会話ができることすらも怪しい。それならば、目の前にいるルウネ
に聞くのが一番である。

「俺たちは色んな世界を旅しててな、その度にその世界で起こった
厄介事を解決して回ってんだ」

「世界？ じゃあ、あなた達はこの世界の人じゃないってこと？」

「ま、そういうことだ。で、この世界で何か変わったことはねえの
か？」

雷牙の突然の言葉にルウネは戸惑いを見せる。この世界とは異なる世界から来たというのだから、混乱するのは当然であり、そもそもそんな世界があることすらルウネは知らなかった。通りで自分を見て敵意を抱かなかったと納得がいった。

「変わったこと、ね」

訊かれたことに、ルウネは先ほどと同じく寂しそうに笑って答えた。

「やっぱりアタシ、かな。こんな目してる人なんてアタシ以外ないし、こんな体質もおかしいね」

「・・・生まれつきだろ、それは。俺たちの言ってるのは、もっと害のあるやつだ」

「村の人たちもしょっちゅう傷つけてるしさ。食べ物だって奪ってるし、血を吸うなんて害以外の何物でもないじゃない」

ルウネの言葉に雷牙が違うと言おうとしたが・・・言葉が出てこなかった。ルウネの言っていることは、紛れもなく正論であったからだ。

生きるためとはいえ、ルウネが人に害を与えているのは事実。夜な夜な人を襲い、血を吸い、そして食料を奪う。本人もそれは害以外の何物でもないということを認めているし、『畏』の条件にも当てはまる。

さらに、ルウネの目と体質。左右の瞳の色が違うことは非常に稀だということとはわかりきったことではあるが、体質についても非常に稀であると言わざるを得ない。存在していること自体滅多にないというのに、その2つの症例が1人の人間にいつぺんに表れるということが・・・『異常』なのだ。

もちろん、完全な偶然ということも十分あり得るが、同時に『人為的に起こされた現象』とも捉えることができる。むしろそのほうが、目の色と体質に合点がいく。ルウネがこの世界の『畏』として産み落とされ、人に害ある者として君臨させられたのならば、非常に稀な2つの症例を持ち合わせていることに筋が通る。

だが、雷牙は納得などしなかった。考えがそこまで至った時点で、考えるのを止めた。

「・・・まだ決めつけるには早すぎるだろ。害つても、そこまで悪質じゃねえし、村のやつらにも話を聞いてみないことには話にならねえ」

「兄いの言つ通りですね。それに、ルウネさんの行いは世界を狂わせるほどのものではありませんし、『畏』と決めるにはいささか早いかと」

雷牙と雷光が、もっともなことを言う。

今までの『畏』は多くの人々の命を失わせ、生の営みによって育んできたものを破壊するという悪質極まりないものであったが、ルウネがやってきたことは違う。

確かに、ルウネは村の人たちに害を与えてはいるが、何もそれは人の命を奪うような悪質なものではない。生きていくための食料と、血を奪っているだけだ。雷光も言ったように、それだけでは世界は狂わない。『畏』としては、あまりに不出来過ぎるのだ。

「とりあえず、行先は決まったね。村に行つて、情報を集める」

レナの言葉に一同が頷き、それに賛同する。

「雷光、あんたのことだから、さっきの水汲みの時に村の場所も見 てきたんでしょ？」

「ええ、その通りです。いつでも案内できますよ」

風蘭にそう雷光が返す。先ほど水汲みの帰りがやけに遅かったのは、やはり村の場所を確認しに行っていたからのようだった。もっとも、そうでなければ今まで何をやっていたのだ、という話になってしま うのだが……。

「それなら、行くか。ルウネ、お前はどつする？」

「アタシはここにいる。・・・行ったら、あなた達まで何かされる
かもしれないし」

「・・・そか」

無理に来いとは言えなかった。一緒に行ったところで、ルウネの言
う通り村人から敵意を向けられ、情報収集どころではなくなるから
だ。胸が痛むが、ルウネにはここに居てもらうのが一番だった。

雷牙たち一同はルウネに背を向け、雷光を先頭に村へと歩き出した。

第95話 異種編4

元いた大木の下から歩くこと20分。山鳥のさえずりと小川のせせらぎの音が小さくなり、雷牙たちは森の中から拓けた平地へと出た。目の前には何度も踏まれ、土だけになっていいる道が1本。その先には、小さな村が存在している。おそらく、あれがルウネを迫害している人々が住んでいるだろう村だ。

一同に緊迫した空気が流れる。迷信めいた何の確証もない戯言をほざき、ルウネに疫病の訪れを促したとしてその鬱憤をぶつける村人たちだ。まともな神経を持っているとは考えづらい。

ひよつとしたら、よそ者である自分たちも同じ目に遭うかもしれない。そうなれば情報を得ることが極端に難しくなってしまう。避けたいことではあるが、駄目なら駄目で、その時はその時だ。

「では、行きましようか」

雷光の言葉に頷き、一同は再び歩く。今いる場所から村まではそれほど遠くない。歩いて2分程度の距離だ。すぐに着く。

歩きながら、雷牙は村の外観を値踏みするようにしてじっくりと見ている。適当に点在している通常の村とは違い、一か所に密集されている家々は、木製の囲いで周囲を覆われていた。もっとも、その囲いが外敵から身を守るためか、それともルウネの侵入を拒むためかわからなかったが……。

その密集度は、村というよりも集落に近いものがある。なぜここまでして一か所にまとまっているのか疑問に思ったが、それも追々村人に尋ねていけばいいと、とりあえず雷牙は考えることを止めた。

「・・・一見、平和そうな村ではありませんね」

村の中を見た雷光が、そう呟く。鍬などの農具を持ち、せつせと囲いの中にある畑の元へと向かう大人たちと、鮮やかな色をしている風車を持って走っていく子供たち。

傍から見る限りでは、ルウネのような少女を異端として追い出した風には見えない。ルウネが嘘を言っているのではないかと思えるくらいだ。

「でも、私たちが行ったらどうなるかはわからないよ」

レナが真剣な表情でそう言う。

今は平和そうに見えても、余所者である自分たちを見たら態度を変え、敵意を向けてくるかもしれないということは十分あり得る話だ。あくまで可能性の1つであると言うだけの話ではあるが、そのことを頭に入れても損ではない。

歩き、一同は村の前まで辿り着く。遠くからはそれほど大きく見えなかった村の外側を覆っている囲いは予想以上に大きく、魔力によ

る身体強化を施しても飛び越えられるかわからない高さだった。

その中を歩いていった村人の1人が、雷牙たちの来訪に気がつく。見慣れない服装と顔で、旅人であることに気が付き、驚いたように言う。

「お客なんて珍しいねえ。わざわざこんな所まで・・・何か用があるのかい？」

思った以上に好意的に接してきたことに、4人は驚かずにいられない。ルウネに対して鬼のような印象を持ち合わせていたが、それを微塵も感じさせないほどの人当たりの良さだった。

「あ、ああ。ちょっと尋ねたいことがあるんだけどよ」

少し戸惑いながらも、雷牙が村人にそう切り出す。

「尋ねたいこと？」

「そうだ。ここらで、最近変わったことはねえか？ 何でもいいんだ」

「変わったこと、ね」

雷牙の言葉に男は少しだけ考え・・・そして先ほどとは違う、憎悪に塗れた表情を浮かべた。その豹変ぶりに、雷牙たちは思わず驚いてしまう。

「・・・この村の近くにな、化け物がいるんだ」

『化け物』という、実にわかりやすい憎悪の対象。男が話す前に、一同はその『化け物』の正体は何なのか感付いてしまう。それ以上先を聞きたくなどはなかったが、構うことなく男は続けた。

「左右の目の色が違うっていう薄気味悪い小娘でな、ここらを縄張りにして夜に徘徊するんだ。それだけならまだいい。あいつ、このやつらを襲うんだ。後ろから殴られて、食料を奪われる。殴られたやつは、何の抵抗もできないままその化け物に血を吸われるのさ。信じられるか？ 気持ち悪くてありゃしねえ」

一同が予想していた通り、男の言葉はルウネのことだった。食料の強奪に、吸血行為。ルウネの証言と一致するし、何よりも話している男の憎しみに溢れた表情がそれを証明している。

確かにそれは事実で、被害に遭っている村人からすれば厄介の極みなのだろう。だが、言い方がどうにも気に入らない。目の前の男の言い方はまるで、ルウネが人ではなく獣であるかのようなようだ。

話を聞いていた4人は同じように苛立ちの火を心の中へ灯していた

が、中でもその日が強いのは雷牙だった。平然と言葉を紡ぐ男を睨みつけ、今にも殴りかからんばかりに拳を握りしめている。短気で直情的である雷牙の性格が、その行為に拍車をかけているようであった。

そのことに気がつかない男は、日ごろの鬱憤をぶちまけるように平気に話す。

「忌々しい……。俺たちだって早いところ駆除したいんだが、あいつ逃げ足だけは速いんだよ。何度もあいつを狩りに出たこともあったんだが……。うまくいかねえ。傷を負わせても、翌日になればけろっとしてまた食料を奪いに来るんだ。俺たちに迷惑ばかりかけやがって……。生きてる価値もねえやつが。死んじまえばいいのよ」

雷牙はもう限界であった。ルウネがわざわざそんなことをしているのは、この村から追い出されたからだ。原因は自分たちにあるというのにそれを自覚せず、一方的にルウネに罪をなすりつけるような真似をしている目の前の男が許せなかった。

目と体質のことを気味が悪いと散々罵り、疫病を振り撒いたなどという根拠のない馬鹿げた話の濡れ衣を着せて村から追い出し、拳句の果てには死ねとまで言う。こんなふざけた話があるものか。あつていいわけがない。

「……………」

このままでは怒りが収まらない。この男を半殺しにしなければ、絶対に収まらない。
握りしめていた拳を振るおうと雷牙は力を込め、ふざけたことをめかしている男を殴ろうとする。

だがその瞬間、頬に強い衝撃が走った。頭に血を上っていた雷牙はその衝撃で正気に戻り、振り上げかけた拳を元の位置に戻す。

衝撃の原因は、雷牙の隣にいる雷光。雷牙の動向に細心の注意を払い、暴力を振るう前に頬を殴り、正気に戻したのだ。

雷牙の気持ちはわからないでもないが、ここで暴れられては面倒なことになる。それに、いくら腹が立つとはいえ、攻撃をしてこない一般人に暴力を振るうなどということはあってはならない。それでは、『畏』と同じになってしまう。

「？ 何だ？ 風が……。あ、あんたどうしたんだ？ 頬が……」

雷光の拳の速度は素人である男に捉えられるものではなく、いきなり風が吹き、雷牙の頬が少し腫れあがっているようにしか見えない。何が起こったかもわからず、男は雷牙の心配をする。

「……大丈夫だ、何でもねえよ」

「？ それならいいんだけど・・・」

口元に滲んだ血を手の甲で拭い、雷牙は腕を組む。

苛立ちはもうない。先ほどの雷光の拳で目が覚めたようだった。あのまま雷光が殴らなければ、冗談抜きで目の前の男を殺してしまっただかもしれない。

「実に興味深い話ですね。もう少し詳しくお話を聞きたいのですが、よろしいですか？」

雷光が笑顔を浮かべて男にそう尋ねる。口元こそ愛想よくしてはいないものの、目はまったく笑っていない。雷牙と同じように、怒りの炎をちらちらと灯してはいるが、それを悟らせまいと必死になって笑顔を作る。

男はその笑顔を、被害に遭っている自分たちの境遇を理解してくれたものだと思っただろう。憎しみに溢れた表情を一変させ、喜びの表情を浮かべる。

「ええええ、もちろんです。ただ、そのことは私よりも長のほうがよっぽど詳しくてね。よけりゃ、ご案内しますよ」

「そうですね。それならばご厚意に甘えさせていただきます」

「それでは、こちらへどうぞ」

先導する男の後ろに一同が続く。他の村人たちも雷牙たちの存在に気がついたのか、興味深い視線を送ってきており、4人はその視線を受けながら歩いた。

雷光がこの胸の悪い話を、わざわざ詳しく聞きたがったのには理由がある。ルウネがこの世界の『畏』ではないということを確認するためだ。

ルウネがこの世界の『畏』であるとすれば、神の使いの誰かが類稀な目と体質を意図的に与えたということになる。それら自体は生まれつきであるから、神の使いはルウネの両親に何かしたという可能性が高い。つまり、ルウネの両親にその現場を誰かが見ていれば、ルウネがこの世界の『畏』であるという何よりの証拠となる。

逆を言うなれば、そういった事実がなければルウネの目と体質は、本当に偶然が重なったことによるものということになり、この世界の『畏』でないということになる。

ルウネが『畏』ではないということを証明したいがための聞き込みであるというのに、肝心の雷牙が問題を起こしてしまっては元も子もない。それが原因で情報を集める行為ができなくなってしまえば、ルウネが『畏』であることも証明できなくなってしまう。

「……気持ちはわかりますけど、あそこで暴れたら台無しですよ、兄い」

男と距離を取り、雷光が頬を赤く腫らした雷牙にそう言う。

「……すまねえ」

冷静になった雷牙が、先ほどの愚行を詫びる。あのまま怒りに任せて拳を振るえば確かに気は晴れたかもしれないが、その場合、男は最悪死ぬかもしれない。危うく人を殺してしまうところだったと、雷牙は心の内で反省する。

「でも、雷牙が先に動かなかつたら、私たちも同じことしてたかもしれないね」

レナが後ろからそんなことを言う。確かに、ルウネのことをあそこまで言われて怒りを覚えない者など、この中にはいかなかった。雷牙が先に手を出して雷光に殴られたからこそ、かえってその怒りを鎮めることができたというところだろうか。

「……そだね。雷光だって、雷牙に八つ当たりしてたし」

「八つ当たり？」

風蘭の思いがけない言葉に、レナが驚く。

「そ、八つ当たり。でしょ、雷光」

「・・・お見通しでしたか、敵いませんね」

照れたように、雷光が頭を掻く。もちろん、殴ったのは雷牙の怒りを鎮めるためにでもあるが、その内にあるやり場のない怒りを鎮めるためでもあったということを、風蘭はしっかりと見抜いていた。

「なんだよ、怒ってんの俺だけじゃなかったんじゃないか」

口を尖らせながら、雷牙が言う。先ほどの怒りによる刺々しさは、もうどこかへ行ってしまったようだった。

「まあまあ。結果的に兄いの怒りが鎮まったんですから、よしとしようじゃないですか」

「ったくよ」

何だか納得のいかない雷牙であったが、雷光に殴られたおかげで怒りが鎮まったことは事実であるため、それ以上は何も言わなかった。

「あんたら、あそこが長の家だよ」

雷牙たちのほうを振り返り、周りの家よりも少しだけ大きい家を指さし、男が言う。

あの家の中にいる長がいる。ルウネがこの世界の『畏』であるか否か、それを知っているかもしれない人物が、この家の中に居る。4人が全員真剣な表情を浮かべ、気を引き締める。

だが、同時に不安も覚える。もしも……。もしも神の使いの誰かが、ルウネの両親に何かの細工を施し、その結果生まれたのがルウネだとしたら、その時はどうすればいいのだろうか。

今まで戦ってきたように、ルウネとも戦わなければいけないのだろうか。

そして、ルウネを……。

ひ……そんなときや、そんな時か

嫌な結果にたどり着く前に、雷牙が考えることを止める。今そんなことを考えていても仕方がない。その時になったら考えれば済むことだ。

「長、客人です。何でも、あの化け物のことを詳しく訊きたいらしいんですけど」

家の戸越しに、男が中の長に話しかける。

「・・・入ってもらいなさい」

年季の入ったしわがれた長の了承の音が、家の中から聞こえた。男がそのことに頷き、雷牙たちのほうを向いて家の戸を開ける。その中へと、一同は入っていった。

第96話 異種編5

周りの家よりも一回り大きかった家の中も外見通り広く、畑で使った後であるう土のついた農具や日持ちのする食料、寝床やテーブルなどを置いてもまだ人が住むには広すぎるほどだった。

もちろん、長の家族が何人いるかもわからないし、それが全員入ってしまえば一概にそう言うことは言えないのだが、ごく普通の大きさの家で育ってきた4人に見ればかなりの広さであることには変わりはない。

その中に居たのが、1人の老人。その人物がこの集落の長だということは、誰の目から見ても明らかだった。年を感じさせない鋭い眼光と、威厳のある雰囲気それを肯定している。

「さて、あの化け物のことを聞きたいとのことでしたが・・・その前に1つ尋ねたい。そのことをどこでお聞きなすったのですかな？」

明らかに訝しんでいる様子だった。先ほどの男は快く話してくれたが、やはり見たことのない服装をした若い4人組が、こんな辺鄙な所へやってきて、村を荒らしている人物のことを聞きたがるとなれば怪しまれても仕方がない。

「ええ、実は私たち旅をしております、町に立ち寄ったんです。そしたら、少し妙な噂が立ってましてね。興味が湧いてきたので、ぜひお話を伺いたいと思ってここへ来たという次第です」

情報を得るべき相手だ。疑心と警戒心を与えてはならない。

それをわかっているのか、雷光は咄嗟にそんな出まかせを言い出した。当然、町なんて通ってきてなどいないし、噂だって聞いていない。完全な嘘だった。

その嘘を、雷光はごく自然に、一切の迷いも躊躇もなく、あたかも本当であるかのように長へと言つてのけた。よくもまあ、そこまで口が回るものだと感服せざるを得ない。

「町か・・・ふむ、そうかそうか。それならば、主等は町のほうからやってきたのか」

雷光の言葉を信じたのか、長は誰にするでもなく1人で何度も頷いた。その際に、町か、そうか町か、と何度か呟いていたが、それは何を意味するのはわからない。

「とりあえず、座らなければ話はできぬな。どれ、適当にくつろいでくだされ」

そう言つて、長が広い床へ座るよう4人に促しながら、自分もまた床へと腰を下ろした。

4人は顔を見合わせたか、長の言う通り立ったままでは話がしづらいということはあるか。少し遠慮しながらも、4人は床へ座った。

「さて、あの化け物のことだが・・・その何を聞きたいのですかな？ あらかたのことは、あの男から聞かれたものだと思いますが」

あの男というのは、最初にルウネのことを聞き、そして長である目の前の老人の家まで案内してくれた、あの男のことだろう。

確かにあらかた聞いたが、それだけではこの世界の『罫』だということに結びつけるには不十分だった。だから、ここで長に聞くべきことは1つ。ルウネの出生前の事。

「あなたの言う、その化け物が生まれる前のことを聞かせてください。生まれた後と、やってきたことはすでに聞きましたので」

「生まれる前、ですか。ふむ・・・。ということは、あの化け物がこの村から生まれたということも、町で？」

「ええ、そうです。それで、どうですか。その時、何か変わったこととはありませんでしたか？」

「変わったこと・・・。そうですね・・・。」

腕を組み、長は唸り始める。

ルウネが生まれる前の話となれば、おおよそ20年ほど前の話になる。それほど昔にあった出来事ならば、確かに思い出すことは少し難しいだろう。

だが、覚えているはず。思い出せないだけで、しっかりと覚えてい
るはずだ。ずっと唸っているのも、頭のどこかに引つかかっている
記憶を何とかして取り出そうとしている何よりの証拠。それがルウ
ネに関わる事柄であるのならば、なおさら忘れていくわけがない。

「う、む。すまぬが、うまく思い出せん。何かあったような気はす
るんじゃないかな……。昔のことを話していればいずれ思い出せると
思うが……。それでもよいかの？」

確かに忘れてはいなかったようだが、思い出すということまで記憶
を引き出せなかったらしい。

雷光が睨んだ通り、ルウネが生まれる前に何かあったことは間違
い。それが良いことなのか、果たして悪いことなのかはまだ判別
できないが、聞く一択しか選択肢はない。

「ええ、お願いします。他の事にも興味があるので」

「そうか……。うむ」

雷光に促されて、長は腕組みを崩さずに語り始めた。鋭かった眼光は少しだけ和らぎ、憎悪の念さえも弱まったような気がする。

「今こそこうして密集はしているが・・・昔はそこらに家が点在しているような村だった。この広い土地を、農たちは持て余しているの、個人がいくら広く領地を取ってもまだ余るくらいじゃった」

ここへ来るまでに見た、美しい自然の風景。そのすべてが、この村の人の物であったことに、一同は純粹な驚きを見せる。

広いどころではない。下手をすれば国を2つや3つほど作れるほどの、広大な土地だ。この集落に住んでいる村人のような少ない人数では、分けたところで使い道もないのだろう。人数があつてこそその土地の広さだ。少ない人数には、広い土地など扱えるわけもない。

「広い土地の使い方知らぬ我々は、ただ生きることしかできんかった。ただ食べ物を作り、外敵から身を守り、そして子を成していた。それで・・・」

その続きを話そうとして、長は口をつぐむ。その様子から、続きはあまり口にしたくないようなことだということも悟ったが、長は構うことなくゆっくりと口を開いて再び語り始める。

「それで、そんな日々を送っていたある日のことだ。1組の夫婦が

誕生した。男のほうは、村で一番の狩りの名人でな。どんな飢饉が迫っても、必ず1匹は獲物を取ってくる村の命綱じゃった。相手は、村一の美人だという噂の絶えない女じゃった。気立てもよくて、よく笑う・・・自慢の娘じゃった」

一同が、息を呑んだ。

今、なぜ長がその夫婦の話をしたのか。そして、なぜそんなに言いづらそうに話すのか。あくまで推測ではあるが、ほぼ確実と言っていいはずだ。おそらく、その夫婦はルウネの・・・。

「よくおしどり夫婦だと言われた。羨ましい、とな。見ているだけで、こつちが幸せになるような、そんな仲だった。村の若い者たちもそれを見てなあ、自分らも同じようにと次々と夫婦の間柄を作っていた。子宝にも恵まれて、村は一気に賑やかになったのを昨日のように覚えとるよ。だが・・・肝心な娘夫婦の間にはなかなか子供がでななんだ。周りの子供がみんな大きくなっていくのを、ただ寂しそうに笑って見とるだけだった」

1つ1つ思い出しながら、長は語り続ける。

「だが、その夫婦の間に念願の子供ができた。娘はいつまでも嬉しそうに腹を撫でてな、夫はいつも以上に狩りを頑張つとった。村の人間もそれは喜んでな、祭りごとを催したりもしたもんだ。今まで何度も子供ができて喜ぶ夫婦というものを見てきたが、あれほど喜んだ夫婦は見たことがなかった。

月日が経って、娘の腹は大きくなっていった。つわりがひどければみんなが心配して食い物をたくさん持つてきて、赤子が腹を蹴つたとなれば村人が集まって1人残らず娘に声をかけた。もう、娘夫婦の赤子は村の一員も同然だった。早く産まれて来いと願うのは、夫婦だけでなく村の願いでもあったよ。

そんなある日、娘が陣痛を覚えた。村の医者が立ち合つての出産となった。村の者たちはこぞつて見守りたいと口にしたが・・・さすがにそれだけとは、医者が許さんかった。出産の立ち合いに許されたのは、夫と、医者と、そして儂だけだった。

出産が始まつて、娘は長い時間痛みで苦しんでいた。赤子はなかなか産まれてこず、時間もどんどん経過していった。あまりの痛みで気絶し、そして痛みで目が覚め、そしてまた気絶する。それを、幾度となく繰り返し返した。目を覆いたくなる、ひどい光景だった。

つらく、逃げ出したくなる光景だったが、儂らはそれをせず、ただ見守つた。娘があんなに苦しんでいるのに、痛みも何も無い儂らがその場から逃げ出すのは、あまりにも無責任に思えたからな。目を逸らすことも許されず、その場から逃げ出すこともできず、儂と娘の夫は声をかけ、見守るだけだった。

そんな苦しい時間を娘は耐え、そして産声が上がった。悪夢のような時間は終わったのだと、儂らは思った。これで娘の苦しむ顔をもう見なくて済む、とな。だが妙なことに、赤子を取り上げた医者の手が止まっていた。いつもならば、まず先に夫と妻に赤子を見せるはずなのに、その日の医者だけは違っていた。おかしく思つてな、儂は医者の手元の赤子を覗いた。そして・・・驚愕した。医者が固まっているのを、初めて理解したよ。その赤子は、左右で目の色が

違つとつたからな」

昔を懐かしむように話していた長が、顔を少し歪める。

「赤色の瞳は夫、黒色の瞳は娘譲りの色だった。医者と僕は絶句して物が言えなかった。赤子の愛らしさとは裏腹に、その瞳はどこまでも薄気味悪かった。まさに、呪われた瞳だった。じつと見ていると吸いこまれて、そのままどこか暗い場所へと引き込まれるような感じがしてならなかった。

僕と医者の様子に気がついたのだろうか。夫婦は声をかけてきよった。どうした、とな。僕と医者は何と言つていいかわからず、黙つて腕の中の赤子を渡した。

僕は、娘が腹を痛めて生んだ子に絶望する2人の姿を見たくなかった。娘が苦しんでいる姿は見えていられたのに、どうしても嘆き悲しむ姿だけは見たくなかった。

だが、その夫婦は驚きもせず、気味悪がりもせず、ただ泣きながら喜んでいた。瞳の色のことなど、まるで目に入ってなどいないかのように。娘は赤子を大事に抱き、夫は娘と赤子を守るように抱いていた。2人は赤子をまるで天使のように思っていたかもしれないが、傍からみる分には、羊の皮をかぶった悪魔が2人の幸せそうな顔を、醜い笑顔で見つめているようにしか見えなかった」

長の表情が、憎悪の念で完全に歪む。

村に入って最初に会ったあの男と同じ・・・いや、ルウネの母親の父としてそれ以上の憎しみだった。忌々しく、そしてできることならこの手で殺してやりたいという心の声が、ひしひしと伝わってくる。

「娘の子が産まれたということは瞬く間に村全体に広がった。村の人間の誰もが、夫婦の間に来た子供を誰よりも早く目にしようとこぞって家に押しかけた。誰もが期待し、そして希望となるべき子を見ようと夢中だった。

だが・・・娘の子となるべき『物』を見た瞬間、閉口し、そして気味悪さを覚えた。村の人間は、1人残らず産まれてきた悪魔におぞましさを感じたのだ。呪われた瞳を持つ赤子を、もはや誰も人と認めようとはしなかった。悪魔のような子ではなく、悪魔そのものだ。だが、夫婦はそんな声など気にしなかった。これ以上愛すべき存在があるものかと言わんばかりに赤子を可愛がった。その姿に、儂を含めた村の連中が唾然としてな。なぜその呪われた子をそこまで可愛がるのか不思議で仕方がなかった。

あまりの可愛がりように村の者たちはもう何も言わなかった。瞳こそ薄気味悪く不吉だが、それ以外は何も変わらなかったことがない赤子だ。放っておけば何も不吉なことは起こらぬだろうと、村人たちは納得したようだった」

そのときはな、と長は言った。

「産まれてきた子が化け物と呼ばれるようになった出来事がある。ある日、用があつて夫婦の家を訪ねた男が、信じらぬものを見たという。それは、幼き少女が自らの母親である娘の首筋に噛みついてる様だった。すぐさま娘と悪魔を引き離そうとしたが、それを夫に止められたという。」

夫の説明によるならば、その子は定期的に人の血を吸わなければ生きてゆけぬのだそうだ。そう言った夫の首筋にも、何やら噛んだような赤い痕が残っていたらしい。

男は口止めをされたらしいが、それはあつという間に村に広がった。血を吸わなければ生きてゆけぬ存在・・・化け物だ。瞳の色が違うこともある。そいつはもはや我々とは異種となる存在だ。

頼りになり、何度も村を飢餓から救ってきた夫と、誰からも好かれていた娘だ。産まれてきた悪魔から何としてでも救わねばと村の皆は立ち上がり、何とか誕生した化け物を葬ろうと夫婦の家へと集まった。篝火を燃やし、松明を持ち、武器となる農具をかき集め、いつでも殺せるよう準備を万全にしての実行だった。

いざ家に入り込もうとして・・・それを夫婦に止められた。村人たちは、なぜ止める、お前たちを守るためだ、と主張したが、夫婦はこう返した。

私たちの娘を殺したければ、まずは私たちの目の前でお前たちの子を自分の手で殺してみせろ、それが出来たら殺しても構わない、とな。

言われた村人たちは何も言い返すことができず、引き返すしかなかった」

自分の子を想う強い気持ちは、どうやらルウネの両親も村の人間も同じだったらしい。

仮に村の人間の誰かが自らの子を殺したとなれば、迫害の対象はルウネではなくその親になっただろう。自身の子を殺す者など、もはや人間ではなく『化け物』なのだから。

「それから幾度となくその化け物を殺そうとしたが・・・どうしても夫婦が揃って邪魔をする。夫婦が2人とも家から出るということではなかったし、あの悪魔も毛嫌いされておったから外を1人で出歩くということもなかったから、どうやっても殺すことなどできなかった。

子を想う気持ちは強いことは認めざるを得なかったが、夫婦が必死になって守っているものは『化け物』だ。それをいくら説明しても、夫婦は聞く耳を持たなかった。八方塞となった、もう奴に対してこの世から葬る手段は断たれてしまった。心苦しかった。2人を救う術がなくなったのだからな」

何が救う術だと、雷牙が心の中で悪態をついた。愛する子を懸命に守る親が、お前たちの目にはそんな風に映るのかと、腹立たしさを覚えずにはいられない。

その思いは雷牙だけではなく、他の3人も同じようだった。真面目な顔をして長話を聞いているようで、その心は苛立っていることが、鈍感な雷牙でもしっかりと理解できた。雷光に関して言えば、

作っていた笑みも消え失せ、内から湧き出てくる怒りを、歯を食いしばって耐えている。相手の機嫌を損ねることだけは避けていた雷光がだ。

それを見て、雷牙はかえって冷静になることができた。先ほどの自分のように怒りで我を忘れ、目の前の長に殴りかかってしまわないとも限らない。万が一のためにも、自分は冷静でなければならないと、雷牙は自身に言い聞かせた。

「何があつてからでは遅いと、何度も何度も思った。村の連中も同じ考えだったようだな、何とかして手を打たなければならぬと知恵を出し合ったのだが・・・どうにもうまくいかん。強硬策に出ようと考えたこともあつたが、取り止めた。いくらあの化け物を愛し続けようが、あの夫婦はまだ村人から好かれておつたからな。闇討ちであるの化け物を殺そうが、それで夫婦からの信頼をなくしてしまえば意味がない。儂らの目的はあの化け物から夫婦を解放することであり、夫婦から嫌われるということではなかつたからだ。だから、儂らはそのとき、夫婦が化け物に愛を注いでいる光景を、ただ指をくわえて見ることしかできんかつた」

そして、ついに最悪の時がやってきた、と。

長が重々しく口を開いた。

第97話 異種編6

「どうにかしてあの化け物を葬ろうと考えに考えていた日だったかと思う。1人、僕はここでずっとそれを考えていた。身動きせず、腕を組み、ただじっとしていた。不思議なことに、この閑静な村はいつも以上に静かだった。

その静けさを打ち破るようにして戸を開け、村人の1人が僕の家へと血相を抱えて飛び込んできた。何かと尋ねてみて・・・僕は驚愕した。疫病が蔓延したと、そう言っておった。

唐突な出来事で頭が回っていないが、僕は家を飛び出して走った。娘夫婦がその病にかかっておらんか、気が気でなかった。全力で走って、息が切れても構わず、とにかく2人が無事であることを願い続けた」

当然のことながら、長が心配している対象に、孫という存在であるルウネは入っていない。娘夫婦に向けているその想いを、なぜ少しでもルウネに分けてやれないのだと思わずにはいられなかった。

「必死になつてたどり着いた娘夫婦の家の戸を開けて、僕はその場に座り込んでしまった。僕の目に飛び込んできたのは、床に伏している娘と夫の姿だった。苦しそうに呼吸を繰り返してな。お互い手を握り合つて、そのつらさを紛らわしていた。

その手の下では、実の両親が病で苦しんでいるというのに、呑気に眠る化け物の姿があった。そこでふと思ったのだ。なぜ両親が病に

かかったというのに、まだ抵抗力のない幼子が病にかかっていないのかと。それを考えようとして・・・すぐに理解した。この疫病は、こいつが振り撒いたのだとな」

いくらなんでも乱暴な決めつけ方だ。大体、長ともあるうものが、疫病という天災を人為的に引き起こすことなどできるわけがないことくらいわかっていないはずがない。

おそらく、これを好機と捉えたのだろう。ルウネは今まで村に害悪を与えない、不吉で不気味なだけの存在だったが、疫病を撒いたと村全体が判断さえすれば、いくら子を大切に想う両親も諦めざるを得ない、という考えらしい。そうすれば、ルウネの両親の合意を得て、目的通りルウネを抹殺し、両親の信頼もなくなるらない。

考えられてはいるが・・・汚い手だ。これ以上病原菌を撒かれ、村人の命が失われてもいいのかという脅し以外の何物でもない。娘の命とこの集落に住む村人の命を天秤にかけさせる、実にえげつない手だ。

「迷いなどはなかった。すぐに化け物を葬ろうと、僕は土足で家へと入った。眠りこけている化け物へと近づき、その首に手をかけたとき・・・ふと力が抜けたのだ。一瞬なぜかわからなかったが、すぐに理解した。僕もこの化け物の振り撒いた疫病にかかったのだとな。呼吸が苦しくなり、眩暈がして、体温が急激に上がるのを感じた。情けない話だが、元凶を目の当たりにして何もできなかった。

それから死ぬ物狂いで自宅へと帰り、ただただ体を休めた。化け物を殺すどころの話ではなかった。あれだけ死ぬ思いをしたのは初

めてだった。体がまるで燃え上がったかのように熱くなって、何度も何度も嘔吐した。息をするのも苦しくて、意識を手放したこともあった。辺りは静かで、村人の声はちつともせんかった。皆、儂と同じように苦しんでいることは容易く想像できたわ。

忌々しくて、仕方がなかった。せつかくの好機なのに動けない、これほど屈辱的なことはなかった。もう少しのところだったのにと、後悔しながらの闘病だった。が、その悔しさが儂を支えた。貴様が撒いた疫病なんぞに負けてたまるか、これを取り越えたら、絶対に殺してやると、そう思いながら床に伏しておった。

苦しみ続け、ろくに食い物も口にできない、地獄なような長い日々も終わりを告げ、儂は疫病からようやく解放された。熱も引き、体のだるさもなくなって、ようやくあの化け物の呪いを断ち切ったのだと確信した。

体が満足に動くようになって、儂はまず一番に娘夫婦の家へと向かった。安否はいかなものか、不安だった。家へと向かう途中、儂と同じように疫病から解放され、外を出歩いている連中と出会った話を聞くと、どうやら家々を歩き回って疫病による被害を見て回っているとのことだった。被害は相当ひどいものだったらしい。分が死に絶え、もう半分はまだ床に入って苦しんだらという話だった。動ける連中も、そこまで大人数ではなかったしな。いかに奴の振り撒いた疫病が凄まじいかを物語っていたよ。

連中に、疫病と化け物の関連性を言ったら、途端に怒りだしてな。一刻も早くその化け物を駆除せねばと、そう口にしておった。が、駆除よりも先にやるべきことは夫婦の安否を確認することだ。連中も怒りを鎮めてそれに賛同し、儂らは夫婦の家へと向かった。

家に到着し、戸を開けて・・・儂らの目に入ってきたのは、前にここを訪れたときよりも、さらにひどいものだった。苦しみのあまりに激しく呼吸をしているはずの2人はすでに息をしておらず、村を半壊させたとも言える疫病を振り撒いた当の本人は、2人の死に気付かず、死してなお握り合っている夫婦の手の下で、体を縮めて寝こけておった。

夫婦が死んだ悲しみよりも、悪魔から救うことのできなかつた後悔よりも、儂は怒りを覚えた。自分が殺したくせに、散々苦しめたくせに、2人の間で安心しきつたような顔で眠りにについている化け物を、どうしても許せんかった。

家上がり込んで、儂は眠っているその化け物の顔面を蹴り飛ばした。首の骨を折るつもりで蹴ったのだが、その化け物は驚いたように目を覚まし、泣き出しただけだった。子供のような見た目とは裏腹に打たれ強く、そして丈夫だった。まさしく化け物だった。

それを皮切りに、村の者たちも儂と同様、家上がり込んで、その化け物を取り囲むような形になり、踏みつけ、罵声を浴びせ、叩き伏せ、そして殺そうとした。心の底で、もしかしたら化け物が反撃をしてくるのではないかと思っただが、そんなことはなかった。ただ亀のように丸まり、頭を守るように押さえ、痛い痛い、そう泣き叫ぶだけだった。

いい気味だった。今まで、どれだけお前に苦しめられてきたと思ってるのだと、儂らは怒りを言葉にし、それをその化け物に浴びせ続けた。容赦などしなかった。殺す気で、本気で蹴り続けた」

心底、救いようのない話である。当人であるルウネは、両親とただ

平凡に暮らしてきただけであるというのに、乱暴な言いがかりをつけられ、ただ暴力を受ける。

何が悪いのかもわからず、自分が何をしたのかもわからない。ただ襲ってくる痛みに耐えることしか、幼いルウネにはできなかったのだらう。

大人たちが小さな子供を取り囲んで暴力を振るうだけでも非道な話であるというのに、その暴力が行き場のない怒りの矛先という、何とも言えない理不尽な理由からくるものだというのがならばなおさらだ。

本当に気でも違っているのではないかと、そう思わずにはいられない所業だった。

「だが、その化け物は死なんかかった。いくら蹴っても泣き声は止まず、弱る気配など微塵も見せんかった。さすがにこれでは死なぬのではないかと不安を覚えてな、焼き殺そうと外へ連れ出したのだ。ずっと喚いていてたからな、疲れて身動きなど取れないと思って特に縛りもせず、ただ外へと放り出した。

だが、まだやつは動くことができた。あれだけ痛みつけたというのに、獣のように素早く動き、村から逃げ出した。もちろん、村の者総出で探し出そうとしたが、どこに行ったのか皆目見当もつかない。広大なこの土地が、見事にやつの味方となっていた。完全に姿をくらましてしまって、儂らはもうどうすることもできなかった。

始末しなければならぬことは確かだったが、探し出せぬのならば仕方がない。あれだけ痛めつけたのだから、おそらくもう2度と村には近寄らないだらうと、儂らは搜索を断念した。災厄の芽は摘み

取ることができなかつたが、先の疫病をばら撒かれるような事態にはもうならぬだろうと、儂らは思っておった」

あとは今の通りだ、と。

長はそう締めくくって話を終えた。

「もう2度と村には近寄らなかつたけれど、その代わり村の外で襲われるようになった、と？」

雷光が確認するかのように長に尋ねる。

「ああ。村の中にも畑はあるが、そこから取れる食料などたかが知れている。大雨で村が水没するのを防ぐために、川から離れたところに集落を立てたものだから、水をやるのにも一苦労だしな。どうしても、外に畑を作らざるを得なかつたのを見計らつたかのように食料を奪われ、血を吸われる。」

それを防ごうと集団で行動しても無駄だった。集団の中の人間を早技で気絶させ、拉致される。懸命に追いかけたが決して追いつけず、何もできずに村の人間を拉致したその化け物の背中を見つめるだけだった。

意外だったのは、拉致された人間が殺されなかつたということか。一通り探し回った後、攫われた者は必ず村の近くに横たわって気絶していた。その首筋には歯型が残っている以外は、特に痛めつけられた形跡もないのが驚きだった。初めて拉致されたときは、もうそ

の者は帰ってこないのだと諦めておったからな。

その後、幾度となく村の者が攫われたが、1人も殺されず帰ってきておる。・・・忌々しい。一体何のつもりなのだ、あの化け物は「

吐き捨てるようにそう言って、顔をより一層歪める。

ルウネが村人を殺さないということは、確かに化け物と定義している村の人たちから言えばおかしいのだろう。血を吸うのに、なぜ殺さないのか。ひょっとして、何かを企んでいるのではないのか。村人たちはそう思い込み、一層ルウネへの憎しみを強める。

そうして、悪循環は続いて行く。

当のルウネはただ生きるためだけに食料を強奪し、吸血しているで、人を傷つけるつもりはさらさらないとしても、村人たちはどうしても悪いほうに考えがいつてしまう。

目の色が違うルウネを、薄気味悪い悪魔のようだと陰口を言うのも。吸血しなければ生きていけない体質を、化け物と定義付ける証拠だとするのにも。

災害であるはずの疫病を、ルウネがばら撒いたのだと叫ぶのも。

そうやってずっと悪い方向に進んで行ってしまふ。

希望の星となるはずだった赤ん坊

ルウネ。

誰しもが産まれてくることを望み、楽しみにしてきたはずなのに、誕生したのは誰もが予想しなかった『化け物』。

望んでいない目と体質を持ち合わせてしまったことで皆から忌み嫌われ、そして四六時中村人から災厄の種を摘もうと狙われ続ける。

何のために生きているのか。

どうして自分は他の人たちと違うのか。

それを、今までどれだけ思ってきたのだろう。

どれだけ、自分の目と体質を恨んできたのだろう。

それを思うと、先ほどから沸き上がってくる、ルウネを無下に扱ってきた村人たちへの怒りよりも、一同は虚しさと悲しさを覚えてしまふ。

「これにて、化け物にまつわる話は終わりだ。あとは主等が知っている通り、今もあの化け物は村の脅威となっている。一刻も早く駆除したいのだが、なかなかうまくいかないというのが現状でな」

「……なるほど。貴重なお話を、どうもありがとうございます」

あくまで笑顔はを崩さず、雷光は長にそう言った。

雷光の胸の内の感情と表情は、もちろん噛み合っただけではない。感情をそのまま表に出せば、目の前の長はたちまち恐怖に戦ってしまっただろうから。

「……ん、む。そういえば、1つ思い出したことがあった」

「思い出したこと、ですか」

雷光が、目を見開いて長の言葉を繰り返す。

もともと、雷牙たちはルウネの誕生のことを訊きに来たわけではなく、ルウネが産まれる前に『何か妙なことが起きなかったか』を訊きに来たのだ。

言ってみれば、今までの話は前座に過ぎない。大事なのは、次だ。それが、ルウネがこの世界の罫ではないということに裏付ける重要な証言になるかもしれない。

「それで、その思い出したこと、とは？」

答えを早く知りたくて、雷光が長の言葉を急かす。

「ああ。娘夫婦には、なかなか子が宿らなかつたということはあるとき言ったな？」

「ええ」

「いつになつても子が宿らず、半ば2人が諦めかけておつたときじやつた。主等と同じように、ある日突然こんな辺鄙なところへやつてきた、黒いマントを羽織つた1人の男がおつてな。その男に、世間話がてらに娘夫婦の問題を相談したのだ。」

そしたら、自分に任せると言つて、小さな粒のようなものがたくさん詰まつた瓶を娘に手渡し、1日に三度これを飲めと言つた。これは薬だから飲み続けろ、そうすれば子が宿りやすくなると言つて、その男はそのまま去つていきおつたよ。

結果は・・・良いとは言えんかつたが、あの2人が子を成すことができたということは事実。薬というものは、なかなか役に立つものだ、よく話の種になつたもんだ」

長の、何気ない昔話。

それを黙つて聞いていた一同は、背筋に冷たいものが走り、それと同時に実に嫌な考えが頭に浮かんで来た。

まさか、と。

そんなことあるわけない、と。

あんな健気な娘が、まさかそんなことに、と。

4人はそう思い込まずにいられない。

もしも、長の言っているその『男』が、一同の予想通りであるとすれば。

今までずっと、それこそ産まれてから今までの間、不憫で哀れな人生を送ってきたルウネが・・・報われない。

本当に救いようのない、最悪の結果になってしまふ。

そんなのは・・・あんまりだ。

「そういえば、その男は不思議な術を使って去っていったな」

落胆し、酷過ぎるルウネのことを思い、絶望すらしている4人に、長は追い打ちをかけるように告げる。

「空間に、何やら穴のようなものを開けて、その中へと入っていったのだ。その穴は、男が侵入したと同時に閉じて、もう2度と開くことはなかったよ。自分はまだ世界を回って、罨を残し続けなければならないと、小難しいことを言い残してな」

長の何気ない一言。

その一言が、ルウネがこの世界の覇であるといつことの、決定的な証言であった。

第98話 異種編7

話が終わった後、雷牙たち一同は村の入り口にいた。

周りには、この集落に住んでいる村人達。雷牙たちの来訪にようやく気がついた村人たちは、珍しいものを見るような目で4人を取り囲んでいた。何もないこんな所では、旅人が寄るといふことも滅多にないのだろう。

「本日はどうもありがとうございます。とてもためになりました」
雷光が長に頭を下げる。

声に抑揚はほとんど見られない。棒読みだった。面白くもない、胸くその悪い話を聞かされただけでなく、ルウネがこの世界の罨だということを知り、証言を聞かされたのだから当然だ。

雷光だけがそのような悪い態度を取っていたわけではない。レナも、風蘭も、そして雷牙も、誰もが落胆し、何とも言えないやりきれなさや態度に表れていた。村人の知らない、ルウネの本当の気持ちとその境遇を知った今、今までやってきたように、罨を倒そうという前向きな姿勢を取るようなことはできなかった。

「ふむ……。主等は、これからどうするのだ？ 町に帰るのか？ もうじき夜だ。泊まっていかれても、村としては一向に構わぬのだぞ」

長が、雷光にそんなことを尋ねてくる。

空はもう赤く染まり、薄暗くなってきている。夜になってしまえば『化け物』に襲われる可能性が高いと、一応は心配してくれているのだろう。長から言わせてもらえば、先ほど『化け物』の危険性を話したばかり。それにも関わらず、夜に村の外へ出ることなど、愚の骨頂以外の何物でもない。

確かに、何も知らない、本当の旅人であるのならば、長の言葉を鵜呑みにして村に留まったであろう。村の近くに居着いているのは、危険極まりない『化け物』だ。その化け物が活動する夜に、わざわざ村から出るのは、血を吸ってくださいと言っているようなもの。だから、普通ならば村に泊めてもらうのが当たり前である。

しかしそれは、ルウネの事情を知らない者のやることである。雷牙たちは、もう知ってしまったのだ。ルウネがいかに苦しんで生き、忌み嫌われ、そして過酷な運命に沿って産まれてきたということ。

それを知った以上、ルウネを異端である化け物として扱い、憎しみの念を抱いているこの村に留まることはできなかった。いるだけで気分が悪くなる。他の文化の観念を取り入れられない閉鎖的であるこの集落ならば仕方のないことかもしれないが、それでもか弱く、無抵抗であり続けるルウネを追いたてる村の者たちには、どうしても嫌悪感を抱かずにはいられなかった。

「いえ、大丈夫です。ご心配は無用です」

そう言つて、雷光は長の提案を断つた。

「……ふむ、そうか。それならば何も言つまい。では、さらばだ」

「ええ。色々お世話になりました」

雷光が代表で頭を下げ、そのまま一同は村の外へと出た。村人たちはいつまでも散ることはなく、その場で雷牙たちを見送っていた。

しばらく無言で歩き、村から遠ざかる。今話しても、入り口のところですつと見送っている村人たちには聞こえないだろうと判断したのか、雷牙が雷光に話しかけた。

「……どうすんだよ」

「こつちが聞きたいですよ。一体、僕たちはどうすればいいんですか……」

ため息をつき、雷光が頭を抱える。何をすればいいかなど、雷光にだつてわかるはずもない。雷光どころか、このメンバーの中で、今までこつちいったケースの世界に鉢合わせた者などいないのだ。

初めての出来事に戸惑つてしまうのは仕方がないことではあるが、しかしその問題は『わかりません』では済まない。混乱しようが、

戸惑おうが、いずれは決定を下さなければならぬのである。

「・・・殺すなんてこと、できないし。でも、罨だから放つてもおけないし・・・」

レナがそう呟く。

悩むべきことはたくさんあるが、肝心なのはそれだ。先ほどの長の話の限りでは、ルウネがこの世界の罨であるということは確定したと言ってもいい。ルウネの母親に薬を手渡した男が、空間に穴を開けるといふ術を使った。すなわち、ゲートを使い、様々な世界に罨を仕掛けなければならぬと発言したことが何よりの証拠だ。

だが、肝心のルウネはまだ、害悪と言える害悪を、世界の住民に与えていない。生きるための食料を奪い、血を吸っているだけだ。それすらも害悪というのなら、生きるために獣を狩っている村人たちも同罪だろう。

それならば、殺すのはあまりにもやり過ぎだ。何もしていないのであれば、何も殺す必要などない。それに、ルウネの歩んできた道は、あまりにもひどすぎた。その終焉が、他人の手における殺害だなんて、それこそ残酷極まりのない話である。

かといって、何もせずにこの世界を去っていいものでもない。何もしていないとはいえ、罨は罨。今までは何事もなかったとはいえ、今後も何もしないと言い切れない。何の手も打たずにこの世界を去り、その後『罨』としての本性が現れ、世界を混沌へと叩き落とす可能性も、ないわけではない。

一体どうすればいいのか。完全にすべきことを見失ってしまった。同の頭には、もはやそのことしか浮かんでこなかった。

「せめて、最初から対処法がわかってりやなあ・・・」

雷牙がそう言い、舌打ちをする。

あらかじめからこういう事態に備えての対処法を皆で決めていれば、ここまで頭を悩ませることもなかったのだろうが、例外に対しては仕方がない。特にルウネの場合、予測などできるはずのない例外中の例外。少なくとも、この世界の4人と、刹那たちの4人で考えたところで、このような特殊な例など思い浮かばなかっただろう。

「・・・とりあえず、ルウネの所に帰りましょ。ここでうだうだ相談しても、何にもならなそうだし」

村から離れた今、雷牙たちに行くべき場所はルウネの元しかない。ルウネを放っておくにしろ、討伐するにしろ、その旨を伝えなければならぬからだ。

「そうだな。そんじゃ、行くか」

雷牙がそう言い、とりあえず目先だけの目標は定まった。目指すは、

ルウネのいる例の場所。そこへたどり着いた後のことは考えてはいない。後回しにするしか、今はない。

一同は今まで歩いてきた道から外れ、森の中へと足を踏み入れて行った。

村の入り口に集まり、雷牙たちを見送っていた村人たちも徐々に散っていく、雷牙たちが訪問する前の静けさを取り戻しつつあった。それぞれが自分の仕事をしに、自分の場所へと戻っていく。

だがそんな中、2人の人物が、小さくなっていく雷牙たちの姿を見たまま、小さな声で会話をしていた。雷牙たちが最初に出会った男と、この村の長である。

「……あの者達、主はどう思う?」

険しい目つきをしながら雷牙たちの背中を見つめ続けている長が、隣にいる男にそう尋ねる。

「どう思う、と言われましても……。何か気になることでもあったんですかい？」

明らかに雷牙たちを不審がっている長だが、男にはそんな不審な所は見当たらなかった。強いて言うとするれば、見たことのない珍しい服装に、年齢の割には大人びた雰囲気だろうか。客が来ることは確かに珍しいことであるが、だからと言って不信任を抱くには理由が足りない。長が何を言おうとしているのか、男は皆目見当もつかなかった。

「……あの者達は、この近くの『街』から来た、と言っておった。そこであの化け物の噂を聞いた、ともな」

「街！？ そんなバカな！」

驚いたように目を剥き、男は長に聞き返した。

男がこれ程までに驚いたのには理由がある。単純だが、重大なことだ。『この近くには、街などない』のである。もしも街があったのならば、この広大な土地を放っておくわけがない。この自然が保たれているのには、そういった理由があったのだ。

見慣れない格好をした4人組み。その4人は、ないはずの街からルウネのことを聞いた、と言っている。聞けるわけのないその噂。ならば、どこでそのことを聞いたのか。

「……どこからやってきたかはわからん。だが、奴等はほぼ確実にあの化け物と関わりを持っている。おそらく直接聞いたのだろう。そうでなければ、そのことを知ることなどできるはずなどない。化け物のことなど、この村以外に知っている所などありはしない」

長の推測は見事に当たっていた。長の、どこから来た、という質問を、雷光はうまく誤魔化していたつもりだったが、それが逆に不審に思わせる結果になってしまったのだ。

なぜ村へとやってきたのかは謎ではあるが、ルウネと関わりを持っていることは紛れもない事実。今から雷牙たちの後をつければ、きっとルウネのねぐらに案内してくれることだろう。

ともすれば、長のたどり着く考えはただ1つ。

今夜中にルウネを、あの化け物を……滅する。

「あの4人組の後をつける。付けて、化け物のねぐら突き止めるのだ」

「ですが、あの4人組はタダものじゃないですよ。のこのこついて行っても見つかったまいますよ」

男の言うことは正しい。4人のうち風蘭を除く3人は戦闘に長けている人間であり、その中でも最も直感力の高い雷牙は、気配を読む達人と言ってもいいレベルである。そんな実力を持ち合わせた集団を、気付かれずに追跡することは、よほど気配を断つことの上しい人物でなければ不可能だ。

そのことを長はわかっていて、その上で男に言う。

「だから主に頼むのだ。昔は娘の夫が村一の狩人であったが、今では主が一番だ。獣にも気付かせずに仕留めるほどの腕を持ち合わせている主ならば、彼奴らに悟られることなく追跡できるだろう」

長の言葉通り、雷牙たちに声をかけたこの男こそ、現時点での村一番の狩人なのである。動きの素早く、危険だと言われる獣を次々と捕えてくるこの男は、ルウネの父に勝るとも劣らない腕の持ち主であった。

ルウネがこの村の近くに襲来した際には毎度毎度追いかけたものの、ルウネ持ち前の凄まじい身体能力から生まれる速さには到底追いつけず、いつも逃がして歯痒い思いをしてきたが、今回はそうはいかない。今回追いかけるのは全速力で走るルウネではなく、肩を落として歩く雷牙達なのだ。ルウネのように物理的に追いつけないのなら、十分追跡が可能になる。

「・・・そこまで言われちゃ、やらないわけにはいきませんか」

深くため息をつき、男は持っていた農具を地に降ろす。面倒だと表情は言っているが、どうやら長の言うことに従うことにしたらしい。追跡のような神経を使う作業は骨が折れるためあまり好まないのがあるが、長年に渡って取り逃がし続けてきたルウネの居場所を突き止めることができるのならば、それくらいやってのけようと男は準備を始める。

「ねぐらを発見して、戻ってくればいいんですね？」

屈伸をしながら、隣の長に訊く。

「ああ。場所がわかったら、村の者、総出でそこへと向かう。たどり着いたときにすることは、もう決めておる」

「それなら大丈夫ですかね。じゃ、ちよっくら行ってきますよ」

それだけ言って、男は村を出て行った雷牙たちを追いかけて行った。入り口から出て行った男を、長はただ黙って見送っていた。

第99話 異種編8

「そっか……。やっぱり、アタシ、そうなんだね」

力なく笑い、ルウネは顔を伏せた。

村から出て、そしてルウネと出会った場所まで戻ってきた雷牙達は、ルウネに事実と罫の本質、そしてその存在理由を告げた。言葉を選び、なるべく傷つけないように伝えたかったのではあるが、この世界の罫であるという事実の重さは、どう言葉を考えても変えられない。

両親以外の人間に、生まれて初めてまともな扱いされたルウネ。化け物ではなく、人間として接してくれた雷牙たちから告げられたことは、あまりにもつらい現実。

この世界の罫が自分なのだという、医者に余命を宣告される如く衝撃を受けたルウネは、泣き崩れるでもなく嘆くでもなく、ただ寂しそうに笑っていた。

そんなルウネに、雷牙達は何も言葉をかけることができなかった。罫という事実も、もはや存在自体が罪と言っても過言ではないのだ。『そう』なるべくして生まれてきた罫であるが故、自身の存在がそうだと悟ったルウネにかけるべき言葉など、罫を外して回っているという相反する存在の4人が持ち合わせている道理などなかった。

「……もう、何のために生まれてきたんだろうね、アタシさ」

寂しげな笑顔を張り付けたまま、ルウネが口を開いた。

「生まれてきた時点でもう村の人から嫌われて、お父さんとお母さんも死んじゃって、それはお前のせいだって言われてさ。その後も嫌われて、疎まれて、追い払われて、ずっと1人ぼっち。拳句の果ては存在自体が罪だって・・・そんなのないと思わない？」

誰に問いかけたのかはわからない。4人のうちの1人に問いかけたのかもしれないし、ひよっとしたら自分自身に問いかけたのかもしれないなかった。

「いいじゃない、アタシじゃなくてもさ。どうしてアタシなのよ、何もしてないじゃない。みんなで勝手に嫌って、勝手にいじめてるだけじゃない。悪いことしたんだったら、誰かそう言ってくれればいいのに・・・、どうして誰も言ってくれないのよ。どうして誰も教えてくれないのよ。わけわかんない。アタシの何が、何が悪いっていうのよ・・・」

顔を覆いながら、ルウネは心の憤りを生まれて初めてぶちまけた。その声は震えていて、今にでも泣き出しそうな、そして怒鳴り散らしそうな声色だった。

もしも運命というダイスを神が振っているのならば、その神をぶん殴ってやりたいくらいに、ルウネは理不尽極まりない境遇に苛立ち、

同時に悲しんでいた。歩んできた人生、それも1から10まで、幸せだと呼べる瞬間など訪れず、その分だけ忌み嫌われるという道を歩いてきたのだから。

「・・・ごめんね。ちょっと、取り乱しちゃった」

今までずっと独りで生きてきたルウネの精神は、恐ろしいほどに強固だった。

本当は泣き出したいのに。

大声を上げて、己の運命を呪いたいのに。

ふざけるなと怒鳴り散らしたいのに。

それなのに、ルウネはその感情を抑え込んだ。

雷牙達に、人間として扱ってくれた人たちに無様な姿を見せたくないという、たったそれだけの理由だった。

「それで、アタシってどうなるの？ 今、死ぬの？」

明るく振る舞ってこそいるが、声の震えは止まっていない。死ぬことを何とも思っていないような口ぶりではあるが、恐怖していることは明らかだ。死は誰でも恐れる。ルウネとて例外ではなかった。

「・・・わからねえ。とりあえず、今日は疲れた。続きは明日考える」

そう言っつて、雷牙は話を強引に終わらせた。

言葉の通り、今日は胸の悪くなる話をずっと聞き、最悪とも呼べる結果を知らされてしまった雷牙達一同は、精神的にかなり疲れていた。これ以上、物を考えたくないというのが本音である。

そんな状態でルウネの処遇を決めようとしたところで、いい案が思い浮かぶとは言い難かった。浮かんだとしてもろくでもない考えか、あるいは何も浮かばず時間を浪費しただけという結果が残るだけだろう。

事は重要極まりないことである。日を跨ぎ、慎重に思案したほうがいいに決まっている。

「・・・気なんて遣わなくていいよ。はっきり言ってくれたほうが、こっちとしては楽なだけだよ」

うっすらと笑ってルウネがそう言う。

処遇を宣言されれば、それに対する覚悟が出来るという意味での『楽』なのだろう。覚悟を決めると決めないでの死では、恐怖も何もが違ってくるから当然だ。

「遠慮じゃねえよ。俺たちも初めてのケースでわけわかんねえし、今日は本当に疲れたんだ。悪りいけど、明日に回させてくれ」

「・・・それならいいんだけど」

少しだけ安心したのか、不安がっていたルウネの表情が和らぎ、安堵のため息をついていた。自身がどうなるかはわからないが、とりあえず命が保留になったことには変わらない。安心しないわけがなかった。

「とりあえず、どこで一晩を明かすかを決めましょう。できれば、ルウネさんがいつも眠っている場所にお邪魔させてもらうのが一番なのですが」

村で警告されたように、夜になれば獣が活発化する。となれば、このような獣が寄せないための場所を夜を明かすわけにはいかない。自分達の体を、飢えた獣に差し出しているのと何ら変わらないからだ。

その点、ルウネがいつも眠っている場所であれば、猛獣たちに襲われないための対策も取られているだろうから安全なはず。寢床を荒らすような真似ではあるが、一晩だけ迷惑になるのが市場である。

「ああ、アタシ、そういうところないんだ。巣っていうのかな、そういうのは冬のと きくら いしか用意しないから」

「え？ それじゃ、ルウネさんは今までどこで生活してたんですか？」

驚き、レナがルウネに尋ねる。

生活の拠点となる家、ルウネに合わせるのであれば巣がないのであれば、先ほども言ったように睡眠を取っている間に獣に襲われる危険性もあるし、体調を崩す要因である雨風を凌ぐこともできない。家がないということはつまり、外の危険に四六時中晒されることと同義なのである。

生活の拠点なくして、目の前の少女はどうやって今まで生き延びてきたのか。家がないということの危険性がわかっていている者ならば、気にならないわけがなかった。

「ん、そこら辺を転々と回ってたかなあ。1つの所に巣を作っちゃうと、いざ見つけられたときに戻る場所を特定されちゃうしね。それに作るのも面倒だったから、良さそうな木の上に登って眠ってたよ。雨とか風が強い日は落ち葉とかかき集めて何とか凌いでたかなあ。アタシ、体温も結構高いから、寒すぎなかったら結構大丈夫だったの」

すごいでしょ、と最後にルウネが付け足した。

何と言うべきか、ここら一帯の自然そのものがルウネにとっての巢なのかもしれない。勝手がわかつている分、変に巢を作るよりはいいと割り切っているのだろう。常に身体の強化を施している状態であるルウネであれば代謝も高いはずであるから、本人の言う通り多少の寒さならばそれほど気にならないのであれば巢など必要ないわけだ。

「……ってことは、俺たちはここらで野ざらしか？」

雷光のほうを見て、雷牙がそう尋ねる。

「そういうことになりますね。まあこの世界はそんなに寒くはないですし、そのまま寝転がっても大丈夫だと思います」

現在の天候は快晴とはいかずとも晴れ間がのぞいている状態である。雨など降る気配などまったく見えない。寝ている途中に土砂降りということもまずないだろう。

体温を奪う風さえも、そよ風程度のものであるから、雷光の言う通り野ざらしになっても大丈夫なはず。あまり体にいいとはいえないが、1晩過ぐすくらいなら何ともない。

「そうと決まれば、色々準備しなきゃね。おなかも減ったし」

腹をさすりながら、風蘭が呟く。緊張の連続で誰も気づいていなかったが、この世界に来てから一同は何も食物を口にしていない。さすがにここまで辺りが暗くなってからは、体が栄養補給を訴えてきて誤魔化しはきかない。

「まあ確かに腹は減ったけどよ、こんなに暗くなっちゃ狩りは無理だぜ？ やってやれねえことはねえけど、時間だつてかかるし、全員が満足するような量だつて獲れるかわからねえ。満足に周りだつて見えねえしな。我慢したほうがいいんじゃないのか？」

長年狩りを続けてきただけあつて、雷牙の言葉は正しい。日ももうすぐ完全に沈む。今でこそなかなか明るいのが、狩りを始めてしまえばその最中に暗闇が確実に訪れる。そうなれば、もう狩りどころの話ではない。身の安全が優先される。夜になれば、いくら雷牙や雷光のように野生で育ち、狩りに慣れた者といえど、活動時間である夜型の獣相手に無傷ではいられないからである。

「わかつてるつてば、言ってみただけ。無理に行けなんて言わないつて」

幼少の頃からの付き合いである風蘭も、夜の狩りがいかに危険であるかということくらい承知している。その危険性をわかつている以上、最初から狩りになど行かせるつもりなどなかったのだろう。

「あ、そうだそうだ。おなか減ったんならさ、これ食べてよ。みんなが村に言ってる間に獲ってきたんだ」

そう言つてルウネが背後から出したのが、ルウネのために雷光が水を汲みに行ったときに使つた簡易式のバケツ。その中からは、何かパシャパシャと水飛沫が上がるような音が聞こえてくる。

何が入っているものなのかと、4人が一斉にそのバケツの中を覗き込む。

「わあ……、すごい魚ですね」

感嘆の声を上げるレナ。中にいたものは、大きな体を必死に動かしてバケツの中を泳ぐ、数匹の魚だった。バケツ自体がそれほど大きくないため、余計に魚が大きく見える。雄大な自然の中で育つた魚は、ここまで大きくなるものなのかと感心してしまうほどだ。

「確かに、うまそうだな。こんだけでかけりや嫌でも腹が膨れんだろ」

「でしょ？ おっきい魚、獲れるとこ知ってるんだよね。あ、アタシはもう食べちゃったから、遠慮しないでどうぞ」

ここら一帯の地理を理解しているだけあって、ルウネはそういった場所もしっかりと記憶しているようだった。これだけ大きければ捕

まえるのも一苦労のはずなのだが、そこはさすが手慣れているとしか言いようがなかった。

「あれ、ルウネさん、どうやってこれ食べたんですか？」

ふと、疑問に思った雷光が尋ねる。

焼いて口にしたにしろ、煮て口にしたにしろ、どちらにしても火が必要になる。しかし、辺りには煤けた薪や灰がなく、火を使った形跡がどこにも見られない。ならば、一体ルウネはどうやって魚を口にしたというのだろうか。

「どうやってって、いつもの通りそのまま」

「……はい？」

聞き間違えたかと思った雷光が、ルウネに訊き返す。

「だから、そのまま。頭からがぶっ！」と

「……えつと、その、もしかして、生で？」

「え？ 普通そういうものじゃないの？」

ルウネの何気ないその言葉を聞いた一同は、今自分らの耳に入った言葉が信じられないといった具合に固まってしまった。

どうやらルウネは、常識を超えた常識を持ち合わせている人物のようであった。

「？ どしたの？ アタシ、変なこと言った？」

「へ、変なことって！ あ、あなたそんなんじゃおなか壊すに決まってるでしょ！ 加熱しない魚に、一体どれだけ病原菌と寄生虫がいると思ってるのよ！」

何もわかっていないルウネに、風蘭が事の重大さを教える。加熱しない生ものは、人間の健康を壊す塊だ。知らなかったとはいえ、それを生で食べるなど、医学を学んでいる風蘭にしてみれば、絶対にあってはならないことなのだろう。

「え？ え？」

当然のことながら、魚を生で食するということが当たり前であるルウネは、風蘭が何に怒っているのかがさっぱりわかっていない様子。生食の何が悪いのかと言いたげである。恐らくは、病原菌やら寄生虫やらの知識が備わっていないのだろう。だとすれば、こういった

反応も当然と言える。

「とにかく！ そのまま食べるのは絶対ダメっ！ おなか壊してか
らじゃ遅いの！ いい、これからは絶対、こういったものは火を通
してから食べること！」

「そ、そんなこと言っても、アタシ、火なんか点ける方法なんてわ
からないし、それに煙で場所がばれちゃうし」

ルウネの言う通り、火を使う際にはどうしても煙が排出されてしま
う。それを村人に発見されてしまえば、居場所が割れても不思議で
ない。起きている間ならば簡単に撒けるだろうが、この間のように
しばらく血を吸わずに動けなくなっている状態の時に踏み込まれ
て、もしたら、それでアウトだ。そういった可能性をなくすことも含め
て、ルウネは火を使うことをためらっているのかもしれない。

「確かに、焚火なんてしたら、煙で村の人たちに気づかれてしま
うかもしれないね。でも……いくらなんでも生はちよつと……」
困ったという風に、雷光がため息をつく。空腹で、しかも目の前に
食料があるのに、それを食することができないとなれば当然の反応
だった。

「えっと、要するに焚火の跡と煙が出なきゃいいんだよね？」

遠慮がちに、レナが手を上げる。

「？　そうですね。火を使った形跡を残さないとすれば焚火は使えませんし、場所を知られないためにも煙は出さないほうがいいでしょうね。レナさん、何か考えでも？」

「私が火を出そうかと思つて。木を燃料として火を起こすと煙が出るけど、魔力を変換するやり方なら煙は出ないし、もちろん跡も残らないよ。ただ、魚を焼くときには少し煙は出ちゃうけど、焚火と比べればまだ少ないと思うよ」

レナの持っている神器『神抜刀』は、魔力を込めることによつて込めた魔力を炎へと変換する能力を持っている。木などに着火して炎を使う場合は煙が出てしまうが、魔力を変換するレナの炎であれば煙は出ない。もちろん、魚を焼くときには魚に含まれている水分が原因で煙が出てしまうが、木を燃やすよりは遥かに煙の量は少ないはず。

もちろん、『神抜刀』に込める魔力の量で炎の大きさと温度は違うのだが、そこは調整すれば何とかなる。戦闘に使う炎も、使い方次第ではこういった真似もできるといふわけである。

「お、なかなかいい考えじゃねえか。これで飯にありつけらあ」

温かい食事が出来るということに反応した雷牙が、実に満足そうに笑う。胃に食べ物が入るだけでも嬉しいのだろう。

「焼いたものかぁ。アタシ、しばらくそついうの食べてないなぁ」

ふと、ルウネがそんなことを言い出す。

村にいた頃であれば火もちゃんと使えたのだろうが、今はそんなもの使うことなどない。となれば、加熱した食事は珍しいものであり、滅多に口にすることが出来ないということになる。

もちろん、村人たちから食料を奪う際に火の通っている物が得られるということはあるだろうが、そついった略奪行為自体をあまり好まないルウネにしてみれば、どちらにせよ加熱処理された食事というものは珍しいものになる。

「あ、それなら私と半分にしませんか。私、こんなに大きい魚、全部は食べられないから」

レナがそつ提案すると、途端にルウネが表情を輝かせる。

「ホントっ？　ありがとう、レナちゃん！」

「いえいえ。それじゃ、焼きましようか」

そう言ってレナが『神抜刀』を抜く。これから調理に入るようだった。

・・・これからの食事を楽しみしている一同は、気付かない。

自分らの後を付け、そしてここから去っていった1人の男に、全く気がつかない。

「ん？」

「どうしましたか、兄い」

「・・・いや、何でもねえよ」

ただ1人、雷牙が何かの気配が消えるのを感じたようだったが、気のせいだろうと特に気にも留めず、ただ目の前の小さな炎で焼かれている魚へと視線を戻した。

第100話 異種編9

食事を終えた頃には辺りはもうすっかり暗くなってしまった。夜に火を点れば闇を照らしてくれるが、同時に居場所を知らせてしまう原因にもなる。調理という必要最低限以上の炎は使うべきではないと判断した一同は、早めに眠ることに決めた。

月と星の光はない。雲が隠してしまっているためだ。たまに雲の切れ間から一際明るい月の光だけが差し込むが、星はどうしても見えない。これだけ雄大な自然から見上げる星空は大層美しいものなのだろうが、こつも雲が厚くては仕方がない。

「……………」

寝返りを打って、雷牙は目をつむるが、どうも寝付けない。さつきから、正確には村を出てから、嫌な予感が胸から離れないのだ。

雷牙はこのような感じを、生まれてから何度も味わってきた。よくないことが起こる少し前には、絶対にこのような感じが胸に生まれる。直感力が他の人間よりも遥かに優れている雷牙とって、これは予知にも等しいことだった。

「……………」

人の気配がした。それも1人ではない。大勢の人の気配が、自分た

ちが寝ている場所を中心に取り囲んでいる。その気配が、だんだんと近づいてくる。

同時に感じられる、殺気。1人1人が憎悪に近い殺気を灯している。痛めつけるだとか、追いつくだとか、そんな生易しいものではない。殴り、突き、斬り、潰し、そして絶命させようというどす黒いものが渦巻いているのが明らかな殺気だった。

正体は明らかだ。十中八九村の連中だろう。ここまでの人数に、ルウネを恨んでいるという条件が重なっているのは、あの村の人々しかない。

だが、1つだけ疑問がある。なぜ村人たちにここがわかったのかということだ。

それはすぐにわかった。村を出たときから感じていた嫌な感じ。おそらく、誰かが後ろからつけていたのだろう。あの時は精神を張り詰めていなかったから、気がつかなかったのは無理もないことなのだ。自分たちの失態でルウネを危険な目に遭わせてしまったことが腹立たしかった。

「・・・雷光、起きてるか」

「・・・ええ、起きてます。かなり、多いですね」

雷光と小声でやり取りをしながら、雷牙は徐々に近づいてくる村人達を警戒し続ける。離れているが、弓のような射程の長い武器な

らばぎりぎりで命中してしまうくらいの距離。暗闇で目が利かないため、命中する確率はかなり低いだろうが、それでも警戒するに越したことはない。今の調子で近づいて来られれば、やがて近距離の武器の射程圏にまで侵入されてしまう。

「逃げられるか？」

「人数こそいますけどね、所詮は普通の人間です。身体の強化さえすれば、何とか逃げられますよ。・・・ただ」

「ただ？」

「風蘭を担いで逃げるとなると、かなり難易度が跳ねあがりますよ。動きも遅くなりますし、ね」

この状況にも関わらず呑気に寝こけている風蘭は、身体強化ができない。それどころか、魔力だって扱えないのだ。

それゆえ、戦うことはおろか、逃げることも風蘭はできない。従って、雷牙か雷光のどちらかが風蘭を荷物のように担がなければならぬ。のだが、この大人数ではそれも厳しい。一つ跳びで連中の頭を越えられればいいのだが、風蘭の重みがそれを邪魔する。

「戦って包囲網を突破するか？」

「冗談でしょ？　こんな大人数相手じゃ手加減なんかできませんよ」

「だよな・・・」

手加減なしで、魔力による身体強化を施していない人間と戦ったら、その結末は明らかだ。大怪我をさせることは確実だし、下手をすれば殺してしまうかもしれない。正当防衛とはいえ、そんなことをすることはできない。それでは、今まで世界を狂わせてきた畏と変わりがない。

「・・・どうしよつか。逃げられもしない、戦えもしない」

「なんだ、レナ。起きてたのか」

雷牙が驚いたように、しかし小声でそう言った。

「これだけ殺気を浴びせられれば、嫌でも起きちゃうよ。でも、風蘭もルウネさんも眠ってるみたい」

確かに、今聞こえてくる寝息は2つ。風蘭のものと、ルウネのもの。2人とも、本当に寝入っているようだった。

「・・・やっぱ、強引に突破するしかねえんじゃねえのか？ 何もできませんでした。死ぬのはごめんだぜ」

「もつともですが・・・。しかし・・・」

雷牙の考えはもつともではあるが、村人たちの安否を考えると賛同はできなかった。加減などできない混戦で、1人も殺すことなくこの包囲網を突破することは限りなく不可能に近かった。相手が殺す気で来ているというのに、何も傷つけないで立ち向かうと言うのも無理なのかもしれない。

「え？ 止ま、った・・・。止まったよ」

レナが驚いたようにそう言う。

徐々に輪を縮めるかのように近付いてきた村人たちの進行が、止まった。何か考えがあつてのことなのか、はたまた戦闘能力の高い4人に加え、化け物と定義付けられているルウネに臆したのかはわからないが、ここまで来てそのまま引き返すということは考えづらかった。

何か仕掛けてくる可能性が高い。そのことを、3人は当然のことにように理解していた。具体的には何をしてくるのかはわからないが、少なくとも一同にとっていいことではないだろう。

一体何を仕掛けてくるのか。眠ったふりを続けながら神経を集中させ、細心の注意を払いながら村人の挙動を感じ取っている中、雷牙1人がある異変に気がついた。

「？　なんか、臭えぞ。鼻につんとくる臭いだ」

「ん、確かに、ひどい臭いがしますね」

鼻の利く雷兄弟は、辺り一帯から漂ってくる悪習にいち早く気がついた。嗅いでいるだけで頭が痛くなり、気分も悪くなる悪臭という言葉がふさわしい臭い。毒ガスの類かと疑ってしまっただ。

だが、レナは2人の言っている臭いがわからなかった。2人ほど嗅覚が鋭くないのだ。2人が気分を害するほど強い悪臭も、レナからしてみれば何のことやらさっぱりなのである。

ふと、夜風が吹く。強風では決してなく、安らぎさえ与えるような心地よい風に乗って、2人の言う悪臭がようやくレナの元に届く。

その臭いとは無縁に近い世界で育った2人にはわからなかったようだが、臭いの原因となる物質を使う戦術を担ってきたレナには、その正体が一瞬でわかった。そして村人たちが、今から何をしようとしているのかも。

「みんな起きてっ！！　これは　」

大声を張り上げ、眠っている風蘭とルウネを起こそうとした瞬間、暗闇に包まれていた辺りは一瞬にして明るくなり、同時に四方八方から熱が発せられた。その正体は突然に放たれた炎であった。円状になって雷牙達を取り囲んでいる炎は辺りの樹木や草花に引火し、その規模を拡大していく。

「きゃ！ ちょ、ちよつとなになに！？ どうしてこんなことになってんのよ！！」

「・・・火？ 火が、どうして？ どうして、燃えてるの？」

レナの大声で目を覚ました2人は、自分等を取り囲むようにして燃え広まっている炎を目の当たりにして一瞬にして意識を覚醒させたようだった。何が起こっているのかはさすがに理解できてはいないようだが、正気に戻って危機感を覚えるだけでも十分である。

「な、なんだ！ なんで魔力も使えねえ人間が、こんなにでかい炎を出せるんだ？」

驚く雷牙に、その理由を知っているレナが告げる。

「『燃える水』。火を炎に変えるほど強い引火力を持つ、魔法の水。

さっきの臭いは、何度かかいたことがあったから、たぶんそれを使っただんだと思う。それも、かなり大量の」

いくら『燃える水』を使っただと言っても、火の回りと規模の拡大が早すぎる。最初の炎の大きさもさることながら、急激に炎が巨大化していくその勢いには目に余るものがある。これだけの炎を作りだしたとなれば、やはりレナの言う通り大量の『燃える水』が使われたのだらう。

「・・・なるほど。それで、私たちを閉じ込めて、じわじわ殺していくというわけですね。これだけ大きい炎であれば、無傷のまま突破するのは難しい。風蘭がいるのならばなおさらです」

「どうせ足手まといですよ！ それよりどうするのよ！？ これじゃ、あたしたちみんな焼かれちゃうじゃん！ あたし焼き肉にはなりたくないよ！」

風蘭の言う通り、このままでは成長しきった巨大な炎の壁が雷牙たちの元まで迫り、そのまま焼かれて死ぬという末路をたどることになる。それだけは避けたいが、目の前にはばかっている炎の壁が、一同を逃がそうとしない。

「何か、うまい手はないでしょうかね」

あくまで冷静に現状を把握し、雷光は腕を組みながら打開策を練る。炎が迫ってくるまでの時間は長いとは言えない。だからこそ決して慌てず、冷静にならなければならないということ、雷光は知っていた。

深呼吸をし、現在の状況を客観的に見て、最善の策を考える。脳の回転数を上げ、雷光は今の状況など目に入っていないが如くの集中力を見せた。

それゆえに、炎の壁の外から聞こえてくる『声』に、いち早く気がついた。

「・・・？」

地よりも遙か下から聞こえてくると錯覚するほどの、重く、そして響くような声。

あまりにも声が小さすぎて何を言っているのかは聞こえなかったが、その声はどんどん大きくなっていく。

「なんか、聞こえねえか？」

雷牙がそう言ったのを皮切りに、一同は耳に入ってくる地鳴りのように低い声に気がついた。

全員が喋るのを止め、その声は何と言っているのかを聞き取るうと耳を澄ます。

『む．．．』

第101話 異種編10

断片的な、単語とも呼べないくらいの短い言葉が、一同の耳に届いた。

『ね・・・ね・・・し』

その声が大きくなるにつれ、村人たちが放っている言葉の意味が明らかになっていく。

『し・・・ね・・・し・・・ね・・・』

「な、なによ、これ・・・」

あまりのおぞましさと、そして真っ直ぐに向けられているこの言葉に気が付き、風蘭は顔を真っ青にしていた。

て怒りが、すべて呪うという行為に集約した、もはや人外のものか
& と思えるほどの凄まじい呪詛。

大きな声でなくとも、いや、小さな呟くような声が連なっているか
らこそ、それが地鳴りのような振動を思わせるかのような凄まじさ
と恐ろしさを演出する。まるでその呪詛が、大地よりも下・・・地
獄から聞こえてくるかのような錯覚さえも覚える。

本気で人間を呪うということ初めて受けた雷牙達は、背筋までこ
みあげてくるおぞましさと同時に、村人たちの正気を疑った。これ
が本当に人のすることなのか、と。炎の外の村人たちは、本当に人
なのか、と。

「酷過ぎる、こんなの・・・。信じられない・・・。」

青ざめた表情のまま、レナが思ったことを素直に呟く。

この声をほんの少し浴びるだけでここまで委縮してしまうのに、ル
ウネはこの狂気とも呼べる呪詛を生まれてからずっと浴び続けてき
たのだ。ずっとルウネを呪ってきた村人たちの神経を疑う。同じ人
間なのに、なぜこんな精神を蝕み、そして崩壊させるような真似が
できるのか、さっぱり理解できない。

その時だった。ある小さな物体が炎の壁を通り抜け、雷牙達の元へ
と勢いよく飛んでくる。

瞬時にそれを察知した雷牙が、その小さな物体をつまみ具合に受け
止める。

「石？」

雷牙が受け止めた物は、土にまみれた石だった。たつた今落ちていたものを拾って投げたのだろう。炎の壁で焼き殺すまでの時間が惜しかったらしい。直接ダメージを与えなければ気が済まないようだった。

最初の投石を皮切りに、四方八方のから狭まってきた炎の壁を突き破るように、その奥から村人たちが石を次々と投げつけてくる。雨が降り注ぐかの如く、石は次々と投げられ、中には木の枝や持参したものであるう、鎌や鍬等の農具を投げってくる者までいた。

石などは受け止め、農具などは叩き落とす。炎という隔壁が存在している以上、こちらからは手だしすることはできず、ただ攻撃を防ぐことしかできない。どこまで汚いのだと、思わず雷牙が舌打ちをした。

「いたっ！！ん、ぐ・・・」

「風蘭さんっ！！」

頭を押さえながらうつづくまる風蘭に、雷光が石を振り払いながら駆け寄る。

「どこですか！？ どこに当たったんですか！？」

「あ、頭……。で、でもそんなに傷は深くないから……」

「深くないって……。血が出てるじゃないですか！」

必死に押さえて止血をしてはいるものの、風蘭の頭からは一筋、二筋と血が溢れてくる。本人は強がっているが、魔力による痛覚を和らげる術を知らないのだから痛くないわけがない。現に風蘭の表情が苦痛で歪んでいる。自分の身を守ることばかりで、風蘭のことまでかばってやれなかった後悔の念で、雷光は唇を噛み締めた。

「ちつ……。ホントに、容赦ねえな。そんなに俺たちが憎いかよ……」

風蘭と雷光をかばうようにして、雷牙が飛んでくる様々な物体を地面に叩き落としながら舌打ちをする。ここまで来ると、おぞましさを通り越し、怒りさえ覚えてくる。局地的な偏見が、これほどまでの憎悪を生み出すとは、正直信じられなかった。

「……？ ルウネさん？ どうしたの？」

ルウネをかばうように、降り注ぐ石や木の枝を振り払っていたレナ

が、その異変に気がついた。

先ほどから、ルウネは下を俯き、口を動かして何やらぶつぶつと咳いているのだ。時折、レナが落としかれなかったほんの小さな礫が当たっても、その箇所を押さえるような素振りを見せない。聞き取れないくらいに、本当に小さな声で、何かを咳いているだけだった。

「ど、どうしたの？ どうか痛いのか？ 痛いところあったら、ほら、診せて」

ルウネの変化に風蘭も気が付き、自身の怪我も厭わずルウネのことを気にかける。しかし、ルウネはまるで風蘭の声に気がついてなどいないように、咳くことを止めない。

「・・・んで」

「え？」

ルウネの近くに寄っていた風蘭だけが、ルウネが咳いている言葉の断片を聞き取ることができた。何を言っているのか、そしてなぜこうなってしまったのか、それが知りたくて、風蘭は身を乗り出す様にしてルウネとの距離をさらに縮める。

「な・・・で、よ」

「ルウ、ネ？」

「アタシだけじゃ足りないっての？ 関わった人、全員殺さなきゃ気が済まないっての？ なんでよ、何よそれ・・・」

声に抑揚はない。村人たちが低い声でただ黙々と呪詛を唱えているのと同じく、ルウネもまた村人たちへの呪詛を唱えていた。

自身が虐げられるのは理不尽ではあるが、それはどこかで諦めていた部分があった。納得することなどはできなかつたが、類稀なる体質は変えられないのだから仕方ないと割り切つてルウネは生きてきた。

だが、村人たちが今やっていることは何だ？ 雷牙たちにまでもその毒牙をかけているではないか。何もしていないのに、ただルウネと一緒にいるだけなのに、たったそれだけの理由でなぜ傷つけられなければならない？・・・今まで村人たちに負の感情を覚えなかつたルウネの心境が急変した理由がそれだった。

「ルウ、ネ・・・？」

心境の急変は呪詛を呟くだけでなく、その表情をも変化させていた。陽気で、明るかったルウネの顔が憎しみと怒りで歪み、背筋を凍らせるほどの恐怖を醸し出していた。話しかけた風蘭が、その表情の

変化と恐ろしさを戸惑い、そして恐怖するほどだ。

「ふざけるな……」

低く、今まで聞いたことがないような口調で、ルウネがそう呟く。

「死ぬのは、貴様らのほうだ……」

村人たちの呪詛に応えるように、ルウネも呪詛の言葉を吐き出す。

「殺してやる……」

地についた手をたたみ、そのまま骨が軋むほど強く握りしめる。

「1人残らず、皆殺しにしてやる・・・」

そう言って、ルウネはおもむろに立ち上がる。

村人に対する呪詛の言葉を呟き続けたまま、ルウネは今までとは異なる『自分の意思での身体強化』を全身に施し、そしてその足で地を抉りながら蹴り上げ、凄まじい速さで炎の壁目掛けて突進し始めた。

「ああ！？ どうしたってんだよ、ルウネ！！ 待てって！！」

突然飛び出したルウネに、雷牙が驚いて声を掛ける。が、ルウネは止まらない。そのままの速さで炎の壁に突進し、そして突き抜ける。外には大勢の村人たちがいるというのに、そんなことお構いなしにだ。

「追って！ ルウネを追って！」

風蘭が大声を張り上げる。その表情は、どことなく焦っているかのようにも見えた。風蘭のただ事ではないような声色に、雷牙は迷うことなく炎の壁目掛けて一直線に走った。

「あぢぢっ!!」

炎の規模は予想以上に大きく、雷牙はなかなか外へと出られなかった。早く抜けようと思っても、迫りくる炎の壁は勢いを増していき、雷牙を簡単には出してはくれない。炎の中に閉じ込められたような、そんな錯覚すらしてくる。

「う、うあああっ!!!!」

「てめえ!!! ぐぶあっ!!」

「来ないでっ! いやあああああああ!!」

炎の外から、村人たちの悲鳴が聞こえた。恐怖に戦き、死を恐れ、痛みに逃げ惑う声だった。

これから予測できることはただ1つ。今までずっと蔑まれ続け、何度も殺されかけた村人たちに歯向かおうとはせず、ただ必死に耐え

るだけだったルウネが、ここへきて牙を剥いたのだ。

「くそつたれっ!!」

なぜずっと耐えてきたルウネが、今になって牙を剥いたのか。具体的な理由はわからないが確かなことは1つ。ルウネの中の何かが外れたのだ。今までルウネを縛りつけていたモノが弾け飛び、そして解き放たれた『本当のルウネ』が、食事をする獣が如く村人たちに襲いかかっているとしたか考えられない。

籠が外れたとなれば、遠慮や手加減などするはずもない。『そういつたもの』から全て解き放たれているのだから、今のルウネは文字通り本気で村人たちを……。

「あつちい！ くそつ！ おい、ルウネっ!!」

ようやく炎の壁を抜け、服に広がっている炎を叩いて消した雷牙が、名を呼ぶ。

その名の主は簡単に姿を確認できたが、雷牙はそれ以上呼びかけることも近寄ることもできなかつた。

「ル、ルウネ……」

絶句した雷牙のその先にあったのは、獣だった。

刃物のように鋭い目つきをし、荒く呼吸を繰り返し、血まみれで痙攣している半死半生の村人を足蹴にし、そして血まみれの両手をだらしなく下げている、ルウネの姿をした獣であった。

「うううう……」

人の者とは思えない呻き声を上げ、ルウネは雷牙に視線を向ける。

血走り、獲物を狙うようなその非情な目は、幾度となく視線を乗り越えてきた雷牙の背筋を凍らせた。思わず後ずさり、警戒心を強めざるを得ないほど、今のルウネは痛いほどの殺気を放っていた。

雷牙はようやく理解した。

ルウネは、紛れもなくこの世界の畏であると。

残忍で、冷酷で、容赦など欠片もない、畏という名にふさわしい凶悪な畏なのだ。

仮面に隠れた凶暴な本性は、これ以上なく恐ろしく、そしてとてつもないものだった。

「あゝあゝあゝ……」

ルウネは視線の先にある雷牙には襲いかかるうとはせず、悲鳴を上げ、腰を抜かしながらも逃げ惑う村人たちに照準を合わせていた。足元に転がっている村人には目もくれない。もう次の獲物を壊そうと、全身の殺気をさらに噴き出している。半殺しにあった村人たちが生きているのも、まだルウネが本調子でなかったからかもしれない。となれば、これ以上村人たちに手を出させるのはまずい。

「待ちやがれっ！」

怒鳴り声を上げ、ルウネを制止させる。

大声に気がついたルウネが、ゆっくりと雷牙のほうに向き直る。

「俺がわかるか！？ 今やってることがわかるか！？ どうなんだ
答えてみろっ！」

大声で怒鳴り、ルウネの反応を確かめる。

問いかけられたルウネはしばらく黙り、そして口を開く。

「皆殺し、全員、あの世に……」

「……正気じゃねえな。しゃあねえな、ったくよ」

幸いなことに、先ほどのやり取りでルウネの照準は、村人の虐殺を邪魔した雷牙に向けられている。このまましばらくルウネと戦闘をすれば、村人たちをここから逃がす時間を稼ぐことができる。こうなった原因である村人たちがお咎めなしというのが腹立たしいが、今はそんなことを言っている場合ではない。

大きく息を吸いこみ、吐き出すと同時に雷牙は全身の魔力を活性化させ、全身の強化を施す。雷牙の武器である、神器『神裂爪』は雷光から受け取っていないため手元にはないが、それでいい。神器は魔力を凝縮させることによって形成させる結晶と同等の威力を持っている。そんなものをつけてルウネと戦い、そして傷つけてしまえば致命傷は免れない。

目的はルウネを気絶させることなのだ。箍が外れて畏としてのルウネが覚醒したとなれば、一度気絶させて意識を断ち切ることで、ひよっとしたら理性を取り戻してくれるかもしれない。気絶させるのに、武器など要らない。

「やるぞっ！ かかってきやがれっ！」

雷牙の気合の混じった怒声が、夜の森に響き渡った。

第102話 異種編11

その言葉に反応し、ルウネが動きを見せる。

「手足を？いで、骨を砕いて、肉を潰して・・・」

ぶつぶつと何かを言いながら、ルウネは足元の村人を蹴飛ばす。壊れた玩具になど興味はないと言いたげだった。ボロ雑巾のようになった村人を、逃げ回っていた別の村人が回収し、そのまま悲鳴をあげて立ち去った。

「頭蓋を開いて、内臓を掻き回して、絶叫にのたうち回らせて・・・」

急接近することもなく、ルウネは構えを取っている雷牙に、1歩1歩ゆっくりと近づいて行く。

大して雷牙は、ルウネの一挙一動から決して目を離そうとはせず、何時かかってこられてもいいように神経を研ぎ澄ましていた。

「皮を破って、目を抉って、心臓を丸ごと出して・・・」

その次の言葉を口にしようとしたその瞬間、

ルウネはまさに地を縮めたのではないかと錯覚するほど速く雷牙に接近した。

そのあまりの速さに、神経を研ぎ澄ませていた雷牙でさえも反応できず、ルウネが自身の顔面を覗きこむその瞬間まで、身動き一つできなかつた。

「激痛に顔を歪ませて、全員殺してあげる」

「　　っ!?!?」

無意識のうちに雷牙はのけぞり、そのままルウネとの距離を取る。ルウネ自身はまだ手も何も出してきていないのに、雷牙はそのまま接近していることの重圧に耐えられなかった。雷牙の直感が、それ以上距離を詰めたままにいるなと告げていたのだった。

「.....」

言葉なく、雷牙は再び構える。

先ほどの速さは異常だ。接近されたことにすら気がつかないほどの

速度であるのならば、回避しようとしても無駄だ。それならば、なおさら防御に徹しなければならぬ。

もちろん、防御だけではこの戦いが終わらないことなどわかっている。故に、防御。ルウネの攻撃を防ぎ、その瞬間に生まれた隙をついてルウネに攻撃を加える戦法を雷牙は取ったのだ。

「邪魔、邪魔・・・」

大して構えも取らずルウネは姿勢を低くし、先ほどと同じように雷牙に急接近する。速度は衰えることなく、むしろ先ほどよりも速くなっていた。

だが雷牙に見えた。先ほどより集中していた雷牙には、風よりもずっと速い速度のルウネの姿を捉えることができていた。姿こそぶれては見えるが、それを捉えられないほど油断はしていない。

ルウネは直線に雷牙に接近し、そのか細い腕を雷牙の腹目掛けて振り出した。凄まじい速さから繰り出されたその腕の威力が強力であることは、受けてみるまでもなく明白であった。

その腕を受けようと、雷牙は両腕を十字に重ねて衝撃に備える。本来、攻撃の隙を狙って反撃するのであれば、片腕で受けたほうが素早く攻撃に移れるのだが、ルウネの攻撃の威力を警戒してのことだ。万一、片腕では受け止められないとあっては洒落にならない。

「壊れる」

冷たくルウネが言い放ち、雷牙の両腕に衝撃がきた。

その凄まじい衝撃は雷牙の防御をいとも容易く突き抜け、雷牙の内臓にまでダメージを与えた。

「ぐ、えあ・・・」

嘔吐感がこみ上げてくるのを必死で耐え、雷牙は先ほどと同じようにルウネと距離を取った。

雷牙が思っていたよりも、ルウネの攻撃は重く、鋭かった。警戒して両腕で防御してこの様だ。セオリー通り、片腕で防御していたらと思うとぞっとする。下手をすれば内臓を壊されていたかもしれないほどの威力だった。

「くそ、つたれが・・・」

ルウネの打撃を直接受けた右腕は紫色に腫れ、雷牙は刺すような痛みには歯を食いしばって耐えていた。原因は先ほどのルウネから受けた攻撃を防いだことによる、骨折であった。

もはや、ルウネの身体能力は、魔力によって強化されている雷牙の能力をも越えていた。よくよくルウネの体を見てみれば、うっすらと魔力でカバーされている。魔力による身体強化を全身に施している証拠である。

通常の状態であれだけ人間離れた身体能力をしているルウネが、さらに魔力による身体の強化を施せば、単純に考えても雷牙よりも強くなるのは当然の理であった。

「へ、そうかよ。そんならこっちも考えがあんだよ」

そう強がって、雷牙は笑った。

単純な話だった。現在の身体能力でルウネに勝てなかったら、もう1段階強化すればいいのだ。今雷牙が行っている身体の強化は魔力によるものであるが、『眼』さえ使えばもう1段階上の能力を手にすることができる。

ルウネに『眼』が使えない以上、今以上の能力を得ることはできない。となれば、雷牙が『眼』を使って身体をさらに強化さえすれば、この戦いは勝ったも同然である。

そう悟った雷牙は、遠慮などすることなく『眼』を発動させた。

体中から目に見えるほどの魔力が噴き出し、雷牙の瞳孔が完全に開く。

細胞という細胞が活性化し、力が後から滾々と沸き出してくるのを感じた。

「今度は、こっちから行かせてもらおうかっ!!」

怒声を上げ、今度は雷牙から打って出る。地を蹴り上げ、先ほどのルウネに勝るとも劣らない速度で接近する。

考えてみれば、先ほどルウネの動きを捉えられなかったのは油断し、そしてなるべく傷つけまいと手を抜いていたからかもしれない。そう思えるほど、今の雷牙は速く、そして強くなっていた。油断などしていなければ、いくら能力が高いと言っても経験値のないルウネに攻撃をもらうわけがないと、動きがそう言っている。

「おらあっ！！」

勢いに任せて、先ほどのルウネと同じようにして拳をルウネにぶち込む。若干の手心は加えてある。急所に当たったとしても死には至らないほどにだ。

「まだ終わらねえってえの！！」

拳がルウネの腹に入った瞬間に、雷牙は素早くその背後へ回り込みルウネが振り返る前にその細く、華奢な体を蹴飛ばした。華奢ではあるが、身体の強化をしてあるためか、その体は岩石以上の強度を誇っていた。常人であれば、ダメージなど与えられないほどのものである。

だが、その強度も『眼』を使用していれば関係などない。拳という拳は体の芯にまで衝撃を与え、その速さはあらゆるものを翻弄する。

いくらルウネが固く、強く、速くとも、単純に考えて一段上の身体強化を施している雷牙には勝てない。

「……………」

自身の周りを蝶のように舞い、蜂のように刺すといった戦法を取っている雷牙を、ルウネは無言見送っていた。防ぐことも避けることもせず、攻撃の的としてその場へと立ち尽くしていた。

傍から見れば、無抵抗の少女を容赦なく痛めつけているようにしか見えないだろう。雷牙も、今やっているように無抵抗のルウネを攻撃することに抵抗がないわけではない。だが、それも仕方がないのだ。このままルウネを野放しにしておくわけにはいかないのだから。

「ふっ！ ふっ！ ふっ！」

背後を攻撃し、離れ、前へと回って肩や膝の関節部を攻撃し、そしてまた離れる。たまに変化をつけるために側面を攻撃する。それを何度も繰り返し、ルウネが弱るのを待つ。徐々にダメージを蓄積し続け、ルウネが弱ったときに、とどめとなる重い一撃を加えてさえしまえば、ルウネはあっけなく意識を手放すだろう。そうすれば、この戦いは終わる。

「ぐ、が……」

加減はしていると言っても、積み重ねたダメージの許容量が限界を超えたのか、ルウネは呻き声と共に膝をついた。鈍痛が響いているのか、自分で自分を抱いて震えている。これだけ弱っているのなら、もう十分である。後は1発だけ加えれば、ルウネの意識を断ち切ることができる。

「っしやあああっ！！！」

隙を逃さず、雷牙は突撃する。意識を断ち切ろうと拳を強く握りしめ、小ぶりながらも鋭い1発を、ルウネの顎を目掛けて放った。

まず間違いなく命中するであろうことを、雷牙は確信していた。放った拳がルウネの脳が揺らし、意識を断ち切れ、仲間内で争うような胸の悪い戦いが終わるのだと、心の中では安堵していた。

だからこそ、驚愕した。

自身の拳が、確実に命中すると信じて疑わなかった自身の拳が。

弱っているルウネの片手に、いとも容易く受け止められたというように、心底驚いた。

「な、にい・・・?」

今の雷牙は『眼』を使っている。身体能力など常人と比べ物にはならないし、今のルウネよりも1段階上の強さを誇っている。今のようルウネが片手で防いだとしても、それを吹っ飛ばしてダメージを与えることは可能なのである。

それなのに、なぜこうも簡単に止められたのか。

答えは、すぐにわかった。

ルウネの左右不対象である目の瞳孔が、不自然なほど大きく開いていた。

これが意味することはたった1つ。

「鬱陶しい・・・鬱陶しい・・・」

ぼそつと呟き、受け止めた雷牙の拳を強く握り締める。

「う、ぐ・・・、これ、は・・・！」

みしみしと自身の拳が軋む音と、万力のような強さで締め付けてくるルウネの力強さを実感して、雷牙は確信した。瞳孔が開ききり、そして『眼』を使用しているのにも関わらず、その拳を易々と受け止めたルウネは、雷牙と同様に『眼』を使っている。そうでなければ、雷牙の優勢だった流れが変わるわけがない。

「くそつ、が・・・！！」

拳が潰される前にルウネの手を振り払い、雷牙は距離を取る。軋んだ拳のダメージを確認しながらルウネの様子を窺ってみると・・・その小さく細い体から、雷牙と同じように可視できるほど濃密な魔力が溢れだしていた。

色は、黒い紅。本人の瞳の色が、見事に合わさったような不気味で、禍々しい色だった。

「じりゃ・・・まずくねえか・・・？」

先ほどから雷牙が一方的と言えるほどにルウネを攻撃することができていたのは、『眼』を用いたことよって得た身体能力を駆使していたからである。しかし、そのルウネが『眼』を使ってしまった今、この戦いにおいて雷牙のアドバンテージは消え去り、ルウネの独壇場と化してしまったのに等しい。

互いに、もう身体の強化はできない。だが、二段階しか身体の強化ができない雷牙と、普通の状態がすでに身体の強化を施している状態と言っても過言でない身体能力と合わせて、さらにもう二段階上の身体強化を施しているルウネでは、能力的にはかなりの差が出る。

もちろん、それに加えて今までの経験や戦いについてのセンスなども合わさって勝率というものは出てくるわけだが、それを踏まえてもルウネの身体能力は凶悪過ぎた。それはもう、最大まで身体を強化している雷牙が、子供に見えるくらいに。

「・・・あは」

不意にルウネが、笑った。

「あはははははは」

女性独特の高い声を、これでもかというくらいキンキンに響かせて、

第103話 異種編12

「なんだってんだ・・・」

冷や汗が吹き出すのを感じながら、雷牙はそれだけ呟いた。これほど戦う前に恐怖を感じたのも、今までになかった経験だった。筋肉が緊張し、体が鉛のように重い。これから山場だというのに、本当に戦えるのか本人ですら疑問であった。

それでも、ルウネの攻撃に備えて構える。いくら条件が悪くとも、歴然たる差があっても、戦わなければならぬ。ここで怖気づいて逃げれば、この世界は確実に壊れる。それだけは、させるわけにはいかない。今まで不幸しかなかったルウネに、これ以上の不幸を味あわせるわけにはいかないのだ。

「あはははははは

」

笑っているルウネの姿が、ぶれた。

それと同時にルウネの姿は消え、地雷でも爆発したかのように地面が吹っ飛び、土埃が舞い上がる。

移動するために地を蹴ったのだということにはわかったが、驚くべきはその脚力。『眼』を使ってようやく地面が抉れるレベルの雷牙とは次元が違う。たかが移動でも、ルウネのそれははや攻撃に匹敵

するほどの威力を秘めた強力なものだった。

最初の踏み込みですでに最高速に達しているルウネを、雷牙は捉えることができない。直線で自身の元へ接近していることはわかるのだが、速すぎて攻撃されるタイミングが見えないのだ。いつ攻撃をされるかわからなければ、防ぐこともできなければ避けることもできない。いかに『眼』を使える人間であっても、見えない攻撃であれば甘んじて受けるしかない。

だが、その点雷牙は少しだけ違う。雷牙が『眼』を発動した時にだけ使用が可能となる、『第六感超強化』。それさえ使えば、ルウネの恐ろしいまでの一撃を受けたとしても、咄嗟に急所を外すことくらいならば、決して不可能ではない。

「……………っ！！！」

その直感を生かし、雷牙はほぼ無意識のうちに状態を逸らした。

それと同時に顔をすれすれにルウネの拳が空を切り、打撃を与え損ねたルウネの拳は雷牙の背後に立ちそびえている樹木に命中した。

雷が落ちたような轟音が響き、それに驚いた雷牙が目に向けたそこには、樹木を易々と貫通しているルウネの姿があった。それくらいならば驚くことなどない。その気になれば雷牙にだってできる芸当だ。だが、問題は貫通している穴の部分。その周りが、『焦げている』。

理由ならすぐにわかった。ルウネの移動の速さと、繰り出した拳の

速さ。その2つが合わさった攻撃は、穴を開けている樹木との間に摩擦熱を生み、それが穴の周りを焦がしていたのだ。

拳法の類を使って戦闘をしてきた雷牙も、こんな真似は出来ない。焦がすほど速い拳を繰り出すことは、『眼』を使った身体の能力でも不可能なのだ。鍛錬がどうか、経験がどうか、そういった類の問題ではない。雷牙という人間の体の構造では、それを成すことは不可能ということなのである。

自身ではどうやっても不可能な芸当を、目の前のルウネは当たり前であるかのように容易くやってのけた。それだけで戦慄する。『第六感超強化』を使っていなかったらと思うと……。

「くそつたらあつ!!」

恐怖を振り切るかのように、状態を逸らしたままルウネに向けて拳を繰り出す。無我夢中で出したせいか、腰の振りも入っていない腕だけの威力のないものになってしまった。

そんな中途半端な拳を、ルウネは蠅でも払うかのように片腕でいなし、カウンターで先ほどの強烈な拳を雷牙の腹部に叩き込む。助走がない分、威力は落ちてこそいるものの、重い一撃なのは変わりがない。防御したところで、易々と貫通されるのは目に見えている。

「っ!!」

自分でも驚くくらいの速度で雷牙は身をよじらせた。たった数センチ。それ故、ルウネの拳を完全に避けきることはできなかった。

だが、それが雷牙を救った。ルウネの拳は雷牙の脇の肉を、まるで粘土細工でも壊すかのように抉り飛ばしたが、急所となる内臓部は逸れていた。激痛こそ走るが、即死するよりはるかにマシである。

「あは、あはは、はははははははは」

返り血を浴びてなお、ルウネは笑う。目の前の屈強そうな男が、こつとも呆気なく壊れていくことが、楽しくて楽しくて仕方ないようだった。

「う、く・・・」

現在、ルウネとの距離はほとんどないに等しい。負傷しているのに加え、ルウネとの地力の差が激しい今の状態でその距離を維持しているということは、どうぞ殺してくださいと身を差し出しているのと同等な愚行である。

距離を取らなければならぬということを考える間もなく、ほぼ反射に等しい速度で地を蹴って後ろへと跳ぶ。瞬間、ルウネに抉られた脇腹に激痛が走るが、そんなものに構ってなどいられない。一刻も早く離れなければ、次の瞬間には物言わぬ肉塊になっていてもおかしくはないのだ。

だが、その雷牙の考えを知ってか知らずか、ルウネは距離を取ろうとした雷牙にくつつき、思惑通りは離れない。右に移動しようが、左に移動しようが、ルウネは近距離を保ったまま追いかけてくる。

どうやっても、離れない。この危険な距離から、脱出できない。

「ふふふ」

逃げ惑う雷牙に、ルウネの手が伸びる。それは、『眼』を使って身体強化を施している雷牙の体を易々と挟む鉄拳ではなく、胸倉を掴むだけという生易しいものだったが、次の瞬間には雷牙の視点は反転していた。『投げられた』のである。

「くっ!!」

視界がぐるぐると回転して、どちらが宙でどちらが地面かもわからない。

ただ、そんな狂った視界で、雷牙は見た。

先ほど自身の脇腹を挟った鉄拳を、ルウネがこれ以上ないくらい不気味な笑顔で放ってきたのを。

「っ!!」

避けようにも、地に足がついていないため逃げる事ができない。

防ごうにも、平衡感が狂ってどこから攻撃くるのかわからない。

できなくて、わからないのならばと、雷牙は無我夢中で腕を重ねて防御をした。

「あは」

子供のような、実に楽しげなルウネの声が聞こえたその瞬間に、衝撃がきた。

落雷でも直撃したのではないかと思うほどの威力が全身を突き抜け、岩でも割れたような音が聞こえた。それと同時に襲ってくる、これ以上ないほどの激痛。音の正体はわかっている。ルウネの一撃をまともに受けた雷牙の両腕の骨が、粉々に粉碎された音だ。

脇腹を挟られたときと同じように、両腕を吹っ飛ばされなかつたのには理由がある。先ほどよりも威力が低くなっていたのだ。故に雷牙の腕は肉片になって飛び散ることはなく、雷牙の腕の骨を粉碎するに留まった。

威力が低くなっていたとはいえ、与えるダメージが大きいことには
変わらない。両腕の骨を粉碎した衝撃はそれだけにとどまらず、雷
牙の体を勢いよく吹き飛ばすまでに至っていた。

吹き飛ばされた雷牙の体は轟音をあげて木々をなぎ倒していき、そ
の度ダメージは蓄積していく。ただでさえ激痛で悶えている雷牙に
さらなる痛みが襲い、何度も意識が途切れそうになった。

何もかもが強力で、理不尽とも思えるルウネの戦闘力は底を知らな
かった。

「げふっ！ ごほっ！」

地に這いつくばりながら、雷牙は盛大に血を吐きだした。内臓とい
う内臓はすべて傷がつき、雷牙は全身の筋肉が弛緩していくのを感じた。心が折れたのだ。自身の全力よりも遥かに高い能力を誇る相手に、これ以上ないくらいほどのダメージを与えられたのだ。折れないほうがおかしい。

「つよ……い……」

立ち向かっていく気力も削がれ、戦う体力も奪うほど圧倒的な力を前に、雷牙は生まれて初めて戦いの最中に相手を称える言葉を呟いた。

そんな心を折られた雷牙に、いつの間にかルウネが接近していた。どうやら、立ち上がるうと奮起している間に近付かれたらしかった。逃げようと立ち上がるうとして・・・やはり立ち上がれなかった。当然だ。『折れた心は簡単には戻らない』のだから。

「きひひひ・・・」

歪んだ笑みを浮かべながら、ルウネは雷牙を見下していた。よほど楽しいのだろう。歪んだルウネの笑みは、言葉を放たずともそう言っていた。骨の碎ける音が、肉を抉る感触が、浴びた血から感じる温度が、これ以上ないくらい甘美なものであるうことは容易く予想がつく。

その甘美な瞬間をもつと味わいたいのか、ルウネはうずくまっている雷牙に蹴りを入れた。手加減というものを覚えたのか、雷牙の肉は微塵にはならず、先ほどと同じように吹っ飛ぶだけだったが、それだけでも弱っている雷牙にしてみれば強烈な攻撃である。

みみしめという、全身が軋む音を聞きながら、再び雷牙は宙を舞い、飛ばされた方向に立っている樹木をなぎ倒しながら、先ほどと同じように地に倒れ伏した。

立ち上がることはやはりできない。このままでは本当に殺されるということは重々承知しているのに、体が言うことを聞いてくれない。

「ひひ」

もう1度同じようにルウネが近づき、防御もできない雷牙に蹴りを入れる。受けたダメ ジが大きすぎたためか、さすがの雷牙も目の前が黒くなってきた。気絶の前兆である。このまま攻撃を食らい続ければ、確実に意識が飛ぶ。

だがやはり、折れた心が雷牙の足を引っ張る。立ち上がったところで、『何もできない』という事実が、立ち上がるという行為を許さないのだ。

「く……ぐ……」

立ち上がれない。全身に力を入れても、どう頑張っても立ち上がれない。

それならばと、雷牙は顔だけでもルウネに向けた。

それは、今の雷牙にできる唯一の抵抗だった。

何をやっても無駄だ囁き続ける、『自分の心』への抵抗だった。

ひっつ……ざまあみる、できたじゃねえか……

自分自身に悪態をつく。

『何もできないこと』などなかったのである。

だが、それだけだ。こちらへと近づいてくるルウネを見ていただけ。それが、今の状況を打開するとは到底思えない。本当に小さくて、ささやかな抵抗である。

一步、また一步と近づいてくるルウネ。まるで死刑を受ける受刑者の気分だった。ルウネの攻撃圏内に入ったときが、雷牙の死ぬ時。それがわかつているのか、ルウネはさらなる恐怖を演出するかのように歩む速さを緩める。

表情は、変わらず笑顔。笑いながら拳を振るい、蹴りを放ち、そしてポロポロになった雷牙を殺すだろう。雷牙を殺した後は、炎の壁に閉じ込められている3人の番に違いない。今のルウネは、壊せるのなら誰だって構わないのだろう。

仮に自分がここで殺されても、雷光とレナの2人掛かりならば何とかなるはずと、そんなことを考えていた雷牙の目の前に、ついにルウネが到着した。ここまで絶望的だと、逆に笑えてくるのが不思議だった。

ルウネの類には、血がついていた。それが雷牙のものか、はたまた村人のものなのかはわからないが、真紅の液体であるそれは、炎から発せられる光でやけにどす黒く見えた。

その血とは別に、ルウネの額から一滴の液体が流れ落ちる。何の液体かと思う間もなく、その滴は次々と流れ落ちてきていた。それが邪魔なのだろう、いやに透明なその液体を、ルウネは鬱陶しそうに腕で拭っていた。

ふ……汗か？

ふと、そんな疑問が雷牙の頭をよぎる。

動けば汗が出るというのは当たり前のこと。そもそも、ルウネは素の状態でも代謝がいいのだ。『眼』によって代謝も強化されているとしたら、何も不思議がることはない。

が、1つだけおかしい点がある。

ルウネの汗の量が、異常なのだ。

滝のようにという比喻が、これほど合う表現がないくらい、ルウネは大量の汗をかいていた。着ている服は、雨にでも打たれたかのようにはたばたと汗を落としている。体中の水分を出しきっているのではないかと思うくらいの汗だった。

ふなんで……こんな汗かいてんだ、こいつ……

いくら代謝がいいと言っても、この汗の量はおかしい。どれだけ本気で動きまわっても、ここまでかくことなどない。そもそも、戦闘力でここまで差が出ているのに、本気でルウネが動いているということなどないはずだ。

ならば、なぜこんなに汗をかいているのだ？

「っ！」

考え事をしている雷牙の顔面目掛けて、ルウネの足が迫った。先ほどと同じだ。蹴り飛ばして、雷牙を吹っ飛ばそうとしている。

両腕で受けようとしたが、雷牙の腕は動かない。必然的に歯を食いしばり、来るべき衝撃に備えるのが精一杯だった。

歯を思い切り食いしばった瞬間に、衝撃は来た。だが、先ほどのような強烈な重さはない。豪快に吹き飛ばなどということとはもちろんない。ふざけているのかと言いたくなるような、そんな柔な攻撃力だった。まるで、身体強化などしていないかのような・・・。

「!?!」

そこで、雷牙はようやく悟った。

ここまでボロボロにされても、まだ自身に『希望』があるという「
と」。

「ど……っらあああああああああ

大声を張り上げて、雷牙は立ち上がった。一度折れたはずの心は、自身の中で見出した希望によってもう一度だけ雷牙の体を動かしてくれたのだった。

立ち上がると同時に地面を蹴って、瞬時にルウネとの距離を取る。そして再び構えを取り、ルウネが接近するのを待つ。

なぜ、先ほどのルウネの攻撃が弱かったのか。

簡単な話、『ガス欠』である。

普通の状態でも、常に身体の強化を施しているルウネは、魔力の消費が著しく激しい。それなのに自分の意思でもう一段階上の身体強化を施し、さらに『眼』を使うことによってさらに上の身体強化を施した今のルウネの魔力の消費量は凄まじいものということになる。

その燃費の悪さによって、今のルウネは凶悪極まりないほどの力を身につけているわけだが、肝心の魔力の総量は特に多いというわけではないらしい。仮に、保持している魔力が多いのであれば、こんな短時間動くだけで汗が大量に流れるほど疲労がたまるわけなどないからだ。

加えて、先ほどの攻撃の虚弱さ。先ほど脇腹を抉られた一撃と比べれば、それこそ天と地の差がある。じっくりいたぶって壊すにしても、あの程度じゃ雷牙はおろか普通の人間ですら壊すことなどできない。

だからこそ、ある予測がつく。今のルウネは、もはやいたぶるほどの攻撃すらできないのではないのだろうか、と。

だが、これはあくまで雷牙の立てた推測である。状況証拠しか今のところの判断材料はなく、確実にガス欠と言いつけることだってできない。ひよっとしたら、雷牙がこの考えに辿りつくことも織り込み済みで、先ほどの弱い攻撃をしたのかもしれない。

それでも、この勝ち目のない戦いの中で初めて生まれた『希望』だ。これにすぎらなくて、一体何にすぎると、雷牙は奮起する。

「はー……、はー……、はー……」

距離を取った雷牙に、ルウネは肩で息をしながら視線を向ける。じわじわと壊すことを楽しむ素振りにはもう見えなかった。面倒だという感情が、向けられている瞳から容易に読み取れる。

明らかに、疲れている。いつの間にか呼吸が荒くなっているのに加え、表情が心なしに青ざめているのは、魔力が底を尽きそうになっているのだろう。

魔力は生命の源と言っても過言ではない。それが空になれば、必然的に死が訪れる。つまり、ルウネが今の状態を保持し続ければ・・・自滅する。真つ正面から挑まずとも、勝利することは可能なのである。

仮に、ルウネが極悪で、救いようのない罫であれば、雷牙も自滅を狙っただろう。わざわざ危険を冒してまで、接近しようなどと絶対思わない。要は、罫を倒せさえすればいいのだから。

だが、ルウネはまだ救える。今こうやって暴れているのは、いわば眠っていた罫としてのルウネ。破壊衝動に駆られている罫としての感情をもう一度眠らせてしまえば、おそらく元のルウネに戻るはず。

元に戻らなかつた場合のことなど考えない。考えたくもない。ようやく見えた希望にかけるだけだ。万が一の最悪の結果のことなど、目に入れている場合ではない。

「・・・そんじゃま、行くぜ」

覚悟を決めて、雷牙は『眼』を発動させる。まだ魔力こそ余力はあるが、受けたダメージが大きすぎて長い時間は戦えない。故に、必然的に短期戦。加えてルウネの魔力をこれ以上消費させないためにも、雷牙は一撃で決めなければならぬ。

先ほどのルウネ相手ならば不可能だっただろう。だが、今の疲労困憊のルウネならば話は別だ。『眼』を発動させているとはいえ、体から出ている魔力は微量。攻撃の威力が低いこともわかっていて、それならば、行くしかない。

「っしやああーっ!!」

気合を入れ、雷牙は特攻をかける。蹴った地面は抉れ、読んで字の如く雷のような速さでルウネに突っ込んでいく。

雷牙の速さを目の当たりにし、さすがのルウネも表情を強張らせる。先ほどは欠伸が出るほど鈍かった雷牙の最高速度が、今になって捉えることができなくなったのだ。当然、焦る。

迫ってくる雷牙に対して、ルウネは愚直に拳を繰り出すが、それはまるで子供がふざけて友人にちょっかいを出すかのような威力がないもの。そんな攻撃とも呼べない攻撃が、雷牙に当たるわけがない。

ルウネの拳を眼前で悠々とかわし、そのままルウネの目の前に迫る。完全に攻撃の射程圏内だ。ここならば雷牙の拳が入る。その拳で顎を殴って脳を揺らし、意識を飛ばせばそれで終わる。最初の狙いと同じだ。

だが、違うのは腕の状況。最初こそダメージはなかったが、今の雷牙の両腕の骨は粉々に砕かれている。故に最大のパフォーマンスが期待できず、激痛のせいで威力が激減してしまう結果になる。となれば、ルウネを一撃で気絶させることも怪しい。下手を打てば、それが火種となつてルウネの怒りに火がつき、『眼』の使用による魔力の消費量が激しくなつて自滅が早まるとも限らないのだ。

だから、雷牙は拳を使わない。使うのは、脚だ。ダメージがほとんどない脚ならば、ルウネの急所を的確に狙うことなど容易い。

「お、つらあああああーっ！！！！」

身を翻し、雷牙は回し蹴りを放った。体全体が反動で軋むが、耐えられないほどではない。蹴りの速さも威力も申し分ない。ほんの少しだけ力は抜いているから、この一撃がルウネの命を刈り取ることはないはずだ。

放った蹴りはルウネの顎に命中するように向かっていく。ルウネはその蹴りを防ごうと、空いているほうの腕で防御しようとするが、もはや遅い。雷牙の蹴りはルウネに防がれる前に振り切られ、しっかりと顎へと命中することに成功した。

「あ、ぐ……」

顎を強打し、ルウネの脳が揺れる。魔力に余力があり、『眼』を使った体だったらこれしきのことでは倒れはしないだろうが、今のルウ

ネには強烈であり、気絶するには十分な威力だった。

糸が切れた人形のようにルウネは脱力し、その場へと倒れ伏した。体からはもう魔力は出ていない。「眼」の発動が解けた証拠だ。これで過剰な魔力の消費は避けさせることができたが、目を覚ました時に元に戻っているかどうかはわからない。

色々考えるべきことはあるが、ひとまずルウネを気絶させることは成功した。次にやるべきことは、炎の壁に閉じ込められている雷光達の救出。こうやっている間も、3人は熱気に当てられて苦しんでいるはず。

両腕が使えない雷牙が行ったところで、何ができるといっわけではない。炎の壁の中へ再び突入しても、ただ炎の熱気に当てられて途方に暮れるだけ。救出するどころか、逆に中の連中の足を引っ張ることになるのは目に見えている。

だが、そんな理由で仲間の危機を見守っていられるほど、雷牙は気が長くない。何もできないかもしれないが、皆が危険な場所に立っているというのに、自分1人だけ安全な場所にいるということが耐えられないのだ。

「聞こえてるかあつ!? こっちは終わったぞ! 今から助けに行くからなあつ!」

炎の中にいる3人に聞こえるように叫び、雷牙は再び炎の中へと突撃しようと思いを吸い込んだ。

第105話 異種編14

そこで、雷牙は異変に気がついた。

徐々にはあるが、目の前の巨大な炎が小さくなってきているのだ。

「あん？」

踏み出そうとした足を止め、雷牙は間の抜けた声を出す。

ひよつとしたら見間違いではないかとそんな考えが雷牙の頭をよぎったが、よくよく見てみれば広がり続けるはずだった炎は今もなお縮小を続けている。自然に起こり得ないこの事象に、雷牙はますます混乱する。

縮小を続けている炎は驚く雷牙をよそにどんどん小さくなっていく。不思議なのは、炎が燃え移ったはずの樹木や草花の火が何時の間にもやら鎮火し、細い煙を発しているだけになってしまったことだ。炎の規模が縮小していることと何か関係があるだろうことは予想がつくのだが、具体的な原理まではわからない。

やがて炎の縮小は止み、すっかり小さくなってしまった炎は、まるで空を翔ける龍のように1本の細長い形状となって上空へ舞い上がっていき、そのまま霧のように広がって消えていった。

炎の中には、神器『神抜刀』を地面に突き刺して集中しているレナと、風蘭をかばうような形で地に伏せている雷光の姿があった。ぱっと見る限りでは3人とも炎に焼かれたような跡は見当たらない。

「おい、大丈夫か？」

3人に近寄り、その声をかける。

それが聞こえたのか、レナが最初に目を開け、次に雷光と風蘭が立ち上がった。3人とも、雷牙が無事だったのを目の当たりにしてほつとしているようだった。

「私たちは、大丈夫。ただ、炎を消すのに手間取っちゃって、手伝いに行けなくてごめんなさい・・・」

申し訳なさそうに、レナがそう言う。

手助けがなかったのは確かに痛かったが、雷牙が抜け出してきた時よりも炎の勢いは遥かに大きかったから、3人とも出るにも出られなかったのだろう。

それに加え、あれだけの規模の炎を操り、そして鎮火させるとなれば時間もかかる。手助けなどできるわけもない。ルウネを気絶させることも大事だが、それと同じくらい消火作業も重要であることはわかる。

「そりゃ別に気にしてねえんだけどよ、それにしても驚いたぜ。あんなでけえ炎を操るなんてな。最初見た時は何事かと思ったぜ」

「時間をかければあれくらいなら何とかできるよ。魔力で炎を包み込んで、燃料を草木から私の魔力に挿げ替えちゃえば、あとは操るのは簡単。でも、やっぱり時間をかけないといけなかったのは私の実力不足・・・かな」

あれだけの芸当を目の当たりにした雷牙は、どうにもそうとは思えないのだが、レナにはレナなりの基準があるのだろうと思って何も言わなかった。

「それにしても兄い、やられましたね。腕、ボロボロじゃないですか。よく神器を使わないで勝てましたね」

満身創痍の雷牙を見て、雷光が感心するような声でそう言った。雷牙の強さを知っている雷光にしてみれば、ここまでダメージを与えた敵を称賛せざるを得ないのだろう。並大抵の強さでは、雷牙をここまで傷つけることなどできるわけがない。

「腕だけじゃねえけどな。体全体がギシギシいつてらあ。たぶん、今まで戦った奴の中で一番強かった」

「・・・ということは、やはりルウネさんは？」

「ああ、『罨』だった。けど、殺しはしてねえ。気絶させたただけだ。風蘭、ルウネの様子、見て来てくれや」

「う、うん、わかった」

そう言って頷き、風蘭は足元の医療道具の詰まった倒れているルウネの元へと駆けて行った。

それを見送って気が緩んだのが、雷牙はその場に座り込んでしまった。度重なるダメージが、ここにきて噴き出してきたらしく、表情を歪めていた。

「雷牙！ 大丈夫！？」

「大丈夫だつて。ただ、すっげえ疲れたし、腕が死ぬだけ痛え。あと、脇腹もだな。これ、治せるか？」

雷牙は、レナのほうへ両腕を差し出した。骨を粉碎された両腕はところどころ青黒く変色しており、脇腹は酷く抉られた部分から血が大量に流れていた。細部までの具合は明かりを灯さなければ何とも言えないが、一刻も手当てをしなければならぬことは明白であった。

「……やってみないとわからない。とりあえず、服脱いで横にな

つて。魔力は傷に集中させてね」

「りょーかい。頼むぜ」

そう言いながら服を脱ぎ、雷牙はその場へ横たわる。

その間にレナは、村人たちが投げ入れていた木の枝を拾い集め、それらを空気の通りが良くなるように積み重ねた後、地面に突き刺していた『神抜刀』を抜く。そしてそのまま『神抜刀』に魔力を込め、すぐさま魔力を炎へと転化させ、積み重ねた木の枝に引火させた。

引火した際、暗かった辺りがほんのりと優しい明かりに照らされる。先ほどの巨大な炎と比べれば、いくらか心が落ちつく。規模が小さければ、人を死に至らしめることが可能である炎も、これほどまでに安心するのだから不思議である。

「よし、これで明るくなった。雷牙、ちょっと触るよ?」

「あいよ」

一言断って、レナが雷牙の腕を取り、真剣な表情で診る。

雷牙が痛がると思ったのか、遠慮がちに触診したり、じっくり眺めたりと、腕の具合を慎重に探る。

「・・・腕のほうは、かなりひどい。このまま私が魔術を使っても、変に骨がくっついちゃう」

診断の結果を、レナは隠しもせず正直に雷牙に伝えた。

レナが使う、一般的な回復魔術は、使った相手の体力と引き換えに怪我の治癒を早めるというものである。そのため、雷牙の腕のような複雑に骨折した状態で使うとなると、意にそぐわぬ形で骨がくっついてしまうことになる。『治癒を早めることはできても、上手く傷を治すこと』はできないのである。

「こっちは終わったよ。ルウネは大丈夫だった。時間が経てば起きてくれると思う」

どうしたものかと頭を悩ませるレナの元へ、ルウネの診察を終えた風蘭が医療用の道具が入ったバッグを持って駆けてくる。表情に憂いは見えない。思っていたよりも、ルウネの状態は悪くなっただらしい。

「風蘭・・・、どうしよう。私じゃ、雷牙の腕は治せないよ」

レナが不安そうに、やってきた風蘭にそう言う。珍しく、弱気な声だった。傷ついた仲間に何もできないということが悔しいのだろう。

「？ レナでも治せない？ どれ、ちょっと診せてみて」

その場にしゃがみ込み、風蘭が雷牙の腕を取る。ふむふむと頷きながら肩から指の先まで触診していき、片腕全体を診終わった後、レナの言葉に納得したと言わんばかりにため息をついた。

「あゝ、確かにね。これじゃ変にくっついちゃうもんね」

「でしょ？ どうしよう・・・」

「そんな顔しなくても大丈夫だってば。これから切開して、出来るだけ元の形に修正して固定するから、その後に回復魔術をお願い。そうすれば、変に骨がくっつく確率はぐっと減るから」

特にうるたえた様子もなく、風蘭はバッグからメスやら、金属の細い棒やらを取り出した。メスは腕を切開するため、金属の細い棒は骨を固定するためのものであるという事は、医療の深い知識までは持ち得ていないレナにでもわかる。

回復魔術とて万能ではない。単純に、傷を通常よりも早く治癒させるといっただけのものだ。少し前に、刹那の腕をレナの回復魔術で繋げたことがあったが、あれは切り口がとても綺麗だったからであり、今回のような複雑に砕けた骨を元通りに治すということとはできない。

だからこそ、風蘭の医療知識が生きる。もともと医療は人の怪我や病気に対して、最も早く傷が治るように、最も良い状態で治すことを目的として考えられた知識や技術だ。魔術や魔力が使えない人間あるいはそんな超常現象を知らない人間が編み出した英知である。

だが、結局は完治までに時間がかかってしまう。風蘭の行う医療行為は、『傷を上手く治すことはできても、早く治すこと』はできないのである。もちろん、傷に対して何もしないよりは、治療を行ったほうが断然に傷の治りが早くなることは確かではあるが、結局は人の持つ治癒力に頼るしかない。

しかし、風蘭の使う医療術と、レナの使う回復魔術、両方を組み合わせた場合、これまでとは比にならないほどの性能を発揮する。風蘭の医療術で最適な回復状態を整え、レナの回復魔術で完治にまで至る過程を早める。相乗効果という言葉が見事に合う、万能な回復手段であった。

「じゃ、サクッとやっちゃうからね。本当なら姉さんにやってもらうんだけど・・・、まあそこは我慢しなさいよ」

風蘭の治療の技術は、姉である風花に少しではあるが劣る。その分、治療薬などの知識や調合術は風蘭のほうが深いのはあるが、この場合は調合の知識など役には立たない。純粋な手術の腕が要求される。

とは言っても、風蘭も手術の腕が壊滅的に悪いというわけではなく、今回のような簡単な部類に入る手術くらいなら普通にやっただけのける。最も、メスを捌く際の繊細さなどは風花に劣ってしまうが、結局は

治るのだから問題はない。

「わあってる。じゃ、手っ取り早く済ませてくれよ」

それだけ言っつて、雷牙は目を閉じた。さすがに疲れたらしい。ものの数秒とかからないうちにいびきが聞こえ始めるが、それでも腕に魔力を集中させているのはさすがとしか言いようがない。

第106話 異種編15

雷牙の手術は無事終了した。粉碎され、散らばっていた骨を風蘭がうまく具合に集めて固定した後、レナが回復魔術で雷牙の骨を綺麗にくつつける。その後、固定していた金属の棒を取り出し、取り出す際に切開した部分を再びレナの回復魔術で治癒させる。

腕1本につき約30分。合計で約1時間。その大半が骨を固定させるための作業ではあるが、それでも十分早い。焚火で辺りが照らされているとはいえ、昼間に比べれば当然暗い。そんな悪条件の中、それだけの時間で治療を完了させた風蘭の腕前も、なかなか馬鹿にできるものではない。

脇腹のほうは、肉片こそ吹っ飛んでいたが、傷の範囲はそれほど広くなかったため、両腕ほどの治療時間はかからなかった。風蘭が傷を縫い、その後レナが傷を塞ぎ、最後に抜糸をして終わりだ。

手術が終わった後、うまく動くか、痛みや違和感はないかと雷牙が腕を動かしている最中、暗かった空が徐々に明るくなってきた。もうじき夜が明ける。村人から殺されかけ、そして暴走したルウネを止めるために戦わざるを得なかった、悪夢のような夜が・・・、もうすぐ終わる。

「どう？　変な所とか痛い所とかない？　あつたらまた切開してみるけど」

手首を動かしたり、虚空に向けて拳を繰り出したりして腕の具合を

確かめている雷牙に、風蘭がそっけなく尋ねる。

「何ともねえ。ちゃんと動く」

「ま、当然ね。・・・それで、どうするの?」

「あ?」

「ルウネのこと。・・・どうするの?」

風蘭からそう問われ、雷牙は閉口してしまふ。

ルウネはこの世界の『畏』だということはもはや周知のことだ。恐ろしく強く、凶悪で、凄まじい。戦闘を行った雷牙を見ればそれが冗談でないことくらいわかる。力の使い方が今一つわかっていなかったためか、何とか勝利を得たが、このまま野放しにしておくには・・・、正直危険過ぎる。力の使い方を完璧に覚えてしまったら、本当に畏としてのルウネはこの世界を滅ぼしかねない。

だが、一方で今回の事件はルウネの意思に反するものである可能性が高い。確かに、『畏』としての人格は、人を傷つけ、壊し、殺すことを喜びとする、悪質極まりないものではあるが、雷牙達が接してきたルウネが、自ら望んでそうしたとは考えづらい。

村人たちから理不尽極まりない扱いを受けてきたルウネ。それこそ、

殺してやりたいほど怨んだことだろう。だが、ルウネは今までそれをしなかった。いくら人数がいるとはいえ、野生の中で育ったルウネができないわけがないのだ。

その理由は、単純だ。ルウネが争いを好まない、心の優しい人間だからだ。

そのルウネが、自分を散々痛めつけた村人たちだけではなく、敵ではない雷牙にまで牙を剥いた。人を壊したいという理由以外で、ルウネが雷牙を襲う理由など皆目見当つかない。何か深い事情があるのかどうかは本人に訊いてみるまでわからないが、ほぼ確実にそんなつもりではなかったはずだ。根拠はないが、確信めいた何かがある。

いずれにせよ、判断がしづらいことは確かだ。もちろん、目を覚ましたルウネが正気に戻っていなければ、息の根を止めるという選択肢を選ばざるを得ないのだが、そうでなかった場合はどうすればいいかわからない。

無責任かもしれないし、優柔不断なのかもしれない。だが、選ばなくてはいけない2つの選択肢が、両方とも重く、選びがたいものなのだ。

今まで悲惨な人生を歩いてきたルウネの存在すらをも否定し、人としての幸せを一切知らぬまま、最も親しい者である雷牙達が命を奪う、この世界に関して最も安全な選択肢か。

再び暴走しかねないルウネをこのまま放っておき、暴走させた元凶である村人たちのいるこの世界に生き続けさせるといふ、博打に近い選択肢。

選べと言われて、簡単に選択できる物ではない。ルウネの事情を知っているのならば、なおさらだ。

風蘭の問いに、何と答えようかと雷牙が悩んでいる、その最中。

聞き覚えのある呻き声が、4人の耳に届いた。

聞き違えることなどない。この声は、ルウネの声だ。

「目を覚ましたようですね、ルウネさん」

本来ならば喜ばしい出来事のはずなのだが、雷光の表情は和らげず、口調は至って冷静なままだった。問題はここからだということを理解しているのだろう。

雷牙の言葉を最後に4人は一切口を開かず、無言でルウネの元へと歩いた。出来ることならば正気に戻ってほしいと願いながら、一歩一歩近づく。

頭をぶるぶると震わせて意識を覚醒しようとするその姿は、一見する限りでは暴走時のような荒々しさはないように思われる。『眼』を使っていたときのように、体中からは魔力が溢れ出してだっていない。まさに、初めて会ったときのルウネのままの姿だ。

しかし、そう簡単に雷光は警戒を解かない。万が一攻撃をしてきたときに回避ができるような距離を取り、念には念を重ねる意味でル

ウネに問いかける。

「……ルウネさん、具合はいかがですか？」

「……大丈夫。どこも痛く、ないよ」

雷光の声に、どこか元気がないような声色でルウネが応える。どうやら、正気に戻っているようだ。殺気のかけらも感じられない。

そこで、ようやく4人は警戒を解き、座り込んでいるルウネへと歩み寄った。

「まあ、どこも悪くねえならよかった。気絶させた身としちゃ、結構心配だったからな」

「……そう。心配してくれて、ありがとう」

声をかけた雷牙の顔を見ようとせず、ルウネは俯いたまま、それだけ言った。

「……ルウネさん、元気ないね。やっぱり、どこか痛いのか？」

「覇気がないルウネのことを気遣ってか、レナがそう尋ねる。」

「口先では大丈夫と言っているけど、本当は無理をしているかもしれない。そうであったとしたら、一刻も早く治療をしなければならぬ。」

「だが、当のルウネは首を横に振り、ぼそつと一言口にした。」

「本当に、体は大丈夫。どこも痛くないから、大丈夫だから。」

「それを聞いて、心配をしていたレナもさすがに押し黙ってしまった。本人が大丈夫だと言っているのに、無理に回復魔術を施すわけにもいかない。かと言って、これだけ元気がないルウネを放っておくわけにもいかない。」

「どうすればいいかとあれこれ悩んでいたレナの代わりに、雷牙がルウネに向かって口を開く。」

「……お前、『覚えてる』のか？」

「先刻の暴走行為。」

「村人を襲い、そして雷牙にまで襲いかかったときの事。」

「その記憶があるかと、雷牙は単刀直入にそれを尋ねた。」

「……………」

無言。

ルウネは無言だった。

口を開かず、何も言わず。

ただ一度だけ頷いて、そして両手で顔を覆った。

自身が寒気を覚えるほどの凶悪性を秘めていたこと衝撃と、その凶刃を雷牙に向けたことの後悔からだった。

「……そうか、覚えてたのか」

雷牙が優しくそう言ったのを皮切りに、ルウネは激しく嗚咽し始めた。

生まれてきてから、どんなにつらいことがあっても、どんなに苦しいことがあっても絶対に泣かなかったルウネが、今になってようやく抑えてきたものを吐き出した。

それこそまるで、ダムが決壊するかのようだ。

「う、あ……ああ、あああ——っ——！」

叫ぶように、ルウネは泣いた。

流れ出る涙を隠すことなどなく、泣いていることを悟られぬよう静かに泣くでもなく、今まで溜め込んできた悲しみや憤りを全て込めて、ルウネは泣いた。

「ア、アタシっ！ ゆる、せなくてっ！」

しゃっくりを上げて、震えた声で、それでも伝えようとルウネは叫ぶ。

「どうして私だけじゃっ……ないのっ！ みんな、はっ！ みんなは悪くないっ……のっ！」

表情を隠していたルウネの手のひらから、涙がこぼれてくる。

一筋、また一筋と涙が手を伝って地面に落ちていくのを、4人は何

も言わずに見つめていた。

「そしたらもう・・・止まらなくてっ！ どうしても、抑えられなく、てっ！ ダメだって、止めてっと思ってるのに、どうして、も・・・止められなかったっ！」

雷牙と戦っている最中、ルウネの心の奥底にはちゃんと自身の意思が存在したのだろう。親しい人間と戦闘を繰り返すだけではなく、完膚なきまでに壊そうとする嗜虐心と、必死になって戦っていたのだろう。

「・・・そうかよ」

ルウネの叫びを聞いた雷牙は、ほっとしたような表情をして微笑んだ。やはり、ルウネの意思でなかったのだと、本当のルウネは人を傷つけて楽しんだりなどしない、心の優しい人間だったのだと、それを確信した。

「泣くなよ、お前が望んでそんなことをしたなんざ、誰一人だっと思っただけよ」

「でも・・・、でもっ！ アタシっ！」

「確かに、傷つけたかもしれないよ。でも、誰も死んじやいない。怪我はしたかもしれないけど、死ぬまでいくような重傷は負わせてねえ。今までやられた分の仕返しだって思えば、何の問題もねえさ。今までお前が受けた痛みと比べりゃ、ずいぶん可愛いもんだと思うぜ、俺はよ」

「そんな、こと言っても・・・」

雷牙の言うことに、ルウネは頷くことをしない。いかなる時にも暴力を振るわなかったルウネだが、それは優しさとはまた別に、やってはいけない卑劣な行為だと強く思い込んでいたことも関わっているのかもしれない。

暴力と恐喝と暴言を、浴びるほど受けてきたルウネは、それを受けることの痛みを知っている。だからこそ、それを他人に与えた時には、必要以上の罪悪感に襲われるのだろう。痛みを知っているだけ、常人よりも余計に。

自分を許そうとはしないルウネに向かって、雷牙は言った。

「それによ、結構嬉しかったしさ」

「え・・・？」

雷牙の言葉に驚き、ルウネは俯いていた顔を雷牙へと向ける。

「俺たちのために、怒ってくれたんだろ？ だからよ、何か変な話
だけど、嬉しかったんだ」

「嬉しかったの・・・？ 本当に？ あれだけのこと、しちゃった
のに？」

泣き腫らした目で、ルウネは雷牙をおそろおそろと見つめる。

雷牙は笑い、そして親指を立てた。

「おう！ なあ？」

ルウネの涙ながらの告白を見ていた3人に、雷牙がそう尋ねる。

3人は少しもためらうことなどせず、笑って頷いて見せた。誰1人
として、ルウネのことを憎んだり、暴走行為が許せないものだと思
う者などいなかった。

「あ、あ・・・」

後悔の念と、自身が持つ凶悪性に怯えていたルウネの表情は途端に
柔らかくなり、ある言葉を言おうと必死に震える声を絞り出す。

なかなか出てこない言葉。突っかかる声。もどかしい気持ち。

それでも1度間を置くことなどせず、ルウネは声を出し続け・・・、
そして言った。

「あ、ありがとう・・・」

雷牙その言葉は、自身の行為に対する免罪符のようなものなのだろう。心に巢食っていた罪悪感と自己嫌悪はそれによって薄れていき、取り乱していたルウネの表情に笑顔が戻った。

この一連の流れによって、雷牙達の心は決まった。ルウネの命を奪うような真似はすべきではない、生きていてもいいのだと、生きるべきなのだと確信した。

酷い仕打ちを受け続けてきたのにも関わらず、その原因を傷つけて泣きじゃくる優しいルウネを、畏として始末するなどあり得ない。今までの『畏』とは違い、自分の意思とは逆の行動を取らざるを得なかったルウネを責めるということだって筋違いだ。

「でも、この世界には置いておけないですね」

雷光が、深刻なことを雷牙に告げた。

ルウネの心の奥底には『畏』としての意識が存在していることは確

かだ。人を傷つけることに喜びを感じ、恐怖に慄いている姿を見ることに快感を感じる、非人道的で残酷な人格。

その人格の発現の原因は、ルウネを虐げてきた村の人々の行為の他ならない。積もりに積もったルウネの負の感情が爆発し、結果『畏』としての人格が目覚めてしまったのだから、根本の原因は村人たちの歪んだ常識であると言わざるを得ないだろう。

だからこそ、この世界にルウネを置いておくわけにはいかない。おそらくではあるが、死人が出ていない村人たちは、再びルウネを討伐しようと足を運んでくる。そうなれば、再びルウネが『畏』としての猛威を振るってもおかしくない。雷牙達のような強者がいなければ、今度こそ歯止めが利かなくなり、世界を滅ぼすということに繋がりがかねない。

と言っても、ルウネを他の世界へ置き去りにするわけにもいかない。移動した先の世界に住む人々がルウネを受け入れてくれるかわからないからだ。もしも村人たちと同じような考えを持っていたとしたら、今回と同じようになる。それでは意味がない。

何かいい案はないかと思考している中、レナが閃いたと言わんばかりにはっと顔を上げ、口を開いた。

「そうだ！ あのね」

第107話 異種編16

「ふあゝあ・・・。あら、帰ってきたわね。おかえりなさい」

読んでいた分厚い本をパタンと閉じて、異次元図書館の管理人である次元の神『オリアス』が、畏の張つてある中心世界から帰ってきた雷牙達一同に労いの言葉をかけた。

長時間読書に勤しんでいたためか、オリアスは掛けてあるメガネを外し、目頭を指で押さえた後、ゆっくりと揉みほぐしていた。神といえど疲労は溜まるものなのだろうか、4人が全員疑問に思ったが口にはしなかった。

「んんん？ あらあら、また新しい子連れて来たの？」

再びメガネをかけた後、オリアスは4人の後ろに隠れているルウネを見つめ、そんなことをレナに尋ねる。

雷牙達を最初連れてきた時も、確か同じような反応があった。一気に4人も連れて来てくれちゃって、うちは旅館じゃないのよ、と言われたのをレナは覚えていた。

「えっとですね、オリアスさん。この子・・・」

「新しいお仲間なんでしょ。わかってます。でもねえ、あなた達のベースキャンプに食料やらを供給してるのは私なのよ？ 畏を外してくれる人が増えるのはありがたいけど、こっちの負担っていうものをちよつとは」

「この子、その『畏』なんです」

オリアスの文句をレナが遮り、衝撃的である事実をオリアスに告げた。

外すべきであるはずの『畏』。

世界に悪影響しか与えることのない、存在してはいけなはずの『畏』。

その『畏』が、あろうことにこの異次元図書館にいる。

それを告げられたオリアスが一体どんな反応をするかなど、容易に考えられる。驚くか。怒るか。敵意をむき出しにするか。無言で攻撃するか。いずれにせよ、ルウネがオリアスに温かくは迎えてもらえないだろうということは最初からレナにはわかっていた。

だからこそ、話し合う。誠意を持って真剣に自らの主張をオリアスに伝え、生半可な決断で『畏』であるルウネを連れてきたわけではないということを知ってもらおう。それが、レナが提案した考えであった。

「あら、そうなの。目の色が違うから珍しいなって思ったけど、畏とは思わなかったわ」

だが、4人が予想していたことは外れ、オリアスは『畏』であるルウネに対して嫌悪感や敵視することはなかった。ただ純粹に珍しいものを見るような少しだけ驚きの混じった視線をルウネに注いでいる。

「……お、怒らないんですか？」

ルウネを連れてくるという案を出したレナが、恐る恐るオリアスに尋ねる。

「どして？」

「だって、その……『畏』を連れてきたから、てっきり怒られるかと思って……」

「あゝなるほどね。でもその子、全然殺気とか出してないし、襲ってくる気配とかないし、敵意がまったくないのよね。敵じゃないのなら、無理に追いつ返す必要もないし」

それだけ言って、オリアスは不安がっているルウネに視線を向けた。雷牙の後ろに隠れて縮こまっているルウネは、まるで捕食者に怯えている小動物のようだった。その恐怖心を取り払おうと、オリアスはルウネに微笑みかける。

敵対されると思っていたオリアスが友好的な態度を示したためか、ルウネはほっとしたような安堵の表情を浮かべ、雷牙の後ろからゆつくりと出てきた。

「その子が『畏』ってことになるよ……。大方、危険性はないから処理の判断に困って連れてきたってところかしら？」

「そんなところですよ。あの世界にいと、また暴れ出すかもしれない。だから、他にいい世界がないかお尋ねしたくて」

「ふんふん、了解しました。ただね……」

本がぎっしりと詰まっている棚が、ずらつと並んでいる部屋の一面を見渡して、ため息をつきながらオリアスは言った。

「ご存知の通り、この図書館には無限の本……。世界があるわ。その中からその子　ルウネちゃんに合った世界を探していくのは、はっきり言っただけかなり手間と時間がかかるのよ。運が悪ければ、死ぬまで見つからないかもしれないわよ？」

神の手によつて無限に引き裂かれた世界。その全ての世界に繋がっている本が収納されているこの『異次元図書館』には、オリアスの言う通り数え切れないほどの本が存在している。

その本の中から、異世界中に仕掛けられた『罫』の有無を調べ、そして全世界を滅ぼそうと目論んでいる『神』を名乗る人間と、刹那が最初に出会った『リバー』を始めとする『神の使い』たちの本拠地を見つける作業をしつつ、さらにルウネに適している世界を探すのは、正直言つてかなり骨が折れる。

いくら次元の神といえど、無限にある本の中身を逐次記憶しているわけではない。無数にある本を1つ1つ風潰しに探すという行為は、肉体的にも精神的にもつらい作業なのである。

「それじゃあ・・・ルウネはどうなるってんだ？」

黙っていた雷牙が、オリアスに尋ねた。

焦っているその様子からは、ルウネのことを心底心配しているような感情が読み取れる。

「元の世界に帰すわけにもいかないんでしょ？ だったら、ルウネちゃん自身に探してもらうしかないわ。私がやってるように、1冊ずつ本を広げて、文字を読んで、どんな世界なのか把握してから実際に歩いてみる。合った世界が見つかるまで、それを繰り返すの。めげることなく、ずっと」

図書館に存在している本は、何もオリアス以外の常人が読めないわけではない。魔力を込めることによってその世界へのゲートが出現するという点と、誰にでも理解できる特殊な文字で書かれているという点さえ除けば、至って普通の本なのである。

オリアスがルウネの世界を探すという手間をかけられないとなれば、当人であるルウネがその作業をこなすというのは理に適っている。自身の目で確かめ、そして体験した世界ならば、それはルウネに適した、実に素晴らしい世界に違いない。

「じゃ、じゃあ・・・、ア、アタシ、ここに居て、いいんですか？
こんな、こんなアタシでも、ここに居させてもらって、いいんですか？」

不安がりながらも、しっかりとオリアスの目を見つめながら、ルウネは聞いた。

「もちろんよ。何も無い所だけだね。それでもいいなら、こちらとしては一向に構わないわ」

元居た世界では、忌むべき存在として虐げられ続けていたルウネ。

村人たちから石を投げられ、暴言を吐かれる度に、自分は居てはい

けない存在であるということを嫌でも実感させられてきたルウネ。

そのルウネにかけられた、オリアスの言葉。

居ても構わないと、そう言われたルウネの不安げな表情は、喜びに溢れた表情へと変わっていった。

「は、はい！ え、えっと、その、お世話になります！」

すっかりながらも元気よく言っつて、ルウネはオリアスに頭を下げた。

「よろしくね。頑張っつて、自分の住みやすい世界を探すのよ」

にっこりと笑いながら、オリアスはルウネに言っつた。

何だかんだ言っつて、人気がないこの『異次元図書館』に、新たな客人がやっつてくることが嬉しかっつたらしい。

その様子を見ていた雷牙が、満足げな表情をしてルウネに言っつた。

「よかっつたじゃねえか、ルウネ」

「うん！ 本当によかったよ！」

ルウネの喜びようといったら、この上ない。無邪気に喜んでいるルウネの表情は、歳相応な可愛らしい笑顔だった。

「それじゃ、ルウネちゃんはこっちで預かるわ。たまに休憩がてらそっちによこすかもしれないから、その時はよろしくね」

「ああ、了解だ。ルウネのこと、頼んだぜ」

「わかってるわ。さ、あなた達も疲れてるでしょ。ゆっくり体を休めなさいな。刹那君たちのチームも帰ってきてるから、色々報告し合ってちょうだいね」

そう言っつて、オリアスは他の本よりも一回り小さい緑色の本を雷牙に手渡した。オリアスが提供してくれた、ベースキャンプとして機能している世界へと続く本である。もともと、大きさは他の異世界と比べる間でもなく極小のものであるが、8人を収容するには十分過ぎるものだ。

オリアスから手渡された本に雷牙が魔力を込めるなり、遠雷のような音が響き渡り、本の上にゲートが出現した。このゲートをくぐれば、刹那たちが待っている世界へと戻れる。向こうのチームはうまくやったのだらうかと、今更ながら気になってしょうがなかった。

「それじゃ、俺から行くか」

雷牙はそう言っつて本を床に置き、ゲートに入ろうと身を乗り出した。

「あ、ら、雷牙！ 待って！」

その雷牙を、ルウネが慌てて引き止める。

何事かと思い、雷牙はゲートに入るのを止め、ルウネのほうを振り向いた。

「ありがとう」

たった一言、ルウネはそう呟いた。

気味悪がらずに接してくれたこと。

優しくしてくれたこと。

ポロポロになっても、暴走した自分を止めてくれたこと。

正気に戻った後も、お前は悪くないと励ましてくれたこと。

いくら言葉を紡いだところで、この気持ちを全て伝えることなどできな。

だから、『ありがとう』の一言に全てを込めた。

ルウネの気持ちの全てを表す、魔法の言葉。

それが伝わったのか、雷牙は親指を立て、笑顔でルウネに応えた。

「おっ！」

ルウネのその表情を見て、雷牙は今一度確信した。

やっぱりルウネは、望まれぬ存在などではないのだと。

「レナも、雷光も、風蘭も、ありがとうっ！」

とびきりの笑顔。

呪われし運命の呪縛から逃れたルウネの表情には、もはや陰など存在していない。

居てもいいのだと。

存在してもいいのだと。

みんなに、教えてもらったから。

「みんなに、ありがとうっ！ー！」

++++

「・・・報告に参りました」

相変わらずその場から動こうとしない青年に向けて、ジェノがそう話しかける。刹那の『崩天剣』によって吹き飛ばされた腕は何事もなかったかのように再生しており、そのキメの細かい白い肌には傷1つついていなかった。

その声に気がついた青年はゆっくりと振り向き、申し訳なさそうに頭を垂れているジェノに歩み寄った。

「腕、大丈夫みたいだね。ちゃんと動く？」

サラから聞いた、ジェノの腕のダメージ。それを心配してか、青年がそのことを尋ねる。

「・・・はい。前よりも、いい感じがします」

「そっか。それならいいんだ。けど、無理はしないでね。誰か1人でも欠けたら嫌だからさ」

「・・・はい。申し訳ありませんでした」

青年からの心づかいが嬉しいと思う反面、無理をして青年に心配をかけてしまって申し訳ないという感情がジエノの胸に芽生える。

役に立ちたいが、心配は掛けたくはない。

だから、もっと強くならなければならないと、そうジエノは思った。

青年が笑って自身を見守ってくれるくらいに、強く、ただ強く。

「・・・わかってます。私は、大丈夫です」

「ホントかなあ。ジエノもそうだけど、みんなボロボロになって帰ってくるからさ。そろそろ僕も出張ろうかなって思ってるんだけど

「？」

「……そうすると、多分皆がこぞって止めますよ。そんなことさせられない、って」

「ははは、だろうね」

ジエノの言ったことが容易に予想できたのか、笑いながら青年が言う。

その笑顔が見ることができて満足したのか、ジエノは表情を引き締めて口を開いた。

「重ね重ね申し訳ないのですが、しばらく遠征をお休みさせていただきます。ようやく発動しかけた『魔術』を完璧にしたいので」

「うん、わかった。時間を掛けてじっくりやるといいよ」

「はい。……それでは」

そう言ってジエノは青年に背を向け、大広間から出て行った。

それを満足げに見送った青年は、再び巨大なカプセルの前へと歩き出したのだった。

第107話 異種編16（後書き）

さて、今回の物語はいか^{せかい}がだったでしょうか？

忌み嫌われ、存在を否定され続けてきたルウネ。

そのルウネを、村人たちが蔓延る世界から図書館へと連れ出した雷牙たち。

その判断は正しかったのか、否か。

答えは、ルウネの表情を見ればおのずとわかるでしょう。

さて、次回の物語は『恋慕編』。

2人の秘められた想いをお楽しみください

第108話 恋慕編1

雷牙達が図書館でオリアスと話し合っている頃、刹那とレオは、前の世界で発現した刹那の能力の具体的な解析を行っていた。魔力で形成されたジエノの鞭の構成を崩したという刹那の能力。どのような能力であるにせよ、発動条件を知っておいて損はないからだ。

その能力は、刹那が『眼』を発動したことによる、結晶の特殊能力であることは容易く予想ができたが、そこからは未知の領域。そこからいかにして能力を解析していくかが、刹那の成長に繋がると言っても過言ではない。

刹那は使用が可能になったばかりの『眼』を発動させ、大剣を構えていた。それを確認したレオが、自身の精製した『結晶』である弾丸を刹那に手渡す。

「それじゃ刹那。こいつをお前の『崩天剣』で攻撃してみてください」

「うん、わかった」

一度だけ頷き、刹那はレオを巻き込まないようにと背を向け、受け取った弾丸を空高く放り投げた。同時に、刹那は自らの『結晶』である大剣に魔力を込め、弾丸に向かって剣を振るう。大剣自体は距離があるため当たることはないが、刹那が込めた魔力が、黒い波動となつて弾丸目掛けて放たれる。これこそが刹那が前の世界で会得した『崩天剣』である。

黒い波動は弾丸を撒き込み、空気を振動させて凄まじい音を鳴り響かせて弾丸を撒き込みつつ空へと上がり、魔力が尽きたためか徐々に威力が衰えて行き、終いには強力な黒い波動は消え去ってしまった。

その後、すぐにレオの弾丸が重力に引かれて空中から落ちてきた。いくら強力な『崩天剣』の波動と言えど、結晶である弾丸は破壊できないようだった。

それを拾い上げ、レオが呟く。

「『波動』だと破壊はできんか……。刹那、お前がジエノの鞭を崩壊させた時、どうやったんだ？」

今一度その時の状況を確認しようと、レオが刹那に尋ねる。

「ん」と……。『波動』を撃つ前に鞭が目の前に来て、それを払おうとして魔力を集中させたまま斬ったら、ジエノの形成した鞭全部がポロポロになっただけ……。」

その時のことを思い出したのか、刹那は新たな情報をレオに伝えた。腕組みをしながらレオは少しだけ思考し、そして言った。

「それなら、『波動』を撃たないで、魔力を集中した状態でもう一

度弾丸を斬ってみてくれ」

「わかった」

レオから再び弾丸を受け取り、同じように空高く弾丸を放り投げる。

大剣に魔力を集中させた後素早く空高く跳び、落下してきた弾丸目掛けてその大剣を勢いよく振るった。

空気を振動させ、空間を切り裂いたかと思わせるほどの風を切る音と共に、刹那の大剣がレオの弾丸へと命中した。

高い金属音と共に、弾丸は大剣の振るわれた方向へと凄まじい勢いで飛んでいく。これの方法も違う。弾丸は崩れることなく、その形を保ったまま遙か彼方へと消え去ってしまった。

引力によって降りてきた刹那は膝をクッションにし、上手い具合に勢いを殺して地面へと着地する。同時に、なかなか結晶の特殊能力の条件が発動しないためか、不安げな表情をしてレオに話しかけた。

「・・・何か見逃してるものがあるのかな」

波動をぶつけても、魔力を集中した状態で斬っても、レオの弾丸は崩れなかった。最も可能性の大きい選択肢が2つとも潰えたのであれば、まだ見逃していることがあるのかもしれないと思うことは普通の考えである。

「確かに。何かまだある可能性も十分ある。他に何か手掛かりがなかったか、もう1度思い出してみてください」

レオの言葉に頷き、刹那はその時の情景を必死に思い出し、自身の行動1つ1つを脳内で再現していく。

発見したばかりの『眼』によって得られた『漆黒の翼』を羽ばたかせ、何も考えず『罨』であるジェノが形成した無数の鞭の中へと特攻をかけた刹那。今思い返してみれば、策を練ることもなく真っ正面から挑んだ自らの愚かさにつすら寒さを覚える。

一か八かの『崩天剣』を放つべく、大剣に魔力を込めながら、襲いかかってくる鞭をくぐり抜けていく。だが、もう少しで射程圏という所でジェノの鞭が邪魔立てをする。迷うことなくその鞭を斬ったものの手応えは皆無であり、すり抜けてしまった次の瞬間、『それは起こる。』

流れを再度確認し終え、本題に入る。何か見落としている箇所はないか。

・・・・・・・・

必死になって思い出すが、浮かぶのは何度も何度も見た光景ばかり。

能力の発動の条件と言っても、大剣に膨大な量の魔力を込めた状態である事以外に思い当たることがない。

ならば他に何かがあるのか。能力が発動しないレオの弾丸と、能力が発動したジェノの鞭。この2つに何か違いがあるのではないかと、新たな考えが刹那は閃く。

2つの大きな違いと言えば、結晶であるか神器であるかという点であろう。魔力を集中させて物体化した結晶と、神の手によって創造された神器。結晶は物体化を継続するために常に魔力を消費するという欠点がある。

レオの弾丸も、一見は半永久的に存在するかのように見えるが、その実、結晶に込められた魔力が少しずつ消費されていき、結晶化に必要な魔力が結晶内なければ自然消滅してしまう。『永久に物体化することのできる結晶』は存在しえないのである。

その点から考えれば、結晶と同等の威力と強度を保ちながら半永久的に存在している神器のほうが優れていると言える。魔力に対抗するために創造されたものなのだから、対存在となっている結晶に勝るとも劣るわけがないのだ。

ふもしかして・・・神器にだけ発動するとか？

ふとそんなことが頭をよぎったが、すぐにそれが違うことに気がつく。確かに、刹那はジェノによって形成された無数の鞭を崩壊させたが、それならば結晶が発動しないというのはおかしい。神器に魔力を込めたことよって顕現した鞭と、レオの形成した弾丸。同じ

魔力によって造られた物なのに、神器にだけ通用する局地的すぎる能力だとは少し考えづらかった。

「……あれ？」

そこまで考えが至って、刹那はふとあることに気がついた。

確かに、刹那の能力によってジェノの形成していた鞭は1つ残らず崩れ去った。だが、それはあくまで『神器に魔力を込めて形成したもの』であり、『神器そのもの』ではないのだ。

物体化していなかったジェノの鞭と、完全な物体と化しているレオの弾丸。刹那の考えが正しければ、おそらく『物体化していない魔力』に対してのみ、能力は発動するはず。

「あのさ、レオ」

考えを実行すべく、刹那は口を開く。

「魔力が籠もった弾丸を撃つてみてくれないかな。火でも、水でも、属性は何でもいいからさ」

「？ 何か考えがあつてのことか？」

「うん。うまくいくかどうかはわからないけど、やってみる価値はあると思う」

「了解だ」

刹那の提案を受け入れ、レオは手に魔力を集中させ、神器『神爆銃』のマガジンに弾丸を装填した。集中している魔力の色は淡い翠。触れたものを全て切り刻む、風属性の弾丸である。

ただ、弾丸を使用する相手が刹那ということもあり、レオが弾丸に込めた魔力の量は少量であった。本来、攻撃の用途として精製するのならば、もっと大量の魔力を込めなければならないのであるが、万が一刹那の目論見が外れたとなれば、自らの造り出した弾丸で刹那に致命傷を与えかねない。

そういつた事故を防止するためにも、レオは『強風を作り出す』程度の魔力しか込めずに、弾丸を精製した。これならば能力が発動しなくとも、刹那が弾丸の能力によって致命傷を受ける可能性はかなり少なくなる。

「準備はいいか？」

レオのその言葉に刹那がゆっくりと頷き、地面を蹴ってレオとの距離を取る。

距離が空いたことを見計らってレオが銃の引き金を引き、刹那に向けて弾丸を放った。

火薬が爆ぜた音と共に、強風を纏った弾丸が刹那へと向かって飛んでいく。触れた物を皆切り刻むはずの風は、レオの目論見通り土埃を巻き上げる程度の威力に留まっていた。威力が高過ぎず、低過ぎずというその強風は、刹那が狙いを定めるにはちょうどいい具合であった。

強風に耐え切れずに舞い上がっている草花を巻き込みながら直進してきているレオの弾丸を、刹那は冷静に見据えながらも大剣に魔力を集中させていた。

考えが正しければ、刹那がレオの弾丸が巻き起こしている風を斬った瞬間に能力が発動するはず。

もしも能力が発動しなかったとしても、その時はその時。また考え直すだけだ。

前向きに考え、刹那は向かってくる弾丸目掛けて、その漆黒の大剣を振るった。

刃が弾丸へと近づいていき、纏っている強風を斬り裂いた瞬間、変化は起こる。

強風を形成していたレオの魔力が、『崩れた』。

それはまるで霧散するかのように細かく散らばっていき、終いには跡形もなく消えてしまった。

巻き込まれた草花は何事もなかったかのように地面に落ち、刹那の振るった大剣は見事レオの弾丸に命中した。それを空へと打ち上げるように力を入れ、刹那はボールをバットで打つ要領で、レオの弾丸を空目掛けて吹っ飛ばした。

虚空に飛ばされた弾丸自体は、強風と同様に『崩れる』ことはなかった。重力に従って落下し、そのまま地面に叩きつけられる。風はもう纏ってはいない。先ほど発動した能力が、弾丸に込められた魔力の全てを『崩して』しまっただらしかった。

「でき……た……」

残骸のように転がっている弾丸を見て、刹那がそう呟いた。自身の考えが、こんなにもうまくいくと思っていなかったのだ。

安堵したためか、発動して維持し続けていた『眼』を解き、長い溜息をつく。同時に、胸の奥底から嬉しさが込み上がってき、顔を綻ばせてレオに向かって口を開く。

「できたよレオ！ 発動した！ やれたよ！」

やや興奮気味の刹那につられたのか、レオも笑みを浮かべながら言う。

「ああ、見てたぞ。また強くなれたな、刹那」

刹那も、レオとの訓練で徐々にはあるが、戦闘における実力をつけてはいた。だが、レオや雷兄弟の持つ『眼』による急激な成長速度には追いつけない。それに歯痒さを覚えていただけに、今回の成長は当人の刹那にとって非常に嬉しいものとなった。

これで、ようやく皆と肩を並べられる。

刹那は、そう確信した。

「刹那、喜んでるところ悪いが、発動条件をはっきりさせておきたい。見当はついてたんだろ？」

「うん。『崩天剣』の能力はさ、『物体化していない魔力を崩す』っていう力だと思うんだ。だから、具現化していたレオの弾丸は崩

れなくて、それを纏っていた風は崩れたんだ」

「なるほど。それに、斬った部分の風だけじゃなくて、纏っていた風の全てを崩したってことは、能力は連鎖的に発動するみたいだ。な。ずいぶん役に立つ能力を手に入れたもんだ」

レオの感心したような言葉に、刹那は嬉しさのあまりに何も返すことができない。急激な成長というものが、ここまで嬉しいものだということを、刹那は初めて味わった。

「あゝ、レナに教えたいなあ！　ちゃんと成長したんだってさ！」

子供が新しい玩具を手にした時のように、刹那はやや興奮気味にそう言う。

仲間であると同時に剣の師であるレナに、今回の成長を一刻も早く報告したいという気持ちが沸き上がって仕方がない。訓練ではいつも負けてばかりで、具体的な成長の証を見せることができなかったが、今回ばかりは違う。能力の発現という確かな証をレナに見せることができる。

『眼』の発動と、結晶の能力。この2つを見たレナの驚く表情が容易に目に浮かぶ。早く驚かせたい。成長したということを確認してもらいたい。刹那の頭には、もうそれしかなかった。

「ずいぶん、レナにこだわるんだな」

何やら含んだ笑みを浮かべながら、レオがそう言う。

「そりゃ、戦い方を教わってる先生なんだから当然じゃないか。成長を見せたいってのは普通だと思うけど」

「・・・本当にそれだけか？」

「？」

レオの言いたいことがわからず、刹那は首を傾げる。

レナに成長を見せたいのは、戦い方を教わった先生だから。

それ以外に、刹那には理由は考えられない。故に、レオがなぜそんなことを言うのかわからなかった。

「ん、どうやら戻ってきたみたいだな」

不意にレオがそう呟くと同時に地鳴りのような音が鳴り響き、その視線の向こうの空間に小さな穴が開いた。ゲートの出現である。恐らくは、雷牙達のグループが帰ってきたのだろう。

「刹那、迎えてやるうぜ」

それだけ言つて、レオはゲートの元へと歩いて行つた。

レオが言った言葉の意味が理解できないもやもや感を抱えながら、刹那もレオの後ろをついて行つたのだつた。

第109話 恋慕編2

罨を外しに異世界へと飛び立っていたチームが1人残らず集結したのを確認すると、いつものように一同は報告会を始めた。

今回はどちらのチームも『罨』を外すことに成功したということであまり秀囲気が重くならなかったものの、刹那たちの世界で姿を見せた神の使いの1人である『ジエノ』の事が話題に出た際に、張り詰めた緊張感が代わりとしてその場の空気を凍らせた。

「情けないが、歯が立たなかった。刹那が来てくれなかったら、確実に殺されていた」

レオがいつになく真剣な表情をしながらそう言う。

『眼』を使用してもまるで意味のない強力なジエノ。偶然とはいえ、刹那がジエノを倒していなければ、悲惨な結果が待っていたことだろうと常々思う。

「・・・なるほど。そちらも、決して楽に『罨』を外したというわけではないわけですね」

ルウネとの戦いで重傷を負った雷牙のほうを見て、雷牙が呟く。

当人である雷牙はジエノのことなどどうでもいいようで、椅子を力

タンカタンと揺らしながら大して興味もなさそうに話を聞いていた。風花とレナによって施された手術がうまくいったため、ダメージは微塵も残ってはいないようだった。

「要は強え奴がいるってこったろ？ だったら俺たちももつと強くなりゃいいことじゃねえか。違うのか？」

雷牙らしからぬ、的を射ている意見である。

敵がどんどん強くなるからどうすればいいかという答えなど一つしかない。自身たちも強くなるしかないのだ。考えた所で誰かが助けしてくれるわけでもない。結局は、自分たちで火の粉を振り払うしか方法はない。

「安直だけど、それが一番かなあ。あと雷牙君、いい加減に真面目にしてね？ みんなに失礼でしょ？」

「・・・はい」

風花の間延びした声の裏に隠された怒気を感じ取ったのか、雷牙は椅子を揺らすのを止め、大人しく姿勢を正した。本気で怒った風花がどれ程恐いのかわからないが、なるべく怒らせまいとする雷牙の態度の変わりようが、何だか微笑ましく思える。

「報告は、まあこんなところか。次のチーム分けは2日後だ。それまで、各自ゆっくりと体を休めておけ」

一同はレオの言葉に頷き、報告会は終了した。

それと同時に、刹那が勢いよく席から立ち上がると、内から湧き出る興奮を押さえずにレナに話しかけた。

「レナ！ あのさ、見せたいものがあるんだ！」

「え、あ・・・、み、見せたいもの？」

何やらそわそわとしながら、レナが刹那の言葉にそう返す。

視線も合わそうとせず、しきりに視線を泳がせているその様は、明らかにおかしい。

だが、今の刹那にとって少しくらい態度がおかしくとも気にはならない。自身の成長の証を、一刻も早く見せたいという気持ちは留まることが知らず、先ほどから強まっていく一方であった。

「ああ！ ほら、早く行こう！」

「え？ あ、きゃ・・・」

レナの手を引いて、刹那がそのまま外へと引っ張っていく。いきなりの事で驚いたのか、レナの頬は心なしに赤く染まり、抵抗も何もせずにただされるがままになっていた。引っ張っている刹那にはその表情が見えていなかったのだが、果たしてそれがよかったのか悪かったのか。

「何だ？ おもしれえもんか？ それなら俺も」

『行くか』と言って席から立ち上がろうとした雷牙の顎を、隣に座っていた風花の拳が見事に捉えていた。にこにここと笑っているその表情からはとても想像のできないほど鋭く、素早い一撃。油断していたとはいえ、あの雷牙が避けられなかったのだから、その凄まじさを想像することは容易いことだろう。

「え？ 雷牙、どうかした？」

立ち止まり、刹那は何か言いかけた雷牙に声をかける。

「ううん、何でもないからあ、早くレナちゃんに見せたいもの、見せてあげえ」

にっこりと笑顔で、風花が刹那にそう言う。明らか隣の雷牙が大変

なことになっているのだが、風花がそう言うなら大丈夫なのだろう
と思い、刹那は頷く。

「それじゃレナ、行こう！」

「わ、わかったから、引つ張らないでっば〜！」

どたばたと音を立てそうな勢いで刹那とレナは外へと出て行った。
その場にいた一同は刹那たちを見送った後に、席でふらふらとして
いる雷牙に視線を向けた。不意打ちだったからか、それとも強烈だ
ったからか、何やら白目を剥いている。

「雷牙くん、余計な事は言わないでねえ〜？ 空気はちゃんと読
まないかね〜」

相変わらずの笑顔でそう言う風花だが、果たして雷牙に聞こえてい
るかにはわからない。よっぽど打ち所が悪かったのか、雷牙の意識は
まだ覚醒しない。

「姉さん、気づいてたの？」

驚いたように、風蘭が風花へとたずねる。

先ほど風花が雷牙を殴った理由など一目瞭然。刹那とレナの邪魔をさせたくなかったからだろう。ということはつまり、レナがどういった感情を刹那に抱いているかを知っていることになる。

「当たり前だよ。あんな露骨な態度に気がつかないのなんて、この馬鹿くらいだよ」

ガンガンと乱暴に雷牙の頭を叩き、風花はそう言う。

確かに、レナが刹那に連れだされる時に見せた表情を見れば、何となくではあるがその胸に秘めている気持ちや予想することは容易い。だからこそ、それに気がつかない雷牙を止めたのだろう。

「ん、んあ！？ な、何だ何だ！？」

ようやく我に返った雷牙が、驚いたように辺りを見回す。いきなり気絶させられ、そしていきなり目覚めたのであれば、誰しも同じような反応をするだろう。顎を思い切り殴られたというのに、けろっとしているその態度は、さすがとしか言いようがないのだが。

「雷牙くん。駄目だよ、ちゃんと2人の気持ちを汲み取ってあげないよ」

「あ、ああ。悪かったって」

底知れぬ恐怖を感じられる風花の笑顔を見て、雷牙は頷きながらそう言った。

どんなことでも逆らわず、素直に、何より怒らせず。それが、雷牙が風花と接する際に気を付けている事項であった。破った時のことなど、想像したくもない。

と、今まで黙っていたリアが口を開いた。

「やっぱりレナさん、刹那さんのこと……?」

「それは間違いないと思うよ。前の世界で相談受けたからね」

ふふ〜んと、風蘭が自慢げに言う。

「そっかあ。羨ましいなあ……」

「何がだよ?」

「……別にいい。何でもないので」

ちよつとご機嫌斜めといった具合に、リリアがレオからぶいっと顔をそむける。

リリアの心情を知らないレオからすれば、わけがわからないの一言である。いつものことではあるが、ため息をつかずにはいられない。

「・・・で、ここでそんなことを話してどうするんだ？ まさか俺たちで何とかしようって魂胆じゃないだろうな？」

話を換えようと、レオがそんなことを切り出す。

この類の話題が出た時点である程度の予想はついてはいるが、それでも聞かないわけにはいかない。

「当然じゃんよ！ あたし達がやらないと誰がやるのよ！！」

バンバンと机を叩いて、風蘭がやや興奮に風蘭がレオに言う。

どうして自分たちがやる必要があるのかわからないが、とりあえずレオの予想は当たったようだった。他の連中はわからないが、少なくとも風蘭は2人の恋路の応援をすると決めたらしい。

「で、みんなは？ やるでしょ？ やらなきゃ2人の恋は成就しないよー！！・・・たぶん」

周りをぐるっと見回して、風蘭が意見の合意を求める。

やるなら大勢のほうが強心強い。それに、主犯である風蘭には思いつかないようなアイデアも出てくるかもしれない。1人でやるより、大勢のほうに成功する確率が高まるのは言うまでもない。

「私『達』はもちろんやるよ。ね？ 雷牙くん？」

「？ ん、まあ……やるけどよ」

やたらと乗り気な風蘭の誘いを断ることなど、雷牙にはできなかった。何のことかまいわからないが、とりあえず参加はしようと気持ちを切り替えることとする。断ったら、また鉄拳が飛んでくるかもしれないといったことも理由にあがるのだが、とりあえず置いておく。

「よし！ 他は！？ 遠慮なくていいよ！ みんなでやれば成功率もドドンとアップ！」

「えっと……、私もやります！」

風蘭の口説き文句に乗るようにして、リリアが勢いよく手を上げた。

仲間の恋を応援したいという気持ちももちろんあるが、何よりも年齢の近い男女が、『そういう関係』になるまでの経緯を見たいという好奇心のほうに勝っていた。同じような年齢の友がいないリアにとつて、こういった色恋沙汰の出来事は初めてなのだから当然だ。

「それじゃ、僕も参加しましょうか。不謹慎ですが、面白そうですしね」

珍しく笑みを浮かべながら、雷光も賛同した。何だかんだ言ってもこういったイベントは楽しみらしい。いつも落ちついた様子の雷光が参加するのは、正直言つてかなり意外である。

「さあさあ！あとはレオだけだよ！やるでしょ？もちやるでしょ！」

残るレオに、風蘭が詰め寄る。

これだけ賛同者がいれば、当然レオも乗ってくるだろうと風蘭は考えていたのだが、当のレオは腕組みをしたままため息をつき、呆れたように言った。

「あのなあ。それは本人達が自分たちでやるべきことだろう？俺たちが手を出すべき問題じゃない。人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られるんだぜ？」

「そうだけどさ……」

「それに、相談も受けていないのに勝手に騒ぐのもどうかと思うぞ。刹那かレナかが協力して欲しいっていうんならまだ話はわかるがな」

もつともな意見に、イケイケだった風蘭も押し黙ってしまふ。

確かに、これは2人の問題だ。進むも、戻るも、止まるも、一步進むのも、そのままの関係を維持するのも、それは刹那とレナの自由である。いくら仲間とはいえ、第三者が深く介入していい問題ではない。

「俺たちが余計なことをして、関係が捻じれる可能性もないわけじゃないからな。黙って見てるだけのほうが、俺はいいと思うぞ」

レオの言葉に、意気消沈していく風蘭。

ここまで正論を言われては、もう返す言葉もない。協力をするとうことが、かえって関係を悪化させる要因にもなることも確かだ。それが自分たちの手によるものならば、後悔の念は非常に大きいものになるだろう。

協力をすべきだと思い込んでいた風蘭の頭も、レオの言葉で冷えたのか、何もせずに見守ったほうがいいのではないかと思えてきた。

確かに2人から『協力してほしい』という頼みを聞いたわけでないのに、勝手に事を起こすのもまずい気がする。

そんな風蘭の姿を見かねたのか、風花が発言した。

「確かにその通りだね。2人は別に協力して欲しいって言われたわけでもないし」

「だろう？ だから俺は」

「でもそれは、協力して欲しいって言えないだけなのかもしれないよ？ 仲間だからこそ、言いづらいことってあると思うなあ」

「む・・・」

先ほど風蘭がレオに対して閉口していた時と同じようにして、レオも風花の言葉に閉口してしまった。レオの言ったことももちろん確かではあるが、風花の言っていることもまた確かなこと。正論であるが故に、レオも簡単には反論できない。

「こういつのつてえ、堂々と言えるものでもないでしょ？ 恥ずかしいとか、色々理由はあるはずだよ。助けてって言いたいのにい、言えない仲間をお、レオは見捨てちゃうの？ そこまで薄情じゃないよね？」

「う、む……」

目には目を。

歯には歯を。

言葉には言葉を。

あれだけでもっともだと思えたレオの言葉も、風花の言葉によって霞がかってしまふ。普段はおっとりとしているように見えて、やるべきはやるものである。思いもよらない風花の反論に、レオも何と言ったらいいか悩んでいるようだった。

「……風花の言うことももっともだが、あくまでそれは憶測に過ぎないだろ。本当に、刹那とレナのどちらかがそうだとはい限らない」

ようやく言葉を紡ぎ出したレオ。

その言葉を待っていましたとばかりに、風花がレオに追い打ちをかける。

「だよね。だから、確かめないといけないよね。その確認をねえ、レオにやってもらいたいの」

「俺に？ 何でまた」

「私たちが確認して、結果をレオに報告してもお、何だか協力して欲しいからって嘘ついてるみたいでしょ？ だからあ、本人の目で確かめたほうがいいかなあと思って。レオなら嘘なんてつかないと思うしい、ちゃんと公平に判断してくれるでしょ？」

何とも言えない明るい笑顔を浮かべながら、風花はそうレオに言う。こんな無邪気な笑顔の裏に、一体どんな表情が隠されているのかと思わずにはいられない。助けられた風蘭でさえ、何だか呆気に取られている。

ここまでやられては仕方がないとレオはため息をつき、ゆっくりと席から立ち上がった。

「・・・わかった。そのかわり、あの2人が協力を必要としてなかったら、お前らにも降りてもらおうからな」

「もちろんだよ。それじゃ頑張ってね」

元気よく手を振っている風花に見送られ、レオは2人のいる外へと向かって行った。

レオがいなくなったタイミングを見計らい、風花は小さな子供に注

意するような感じで風蘭に声をかける。

「風蘭、やるんだっ たら反対する人も引き込むような殺し文句を
考えなきゃダメだよ」

「う、うん。ごめんなさい」

風花がレオを言い負かしたことの驚きがようやく覚め、風蘭はしきりに頷いていた。

・・・我が姉ながら恐ろしい。

それを再確認せずにはいられない光景だった。

「ふうん さあってどうなるかなあ」

鼻唄交じりに、風花がそんなことを呟く。

その笑顔には先ほどまでの凄みはなく、ただ純粹にこの後の展開が
どうなるのかという期待感だけが溢れていた。

第110話 恋慕編3

家の中で何が起こっているかも知らない刹那とレナは、いつも剣の訓練を行っている庭へと到着した。

世界に設置されている『罨』を外す度に、レナにたくさんのお話を教えられ、それを徐々に吸収していった、実に馴染みの深い場所である。ここを差し置いて、レナに報告するに相応しい所などあるはずがなかった。

「えっと……。そ、それで刹那、見せたいものって？」

連れて来られた場所が意外だったのか、レナは少々戸惑いながら刹那にそう尋る。刹那が、自身に何を見せたいのか見当もついていないのだから当然だ。楽しげなその表情から考えるに、レナにとっても悪い物ではないことは想像できることは確かではあるが、具体的なことまではわからない。

そんなことを考えているレナに刹那はご機嫌な様子で向き直り、その問いに答えた。

「これさー！」

先の世界で会得した『眼』を、刹那は出し惜しみせずに発動させた。

まだ夜にもなっていない、明るい場所だと言っのにも関わらず、刹那の瞳の瞳孔が完全に開かれる。黒い・・・それこそ闇のような漆黒の魔力が刹那の体から溢れ出し、奇妙な緊張感が辺りを包み込む。引きずり込まれるのではないかと錯覚させられるほど濃縮された刹那の魔力は、本人の気性とはまるで反対な不気味な雰囲気醸し出していた。魔力の持ち主が刹那でなければ、レナも即座に戦闘体制に入ってもおかしくなかった。

「刹那、これって・・・」

「『眼』だよ！ 前の世界で使えるようになったんだ！ レナに、俺も少しはマシになったんだって教えたくてさ！」

「・・・見せたかったものって、このことだったんだね」

見せたいものを見せることができずっかり有頂天な刹那とは対照的に、ほんの少しだけ、刹那も気がつかないほどの落胆を含んだ声で、ぽつりとそう言った。

別に刹那の成長が嬉しくないわけではないのであるが、もっと違うものを想像していたレナとしては、見せてもらったものに少々がっかりしたようだった。もつとも、レナが刹那に『何』を期待していたかなど、連れ出した刹那にわかる由もないのだが。

「それじゃ、次は『眼』を使ってどれだけ強くなったのか、見せて

くれる？」

先ほどまでの声色とは違い、今度は割と強気な口調でレナは刹那にそう言った。何やら不敵な笑みを浮かべながら、足元に落ちてある、あるいは置いてあると言ったほうが正しい、剣の稽古に使用する細長くも堅固な棒を拾い上げる。

そのレナの言葉に応え、刹那もまた足元の大剣の形を模した丸太を拾い上げる。これは、結晶やら神器やら、必要以上な切れ味を持つ武器で訓練をすると、万が一の事態が起きた場合に取り返しがつかなくなることを防止するためのものだ。切れ味も何も、刃がついていなければ斬れる心配などないのだから遠慮なくやれるという、レナの提案から採用した訓練道具だった。

「いつでもいいよ。刹那の力、私に見せてみて」

そう言うと同時に、レナは魔力による身体の強化を全身に施した。今までは基礎を重点的に鍛えるという名目で身体強化を伴った訓練は行わなかったのだが、刹那が『眼』を使用した状態でどこまで強くなったのかを確かめるにはそんなことも言っていられない。

何よりもレナは、刹那がここまで喜ぶほどの力を見てみたかった。剣を教えた、いわば弟子の成長。どこまで自身と肩を並べられるか、レナは知りたくて仕方がなかった。

「それじゃ行くぜっ！」

地面を蹴り上げ、刹那は直線的にレナへと立ち向かう。いつもの刹那の戦い方だ。何も考えずに、ただ突進をする単調な攻撃。違うのは、こうやってレナへと向かってきている速度。刹那の身体強化を施して戦ってきた様を見ているレナも、『眼』を使用した時との違いに驚きを隠せないでいた。

レナが射程圏に入った瞬間に、刹那は勢いに任せてそのまま丸太を振り下ろした。『眼』による身体強化によつて生み出された爆発的な速さから繰り出される刹那の一撃は、例え防いだとしても防ぎ越しに伝わってくる衝撃でダメージを与えることができる強烈なものだ。例え戦闘に長けているレナといえど、受けきることなど不可能。何度も何度も注意されてきた単調かつ直線的なこの攻撃を、刹那がレナに対して実行したのは、レナがこの攻撃を止めることができないと判断したからであった。

確かに、レナが刹那のこの一撃を受けきることは不可能だろう。持っている棒で防いだとしても、刹那の攻撃の威力に耐えられない。とはいえ、最短距離である直線で向かってきている刹那から逃げることもできない。『眼』を使用している刹那の身体能力と、ただの魔力によるレナの身体能力。どちらが圧倒的に高いかなどわかりきったことだ。

だからこそ、レナが取るべき選択肢は1つ。

受けきることも逃げることもできないのならば、『流せばいい』のである。

「・・・ふっ！」

刹那の丸太が振るわれるタイミングに合わせ、レナは棒を斜めに傾けて、滑車の要領で振り下ろされてきた丸太を地面へと流した。同時に手にした棒を切り返して、勢いに任せて丸太を振るった刹那のガラ空きの頭に目掛けて振り下ろす。攻撃を防ぐことを選ぶと刹那が踏んでいれば、レナのこの攻撃はカウンターとして刹那に命中することは間違いない。

はずだったのだが、刹那もさすがにそこまで浅はかではなかった。

「よ・・・っど!!!」

地面にめり込んだ丸太を引き抜き、刹那はレナの攻撃の射程圏から素早く離脱した。その一連の動作はあまりにも速く、刹那の頭に命中するはずだったレナの攻撃は空振り、そのまま刹那の丸太と同様、地面へと突き刺さる。

レナと散々剣を交えてきた刹那は、正面から斬りかかってもあまり効果がないことがわかっていた。だが、大剣を模した丸太を最高威

力で放つには、先ほどのような愚直な戦法が一番であることも事実。それを生かすためには、流されることがわかっていようと、正面から向かっていくしかないのだ。

結果、レナに攻撃を受け流されたわけだが、今の刹那には『眼』がある。例え攻撃が通らなかつたとしても、今のように攻撃が当たる前に射程圏内から離脱するくらいなら可能だ。愚直とも言える先ほどの刹那の攻撃は、万が一のことも考えた結果の攻撃であったのだ。

「・・・さすがに速いね。あのタイミングのカウンターが当たらないなんて」

そう言ったレナの表情には、笑みが浮かんでいた。

笑わずにはいられない。なぜかはわからないが、レナはこの瞬間が楽しくて楽しくて仕方がなかつた。これほど戦闘が楽しいのは、生まれて初めてだった。どんな時でも、どんな敵でも、刃を向ける際には嫌悪感が襲ってきたというのに、なぜか今だけは内から沸いてくる高揚感がたまらなく心地よかった。

「やっぱり、うまくはいかないか。結構な速さがあれば、レナでも防げないと思っただけだな」

「それは残念でした。でも、まだ他に手はあるんでしょ？ 全部見せてよ。刹那の持つてる力、全部見せて」

「わかったよ。次に見せるのが、今の俺の全力だ」

短い会話を終えた瞬間に、刹那は魔力を背中へと集中させ、大きな一对の翼を形成する。『眼』の発動と共に刹那が会得した、身体の特長能力である。羽ばたきによる移動速度の上昇には目を見張るものがあり、それによって得られた勢いに任せて丸太を振れば、いくらレナといえど流すことは困難であろう。

「・・・準備はいいか？ 行くぜ！」

前方に風を送るようにして、刹那は一度の羽ばたきで後ろへと飛ぶ。巻き起こった風は、距離が空いているレナの元まで届き、優しげに燃えている炎を連想させるオレンジ色の髪の毛を揺らした。

飛ぶことに成功した刹那は、飛行速度を最高潮に上げるため、さらに羽ばたきを続けた。走ることと同じで、一度の羽ばたきでは最高の速さにまで到達することはない。飛行を続け、速度を徐々に上げることによってやく最高速度へと到達することが可能となる。

レナを中心に円を描くようにして、刹那は徐々に飛行の速さを上げていく。速くなることに体へぶつかってくる風が強くなっていき、『眼』による身体強化がなければ四肢がバラバラになってしまいうなぐらいだった。

やがて飛行の速度は最高潮となり、刹那はさらに上空へと飛び上がった。急激な旋回をし、最高の速度を保ったままで、刹那は地上に

いるレナ目掛けて急降下した。その様は、まるで餌を捉える隼の様であったが、決定的に違うのはその滑降する速度。まだまだ使いきなせてはいないとはいえ、現時点での最高速度は身体強化を施しているはずのレナの目にも捉えることのできない凄まじいほどの速さだった。

高所からの急降下から生み出される爆発的な速さと勢いに任せて、刹那は持っていた丸太を一閃に振り切った。瞬間、雷でも落ちたのではないかと思うほどの轟音が鳴り響き、振り下ろした時の衝撃が辺りの草木を震わせた。まるで大量の火薬でも爆破したかのような威力であった。土埃が舞い上がり、周りの視界が一気に閉ざされる。

「……ん」

一瞬の出来事に何が起こったのか理解できないレナは、突然の轟音と土埃に戸惑いながらも、手にした棒を構えることを止めなかった。土埃に紛れて刹那が攻撃してくるということを考慮してのことだ。

舞い上がった土埃によって遮られていた視界は徐々に晴れていき、そこでレナはようやく周囲の状況を把握することが可能となった。

注意深く辺りを見回そうと視線を動かし、そして気がついた。

「嘘……」

レナの間横に、本当にすぐそばに、爆撃でもあったかと勘違いして

しまつほどの巨大な穴が開いていたのだ。実際に目で見ていない

見切れていなかったから断言はできないが、大方の予想はつく。これは、刹那がやったのだ。『眼』によって発現した漆黒の翼を利用して得られた凄まじい速度は、たかが丸太を使ってもこれほどまでの威力を生み出してしまふことに、レナは頼もしさよりも恐ろしさも覚えずにはいらなかった。

「せ、刹那・・・？」

これだけ威力のある攻撃を放った刹那への反動は、おそらく相当なもの。『眼』で身体の強化を施してはいるが、果たして無事かどうか分からないのだ。

刹那の身を案じて、レナが不安げに名を呼ぶ。

「ん、よつと」

レナの声が耳に届いたのか、刹那が大穴の中心から身を起こした。すでに『眼』を使用することは止めており、先ほどまでであった漆黒の翼はどこへやらと消えてしまっていた。

吹き飛んだ土や草木の葉を払いながらも、刹那はまるで平気なレナに笑いかける。

「俺は大丈夫。レナは何ともないよな？」

「私？ 私は平気だけど・・・それにしてもこれ・・・」

「ああ・・・みんなに怒られちゃうな。すぐに元に戻しとくよ。それと、丸太も新しいの作らないと」

ばつが悪そうに、刹那は手にしていた丸太の持ち手をレナに見せた。持ち手から先は、まるで道具か何かで削られたかのように破損している。考えてみれば、これだけの大穴を作りだすほどの威力から生まれる反動を、たかが丸太に耐えられるもなかった。脅威とも思えるほどの頑強さを誇る結晶か、あるいは神器でなければ、その反動に耐えることは難しいだろう。

「・・・力を手に入れたのはいいけど、あまり過信しないようにね。能力にかまけて、基本と自分の身を粗末にしちゃダメだよ？」

ため息をつきながら、レナは刹那にそう言う。

確かに、刹那が自身に見せてくれた『成長の証』は素晴らしいものだった。以前の刹那からは考えられない成長の速度。『眼』を手にしただけで、まさかこれほど変わるものだと正直レナも思っていなかった。

だからこそ、心配になってしまう。力を手にすれば、己を過信する可能性だって出てくるのだ。できないことをできると勘違いし、圧

倒的有利な戦況も逆転させてしまうということもないわけではない。無茶をして、つかなくてもよかった傷だつてついてしまうかもしれないし、下手をすれば命を落としてしまうかもしれない。刹那に限って、自身の実力に酔いしれるなどということはないだろうが、万が一ということもあるが故の言葉だつた。

「ん？ ああ、わかつてるよ。先生の言うことはちゃんと守らないといけないしな。約束するよ」

笑いながらそう言つて、刹那は穴から這い上がろうと歩き出した。この大穴を元通りにするとしても、新しい丸太を作るとしても、ここから出なければ話にならない。ボロボロと土が崩れてくる不安定な地層を足場に、刹那は少しずつ上がつて行つた。

「よいつしよ・・・と」

非常に歩きにくい、歩けないということではない。少しずつ歩いているうちに、刹那はレナのいる場所まであともう少しという所まで辿りついていた。

だが、何度も言うが刹那の歩いている場所は、土が次から次へと崩れてくるという非常に不安定極まりない状態である。『眼』の発動も止め、身体の強化さえも施していない通常の状態で、しかも前触れもなく唐突に体重の掛けている箇所が崩れてしまえば・・・。

「お・・・わっ!!」

バランスが崩れて背後に倒れこんでしまうことは必然であると言える。

刹那は何か体重移動をして持ちこたえようとしたが、やはり無駄だった。妙な浮遊感が全身を包み込み、刹那はレナを正面に大穴へと落下していく。

「刹那っ!!」

慌てて、レナが刹那へと手を伸ばす。

不幸中の幸いというべきか、刹那とレナとの位置は近い。それこそ手を伸ばせば届く距離だ。

無意識のうちに刹那は手を伸ばし、差し出されたレナの手を掴む。

刹那の手を握った瞬間、レナは刹那を引っ張り上げようと、握っている手を思い切り引っ張った。

そこまではよかったのだが、どうも、レナが引っ張る力が強すぎたようだ。

「え？ きゃ・・・!!」

「うわっ」とー!

レナは仰向けに地面に倒れ、刹那はレナの上につつ伏せに倒れ込んでしまう。

その様子は、何だか刹那がレナを押し倒しているように見えないこともないようだ。

「……………」

「……………」

その間、2人は何があったか理解できないようだ。

お互い視線を合わせたまま、身動き一つできず無言のままではばらくその状態でいて。

ようやく事情を呑みこめたとばかりに、2人同時に表情を赤らめてバツと素早く身を起こし、そのまま慌てて距離を取ることとなった。

「ええええ、えと、そのその……………」ごめんね。つ、強く引つ張り過ぎちゃったみたいで」

「い、いやいや、俺が悪かったって。も、もう少し注意してればこ

んなことに・・・その、ならなかったと思うし」

きよるきよると忙しく視線を動かし、しどろもどろとした口調で謝罪を述べる。

レナにしてみれば、ようやく自分の気持ちに気がついたばかり。それなのに、いきなりこういうことがあったものだから、心臓がドクドクと音を立てて仕方がない。あれだけ落ちついていたのに、これだけのことでここまで取り乱すなど、生まれて初めての経験だった。

一方刹那は、今の今まで仲間としか認識していなかったレナの顔を間近に見て心拍数を大幅に上げていた。それはもう、フルマラソンを全速力で走りきったのではないかというくらいにだ。レナがここまで綺麗で、美しい顔立ちをしていたのだと、ここまで接近して初めて気がついた。

「うう、うわ・・・。どーしてだ。どーしてこんなに・・・心臓バクバクいつてんだ・・・」

心の中で刹那は自身に問いかけてみるが、答えは返ってなどこない。レナに視線を合わそうとしても、何だか気恥かしくて合わせることもままならない。

一体どうしてしまったのだと、刹那は混乱と同時に疑問を覚えざるを得なかった。

・・・結局、2人とも心が落ち着くまでの時間を、その場でもじもじと忙しなく動きながら過ごすこととなってしまったのだった。

+ + + + +

「・・・・・・・・」

先ほどからのやり取りを遠目に見ていたレオは、内心複雑だった。

結局は、風花の目論見通りだったのだ。

確かに、刹那もレナも、自分たちに協力を求めてはいない。

だが、これは明らかに助けなければならない状況だ。

赤くなりながらももじもじし、視線が合う度に目を逸らしている2人を見ていればわかる。

これは、誰かが背中を押してやらないと絶対に動かない。

否、動けないのだ。

決意を決めて行動を起こしたとしても、向き合ってしまったえば今の状況になることなど容易に予想がついてしまう。

となれば、計画を企てた風蘭を含む6人で何とかするしかない。

それをしなければ、風花の言う通り、『仲間を見捨てる』という結果になってしまう。

「ここまで来て、手を貸さんのはなあ・・・」

顔をしかめながら、レオはそう独り言を呟く。

できるだけ、2人の仲には口や手を出したくなかったが仕方ない。

それに、傍目から見分には刹那とレナは相思相愛だ。

行動を起こしても、良い結果になっても悪い結果になることはほとんどないだろう。

レオも、別に仲間同士の間で、そういった感情を快く思っているわけではない。

むしろ風花達と同様に、こういった珍しいことには進んで参加したいのだ。

押さえつけているのは、2人の意思を尊重するという建前。

それがなくなってしまうのだから、後は簡単だ。

「・・・乗るしかないか」

本来ならば残念な結果であるはずなのに、レオは何やら楽しげな笑みを浮かべながら、その場を後にしたのだった。

第111話 恋慕編4

刹那とレナが、まだ顔を赤らめながらしどろもどろしている頃、レオは風蘭たちの待つ広間の中へと戻り、2人の事を一同に説明していた。風花の言う通りの状況だったということ。手を貸さなければ、いつまでたってもあのままかもしれないということ。

「・・・俺の見解だとそんな感じだ。風花の言う通りだった、ってわけだ」

「へー、そうだったんだ。じゃー、レオも協力してくれるよね？」

わかっているくせに、風花は説明を終えたレオに白々しくそう尋ねる。

全てが目論見通りだということにも関わらず、表情は相変わらず笑顔なのが何とも言えない。このポーカーフェイスぶりには、さすがのレオも舌を巻かざるを得なかった。

「最初にそう言っちゃったしな。俺も協力させてもらうさ。正直、あの調子だと何年待っても2人の仲は進展しないだろうからな」

「おおおっしゃあー！レオも参加だね！これで全員！い

よいよ本格的にアイデアを出していくかね！」

もの凄いテンションで席から立ち上がり、風蘭はバンバンと机を叩く。その表情は、この状況が出来あがったことの嬉しさと興奮からか、若干赤くなっている。さながら、大人には内緒のいたずらを考える子供のようだった。

「それじゃ、まず最初に考えるべきは……え〜つとねえ……」

先ほどの勢いはどこへやら、風蘭は何から始めるべきかをその場で考え始める。どうやら目の前にぶら下がったにんじんよろしく起こった楽しい出来事と、その場のノリだけでここまで突っ走ってきたらしかった。

「な、何も考えてないんですか、風蘭さん」

そのあまりの無計画さに、雷光が呆れた顔でそう尋ねる。

「あ〜、うん。まあいいじゃんいいじゃん！ みんなで考えればすぐだよきつとー！」

その前向きな態度に、雷光は大きなため息をついた。昔から知っているとはいえ、この要領の悪さには呆れて物も言えないのが正直な

所だ。もう少し落ちついて物事を考えるとということができないものなのかと思わずにはいられない。

「いや、それよりも先にやらなければならんことがある」

テンションが高くなってイケイケモードに入っている風蘭を制するかのように、レオが静かに言った。

「風蘭、レオから相談を受けたって言ったよな」

「うん、それで今回は皆で協力しようっていうことになったんだよ！」

「それはわかってる。けどな、刹那のほうはまだ確認取ってないだろ？」

「確認？」

「レオのことが好きだという確認さ」

レオの言う通り、風蘭は相談を受けてレオの刹那への気持ちを知ることができたわけだが、刹那の気持ちはまだ聞いていない。レオの

ことをどう思っているのか　好きなのか、それとも仲間としか見ていないのか。それがわからなければ、計画をスムーズに進行させることができないかもしれないと、風蘭は納得した。

「レオの見立てでは、刹那はどうなの？　レオのこと、どう思っ
つてそう？」

「おそろくだが、レナと同じ気持ちだろうな。ただ、刹那自身がそれに気がついていない、というのが俺の見立てだ」

『崩天剣』の能力を理解したときの刹那の発言と、先ほどの様子。何となくではあるが、刹那がレナの事を想っているのではないかと思ってしまうのだが、それだけではまだ何とも言えない。能力を会得したことをいち早くレナに知らせたかったのは、レナが剣の師匠だからと言われればそれまでであり、先ほどの行為で赤面していたのも、レナほどの美少女とああってしまっ
ては仕方のことだと言える。

それなのにレオがそう言うのには、一応理由がある。

雷牙達が参入してから行ってきた、どのメンバーで異世界に行くかを決める際に行くくじ引き。

レナと別のチームであり続けた刹那がその時に見せていた、妙に残念そうな態度。

初期の4人だった頃には絶対見せない態度を、なぜチーム分けの際

で見せたのか。

刹那の表情の変化を見逃していなかったレオには、何となくではあるが理解できてしまう。

それが、一応の理由だ。大したことではないかもしれないが、そもそも本人ですら気がついていないものを推測する時点で、確定などできっこないのだ。数少ない情報で、いかに事実に近いものを想像するかが、この状況に必要なことなのである。

「ふうん、レオがそう言うならそうなんだよきつとあ」

「おいおい、鵜呑みにするのかよ。確認しないでいいのか？ 俺の勘違いかもしれんぞ？」

「だって私もそう思うし〜。それにい、違つとしても判断のしようがないし〜」

「まあ確かにな。それで、どうするんだ？」

計画の発起人である風蘭にレオがそう尋ねる。

うーんと唸りながら腕を組むという風蘭には少し似合わないポーズを取り、そのままほんの少しの間を置いてから口を開く。

「やっぱり最初は刹那の気持ちを明らかにすることかなあ。いくらレオの見解でも確定はしてないわけでしょ？ 万が一のためにもさ、やっぱり刹那は自分の気持ちはどうなのか知つといたほうがいいと思うんだよね」

風蘭の意外な返答に、レオを含める全員が少しだけ驚いたような表情を見せた。テンションが高くなっていく風蘭が、まさかここで一呼吸を置くような答えを出すとは思っていなかったのである。てっきり、そんなのは知つたことじゃないと言わんばかりの返答をすると思つていただけに、この結論に至つたことについては完全に予想外だつた。

「で、問題は誰がやるかなんだけど・・・やっぱりレオに頼みたいんだよね。何でもない感じで会話を始めて、徐々にそっちのほうに話を持つてくつて感じ。あたし達がやると誘導尋問だつて？ それっぽくなつちゃうかもしれないから、なるべく自分で考えさせるよなことを振つてあげて欲しいんだけど」

「そりゃ構わんが、その間お前らは何をするんだ？」

「レナの所に行こうかなつて思つてるんだ。気持ちの最終確認つてところかな。姉さんも来る？」

「もちろん行くよ」

風蘭の問いに、風花は2つ返事で答えを出した。言葉にこそ出してはいないが、レナをからかって恥ずかしがる反応を見たいという心の内が、妹である風蘭にはお見通しだった。もつとも、風蘭も最終確認という名目で同じようなことをしようとしていたのだが。

「ところで、僕はどうすればいいのでしょうか。さすがに何も仕事がないというのは退屈なのですが」

そろそろ仕事をしたいのか、雷光がそんなことを風蘭に尋ねる。

何をしてもらおうかと再び腕組みをしたところで、レオが横から口を出した。

「それなら頼みたいことがあるんだ。さっき刹那が訓練で庭に大穴を開けたんだが、それを代わりに埋めといてくれないか。今頃、2人で埋めてるだろうからな。そうなると話もできやしない」

「ああ、なるほど。先ほどの爆音は刹那さんのものだったんですね。もしかして、『眼』を使えるようになったんですか？」

「その通りだ。詳しいことは、事が終わった後にも刹那に説明してもらおうかい」

「そうします。・・・そうか、『眼』か」

どことなく楽しげな表情をして、雷光がぼつりと呟く。仲間が新しい力を得たとすれば、気になるといのが当然だ。実際に目で見て、そして得た力がどれほどのものなのかを知りたい。戦うことを好む一族の血が、雷光のその好奇心を生み出していた。

「雷光もやることは決まったみたいね。そいじゃ、各自行動に移しましょっか！ あと、レオ。もう一度言うけど、答えを誘導するのはダメだからね。ちゃんと刹那に考えさせるような形にしてね」

「わかってる。任せておけ」

レオの返答に満足がいったのか、風蘭は最初の時と同じように、何やら楽しげな表情をしたまま立ち上がった。今のところはもう悩むべきことなどないのだから、あとは進むだけ。考えるより行動するほうが得意な風蘭がこうなるのも当然だった。

「よおっし！ それじゃおっけいだね！ 姉さん、行くー！」

「行く行くー。楽しみだなー」

張り切る風蘭と、間延びした声で返事をする風花。声の抑揚は違うものの、2人とも胸の内にある感情は同じである。

この状況を最大限に楽しみたい。

手を握られただけで真っ赤になるレナの可愛らしい反応を、もっと堪能したい。

あまりまともな動機ではないが、その不純な動機がレナの手助けをしようという計画に結びついているのだから、なかなか馬鹿にできたものではない。

かくして、計画の前座とも言える行動が始まるうとしていたのではあるが、そこに今まで黙っていた雷牙が不意に口を開いた。

「なあ、ちつと聞きてえことがあんだけどさ・・・」

頭を掻きながら、言いくそつにしながらも雷牙は続ける。

「さっきからお前ら、何の話してんだ？」

第112話 恋慕編5

「……………」

「……………」

無言のまま、刹那とレナの2人は庭に空いた大穴を埋める作業を行っていた。本来ならば、後先考えず全力を出した刹那が1人で埋めるべきなのだが、レナが自分のためにくれたのだからと言って聞かず、結果2人で埋めることになったのだ。

レナの申し出は非常にありがたいものではあったが、今の状況では少しだけ遠慮したかったというのが刹那の本音だった。もちろん、普段通りであれば喜んで手伝ってもらうのだが、『あんなこと』がさつきあつたばかりでは、恥ずかしくとても顔を見れたものではない。

そんなわけで、先ほどから目が合う度に作業が中断し、顔を赤くしたまま時間が過ぎて行くということを何度も繰り返していくといった状況が出来上がってしまったといわけだ。おかげで作業がちつとも進まない。この調子だと、埋め終わるまで何時間かかるかわかったものじゃなかった。

刹那もそれがわかっていないわけではない。早く埋めなければならぬということにはわかっているし、この調子だと他の世界へと旅立つ日にちに遅れが出てしまうかもしれないことも予想できる。

わかってはいるが　　どうしても作業が進んでくれないのだ。さ
っきの出来事のせいかどうかはわからないが、どうもレナのこと
が気になって仕方がないのだ。そのくせ視線が合うとそのまま思考が
停止し、作業が止まる。理屈ではわかっていてもどうしようもない
のが現状だ。

しかし、それが刹那だけかと言えばそうでもない。レナも同じよう
な感じだ。いや、むしろレナのほうが作業に集中できていないのか
もしれない。

レナは刹那とは違い、自分の気持ちに気が付いている。なぜあんな
にも気になるのか、どうして見ているだけで鼓動が早くなるのか。
その理由に、レナはしっかりと気付いている。

それなのにも関わらず、先ほどのような出来事が起こってしまった
のだから、落ちついて作業など出来るはずがない。驚いたけれど恥
ずかしくて、でも嬉しい。高鳴る鼓動さえも心地よく感じてしまう
今のレナの表情は、恋する乙女そのものだった。

「ん……」

「あ……」

再び、2人の視線が交わる。瞬間に目を逸らし、頬を真っ赤に染め
る。もじもじしながらもお互いの反応を見、そうしているうちにま
た目と目が合う。もう何度も同じことをしたというのに、ちっとも
慣れる気がしなかった。気恥かしくて、それでも居心地は思ってい

たより悪くはない。妙に不思議な気持ちになっってしまう、そんな沈黙だった。

「あ、あのさ……」

「な、何？」

刹那の突然の言葉に、レナは緊張しながらも答える。

「えつと……その……」

声をかけたからには何かを言わなければならないことはわかってい
るのだが、どうもそこから先から言葉が出てこない。何を話せばい
いのか、どうやって接したらいいのか。生まれて初めてのこの状況
に対し、刹那はどうすることもできず、ただしきりに視線を泳がす
だけだった。

レナもまた、刹那にその先の言葉を促すような真似はせず、ただ黙
つてもじもじしているだけだった。というよりも、促したくても何
となく気恥かしくて促せないのかもしれない。その証拠に刹那と同
様、視線を泳がせつつ頬を赤く染めている。そわそわと落ち着きの
ない態度は、いつものレナからは考えられないものだった。

えくと、やら、その、やらと、言葉を濁しているのにもいい加減限
界きたらしく、刹那はそのまま口を閉じてしまい、2人の間には無

言が生まれてしまった。何となく気不味いのだが、別にそこまで嫌ではないという、何とも言えない奇妙な時間。時折吹いてくる風だけが、時間が流れているということを教えてくれていた。

そのまま少しだけ時間が経ち、そろそろ作業に戻ろうかと、刹那がレナに言おうと、一度閉じた口を開いた。

「刹那さん、レナさん、穴埋めは順調ですか？」

その瞬間に、突然聞こえた雷光の声。向き合っていた2人は慌てて距離を取り、いたずらでも見つかった子供よろしく、現れた雷光に声をかける。

「じゅ、順調だと思う！ うん！ た、たぶん順調だよ！ な、なあレナ！？」

「へ？ あ、う、うん！ そ、そうかも！ じゅ、順調かもしれないよ！ うん！」

「だ、だよな！？ うん！ だつてさ、雷光！」

「うんうん！ ホント、これっぽっちも滞ってないから！ 本当に！ 本当だから！」

何と言うべきか、本当に子供の言い訳のような2人の取り繕いように、雷光は苦笑を浮かべるしかなかった。無邪気で、感情をそのまま表情に出して、何よりも顔を赤くしながらしどろもどろとしている2人が、微笑ましくして仕方がない。風蘭があそこまで2人の恋仲を取り持とうとしているのにも、何となく頷ける。

「それならいいんですけどね。それは置いておいて、ちょっと御二方に伝言がありました」

2人を煽って、もう少しだけ狼狽している姿を見たかったが、そうしているわけにもいかないと判断したのだろう。レナは風蘭と風花の所へ、刹那はレオの所へ、それぞれ向かわせようと話を切り出す。

「レナさんは、風蘭さんと風花さんの所へ行ってください。相談があるそうです。刹那さんはレオさんの所へ行ってください。話したいことがあるそうです」

「？ 内容は聞いてないのか？」

ふと疑問に思った刹那が、雷光に尋ねる。話したいことと言っても、何のことやら刹那には想像つかない。

「申し訳ないのですが、わからないんですよ。僕はただ呼んできて

くれと言われただけなので」

「それじゃ、私のほうも？」

「はい。僕に聞くよりも、本人に聞いたほうが早いと思いますよ」

それを聞いた刹那とレナは、先ほどのことなど忘れてしまったかのように顔を見合わせ、お互いに首を傾げる。2人とも、どんなことを相談、あるいは話されるのかわかっていない様子だった。

伝言を聞いた刹那は、不意に困ったような表情をし、雷光に告げる。

「行きたいのはやまやまなだけどさ……。見ての通り、穴埋めの作業中なんだ。今ここを離れるわけにはいかないよ」

「ああ、それでしたら僕がやっておきますよ。どうぞ暇ですしね、ちよつどよかった」

「いや、でもこの穴開けたの俺だし、やっぱり自分でやるよ」

きっぱりと、刹那が雷光にそう言う。

やはりというか何と言うか、刹那のことだからこつこついう風に遠慮す

るのはわかっていた。自分でしでかした大事を人に押し付けるほど厚かましくないし、途中で放り出すほど責任感がないわけでもないからだ。

だがしかし、刹那の意思を尊重してしまえば今後の作戦に支障が出てくるのは目に見えている。ここで2人　主に刹那には、絶対にレオの所へ行ってもらわなければならない。そうしなければ話は前へと進まない。

「そう言うとは思っていましたよ。お言葉ですけど、この作業って何時頃終わるんですかね？　見た所、全然作業がはかどっていないようなのですけれど」

「あゝ・・・それは、えっと・・・」

あーだこーだ言いながら、刹那は雷光の言葉に狼狽する。雷光の言う通り、さつきから作業が全然進んでいないということは刹那が一番よくわかっている。事実、この調子だといつ終わるかわからないのだ。

そんな様子を見て、雷光はやっぱりかと少しだけ笑みを浮かべた後に口を開いた。

「僕1人でやったほうが早いですし、2人に用事がある人だっているんです。どうか僕に任せてもらえませんか？」

雷光の提案に刹那は少しだけ渋っていたが、このままだと本当にいつ終わるかわからない。そうなるとレオの所に行くことになるのは相当後になってしまいうし、レナも長時間拘束してしまう。考えた結果、刹那は雷光に少しだけ甘えようと申し訳なさそうに頭を下げた。

「本当に悪いんだけど、よろしく頼むよ。終わったらすぐに駆けつけるから」

「ええ、任せてください。ささ、2人とも早く行ってあげてください。待ってますよ、きつと」

笑顔でそう言って、雷光は胸を叩いた。頼もしいことこの上ないが、それよりも申し訳ない気持ちがある。一刻も早く戻ってこようと、刹那は決心したのだった。

「雷光、ごめんね。私もすぐに来るから。それじゃ刹那、行く」

「ああ、今行くよ」

先に歩き出したレナの後に続くようにして刹那も歩いて行く。先ほどまであれだけ顔を真っ赤にしていたというのに、こども平気に会話ができるものなのかと、見送った雷光は驚き半分呆れ半分といった表情をしていた。

「・・・それにしても、ずいぶん派手にやりましたね」

改めて刹那の空けた大穴を見て、雷光が感嘆のため息をつく。まるで蟻地獄に対する蟻にでもなったかのような気分だ。おそらく、雷光が『眼』を使って本気で攻撃したとしても、ここまで大規模な穴を空けることはできないだろう。精々、この大穴の半分がやっと

いや、ひよっとしたらそこまで至ることもできないかもしれない。

自分にはない火力を持ち、それを見事に使いこなしている刹那のことを思うと、雷光は全身の震えを押さえることができなかった。それは刹那の持つ強力な火力に対する恐れからの震えではなく、俗に言う武者ぶるいというやつだ。もちろん戦うつもりなど毛頭ないのであるが、実際に戦うとなった時のことを考えると、それはもの凄く濃密で、楽しくて、これ以上ないほどの最高の時間になることは容易に想像できる。

「・・・血筋かなあ」

ひよっとしたら、兄である雷牙よりも好戦的なのかもしれないことを思うと、雷光は苦笑いせずにはいられなかった。決して温厚とは言えない一族の血が流れているのだから別におかしなことではないのだが、それでも仲間にまで戦いを求めてしまうことには、さすがに呆れ返ざるを得なかった。

呪われた血筋とまではいかなくとも、いい加減にこの性を直してい

かなければならないなと、この胸の高鳴りをきっかけ雷光は自身に深く誓うことにしたのだった。

第113話 恋慕編6

「あ、レナレナ、こっちこっち」

「こっちだよ」

やや小走りで走ってきたレナに対し、風蘭と風花は笑顔で手を振る。だが、その笑顔の奥には何やら黒いものが存在しているのが容易に読み取れる。悪意とまではいかない分、その黒さにレナは気がつかない。何も知らずに、そして今から何をされるのかわかっていないレナと、今か今かと待ち構えている風姉妹は、さながら葱を背負った鴨と、それを待つ猟師のようだった。

「2人とも、どうしたの？ 雷光から呼んでるよって言われて来たんだけど……」

「うんうん、呼んだ呼んだ。まま、こっち来てよ」

笑顔のまま手招きをし、風蘭は自分たちの座っている芝生へとレナを座らせた。小首を傾げ、何の話をされるのかまだわかっていないその表情が、無性に可愛らしくて仕方がない。思わず抱きしめたい衝動に駆られるが、今はそれどころではないと心の中で何度も呟き、風蘭は必死になってその衝動を押さえ込んでいた。

「それで、どうしたの？ 何か聞きたいこととかあるの？」

「まあそんなところ。さっき刹那君に何をを見せてもらったの？」

風花のその問いに、レナはそのことかと納得すると同時に、ちょっと困ったような顔をする。言ってもいいかどうかの迷いからだった。別に秘密にするようなことではないのだが、刹那が真っ先に教えてくれた身としては、何だか簡単に教えたくはない。具体的な理由まではわからないが、何となく独り占めしたいのである。

それでもほんの少し、それも2、3秒ほど考えた結果、レナはその事を2人に伝えようという結論に至った。ここまでにこやかな笑みを浮かべながら、自身の見たものを知りたい知りたいとアピールしてくる2人を前にしては、さすがに教えられないとは言いつらいものがあつたためである。

「刹那の努力の成果つてところかな。さっき大きな音が聞こえたでしょ？ あれ、実は刹那がやったの」

「刹那が？」

風蘭が驚いたような表情をして聞き返す。

「うん。空を飛びまわってね、急降下して攻撃したの。そしたら、庭におつきな穴が空いちゃって、さっきまでそれを埋めてたってわけなんだけど……」

「なるほどね。それで、レナはどう思ったのさ？」

驚いた表情から一変、最初のように何かを企んでいるような、そんな悪い笑みを浮かべながらそう尋ねる。風蘭にしてみれば、これらが本番。いかにしてレナを赤面させようかと、今から胸が躍ってしまう。

「？ 感想って言われても、すごいってしか思えないよ、あれは。消えたと思ったらいきなり音がして穴が空いたんだもの。もちろん刹那はちゃんと外してくれただけど……、その気だったら絶対に死んでたと思う」

表情を張り詰めて、レナがそう呟く。

その言葉の通り、刹那の一撃は確かに凄まじかった。全身の神経を集中させ、そして攻撃を見切ろうとしても、空高くから滑降してくる刹那の姿を捉えることすらできない。速度だけならまだしも、特筆すべきはその威力。まともに受けたのであれば、防ぐこともままならず吹き飛んだはず。あそこでどんな行動を取ったところで刹那に一太刀浴びせることは不可能であることを、その場で実際に見たレナにははつきりわかっていた。

真面目に考察し、その脅威に頼もしさと恐ろしさを感じているレナだが、風蘭が聞いたかったこととはちよつと違う。刹那の能力など、今の場には不必要な情報なのである。聞きたいのはただ1つ。

「ん〜レナちゃん、そういうことじゃなくて……嬉しかった？」

一瞬だけ言おうか言うまいか迷ったのだが、レナの慌てる顔を見たという欲望のほうが強かったらしく、風花は何も知らないような無邪気な笑みを浮かべながら、珍しくはきはきとした口調でレナに向けて口を開く。

「そうじゃなくてねえ、レナちゃんの大好きな刹那君に手を引つ張ってもらってえ、そして誰よりも先に刹那君の能力を見せてもらってえ……嬉しかった？」

はつきりと、率直に、単刀直入に、隠すことなく、風花はそうレナに尋ねた。

一瞬、何を言われたのかわからず、レナはぽかんと口を開けたまま、ただただ風花を見つめる。

「それで〜どうだったの〜？」

「……………」

痺れを切らしたのか、ただ黙って口を開けているレナに、風花が再び問いかける。よほど驚いたのか、レナは一向に声を発そうとはしない。さらにはピクリとも動こうとはせず、時間でも止まったかのようにその場で制止している。さながら、壊れたロボットか機械のようである。

「……レナちゃん？　もしもし？」

「……………」

しばらくしても反応がなく、風花がもう一度声をかける。ちっとも反応を示さないレナのことが心配になったのか、最初と比べて随分声が小さくなっている。

だがしかし、それが呼び水となったのか、ようやくレナは反応を示した。何やら目が急に潤んできて、プルプルと小刻みに震えだした拳句、全身がまるで風呂上がりのように真っ赤になっていく。反応を示したというよりも、それは我に返ったと言っべきなのかもしれない。やっと言葉を返してくれるようになったと、風花がさらに言葉をかけようとした瞬間、レナはガバッと風蘭に詰め寄り勢いよく肩を掴み、そしてそのまま揺さぶり始める。

「ふふふふーらん!!!　なん！　何ではな！　話しちゃったのおお!?!」

涙目になってうるたえながら、レナは喚き散らすように目の前の風蘭に訴える。てっきり秘密にしてくれるだろうと信じていたらこれだ。自分で『そういうことなのだ』と認識しているだけでも恥ずかしいのに、それを他人に指摘されたのだからたまったものではない。顔から火が出るという比喻が、これほど合っている場面も他にないだろう。

「あゝえゝその……。つい！ じめん！」

「つ、ついつて何よおお！？ こういうのは秘密にするってというのがセオリーでしょおおお！！」

肩の揺さぶりを、ますます強くするレナ。だが、風蘭は特に気にしている様子もなく、涼しげな顔をして揺すぶられるがままになっていた。あらかじめ、こういう反応を予想していたのかもしれない。もともとレナのこういう姿を見に来たのだから、当然と言えば当然だった。

真っ赤に照れているレナの姿に我慢ができなくなったのか、その様子を見ていた風花はレナを後ろからギュッと抱きしめながら、にや〜と笑って耳元でぼそっと囁いた。

「それでえ、どうだったの〜？」

「ひいやああああ!!」

ぞわりとしたくすぐったい感覚が全身を走り抜け、レナは素っ頓狂な声を上げてビクリと体を震わせる。油断していたのか、それとも耳が弱いのだろうかは定かではないが、行動を起こした本人の風花にしてみればそんなことどうでもいい。一番の肝はレナのこの反応。正直な話、風花もレナがここまで可愛らしい反応をしてくれるとは思わなかった。これぞまさしく風花の求めていたものである。これが見たくて風蘭の計画に賛同したと言っても過言ではないのだから、これで目的の半分は達成したようなものである。

「ふ、風花!?　ちょ、ちょっと!　いや、くすぐりたい……ん!」

「ねえってば、どうだったの?　教えてほしいなあ」

肩に顎を寄せたまま、風花は耳元で呟くの止めようとしなない。レナは何とか振り払おうとするのだが、思いのほか強く後ろから抱き締められているのに加え、何やら得体の知れないゾクゾクとした感覚のせいで体に力が入らない。されるがままである。

最初はレナの反応の変わりように驚いて呆けていた風蘭であったが、あまりにも風花が楽しそうにレナにいたずらをしている様を見てにやりと笑う。最初に浮かべていたものと同じ、子供が悪たくみをしている時のような笑みである。

すっと両手で前に出し、風蘭はわきわきと指を動かす。怪しげなそ

の所行と、浮かべている嫌な笑みは、これから何が起こるかを予想させるに相応しいものであった。

「姉さんずるいなあ。あたしも混ぜてよお……」

「どつぞどつぞ〜。これは1人占めするのはもったいないよ〜」

「へ！？ ちょ！ 勝手に決めないでっば！ あっ……、やっ！
ひう！」

真っ赤にして身をよじらせているレナに、風蘭はおもむろに近づいていく。これから一体自分がどうなるのか、レナは何となく予想はできるのだが、逃げられないのだからどうしようもない。にやにやと笑いながら近づいて来ている風蘭を見て、どうしてこうなっってしまったのだと心の底で叫ばざるを得ないレナであった。

第114話 恋慕編7

レナが風花と風蘭の2人にいじられている頃、刹那はレオを探して林の中を歩き回っていた。雷光にレオが自身のことを呼んでいるということは聞いたものの、肝心の場所を聞いていなかったのだ。そこまで広くはないとは言え、ちょっとした学校程度の規模はあるこの世界を歩き回って人を探すとなれば骨が折れる。

こんな時に『眼』を使って空から探せばいいのにと、刹那はため息をついた。黒い翼を広げて、晴天のこの空を自由自在に飛び回るといふ感覚は、今までにない素晴らしいものだった。小学生の時に『翼をください』という曲を歌った記憶が刹那にはあるが、確かにその通りであった。いくら金を積もうが、名誉を築こうが、この爽快さを手に入れることなどできやしない。もしその2つとこの手に入れた翼、どちらを取ると尋ねられたら、刹那は迷うことなく後者と答えるだろう。

だが、惜しむべきは燃費の悪さ。しばらく飛ばば体全体がずっしりと重くなってしまっただけで疲労が溜まるが故、ちょっとした足代わりに使えるような代物ではないのだ。先の世界で、刹那はそのことを自分の身を持って実感している。歩くよりも、走るよりも、翼を使ったほうがエネルギーの消費量が激しいのである。

現に、先ほどの短時間の使用で、刹那のスタミナはごっそりと削られている。厳密にはスタミナではなく、『眼』の発動と翼の形成による魔力の著しい消費であるのだが、いずれにせよ体の重みが邪魔をして歩くのが割とつらいのだから同じことだ。使っていれば慣れるのだからかそんなことを思いながら、刹那はとぼとぼとレオを探し続ける。

「来たか」

「うわっ!」

不意に後ろから肩を叩かれ、刹那は思わず声を上げてしまう。慌てて振り向いてみると、ずいぶん待ったぞと言いたげな表情をしながら腕組みをしているレオの姿があった。やっと見つけたという安堵からか、刹那は深いため息をついてその場に座り込んでしまった。

「はあ〜……。やっと見つけたよ。こんな所に居るなんてわからな
いって」

「ん？ 雷光から林に居るって聞かなかったのか？」

表情を一変させ、レオは意外そうな顔をしてそう刹那に尋ねる。

「聞いてないよ。だからこんなに時間がかかったんじゃないか」

「伝えてくれてって言うておいたんだが……。まあ、たまにはそんな
こともあるか」

確かにレオの言う通り、雷光が伝え忘れるなどということは、かなり珍しいことの部類に入る。優等生が忘れ物でもするようなものか。理由としては、一刻も早く刹那の攻撃によって破壊された地面を見なかったということしか雷光の頭になかったため、うっかり伝え忘れてしまったというだけの話なのだが、雷光の内情のことなど知り得ない刹那とレオには真実を知ることができないのだった。

「それで、話ってなんなのさ。何か大切なこと？」

「いや、そんな堅苦しい話はするつもりはない。ただちょっと困ってたみたいに見えたんでな」

「困ってた？ 何に？」

レオの突然の言葉に、刹那は首を傾げる。

「作業にだよ。お前ら、なかなか作業が再開できなくて困ってたじゃないか。顔真っ赤にしなげらよ」

「えっ！？ あ！？ み、見てたのっ！？ ずず、ずつと！？」

レオの言葉を聞くなり、急に刹那は取り乱し始めた。視線が合う度に顔を赤らめ、視線を泳がせ、そして作業が逐次止まってしまおうという、なんとも言えない恥ずかしい場面を見られたとなつては、さすがに驚かざるを得ないようである。その慌てよふときたらレオも予想外だつたようで、たちまちにやにやとした笑みを浮かべてしまふ。

「そんなにうるたえんなよ。見たのはちらつとだから、心配するなつて」

「い、いやいや！　だ、だつてさ！　あ、あんなとこ見られたつて、め、めちやくちゃ！」

「……どうしてそんなに恥ずかしがる必要があるんだよ。別に、恥ずかしがらなくてもいいだろう？」

少しだけ間を置いて、レオはさりげなく本題を切り出した。

ここからが重要である。風蘭に、答えを誘導させるような真似をするなど釘を刺された以上、余計なことはいえない。刹那自身に考えさせ、そして答えを出させる必要がある。といつても、いきなりレオについてどう思うなどという、直球過ぎる問いかけをするのも怪しまれるだろうから、まずは様子見するのが第一条件。そこから徐々に中核に迫るとというのが、レオの目論見であつた。

レオの問いかけに、刹那はえーとやらうーとやらと顔を赤らめなが

らお茶を濁す。非常に恥ずかしいのである。なぜ恥ずかしいのと問われた刹那が言うべき答えは1つしかないのであるが、それを説明するには先ほど起こった出来事を話さなければならぬことは間違いない。レナを押し倒してしまったという、人に言うには何ともいえない恥ずかしさが伴う出来事を、今ここで告白しなければならぬのだ。

ちらつとレオを見て、刹那は覚悟を決めた。いつまでもこうしていても仕方がないと悟ったらしい。

「え、っとさ……、さっき、その……。レナをさ、えっと……お、押し倒しちゃって、それで、その……えっと……」

「ほお。それはそれは……、なかなか」

真っ赤になりながら口ごもっている刹那を見ながら、レオはただにやにやと笑っているだけだった。というのも、レオは刹那とレナが『そうなってしまっ』場面を一部始終見ていたわけであるから、単に刹那の反応が面白くて笑っているのである。

確かに刹那の言う通り。あんなことがあつては、目を合わせるだけで頬を赤く染めてしまうのは仕方のないことなのかもしれない。だが、そこでそうだと認めてしまつては先に進むことはできない。だからこそ、違う方向へと質問を続ける必要がある。

「そうなたつたつてことは、ちゃんと意識はしているわけだ」

「？ 意識って、どっぴんじことぢ」

「仲間としてはもちろん、女として、レナのことを見てるってことだよ」

そう言ってから、少し露骨過ぎたかとレオは思い返したが、肝心の刹那は言っていることの意図を理解できていないようで、しばらく腕を組んで考えていた。

「……そりゃレナも女の子なんだから、当然なんじゃないのか？」

「確かに、その通りだ。けどな、普通に意識してるくらいだったら、よっぽど女が苦手じゃない限り、作業に集中できなくなるくらいになるなんてことはまずないはずだ。仮にだ。リリアか風花、あるいは風蘭に同じようなことをしたとする。そうなったら刹那、お前はさっきみたいに作業を中断せざるを得ないほどそいつらを意識するのかって話だ」

レオの言葉に、刹那はそうかもしれないと頷いていた。

あくまで予想で、何も根拠がない想像なのであるが、おそらくリリア、風花、風蘭のいずれかを、先ほどのレナと同じようなことをしてしまったとしても、目を合わせただけで作業を中断してしまうな

どということになるとは到底思えなかった。大方、押し倒した際にお互いの事を気遣い、その後は何の気にも留めずに作業を続けるというのが目に見えるようである。

レナともそうなるのではないかと一瞬脳裏をよぎったのだが、押し倒した際に感じ取れた女性特有の柔らかさと華奢さ、微かに漂ってくる石鹸のような匂い、吐息がかかってしまうほど接近した端正な表情を味わってしまったあとでは、どうもそうなるかと納得することはできなかった。他の3人も同じことにはだと言えるのだが、先ほどと同じよう、どう考えてもそんな想像ができない。刹那がそうなってしまうだろうと素直に認めることができたのは、『レナだけ』なのである。

「…………レナだけ、なんだろう？」

刹那のそんな心境を見透かすかのように、レオが優しく問いかけた。

「…………うん、そうだ。そうなるのは、レナだけだ。…………と思う」

そう言った刹那の言葉には、嘘も、偽りもない。

本当にその通りなのだ、刹那は心の底でそう認めてしまっていた。

しかしながら、一つ。

たった一つだけ、疑問に思うところがある。

「……どうして、レナだけなんだろう」

他の3人では駄目で、レナならばそうなるという理由が、刹那にはいまひとつわからなかった。レナは確かに剣の師であるし、他の3人よりも仲はいいと思う。が、それらが全ての理由だとは思えない。自分でもなぜそうだかわからない刹那は、無意識のうちにレオにそう尋ねていた。

「さあな。俺はお前じゃないからわからんよ」

「……そっか」

てっきり答えてくれると思っていたのに、レオがそう言うのには少しだけ意外だったのだが、わかっているにもかかわらず黙っていたのかもしれないと納得することができた。こればかりは人に頼っていないものではない。自分で考え、答えを導き出さなければならぬ。

第115話 恋慕編 8

レナ。レナ。レナ。

何度か心の中でその女の名を呟いて、その表情を思い浮かべる。

笑った顔、困った顔、怒った顔に、心配そうな顔。その整った表情から繰り出されるたくさんの感情は、まるで四季折々の風景を思い出させる。どれも素晴らしく美しく、可愛らしく、そして愛らしい。思い出すだけでも、心臓が高鳴ってくるほどだ。

頼れる仲間であり、心から信頼できる師でもあるレナの戦っている時の姿も魅力的であった。神器である長細い太刀とレナの繰り出す巧みな技は息を呑むほど美しく、訓練中にはよく見とれていたものである。その度に刹那はレナから注意を受けていたのだが、何度注意されても綺麗なものは綺麗なのだから、1回はレナに怒られてしまふということが常だった。

気が合うためか、会話も弾むことが多かった。刹那が幼少の頃の思い出や、自身の世界のことを話すことがほとんどではあったが、これまでレナが心底面白そうな目をして刹那の話を聴き入っているのだ。刹那にしてみれば何気ない日常でも、レナにしてみれば全てが新鮮であり、興味をかき立てられる内容であるため、刹那とレナの会話は途切れることがほとんどなかった。

可愛らしく、美しく、そして楽しい。他の3人がどうと聞かれれば、もちろん楽しく、愉快的仲間だと答えるのだが、それでもレナには敵わないのだ。

たくさんのことを考え、反芻し、そして思い返してみるが、どうもはつきりとした理由にならない。他の3人と違うから　だから、なんなのだという話だ。どうしてレナだけが特別なのか。その確固たる理由が、刹那にはわからなかった。

「……難しい顔してんな。わからないか？」

「わからないよ。俺は、そんなに頭は良くないからさ。たくさん考えても、大事なことが全然見えてこないんだ」

考えた結果を、刹那は素直にレオに報告した。

あれだけ　　と言っても、たかだか数分悩んだだけなのだが、それにしてもここまで見当がつかないのは予想外だった。悩んだ結果が、レナは他の3人の女の子と比べて特別だという事実を再確認しただけ。一体何をやっていたのだと、刹那は軽い自己嫌悪に陥ってしまう。

なかなか答えにたどり着けないことに業を煮やしたのか、レオは呆れたとばかりにため息をついた。ここまで刹那が鈍いとなれば、自身の気持ちに気がつくのに一体何日何周何力月かかるかわからないし、その間レナをずっと待たせておくわけにもいかないのだから仕方がない。直球でこそあるが、少しだけヒントをくれてやろうと、レオは口を開く。

「……刹那、お前は女を好きになったことがあるか？」

「人をつて……、もしかして？」

「ああ、恋愛感情の好き嫌いのことか」

「ないよ、そんなの」

少しの間も空けることなく、刹那は問いかけてきたレオに言葉を返す。

生きてきた中で、刹那は恋をしたことなど一度もなかった。たまに色気づいた話もなかったわけではないが、それは友人たちの話であって刹那本人の話ではない。精々、クラスメイトの女子から手紙を預かり、それを友人に届けるといった実に小規模な郵便屋さんをしていった程度である。

小学校、中学校、高校と進学を順調に進めてきたというのに、恋愛どころか人を好きになつたことがない刹那には、何か女性絡みの特別な理由やらトラウマやらがあるのでないかと思われがちだが、実のところそんなことは皆無である。女生徒や女教師に酷い扱いを受けたこともなければ、女性を見たり触れたりすると過呼吸を起こしてしまうという症状があるわけでもない。特別な理由やトラウマなど、これっぽっちもないのだ。

理由として挙げるとすれば、高校の同級生の多くが刹那の小学校、もしくは中学校に在籍していた生徒だったから、ということだろう

か。小さい頃からその女生徒達を見てきた刹那にしてみれば、その同級生が少々大人っぽくなったからと言って特別な感情など沸くわけなのである。それこそまさに女としてではなく、友人、もしくは知人という見方しかしていなかったわけだから当然だ。

「同い年の連中はいなかったのか？」

王室で育ったレオにとって、その疑問と問いは普通のものだろう。自身の立場は一国の王子。同い年の友人など皆無であり、歳が近く親しい人物といえば、それこそ義妹であるリリアしかいないのだ。

「いたよ。周りはみんな同い年ばかりだったさ。逆に、同い年じゃない人とはほとんど関わらなかった。そういうもんなんだよ、俺の世界って」

「ほう。なら、女の友人はいたのか？」

「男子と比べれば少ないけど、結構いたよ。みんな気さくで、いい奴らだ。よく野球したりバスケットとかしたっけな」

「そいつらとは、レナみたいにはならなかったのか？ 同じような気持ちにはならなかったのか？」

「ないよ。全然ない。中学校まで同じ教室で着替えを済ませてく
らいだし、そんなのは歩に用になかったよ」

「……ないんだったら、話は早いんじゃないのか？」

ようやくここまで来たかと言いたげな調子を含み、レオは刹那にそ
う言った。

「要するに、恋愛の感情を抱けなかった女の友人とリリア達は同じ
ってことだ。でもレナは違うんだろ？ 今までの女の友人達とも、
リリア達とも違う。今までにない感情だ」

言葉の通りである。刹那の女友達に抱いていた感情と、リリアと風
花、風蘭に抱いている感情は全くと言っていいほど同じであったの
だ。気軽に会話できる仲であって、特に色気のある意識をしている
わけでもない。男性の友人と比べてもこれといって違う点も見当た
らない。ただ女性というだけの、大切な友人なのである。

そしてレナ。レナだけが違う。今までの女友達とも、リリア達3人
とも違う、もつと違う感情が芽生えている。他の人物とレナが一体
何が違うのかもわからないが、それだけは間違いない。その感情が
一体どのようなものなのか。なぜわからないのか。刹那は、少しだ
け自分自身に苛立っていた。

「刹那、今まで女を好きになったことはないって言ったな？ だか

「お前は誰かに恋をしている感情がわからないんだ。どんな風になるのかなんて、書物や人伝で得た知識しかないだろう？ お前自身が身を持って体験したわけじゃないんだから、そりゃ当然だ」

「えっと……、何が言いたいのさ？」

「もしかしたらだ、刹那。お前が今レナに対して感情と、誰かに恋をしている時の感情は同じものかもしれないってことだ」

「それってつまり……、そういうことなのかな」

空を見上げて、刹那はレオの言葉の意味を理解する。ひよっとしたら、無意識のうちにこの話題を避けようとしていた意図もあったかもしれないが、ここまで直球に言われてしまっただけはそのことを認めざるを得ない。レナだけが特別で、他の人とは違うという理由。いくら鈍感な刹那でも、薄々とその答えに感づきつつあった。

「俺はお前じゃないから、お前の本心なんてわからん。だから聞く。お前はレナのことをどう思ってるんだ？ 本当に仲間で、剣を教えしてくれた師であるという認識しかないのか？」

口調は真面目ではない。どちらかというと、本当にただ世間話をしているだけという感じだ。だがその口調の裏側には、答えなければならぬだろうと思わせるような雰囲気を感じられた。

再び、レナのことを思い刹那は目を閉じる。

幼さの残ったあどけない笑顔。

頼りになる仲間であり、尊敬できる師でもある。

可憐で、けれどもどこか可愛らしい。

触れるとわかる、思いのほか華奢な体。

気がつくとも目で追っていて、目が合ったりするとなぜだか安心できる。

さつきもまた、大変な出来事が起こってしまったとお互い恥ずかしい思いをしてしまったが、それで初めてレナが特別なのだということに気がついた。

どうしてレナだけが例外なのか。

他の3人と、何が違うのか。

レオに手伝ってもらって、ようやく刹那は理解できた。

そう、それは

「……あのさ、レオ」

「ん？」

「俺、レナのことが好きだ。それが、俺の答えだよ」

第116話 恋慕編9

レオとの会話のおかげで、刹那は自身の感情に気がついたわけなのであるが、途端に何だか妙に気恥ずかしくなり、レオと林から出てくるときも顔をずっと赤くしたままだった。何と言っても、初めて恋という感情に気がついたのだ。嬉しいことは嬉しいのだが、その半面レオのことをちょっと思い浮かべただけでどうしようもなく心臓が高鳴ってしまう。知らなければ不思議だなと気にも留めなかったはずなのに、一度気がついてしまえばもう止まらなかった。

初めて味わった恋というものだが、これまた苦しいものだった。レオのことを考えれば胸が切なくなってしまうというのに、どうしてもレオのことを想わずにはいられない。締め付けられるような感覚さえ覚えるというのに、決して不快感ではないその気持ちは、まさしく恋。刹那は、そのことを実感していた。

「なんだ、さつきから黙りこくって。もう少し嬉しそうな顔でもしたらいいじゃないか、初恋なんだろう？」

何やら笑みを浮かべながら、レオは刹那にそう声をかける。どうしてもそんなにレオが嬉しそうなのはわからないが、刹那には両手を上げて無邪気に喜ぶような真似ごとはできなかった。確かに嬉しくないと言えば嘘になるのだが、その半面、この胸が締め付けられるような感覚を素直に喜ぼうという気にもなれない。苦しいのだ。苦しいけれど、嬉しい。そんな、何とも言えない感情を、持て余していると言ってもいい。初めて味わう恋の味は、刹那には少し酸っぱすぎるようだった。

「そうだけど、よくわからない。でも、心臓がかなり早くなってるし、さっきからレナの顔が頭から離れない」

「そうか。まあ、ちょっと時間を置いて気持ちを落ち着けた方がいいんじゃないのか？ 初めてのことでどうしたらいいかわからんだろう。ちょうど昼時だし、飯でも食ってのんびり構えてるよ。今日の当番はレナだしな」

初めての体験は、良くも悪くも精神的に疲労するものである。刹那は今回の『恋』という感情によつてずいぶん忙しなく心が揺れ動いたようで、何となく自身もレオの言う通りに落ちついたほうが良いような気がしてきた。

心なしか、腹も空腹を訴えている。この精神で食べ物喉を通るかほんの少しばかり心配だが、実際に目の前に食事が置かれればどんなことがあつたとしても食べてしまつのだらうなと、刹那は苦笑した。それがレナの手料理ならばなおさらだ。早く口いっぱい、その優しい味付けの料理を頬張りたいと、空腹が刹那にそう言っていた。

「おーい2人ともーっ!!」

林から出るなり、大声が聞こえてくる。

声の主は風蘭だった。手を振りながらこちらへと近づいてくる。レナとの用事が終わったからなのか、その表情は実ににこやかである。

「やあやあ、そっちの用事はもう終わったのかなあ？」

「お、終わったけど……」

「ほうほう、終わったのね……。……ってことは？」

視線を刹那からレオへと移し、短く尋ねる。問いかけの内容は知れたこと、刹那は自身の気持ちに気がついたのかどうかだ。刹那がいるから声にこそ出せないが、話がわかっているレオならばそれで伝わるはず。

予想通り、風蘭の問いかけの意図を読み取ったのか、レオは微笑みながら短く頷いた。それが答えだった。刹那は自身の気持ちに気がついたのだ。レオも笑っているということは、レナへの想いが本物だったという何よりの証拠だった。

「ほう、なるほどねえ。うんうん、それならいいんだけどね」

やけに嬉しそうに笑い、風蘭は刹那を見つめる。風蘭が中心となっているこの計画を知らない刹那にしてみれば、今行われたやり取りに含まれていた内情を知ることとはできない。2人で何を笑っている

のかという感じだ。もしかしたら顔に何かついているのかもしれないと、まったく見当違いな心配から刹那は腕で頬をぬぐった。

「何やってんだお前？」

レオが不思議そうに刹那に尋ねる。

別に自身の顔には何もついていないということをし、刹那は今更ながら理解した。

というよりも、完全な勘違いだった。

「い、いや別に何でもないよ。それよりさ、どうしたんだよ風蘭。何か用があるのか？」

話を逸らすようにして、刹那が風蘭に話を振る。さつきからやけにやついていることはさておき、風蘭がこんな林の中にまで来るなんてことは珍しい。となれば、林ではなく刹那たちに用があると考えるのが普通である。またレオと同じような内容だろうか、刹那は少しだけ身構えた。

「あゝ、用っちゃ用かな。刹那だけじゃなくてレオもなんだけど」

「？ どういふこと？」

「ご飯つてことよ、出来たから呼びに来たってわけ。話は終わったんでしょ？ みんなもう揃ってるよ」

風蘭がそこまで言って、刹那は納得した。そろそろ食事の時間だと先ほどレオと話したばかりだ。となれば、家までいけばすぐに食べることができるわけだ。空腹な刹那にしてみればこれ以上ない朗報である。

食事が楽しみで表情が緩む刹那。それを見た風蘭は何を思ったのかにやっと笑い、さささつと刹那の横へと接近し、耳元でぼそつと呟いた。

「……そんなにレナが作った料理が楽しみなの？ 顔、にやけてますよ」

「は!?! え、は、はあ!?!」

突然の風蘭の言葉に刹那は顔を真っ赤にさせ、激しく狼狽する。先ほどのレオとの会話を、風蘭は聞いていない。つまりは、刹那がレナのことを想っているということ、風蘭は知らないはずなのだ。それなのに、なぜ風蘭はレオと同じようにして笑い、レナのことについてからかってくるのだろうか？

もしかしたら知っているのではないかと、刹那はますます慌てる。

こんな恥ずかしいこと、レオの他に風蘭まで知られたとなれば、もう平常通りに誰かと接することなどできっこなどない。いつ他の面子にばらされるか、気が気でないからだ。

実際は風蘭が先ほどの会話を聞いていたなどということはないのであるが、刹那がレオのことを想っていることは、レオとのやり取りで知り得たのだから、刹那の心配はあながち見当はずれというわけでもない。

顔を赤くし、何とかうまく誤魔化そうとしている刹那を見て、風蘭がけけらと笑い出す。

「そんなに慌てなくってもいいじゃないの！ 冗談だつてば冗談！」

「じよ、冗談……？ な、なんだよそりや……」

「いやいや、あんまりにも嬉しそうにしていたから、ちょっとだけからかいたくなつてね。そんなに怒らないでつてば！」

「お、怒つてはないけどさ。……はあ」

慌てて損をしたと、刹那は肩を落とした。

本当ならば風蘭だけではなく、レオを除いた全員がこのことに感づいているのであるが、事情を知らない刹那は本当に安堵しているよ

うだった。風蘭も、それ以上突いてボ口を出してしまつては、今後の計画に支障が出るかもしれないと、それ以上からかうことを止めた。楽しみはまだまだこれから。それをここでご破算にしてしまつては勿体ない。

「それじゃ行きましょ。みんな待ちくたびれてると思つから、早くね！」

そう言つて、風蘭は皆の待つ家へと走つた。

どことなく嬉しそうにしているその後ろ姿は、おそろく気のせいではない。

「レオ、行こう」

「ああ」

短いやり取りをかわし、2人は風蘭と同じように家へと一直線に駆け行つた。

その後、3人は皆の待つ家へと帰還した。家の近くまで近づくと、何やら食欲のそそられる良い匂いが漂ってきた、3人の空っぽの胃を刺激する。匂いから察するに、今回の食事は魚をメインにしたものらしい。独特の香りと香ばしさが、家に近づくにつれ徐々に強くなってくる。

食事が待ち遠しいと思う反面、刹那は家へと向かいたくないという気持ちで混じっていた。家にはレナがいる。先ほどのことからして、きっとレナを見ただけで心臓が跳ねあがり、そして赤面してしまうことは、実に容易に予想がつく。そんな無様な姿をレナに見られてしまうことは、刹那にとってあまり好ましいことではない。

とはいえ、レナの作った料理を食べることができないというのもつらいし、何よりレナの顔を見られないのも嫌である。会いたいののに、会いたくない。姿を見たいが、見たくない。一緒に居たいが、居たくない。真逆の感情から板挟みされている刹那は、もう押しつぶされてしまいそうだった。どうすればいいか、まったくわからない。教えてもらえるものなら、誰かにどうすればいいかを教えてもらいたかった。

そんなことを考えているうちに、いつの間にか家の前まで辿りつく。食欲をそそる匂いも強くなると同時に、心臓の跳ねる回数も多くなり、音も大きくなる。ドアを開ければ、きつとみんながテーブルに座って、刹那たちがやってくるのを今か今かと待っていることだろう。その中には、もちろんレナもいる。

ドアに手をかけるが、そのほんの少しの不安から、刹那はそのノブ

を回せずにいた。回そう回そうと自身の中で急かすのだが、どうしてか手が動いてくれない。回してくれない。

「おいおい、早く開けてくれよ。どうしたんだ？」

「い、いや、その……、何でもないんだけど、何でもあるっていうか、何と言うか……」

訝しむレオに、言い訳にもならない言い訳をする刹那。

なぜか開かないなどというわけのわからないいい分など、言えるはずもない。

「もーっ！ じれったいなあっ！ ほら、どいたどいた！ あたしが開けるからさー！」

「え？ うわ！」

いつまでも開けようとしないう刹那を押しつけ、風蘭が刹那の代わりにドアノブに手を伸ばす。

まだ心の準備ができていない刹那であるが、そんなことお構いなしにドアは開けられてしまった。

「ただいま！ 連れてきたよん！」

開口一番、風蘭はそう言ってさっさと家の中へと入ってき、それに次いでレオも入っていく。

刹那はというと、未だに中へ入ることを躊躇していた。風蘭、レオと一緒に入ってしまえば楽だったのだが、一歩でも遅れてしまっただけはこの通り、玄関先で立ち往生してしまうことになってしまう。

家の中へと踏み出そうとしては、その場で踏みとどまろうとする。傍から見れば不審極まりない行為であるが、当の本人である刹那は至って真面目なつもりである。入りたくとも入れないのだ。

「なにやってるんだ刹那。とっとと来いよ」

いつまでも入ってこない刹那を疑問に思ったのか、レオは首を傾げながら戻ってくる。

「わ、わかってるんだけどね……」

「？ ほら、行くぞ」

何かを口走ろうとする刹那の腕を捕まえ、レオは引きずるような形でそのまま家の中へと入っていく。もちろん引きずられたからと言

つて、刹那の心の準備ができるというわけではないのだから、刹那
は内心レオに対して抗議したい気持ちと、掴まれているレオの手を
振り払いたい気持ちで一杯になった。……のはつかの間。ほんの一
瞬だった。次の瞬間には、この先にレナがいる、自身をこんなに狂
わせている人物がいるのだという考えが、刹那の頭の中を一杯にし
た。つい一瞬前の気持ちなど、もうどこかへと消え去っていた。あ
るのはレナの事。ただそれだけだった。

「おかえり〜。もう食べるだけだよ〜。早く席について〜。もう私
おなか減っちゃって減っちゃって〜」

家に入るなり、風蘭がそう言う。

いつものようににこにここと笑っている。それなのに、刹那にはちょ
っとした違和感があった。うまくは言えないが、何か違う。笑顔の
裏に、何かが隠されている。その何かはわからないのだが、強いて
いるのなら、風蘭が先ほど見せた笑みに隠れていたものと似ている
ような気がした。刹那をからかうがため、顔を近づけてぼそっとレ
ナのことを口走ったあの時のものだ。

何やら嫌な予感が、刹那に走った。

先ほどの風蘭のように、風花もまた、レナのことを刹那に口走って
くるかもしれない。これは何の確証もないただの予想で、風蘭と同
様、風花も刹那のレナに対する気持ちに気が付いていることなどあ
るわけがないはずなのだが、風花のその笑顔を見ていると不安にな
ってくる。ここで万が一にでもレナの話が振られでもしたら、誤魔
化すに誤魔化せない。問題の中心人物であるレナも含め、集まって

いる皆にもろくでもない姿を見られてしまう。それだけは絶対にあってはならない。生き恥にもほどがある。

短い時間の中でとてつもない思慮を巡らせた刹那であったが、そんなことをしても状況は変わらない。ただ川の如く流れに身を任せるだけである。風花の言葉に対して、ああ悪かったよと歯切れ悪く答える。

「2人で何の話してたの？ 大事な話？」

「まあ、大事な話さ。あんまり気にするなよ」

「ん〜、わかったよ〜。気になるけどね〜」

風花とレオがそんなやり取りをかわす。実際のところは、刹那とレオがどんな話をしていたのかを風花はわかっているのだが、誤魔化すために念をいれたらしい。それを聞いた刹那は、やはりレオとの会話は聞かれてないんだなと安心したのだが、全ては風花の手のひらの上で踊っているに過ぎない。刹那とレナを除くメンバー全員（雷牙も怪しいが）が2人の内情を知っていることなど知る由もないのだ。

ともあれ、このまま立ちっぱなしでいるというのも、刹那にしてみれば何やら居心地があまりよくない。さっさと自分の席に着こうとして、そこでようやく『そのこと』を思い出した。

「……………」

「……………」

ふと目と目が合う2人。

一瞬だけ呆け、先ほどの痴態を思い出してか、すぐに赤くなって目を逸らす。

御察しの通り。

刹那の隣の席の人物は、レナなのである。

なぜ今の今までそのことを忘れていたのだろうかという野暮な疑問は、すぐに刹那の頭から消え失せた。そんなこと決まっている。思い出す余裕さえも、刹那にはなかったただけの話だ。

いつもは適当に挨拶をして、すぐに席へ腰かけるのだが、今回ばかりはそう簡単にはいかない。言葉なんてうまく喉から出てこないし、席に座ろうにも先ほどと同じように足が動いてくれない。機械で言うなら故障だ。うんともすんとも言わないというこの状況下で、刹那はただ顔を赤らめていることしかできなかった。

「また固まって……。ほら、さっさと座れ。いつまで経っても飯が食えないじゃないか」

レオに肩を掴まれ、刹那はそのまま椅子に座らせられる。すとんと音を立てて座ったすぐ横には、頬を真っ赤に染めたレオ。刹那の心臓は、破裂するのではないかと思ってしまうくらいに高鳴っていた。それでも、まったく嫌な、不快な感じがしないというのが、不思議でしょうがない。思考も動いていないのに、この感覚がどこことなく心地よくさえ、刹那は思い始めていた。

「やあっと揃ったか。腹減ったあ！」

ずいぶん待たされたのか、雷牙は本当に待ちくたびれたと言わんばかりに喜ぶ。目の前に食事があるのに、全員が揃うまで食べる事ができないというお預けをくらっていたのだ。食欲旺盛である雷牙ならば、こうなってしまうのも仕方がない。

「それじゃみんな揃ったし、食べましようか！ いただきます！」

風蘭の号令の後に合掌。

そして食事の時間が始まった。

「……………」

「……………」

お互いの挙動をちら見しながら、刹那とレナも食事に手をつけ始める。

先ほどまで、ほんの先ほどまで刹那が覚えていた空腹は、もうほとんどなかった。体は正直とよく言うものであるが、この場合は体よりも思考のほう刹那を支配しているらしかった。隣にいる女のことを、ただ悶々と考えているだけ。目の前の食事など目に入りもしない。

そしてレナも刹那と同じ、いや、それ以上に頭の中が想い人のことで一杯だった。

隣に、刹那がいる。

自身の好いている男が、いる。

この状況で気にせず食事をするほど、レナは神経が図太くはない。刹那と同様、空腹などどこかへと行ってしまい、頭には刹那のことだけしかない。表情は赤くなっており、レナもそのことを自覚しているのか、恥ずかしがって刹那のほうを見ようとはしない。こんな顔、刹那には絶対見られたくはなかった。

お互いに顔も合わせず、そして目の前の食事に手をつけようとしな

い。そのまま刻々と時間が過ぎていくものと思いきや、ついに状況が動いた。

「ん〜？ おいおい、お前ら食わねえのかよ？」

リスのように大量の料理を頬張った後、豪快に呑みこんだ雷牙が2人に声をかける。食欲が旺盛極まりない雷牙にしてみれば、2人がいつまで経っても食事に手をつけなことが不思議なのに加え、更に乗せられたそれぞれの魚を狙ったことだった。

まったくもって雷牙らしい考えであるが、欲望に任せたこの発言がこの場の流れを変えることになる。

「食わねえのか？ そんなら、もらっちまおっかな」と

何も言わず、ぼーっとしている刹那の目の前にあるこんがりと焼けた魚に、雷牙の箸が伸びる。

「い、いやいや！ 食べる！ 食べるから！」

「まあまあ遠慮すんなって。今から俺様がおいしくいただいてやるって」

「遠慮じゃないから！ 俺の楽しみを取らないでくれって！」

「っち、まあそんなら仕方ねえか」

何だか納得できていないような表情をしていたが、雷牙は大人しく引き下がった。もともと人の分だったというのもあるが、何よりも雷牙の隣の席に座っている風花の逆鱗に触れてしまうかと思うと、どうしてもそこから踏み込めなかったのである。

とは言え、なかなか手のつかない魚を諦めきれないのか、どこか恨めしそうな目で刹那の皿を見つめていた。

熱い視線。食事にどん欲であるその視線。

自身に向けられている、何とも言い難いそれを受けながら、刹那はようやく食事へと箸を伸ばした。先ほどから食欲よりも気になることで頭が一杯だったが、さすがにそろそろ体の欲求も激しくなり、きゅーきゅーと刹那の腹の虫が鳴いていた。

「あ、あの……、刹那」

箸が魚を突こうとしたその時に、ふとレナが口を開いた。

声が耳に入った瞬間、刹那の体は電撃が走ったかのようにびくりと撥ねた。同時に全身が硬直し、一度は落ちついた表情の赤みも戻ってくる。レナがただ名を呼んだだけなのに、こつこつ簡単に影響され、食事も満足にできないのだからまったく難儀なものである。

「ど、どしたんだよ」

呂律が何だか怪しい口調で、刹那はレナに視線を合わせることなくそう尋ねる。レナのほうもまた刹那から顔をそむけつつ、もじもじと体をよじらせている。表情も刹那に負けず劣らず赤く染まっており、涙目にさえなっている。ただ声をかけるといふ単純な行為だけでも、レナはずいぶん勇気を振り絞ったのが一目でわかる。

刹那の言葉に応えようと、レナは再び口を開こうとするのだが、なかなか言葉が出てこない。これから言うことは、たった今刹那に声をかけたことよりも勇気がいるのだ。なかなか言い出せるものではない。

高鳴っている心臓を落ちつけるために、レナは何度か呼吸を繰り返す。幸いなことに、言葉の催促を刹那がしてこないのに加え、メンバーの全員がこの光景に注目していない。落ちつく時間はまだ十分ある。

ほんの20秒ほど。その短い、しかし実に濃密に感じられた時間でレナは覚悟を決め、おもむろに口を開いた。

「その……、今雷牙に言ったじゃない。楽しみを取らないでくれて」

「あ、ああ。言った。言ったけど……？」

「えっと……、それって、その……どういう意味かって、思って」

消え入りそうな声で、レナはそう言った。

料理を作った側としては、食べてもらった際の感想をぜひ聞きたいもの。それが想い人のものならばなおさらだ。ただレナには、この料理を作ったのがレナであるということ踏まえて先ほどの発言を刹那がしたのかわからない。

要するにレナは、自身の作った料理が楽しみなのか、それとも食事が楽しみなのかを刹那に聞きたいわけである。単刀直入に聞きたくとも、なかなか気恥ずかしくて回りくどい聞き方をするのが、見て見ぬふりをしているメンバーにしてみれば可愛らしくて仕方がない。レナにそう尋ねられ、刹那は特に躊躇することなくその言葉に応えた。

「言葉のままだよ。その……レナの作るご飯おいしいし、レポートリー広いし、家庭的な味って言うか、なんて言えばいいか……。と、とにかく楽しみなんだよ、いつもさ」

そう答える刹那の視線は、相変わらずレナに向けられてはいなかった。

だから、その言葉を聞いたレナの表情が、とても嬉しそうだったことに気がつかない。

「……私の料理、楽しみ？」

「そりゃ……もちろん」

「本当に？」

「嘘は言わないよ」

「……よかった」

本当に。

本当にほっとしたようなため息をつき、レナは改めて表情を綻ばせた。

それは見ている万人が笑みを浮かべそうなほど幸せな表情で、レナの歳相応の実に可愛らしいものであり、その様子を見ていたメンバーも思わず見とれてしまうほどだった。

まるで刹那への想いが、そっくりそのまま表れているような。

これが恋する女の顔だと誰もが納得できる、そんな表情。

ただ惜しむべきは、それを刹那が見ていないことだ。

それさえ見ていれば、間違いなく刹那はレナに惚れ直したことだろう。

「そ、そういうことだからさ」

ばつが悪くなったのか、刹那はそれだけ言っただけで自分の食事を始めた。今度こそ箸は止まることはなく、皿の上に乗っていた魚はほぐされ、刹那の口へ運ばれていく。その一連の流れを、レナはただボーっと見ていた。背けていた顔は、いつの間にか刹那へと釘づけとなっていて、自身の食事の時間さえも惜しまず、自身の惚れた男の横顔をただ見つめる。

そんな中、空気の読めない男が1人、手のつけられていないレナの食事に注目する。

「お、レナ。何だ何だ食欲がねえのか。仕方ねえ。そんなら俺様がおいしく」

そう言っただけ身を乗り出してきた雷牙は、学習能力というものがないらしい。

その横つ面目掛けて、隣に座っていた風花の肘が飛んでくる。

何と言うか、それはもう目にも止まらぬ速さと鋭さで。

「ん？ 何？ 何を言いかけたの？ ん？」

放たれた肘がめり込んだこめかみを押さええている雷牙に、風花がにっこりと笑顔のままそう言う。一番最初に顎を狙ったときよりも、その表情は恐ろしく見える。なぜこの女は笑顔のままこつも強烈な攻撃ができるのだろうか、雷牙は何度も味わってきた風花への恐怖を覚える。

「な、何でもありません」

それだけ言うのが精一杯だった。

というより、それ以外のことを口にするという選択肢がなかった。

「？ どうしたの雷牙。何か言ってみたんだけど」

今の出来事を見ていなかったせいで、雷牙の言ったことを聞き取れなかったレナが、そう尋ねる。

「い、いや何でもねえ。気にすんな」

それならいいんだけど、と言い、レナは再び刹那の横顔を見始めた。

結局、レナはそれからしばらく刹那の顔から目を逸らさなかった。

ようやく食事に手をつけ始めた頃には、せっかくの料理が冷めてい

たというのは言つまでもない。

第119話 恋慕編12

何やら色々なことがあった食事の時間であったが、それも終わりを告げ、各自自由時間となりその場は解散となった。

刹那とレナの席が隣同士であるため、何か一悶着あるだろうと踏んでいたメンバーだったが、案の定とても面白い　　もとい期待以上の展開を繰り広げてくれ、大満足の結果ということで落ちついた赤面してお互い恥ずかしがるだけだろうと踏んでいただけに、なおさら。

ともあれ、状況が動いたのは事実である。ごくわずかではあるが、それなりにいい雰囲気醸し出していたのだから、今更2人の気持ちを疑うような真似はしなくてもよいだろう。問題はこの後のことだ。いかにして2人の想いを実らせるかという、ただ1つの事柄。

言葉にしてみれば実に単純なことであるが、これが考えてみると案外難しいのである。風蘭曰く、2人が自発的に起こした行動を見たことのことであるが、あの様子では自ら想いを告げに行くなど到底できっこないだろう。それができていたら、こうしてあの2人のための計画など練る必要などないのだから。

ここまで話が進み、さあどうしようかというところで、先ほど食事をした大広間にて、一同はそれぞれ悩み込む。

刹那とレナはというと、2人とも食事が終わるなり外へと出て行ってしまった。お互い、それ以上その場にいることに少し耐えられなかったのだろうが、これからのことを相談したい一同としては都合のことこの上ない。実にうまい具合にことが運んだものである。

とはいえ、いつ2人が帰ってくるかわからない。話をしている最中にいきなり入って来られては、この企みがばれてしまい全てがご破算になってしまう可能性大だ。刹那ならば何とか誤魔化せるが、レナ相手に誤魔化すのは無理がある。

作戦を知られないためにも、できるだけ手早く意見をまとめなければならぬ。それを早々に悟った風蘭が、まず先に口を開いた。

「誰か何か提案してっ！」

黙って何かを考え、そして案を出してくれると思った矢先にこれだ。長年の付き合いをしてきた雷光も何となく予想はできていたが、実際に発言されるとなかなか肩すかしがくる。計画人ともあるうものが、なぜこつも無計画なのかを小一時間ほど問い詰めたい衝動に駆られたが、まず言いたいことが一つ。

「考えなしで人任せなんですわ……」

ため息混じりにそう漏らす。文句よりも何よりも、雷牙はまず先にこれを言いたかった。

「そりゃそうよ！ 小難しいことなんて、あたしがわかるわけないじゃん」

「まあそうでしょっけど……」

「だ〜から！ みんなの力を借りんの！ あたしじゃ無理だから、みんなにお願い！ 助け合いの精神ってやつよ！ 素晴らしいですよ？ ってことで、何かアイディアどうぞー！」

「すごく自分に都合のいいように解釈しているようですけど……まあいいですか」

それだけ言い、雷光はため息をついて腕を組む。

アイディアと言っても、雷光の頭にある考えは1つしかない。他にいいアイディアがあるのかもしれないが、今の状況と雷光自身の想像力ではそれ以外の案しか思い浮かばなかった。

何か言われるのだろうなと思いつつも、雷光は浮かんだたった1つのアイディアとやらを口にする。

「アイディアというほどではないですけど、今夜にでも2人きりだけにさせるのがいいんじゃないでしょうか？ 引き合わせる前に何か一言一言伝えて、お互いにその気にさせれば自然とくっつくかと」

僕にはこれしか思い浮かびませんでしたよと、語尾に付け加えて雷

光が口を閉じる。

その場にいた一同、反論するなどなく、それが一番だろうなと胸の内でも同意していた。確かに自立的にどちらかが動くことは難しいかもしれないが、そこは風花とレオの話術でそういった方向へと持って行くとなれば、雷光のアイデア通りに勝手にくつつく可能性も出てくる。

だが、ただ1人。今まで何1つ口をはさまなかった人物が、ここへきて拳手をする。

「えっと、雷光さん。いきなり今夜決行っていうのは急過ぎませんか？ もう少しじっくりやってもいいと思うんですけど……」

雷光の意見に異議を申し立てたのは、リリア。

その口から放たれた慎重に物事を運んだほうがいいという意見も、確かに一理はある。事が事なだけに、軽率なことは絶対できない。あの2人の仲を取り持とうというのだから、失敗だけは是が非でも避けたい気持ちも、雷光は十分わかっているつもりだ。

だが、それを思案に込めていなかったわけではない。早々のうちに決着をつけなければいけないという理由もあるのだ。

それを伝えようと雷光は一度だけ頷いてから、ゆっくりと口を開く。

「もっともな意見です、リリアさん。僕も、できるならそうしたほ

うがいいと思うんです。ここまで来て、失敗だなんて最悪ですからね。でも、それはできないんですよ」

「どうしてですか？ 何か、あるんですか？」

「ありますよ。僕達が旅を続けている大義名分は、世界に蔓延っている罫を外すことでしょうか？ こうやって取っている休息も、いつまでもというわけにはいきません。明日には、次の世界と旅立たなければいけないでしょう。となれば、実質残されている時間は今日くらいしかないというわけです。次、いつこういったまとまった休息を得られるかなどわかりませんから、何としてでも今日中に結果を出さなければ、と思ったのですが」

そう言った雷光の表情にも、こころなしか不満げな色が見える。雷光も、本当のところはもつと2人の様子を長く見守っていたのだろう。見ているだけで笑顔になれる、2人の初々しい反応を、もう少しだけ堪能したいという気持ちだっただけではない。

だが、それはできないのだ。今まで皆が致命的なダメージを負わずして生還していることは、正直奇跡に近いものであることは周知のこと。世界を狂わせているほどの影響を与えている存在を相手に、誰一人欠けることなくよくぞここまで来れたと感心するほどのものだ。

だからこそ、次こうして全員が全員揃うことは2度とないかもしれないという可能性も考えなければならぬ。いつ、誰が、どこで、どんな風にして命を落としてしまうのか、誰にもわからないのだから

ら。

それには、もちろん刹那とレナも含まれる。想いを伝える前に、2人のうちどちらかが帰って来れなければ、その恋は永遠に実ることはない。実る可能性すらないのだ。それならば今のうちに打てる手は打たなければならぬというのが、雷光の主張と考えであった。

「そういうことなら、わかりました。……ごめんなさい、私、考えが足りなくて」

「いえいえ、僕もできるならそうしたいと思っていましたから、どうかお気になさらず」

しょんぼりと落ち込むリリアに、雷光がそう言葉をかける。

その言葉は慰めではなく、本音であることは周りも何となくわかっていた。

「となると……、もう一仕事ってわけね」

場の流れを変えるように、押し黙っていた風蘭が漏らす。

「姉さん、レオ。何度も何度もあれなんだけど、お願いできる？
こればかりは他に頼れないからさ」

珍しく、若干申し訳なさそうに風蘭が尋ねる。

言葉通り、刹那とレナの件に関しては2人に任せっぱなしだ。風蘭もさすがに仕事量の偏りが顕著になってきているために申し訳なく思っているのだろう。雷光、雷牙、そしてリリアに比べてずいぶん頑張っているのだから。

「私はいいよ、ここまで来たらって感じだし」

「俺もだな。今更雷牙と雷光が話に割って入ってきたら、さすがに怪しまれるだろうしな」

風花もレオも、特段嫌がることもなく素直に承諾する。

毒を食らわば皿まで。

ここまで世話を焼いたのだ。今からどれだけ焼こうとも、それはそれで構わないという感じである。

「あ、あの。その役、風花さんの代わりに私がやってもいいでしょうか？ 絶対成功させて見せますから」

もう1度拳手をし、リリアが風蘭に尋ねる。

不安げな表情の中に確かな光が見えることから、何とか2人の仲を取りつぐための手伝いをしたいということが十分に窺える。

悩むまでもない。

リアのその問いに、風蘭は頷いて応える。

「そだね。そろそろリアにも頑張ってもらわないとね。じゃ！
よろしく！」

レオも言うように、いきなり何もアプローチをかけなかったリアが接近していくるとなると、レナに怪しまれてしまうかもしれないのだが、そこはリアの手腕次第でどうとでもなる。何も文句を言わずここまで頑張ってくれたのだ。最後までくらはは頑張ってもらおうと、風蘭は心おきなくリアに一任した。

「じゃ〜私の代わりによろしく。頑張ってね〜、絶対成功させて
ね〜」

「はいっ！ 頑張りますっ！」

両手をぐつと握りしめ、決意を露わにするリア。不安がないわけではないが、きつと何か考えがあったのことなのだろう。今はそれを信じるしかないし、風蘭自身もそう信じたかった。

「それじゃ話は決まったね！ それじゃみんなよろしく！ これが最後だから、気合入れてね！」

その風蘭の言葉に一同は頷く。

指針は決まった。それぞれやるべきこともある。

これが最後なのだ。これさえ成功させれば、あとは本人たち次第でどうなるか決まる。

それぞれがそれぞれの役割をこなそうと躍起になっているその最中、ある男の声が響いた。

「あのさ、俺様は一体何をやりやあいんだよ。」

雷牙の、本当に間延びした声が、その場に何度もエコーしているかのような、そんな錯覚に一同は囚われていた。

第120話 恋慕編13

自身のいないところでどんな話が進められているかなどまったく想像していない刹那は、先ほどレオと会話した林の奥で横になっていた。食休みの意味合いもあったが、何よりも今は1人きりになって色々と考えたかった。

考えるべき内容は言わずもかな、レナのことである。

ここでレオと話したことで、先ほどの一騒動により、刹那は自身のレナへの気持ちを改めて理解したわけだが、それからどうすればいいのかまだはわかっていなかった。レナが好きなことは、もう疑いの余地はない。見ているだけで、胸が高鳴るのだから。

問題はその後だ。好きだと認識して、それからどうすればいいかが問題なのだ。

刹那の世界の常識に倣うのであれば、夜にでもこっそりレナだけを呼び出し、そこで想いを伝えるというのが一番いいのだろう。他に恋文　ラブレターの選択肢もないわけではないのだが、せっかく伝えるのならば直接のほうがいいという考えから、刹那は前者の選択肢を選んだわけだ。

レナに直接、想いを伝える。

誰もいない夜に。

たった2人きりになって。

想いを伝える。

好きですと。

レナのことが好きですと　　伝える。

言葉にすれば短い。それこそ、5秒もあれば事足りる一言だ。

しかしながら、そこまでするまでに行きつく過程を考えると、どうも一筋縄でいきそうにないことは明白らしい。その筋書きを頭の中で描いていただけなのに、刹那の頬はほんのりと桃色に染まって行き、落ちついていた心拍数も上昇してくる。

どうしてこうも免疫がないのだろうと、刹那は自分自身に落胆するのだが、今までそういうことに関わろうと積極的に動かなかった自身が悪いのだから仕方がなかった。こうも苦しむくらいなら、もっと経験を積んでおけばよかったのにと後悔せずにはいられない。クラスメイトにそういう連中がいるのだが、その輪に入ってさえいれはこうならなかったのかもしれないという考えが頭をよぎる。

だが、逆に初めて好きになった相手がレナでよかったかもしれないとも思えてくるから不思議だ。初恋が、異世界で知り合った絶世の美少女。何とも非現実的であるこの状況で、初めて女性を好きになれるのは、ものすごく幸運なことのように思える。偶然にしてはあまりにも出来過ぎなこの筋書きが、何だか嬉しかった。

「そうは言ってもなあ……」

ごろつと寝返りをうち、再び刹那は思慮をめぐらせる。

ここまでレナに想いを伝えるということを前提で色々と考えたわけであるが、勇気を振り絞った刹那の告白が受け入れてもらえるとは限らないのだ。仮に今日の夜にレナを外へとこっそり呼び出して想いを伝え、断られたとする。とすると、その翌日からはレナと顔を合わせるたびに気まずい思いをしなくてはいけなくなる。終わりがわからない旅だ。それが終わるまで、刹那はずっとレナに対して気まずいものを感じ続けなければならぬ羽目になる。

そうなれば、別にこのままの関係でもいいのではないかと思えるのだが、はたと気がついて刹那はすぐにそれを撤回する。現状維持として何も行動しないとしても、今の段階ですでにレナに対して気まずいものがあるのだから、告白して断られるにせよ、何もしないにせよ、この状況が続くことに変わりはない。この状況を打開する方法は1つ。

レナに想いを伝え、そして受け入れてもらうこと。

このまま時間がぎくしゃくした関係を修復してくれることも、ないわけではない。しかし、いつも通りの関係に戻るまでにかかる時間など想像がつかないし、何よりもぎくしゃくした関係でなくなるということは、『自身がレナに対して恋愛感情を失った』ということになってしまう。

やっと芽生えた恋という感情。それをみすみす失うまで待つということなど、刹那にはできない。

ならば、やはりやるべきことは1つしかない。

「やるしか、ないよなあ……」

胸に手を当て、刹那は自身の心臓の鼓動を確認する。

相変わらず高鳴っている心臓は、レナに告白をするという決意をしてからますます高鳴っているように感じる。こればかりは本当にどうしようもなかった。

何はともあれ、ようやく決心はついた。後はどうやってレナと2人きりになるか、だ。

普通に呼び出せばいいのだが、生憎レナと面と向かって喋ること自体今は無理だ。先ほどのようにレナから話しかけてくれて、それに受け答えするだけならまだしも、刹那が自分から話を振るなど絶対できない。固まって、何も喋ることができないに決まっている。

想いを伝えるまであと一息だというのに、どうしてもレナを誘い出す方法がわからない。

「刹那か。また考え事か？」

どうしたものかともう一度寝返りを打とうとしたところで、声がかかった。

刹那が振り向いてみると、腕組みをしながらレオがこちらを見下ろしているのが見えた。

寝たまま会話少し失礼かと思い、刹那は上体を起こして口を開

いた。

「レオこそ、どうしたんだよ。また俺に話とか？」

「いや、そういうわけじゃない。魔力を視覚化するための訓練でもやろうと思って林に入ったらお前がいたんでな。ちよっと声をかけただけだ」

「そうなのか」

確かに、前に訪れた世界で、レオは通常では見ることの叶わない魔力を意識して目に映すという訓練を行っていた。短い期間での訓練だったため、その力を会得することはできなかったものの、レオはどうかコツのようなものを掴むことに成功したのである。

そのことを知っている刹那は、レオの言うことに何の疑問も抱かなかったのだが、これはレオなりの誤魔化し方である。嘘には真実を少しだけ混ぜるのがセオリー。刹那は見事にレオの言うことを鵜呑みにしていた。

「……どうすればいいかわからなくてさ」

ぽつりと、刹那は前触れなく呟いた。

「レナの」とか？」

「そうなんだけど、そうじゃないって言うか……。レナにさ、気持ち伝えようと思って」

「ほっ」

「それで、どうすればレナと2人きりになれるかなって考えてたんだ。面と向かって来て欲しいだなんて言えないし」

「ふむ……。手紙、というわけにもいかんだろうしな。喋る言葉は同じでも、扱う文字は世界によって違うからな」

「え、そうなのか？」

レオの言葉に、疑問の声を上げる刹那。

どうやらそのことを知らなかったらしい。

「そうだが……。手紙は使わないんだろう？　ならその心配はしなくていいじゃないか」

「確かに、そうだな。でも……どうすればいいんだろ」

大きくため息をつき、落胆する。悩んでも答えは出ない。どうすればいいのかという焦りばかりが刹那の中に渦巻く。このままなああになつてしまうことだけは、何とか避けたかった。

「こればかりは刹那が自分で考えたほうがいいだろ。どうしても考え付かなかつたら……、まあ夜風にでも当たりながら考えればいいさ」

「夜風？」

「ちょうど今日は満月の日だしな。月でも見ながら風に当たつてれば自然と思いつくだろうさ。さて、俺は行くぞ。邪魔して悪かったな」

それだけ言い残して、レオは首を傾げている刹那を取り残してその場を後にした。

レオが刹那に夜外に出るように促したのには、一応理由がある。今回レナのほうに話をしにいったのはリリア。幼い頃から過ごしてきたレオには、何となくリリアがレナに言いそうなことの予測がついていた。十中八九、外へ連れ出そうとするはず。

確信に近い勘を頼りに、レオは刹那にそう促したわけだ。

もしも予想が外れたのならば、レナにそれとなく外へ出るように伝えればいいだけの話。

どちらにせよ、刹那とレナを2人きりにすることが可能となる。

レオの言ったことの意図を知らず、そのままの意味で受け止めた刹那は、その後夕食が出来たと呼ばれるまでレナをどうやって呼び出そうか考え続け、結局何1つ打開案をひらめくことはできなかつた。

刹那とレオが別れた頃、リリアは家の周りをとてとて歩き回っていた。言わずもかな、話をすべき相手のレオを探すためであるのだが、そのことを忘れてしまいそうなくらい外の天気はよく、時折吹いてくるそよ風が心地よかった。できることならば、このまま程よく育っているこの芝生の上に寝転がり、ひと眠りしたい気分だ。鳥の囀りを子守唄にし、温かい日差しの下でうたたねをするのは、最高に気持ちのいい一時になることは間違いない。

何とも悩ましい欲求だが、今回ばかりはお預けだ。今はそれよりもずっと優先すべきことがある。

レナにうまいこと言って刹那へ想いを伝えるように仕向けること。それが、今のリリアに課せられた一種の使命だ。

その責務を果たすためにも、レナと話し合うべくこうして出歩いてみるものの、なかなか見つけることができないというのが現状だ。狭い世界ではあるが、居場所がわからないとなればそれなりに探索も苦勞する。

右を見て、左を見て、ぐるっと辺りを見回して、再び歩き出す。外に出てからもう何度も繰り返してきたためか、そろそろ目が回ってきたらしい。ふらふらと体を揺らし、リリアは芝生の上へと腰を下ろした。

一体どこにいるのだらうと、大きくため息をつく。早く見つけて、そしてレナと話がしたかった。刹那のことを好きになってどんな心境になったのか。同じ女として、恋する乙女として、ぜひレナの胸の

内を聞いたかった。共感できる部分もあるだろうし、自身とは違うような考えを言ってくれるかもしれない。それが、今か今かと思えて仕方がなかった。

「もー……。レナさん、どこ行っちゃったの〜？」

独り言を呟き、リリアは立ち上がった。

パンパンと腿の裏を叩いて枯れ草やらを落とし、どこを探そうかと思考する。

これだけ探していないのだ。ひよっとしたら入れ違いになったのかもしれない。そうに違いない。

リリアは少しだけ頭をひねり、驚くほど早くその結論に至る。義兄であるレオとは違って考えることが苦手のリリアは、この通り決断するのも早い。このおかげで幼少の頃何度か痛い目を見たりしたが、それはまた別の話だ。

そうと決まったのならばと、リリアは家まで引き返すことにした。絶対家の中にいるに違いない、もしもいなかったらまた探せばいいだけの話だと、極めて軽い気持ちでリリアは家へ向けて歩き出す。傍から見れば何とも危なっかしく、本当にレナを『その気』にさせることができるのだろうかと不安になってしまうほど楽観的であるが、本人のリリアは至って真面目にやっているようだった。

「あれ？」

何かに気が付き、リリアは歩みを止める。

視線の先は、家の上　　屋根である。

そこに、いた。

そよ風に煽られたのか、オレンジ色の髪の毛がさらさらとなびき、やたらと細長い太刀を抱えて座っている。遠すぎて表情はよくわからないが、間違いなくレナだ。いくら探しても見つからないわけだ。灯台もと暗しとはこのことである。まさか屋根に乗っているなど思ってもみなかった。

ゆっくりとしていた足取りを速め、レナへ声が届く位置まで駆け足で移動する。ようやく見つけたという嬉しさからか、表情は明るい。子供のように無邪気で純粋な明るさが灯った可愛らしい表情だった。

「おーい、レナさーん！」

メガホンの要領で口元に手を当て、リリアは屋根の上に座り込んでいるレナへと声をかけた。

その大声に気がついたのか、レナは顔を上げて辺りを見渡し、そしてようやくとこちらへ向かって手を振っているリリアに気がつく。

「リリア〜、どうしたの〜！」

声を上げて、リリアにそう尋ねる。

「ちょっとお話したいなあって〜！ ダメですか〜！」

「いいよ〜！ ちょっと待ってて〜！」

そう言っつてレナは立ち上がり、リリアの元へ行こうとその場から飛び降りる。屋根から地面までは決して高いわけではないのだが、常人だったならばまず間違いなく怪我をするほどはある。しかし、日ごろから鍛えている人間であれば話は別である。特に身体の強化を使うこともなく、レナは楽々と着地することに成功した。

「やてつと……。お話ってどんなこと？」

さも何ともないように、レナはリリアにそう切り出した。

「ん〜、こごじやちょっと話にくい、ことです。どこか2人きりになれる場所があったらそこがいいですけどね〜……」

これから話すことは、刹那とレナの仲を左右する極めて重要なこと

である。おそらくないと思うが、誰かに邪魔されたりでもしたら
一大事だ。事は慎重に運ぶべきであると判断したりリアは、それと
なく邪魔の入りそもない場所へ行くことを提案する。

「林とかどうですか？ 誰も来ないだろうし、静かそうですし」

「え？ ダ、ダメっ！ 絶対ダメっ！」

リアの言葉に、なぜかレナが必死になって反対する。リアの手
をぎゅっと握り、一気に赤くなった顔をぶんぶんと左右に振る。

ここまでレナが林へ行くことを拒否しているのには一応の理由があ
る。ご察しの通り、刹那がいるからだ。とぼとぼと、寄り道もせず
真っ直ぐ林へと向かった刹那の姿を、レナは屋根の上から見ている。
となれば、林に刹那がいることはほぼ確実。そんなところに行くな
ど、とてもできない。顔を合わせるだけで火が出るのがわかりきっ
ているのだから当然だ。

そんなことを知らないリアは、そこまで嫌がるならと林へ行こう
という考えを即座に破棄した。要は2人きりになればよいのだから
無理に林へ行く必要は全くないし、強引に林へ行こうと言ってレ
ナの機嫌を損ねてしまえば、その時点で刹那のことを話すことが難
しくなってしまう。頭の回転がいまひとつであるリアも、それく
らいは考えている。

それならば、場所はとうしようかとリアは首を傾げる。が、もの
の数秒とかからぬうちにある場所が思い浮かんだ。

「それじゃ、レナさんがいた所はどうか？ 屋根の上だったら誰も来ないだろうし、それに……」

「それに？」

「わ、私も登ってみたいんです！ 高い所、好きなんです！」

思わず本音が出てしまったリリア。若干目が輝いて見えるのは、おそらく気のせいではないのだろう。

身体の強化ができないリリアにしてみれば、こうして誰かに頼まなければ高い所から下を見下ろすことなど到底できない。場所が屋根という危ない場所であればなおさらだ。しかし、逆にそういった危険な場所だからこそ、登ってみたいという気持ちが強くなるのもまた事実。ダメと言われるからやりたくなるのは、もはや言葉では説明できない気持ちの問題なのである。

「うん、そこならいいよ。でも、落ちたら危ないから、絶対私から離れないでね。助けられなくなっちゃうから」

リリアの強烈なプッシュにより、レナは特段難色を顔に出すわけもなく、快くその要求を呑みこんだ。レナにしてみれば、林でなければ場所などどうでもいいのである。

「はい、離れません！ 絶対に！」

「うん、そうしてね。それじゃ、ちょっとごめんね」

一言断りを入れて、レナはリアの胴に腕を回して捕まえる。

そしていつになくスムーズに身体の強化を行い、屋根へ向かって跳躍した。

第122話 恋慕編15

「わっ、わっ！」

突然の浮遊感に驚きの声を上げ、リリアは目をつむり、ぎゅっとレナの腕にしがみつく。そんなことをしなくとも、レナがリリアを取り落とすなどということはまずないのだが、これは怖がりの性というか何と言つべきか……、例えるのならばジェットコースターで安全バーがあるというのに、落下寸前には思い切りバーを掴んでしまふという、自然に体が動いてしまふ反射のようなものである。

しかし、恐怖と言うにはあまりにも大したことないその思いをリリアが抱いている時間は、拍子抜けしてしまうほどに短かった。先ほどから体に取り巻いていた浮遊感もあつという間にはなくなり、地面とは違うほんの少しだけ硬い足元を感じた。どうやら、無事に屋根へ上がることができたらしいと、リリアは閉じていた目を開いた。

「たっか〜い！」

視界に飛び込んだ景色を見て、リリアは思わず声を上げた。この小さな世界で、おそらく最も高いであろうこの場所。今の今まで地面に立って見ていた景色が、高さが変わっただけでここまで素晴らしく見えるとは思わなかった。いつもとは違う視線から見ると美しくも素晴らしい景色はリリアの興奮させ、そして歓喜させる。

「いい眺めでしょ？　ここ、結構好きなの」

「はい！　すごくいい眺めです！　わ〜、きれい〜！」

「よろこんでもらえてよかった。それじゃ、本題に入るっか」

その場に腰を落とし、レナはリアにそう切り出した。目の前の風景に夢中になっていたリアは、レナのその言葉にようやく何をここにへ来たのかを思い出し、その場へ腰を落ちつかせた。

「えっとね……、その……」

何と言って切り出したらいいものかと、リアは口ごもってしまふ。決して口がうまいというわけではないリアが初めて行く、特別な意味がこもったお喋り。最初の一言のせいで全てが狂ってしまう可能性だつてないわけではない。それが最もあつてはならないことである。自分のたつた1つのミスで、2人の仲が破綻してしまう。刹那とレナが気まずそうに顔を合わせるたびに、それは自分が起こしたことなのだと思っても実感させられるだろう。

そのことを考えると、自身がこの役を演じるには無理があるのではないかと今更ながら痛感する。せめて兄であるレオのように、もう少しだけでも口が達者だったらよかったのと思うが、ない物ねだりをしたところで突然にその類の才能が開花するわけでもない。『あるもの』しか、リアにはないのである。

しかしながら、リリアは現状を後悔しているわけではない。例え話術がなくとも、行動を誘発させるようなことを話せなくとも、精一杯やる。そして成功させてみせるというその気持ちは、微塵たりともねじ曲がってはいない。今悩んでいたのも、あくまでどうやって切り出そうかと考えていただけであり、決して役目を引き受けたことを後悔しているわけではない。多少の尻ごみはしたものの、もはや覚悟は決まった。ごくりと唾を呑みこみ、リリアは口を開く。

「えっと！ その！ レナさんは刹那さんのことが好きなんですよね！」

勇気を振り絞り、リリアは思い切って直球を投げた。

小難しい話術をこなせないのならば、問いかけが至極直線的にならざるを得ない。その結論に至ったリリアが行動の結果が、これだった。

「……………はい？」

耳に入った言葉を聞き違えたのかと、レナはそう漏らす。

というよりも、絶対に聞き間違えであって欲しかった。

『まさか』と。風花と風蘭しか知らない秘密を『まさか』リリアが知っているわけがないと。

そのわずかな希望にかけて、レナはリリアに聞き返す。

「だ、だから！ レナさんは刹那さんのこと、好きなんですよね！」

もう一度、リリアは同じことを言う。

返ってきた言葉は、レナの期待を見事に裏切ってくれた。

というか、バレバレだった。

「……………」

突然のことで、レナの頭はまったく動こうとしない。2人しか、風花と風蘭の2人しか知らないはずの秘密を面と向かって言われては、さすがのレナも硬直せざるを得なかった。

確かに、秘密にしてくれと言ってはいないし、誰にも言うなと頼んだ覚えもない。しかし、こういった恋慕の情というものは秘め事にすべきなのではないのだろうか。というよりも、そうしてもらわなければ困る。どこがどう狂って、レナの気持ちが刹那に漏れるかわからないからだ。

と。考えがそこまでようやっとたどり着いたところで、レナに変化が現れた。みるみるうちに顔面が真っ赤に染まっていき、目にも涙が溜まっていく。恥ずかしさで、もうどうにかなくなってしまいそうと

言わんばかりの反応であった。

「リ、リリアあ！ どうしてえ！？ どうして知ってるのおー！」

涙目になり、レナはリリアの肩を掴んで全力で揺さぶる。もちろん身体強化などしてはいないのだが、猛烈な恥ずかしさのせいか通常の状態でも相当な力が感じられる。

いつもと違うレナのその姿に、リリアは内心かなり驚いていた。優しげでありながらも凛々しく、周りへの気遣いも忘れない可憐なレナが、刹那のことを尋ねただけでこうも簡単に変わってしまう。顔を赤くし、可愛げに取り乱すその姿は、今までに見たこともない様だった。

「どっち！？ どっちが喋ったの！？ 風花？ 風蘭？ どっちが口を滑らせたのよお！」

「えっとお、それは」

正直に答えてしまえば風蘭の身が危ないような気がする。かといって、ここまで喋っておきながら知らぬ存ぜぬでは通せない。やるべきことは一つ。嘘をつくことである。

「ふ、風蘭なんだけど」

「風蘭！？ やっぱり風蘭！？ どーして喋るのぉ！ あ〜んもぅ
！ 普通喋らないよ！？ 胸にしまっておくものだよ！？ 人に喋
ったらいけないんだよ！？ ううううう！」

「お、落ちついてレナさん。そ、それと喋ったっていうよりも私が
訊き出したので、風蘭さんが自分から私に話してくれたわけではな
いですよ」

「？ リリアが？ どうして？」

思ってもみない言葉に、レナは若干だが落ち着きを取り戻す。

…… 本当にほんのちよつとなのだけれども。

「えつとですね。最近、レナさんの刹那さんを見る目がちよつとお
かしいなって思っつて。それに、刹那さんを見てるときは何だかボー
つとしてるみたいだし、もしかしたらと思っつて風蘭さんに教えても
らつたんです。訊き出すまで、ちよつと時間がかかりましたけれど
……………」

ぺらぺらと、リリアは思いついた事柄をそれっぽく並べて口に出す。

知つての通り、風蘭に訊き出したという点は嘘である。だが、その

他のことは偽りのない本当のことである。嘘をつく際のセオリーである、真実を織り交ぜて喋るということを忠実にこなしている。咄嗟に出た言葉にしては、なかなかよろしげな嘘であった。

「そ、それならいいんだけど……」

リアの肩から手を離してため息をつき、レナは体育座りになって額を膝にくつつける。どうやら、あの2人以外に自身の気持ちを知られてしまったということが相当ショックだったらしい。確かに、自分の恋慕の気持ちが外へ漏れてしまうのは、あまり気持ちのいいことではないだろう。そのことで頭を悩ませているのなら、尚更だ。

「それで改めてお聞きしますが、レナさんは刹那さんのことが好きなんですよね？」

「……うん、好き。他のこと、何も考えられないくらい好き」

観念したのか、それとも胸の内を風花と風蘭以外の人間に打ち明けたかったのか、レナは静かに口を開いた。その口ぶりは、先ほどの取り乱していた時とは全くと言っていいほど違っていて、その表情もとても優しげで、慈しみさえ感じさせられるほど柔らかく感じられた。

本当に好きになっているのだなあと、傍から見ただけでひしひしと伝わってくる。好きという言葉は口にするだけで、ずいぶんと

幸せそうな顔をしているレナが、心の底から羨ましかった。いつか自身もこうなりたいと、リリアは胸の中でこっそりと誓うことにした。

ともあれ、ようやくレナの口から聞き出せた刹那への想い。人伝で聞いたのと直接聞くのでは、やはり重みが違う。今度はそれからどう展開し、刹那へ想いを伝えさせるように仕向けるかだ。

筋道を立てて話を展開させるのが理想だが、何度も言うようにリリアにそんなことはできない。ならば、とにかく喋ってみるしかない。喋っていれば、それとなく言いだせるかもしれない。

決意し、リリアは口を開く。

「好きなら、好きって言うっちゃったらどうですか？」

「へ？」

「刹那さんに、好きって言うてみたらどうですか？」

突然の提案に、レナは呆気にとられて絶句してしまう。

回り道だとか、寄り道だとか、リリアにはそんなもの必要ないらしかった。いや、必要ないというよりも回りくどい真似ができないといったほうが正しいか。

いずれにせよ、このドストライクの直球はレナに大きな衝撃を与えたようだった。一度は落ちついたレナの表情が再び赤く染まってきた、パクパクと言葉の出ない口を必死に動かす。

第123話 恋慕編16

「ど、どど、どうしてそんな！ 無理無理！ 絶対無理！ ろくに話だつてできないのに、好きですつて言うなんて無理だつてば！」

手をぶんぶんと振り、レナはリアアの提案をものすごい勢いで拒否する。

今までのことを考えてみると、レナがここまで言うのにも頷けるし、恥ずかしがるのもわかるのだけれども、そこで『そうだね、それじややめようか』などと言って引き下がるなどできない。刹那とレナの関係を壊すことが最悪の事態だとすれば、現状がずっと続くことがその次に悪い事態だ。

何も起こらないとなると2人があたふためいているという状況が続くため、長い期間それを見て楽しめるといふ判断もできるが、いつまで経つてもそのまま、というわけにもいかない。これからまた異世界へと旅立ち、その時になつても2人の関係がこのままだと罨を外す行為にさえ影響が出てくる。

やはり、一番いいのは2人がくつつくこと。

恋仲になること。

となれば、言うことなど決まっている。

「この際、できるかできないかは置いておいて、レナさんはどうし

たいんですか？」

「？ 何が？」

「このままでいいのか、それとも一步前進したいのかです。言うてる意味、わかりますよね？」

もはや行きすぎとも思える容赦のない直線的なものの言い、レナは思わず口をつぐんでしまう。

リアの言葉に、レナは一瞬だけ何もしない、できない自分のことを責められているのではないかと思ったのだが、明らかに必死になっている顔と、心底自身と刹那のことを心配してくれている雰囲気を感じ取り、そうでないことを理解した。

理解したところで、レナはリアに言われたことを脳内で反芻させ、これから一体どうしたいのかと他でもない自分自身に問いかける。

このままの関係を望んでいるのか？

恥ずかしさから顔をそむけ合い、まともに会話すらできない今の状況を？

答えは 否である。

自身の想いに気がつけた今だから言えるのだが、この状況よりも以前の関係のほうがずっとマシのように思える。刹那への想いに気が

つけて、そのせいで恥じらいを覚えるよりも、前のようにくだらないことを話して笑っていたほうがよかった。そっちほうが今よりも距離が近かったような気もする。好きだと気付けた現在よりも、気がつかなかった過去のほうがよかったとは、実に皮肉なことである。となれば、レナ自身のすべきことが見えてくる。

それは1つ。

「……もっと、刹那の近くに行きたいよ」

ぼそっと。

耳を澄まさなければよく聞こえないほど小さな声で、レナは呟いた。

この状況を打破し、刹那と『そういった』仲になりたいと望んでいるのは傍観しているリリアたちだけではなく、その騒動の中心人物であるレナもだったのである。せっかく自身の想いに気がつきたというのに、今のままではあんまりだ。もっと刹那の近くにいき、もっと刹那のことを知りたく、そしてもっと刹那に自分のことを知ってほしい。それが、恋心を抱いたレナの望むことであった。

「……それなら、だったらやることは1つじゃないですか！」

ぐっと胸元で手を握りしめ、リリアがレナに言う。

この状況下でやることと言ったら1つしかない。

それはすなわち、刹那に想いを伝えること。

好きですと、言うこと。

リリアに言われるまでもなくも、レナはそのことに気が付いていたのだが、いかんせんそれを行動に起こすだけの勇気がどうしても出ない。手順としては実に単純なもので、刹那を誘い出し、誰も来ないような場所へ向かい、想いを伝えればいだけなのであるが、刹那を誘い出す時点で無理に近い。刹那とまともに話もできないというのに、外へ誘い出すなど絶対にできない。

やらなければ状況も打開しないし、レナもそうしたいと願ってはいるが　できない。

本当に、板挟みの状態だった。

「やっぱり、できないよ」

ぼつりとそう呟いて、レナは再び顔を伏せてしまった。

「面と向かってなんて、言えないよ」

覇気のない声で、さらに続ける。

想いを伝えることが、こんなにも難しく、そして過酷なことか。

初めて抱く種類の困難に、すっかりレナは意気消沈してしまったようだった。

となれば問題が1つ。

今のまま　　レナがこんな調子では、絶対に今の状況は打開しないことになる。

打開しないどころか、何も起こらないまま終わってしまう。

かと言って、無理矢理レナに言っただけ聞かせるわけにもいかない。そんなことをしたところで、逆効果なのは目に見えている。行動は、自発的に行わせなければならぬのだ。

八方ふさがりのこの状況。

何もできず、何もさせることもできない。

そんな中、リリアはふっと優しく笑ってそっとレナに近付き、ゆっくりとその小さな肩を抱きしめた。いつもとは違うしおらしいレナの姿が、何だか無性に愛おしくなっていた。可愛らしくて、愛らしくて、とても壊れやすい。守ってあげたくなると言えばいいのか、レナの体を抱きしめているリリアは、ふとそんなことを思った。

レナはというと何も言わず、ただリリアにされるがままになっていった。相変わらず顔を伏せたままだったが、心なしか胸の内に沸いていた不安が和らいだように見える。

それを悟ったのか、リリアは腕の中のレナに言葉をかける。

背中を押し、行動を起こさせてくれる勇気の出る言葉を。

「刹那さんも、今のレナさんと同じ気持ちだと思えますよ」

「え？」

驚いたように、今まで伏せていた顔を上げ、レナは近づいていたりリアの目を見る。

「それ、ホント？」

恐る恐るといった風に、レナは口を開いて確認する。

「確かではないですけどね。直接刹那さんに聞いたわけではありませんから。ただ、刹那さんがレナさんを見ているときの顔が、今のレナさんの顔とそっくりだから、そう思ったんです」

まるで子供に言い聞かせるようにリリアの声色は優しく、慈愛に満ちたものだった。

刹那の気持ちは本人に聞いたわけではなく、ただ人伝に聞いただけに過ぎないだけに確実なものとは言えなかったが、それでも確信めいたものがあつた。言葉にしてレナに伝えたように、2人ともお互いを見る顔が、本当にそっくりだったのだ。どこか呆けていて、夢中で、時間が止まったかのように夢中になって、想い人の表情を見ている。よほど鈍い人でない限り、それが好意によつてもたらされたものだという判断をするのが普通だ。リリアとて例外ではない。

「全然、気がつかなかった……」

「あれだけ顔を逸らしてれば気がつかませんよ。今のままだと、ずっとそういつたことが続くと思いますよ。刹那さんのことをずっと想つてばかりいるのに、大事なところを見落としてしまうなんてこと、嫌ですよね？」

「……うん」

「だったら、勇気を出さないといけませんよ、レナさん。誰も取つたりしないからって、レナさんのところに来るなんて保障なんてない。刹那さんが欲しいなら、自分から取りに行かないと」

「……そうかなあ？」

「少なくとも、私はそう思いますよ。女の子の意地の見せどころで

す。一世一代の気持ちで、挑んでみたらどうですか？」

いつにない強気な物言いで、リリアはレナに自分の気持ちを伝えた。

確かに、刹那からのアプローチを待つという手も、ないわけではない。先ほど言ったように、刹那がレナのことを想っているのは確実と言っていていくらいだし、レオがうまいことやってくれて、レナに想いを伝えようと計画を立てている最中なのかもしれない。

けれど、それだといつになるかわからない。いつレナの元に想いを伝えにくるのか。いつ仲間以上の関係になるのか。アプローチが来るまでの待つ時間を、レナの胸はずつと締め付けられているに違いない。いつ来てくれるのか、いつ想いを伝えに来てくれるのか。それを自身に問いかけるたびに、落胆と切なさを感じる羽目になる。

それならば、自分から行ったほうがいいに決まっている。そうすればすぐにでも刹那に想いを伝えられるし、刹那の気持ちを知ることできる。仲間以上の関係にもなることだってできるだろうし、今胸の内に巣食っているもやもやも解消できる。先手必勝という言葉もあるように、待つよりも攻めるほうがよっぽどマシな結果になるのは明白だった。

「……………リリア」

「なんですか？」

「うまく、いくかな」

「いきます。きちんと自分の気持ちを刹那さんに伝えれば、きっと応えてくれます」

「……意地の、見せどころかな」

「はい。女の子の強さ、見せつけてやりましょう」

「……うん、そうだね。そうだよね」

芯の通った強い声色で、レナは言葉と共に決心した。

勇気を振り絞ろうと。

女の子の意地とやらを見せてやろうと。

刹那に想いを伝えよう。

ただ、決意をしたとは言っても不安は消えない。

だから、せめて。

「リリア」

「何ですか？」

「もうちょっとこのままですわね」

「もちろんです」

その不安が和らぐまで。

もう少し、このまま。

第124話 恋慕編17

それから刹那とレナの両者にこれといった動きはなく、ついには夕飯の終了まで何事もなく時間は過ぎ去ってしまった。相変わらず例の2人は顔を見合わせるたびに赤くなり、顔を逸らしていたが、レナに関しては少しだけ違っていた。赤くなり、顔こそ逸らしているものの、刹那を見つめる際の目の色が、リアと会話する以前とはまるで違う。明らかに、覚悟を決めた者の目だった。

そんなレナの密かなる決意を知らない刹那は、一体どうやって想いに自身の気持ち伝えればいいのかと、夕飯後の自由時間になるなり外へ出て行ってしまった。夜風に当たっていれば、きつとい考えが思い浮かぶだろうというレオの言葉を鵜呑みにしての行動である。その言葉の裏に隠された意図を知る由もない刹那は、これから自身の身に起こるであろうことを塵ほどとも予想だにしていないうだ。

居間から出て行った刹那を追うようにして、レナもまた居間を後にした。表情は若干強張り、頬も赤く染まっているものの、それでも怖気ついた様子は微塵も見られず、口をきゅっと結んでこれから起こる出来事に備えている様子が窺える。よほど鈍くない限りは、今まで起こった事や2人のためにしてきた事と、レナのあの様子からこれから刹那に想いを伝えに行くのだろうと想像することは難しくはなかった。

ともあれだ。

刹那とレナが居間からいなくなった以上、事が起こってしまうのは時間の問題である。

2人を除く一同は最後の話し合いということとで席に着いたままなのであるが、あまり時間はかけられない。これから一体どうするかを速やかに決定し、そして行動に移らなければならない。急がなければ、事が終わってしまう。それだけは避けたい。何としてもだ。

なぜ避けたいのか。

それは。

「見たい見たい見たいーっ！　　ぜーったい見たいっ！」

バンバンと机を力強く叩き、風蘭がそう主張する。いつになくムキになっており、絶対にこればかりは譲れないといった表情をしている。

風蘭が何故ここまでだをこねているのかというと、それは今現在話し合っている内容のせいと言わざるを得ない。どんな内容なのかは、言わずとも何となくだが想像がつくだろう。

それすなわち、刹那とレナの様子を見るか否か、である。

主張通り、風蘭はその現場を自身の目で見届けたいと考えているわけである。せつかくここまで乗りかかった船。途中で降りるような真似はしたくないし、何よりも目玉とも言える2人の告白シーンを見逃すのはあまりにも惜しい。

「絶対駄目だ。こんな大勢で行ってみる、いくらなんでも気づかれる。そしたらやってきたことが一瞬で終わるんだぞ。身に行くべきじゃない」

風蘭のその主張に対して反対しているのがレオ。言葉の通り、こんな大所帯で2人の様子を見に行こうものならば必ずといっていいほど勘付かれてしまうから行くのは駄目、というのが大筋の意見である。

見事なまでの行動派と慎重派。

今回はとことんぶつかり合ってしまう2人である。

「じゃあレオは2人の様子見たくないの!? 一大イベントだよ!? もう2度と見られないかもしれないよ!」

レオの聞く耳持たないという態度にむつとしたのか、ムキになったような調子で風蘭がそんなことを口走る。

野暮な行為だと言われるかもしれないが、それほどまでに重要かつ興味深いことなのだから仕方がない。あれほどまでに奥手で、向き合うだけで赤面していた2人が、いよいよ想いを伝え合うのだ。それぞまさしく一世一代。

うまくいくにしろ、失敗するにしろ、その機会を逃してしまえばもう必ずと言っていいほど刹那とレナの告白場面はお目にかかれないうだろうということは、想像するに容易いだろう。

だからこそ、風蘭はこつも熱烈に事故の主張をしているわけなのだ

が、超のつくほど慎重なレオのことである。どうせ、俺は別にそこまで夢中になつて見たいとは思わんだの、そんなことを言ってくるに違いない。どうしても引き下がれない風蘭は、何かレオを封殺できるうまい切り返し文句はないものかと、あまり上等ではない頭をオーバーヒート寸前までフル回転させる。

もはや意地である。

絶対に退かないという意地が、風蘭の頭を回転させていた。

「見たいに決まつてるだろ、当然じゃないか」

ところが、返ってきたレオの言葉は実に意外なものだった。

ここに居合わせた全員が全員その言葉に驚いたのか、鳩が豆鉄砲でも食らつたような顔でレオを見つめる。中でも返事を要求した風蘭は、自分の聞き間違えかもしれないとポンポンと耳を軽く叩き、動作不良を起こしていないかどうかをチェックするほどに驚いたらしい。

「大袈裟だな。風蘭の言う通り、せつかくここまでやったんだしな。俺だつてそりゃ最後まで見届けたいさ」

「じゃあ兄さん、どうしてダメ〜って言うの？ 様子、見たいんでしょっ？」

様子を見に行くことを反対している唯一の人物であるレオの本心が聞けた以上、リリアのその問い掛けは至極当然のものである。見たいなら見に行ったほうが絶対いいはずなのにと、リリアは納得できていないようであった。

「だから言ってるだろう。この人数で見に行けば絶対気付かれるって。時には我慢しなきゃならんことだってある。諦める」

「え……」

それでもやはり2人の様子が見たいのか、リリアは納得できないといった調子で不満の声を漏らす。もう2度と見ることの叶わない2人の結ばれる場面。それをみすみす逃すのは、あまりに惜しい。

だがレオの言う通り、様子を見に行くことで全てが台無しになってしまうとは話にならない。一步間違えてしまえば、ここまでやってきたこともまず間違いなく水泡に帰す。それは決して一同の望むところではない。刹那とレナの仲を取り持とうと決めたのは、2人の仲を壊すためではないのだから。

風蘭もリリアも不満げな表情こそしてはいるものの、やはりここは諦めるしかないと悟ったのか、むゝやら、うゝやら唸るだけで、特に反論することはなかった。したくともできない、というのが正しいか。何だかんだで、2人ともレオの言うこともが正しいということとを理解しているようであった。

「ちよつといいく？」

そんな中、やけに間延びしたような声で、今まで黙々と話を聞いていた風花が手を挙げる。

表情は相変わらず笑顔。にこにここと、ただ笑っている。

「別にみんな一緒に見に行かなくても、1人ずつバラバラになって見に行けばいいんじゃないの？ そしたら騒がしくなることもないし、隠れやすくだってなるし」

確かに、一理ある。全員で行けば、さすがに身を隠すのも難しくなるだろうし、1人でも見つかった結果的に全員見つかってしまうことになる。

しかし、1人ずつ見に行くのならば、隠れ場所も十分過ぎるほどあるだろうし、万が一見つかったとしても誤魔化しが効くかもしれない。バラけて見に行くという風花のアイディアは、なかなか悪くないものだった。

「確かに、それなら良さそうだ。……お前らが自制できれば、の話だが」

言い終えるなり、レオは風蘭とリリアの2人に視線を向ける。

肝心の2人は何のことやらわからないと言わんばかりに顔を見合わせ、首を傾げてみせた。

「刹那とレナの様子見て興奮して、周りの草木を揺らしちまうのが目に見える。普段からじっとしてられないお前らが、今回だけ大人しくできるわけないだろ」

ずばっと。

本当にずばりと言われてしまい、風蘭とリアの2人は『うっ』と一言唸ってレオから顔をそむけてしまった。2人して、痛いところ突かれたという表情をしている。実際にその通りなのだろう。レオの言葉に、何も返そうとしないのだから。

ほらなと呟いて、レオはため息をつく。レオもこういったことを把握した上で様子見を反対したのだろう。先ほども言ったように、レオだって刹那とレナの様子を見たくないわけではない。ただ、そういった不安の種がある以上、危険を冒してまで自分たちの事を優先させるわけにはいかないだけの話だ。

ただ、バラけて見に行けばいいと提案した風花も考えなしに発言したわけではなかった。先ほどまで浮かべていたものよりも更に明るい笑顔で、風花は言葉を紡ぎ出す。

「それならさ、1人ずつじゃなくて、2人ずつのペアで行けばいいと思うんだ」

「2人ずつ?」

その新たな提案に、レオは思わず聞き返してしまう。

「そ〜そ〜。この人なら大丈夫だろうって人と〜、この人は落ち着きがないな〜って人とで分かれるの〜。そしたら〜、片方が変なことしそうになっても〜、もう片方が押さえてくれるだろうから安心〜っていうわけ〜。全員で動くよりも気付かれにくいだろうし〜」

なるほどと、レオは風花の提案に頷いてみせた。

風花の言う通り、その方法ならば何とか刹那とレナに気づかれることなく様子を窺うことが可能だ。気付かれる可能性もなくはないが、全員で一緒に見に行くよりかはずいぶん低いはず。万が一バレたとしても、2人程度ならば何とか誤魔化せる。

逆に、それ以上多ければ気付かれやすくなってしまふし、騒がしくもなってしまう。2人ずつという分け方が、2人に気づかれずに様子を見ることのできる最適な人数なのである。

「それで行こう。それなら、見れるぞ。決定的な瞬間をな」

やけに嬉しそうにそう言い、レオは笑みを浮かべて見せた。

色々反対はしてきたものの、自身の目で2人の様子を見ることは楽しみだったらしい。子供のようなその無邪気な表情を見ればわかる。もう反対しようという気はないようだ。

残るはメンバーを決めるだけ。誰と誰がペアになるか、それだけだ。

「まゝ、とりあえず雷牙くんは私と一緒にね」

メンバー選考の皮切りを果たしたのは風花だった。

迷うことなく、成り行きに任せていた雷牙にそう声をかける。

「何でだ？ 別に他の奴でも」

「てめえが余計なことしねえように見張ってやるっつってんだよ。つべこべ言わねえで領けや」

口答えをしようとする雷牙を、風花は背筋が凍るような口調で封殺した。そのドスの効いた声を笑顔のまま言われた雷牙は、そのあまりの恐ろしさにただただ黙って頷くことしかできなかった。風花の真の恐ろしさを知っているためか、体全体が震えているような気がしないでもない。

「それじゃ雷光！ あたしと行くよ！ いいね!？」

「構いませんよ。くれぐれも騒がないようお願いしますよ」

風蘭も黙って話を聞いていた雷光に声をかけ、了承を貰うことに成功する。

今回、一番危なっかしいのが風蘭なのだけども、雷光ならば風蘭のこともよくわかってるだろうし、騒ぎ出す前にちゃんと止めてくれるはずだ。そこら辺は雷光もわかっているのか、レオに目配せをして合図を送っていた。つくづくできた男である。

「そういうことなら、余り者同士ってことで俺はリアとだな。あまりはしゃぐんじゃないぞ」

「わかってるってば。ちゃんと大人しくしてるから大丈夫！」

自信たつぷりに胸を叩き、リアはそう言う。その言葉が本当かどうか怪しいものの、危なかったらすぐに止めてやればいいかと、レオはその嬉しそうな表情を浮かべているリアを見ながらそんなことを思った。

「よし、そうと決まれば早速動こう。くれぐれも音を立てて気付かれないように頼むぞ」

レオのその言葉を話し合いの締めくくりとし、一同は溢れ出てくる胸の高鳴りを押さえつつも行動を開始した。

待ちに待った決定的瞬間。

それを決して見逃すまいと誓い、居間の灯りを消した後、各々家を音を立てずに飛び出して行ったのであった。

第125話 恋慕編18（前書き）

急な事情によりまして、異次元図書館を125話を持って終了させて頂いていただきます。ご愛読いただいた方には大変申し訳ありませんが、どうかご理解のほうをよろしく願います。

今回は誠に申し訳ありませんでした。次回作にご期待ください。

第125話 恋慕編18

レナの決心も、風蘭達の行動も何も知らない刹那は、どこまで行くとうとうあてもなく、ただ月明かりの下を黙って歩いていった。夕方にレオから言われた事を実行すべく夜の世界へ飛び出したはいいものの、ちっともいい考えなど浮かんでこない。優しく頬を撫ぜるそよ風や、木々や葉の揺れ動く柔らかい音は、確かに昼間には味わえない実に心地よいものでこそあるが、そのおかげで今まではなかったアイディアやらが沸いてくるということとはなかった。

「はあ……」

本当に、これから一体どうすればいいものかと刹那は深くため息をついた。いつまでも決心がつかない自分のふがいなさを丸半日感じている。誰でも自己嫌悪の念に駆られる。どうしてこつこつと踏み込めないものかなど、考えてみればきりが無い。

とは言ものの、別に刹那自身が特に焦りもせず、現在の状況に対してのんびりと構えていたわけではない。刹那だって、今自分たちに与えられた自由時間の限度はわかっている。いつまでもこつこつとちんたら悩んでいる時間などないことも重々承知している。

そのことがわかっていながらも、やはり刹那には気の利いた言葉も思い浮かばないし、踏み出そうとする勇氣も出せなかった。そんなのただの怠慢だろうと思われるかもしれないが、それは違う。刹那は必死だった。初めてなりに足掻いた。今までたった1度も恋愛をせず、想いを伝えることにどれだけの勇氣と覚悟があるかわからな

い中、懸命に努力した刹那を誰も責めることはできないだろう。

しかしながら、刹那がどうであろうと時間は関係なく過ぎ去っていく。もう少し待ってってくれと願っても時は止まってくれないし、もっと猶予をくれと祈っても時は遅くはならない。時間は無情であり、残酷だ。激流が如く流れて行き、止まることも緩まることもない。残された時間は、おそらく今夜だけ。さらに悪いことに、皆の就寝する時間を考えたら、もう3、4時間ほどこしか猶予はない。その短い時間の中で、いよいよ刹那は覚悟を決めて勇気を振り絞らなければいけないわけだが、この調子で本当にそこまで漕ぎつくことができるのか、という話である。

「はあ……」

もう何度目かわからないため息をついた後、刹那はゆっくりと芝生の上に腰を落とす。

現在地は庭。小さくも力強い草花の生い茂る、この世界の顔と言ってもいい場所である。

先ほどから転々と歩きまわっていたが、さすがに少しくたびれたのだ。虫達のさざめきと、ほんの少しだけひんやりとした草花の絨毯は、昼間とはまた違う魅力を醸し出しており、刹那の体を微量ながらも癒してくれている。

「レナ……」

そつと、自身の想い人である名を呟く。

今回の出来事を中心であるレナ。

出会ってしまったから、もうずいぶんと月日が流れたかのように思える。

初めてレナと出会ったときは、お互いが敵同士であった。刹那は女王の住まわる城の侵入者として、レナは歴代最強の女兵士長として、それぞれが全力でぶつかり、戦った。

しかし結果は悲惨たるもので、刹那はものの2、3回ほど打ち合っただけで敗北し、呆気なく王の間までに引き連れられることとなった。少し前までは一般人であったため戦いに関しては素人であり、発現したばかりの能力に頼りきりの戦闘だったこともあり、刹那の敗北はほぼ確定していたことなのではあるが、それを考慮してもレナの強さは凄まじかった。開花した能力など毛ほどにも役に立たず、攻撃も全て綺麗に流され、結局何が起こったかを理解する前に剣を喉元に突きつけられていた。

絶対的な格差。

太刀打ちできない強者。

戦った時に感じ取ったレナに対しての素直な感想がそれだった。

しかしながら、戦うよりも前　すなわち、初めてレナを見た瞬間に抱いた印象はそれと大分異なる。強そうだとか、圧迫感があるだとか、勝機がまるで見えないだとか、そんな戦闘を連想させるようなものでは断じてない。

美しかったのだ。

夢物語の騎士のような出で立ち。

炎を連想させるオレンジ色の髪の毛。

女神を思わせる整った顔立ち。

鋭いながらも真剣な瞳。

その全てが集約されたレナという人物が目の前に存在していることが奇跡であるかのようにだったことを、刹那は昨日のことのように覚えていて。敵前だというのにも関わらず数秒見惚れてしまったということも、その時が初めてであった。それから1度たりともそういったことがないのだから、よほどレナと初対面したときの衝撃が凄まじかったことなのだろう。

「綺麗、だったな」

ため息をつきながら、大きくため息をつく。

思い返してみれば、あの瞬間からすでにレナに心を奪われていたのかもしれない。今の今まで気がついていなかっただけで、本当は最初から好きだったのかもしれない。可憐で、勇ましく、美しい。誰がいつ心を奪われたとしても、ちっともおかしなことではないのだ。

それだけに、だ。

そのレナに、想いを伝える。

告白をする。

その行為が、今になってとんでもないことのように思えてきてしまった。

自分如きがあレナに告白など、そんな大それた真似をしてもいいのか。

そんなことをしても許されるのか。

そんな考えが、次々と頭に浮かんで消えていく。

確かに大それた事ももしれない。

おこがましいかもしれない。

けれど、好きなものは好きなのだ。

いくら身の丈に合わない所行だろうと、諦められない。

はっきりと自身の気持ちに気がついてしまったのなら、なおさらだ。

「よし」

そう口に出して自身を奮い立たせ、刹那は立ち上がった。

覚悟は決まった。あとは行動に移すだけである。

実際に会ったとしても、何と言っていいかわからずにうろたえるかもしれない。

言葉がうまく出て来ず、無為に時間を過ごすだけかもしれない。

それでも構わない。

会話の内容も、告白の手順も、もう考える必要などない。

これだけ考えて思い浮かばないのだ。これ以上頭をひねらせたところで無駄だ。ぶつつけ本番でやるしかない。

不安でないと言えば嘘になるし、もっと悩んでもいいのではないかという考えもないわけではない。

だが、もう刹那は決心したのだ。

レナの想いを伝えるという、一大決心を。

「さて、と」

そうと決まれば、早速レナを探さなければならない。

先ほどまではなるべく顔を合わせようとしなかったというのに、覚悟を決めた今となっては、この世の誰よりも会いたくなるのだから不思議なものだ。

どこに居るかはわからないが、心配は無用だ。見つからなかった次の場所へ、またもや見つからなかったら次の場所へといった風に探せばいいのだ。要は風潰しだ。レナとて神出鬼没というわけではない。ちゃんと順を追って探せば見つかるはずである。

夕食が終わってずいぶんと時間が経つが、まだ眠ってはいないはずだ。そこらを注意深く歩いていればそのうちに見つかるだろうと、刹那は足を踏み出した。

「せ、刹那っ」

その瞬間に、背後から自身を呼ぶ声が聞こえた。

声の主は、振り向かなくともわかる。

今から探しに行こうと決め、想いを伝えようとしていたレナその人である。

第126話 恋慕編19

探す手間が省けた、というのが刹那の率直な感想だった。刹那とて覚悟を決めた身。決意が揺るがないうちに事を済ますことができるのなら、それに越したことはないのだ。

ないのだけれども、やはり心の準備くらいはしないとイケなかったらしい。予想はしていたとは言え、レナとこうやって対面することの緊張感を再確認させられる。想い人であるレナの表情を見た途端、刹那の心拍数は急激に上昇し、平常だった表情もみるみるうちに赤みを帯びていく。更には、何か気の利いた言葉の1つでも言おうとするものの、緊張のあまりに何を喋っているかわからないという、何とも情けない有様である。先ほど決めた覚悟は何だったのやらと思わずにはいられない光景だ。

しかしながら、土壇場に弱いのは刹那だけではないようで、その原因たるレナも同じように頬を赤らめていた。心なしか涙目でもあるし、足も少しだけ震えているようにも見える。刹那にはわかっていないが、心臓の鼓動も激しくなっており、一目で極度の緊張状態だと窺える。

だがその瞳の奥の光だけは、まるで別の雰囲気醸し出していた。しっかりとした意思と決意を秘めており、目的である刹那から一瞬たりとも目を離したりはしない。食事の時間はあれほど顔を逸らしていたというのに、今は何かの決まりごとかのようにじっと刹那を見つめているのだから驚きだ。

ともあれ、だ。

役者は揃った。

舞台はお世辞にも素晴らしいとは言えぬただの庭ではあるが、程よく吹いている夜風と、辺りを明るく照らしてくれている満月が、何とも上手い具合にいい雰囲気を作り上げていた。若人の告白の場には十分過ぎる状況だ。あとはタイミングと度胸、そして覚悟である。

刹那はともかくとして、レナは覚悟を決めてこの場に立っているわけであるが、何せタイミングがつかめない。恋愛事に疎く、そういった経験が皆無であるレナも、いきなり想いを告げるのはあまりよろしくない事くらいは予想がつくし、そこまでの度胸もない。当たり前障りのない会話から初めて、徐々に徐々に核心に近づいていったほうが取っ付きやすいものだとは判断し、何か刹那に話を振ろうとするのだが、いかんせん何と刹那に話しかけたらいいかわからない。

月が綺麗だね。

風が気持ちいいね。

2人きりだね。

会話のきっかけとなる物言いはたくさんあるはずなのだけれど、どうしても声が出てくれない。体全体が石のようになったとレナは錯覚した。言葉が出ないどころか、息をするのすらもやっとのよう。で、レナの肩はいつもより激しく上下している。こまでの緊張も、生まれて初めての経験であった。

刹那もレナも同じように固まった状態であるため、その場は硬直状態に陥ってしまった。お互いに話すこともせず、歩み寄ることもしない。ただいたずらに時間が過ぎて行く中、2人とも身動き一つしない。それなのに、2人とも視線を合わせたまま逸らそうとしないというのは、なかなか面白い光景であった。

「このままじゃ、まずいよ、な」

刹那がそれに気がついたのも、硬直してからほんの少しの事だった。心の声の通り、このままでいいわけがないのだ。想いを伝えると覚悟したはずなのに、いざ肝心要のレナと会ってみればこの様で、何の口火も切らずにただじつと見つめているだけ。何をやっているのだと、軽い自己嫌悪に駆られる。動かなければならない。

言葉を発しなればならない。

想いを伝えなければならぬ。

わかっているが、できない。当たり前だ。できたら今すぐにでもやっている。それなのに刹那がやるうとしないのは、自分の意思で体が動いてくれないからだ。動こうにも言葉を発しようにも、想いを伝えようにも、自身の思い通りに体が動かなければどうしようもない。唯一思い通りになるのは思考だけという、今この状況ではほとんど役に立たないものだ。エスパーでもなし、思考だけで想いを伝えることなど刹那にはできっこない。

ならば、諦めるか。

何もせず、このまま無為に時間を過ごし、この機会をつやむやに
てしまうのか。

そう問われれば、迷うことなく刹那は違うと叫ぶだろう。レナを目
の前にするという機会を、ここでみすみす捨ててどうするとい
うのか。これを逃せば、おそらくもう2度とレナに想いを伝える機
会は訪れないであろうことを、刹那は薄々だが理解している。今こそ
絶対の好機なのである。それを棒に振り、再び機を窺うなど愚か
しか言えない。

やるなら今。

告白するなら今。

想いを告げるなら今。

ひ言え……っ！ 言っちまえ……っ！

自身にそう言い聞かせ、刹那は言葉を発しようとする。

たったの一言でいい。

好きという気持ちだけ伝えられればいいのだ。

それだけでいい。

それだけでいいのに。

たった一言の言葉を発すればいいだけなのに。

やはり刹那は言えなかった。

無意識のうちであるだろうが、言葉が喉の奥から出てこない。何かがつつかえて邪魔をしているかのように、声と呼べるものすら出てこない。それと同時に、頬がますます赤みを帯びてくる。恥ずかしさと悔しさの合わせ混じった高揚の証だ。

これはもう誰が見ても明らかである。刹那の体が、レナにアプローチをかけることを拒否しているのだ。それに抗おうとしても、できない。まるで自分の体が自分のものでないかのように、動かない。固まった体はさらに硬くなり、少しながらも働いていた思考もそれを拒否していく。

どれだけ必死になっても、どれだけ抗っても、目の前の女には絶対に届かない。

それが何とも情けなく、齒痒く、悔しかった。

「刹那……」

激しく後悔し、自身の本番弱さに落胆した刹那を見たレナは、心の中でその名を呟いた。

刹那に声をかけた時からずっと固まり、何もできずにいたレナ。その胸の内は刹那と同じく、いかにして気持ちを伝えればいいかを模索している状態だった。言葉にしようと思っても言葉にならず、行動で示そうと思っても体が動かず、頼みの綱の思考すらも徐々に麻痺してくる。このまま想いを伝えることはできないのはごめんだと思っていたのも、まるきり刹那と同じだった。

それが先ほどまでのレナの状態であったのであるが、今は違う。まるつきり正反対になったと言ってもいい。真剣さを帯びていた瞳はいつしか情愛に満ちた優しいものへと変わっていき、極度の緊張のせいで強張っていた全身もいつしか弛緩し始める。

レナは、刹那が今何を想って何をしようとしているのかに気がついたのだ。真っ赤にしながらも決して目を逸らさず、向かってくる意思はあるのに踏み出せないというその様を見ればわかる。先ほどまで自分が同じような状態だったから尚更にだ。

同じ気持ちだったのだ。

刹那も、自身のことを好いてくれていた。

想いを告げようとしていた。

それがわかった途端に、レナは刹那のことが愛おしくてたまらなくなる。目の前の1人の男があまりにも可愛くて、好きで、どうしようもなくなる。やっぱり自分は刹那のことが好きなんだと、改めてレナは再確認させられた。

もう迷うことなんてない。

戸惑いなんていらぬ。

そっと、レナは刹那に近づく。足の震えはもう止まっている。その歩みを妨げる物は何も無い。

近づいてくるレナを見て、刹那の緊張は最高潮に達し、顔は倒れてしまうのではないのだろうかと思うほどに赤く染まっている。その慌てぶりすらも、レナは愛おしかった。

間近。

本当に息がかかるような距離まで、レナは刹那に詰め寄った。

あとは、言葉にすればいいだけ。

「刹那」

「え、あ……な、なんだ？」

「私ね、刹那に伝えたいことがあるの」

第127話 恋慕編20

「私ね、刹那に伝えたいことがあるの」

その言葉が何を意味しているのか。

これから一体何を自身に伝えるのか。

いくら刹那が鈍感でも、このシュチュエーションの中で、レナのこの表情を見てはさすがに気がつく。気のせいかもしれないが、刹那にはどこか確信めいたものがあつた。

しかし、レナが口にしようとしていることは刹那も言おうとしていたことだ。レナから伝えられるよりも先に自分の口から伝えたいという妙な意地が今までの緊張や戸惑いを消し飛ばし、咄嗟に刹那の口を開かせる。

「そ、それは俺もで、だから今言おうとしたんだけど……。だ、だからその、えっとさ……」

すっかり落ち着きを取り戻したレナとは対照的に、慌てふためいて若干共同不審気味になっている刹那は核心であるレナへの想いを告げようとしたが、生憎そう上手くはいかない。単刀直入に伝えようとしているのに、かえって遠回りな言い方しかできない。今言わなければ先に言われてしまうのに、とっかかりがどうしても掴めない。

「うん、わかってる。わかってるから、私から先に言わせて。おねがい」

落ち着かせるようにレナは刹那の手を取り、優しく握りしめる。手と手が触れ合った瞬間、刹那の内で渦巻いていた不安や焦りが嘘のように吹き飛んでしまい、緊張で強張った体と激しく高鳴っていた心臓が同時に落ち着きを取り戻す。それはまるで、時間すらも氷漬けにされた世界が、太陽の陽ざしを受けて徐々に氷解していくかのようにだった。あれほどあたふためていたというのに、たったこれだけの行為で落ち着きを取り戻させるということもまたレナの魅力である。

レナのおかげで幾分か冷静になった刹那は、先ほどから出かかっていた言葉を呑みこんだ。よくよく考えてみれば、刹那が必死なようにレナもまた必死なのだ。切り出す際も、多少ながら勇気を振り絞ったことだろう。その決意を、自身の言葉で遮ってしまったてよいものなのか。

当然ながら答えはN oである。思考が上手く働かなかった先ほど違い、今は自分のことだけではなくレナのこともちゃんと考えられる。レナの決心を無下にすることなど、刹那にはできなかった。

「……わかった」

それだけ言って刹那は口を閉じる。

こちらを見て微笑んでいるレナをただじつと見て、ただ言葉を待った。

ただ待つというだけなのに、その1秒1秒が永劫とも思えるように長い。

それを紛らわすために、刹那はレナの手を握り返す。

もう大丈夫と。

いつでもいいと。

そんな気持ちを込め、レナの白く細い指を自身のそれに絡める。

その行為で刹那の気持ちを悟ったのか、レナは刹那に笑いかけた。

「……………ありがとう」

それだけ言って一呼吸置き、あまり間を空けずレナは続けた。

「私の周りの人ってね、みんな男の人ばかりだったの。国を守るお仕事をしてるから、それは当たり前なんだけど、特に周りの人たちを意識したことはなかったの。普通の友達……とはちょっと違うかな。普通の仲間っていうだけだった。小さい頃からずっとそこに出入りしてたから、男の人たちの中に私みたいなのが混じっているのがおかしいだなんて、その時はちっとも思わなかった」

しみじみと昔を思い出す様に目を細め、レナは語った。

兵というものは主である王を守るべき存在である。それはひ弱で非力な者に務まらないため、女性は基本的にその役職に就くことはない。もちろん例外もあるが、それを考慮したとしても男女の比率が偏っているという結果は誰しもが知っている事実であろう。だからこそ、レナが存在がいかに珍しく、イレギュラーであるかを想像することなど容易い。

「初めておかしいのかなって思ったのがね、ちょうど兵士長の仕事に就き始めたころなの。書類をまとめるのにも、部下の訓練の内容を考えるのも慣れてきた頃にね、福兵士長に言われたの。あなたは美しい、ぜひ私と結婚してくださいって。初めてのことだから本当にびっくりしてね、ごめんなさいって言って逃げちゃったの。部屋に戻って、一人でボーっと考えてた。ああそっか、私達は仲間の前に男と女なんだなって。でも周りをそっぴい目で見られなかった。恋なんて、絵本の世界だけのものだってずっと思ってた」

年代の近い女性の友など兵の中にはおらず、幼き頃からずっとその環境で育ってきたレナ。その頃から共に励んできた他の兵士など、とてもではないが恋愛の対象とは見れなかったのだろう。

それは刹那と同じ境遇であった。幼い頃からの付き合いがあったがため、特に恋慕の感情を抱くことなく、結果一度も恋をしたことがないという状況に陥ってしまった所など瓜二つだ。だからこそだ。

今まで一度たりとも男性を『男』として見なかったレナが、刹那という『男』を意識したことには、それはよほどのことであり、稀なことであった。

文字通り生まれて初めて。

やがては訪れるであろう感情であるが、その初めての対象が刹那だという事実。

たくさんの男性の中で、偶然とは思えない出会いによって対面した刹那だけを好きになったということは、もはや運命としか言いようがなかった。

「でもね、今はそうじゃないって言えるの。ちゃんと私の中にあるから、だからそれはおとぎ話だけのものじゃないってわかる。だから言える。私は今、恋をしている。他の誰でもない、あなたに恋をしている」

目を離すこともせず、ただ刹那の瞳を見つめ、レナは迷うことなく続けた。

「私は刹那が好きです。あなたのことが好きです」

今、はつきりと告げられた言葉。

それは他に聞き間違えようのない、れっきとした告白の言葉だった。聞き間違えなどでは決してない。

嘘だということも断じてない。

レナの想いを、刹那はしっかりと受け止めた。

だからこそ、このまま黙っているわけにはいかない。

レナがそうしたように、自分も想いを伝えたい。

迷いも戸惑いも、刹那を遮るものはもう何もない。

自然と口が開き、言葉が紡ぎだされる。

「俺も、レナと同じだった。恋なんて、他人事みたいなものだった。俺には縁なんてないもんだって、勝手に決めつけてた。でも、恋をした。生まれて初めて恋をした」

「……………うん」

「さっきから言おう言おうって思ってたんだ。先に言われたけど、俺にも言わせてくれないか？」

「……うん、言ってほしい。聞きたいの」

刹那の気持ちや想い。

想い人のそれらを、聞きたくないはずがない。

自身に関することならば、なおさら。

「俺も、レナのことが好きだ。誰よりも、何よりも、レナが好きだ」

想いを告げ、刹那の胸を満たした感情は安堵であった。散々迷い、戸惑ったが、それでも好きだという気持ちをちゃんと言葉にすることができた。達成感やら、清々しさはほとんどなく、奥から湧いてくる妙な嬉しさを噛みしめながら、刹那はほっとしていた。

「……嬉しい」

がばつと、レナは刹那に抱きついた。

何の前触れのない突然のことで、驚きもしはしたが、意外なことに刹那の平常は保ったままだった。落ち着いたままにレナの体を2本

の腕で抱き締め、身を寄せ合う。

オレンジ色の髪の毛からは花のようないい香りがし、その体は思っていたよりもずっと細く柔らかで、こんな体でずっと前線に立って戦ってきたのかと驚くほどだった。

これが、レナだ。

今刹那が触れ、抱き締めているのがレナだ。

温かく、柔らかく、いい香りがし、そして落ち着く。

ずっとこのままでいたいと、素直に刹那はそう感じた。

「……………刹那、とっても温かいよ」

「レナもだよ。すごくあったかい」

「すごく安心する。こんなによかったなら、もっと早く言えばよかった」

そう言って、レナは刹那の胸に顔をうずめる。

刹那はもっとレナを感じようと、レナの背中に回している自身の腕に力を込める。

こんなに小さな存在なのに、愛おしくて愛おしくて仕方がなかった。
可能であれば、ずっとこのままでいたかった。

このまま、ずっとレナの温かさを感じていたかった。

「俺もそう思う。温かすぎて、なんか泣きそうだよ」

「ふふ。……ねえ、刹那」

「ん？」

「目を瞑って。お願い」

特にその言葉の意味を考えず、刹那は言われた通りに目を閉じる。

一瞬にして闇に閉ざされる視界。

先ほどまで見えていたはずのレナの姿を、見ることはかなわない。

けれども、レナの実在はちゃんと感じられる。

消えることなく、刹那の腕から確かな温もりが伝わってくる。

それは、目を開けていた時よりもずっと強く、はっきりとしたもの

だった。

そんな暖かな暗闇の中で、

「……ん」

レナの微かな吐息を感じた後に、唇に触れる柔らかな感触。

それがレナの唇であろうことを連想するには、それほど時間を要さなかった。

抱き締め合いながら、お互いの唇を求める。

より一層の温かさと幸福感が胸に溢れ、自分のものではない温もりが心地よく感じられる。

ドラマや小説の描写で、幾度となく目にしてきた口づけ。

それがこんなにも温かいものだ、刹那は初めて知った。

「……どうだった？」

不意に唇を離し、レナがそう刹那に尋ねる。

「なんていうか……、すごかった」

「なにそれ、ふふ」

にっこりと笑い、レナは再び刹那の唇を求めた。

想いを告げあい、そして相思相愛と知った2人。

この日より、2人はめでたく『恋人同士』となったのだった。

第127話 恋慕編20（後書き）

さて、今回の物語はいかがだったでしょうか？

秘められた想いに気がつき、ついには恋人同士となった2人。

初恋は実らないとはよく言ったものですが、こういった例も稀にあるかと存じ上げます。

しかし、所詮は異世界の人間同士。

いつまでその絆は続くことやら。

さて、次回の物語は『元凶編』。

事件の全てをお楽しみください

第128話 元凶編1

「ど、どうしたのだっ！！ 何が起きておるのだっ！？」

「ほ、報告しますっ！ 城内に何者かが侵入っ！ 人数は1人っ！
多くの兵士が虐殺されておりますっ！」

「な、何だと！？ そのようなことが、あるわけがなかるっっ！」

叫んだのは、ある異世界の頂点に君臨する皇帝である。

幼い頃から戦場に立ち、そこで戦術と戦闘方法を学び独立。巧みで、相手の隙を突くような戦術を使い、他の国を次々と撃破。一躍世界のトップとなった、まさにカリスマ的存在。

この皇帝の椅子を欲しがり、この城に攻め入る人間も少なくはない。皇帝を打ち倒し、そして皇帝になったものは世界を思うがままに操ることができると言っても過言ではないからだ。

しかし、そういった考えを持って意気揚々と攻め込んできた愚かな者たちは、城内へ入ることさえも許されずに殺されていく。実力のある大軍隊を編成して挑んだとしても、警護にあたっているほんの数組の小隊によって機能を停止され、結果全滅してしまう。

一体なぜか。

それは、この城の兵士達の指導に当たっている人物が、とんでもない達人だからである。

そのうちの1人がこの皇帝、もう1人が剣士だ。

先ほども言ったが、皇帝は幼い頃から戦場に立ち、戦術と戦闘方法を学んでいる。幼いころから命のやり取りをし、死なないために腕を磨き続け、常に勝ちを得るよう努力し、そしてここまで上り詰めた。その強さはいまや、そこの兵士が束になっても相手になどならない程のものとなっていた。

その経験と腕前を、兵士たちの指導に当たることでも存分に発揮しているのが現状だ。通常通り兵士長にあたる人物たちが指導していた頃と比べれば、それこそ天と地の差がある。

ろくに剣も構えたこともなかった兵士たちも、皇帝の指導によって見る見るうちに地力が底上げされていき、ついには世界最強とまで呼ばれるほどの軍へと成長を遂げた。

誰にも頼ることなどせず、死ぬ物狂いで学んだ学を惜しむことなく使い、そしてその手で軍を作り上げた皇帝の手腕は実に恐るべきものであった。

凄まじいほどの才能を持つ皇帝と対をなす存在が、平民たちの間から『英雄』と称えられている剣士だった。

何でも伝説にもなっているドラゴンを倒したとか、世界一を決める武道会で優勝したとか、誰にも抜くことのできない剣をいとも容易

く抜いたとか、そんな胡散臭い噂が後を絶たない。

噂が真実かどうかはわからないが、少なくとも兵士達の指導は抜群にうまかった。個々の能力を高め、欠点を速やかに直すその腕前も、皇帝に負けず劣らず見事なものだった。

名もない兵士はたちまち名を上げ、底辺組と馬鹿にされている連中をあっという間に昇格させ、臆病者と蔑まれる男を獰猛な獣のような性格へと変貌を遂げさせるという、魔法のようなその指導力は、皇帝と並ぶ素晴らしき才能である。

この2人が世界トップの椅子に座っている以上、革命は不可能であった。先ほども言ったように、革命を試みる者がこの城に乗り込んでくることだって不可能。訓練に訓練を積み重ねた兵士たちが、その侵入を一切許さないのだ。

運よく侵入できたとしても、肝心な皇帝の前まではどうしても到達することなどできやしない。完全無欠という言葉が何よりもふさわしい、軍と指導者であった。

ここで最初に戻る。

城に乗り込んでくることが不可能なはずなのに、なぜ城内に侵入しているのか。

それに加えて、毎日厳しい訓練を受けている兵士達がなぜ次々と殺されているのか。

今まで一度も起こったことのない非常事態に、皇帝は混乱する。城内の兵士がこぞって牙を剥いたのならばまだわかるが、今までどん

な強大な軍隊も退けてきた城の軍を、たった1人の人間に崩壊されるなど思いもよらなかった。

「落ち着けよ。この俺がいるんだぜ？」

声に驚き、皇帝ははっと顔を上げる。

そこにはすでに戦闘準備を済ませた『英雄』が立っていた。

ドラゴンを倒したときに剥いだ皮や鱗を使った鎧を纏い、手には武道会で優勝したときの賞品として入手した『火竜剣』が握られている。頭にはミスリルで出来た兜をかぶっているし、長年愛用してきた手袋もはめている。

そう、この国の真の脅威は1人1人が強い軍隊ではない。世界を手にした皇帝と、この『英雄』こそが、この国の本当の脅威なのだ。兵がいくら倒されようと、自分達がいる限り勝利は動かない。動くわけがないのだ。

「しかしまあ、ここまで攻め込んでくるとはな。久しぶりに腕が鳴るぜ」

「頼むぞ、アレス。我輩にはもうお主しか頼れる者がいないのだ」

剣士の名を呼び、偽りのない心からの言葉をアレスにかける。

「任せな。っと、来やがったか」

アレスがそう言ったと同時に轟音が辺りに鳴り響き、鼓膜を振動させた。

轟音の方向に目をやると、分厚いはず城壁に巨大な穴が開いており、そこから1人の黒マントを羽織った男が見えた。手には兵士たちのものを奪ったのであろうサーベルが握られており、全身は返り血でまみれていた。

見たものを震え上がらせるほどの恐ろしいオーラを纏っているその男は、微笑を浮かべていた。

その微笑は悪意のあるものではない。子供が浮かべるような、無邪気で、純粹な微笑だった。

「やっと着いたか。ゲートの位置がここからずいぶん離れてたから、ここまで来るのに結構時間がかかったよ」

意味のわからないことを呟き、男はおもむろに玉座の自分のところまで歩いてくる。

その1歩1歩が、まるで絞首刑の際に上る階段を上っているような錯覚を生みだす。

「貴様は……誰だ？」

体の奥からくる震えに耐え、精一杯の勇気を振り絞った皇帝が、近づいてくる男に尋ねる。

「ああ、僕？　僕は神の使いさ。名前は、リバー。この世界を狂わせに来た」

「世界を……狂わせる……？」

「うん。君たちを殺したあとに、ちょっと翼を張らせてもらうだけだよ。もっとも、小鳥たちがこの世界にくることはないかもしれないけどね」

皇帝の問いに歩を休めることなく答え、リバーは歩く。

自分が殺すべき相手のほうへと、歩く。

あとほんの数歩のところまで、アレスはリバーの前に立ちふさがった。

「待ちな。皇帝サマと戦う前に、俺の相手をしてもらっせ」

自信ありげな不敵な笑みを浮かべながら、アレスがリバーに言い放つ。

「いいよ。……本当は、もう斬りすぎて飽きてきたんだけどね」

うんざりしたかのように言うと、リバーはサーベルを持っているほうの手をだらんとぶら下げ、アレスのほうを見た。剣の構えはそれでいらしかった。いつでもかかってきていいよと、目が言っている。

それを見たアレスも、手にしている火竜剣の柄を両手で握り締め、リバーの出方を待つ。

お互いが手を出さないために場は硬直し、少しの静寂が訪れた。

あまりに張り詰めた空気に、余裕のある態度を取っていたアレスの額からは汗が流れ出、リバーの醸し出している圧倒的な覇気に怖気づかないようにと、必死になって自身を奮起させていた。そうでもしなければ、恐怖に負けて目の前の敵に背を見せることになってしまうからだ。

それに対してリバーはというと、実に退屈そうな表情をしながらただだらしなくその場に立ち尽くしていた。向かってくる気もなければ、逃げる気配もない。本当にアレスの出方を窺っているだけだった。

「……早くかかってこいよ」

重苦しい雰囲気になんて耐え切れなくなったアレスが、リバーにそう言った。

「あれ？ 挑んできたのは君のほうじゃなかったっけ？」

とぼけたように言い放つリバーに腹が立ったのか、アレスは自身にまわりついてくる恐怖心を振り払い、叫んだ。

「……そうだな。そうだったなあ！！！」

アレスは勢い良く駆け出し、リバーとの距離を一気に詰めた。

距離を詰められているというのに、リバーは身動き一つしなかった。ただ、笑っているだけだった。何が面白いのかはさっぱりわからない。自分に迫ってくるアレスを見て、ただ笑っている。

「せいあああ！！！」

掛け声と共に、アレスはリバーの手前で剣を振る。距離が空いているため、当然の如く振るわれた剣はリバーに命中することなく、虚空を切る。

はずだった。

「ん？」

不意に、空を切ったアレスの火竜剣の刀身が、『燃えた』。

あっという間にその炎は巨大化していき、アレスが火竜剣を振り切ったと同時にリバー目掛けて襲いかかった。

これぞ、この剣が『火竜剣』と呼ばれる由縁の能力である。刀身が炎を吐き出している竜のように見えるという、伝説の剣。アレスがその特性を利用しないわけがなかった。

だが、リバーは迫ってくる炎を間近に見ても動じず、落ち着いて自らの手の平を炎に向けた。

「よいしょ」

声と共に、リバーの手の平から強風が放たれた。その強風は、火竜剣の炎をいとも容易く吹き飛ばし、炎を放ったアレスまでもを吹き飛ばした。

火竜剣から放たれた炎は決して小さくはない。その全てを吹き飛ばす風を生み出すには、相当の魔力を込めなければならないはず。それなのに、リバーは特に慌てることもなく、ほんの少しの時間のうちに、大量の魔力を突風へと変換させた。

この意味することは2つ。リバーの持つ魔力の総量が凄まじいと

いうことと、魔力の扱いが天才的であるということである。

「っちい！」

うまく受身を取り、ダメージを軽減したアレスは、にやっと笑う。

それは、今までにない強敵に出会えた嬉しさから出た笑みだった。

自身より強い者とはもう何度も戦ってきたが、目の前の男は違う。そいつらを遥かに凌駕する凶悪なまでの強さを秘めている。

人間ではないほどの強さを持っている男。アレスは、その敵と戦えることが心底嬉しかった。

第129話 元凶編2

「もう君の攻撃は終わり？」

「いや、まだだ。まだとっておきが残ってる」

「とっておき？」

「ああ、とっておきだ。……いくぜ」

アレスは火竜剣を握りなおすと、そのままリバーに突進していった。だが、リバーは相変わらず笑っているだけでその場から動こうとはしなかった。どうやら、アレスの『とっておき』一体がどういったものなのか、非常に興味があるようだった。

（興味があんなら、拜ませてやるぜっ！）

射程圏にリバーが入った瞬間、アレスは火竜剣に炎を纏わせ、目にも留まらぬ速さでリバーに攻撃を仕掛けた。一太刀を見舞うたびに刀身を包み込んでいる炎が燃え上がり、リバーのマントを焦がす。

「ん……」

リバーは片手のサーベルで、アレスの凄まじい連撃を受け流していた。顔からは笑みが消え、どこか困ったような顔をしながらサーベルを振るう。

自身のペースで攻撃を続けているアレスは、心の中で密かに勝利を確信していた。今までと同じように、この技だけは破られることはない。その証拠に、リバーは防戦一方で、ちっとも反撃してこない。

このままいけば、相手の攻撃を封じ込めたまま倒すことができる。人間ではないほどの強さと言っても、所詮この程度だったかと、少々拍子抜けしてしまうくらいだった。

「よいしょっと」

リバーはアレスの激しい剣捌きをいったん止めさせるため、アレスの剣を横に弾くと、そのまま床を蹴って距離を取った。アレスも深追いしようとはせず、追撃はしなかった。自分が優位に立っていると判断したためである。

リバーは一息ついてサーベルを構えた。どうやら何をするか決まっていたらしかった。

「よし、もういいよ。かかっておいで」

「そんなら……遠慮はしねえぞ!!!!」

アレスはもう一度リバーとの距離を詰めると、先ほどと同じように火竜剣の刀身に炎を纏わせ、目に留まらぬ速さでもう一度リバーに攻撃を仕掛けた。

今度はもう止めない。標的であるリバーが細切れになるまで、ただ斬り続ける。

「ふふ……」

リバーは鼻で笑うと、アレスの攻撃をサーベルで受け流し始めた。先ほどと同じだ。反撃はしてこない。できないのだと、アレスはそう思っていた。

しかし、何か違和感があった。それが何なのかわからないが、何かがおかしい。こちら側が優位に立っているはずなのに、アレスは正体不明の違和感を感じずにはいらなかった。

何か、とてつもなく嫌な予感がアレスの頭をよぎる。このままではいけないと、アレスの直感が囁いていた。

冷静に判断し、アレスは攻撃の速度を一気に最大まで上げるという選択をした。このまま戦っていたら、ひよつとしたらとんでもないどんでん返しが待っているかもしれない。それならば、『何か』が起こってしまう前に、一気に片を付けるべきである。

アレスの振るう火竜剣の速さが著しく上がり、もはやその速さは目

に映らない速さになっていた。このレベルまで来れば、剣を受けている側はもうどこを防御すればいいのかわからなくなり、気がつけばあの世に行っているはず。今までの相手はそうだった。これで倒れない相手などいなかった。

それなのに。

「つく!!」

リバーは。アレスの攻撃速度に追いついていた。表情には余裕さえもある。アレスが死に物狂いの全力で攻撃しているというのに、リバーはそれをあしらうかのように嘲笑いながら、アレスの攻撃を1つ1つ丁寧に受け流していた。

ガキイン!!

手の火竜剣がサーベルに弾き飛ばされた。今まで押していたはずなのに、力負けしたのだ。

おかしいと、アレスは思った。リバーは今まで自分の剣を『防いでいた』のではなく、『捌いていた』のだ。

剣を捌くときは、真っ向から剣を受け止めず、力が入る方向へ受け流させるように捌く。だから、『力負け』をして剣が弾き飛ばされた、なんてことあるわけないのだ。

(これじゃ……、俺の技を完璧に見切られたみたいじゃないかよ……)

一撃一撃のタイミングを完璧に覚えられ、そしてそれに合わせて弾く。言葉にすれば簡単な所行でこそあるが、その行為は困難を極める。『目に映らない速度』だということにも関わらず、それに合わせること自体が、異常なのだ

冗談ではなかった。今まで一度たりとも破られたことのない高速剣が、こつも呆気なく打ち破られることなど、アレスは思ってもみなかった。自身よりも強い相手が、この世に存在するというのも、もちろん予想だにしていなかった。

「ごめんね。ちょっと目障りな攻撃だったから、中断してもらったよ」

絶望的な言葉だった。

わかっていたが、今までのリバーの行動はまぐれなどではない。ましてや種も仕掛けも存在しない。純粹な、『才能』の差である。

火竜剣はアレスの後方、10メートルほど先に落ちている。敵に背中を見せてまで取りに行く必要はない。もはや、目の前に存在している悪魔に勝つ術はない。この戦いに勝利することなど、断じてあり得ない。

「これで終わり？」

「……なに？」

「もう技はないの？ まさかこれが最高つてわけじゃないよね？」

「……………」

開いた口がふさがらなかった。

まるで、今まで本気ではなかったかのような。

子供の遊戯に付き合っていた大人のような。

それを肯定する言葉を、リバーは放った。

「……………さっきのが精一杯だったみたいだね。がっかりだよ」

何も言い返そうとしないアレスにそれだけ言うと、リバーはサーベルを構えた。

アレスには、この構えに見覚えがあった。いや、見覚えがあるどころの話じゃない。この構えはまさしく、さっき放ったアレスの技の構えである。

「確か、こうだったよね？」

そう言うと、リバーは剣を振るった。さっきアレスが放ったものと同じ、それも寸分も変わらない本当に同じ技を、出した。

いや、違う。全く同じではない。技のキレが、速さが、威力が、アレスのものと全然比べ物にならない。自身に死を与えるはずのその攻撃に、アレスは思わず見とれてしまった。

ありえないありえないと、心の中で何度も呟いているアレスを見透かしたかのように、リバーが口を開く。

「今君の目の前にあるのが真実さ。『ありえる』んだよ。たった一回見ただけで技を模倣することのできる天才は、『ここに存在する』

」

それだけ言って、リバーは防御の術がないアレスに、容赦なく剣を振り下ろした。何回も、何回も、何回も、何回も、何回も、斬って、斬って、斬って、斬って、斬って、細切れになるまで斬り続けた。

情けなど欠片もない、非情で、残酷な殺し方であった。

リバーが剣を振るったそこには、もう人間の原型を留めていない肉の塊しかなかった。血だまりが床に広がり、リバーの羽織っているマントに新たな返り血がついた。

リバーは目の前の『アレスだったもの』から視線を逸らし、今まで
の惨劇を見ているだけだった皇帝へと、その不気味な笑顔を向けた。

「さて、次はあなたの番だね」

「っひ……」

皇帝の顔が、恐怖で歪んだ。逃げ出そうにも、腰が抜けて立てない。戦おうなんて、考えられなかった。目の前のこの男は人間じゃない。悪魔だ。ただの人間が悪魔に勝てるわけがない。無残に殺されて、そこにある肉塊と同じ運命を辿るに違いない。

皇帝は、リバーのような人物を今まで見たことがなかった。笑いながら人を殺すような無邪気で、人間が肉塊になるまで剣を振るい、それなのに何の罪悪感も持ち合わせていない。

本当に、恐ろしかった。今までのどんな命のやり取りも、リバーに向けられた視線と笑みに比べれば大したことなどなかったのだと思
い知らされる。

「抵抗しないの？ まあ、それはそれで面倒じゃないからいいんだけど……ん？」

リン、リン、リン……………

リバーの声と同時に、『音』が聞こえた。

音は、優しく、不思議な鈴の音だった。しかしその音は、そこら辺にある安っぽい鈴が奏でる音色ではなく、神秘的で、まるでこの世の音じゃないような、そんな感じの音色だった。

その音を聞くと、リバーはため息をついて、腰を抜かしている皇帝に言った。

「運がよかったね。とりあえず、今日はこれくらいで引かせてもらうよ。」

それだけ言ってリバーは皇帝に背を向け、先ほど弾いたアレスの『火竜剣』を回収した。

「あ、そうそう。これ、面白そうだから貰っていくよ。あんな腕じゃ、この剣も可哀そうだしさ。」

抜き身のままの火竜剣を腰に差し、リバーは手のひらに魔力を集中させ、虚空へ向かって魔力を放出させた。

遠雷の轟くような轟音が鳴り響いたかと思うと、突如空間に小さな穴が開き、それが徐々に巨大化していく。『ゲート』の出現である。手頃な大きさで巨大化が止んだその穴に、リバーは何の躊躇もなく踏み込む。

「それと、1つお願いがあるんだ。これからここに来る人に、『君の世界で待ってるよ』って伝えておいて欲しい。それじゃ、よろしく」

それだけ言い残し、空間に開いた大穴『ゲート』は徐々に縮まっていき、ものの数秒で何事もなかったのように閉じてしまった。

第130話 元凶編3

リン、リン、リン……………

リバーが立ち去った後も、鈴の音色は止むことはない。儂げで、今にも消えそうに鳴り響いている鈴の音はだんだん大きくなっていて、鈴を鳴らしている何者かが近づいてきているのだということがわかる。

ひよっとしたら、先ほどのリバーのような無慈悲で残酷な悪魔がやってくるのかもしれないという考えが、皇帝の頭によぎった。せつかく命が助かったというのに、またあんな化け物に遭遇するのはごめんだった。次こそ、確実に殺されてしまう。

ガクガクと震えている足を無理矢理立たせ、鈴の音色が一体どこから鳴っているのか全神経集中させて聞き取るうとする。しかしその鈴の音は、右からも、左からも、前からも、後ろからも、上からも下からも聞こえてくる。どこから鳴っているのか、皇帝には見当もつかなかった。

「……………逃げた、か」

不意に、後ろから声がした。

慌てて皇帝が振り返ってみると、先ほどのリバーと同じような漆黒のマントを羽織っている人物がそこに存在していた。

人物、と言ったのは、マントに付属しているフードのせいで顔が隠れているため、男女の区別がつかないからだ。声も、男のようにも聞こえるし女のようにも聞こえる中性的な声だったので判断材料にはならなかった。

片手には自らの身長をも越えるであろう青白い大太刀が握られている。鞘にしまわれていたからよかったものの、抜き身であったのなら皇帝はすぐに尻尾を巻いて逃げだした。情けないようだが

「!？ だ、誰だ!!」

動揺を隠し切れていない声で、皇帝は目の前の人間を怒鳴った。

「……貴様には関係ない。それより、先ほど私と同じような格好をした男がここへ来なかったか？」

先ほどの男……おそらくリバーのことだろうとは容易に予測できた。

正直にそのことを言おうかどうか一瞬迷ったが、ここで嘘を言っても仕方がない。せっかくあの悪魔に奪われるはずだった命を、嘘をつくことでいきなり現れたこいつに奪われてしまいかもしれない。

皇帝の取るべき行動はただ1つ。正直にすべてを話すことだけだった。

「き、来た……。悪魔の、よくなやつだった。……いや、悪魔だった。あやつは、悪魔だった……」

「……どこへ逃げたかは知らないか？」

「それは知らぬ……。突然、空間に穴を開けて、いなくなった……」

「そうか……」

「それと、おそらく貴様に伝言を残していきおった。『あの世界で待っている』だそうだ」

「ふむ……」

皇帝の話聞いた「そいつ」はしばらく考え込んだ末、ぽつりと独り言を呟いた。

「……なるほど、決着をつけようというわけか」

言い終わったあと、目の前にいたはずの「そいつ」が消えた。去ったのではなく、消えたのだ。一瞬のうちに姿が消え、どこに行ったのかわからなくなってしまった。

「!? え!? あ、え?!」

辺りを見回しても「そいつ」は見当たらない。目の前にいた自分でもよくわからなかったが、とにかくこの上ないほどの危機から脱することに成功したということだけは理解できた。皇帝は、自分の命が助かったのだと心から安堵した。

「たす、かった……」

言葉と同時に皇帝はその場に座り込んでしまい、脱力する。

何度も命のやり取りをし、時には死ぬことを覚悟することもあったが、ここまでの絶望を味わったことは皆無であった。戦場のど真ん中に投げ出されたほうが、まだ助かる確率が高いといった状況から抜け出すことができた人間ならば、誰しもが今の皇帝のように脱力してしまうことだろう。それほど、あの2人から発せられていた禍々しい気配は凄まじく、恐ろしいものだった。

命こそ助かった皇帝であったが、やってきたあの2人は結局何者だったのか、皇帝は最後まで知ることができなかった。

+++++

「んむ……」

不機嫌そうに口を尖らせ、異次元図書館の管理人であるオリアスはため息をついて手にしている本を閉じ、元の通りに本棚へと戻す。もう何時間も休憩なしでこの作業に掛かりつきりだ。疲れがたまるのにも合点がいく。

今オリアスが何をしているのかと言うと、『世界を滅ぼそうと目論む黒幕の世界を探し当てる』真つ最中なのである。この異次元図書館には、存在する異世界の数だけ本が存在し、そのいずれにも繋がっているのに加え、その世界の内容と概要が文字として中身に記載されている。当然、奴等のいる世界も例外ではない。仮にオリアスの目から逃れようと、新たな世界を作ったところで無駄だ。新たな本として、世界として、この図書館の本棚に自動的に加わるだけだ。ここは『そういう場所』なのだから。

ここに存在する本の中に、絶対探すべき1冊があるということは確かなのはあるが、ただ1つだけ問題がある。先ほども述べたが、この図書館には全ての異世界が収束している。つまりは、存在する異世界の数だけ本も存在する、ということだ。

その量は、はつきり言って無限に近い。何十年何百年と時間を費や

したところで、ここの本の全てを読みつくすことは不可能であろう。それを納めている異次元図書館の広さは管理人であるオリアスも把握できておらず、足を踏み入れていない場所のほうが多いほどだ。

その中からたつた1冊の本を探し出しているのだから、オリアスの根気と決意、そして気苦労が知れるというものである。本を手に取り、文字を読み、そして元に位置に戻す。その単調な作業を何年何十年何百年と続けていれば、いつ気が狂ってもおかしくない。それを承知で黙々と作業するオリアスもの後ろ姿は、使命感とはまた違う必死さが読み取れた。

「必死だな。そんなに奴のことが気になるか」

作業をしているオリアスの背中に掛けられた言葉。

聞き慣れないその声に、慌ててオリアスは振り返る。

立っていたのは、漆黒のマントを羽織り、付属しているフードで顔を隠している1人の人物。手には青白い大太刀が握られており、その長さ故にマントで隠し切れていない有様だ。見るからに怪しいその人物の正体を、オリアスは知っていた。

「滑稽なものだ。そこまでするほどのものか？」

バサッと、その人物はフードを取り払う。

雪のように真っ白な髪の毛が見え、隠れていた端正な顔立ちも露わになる。

少女であった。

大人びた魅力を醸し出しているオリアスとは正反対に、まだ成長しきっていない幼さを残しているその少女は、感情の色が一切ない仮面のような無表情でじっとオリアスの顔を見つめている。どうしようもない大馬鹿を見ているような、そんな目だった。

「何のことだか、わかりかねますけど」

「はっきり言ってほしいのか？」

「……そんなことを言うためにわざわざ帰ってきたのですか、ギアス様」

射抜くような鋭い眼光を放つギアスと呼ばれた少女に、少しも物怖じすることなくオリアスは言い返す。傍から見れば、オリアスがどこかムキになっているようにも見える。次元の神であるオリアスが自身が敬語を使わなければならない相手に食ってかかるような言い方をしているのだから明らかだ。

「そんなつもりは毛頭なかったのだがな。まあ、何をしに帰ってきたかと言われれば、貴様に伝えたいことがあってな」

「伝えたいこと？」

「ああ。私の世界で待っていると、リバーから伝言があった」

大して面白くもなさそうに話を聞いていたオリアスの表情に変化が見られた。

驚愕と衝撃、それに戸惑い。

それらが入り混じった実に形容しがたいオリアスの表情を、ギアスは鼻で笑って続ける。

「無論、貴様ではなく、私にだ。いい加減、決着とやらをつけたらしい」

「……あの子と戦う、ということですか？」

「そうなるな。裏切り者がわざわざ伝言まで残していったんだ、それ以外に考えられまい」

それを聞いたオリアスは、きゅっと唇を噛みしめ、先ほどまでギアスの瞳から離さなかった視線をここで初めて離し、俯いた。オリア

スがこの時、何を思い、そして何を考えているかを、ギアスは見抜いているようだった。オリアスのその様を、まるでゴミを見るかのような冷たい瞳でじっと睨みつけていた。

「始末する。逃げるような真似も、逃がすような真似もしない。全力で戦い、そして『奴』への手掛かりを手に入れる。元々裏切り者なのだから、構わんだろう?」

「……………」

ギアスのその問いかけに、オリアスは何も答えようとしなかった。何の反応も示さず、身動き一つすらしなかった。その所行が意味することはただ一つ。返答を放棄したのだ。反論したいができず、かといって肯定することもできない。だから黙する。何も言わず、ただ黙る。

そんなオリアスの態度を嘲るかのように、ギアスは続ける。

「まあ、貴様が何と言おうと構わんのだがな。兎に角、奴はここで殺す。下手をすればこちらが殺されるのだから、手加減は期待してくれるなよ」

リーンと、優しげな鈴の音が鳴り響くと同時に、ギアスはオリアスに背を向けた。どうやら、『伝えたいこと』とやらは終わったらしい。これから何をしに、どこへ行くこうとしているのかは明白だ。宣

戦を布告された相手を リバーを屠りに、ギアスは指定された自身の世界へと向かおうとしているのだ。

「どうしても、戦いますか……」

ぼつりと、オリアスはギアスの背中へと言葉を投げかける。

その声色は悲しげで、今にも泣き出しそうで、切なさをも含んでいた。

「それを私に尋ねるか？ どこまで軟弱なのだ、貴様は。だから何時まで経っても前に進めんのだ。そんな甘ったれたことを懇願する前に、とっとと新たな後継者を見つけ出せ。貴様は仮にも神なのだ。いつまでも奴の影を追い続け、神としての責務を放棄することなど許さんぞ」

「……………」

今度こそ、オリアスは本当に何も言い返すことができなかった。ギアスの言うことが正論であり、オリアスにとって一番言われたくないことだったからだ。ただ黙ってギアスの言うことを聞き、口を開こうという気は一切しない。見ていて、痛々しい様子だった。

「……………」それと新たな器の事だが、どんな者か見てみたい。私の世界

へ来るよう言っておけ。お前も、その世界へと続く本は把握しているはずだ」

最後にそれだけ言い残し、ギアスはその場から『消えた』。

本を開いてリバーの指定した世界へ移動したわけでもなく、歩いて去っていったわけでもなく、突如その場から消えたのである。

だが、そのトリックを知っているオリアスにとってはそんなことはどうでもよかった。急に消えたギアスについて特段驚くわけでもなく、ただ黙って俯いているだけだった。

自身の本心と、神としての使命。

それに板挟みになっているオリアスの内心を知る者は、誰もいない。

「……あんた如きが、あの子に勝てるもんか」

ぼつりと、今はここにいないギアスに向かって、オリアスはそれだけ呟き、しばらくの間その場から動こうとしなかった。

第131話 元凶編4

刹那とレナが結ばれてから数時間後、朝日は昇り、新たな一日がやってくる。

想いを告げあつた2人は、その後お互いの部屋へと戻って眠りについたらわけなのであるが、妙に興奮してしまつてうまく寝付くことができなかつたらしく、朝食の場に集合する際には2人も目をこすつたり、あくびをかみ殺していたりしていた。

それでも、ちゃんと早いうちに起床し、全員分の朝食を作つたレナは大したものだと実感させられる。緊張の連続のあとに呆気なくその糸が切れたというのに、こうも生活のリズムを崩さないのだからその生真面目さがわかるというものだ。

そういつたわけで、いつもと変わらない美味な朝食を口に行っている刹那であるが、妙なことに気が付く。

「……………なあ、どうしてみんなして俺を見てるのさ」

自身の顔を、どこかにやついた様子で見つめてくる一同。レナだけは皆の様子に目を丸くしていたものの、それ以外は同じである。微笑ましい物を見ている時のようなと言えば具体的すぎるが、案外的は外していないような、そんな表情である。こちらを見てにやにやし、刹那が見てくるとさつと目を逸らす。

そんな行為を、レナを除く全員からやられているのだから、刹那に

してみればたまったものではない。落ち着けないし、何よりも気味が悪くておいしいはずの朝食が台無しだ。

「何か顔についてるとか？ それとも寝ぐせ？」

自分の顔に手にやったり、髪の毛を触ったりして、おかしいところはないかとチェックする。

ところが、レオはそんな刹那の様子を一笑に付し、にやついたまま刹那に言った。

「いや何。お前ら、昨日出たつきり戻って来なかったからな、何をしてたのか気になってな」

2人が結ばれる場を見ていたくせに、そんなことをレオは口走る。昨日のことを見ていたというわけにもいかないし、口に出すのも何となく憚れるため、そういう風に言っざるを得なかったということ。レオはおるか昨日の夜に刹那とレナの様子を見ていた者であれば誰しもが承知していたことだった。

そういう理由で、レオはさも状況を知らないようなことを刹那に言っただけだが、その当人である刹那は昨日の夜を思い出してしまい、その恥ずかしさから赤面してしまったため、皆まで言わずともその内容と結果を露呈する羽目になってしまった。もっとも、仮に刹那がこの場面でうまくとぼけたとしても、全てを見守っていた皆の前では通用するはずもなかったであろうが。

「あ、いや……、まあその……。うん……」

「言えないか。じゃあレナはどうだ？ 昨日、何かあったのか？」

刹那を見た時と同じような顔をしながら、今度はレナに尋ねる。

当然のことながらレナの顔も徐々に赤くなっていき、終いには恥ずかしそうに俯いてしまった。昨日の土壇場では腰を据えて行動することはできたものの、一旦熱が引いてその時のことを思い返してみると、いつもでは考えられないほどの大胆さを見せてしまったことに若干の恥ずかしさを覚えざるを得ないのだろう。

伝えて、触れて、確かめ合う。

それだけの行為なのに、冷静になってみると物凄いことをしてしまったものだと実感できた。

そして、それが当事者ではない皆の前で語ることの恥ずかしさもだ。

当然、口にすることなどできない。

その様子を見ていたレオもレナの内心を読み取ったのか、それ以上追及するような真似はせず、にやにやとしたまま、そうか、と一言呟いた。

「言いたくないならそれでもいいさ。……それと、そのついでというわけじゃないんだが、今のうちに次の世界の組み分けを決めておきたいと思う。もう皆、ほとんど食べ終わったみたいだしな」

言葉の通り、食卓はほとんど片付いており、残すところは皆の視線が気になって仕方がなかった刹那の皿の上の野菜の一切れのみ。それをフォークでサクッと刺して口に放り込み、刹那は食事を終えた。

「それじゃ、いつも通りクジで決める。引いてくれ」

そう言って、レオはあらかじめ準備しておいたクジをテーブルの中央に置く。

一同も手慣れたもので、次々と目の前のクジを引いては印を見ている。

結果としては次の通りである。

1組目は、刹那、レオ、レナ、リリア。

2組目は、雷牙、雷光、風花、風蘭。

特に計ったわけではないのではあるが、見事なほどの初期の組み合わせであった。クジの準備してきたレオもこの結果は意外だったらしく、驚きのため息をついていた。

「へ〜、こんなこともあるもんなんだね」

印のついた自身のクジをひらひらと弄びながら、リアも驚きの声を漏らす。雷牙達と出会う前までのこの面子と一緒にいるということが、何だか妙に嬉しく、こそばゆかった。

「そつちもこつちも一緒にやってきた仲だしな。何の心配もいらねえだろ」

へへつと笑いながら、雷牙もまたどこか嬉しそうに言っただけ。他の面子も同様に顔を綻ばせながら、次の世界への期待感を胸に秘めていた。

「あまり気は抜かないようにな。……よし、行くか」

レオのその声を合図に一同は頷き、異次元図書館へと向かったのだ。

+ + + + +

「……あ、来たわね」

刹那たちの姿を認め、オリアスはいつもとは違った落ち込んだような表情でその声をかけた。明らかにいつものオリアスではない。何かあったのだということは、容易く予想がついた。

「何かあったのか」

真っ先にレオがそう尋ねる。

言いづらいいのか、オリアスはしばらく口を閉ざしていたが、そのうちに渋々といった具合に喋り始めた。

「あなたが初めてここへ来たときに、世界を創り上げた神が、今私たちが戦っている相手に殺されたって話はしたわよね」

ずいぶん前の話を、オリアスは持ち出した。

忘れるわけもない。全てを創り上げた神を殺した人物こそが、今回の事件の首謀者であり、全ての元凶なのだ。様々な罫を各異世界にばら撒き、世界を滅ぼそうと目論む人物。一刻も早くそいつのいる世界へと辿り着き、討伐することこそが、一同の旅路のゴールとも言える。

己らの使命をわかっている一同は一度だけ頷き、次のオリアスの言葉を促す。

「じゃあ、その神様にもお弟子さんが居て、今も仇を討つために異世界中を巡ってるっていうのは覚えてる？」

「ああ。確か、名前は『ギアス』だったな。今も異世界中を歩き歩いているんだよな」

記憶力のいいレオは、その名を覚えていた。主たる神を殺され、その仇を討とうと何百年という長い年月をかけて異世界を渡り歩くギアスの心根に刻まれた復讐の念は、自身では想像だにできないほど深く、黒いものだということも同時に思い出す。

変わらぬものはないとよく言ったものだが、それは人の心も同じだ。熱き思いもいずれは風化し、何も感じなくなってしまうものだ。だが、ギアスの内に溢れている復讐の気持ちは未だ萎えてはおらず、依然として燃え続けているのだ。事件が起こったその日から何百年も経過しているというのに、その当時の気持ちは未だ保っていることは、それはギアスにとってよほど許し難く、忘れることの出来ない事件だったのだろう。

「だが、それが何なんだ？ そいつが何か関係しているのか？」

「……まあね」

露骨に嫌な表情をし、不機嫌さを露わにした大きなため息をついた後、オリアスは言った。

「ここに来たのよ。神様の魂の器の刹那君がどんな人なのか気になったみたいでね、刹那君の入ってる組はこの世界へ行っってほしいの」

そう言っって、オリアスは自分の机の上に積み上げられている大量の本の山のうちから1冊を取り出し、刹那にそつと手渡した。

本の表紙には何も書かれていないどころか、パラパラとめくっってみても文字らしい文字が1つも書いていない、実に奇妙な本だった。いや、それはもはや本と呼べる代物ではなく、ただの紙を束ねたものと言っただほうが適切かもしれない。

何も書かれていない、本とも言えぬ紙の束。

それが何を意味しているのか、手渡された刹那には理解できなかった。

「その本は、神が殺された世界へと通じているわ。この事件の始まりの世界。そこで、ギアスは待つてるわ。……それと、1つだけ約束して欲しいことがあるの」

「約束？」

「ギアスはその世界で、ある男と戦うことになってるの。だから、ギアスとの用事が終わったらすぐにここへと帰ってきてること。万が一にでも助太刀なんて考えないで。わかった？」

不機嫌な表情を一変させ、見ているだけで気が張ってくるほど真剣な表情で、オリアスは言う。

オリアスがギアスを嫌悪していることは、態度を見ればわかる。あれだけあからさまであれば、誰であっても察することは容易い。そのため、今オリアスが刹那に課した約束事も、ギアスの肩を持つような真似はするなと捉えることができるのだが、その際のオリアスが見せた表情を見る限りでは、どうもそういうわけではないらしい。

「…… 2人の邪魔をしちゃいけないってこと？」

となれば、必然的に得られる回答はこうなる。

神が殺された世界で、その弟子であるギアスが戦う。

それに含まれている意味は計り知れないが、邪魔をしてはいけないことくらいはわかる。

1対1で、誰にも干渉されることなく、お互いの全力を出し合って殺し合う。

手助けをするなど、無粋以外の何物でもない。

「それもあるんだけど……」

「あるけど？」

「……いいえ、何でもなし。邪魔をしないように、早く帰って来なさい」

明らかに何かを言いたげだったが、刹那たちはそれ以上追及することとはなかった。何か事情があることはまず間違いないし、言いたくないものを無理に言わせるというのもあまり気分のいいものではないのだから、止めておくことに越したことはないのだ。

「んじゃ、俺達は普通通りってことでいいんだな？」

退屈な態度を隠すこともせず、雷牙はそう言う。

「そうね、あなた達は普段通りに罫を外してきてちょうだい。でも、無理はしないこと」

机の上の本をまた1冊手に取り、オリアスは雷牙に手渡す。どうやら、罨のある本はある程度オリアスの机の上にまとめられているようだった。さすがに全部とまではいかないだろうが、一々本棚から探し出すよりは効率的に思える。

「あいよっと」

それを受け取り、雷牙はそう返事をした。

ともかく、2つのパーティの方針は決まった。

刹那のいる組はギアスのいる世界へ。

それに当てはまらぬ組は罨の仕掛けられている可能性の高い世界へ。

どんな困難が待っているかはわからないが、それは今更という話だ。怖気づくことなどない。やるべきことを、それぞれが全力でやるだけだ。

「……それじゃ、みんな頑張りなさいね。絶対に、死なないでね」

一同は、オリアスのその言葉を素直に受け取り、一斉に頷いた。

オリアスがなぜここまで危惧しているのか。

ギアスのいる世界で、一体何が待ち受けているのか。

その答えは。

次の世界にて。

第132話 元凶編5

裏切り者め。

絶対に、殺してやる。

貴様だけは私が殺してみせる。

例え何度生まれ変わろうと、必ず。

++++

オリアスから手渡された本を開き、出現したゲートの中に入った刹那たちの組は、奇妙な浮遊感を味わいながらもゲートの中を移動し、神の弟子であるギアスの待ち受ける世界へと移動していた。

周りは相変わらず紫や赤やら青やらが混じり合った不気味な色をしており、それが時折光ったりするものだから薄気味悪いことこの上なかった。幾度となく通り抜けてきたこのゲートではあるが、慣れることはもうなさそうだった。

しかし、だからこそ次の世界の光景が待ち遠しくなるというものである。

森林に囲まれた世界か、水に囲まれた世界か、はたまたビルの連なる摩天楼か。

それらを想像している今が、旅をしている上での楽しみの1つと言っても過言ではない。

「刹那、どうかしたの？」

前を移動していたレナが、小首を傾げてそう尋ねてくる。どうやら気付かぬうちに、次の世界の期待感が表情に出ていたようだった。

「いや、次の世界ってどんな感じなのかなって思って」

「気になるのはわかるけど、気をつけてね。何があるかわからないんだから」

眉を八の字にしながら、レナは不安の色を隠さずに刹那にそう言う。いつ何が起こってもおかしくない世界を渡り歩くというのに、気を抜いて隙を見せている様が心配なのだろう。それが恋人になったばかりである刹那ならば、なおさら。

「わかってるよ。心配してくれてありがとう」

「さっ」

刹那のその返事にレナは安心したのか、刹那に笑いかけた後に再び正面を向いた。

たったこれだけのやり取りなのだが、ほんの少し前まではこの程度で顔を赤くして黙ってしまったのだから大した進歩だと思う。恋人同士というものは、何とも偉大なものである。

「もうすぐだ。気を引き締めろよ」

先頭のレオが皆にそう伝える。

その先には、この気味悪い空間の出口である眩い光が存在していた。その光の中に入れば、この先の世界へと立ち入ることができる。どんな世界が待っているのか。どんな光景が待っているのか。そして、ギアスがどんな人物なのか。それらを、知ることができる。

先頭のレオが光に包まれ、その後には次いでリアが光に包まれる。先に新たな世界へ立ち入った2人に、ほんの少しの羨ましさを感じながらも刹那は大人しく移動し、目の前を移動しているレナの後、すぐに光に包まれる。

瞬間、刹那の視界は白く染まり、今までの浮遊感が徐々に収まっていくのを感じた。次の世界へと到着する前触れである。その直後に開けてくる、刹那の視界。白かった周りは色を取り戻していき、今から立ち入る世界の景色が浮かび上がってくる。どうやら、木々に囲まれた世界のようにだった。ぼやけた景色でも、色から推測すればある程度はわかる。

綺麗な世界なのだろうと、刹那は浮かれていた。

しかしながらレナの忠告を破るわけにもいかず、最低限の警戒は解かないでいた。

それがよかったのかもしれない。

先ほどまでの浮かれっぱなしの状態であれば、これから立ち入る世界から感じられる異様な『殺気』やら『闘気』を察知することなど、絶対にできなかつたらろうから。

「!？」

景色の向こう側から感じられる、確かな戦いの気配。今まで幾度となく異世界へと降り立ってきたが、『異世界にたどり着いた瞬間』に戦うことなど一切なかった。文字通りの奇襲である。出た所を狙われるという初めての状況でも、刹那は怖気づかず即座に結晶である漆黒の大剣を形成した。当然だ、うろたえている一瞬の隙で、自身の命が刈り取られてしまう可能性があるのだから。

警戒を決して緩めず、上下左右前後全ての方向からの攻撃に備えながら、刹那は戦いの舞台と化している世界へと降り立った。自身を包んでいた光はもうない。周りの景色も鮮明に映し出され、先にこの世界へと降り立ったレオ達が一体誰と戦っているのかを確認することができた。

敵は1人。

黒衣を纏った、雪のように白い髪をした少女。

手には、レナの持つ神抜刀とよく似た、青白い大太刀が収められている鞘が握られている。

「……………これで最後か」

刹那がこの世界に召喚された瞬間に閉じられたゲートを見て、殺気を隠すことなくその少女は呟いた。レオもレナも臨戦態勢に入っており、唯一の非戦闘員であるリリアはレオの後ろに隠れてこの場から離脱するタイミングを計っているようだった。

ともあれ、これで全員が揃った。

まだ硬直状態であるとは言え、やるとなれば1対3。

数だけを見れば有利であることは間違いないが、目の前の敵の実力がわからない以上、安心など絶対にできない。実力と能力によっては、3人掛かりでも葉が立たない可能性だって出てくるのだから当然だ。

「ずいぶん、警戒しているな。……………いいことだ、得体の知れない敵にはそうするべきだ」

隙を狙い、いつでも攻撃に移ってもおかしくない刹那たちとは対照的に、その少女はまるで敵意を持ち合わせてはいなかった。あるの

は殺気と間違えるほどの威圧感。冷たい視線をしてこそいるが、今のところ襲ってくる気配は微塵も感じられない。

「私の名はギアス。全能たる神の弟子にて、貴様らと目的を同じくする者だ」

そこで刹那たち一同は、少しだけ警戒心を弱めた。

殺された神の仇を討とうと異世界中を駆け巡っているというギアス。

それが本当であれば、今のように敵対する必要などない。

銃を構えていたレオは銃口をギアスから外し、神抜刀を構えていたレナも切っ先を下げる。ギアスの言葉を聞き、敵ではないと判断したからである。刹那だけはギアスから変わらず放たれている威圧感から、手に握り込んでいる大剣の柄をなかなか話そうとしなかったが、レオとレナの2人が臨戦状態を解いたのを見習ってゆっくりと切っ先を下げる。

が、ギアスは無表情のまま手を差し出して、3人の行動　すなわち武器を降ろして臨戦態勢を解くその行為を制止した。何のつもりでその行為をしたのかわからず、一同はギアスの表情を覗き込む。微笑んでいた。

冷たい、微笑だった。

どうすればここまで冷たい表情ができるのかと、刹那はぞっとした

感覚に捕らわれていた、

「そう冷たくするな。手合わせと行こうではないか」

うつすらと狂気が見える瞳を細めながら、ギアスは言った。

その言葉は冗談でも何でもなく、それどころかその声色から考えて『手合わせ』だけ済むとはとても思えず、まるでこれから始まる殺し合いを宣言するかのような、そんな口調だった。

「……血迷ったことを。俺達が戦う理由がどこにある」

すかさず、警戒の色をすぐさま取り戻したレオがギアスに言い放つ。

レオがそう言った理由としては、下手をすれば異世界中にはら撒かれた『畏』よりも厄介なギアスとは、例え手合わせというお遊びのレベルでも戦いたくはなかったからである。嫌な予感がするのだ。目の前のギアスは、『手合わせ』なのに平気で腕の1本や2本を切り落としてくるような邪悪な雰囲気がある。もしもオリアスからギアスのことを聞いていなければ、確実に『畏』であると即決したであろうその雰囲気は、少なくとも敵ではない者に放つべきものではなかった。

そう思ったのは、何もレオだけではなく、ギアスと対峙しているメンバーの全員も同様だった。

レナにしてみれば、小さな子供の体の中に秘められている膨大極まりない魔力だけでも脅威に感じるというのに、あまつさえ長年に渡って洗練したであろう戦闘技術も合わさるのだから、こちらのダメージは必須であると考えているし、刹那にしてみれば未だにゾクゾクとしたものが背筋より感じられており、叶うことならば、すぐさま皆と一緒にこの場から逃げ出したいという思いに駆られていた。

いずれにせよ、目の前のギアスと戦いたくないことは共通しているわけだ。敵ならばいざ知れず、『こちら側』の人物であるギアスと戦うなど、あり得ない選択肢だった。

それなのに、レオ達の共通の思惑を嘲笑うかのように、ギアスはおもむろに手に持っている大太刀 『神抜刀・氷』を抜き、その刃を刹那たちに向けて言い返す。

「だから言っただろう、『手合わせ』だと。志を同じくする者の力量を計るだけなのに、そこまで嫌がることもなかるうに」

口元を禍々しく歪め、ギアスは両手で身の丈ほどの神抜刀を構える。

もはや何を言っても無駄らしかった。レオがどれほどの口ごたえをしようと、ギアスが止まることは決してないだろう。完全に目がイッてしまっている。和解などという甘い選択肢は、もはや残されていないかった。

第133話 元凶編6

「刹那っ、レナっ！！ やるしかないっ！ 構えろっ！ リリアは今の内に下がってるっ！」

言うなりレオはすぐさま銃口をギアスに向け、迷うことなく引き金を引いた。いきなり撃たなければならぬ状況に陥ってしまったため、放った弾丸は無属性の物だったが、牽制という役割だけをこなすのならば十分すぎる代物だ。

発砲音が響き渡った瞬間を皮切りとし、刹那とレナは同時に駆けだした。お互いに会いコンタクトを交わし、ギアスを挟み込むようにして距離を詰める。連携というやつである。心の通い合った2人だからこそできるその戦術は、ギアスの狂気から感じられる不気味さに決して劣ってはいない。

二刀流ならいざしれず、一振りの太刀で挟み撃ちの形で襲いかかってくる剣撃を受けきることは、普通に考える限りでは果てしなく難しい。片方の刃を受け止めれば、もう片方の刃が背後から襲いかかってくるし、回避しようにも襲いかかる剣が2つとなれば難易度は格段に上がる。

しかし、そんな状況に陥っているというのにも関わらず、ギアスの顔は狂気で歪んだままだった。その様は、今の状況を楽しんでいるようにさえ感じられた。襲いかかる攻撃を、闘志を、剣を、弾丸を、ギアスはまるで恐れておらず、自分の元へ届くのを今か今かと待ちわびているだけだった。

それは果たして余裕なのか、慢心なのか、血の迷いなのか。

刹那たちは知る由もなかったが、確かなことがただ一つあった。

ギアスは刹那とレナの連携を、攻撃などという高尚な物として認識していなかったのである。

まず最初に、ギアスは自身の顔面に迫ってくる弾丸を必要最低限のスウエーバックで悠々とかわした。これに至ってはちっとも不思議ではない。あくまでレオの弾丸は牽制用の殺傷性を狙っていない物であるため、回避すること自体はそれほど難しいものではないのだが、ギアスの次の動作が問題だった。レオの弾丸を回避した後に、首を切断しようと振るってきたレナの初太刀を『神抜刀・氷』で防ぎ、足元を狙ってきた刹那の漆黒の大剣の腹を蹴り上げ、攻撃の軌道をずらしてみせたのだ。

同時に受けるのも、同時に回避するのも難しい連撃ならば、それぞれを1つずつやればいいと判断したが、今のギアスの流れだった。それを思いつくことは大して難しくはない。その気になれば子供でも思いつくような簡単なロジックだ。驚くべくは判断した速度と、一切の迷いと無駄がないギアスの手腕である。あらかじめ、こういつた結果が待っていることが知っていたような、防ぎ切れて当然だと言わんばかりな、そんな自信に溢れた動作は、子供のころから剣を扱ってきたレナでさえも舌を巻くほどのものだった。

「ちいッ!！」

軌道を逸らされ、明後日の方向へ大剣を振るってしまった刹那は、素早く手元と全身を切り返し、掛け声と共にギアス目掛けて大剣を振り下ろした。狙いはレナの攻撃を受けた神抜刀を握っている右腕。殺す気でいかなければ倒せる相手ではないことは百も承知だが、どうしても刹那には命を奪う事は、例え真似ごとでもできなかった。

しかし、それ故に刹那の剣のキレが鈍ったりすることの心配は無用である。命を奪うことに関しては決して積極的ではない刹那であるが、戦闘不能にするだけならば問題はない。腕を斬り飛ばそうが足を貫こうが、こちらにはレナもリアもいる。よほどのことがなければ死ぬことはあり得ないことがわかつている以上、急所以外を攻撃することに刹那はためらいを覚えなかった。

「ずいぶんな所を狙うな」

拍子抜けしたかのようにぼそつとギアスは呟き、先ほどと同じ要領で刹那の大剣の腹を拳で殴り、その軌道を変えた。いと也容易く、そして冷静に。

刹那も決して手を抜いているわけではない。むしろ、命を奪うことではないのだと思いつき切り大剣を振るっている。それなのにギアスは、まるで闘牛をいなす熟練のマタドールのように攻撃の軌道を変えさせている。2度も刹那の攻撃を、それもほぼ同じ動作で難なく防いだギアスは、明らかにこの防御方法に『慣れていない』ことが窺える。むしろ、そうでなければおかしい。慣れていなければ、ここまで冷静に大剣の腹を殴って軌道を変えるなどという綱渡りの防御ができるわけがないのだから。

「刹那ッ！　すぐに離れてッ！　早くッ！」

言われるがままに、刹那はすぐに態勢を立て直し、決してギアスから目を逸らさないよう後ろへと飛んで距離を取る。

刹那の攻撃を容易く防御してみせたギアスに接近戦で挑むわけにはいかないと悟ったのか、レナはそう叫ぶと同時に、自身が握っている『神抜刀・炎』に魔力を込める。それも、今の状態で出来る限り全力で、傍から見れば自殺行為に近いような無茶苦茶な量をだ。

もちろん、レナは自信を犠牲にしてまでギアスの命を取ろうとしているわけではないし、神抜刀に込めた魔力の量も致死には至らないようちゃんと計算をしている。しかしその魔力の量は、費やしたら最後までにも戦うことなどできなくなるほどの膨大なものである。そうまでしなければギアスにダメージを与えられないと、レナはそう踏んだわけだ。

レナの魔力の流れを察したのか、今までの余裕に溢れていたギアスの表情が一変した。レナが何を仕掛けてくるかなどわからないギアスでも、その瞳から放たれている『覚悟』から、絶対に接近しているこの状態のままではまずいと感じたのだろう。すぐさま距離を取ろうと、鏢迫り合いになっているレナの神抜刀を弾こうとする。

しかし、ギアスのその判断は少し遅かったようである。

ギアスが間合いを取ろうとした瞬間をレナは見過ごさず、神抜刀に込めた魔力を『炎』として形成し、それをギアスに向けて放った。

「くっ……！」

咄嗟に羽織っていた黒衣を翻し、ギアスはその中へと隠れて身を守ろうとしたが、レナの創り出した炎は容赦なく黒衣ごとギアスを包み込む。その炎の温度の高さは、身近で放ったレナが最も把握している。触れた物を全て炭化させ、灰と化してしまうほどの高温は、布切れ一枚で防ぎきれぬほど生易しいものではない。

そして何より厄介なのは、その範囲である。レナの放った炎は、ギアスを飲み込むだけでは留まらず、一足先に距離を取った刹那の鼻先ぎりぎりまでに及び、その周辺の草木の全てを焼きつくしていた。ほとんど溜めの時間も必要とせず、神抜刀に込めたありったけの魔力は、凄まじい威力と範囲を併せ持つ『武器』へと昇華したのだった。

これだけの炎を食らえば、普通に考えて生存することは不可能である。触れる物を全て燃やしつくす炎は、いくら魔力による身体の強化を施したところで無意味だ。ギアスも例外ではない。どれだけ素晴らしい身体強化を全身に施そうが、レナの炎に焼かれて燃え尽きるのがオチだ。

だが、一同は油断など欠片もしていなかった。あれだけの邪悪を放ち、刹那の剣を拳で弾くような真似を平然とやってのける人物が、この程度で倒れたとはとても考え難かったからである。どんな手段を使ったかなどわからないが、何らかの方法で絶対にレナの炎をやり過ぎしたに決まっている。確定要素はないが、そう感じさせる予感めいたものが一同にはあった。

そしてその予想は、見事的中することとなった。

レオが放った銃の発砲音によって。

「っ!？」

レオが発砲したということは、ギアスがまだ戦闘不能になっていないということの証明となる。やはり、先ほどのレナの炎では倒すことができなかったのだ。

慌てて刹那は辺りを見渡すが、ギアスらしき姿は見当たらない。強力な敵から目を離すことがいかに危険であるかということは、レナと訓練を続けて来た刹那にはよくわかつていいる。一刻も早くその姿を捕捉しなければ、気がつかぬうちに斬り伏せられてしまうことも否定はできない。

「上だっ！」

レオが刹那の様子を見たのか、引き金を引きながらそう叫ぶ。

迷うことなく上を見ると、実に呆気なくその姿を確認できた。

高速で刹那の元へと落下してくるギアスを。

「な、に……?」

落下速度が異常に速かった。

まるで、地を蹴ったかのような、少なくとも自然落下では絶対に出ない速さだった。

それが身体強化によるものなのか。

あるいはギアスの持つ能力なのか。

どちらかはわからないが、ギアスはその勢いのまま大太刀を振りかぶっている。

思考している余裕など、微塵もなかった。

「ふんっ!!」

大太刀を振り下ろしてきたギアスを迎え撃つため、刹那はタイミン
グを合わせて振り抜く。盾としてギアスの攻撃を受けるような真似
はしなかった。大剣で弾いたほうが、相手の態勢を崩せるため、追
撃を許さないからだ。盾として防げば、相手に好き放題の攻撃を許
すこととなるし、刹那自身も防ぐことより弾くほうが得意だった。

しかしながら、その選択が過ちであった。

第134話 元凶編7

「え……？」

呆けた声を上げて、刹那は自身の両腕が切断されていく様を、ただ見つめていた。

ギアスの攻撃を、刹那は弾くことができなかったのだ。それもそのはず。ギアスの振るった大太刀の速さが、『一瞬だけ遅くなった』のである。それも、意図的に力を抜いて生み出せるような緩急ではない。明らかに物理法則を無視したとしか言えないほどの遅さだ。力づくでスピードを緩めたなどでは断じてない。明らかに能力使っているようだった。

大剣で弾くタイミングを見透かされ、まんまと空振りをした刹那は、その後、何事もなかったかのようにスピードを取り戻したギアスの大太刀によって、両手を奪われてしまったわけのだが、そのあまりの自然さに、一瞬何が起こったのかわかっていないようだった。

鮮やか過ぎる一連の流れ。能力を使う前触れなど微塵も感じられず、両腕を切断するなりすぐさま射程圏外へと脱出する。もちろん特筆すべきはそれだけでなく、刹那の両腕を切断した太刀筋も素晴らしきものだった。

痛みを感じなかったのだ。

両断され、不自然な喪失感こそ味わえど、それでも腕の断面からは痛みが感じられることはなかった。武器が文字通り神懸かり的な切れ味を誇る神器であることも一因だろうが、何よりも武器を振るうギアスの腕が、とてつもないものだということ、それが証明していた。

こぼつと、断面からようやく血液が滲み出る。

それでも、痛みは感じられない。最初に腕を斬り飛ばされた時は悶絶物だったはずなのに、これは不気味なほど痛みがない。神経が麻痺してしまったのではないかと、思わず疑ってしまいうレベルだ。それを実現させたギアスの技量に、刹那は薄ら寒さを覚えた。

「刹那あッ！！」

刹那が戦闘不能に陥った事を瞬時に把握したレナが、即座にギアスに斬りかかる。刹那にこれ以上の追撃を許さないためである。両腕を失った刹那は、大剣を持って攻撃するどころか、攻撃を防御することさえ叶わないのだ。いわば、丸裸同然。ギアスが敵であるならばなおさらである。

「ちっ！ レナ！ 少しだけそいつを抑えてる！」

言うなり、レオは手に持っている神爆銃に装填されている弾丸を全て破棄し、ホルスターに付された小さなポケットから、1発の黒い弾丸を取り出し、再度装填した。

その後、すぐさま刹那の背後の茂みに銃口を向け、引き金を引いた。乾いた音と共に発射される弾丸。

その中の木々が何かにぶつかつたのか、それをトリガーに弾丸に込められた魔力が解放される。不気味な雷鳴のような、あるいは地鳴りのような、低い断続音が聞こえ、周囲の木々を引き寄せ始める。

弾丸に込められた魔力が引き起こしている現象の正体は、早い話が重力である。

辺りの土や木々、草花を巻き込むほどの重力は、射程圏内で呆けている刹那をも捉えていた。

「う、わ……っ！」

踏ん張ることもままならず、刹那と切断された両腕は重力を放っている弾丸の方へと引き寄せられていく。不意に襲う浮遊感。何が起こつたのか、呆けている刹那には理解できるわけもなく、ただ引きつけられている重力に身を任せるだけだった。

通常ならば、巻き込んだ者や物を全て押し潰し、圧縮するはずの重力であるが、レオはしっかりと計算をしたらしく、その重力は刹那を巻き込む前に魔力を使い果たし、自然消滅してしまった。どうやら、戦闘不能になつた刹那を離脱させるために撃つた1発だったら

しい。どさつと強く体を打ちつけられるものの、ギアスと距離を取らせることには成功したようだった。

「刹那さんっ！ 大丈夫ですかっ!？」

戦線から離脱したはずのリリアが、刹那に駆け寄る。戦闘に参加していないとはいえ、治癒魔術を施してはいけないという理由にはならない。輪切りになった刹那の両腕を持ち、リリアはすぐさま治癒に取り掛かる。

「すぐに終わりますからね。痛くないですか？」

「……ああ。『全然痛くない』んだ」

「？」

刹那の言葉を疑問に思いながらも、リリアは右腕の治癒から取りかかる。傷口がずれてしまわぬようしっかりと合わせ、そこに魔力を集中させる。

リリアの治癒魔術は傷を癒すものではなく、魔力を集中させた箇所
の自然治癒力を強制的に高めるというものである。そのため、あま
りにも大きな傷を治すことは、患者の体力が持たないため出来ない
し、複雑すぎる怪我を治した場合も、不自然な形で完治しまうこと

がある。大変便利な魔術ではあるものの、万能ではないのだ。

今の刹那のように、切断された腕を治すようなことも、時間がかかるということに目を瞑れば可能である。神経の1本、血管の1本、筋繊維の1本までしつかりと治すには、どうしても時間がかかってしまう。治療法はあくまで自然治癒。本来ならば治らないはずの腕が繋がることを考えれば、多少時間がかかっても仕方ないと考えるだろうし、リリアも刹那も両腕が治るまでには時間がかかるだろうと予想していた。

それだけに、刹那の右腕が、治癒魔術をかけてわずか10秒足らずで完全に元通りになるなんて、思ってもみなかった。

「え？ 嘘……」

その光景に一番驚いたのが、術を掛けたリリアである。こういった切断の類の傷を何度も治してきたリリアも、ここまでの速度で繋がる光景など、お目にかかったことなどなかったのだ。あまりに早すぎる。傷口のあった箇所を見ていても、斬られた跡がちつとも残っていない。傍目から見ても、完治しているようにしか見えなかった。

「せ、刹那さん。腕、何ともないですか？ 変な感覚があるとか」

念のためにと、リリアは刹那に尋ねる。

その問いに答えるためにと、刹那は右拳を開いて閉じる行為を繰り返す。

返し、軽く腕を振ったりしてみるのが、まるで異常が見受けられない。下手をすれば、斬られる前よりも調子がいいようにも感じられる。

「……大丈夫だ、何ともないよ。ちゃんと動く」

「よ、よかったあ。それじゃ、反対の腕もくっつけますね」

ほっとしたような表情をして安堵し、リリアは左腕を治癒する作業に取り掛かった。ここまで早く治ってしまったことに不安を覚えていたようだった。いつもとは違うイレギュラーな事態が起これば、誰だってそうなる。

しかしながら、当の本人である刹那は右腕が思ったよりも早く治癒したことに、さほど驚いていなかった。原因に予想がついていたからだ。

ここまで早く腕が完治した理由。それはおそらく、『傷口があまりにも綺麗に斬られた』からであろう。痛みも感じないほど綺麗に斬られた切り口ならば、再生も速いはず。その気になれば、リリアの治癒魔術を使わずとも、切り口と切り口をくっつくだけで治ったかもしれない。

そう思わせるほどの、腕前を持つギアス。

……寒気がする。

両腕が治って、再び立ち向かったとして、果たして勝負になるか。

おそらくならない。

ならないだろうが

(やれるだけのことは、やる……！)

いかに強かるうが、絶対的であろうが、ここで怖気づいてなどいられない。立ち向かわなければ、確実にやられる。これほどの強敵は久しぶりであるが、まだこちらにも手は残っているのだ。それをぶつけずにして退くなどあり得ない。

「終わりました！ 刹那さん、どうですか？」

左腕の治癒も終わるなり、刹那は右腕と同じように左腕の感覚を確かめてみる。

指先から斬り飛ばされた箇所まで、おかしいと感じる点はない。動く。力が入らないということも皆無だ。これで遠慮なく剣が振るえる。

「リリア、ありがとう。……よし！」

礼を言い、刹那は立ち上がる。同時に、腕を斬り飛ばされた時に消

滅してしまつた大剣を再び生成し、さらに『眼』を発動させる。先ほどは様子見のため、単なる身体の強化だけだったが、今回は違う。自らの持つ力を、存分に発揮させて挑む。全力で立ち向かわなければ、この窮地は脱することができないことを、身を持って知つたからだ。

本当ならば、今の強化に加えて『眼』を使用した時のみ発現できる『黒い翼』を利用して攻撃するところであるが、それだけは出来ない。その威力ゆえ、ギアスと接近しているレナをも巻き込んでしまう恐れがあるからだ。爆発的な攻撃力と機動力を得られないのは痛い、それでも戦えないことはない。

十分だ。

戦える。

（ 行こう！！ ）

足に力を込めながら、曲げる。

それをバネにし、地面を蹴る。

土が抉れ、若干の浮遊感が襲つ。

空気抵抗を全身で受けながらも、速さだけは上がってくる。

急激に近づくと、ギアスとの距離。

大剣を振りかぶり、タイミングを合わせてギアスに向かって振り抜いた。

腕を狙い、ただ全力で。

「おっらぁアアアアアッ!!!」

第135話 元凶編8

怒声と共に、大剣は振り下ろされる。

しかし、ギアスは驚いた様子を見せない。極めて落ち着いた動作で、レナに蹴りを入れて引き離し、空いた神抜刀で容易く刹那の剣撃を受ける。しかしながら、全身全霊の一撃とまではいかないものの、現在の出せる力を全て出きった一撃であっただけに、ギアスは若干ながら表情を歪めていた。『眼』を使った上での攻撃を、ただの身体強化で受け止めるのは、さすがのギアスでも負荷がかかるようであった。

「なるほど、『眼』を使う程度までには成長していたか」

「あアツツ!!」

言葉に応えるように、刹那は大剣の連撃を放つ。上から振り下ろした大剣を切り上げ、再び振り下ろす。ギリギリのところを捌かれるが、関係ない。今の状態ならば強引に押し切れる。

構うことなく大剣を右に切り返し、そして素早く左に向けて薙ぎ払う。力任せにならぬように注意を払いながら、鋭く、重く、迅く振るう。大剣を防いだギアスの神抜刀の金属音が、辺り一面に響き渡る。

激しくも、高音で美しい金属音。

お互いの武器が一種の特別な物であるが故の音色だが、今はそんなことを気にしている場合ではない。
今は1手でも多く攻撃を仕掛けなければならぬ。

ギアスが攻撃から防御に転じているこの機会を、逃してはならない。

「う、っらアアアアッ！！！」

雨あられという言葉がふさわしい、刹那の大剣による攻撃。

このままではまずいと感じたギアスが立ち位置を変えようとするが、そうはさせまいと刹那が斬りかかって動きを止める。今は刹那のほうが速く動ける。攻めあぐねているギアスを好き勝手攻めることのできる絶好のポジションを譲るわけにはいかない。

目まぐるしく変わる2人の立ち位置に、レオとレナは手を出しあぐねていた。レオに関して言えば、ギアス目掛けて撃つたとしても、すぐさま立ち位置が変わって刹那に命中してしまう可能性がある以上、うかつに弾丸を放つような真似はできないし、魔力の大半を消費してしまったレナにしても、共にギアスに斬りかかっていても刹那の邪魔になるだけだ。「眼」さえ使うことのできないレナには足を引く張るとわかりきった行為を踏み切るような真似はできなかった。

しかしながら、2人の援護など必要ないと言わんばかりに、刹那はギアス相手に優位に立っていた。決して距離を取られるような甘い攻撃は微塵もせず、鋭くも重い1撃を何十と重ねる。先ほど腕を両

断された者の動きとは到底思えない、攻め。一步も引かず、ギアスに向けて全てをぶつけていた。

優勢。

今の刹那に適する言葉だ。

あれだけ猛威をふるったギアスが、『眼』を使った刹那には防戦を用いるしかない。そうしなければ、ギアスの四肢は刹那の大剣によって両断されるからだ。命を奪うことを良しとしない刹那だが、戦闘不能に陥らせることであれば容赦はしない。今こそ防がれているが、刹那の猛撃を何時までも防げるとは思えない。

もちろん、刹那のスタミナの消費量はギアスの比ではないため、持久戦に持ち込まれれば勝ちはないのだが、それよりも先にギアスの防御を破れる自身が刹那にはあった。刹那の放つ一撃を、一々顔をしかめて受けているギアスが、そうそう長くこの状況を保っているとは到底思えない。

圧倒的に見える、刹那の猛攻。

確かに、このままであれば刹那はギアスを押し切り、そのまま戦闘不能に陥らせる事だろう。

しかしながら、それはこのまま攻め続けければの話。

そもそも、刹那たちの何十倍も生き、その間ずっと神の復讐をするために戦い続けて来たギアスが、『眼』を使用しているとはいえ、そこまで戦闘の経験の深くない刹那に押されているわけがないのだ。絶対に、何かを隠している。

先ほど使った物理法則を無視した動きの正体がわかっていないのに、刹那は攻め続けてギアスに手を出させない事だけを考えている。ギアスが、自身の攻撃に耐え続けることはできないと『錯覚』している。それが、命取り。

「……………迂闊だったな」

その言葉と同時に、ギアスの動きが速くなる。それも、『眼』を使用している刹那を遥かに上回るほどにだ。

一瞬の加速ではあったものの、刹那の振るった大剣を回避しつつ、その背後へと回り込むには十分だったようだ。大剣はその威力を助長させている重みがあるため、切り返しが普通の剣と比べて極端に遅い。斬りつけようと振るった直後であればなおさらだ。

刹那の背筋を、冷たくもおぞましい感覚が走り抜ける。

ギアスを相手に背を向けていることが、この上なく恐ろしくてたまらない。

可能な限り素早く後ろを振り向くが、どうやら遅かったようだった。振り向いたと同時に、先ほど腕に感じられた時と同様の感触が両足の大腿部に感じられ、体が傾いていく。

足を斬られたのだと、見なくともわかった。

浮遊感が襲い、刹那の全身は地面へと叩きつけられる。それとほぼ同時に両手も切断される。いわゆる『達磨』というやつだ。これではもう移動も出来なければ反撃もできない。完全に動きを封じられた状態であるにも関わらず、両手両足の傷口に痛みが感じられないのは、さすがとしか言いようがない。

「さて、次は」

そう言いかけたギアスに、レオの放った無数の弾丸が襲いかかる。

刹那が倒れた今、誤射してしまう心配はもはやなくなったのだ。ようやく止まったギアスに連射しない道理など、あるわけがない。

連射をするがため、その弾丸は通常の物ではあるが、身体強化を施している体くらいならば易々と貫ける速度と威力を持っている。それが雨あられのように撃たればさすがのギアスも防御に徹しなければならぬはず。

その目論見は見事当たったのか、ギアスは手に持っている神抜刀で弾丸の雨を次々と叩き落としていく。これくらいの芸当であれば、

それほど珍しくはない。身体強化を施したレナでさえやってのけるのだ。ギアスに出来ないわけがない。

ただ、自身に弾丸が命中することを防いでいるため、ギアスは足を止めざるを得ないようだった。その場から脱しようとするれば、レオの弾丸の雨が容赦なく自身の体を貫く。ギアスがレオの連射を防ぎきるには、叩き落とすこと一点に集中しなければならないのだ。

「刹那っ！！」

ギアスがレオの弾丸で足を止めているうちに、レナは動き出す。四肢を両断され、その場に倒れ伏している刹那を目の前して、冷静でいられるわけもない。先日、恋仲になったばかりならばなおさらだ。

普通であれば、レナのこの判断は正しい。一切身動きが取れない状態の刹那を救出し、離脱するのは確かに間違っていない。だが、先ほどから使ってきている能力の正体が不明であるギアスに限っては、その判断は過ちである。

現段階でギアスの能力についてわかっていることは、『自身の体の速さを減速させる』ことと、『自身の体の速さを加速させる』ことの2つ。内の『加速』だけでも、レオの放っている弾幕から離脱し、斬りかかられる可能性があるというのに、レナは刹那を助けることだけにしか頭になく、何の策もなく突っ込んでいる。ギアスの能力のことなど、すっかり頭から抜け落ちていたようだった。

このままでは、返り討ちは必須。

何も出来ず、刹那と同様に戦闘不能になる。

「馬鹿ッ！ 無策で突っ込むんじゃ

レオがそう叫ぶが、レナは止まらない。刹那を助けることだけしか考えていないレナに、レオの言葉は届かない。『恋は人を盲目にさせる』とはよく言ったものだが、戦局ではそれが死に直結する。それがわからないほどレナは経験が少なくないはずなのに、危機にさらされている人物が刹那であったならば、それも仕方がないことのようにだった。

だが、仕方あるうとなかろうと、今は戦闘の真っ最中。そのような戯言は通用しない。

それをわかっているからこそ、ギアスは接近してきたレナに容赦はしなかった。

レオが危惧した通り、ギアスは自身の体を加速させることによってレオの放つ弾幕を離脱し、接近してきたレナの両足を何のためらいもなく斬り捨てた。レナは何が起こったか理解できていないように、急接近してきたギアスに対して何の反応もできず、ただ足を斬られる様を眺めているだけだったが、自身の体を支えることが出来なくなり体が傾いたことで、レナはようやく自身がいかに馬鹿なことをやらかしたかを理解した。

第136話 元凶編9

「ッ!」

地面に倒れたと同時にレナの身体の強化は自然と解けた。レナの魔力の消費量は半端な物ではなく、両断された足の止血を施すだけでいっぱいいっぱいらしい。しかしながら、血こそ出ているものの、痛みが全く感じられないということには、さすがのレナも驚いたようだった。

だが、それもつかの間のこと。すぐさま自身のやるべきことを判断し、レナは動き出した。

レナのすべきこと。それは、自分の両断された足を治療することである。

正直、足を両断されている状態ではどう足掻いてもギアスに一太刀を浴びせることは叶わない。通常の状態でも難しいというのに、機動力の源である両足を奪われたとなつては、それはもはや絶望的だ。刹那を助け出すにしても同様、足がなければ話にならない。

戦うことも出来ず、救出も叶わないとなれば、レナは一刻も早く自身の足を治療するしかないのだ。足さえあれば、戦うことも刹那を救出することも出来る。他にいい策もないのだから、残されているこの一手を打つしか選択肢は存在しない。

「くっ……!」

すぐ目の前に落ちている足に、手を伸ばす。切り口から見える断面は、自分のものであるからか余計にグロテスクに感じられる。他人を治すことには慣れているレナであるが、自身がここまでの大怪我を負ったのは、ずいぶん久しぶりのことであつた。

「長引くから、それは止める。面倒だ」

それだけ言って、ギアスはレナの両手を切り落とした。

何の躊躇もなく、本当に人を斬っているのかと疑いたくなるほどの自然さだつた。

支えを完全に失い、レナは地面に倒れる。

「貴、様……ッ！」

あまりに残酷な所行に、レオが怒りの声を発する。

しかし、そんなレオを見てギアスが笑う。

「つろたえるなよ若造。どうせ、先に逃がした娘が治せるのだから」

一度切断したはずの刹那の腕が綺麗に治っていたことから推測したであろうその答えは、もの見事に正解していた。とは言っても、その答えを導き出すことは別に難しいことではない。冷静になって考えてみれば、誰だって想像ができる。恐ろしいのは、治るからという理由で何のためらいもなく刹那とレナの四肢を切断した冷酷さだ。罪悪感のかけらなど欠片ほども見せず、これほどまでに平然と人を傷つけるなど、『狂っている』としか言いようがない。螺子が2、3本どころの話ではない。全ての螺子が吹っ飛んでいると言っても通じそうなほどの狂気を、ギアスは醸し出していた。

「さあ、残りは貴様だけだ。精々足掻け」

「……言われんでも、元からそのつもりだ」

言うなり、レオも『眼』を発動させる。刹那もレナも戦闘不能になった今、流れ弾を当ててしまう心配はもはやなくなった。遠慮なくやれるというものである。

とは言うが、それはあくまで通常の弾丸に限定される。ここで大規模な威力を持つ弾丸を乱射すれば、動けなくなっている2人の他にも、隠れているリリアも巻き込みかねない。そのため、先ほど使った『重力』のような芸当は使うことはできない。無暗矢鱈に使ってしまうと、2人の胴体はおろか、そこら辺に転がっている四肢さえも失くしてしまうかもしれないのだから当然だ。

だが、心配には及ばない。レオの『眼』を発動させた時に使用でき

る『超集中力』。ギアスの能力が『加速』と『減速』のみに限定されていれば、物事を全てスローモーションで見ることのできるレオの能力は決して不利には働かない。有利にさえなるかもしれない。

しかし、それはあくまで実力が伯仲していればの話。長年培ってきた経験と技術。それを持ち合わせているギアスとレオでは、積み上げて来た物が違いすぎる。能力の相性を考えても、これでトントンといったところだ。

……それでいい。

相性が悪くないだけマシである。

絶対に一矢報いてやると、レオは地面を蹴って横へと跳び、両手に握られている『神爆銃』を連射した。

「…………ふん」

何の問題があるのかと言わんばかりに、ギアスは目を細めて弾丸を紙一重で躲した。別に、ギリギリでなければ避けられなかったわけではない。避けるために使う動作を最小限に抑えたただけ。それほど、ギアスにとってこの攻撃は大したことはないものだったのだから。

弾丸を放ったレオとしても、避けられるだろうということは予測済みである。刹那とレナをこれほどまでにあっさり倒したギアスが、この程度の攻撃を避けられないなどあるわけがない。

それがわかっていたからこそ、レオは迷うことなく作り出した弾幕の範囲を広げた。その広さに比例するよう引き金を引く回数を増やし、豪雨のような弾丸をギアス目掛けて撃ちまくる。連射する際には、レオの結晶である弾丸は便利なことこの上ない。魔力の供給さえ怠っていないければ、リロードの心配などいらぬマシンガンへと変貌を遂げるのだから。

しかしながら、そのままギアスを中心とした弾幕を展開したとしても、再び『加速』されて脱出されてしまえば意味がない。それどころか、弾丸を？い潜られて接近されてしまう可能性だってある。

だからこそ、レオが弾幕を展開した先はギアスの動く先だった。いくら加速をしようと、最初から展開されている弾幕をぐり抜けることは不可能だ。速さの問題ではなく、弾丸と弾丸の間隔がほんの2、3cm程度しかないのだから、人間の大きさではその隙間をぐり抜けることは物理的に出来ないのだから。

避ける先に展開された弾幕は、確実にギアスを捉える。加速すれば自身から弾幕に突っ込むことになるし、減速したところで同じことだ。体の動きを停止させれば話は別だが、1度弾丸を避けて力のかかった体が、簡単に運動を止めるとも思えない。

そんな中、ギアスが講じてきた手は『減速』だった。体の動きが一気に遅くなり、レオの作り出した弾幕に突っ込むことを先送りにする。

ただの減速であれば、レオは構うことなく弾幕を展開し続けたままでいただろう。だが、ギアスの減速はただの減速ではなかった。ほぼ停止に近いほどの速度。それこそ、毛虫が地面を這っているのと大差ないほどだ。

いくらレオの使用している『超集中力』といえど、針の穴を通すような繊細な弾道を築いていけば、ギアスの『減速』が『停止』だと勘違いしてしまうのも無理はなかった。少しの判断が自身の首を絞める結果となるこの戦いであれば、じっくりと様子を見るわけにもいかないのだから当然だ。

しかしながら皮肉なことに、その誤認がレオの悪手を招く結果となってしまうた。

ギアスの動きを停止だと判断したレオの手にした神爆銃の銃口は、ギアスの向かう一手先ではなく、ギアス本人に向けられていた。今まで通り、ギアスの移動するだろう先へと弾幕を展開しようにも、停止されてはどうしようもない。そこから逆走するかもしれないし、予想外の方向へと移動するかもしれない。つまるところ、『停止した先のことなど予想できない』のである。

闇雲な方向に弾幕を展開するよりかはと、レオはギアス本人に狙いを定めたわけなのだが、ギアスはそれを待っていましたとばかりに笑って減速していた体を急激に加速させ、展開された弾幕を潜り抜けてレオへと急接近した。そのまま弾幕を展開していれば、もろに突っ込んでいたという、何とも皮肉な結果だった。

先を読まれて弾幕を展開されてしまったのは、迂闊に移動することもできなかったが、直接自身を狙ってきてくれるとなれば話は別だ。もちろん、すぐさまレオはすぐにギアスの先を読んで弾幕を仕掛けてくるだろうが、ギアスにしてみればほんの少しの時間さえあれば十分だった。自身の使うことのできるわずかな時間を『弾幕の回避』ではなく、『自身の攻撃』に注ぎ込めれば、それでよかったのだ。

一瞬。

ほんの一瞬でギアスは手にしている『神抜刀』に魔力を込め、振るうことによつて魔力を解き放つ。その魔力はレオへと突き進む複数の巨大な『つらら』と化して、矢のような速度でレオへと襲いかかった。

「ちいつ!!」

ギアスの行くであろう先をを狙い続けて弾幕を展開し続けたとしても、つららが自身を貫いてしまつては意味がない。かと言って横に跳んで回避しようにも、ギアスは跳びつつ展開した弾幕の『一瞬の誤差』を見抜いて接近してくる。つまり、『向かってくるつららを回避すれば、ギアスの接近を許してしまう』ことになるのである。

どう動けば最善か。

ほんのわずかな時間でそれを思考してレオの出した答えは、1つだった。

それは、『向かって来るつららを弾丸で砕きつつ、ギアスの動く先に弾丸を叩きこむ』というものであった。

第137話 元凶編10

冷静に考えてみても、レオの取った選択が容易だとは到底思えない。2つ銃を持ち合わせたとしても、行う動作はまるで違うのだ。片や動きの先読み。片や接近してくる物体の優先順位の判断。両方を一気にこなすことなど、普通の人間であればまず不可能な所行である。

レオもその例外ではない。ただし、それはあくまで『普通の状態であれば』の話だ。現在レオが使用している、『超集中力』。それさえあれば、2つの全く違う複雑な行為もできないことはない。

「……ほお！ なかなか大した物ではないか！」

自身の動きの先を読み、更に向かっているつららを打ち砕くことをこなしているレオに、ギアスは賛美の声を上げた。ギアスも、まさかここまで困難なことをレオがやってのけるとは思っていなかったのだ。レオの至って真剣な表情を見ながら笑みを浮かべているのが、何よりの証拠である。

ギアスの表情のことなど気にかけている場合ではないと言わんばかりに、レオは次々と接近してくるつららを打ち砕いていく。片方の銃のみでの破壊だったため時間は多少かかったものの、ついには全てのつららを排除することに成功し、レオは間髪入れずギアスへの攻撃を再開した。

ギアスに襲いかかる機関銃のような連射。相変わらず先を読んだ弾道は、ギアスの持つ神抜刀を攻撃ではなく防御に使うように仕向け、

ギアスの加速や減速を完全に封じ込めることができるはずだった。

だが、ギアスが取った行動は防御でも弾丸の回避でも何でもなく。

「あせるな、もう少し楽しみ」

地面に神抜刀を突き刺し、巨大な氷壁を一瞬にして造りあげるとい
う、見ている者に呆気を取らせる予想外の行為であった。そのお
かげでギアスへ向かった弾丸は、見事に阻まれてしまう。使い方一つ
で武器にも防具にもなる氷を、ギアスはもはやの手足のように操っ
ていた。

「それで凌いだつもりかアツ！」

レオの放った雨あられのような無数の弾丸は、ギアスの創り出した
氷壁に突き刺さり、徐々に砕いていったが、あつという間に全て崩
壊とまではいかなかった。通常であればほんの2、3秒ほどで砕き
きることの出来る氷壁も、砕け散る氷を『減速』すれば、鉄壁とま
でいかずともある程度の時間は確実に持ちこたえることの出来る盾
にはなる。

だが、全ての属性を付すことの出来るレオの前ではギアスの策も無
駄である。いくら氷を減速させようと、火属性を付加したレオの弾
丸を撃ち込んで溶かしてしまえば関係ない。

レオが属性を弾丸に付加するには、ほんの一瞬の『溜め』時間が必

要だ。威力の上昇に比例して『溜め』の時間は大きくなるのだが、巨大でこそあるが決して分厚いものではない氷壁を溶かしきるには、それほど強大な威力はなくていい。ほんの少しの『溜め』でいい。それを撃ち込みさえすれば、目の前の薄い氷壁は完全に消え失せる。やるべきことが定まった後のレオの行動は早かった。氷壁を溶かしきることできる最低限の威力を持つ火属性の弾丸を『溜め』によって精製し、氷壁の中心へ向かった迷うことなく引き金を引く。頭の中で描いたシュミレーションをそのまま実行してのけ、後は先ほどと同じようにギアスの先を読んだ攻撃を仕掛ければいいだけ。問題は無いはずだった。

ただ一つ、レオがギアスの能力について勘違いしていたという点を除けば。

「な、に……？」

レオの計算通り、創り出した弾丸の威力は氷壁を溶かしきることに事足りるほどの物であった。聳え立つ氷壁から水が滴っているのが何よりの証拠だ。おかしいのは溶け出す『速度』。熱を故意に加えているというのに、自然解凍とも思えるほど溶けるのが『遅い』。

一瞬の戸惑いと驚き。そして沸き上がる焦燥感。

なぜこのような事態になってしまったのかを自身に問いかけ、そし

で一瞬で答えが出た。

勘違いである。

実に単純な話で、ギアスの能力は『加速』や『減速』といった『物理的な速度を操る』ものではないということだ。もしそうであったのなら、先ほどの氷が溶け出す速度まで遅くなったのは明らかにおかしい。もっと別の能力であると判断するのが妥当である。

ギアスの本当の能力。

自身の体、及び指定した物体の『加速』と『減速』。

ただし物理的な速度のみという限定的なものではない。

先ほどの氷壁のように、『溶ける』といった事象にも干渉することができる。

(操るのは、『速度』じゃないのか？)

ギアスの真の能力を分析しつつも、レオは現在の戦局を投げるような真似はしなかった。そんなことをすれば元も子もないと知っているレオは、分析と攻撃の両方をやる選択肢を取った。

いくら氷壁に弾丸を撃ち込んでも無駄だと判断したレオは、自身の

立ち位置をすぐさま変え、壁の向こう側で笑っているギアス目掛けて銃を乱射した。本来ならば弾丸で氷壁を打ち砕いてギアスに弾丸を浴びせるほうが早いのだが、能力を使われたせいで壊れる速度が遅くなっている氷壁が壊れるのを待つよりかは、立ち位置を変えてギアスを直接狙ったほうが早い。

「まあ無駄だがな」

だが、レオのその行動を嘲笑うかのように、ギアスは再びレオの弾丸を防ぐための氷壁を一瞬で形成した。先ほどと同様に、ギアスへと向かって行った弾丸は氷壁に阻まれ、砕ける速度の遅い氷はいつまで経ってもその場に残り続ける。

こうも簡単に鉄壁を築かれては、いくらなんでも突破は不可能だ。弾丸を撃って氷壁を壊そうにも、壊れるまでにはどうしても数秒の単位で時間を食ってしまう。かといって今のように立ち位置を変えてギアスを撃とうにも、薄くても巨大な氷壁を一瞬で築かれてしまつては、弾丸は絶対に届くことはない。

やるべきことは、もう一つしかない。

ギアスの能力の解明だ。

それさえわかかってしまえば、ひよっとしたら突破口が開けるかもしれない。少なくとも、今のような確実に潰されるような策を実行し

続けるよりはずっとマシな一手である。

だが、それはあくまでもギアスの行動を制限しつつ行使しなければならぬ困難を極める手だ。棒立ちで能力を分析するなど誰にだってできる。だが、この戦況でそのような愚かな行為をするということとは、殺してくれと言っているようなもの。

相手の行動を抑制しつつ今までの能力を解析し、そして能力の詳細を導き出す。

並みの集中力では不可能に近い所行も、レオの『超集中力』ならば何とかやってのけることが出来るが、ほんの少しの油断で全てが波状してしまうという、まさに綱渡りのようなものである事を忘れてはならない。

だが、それをやらなければ活路は見出せないことも、また事実。

渡るしかないのだ、この綱を。

(考える……、奴のやったことは自分の自身の『加速』と『減速』。氷の砕ける速度と溶ける時間の『減速』……！)

立ち位置を変えて弾丸を放ちつつも、レオは思考する。だが、現在の判断材料ではあまりにも情報が少なすぎてギアスの能力を完璧に推測することができない。パズルのピースが足りないとも言えは通じるだろうか。それさえわかってしまえば、全ては追い風となりうるのに、それがどうしてもわからない。

そんなレオを尻目に、ギアスは冷たく微笑みながら同一の行動を繰り返す。氷壁を創り上げ、そしてレオの弾丸を防ぐ。氷壁が崩れて盾として使えなくなれば、再び氷壁を創り上げる。

機械のように同じ動作を行っているのは、どう考えてもわざとだ。長年戦い続けて来たギアスに限って攻めあぐねていることなど考えられないし、何より表情に余裕が見える。おそらく、レオがどうやって戦況を打開してくるかを待っているのだろう。そうでなければ、すぐにでも氷壁の外へと出て、容赦なく加速を駆使してレオに斬りかかってくるだろう。そうなればすぐに勝負が決する。敗北という幕切れで終わる。

冷たい微笑み。

それが、不意に歪んだ。

第138話 元凶編11

「……っち。せっかくの楽しみを邪魔しくさって」

憎々しげに、ギアスは呟く。だが、それはレオに向けられたものではない。視線も、レオから外れている。どこにそれが向いているのかと、レオはギアスの動向に注意を払いながら確認した。

それは、四肢を斬り飛ばされて戦闘不能となっているはずのレナであつた。

レナは体をよじり、何とか腕の落ちているポイントまで到達しようと、必死に這っている。魔力も自由に扱えず痛覚を抑えることができないためか、顔も歪んでいる。なぜそうまでして腕まで辿りつこうとするかなど一目瞭然だ。斬り飛ばされた腕の治療するつもりである。

腕をなくしてどうやって治療をするのかと、疑問に思つかもしれない。今までレナが自身以外の人が負った傷を治す際には、裂傷部位に手をかざし、そして自身の魔力を流してやることによつて他者の自然治癒力を飛躍的に上昇させるという方法を取っていた。こう聞くと、レナの治療には腕が必要不可欠のように思える。それならばレナがこうも必死で自身の腕の元へ這い、そしてたどり着いたとしても、それは徒労に終わってしまうことは明らかだ。

だが、腕がなければ傷を治療できないのは、あくまで自身以外を対象にした場合である。自身の傷を治す分には、魔力を自身の裂傷部位に集中すればいいだけのため、他者の傷を治す場合に必要なのは手

をかざす』という工程が必要ないのだ。もちろん、末端部分である手に魔力を集中して治癒させる方がずっと速く済むのだが、ないものは仕方がない。速度が遅くとも、治らないわけではないのだから。

だが、それを見逃すほどギアスは甘くはない。

レオとの勝負を邪魔するつもりならば、なおさら。

「!? おいッ！ 何をするつもりだッ！」

必死に自身の腕まで這っているレナと、そのレナにあからさまに何かを仕掛けようと神抜刀を構えたギアスを見て、レオが叫ぶ。だがギアスは止まらない。自身の周りの氷壁の速度の操作を解除し、わざと崩壊を早めてその隙間から脱し、その場でレナ目掛けて神抜刀を振る。

もちろんその刃が届くことはないが、ギアスは代わりに先ほどレオに放ったような『つらら』を飛ばしたのである。だが、先ほどと違うのはその本数。4、5本という少なさだ。

しかし、それで十分なのだろう。機動力である足を奪われ、迫りくるつららを叩き落とす神抜刀を振るう腕もないレナならば、確実に命中させることができる。

「やらせるかぁアツ!!」

レナへと向かうつららの軌道の先を読み、あらかじめ先のほうへとレオは弾丸を連射した。防御も回避もできない以上、つららが急所に命中する確率のほうが高い。絶対にそれだけは避けなければならぬ。そのためにも、つららの1本たりとも撃ち漏らしてはならないのだ。

だが、そう事はうまく運ばない。レオが計算して撃った弾丸は、あくまでそのままの速度でレナ目掛けて直進した場合のものである。そのため、ギアスが例の能力を使ってつららを加速させるなり減速させるなりすれば、レオの計算が全て台無しになる。

それを知ったことだろう。ギアスは表情を変えないまま能力を發動させ、全てのつららの速度を急激に上げた。速いなどというものではない。『超集中力』を使用しなければ捉えられないほどの速度だ。レオの放った弾丸と比べてみれば一目瞭然である。

レオの弾丸を悠々と置き去りにしたつららは、レナ目掛けて真っ直ぐ突き進んでいく。だがレナは気付いていない。這う度に走る激痛に悶えながらも、それでも進むことを止めないレナが、唐突な攻撃に気づけるわけがなかった。

「レナあああああああ!!!」

刹那が気がつき、声を張り上げるが遅い。

高速で飛ぶ、無数のつらら。

その全てが、無情にもレナの背に深々と突き刺さった。

「う　　ああアアッ！！」

激痛が走り、レナは身を縮こまらせる。痛みを軽減できない今、そのダメージはもろに伝わる。鋭い先端が肉を突き破られる痛みは、並のものではないはずだ。絶叫を上げたあと、脂汗を滝のように流しながらじっと耐えているレナの表情を見れば、それがよくわかる。それに加え、貫かれたつららによってレナは礫状態になり、地面に固定されてしまった。もはや動くことなどできない。戦いに復帰することは、叶わなくなったのだ。

だが、問題はそんなことではない。

問題はただ1つだ。

「おいお前えええええええッ！！」

似つかわしくない、荒々しい怒声を刹那が張り上げる。

それに含まれている感情は、紛れもない『敵意』だった。ギアスを睨みつけ、物理的に不可能ではあるのにも関わらず、今にも襲いかからんばかりの気迫を見せている。ここまで刹那が激怒したのは、異世界の旅が始まって以来、初めてのことだった。

レオとの戦いを邪魔されたからだろうか、ギアスはその激昂をものとせず、面倒臭そうに刹那の方へとその顔を向けた。怒りで見開いている刹那の目とは対照的に、まるで価値のないゴミでも見るかのような目をしている。

「……………喧しいな。何だ？」

「どうしてレナをやったッ!? もう戦えないだろうッ!! 無抵抗の人間になんて攻撃したアッ!! 答えるオッ!!」

「馬鹿か貴様は。その小娘は腕を治そうとしていたではないか。向かってくる意思があったのだぞ。潰しておくのが定石だというのがわからないのか」

何をいまさらと言わんばかりの態度で、ギアスは刹那に言い放つ。

確かに、ギアスの言っていることは正しい。いかに重傷であっても、いかに絶望的な状況でも、レナは戦おうと自らの腕へと向かった。『戦意』は消えていなかったのだ。それならばやはり、潰しておくのが当然の行為。

本来であれば、レナは死んでいてもおかしくない。相手がギアスでなければ、手を抜かれていなければ、まず間違いなくレナは息を失っていたただろう。それにも関わらず、痛み、呻きだけの体力がレナにあるのは、ギアスが急所を外すよう攻撃をしてくれたおかげである。つららの速度が異常に速かった

急所外しの攻撃に関しては、ギアスの考慮に感謝すべきことなのだが、刹那は納得できない。理屈ではわかっている。わかっているが、心では納得できない。大事な恋人を　レナを傷つけられたことは事実なのだ。正論だからといって引き下がるわけがない。

刹那の内なる炎の原因を知ってか、ギアスのつまらなそうな表情は一変し、最初のような不気味な微笑に変わった。

面白みのないゴミに、ただ1つだけの価値を見出したのか。

それとも、何やら良からぬことを思いついたのか。

どちらにせよ、ろくでもないことには変わりないことはわかりきっている。

一体何を仕掛けてくるのかと思った矢先、ギアスは口を開いた。

「なんだ貴様、その小娘に惚れているのか？」

先ほどからの刹那の態度を見ていれば、レナに持っている感情に関してはある程度は予測がつく。その気持ちを利用し、焚きつけるのが、ギアスの思惑である。

戦う術も、移動すべき足も失っている刹那が、ギアスに立ち向かえるとは到底思えない。気力だとか、気持ちの問題だとか、そうではなく『物理的』に無理なのだ。戦うどころか、ギアスに接近することさえ難しいはず。刹那とレナを『こんな風』に追いやったギアスが、そのことに気がつかないわけがない。

「な、なに……？」

だが、それとは別にギアスはわかっている。

刹那の『もう1つ』の移動手段を、ギアスは知っている。

だからこそ、煽る。

刹那を煽り、その手段をさせようとする。

なぜか。それは

「図星か？ そうなら、もっと『押さえ込んで』やるうか？」

「……もう一回言ってみろ」

そうしたほうが面白くなるだろうと、ギアスが踏んだからだ。

「お前の大好きで大好きでたまらない恋人の体を穴だらけにしてやるうかと言っているんだよ、糞餓鬼」

微笑みながら、それでいて冷たい声でギアスはそう言い放った。その裏には冗談ではなく、本当にやりかねないほどの凄みがある。現にギアスはレナに追撃を仕掛けようと、神抜刀を振りかぶっている人を傷つけて、どうしてそれも笑っていられるのか。

なぜ敵対していない人間にここまでの傷を負わせるのか。

なぜ　　レナを傷つけるのか。

様々な考えが嵐のように頭に駆け巡った後、刹那はそんな『理由づけ』などいらぬということに気がついた。ギアスにつっかかっている『理由』なぞどうでもいい。重要なのは、ギアスがレナを傷つ

け、冗談でも追撃するような言動をしたことだ。

絶対に許せない。

レナを傷つけておいて、笑いながらいたぶろうとするギアスを、許せるはずもない。

この日、この場所、この瞬間。

刹那は生まれて初めて、本気で『キレた』。

第139話 元凶編12

「ッざけんなあああああああああああああッ
ッ！！！」

瞬間、刹那は『眼』を発動させた。四肢が斬り飛ばされ、戦闘不能のはずだというのに、それを感じさせないほどの魔力が体中から溢れ返り、禍々しいほどの圧迫感を醸し出している。それに加えて刹那の瞳には、らしくもない憎しみと殺意が渦巻いて、先ほどとはまるで別人のようでさえある。

全てはギアスの言動と挑発。

これも掌の上の出来事、というわけだ。

だが、いくら焚きつけたところで、刹那は大剣を振るう腕もなければ移動する足もない。そんな状態で、ギアスが望む『面白い状況』になるとは到底思えない。強いて挙げるとすれば、精々、激怒した刹那を見て楽しむくらいだろう。見るからに優男の刹那がここまで激昂する姿は、考えによつては見物にもなり得る。

だが、果たしてギアスは刹那の激怒する様を見たいがため、このよ
うな挑発をしたのだろうか。

たったこれだけのために？

答えは NOである。

ギアスが刹那に望んだことはただ1つ。

『戦う』こと。それだけである。

四肢を失った刹那に戦うことなぞ出来るわけがないと思われがちだが、『移動』という一点においては刹那は足の他にもう1つの手段を残している。ギアスも『それ』を知っている。足がなかるうが、『それ』さえ使えば可能だ。

その手段とは周知の通り、刹那が『眼』を使用した際にのみ使用が可能となる『黒い翼』である。

「う　　おおおおおおあああああああああああッ
ッ！！！！！！」

怒声と同時に刹那の背中に魔力が集中し、形成される漆黒の翼。広げられたそれは相変わらずの禍々しさとおぞましさ、そして威圧感を醸し出しているわけだが、いつもとは異なる点がただ1つ存在している。

漆黒の大翼を形成している羽根の1枚1枚が、血のように『紅い』。

刹那の怒りを表すかのような紅と、深淵を思わせる黒の色が互いに合わさり、以前の物と比較しても段違いの不気味さは、ギアスの食指をずいぶと動かしたようだった。つい先ほどまでのゴミでも見るかのような表情とは違い、レオの攻撃を悠々と防いでいた時のような気味の悪い笑顔を浮かべているのが何よりの証拠。

『襲いかかる逆風や、激しい感情の爆発は、良くも悪くも人を成長させる。』

長年に渡って生きてきたギアスは、そのことを知っていた。

だからこそ刹那を焚きつけ、能力の成長を促したのだ。

うまくいかないかもしれないという危惧はもちろんあったし、何よりも刹那の折れた戦意が復活するかどうかも怪しかった。駄目で元々で試した挑発だったが、思いのほかうまくいった。先ほどとは殺気から放出している魔力の量までまるで違う。

面白くなりそうだと、ギアスは神抜刀を握りしめ、構えた。

頭に血が上っているために戦法も使うこともなく、腕もないために大剣を振るってくるような事も出来ず、猪のようにただ突っ込んでくるだけのつまらない戦いになるだろうが、それでも先ほどの斬り合いよりかは楽しめるような雰囲気、刹那は発している。

背中が黒く、そして紅い翼。

果たしてそれにどんな『力』が隠されているのか。

早く戦いたいと、そう思わずにはいられなかった。

刹那が翼を広げ、大きく羽ばたくタイミングを見計らい、ギアスは接近して斬り伏せようと足に力を込める。

そこに割り込むかのように鳴り響く、ただ1度の乾いた音。

正体は何度も聞いた銃声。撃った人物はレオしかない。

弾丸は刹那の倒れているすぐ近くの地面へと突き刺さった。

「レ、オ……！？ な、なんで……」

当然、刹那は戸惑いを見せる。

味方が何の前触れもなく突然に弾丸を放ってきたのならば、誰だつて驚かすにはいられないだろう。それは刹那だって同じであるし、共に戦ってきたレオからの攻撃であればなおさら衝撃的な出来事であった。何が何だかわけがわからず混乱し、出鼻をくじかれたためにギアスに向かって突進することも、もはや叶わなくなってしまう

た。

呆然としている刹那に対し、当人のレオはそれでもギアスから目を離すことなく口を開く。

「落ち着け刹那。お前を焚きつけるための挑発だ、本気にするな」

その言葉で、レオが自身に弾丸を放った理由を刹那は悟った。全ては頭に血が上り、無策で飛び出そうとした自分を止めるため。新たに発現した『紅い翼』がいくら凄まじい能力を持ち合わせていたとしても、その詳細を知ることもなく、ただ突っ込んでいくだけでは斬り伏せられることは必須。これ以上のダメージを受けたら、さすがに体が持たないということを確認していたからこそその言葉だった。レオの意図はわかった。

わかったが、それでも気持ちは治まらない。

『もっと戦いたい』という、ただそれだけのためにレナを傷つけたギアスを許せない気持ちが、どうしても治まらない。

「でも俺は

」

「その気持ち、俺が晴らしてやる」

刹那の言葉を遮り、レオがぴしゃりと言い放つ。そのせいか、レナをギアスに傷つけられて向かって行こうとして止められ、それでもなおギアスに向かって行こうとした刹那は何も言えなくなってしまうた。

レオから言われた落ち着けという言葉聞き入れたということもあるのだが、何よりも口を嚙まざるを得なかったのはレオの言葉の裏に隠れている『感情』のせいである。

例えるのならば青い炎。

表面上は冷静を保っているようだが、内面は違う。恋人を傷つけられた刹那と同等の怒りを覚えている。それも当然の話で、仲間を、ましてや身動きの取れないレナに追い打ちをかけるような真似をされておきながら、落ち着いてギアスと対峙するようなことは出来なかった。

思い知らせてやる必要がある。

ここまで嘗められ、コケにされて、これ以上好き勝手させるわけにはいかない。

「せつ、なあ……」

弱々しく自身を呼ぶ声。

レナのものである。

その声で、刹那はようやく我に返って『眼』の使用を止め、ほぼ瀕死の状態であるレナのほうへと振り向く。同時に刹那の背中の『紅い翼』が、まるでガラスが砕け散るかのように霧散し、醸し出していた不気味さと共に虚空へと消え失せた。

魔力を著しく消費する『眼』と得体の知れない『紅い翼』の使用を止めたことで安心したのか、苦痛で歪んでいたレナの表情が若干の和らぎを見せた。刹那が四肢を斬り飛ばされていても正気と戦意を保っていられるのは、体中の魔力を傷口に集中させ、止血と鎮痛の効果を実施しているためである。それがなければ、とうに失血とそのショックで昇天している。

だがそれも、魔力を自在に操れるだけの量があれば成せる所行である。仮に戦いなどで体内の魔力の大半を消費してしまった場合、止血も鎮痛もできないために、四肢の切断までいかずとも、片腕だけを切断されるだけでも死に至る。

レナが危惧したのはそこである。

刹那が発現させた新たな『紅い翼』は、どんな能力を持っているかなど、今の段階ではわからないのだ。その能力を使用するために膨大過ぎる魔力が必要だった場合、斬り傷の止血を行うことができなくなる。死ぬ可能性が出てくる。

だがそれも、レオの銃弾のおかげで杞憂に終わった。冷静を取り戻した刹那は、『眼』と『紅い翼』の使用を止めてくれた。それがどれだけレナを安心させたかなど、到底語ることなど出来やしない。

自身の愚行がいかにもレナを心配させてしまったかを、刹那はその表情を見て初めて悟った。同時にレナの容体が今更ながら気になり、

体をよじらせて近づく。

激怒していた時とはまるで違う、必死で焦ったような表情。

レナが刹那を想っているように、刹那もレナのことを想っているのだ。

心配など、できないわけがない。

「……………で？　せっかく面白くなりそうだったのを止めたのだから、その分、貴様が埋め合わせをしてくれるのだろうな？」

刹那を焚きつけることはもう無理だと思ったのか、ギアスは元の標的だったレオを見てそう言い放った。新たな能力を開花させた刹那と戯れることが出来ない事は残念ではあるが、それでもまだレオが残っている。齒応えは十分であると、ギアスは踏んでいた。

「ああ……………、もちろんんさ」

それをあえて否定せず、レオは銃のマガジンを取り出し、中の弾丸の全てを破棄した後、ホルスターから1発の弾丸を取り出して装填した。予め大量の魔力を注ぎ込んで精製したとおきの弾がうちの1つである。一度決めた以上、これからは本当に『殺す気』でいかなければいけない。容赦などなく、加減だつて微塵もしない。今まで手を抜いて戦っていたと言えば、それは嘘になるのだが、これから取る手段は相手を『戦闘不能にする』ものではなく、本当に

『息の根を止める』ものである。最初は足を撃つなどして戦闘を終わらせようとしていたのだが、それもおしまいである。

絶対に、『殺す』。

後先のことなど知ったことではない。

刹那と同様に、レオもギアスを許せないのだ。

「貴様の能力の種もわかったことだしな。お望み通り　　楽しんでやる」

「ほう、私の能力を……。ただの強がりではなからうな？」

「ああ、まず間違いなく見抜けたと思う」

「よからう！　ならば試してみるがいい！」

楽しみに。

本当に楽しみにギアスはそう言った。

ならば応えてやろうと、レオは銃口を向ける。

応えた後、加減したことを後悔ながら死んでいけと、そのまま引き金を引いた。

第140話 元凶編13

ギアスの能力。

それは『加速』や『減速』などの『速度』を操るものではない。それを教えてくれたのが、先ほどレナを地面に磔にしたつららだった。弾道を読んだ上で放たれたレオの弾丸を置き去りにしたほど『加速』されていたつらら。それほどの速度があれば、『地面に突き刺さる』だけで留まることなく、そのまま地面に埋まってしまわずである。直前に『減速』したのであればそれも可能であるが、『超集中力』を使用していたレオの瞳には、一切の速度の変化は見えなかった。つまりギアスの放ったつららは、あの高速度を保ったまま、地面に突き刺さったのだ。

それが、先ほどから疑問であったギアスの真の能力を解き明かす、最後のピースとなった。

自身の体と、創り出した氷壁や放ったつらら 物体の加速と減速を操ったギアス。

だが、それは決して『速度』を操る能力によるものではない。

ならば、ギアスは何を操っていたのか。

それは 『時間』 である。

『加速や減速』 と、『時間の操作』。

同じようなものだと思うかもしれないが、その2つには決定的に異なる点が存在する。

『加速や減速によって得られるエネルギーの有無』 である。

普通であれば、加速をすればするほど、その速さに乗った攻撃は鋭く、重く、そして速くなる。刹那の戦法がその最たる例だ。『黒い翼』 によって加速し、その勢いで振り下ろした大剣の威力は、計り知れないものがある。減速をすればその逆だ。威力も速度も何もない、薄っぺらで脅威のない攻撃になる。

対して、時間を操ればどうなるのか。

答えは単純。いくら時間を進めようが、遅くしようが、攻撃の威力は変わらない。速度も、鋭さも、『見た目だけ』 ならばいくらでも速くもなるうし遅くもなるうが、肝心の威力はどうやってとしても同じになるのだ。ビデオの早送りを思い浮かべてもらえば話は早いだろうか。

時間は流れた。流れて、流れて、その先に待っているのが結果だ。時間の流れをいかに操ろうが、結果は変えられない。攻撃も、氷壁も、つららも、全てはそれぞれの結果の訪れが速いか遅いかに過ぎ

ない。
それさえわかれば、対策は立てられる。

レオの弾丸を防ぐ盾となっていた氷壁を、突破することができる。

先ほどは弾丸で破壊しても、熱で溶しても、弾丸が通る前に新たな氷壁を張られてしまったが、たった今放ったレオの弾丸は前の物とは一味違う。以前、レオの世界に降り立った『神の使い』が1人、『シャドウ』に多大なダメージを与えた、光属性の弾丸 『アルテマ』である。

爆発を伴う炎属性の弾丸とは違うものの、放たれることで発生する巨大な光は膨大な熱量を保持しているアルテマは、いかにギアスの創り出した氷壁といえど瞬時に滅することなど明らかだ。時間を最大限に遅くされれば結果はわからないが、ギアスはレオを甘く見ている。多少の手加減をしたとしても、それでも自身に銃弾が届くことなどないと見てくびっている。そうなれば、最大限まで時間を遅くすることなどしないはず。

手前の氷壁さえ突破さえすれば、確実に届く。

新たな氷壁を創り出す前に、全てを消し去る『アルテマ』が命中する。

「ッ!!!?」

遠目から見ても『アルテマ』の脅威を理解できたのか、ギアスは慌てて身を翻し、羽織っていた黒い外套で全身を覆い尽くす。氷壁を張る間を惜しんだが故の行動であることは理解できたが、時間を進めて『アルテマ』の射程圏から抜けださなかったのに、レオは違和感を覚えた。

時間を進めても離脱が間に合わないかと判断したためか。

それとも、時間を操る能力を多用しなくなかったためか。

気になる点は多々あるが、最も気になければならない事はただ一つ。

強力極まりない『アルテマ』の威力を察しながらも、それを羽織っている外套で防御しようとしていることだ。

避けられないのならば、受ける他ない。つまり、ギアスには見るからに薄っぺらい外套でレオの『アルテマ』を受けきる自信があるのだ。『時間操作』によるものなのか、外套に隠された秘密によるものなのかは分からないが、少なくとも『アルテマ』の1発で沈むことはないはず。

レオの頭に駆け巡る様々な可能性をよそに、『アルテマ』は佇んでいる氷壁をあつさり蒸発させ、外套で身を隠しているギアスに命中した。そのままギアスは、まるで激流に飲まれたかのように『アルテマ』に包みこまれ、傍からはギアスがどうなったかを確認することができなくなってしまった。

『アルテマ』の威力は凄まじく、標的であるギアスはおろか、その背後に茂っている樹木を容赦なく蒸発させ、その地面も容赦なく抉

つていった。しかし『アルテマ』の爪痕はそれだけに留まらず、発射された際に生じた衝撃で辺り一面の木々をも薙ぎ倒し、その残骸を吹き飛ばすにまで至っている。倒れている刹那やレナ、隠れているリリアの地点を考慮していなければ、まず間違いなく巻き込んでしまうほどの範囲だ。

正直な話、人間に対して撃つべき代物ではなかった。連射できないとは言え、1人の人間が出すことの出来る火力と見れば凄惨たるものだ。弾丸どころか核弾頭に匹敵するような『アルテマ』は、使いどころを誤れば、標的どころか辺り一面にまで被害を出す『諸刃の剣』に等しい兵器だった。

凄まじい威力の『アルテマ』。だがその攻撃も無限に続くわけではない。次第に光の量も少なくなっていく、ついには空気に溶けるように消え失せていった。

そして露わになる、黒い外套に包まったギアスの姿。

バサツと音を立てて覆っていた外套を取っ払うことで晒されたギアスの表情は、先ほどのような笑顔ではなく、はたまた自身をここまで追い詰めたことによる憤怒のものでもなく、ただ無表情だった。初めて顔を合わせた時に見せた、冷たい目を表情だった。

「……驚いたぞ。まさか　まさか貴様がここまでの火力を持ち合わせていようとはな。『これ』を持ちだしたということは、どうやら私の能力に察しがついたというのも本当らしいな」

「『時間の操作』といったところだろう、貴様の能力は。詳細まで

はわからんが、大方当たりなんだろ？」

「厳密には『時間の流れの操作』だがな。もう少し詳しく教えてやるとしたら、そうだな……。『私が生じさせた時間の流れを早めるか遅める』ことができる、といったところか。他にも制約やらがあるのだが、そこまで言う義理はない」

「……いいのか？ 『敵』に能力の詳細を教えて」

「構わんさ、もう戦う気はないしな。お遊びの時間も、そろそろ終わりだ」

そう言いながら、ギアスは手に握っている神抜刀を鞘に納め、抉れている地面を歩きながらレオへと近づく。先ほどに感じられた、針のように突き刺さる殺気は微塵も感じられず、本当にこれ以上戦う気はないらしかった。

「……どういっつもりだ、さっきまでやりたい放題だったくせに」

「貴様の力はもうお遊びのレベルでは捌ききれないということだ。これ以上やるとなれば、私も本気でやらざるを得ない」

そうなれば。

貴様を殺してしまうかもしれないからな、と。

ギアスはそう言った。

確かに、ギアスは今まで本気ではなかった。刹那も、レオも、そしてここまで追い詰めたレオも本気だったにも関わらず、手を抜いていたギアスに届かなかった。もしギアスが手を抜かず、本気で殺しにかかってきたら、例え万全の状態であっても勝つことはできない。それほど差がある。今の刹那たちにとって、ギアスはあまりにも高すぎる壁だった。

レオもそのことがわからぬ程、愚かではない。自身の持つ最強の弾丸である『アルテマ』をやり過ぎされ、その上本気を出していない相手に勝てるなど到底できないことくらいわかっている。

引き下がらなければならない。

だが、こいつを許すこともできない。

その2つ感情の狭間で揺れ動いているレオの心境を察したのか、ギアスは冷たく言い放った。

「……くだらん意地を張っている暇があったなら、達磨になっ
てるそいつらの治療でもするんだな。男のほうはまだいいとしても、
女のほうは放っておけば死ぬぞ」

そう言われて、レオは2人のほうを振り返る。刹那が動けないレオの元まで這いずり、お互いに寄り添い合う形になっているまではよかったが、レオの顔色が明らかに悪かった。刹那の傍にいたためか、表情こそ安らいでいるものの、その色は死人のように白かった。激痛と魔力の消費で相当参っているのだろう。このままではギアスの言う通り、死に至る可能性が高い。

苦しむ仲間と、憎き敵を天秤にかけようとして 止めた。

答えなど、考えるまでもない。

「……覚えていろ」

「ああ、覚えていたらな」

短いやり取りをかわした後にレオはギアスに背を向け、2人の元へと一目散に駆け寄る。

それが戦いの終わりだと悟ったのが、木々の中に隠れていたリリアも駆け寄ってくる。

その後、刹那とレオの有様を見たりリアが、涙目になりながらも治療を開始する姿を、ギアスは大して面白くもないような顔でじっと見つめていた。

リリアの治療を最初に受けたのはレナであった。魔力の著しい消費と、ギアスのたつららにやられた傷を考えれば、それが当然の優先順位であることなどわかりきった事柄なのだが、当人であるレナは素直にリリアの治療を受けようとしなかった。自分よりも先に刹那を治して欲しいと言って聞かなかったのだ。

レナの体の状態が刹那と同じであったならば、リリアも言う通りにしただろうが、そのレナが死にかけの状態であったならば話は別である。リリアにも医学を齧っている者のはしくれとしての知識と責任がある。刹那を先に治療し、みすみすレナを死なせてしまうなどという愚行を促す言葉を鵜呑みにするわけがなかった。

自身の容体の深刻さをわかっていないレナを一喝し、リリアはそのまま治療に取り組んだわけだが、結果としては刹那を先にしようがレナを先にしようが同じだったらしい。斬り飛ばされた四肢の切り口が異常に綺麗だったため、それらを元通りにするのに1人当たり2分とかからなかったのである。一番最初に腕を斬り飛ばされた刹那を治した時と同じだ。凄まじい速度と鋭さ、そして神抜刀の生み出した美しい切り口は、リリアの治療魔術を使用せずとも、ただくつつけただけで元通りになるのではないかと思える程の物だった。

それを見て、改めてギアスの脅威を実感する。

ここまで綺麗な傷をつけるギアスは、一体どれだけの時間を自身を磨くために使ってきたのだろうと想像するだけで寒気がした。あの時、レオが引き下がったのは正解だったのだと、つくづく思い知らされる。

ともあれ、刹那とレナの両人の治療は完了した。レナの魔力に関してだけは、いくらリアの治療といえどどうしようもなく、自然に回復するのを待つことにならざるを得なかったのだが、それでも命が助かったのだから文句は言えない。

「終わったか、ずいぶん早かったな。もう少しかかるものだと思っ
ていたが」

それを見計らい、ギアスが刹那たちに歩み寄る。

殺気はない。

戦った時とは別人とも思えるほどの、落ち着きぶりだった。

「お前が綺麗に斬ってくれたおかげでな。……よくも俺の『アルテ
マ』を受けてそうぴんぴんしてられるものだ。普通じゃなくとも人
間だったら蒸発するほどの威力なのだがな。その外套のおかげか？」

「そういうことだ。我が主　　神より授かった『黒衣』はあらゆる
攻撃を通さぬ『神器』。いかに強力といえど、『黒衣』の前では
無力に等しい」

「……武器ではない、防具型の『神器』か。初めて見たな」

「当然だ、数ある神器の中でも1対しか存在せぬのだからな。だが、珍しいのはこちらも同じだ。1人が2つも神器を持ち歩くなど、長年生きているが初めて見た」

ギアスのその言葉で、ようやく『アルテマ』をやり過ごした術を、レオは理解できた。睨んだ通り、やはりギアスの羽織っている黒い外套 『黒衣』に隠された能力が、高威力である『アルテマ』を防ぎきつたのだ。神によって生み出された『神器』。いかなる攻撃をも耐えきる強度があるのならば、いかに『アルテマ』とさえも防がれるのは当然だった。

「……なんだ、小僧。ずいぶん睨めつけてくれるじゃあないか」

呆れたような、それでいて冷たい声でギアスは自身を睨んでいる人物 刹那に言い放つ。

「恋人を傷つけた私への怒りか、はたまた何も出来なかった自分への怒りか。……一体どっちなのだろうな」

ふんと、鼻で笑う。

当然ながらギアスは刹那がそんな視線を向けている理由を把握していた。先ほど見せた怒りの象徴である『紅い翼』を発現させた時よりかは大分落ち着いているように思えるが、その内ではまだ炎が燻

っているのが手に取るようにわかる。四肢を取り戻した今、ほんの少しの起爆剤でも入れてやれば、ギアスの望むような展開になってくれそうであった。

「小僧、私が許せんか？」

「……ああ」

「己も許せんか？」

「当たり前だ」

「ならば高みを目指せ。貴様らの実力では私に勝利することなぞ到底叶わん。微力な力など存在せぬことと同じだ。力をつけよ。そうしなければ自身どころか、周りの人間も、大事な人間も、全て奪われていくぞ。……かつての私のような」

だが、『そう』することをギアスはしなかった。

代わりに、刹那にそっとそれだけの言葉をくれてやった。

ギアスの過去にどんな事柄があったのかなど、一同にわかる由もない。しかしながら、その言葉を口にした時のギアスの表情から、過去に壮絶なことがあったのだという予想は簡単に立てられた。目つ

きが一際険しくなり、唇を噛みしめているギアスは、おそらく誰か大切な人を守れなかったのだらう。それが悔しくて、だからここまですぐ強くなれたのかもしれない。

弱い自分が許せなくて。

何よりも大切な人の命を奪った奴が許せなくて。

今の今まで、それこそ気の遠くなるような月日を過ごしてきたのだらう。

その身に受けた理不尽さからくる怒りが、決して風化しないように、ただひたすら。

「……わかったよ、強くなる努力を怠らない。俺も……そんなの嫌だからさ」

「そのほうがいい。ゆめゆめ、その想いを忘れぬようにな。……それと、そこな小娘」

刹那からレナに視線を移し、ギアスは言う。

いきなり話を振られ、少し驚いたような表情をするレナをよそに、ギアスはそのまま続ける。

「貴様が小僧を好いていることは私にもわかる。だが、戦いの場で

その感情を優先させる事ほど愚かなことはない。それがわからんほどの腕ではないはずだが？」

「……………」

ギアスの言葉に、レナは答えない。否、答えられないのだ。

冷静になってみれば嫌でもわかる。今回、レナが四肢をギアスに切断された最大の理由は、負傷した刹那を必要以上に気遣い過ぎたことである。日常であったならば微笑ましいで済むが、戦っている最中であればあまりに愚かな行為だ。物心がついた頃にはすでに剣を握っていたレナが、それをわかっていないはずがなかった。

そう。わかってはいた。

あそこで　刹那がやられた際に、うかつに飛び込むのは、いくらなんでもまずい、と。

でも止まらなかった。

気がついたら前に出ていて、そして四肢を両断されていた。

「あの小僧が、貴様にとって大事なのはわかる。心配する気持ちも、怒る気持ちもわかる。だがな、戦い続けるであろう貴様らにとって、冷静な判断を下せんということはあまりに致命的だ。これから先、小僧を想うその気持ちが、もしかしたら小僧を殺すことになるかもしれないのだぞ」

「……………」

「真にその小僧が大事ならば、現状に合った選択をすることだ。『眼』こそ開いてはおらぬようだが、剣の腕前に関しては何の問題もないのだからな。冷静に場を見つめる思考を養え。よいな」

「……………はい」

自身の欠点を指摘され、それをムキになって否定するほどレナは幼稚ではない。悔しそうに唇を噛みしめるものの、それは自身の未熟さを呪つてのことだ。今回のことでよくわかった。これからはもっとうまく立ち回らなければならぬと、レナはひしひしと感じていた。

「……………余談が過ぎたな。そろそろ、本題に入らせてもらおう」

と。

不意にギアスが刹那たち一向の面々を見渡した。

値踏みするように、何度もだ。

それが一体なんの真似かはわからない。

だが、ギアスが刹那たちの『何かを確認している』ことくらいはわかる。

間違っていないか。

自身のつけた価値は、本当に正しいのか、と。

まるでそう言いたげな行動だった。

一通り見つめ終わった後、自身の何かに決心がついたのか、ギアスは一度頷く。

そして冷たい表情と視線はそのままに、その小さな唇を開いた。

「目的は果たされた。私の能力を見破られたのも、何時ぶりのことだが思い出せん。まだ未熟な点は多々あるが、貴様らの実力を称え、今回の事件の『元凶』について語ろうと思う」

唐突に告げられた、その言葉。

自らを『神』と名乗り、異世界の全てを滅ぼそうと目論んでいる人物。

刹那を器に収まっている『神の魂』を破壊しようとして、各世界を狂わせている『罫』を設置している組織。

それらを語ると、ギアスは言っている。

「な、なんでお前がそんなことを」

「知っていて当然だ、当事者なのだからな。もつと言えは、私はその元凶である男の『監視役』だった。だから、そいつがどんな男なのかも、その男がなぜ神への反逆を企てたのかも全て知っている」

刹那の言葉を遮り、ギアスが続ける。

「現在、『神』を名乗っている男の名は『マリス』。だが、その男の真の目的は世界を破滅させることだけではない。その番たる女を生き返し、自身らを拒絶した世界を滅ぼした後、悲しみのない安らぎだけが存在する新たな世界を築き上げることだ」

第142話 元凶編 ー歴史ー

神は無から生まれた。

何もない所から、神は生まれ落ちた。

神は孤独だった。

誰もいなかった。

何もなかった。

寂しかった。

だから、神は世界を創り上げた。

いつの間にやら己に備わっていた、『創造』する力を使って。

空を創り。

海を創り。

大地を創った。

空は全てを照らす光を生み出し。

海は神秘的な生物を生み出し。

そして大地は力強い草木を生み出した。

時間が経ち、世界は生き物で賑わった。

だが、神は孤独だった。

自身に似通った生物が存在しなかったからだ。

神は悲しみ、嘆き、そしてあることを思いつき、自身の魂を半分がちぎった。

それを更に半分がちぎり、1対の生物を創造した。

『ヒト』である。

神は『ヒト』の雄に『アダム』と、雌に『イヴ』と名付けた。

神は歓喜した。

これで1人じゃない。

寂しくない。

けれど、神は欲張りだった。

もっと増えれば、もっとこの世界は賑やかになる。

そうすれば、寂しい思いなどしなくて済む。

神はアダムとイヴに、子孫を増やせと命じた。

2人は神の言う通りに次々と子を産み落とした。

その子たちも次々と自身の子を産み、すぐさま世界は『ヒト』であふれ返った。

これで、1人でなくなる。

寂しくない。

寂しくはなくなったが、つまらなかった。

その日暮らしの『ヒト』は、今まで生まれた生物と何ら変わりなかった。

退屈した神は、『アダム』と『イヴ』を筆頭に『知恵』と『言葉』を授けた。

考え、迷い、発展していくための大きな力だった。

その2つを得た『ヒト』は、自分たちは他の種よりも優れていると錯覚した。

この世界は自分等の物だと言い張り、奪い、荒らし、殺して回った。

『ヒト』の非道な行いはそれだけに留まらず、終いには『ヒト』同士で争うようになった。

鬼族、獣族、魔族、神族。

髪や目の色、気性や文化で区分されていた種族同士はそれぞれ衝突し、前代未聞の戦争を引き起こした。

戦争では多くの死者を出し、広大な緑の大地は赤黒い液体で地獄色に染められていった。

これが『ヒト』の末路だった。
知恵を与えられ、暴走した愚かな人形の末路だった。

そのあまりの非道を見かねた神は、新たな知恵を与える代わりに今の
蛮行を止めるよう促した。

新たな知恵。

それは体内に存在するエネルギー 『魔力』を使うというもの
だ。

『ヒト』等は魔力の素晴らしさに驚き、そして自在に使えることを
喜んだ。

魔力の使い方を得た後、『ヒト』等はひとまず種族間での戦争を停
戦させ、我が物顔で世界を蹂躪することを止めた。

神との約束のこともあったが、何よりも力をつけることを選んだか
らだ。

魔力をもつと自在に、強力に、広く。

そうすれば、本当に世界を牛耳れる。

自身を抑えつけている神を滅ぼせば、この広大で美しい世界が全
て手に入る。

停戦後、ただひたすらに魔力を磨き続けた『ヒト』の力は、凄まじ
いものとなっていた。

各種族は一時的に団結し、頃合いを見計らって神を滅ぼそうと戦い
を仕掛けた。

主犯者は『アダム』と『イヴ』。

神の力を直接授かった2人と、魔力を得た無数の『ヒト』。
勝算は十分にあった。

しかし、神の力は強大で偉大であり、『ヒト』は神に触れることな
く次々と死んでいった。

まともに戦うことのできた『アダム』と『イヴ』の両名も、善戦虚しくその身を散らせた。戦いは短期の内に終わりを告げたものの、『ヒト』等の愚行は神の逆鱗に触れてしまった。

怒った神は自身の創造した世界を無限に引き裂き、それぞれを別次元へと封印した。

異世界の誕生である。

先の戦争のこともあり、神の力を思い知った『ヒト』等は、もう二度と神に齒向かわないことを誓った。

ただ2つの異世界を除いて。

その2つの異世界は、時間と次元さえ違えど、再び神に反旗を翻したのだ。

それは暴走だった。

広大な世界が手に入ると夢を見。

それが叶わぬ夢という現実を受け入れることのできなかつた世界だった。

結果は敗北。

当然だ。

『アダム』と『イヴ』の片割れすら存在せぬ世界が、神に敵うわけもなかった。

己の愚かさを顧みず、ただひたすらに暴走した2つの世界に、神は罰を与えた。

1つの世界には、頭脳を退化させ、種族ごとに異なる言語をすり込ませ、1つだった大陸をバラバラにする、というものだった。

言葉も大陸も違えば、団結するなど起きようがない。

例えそれが叶っても、その頃には神のいる場所へ到達する方法さえ忘れ去られているはず。

そんな考えあつての罰だった。

もう1つの世界にも、もちろん罰を与えた。破壊、創造、死、生、時間を司った神を創り、それぞれに見張らせるというものだ。

1人で監視するよりも、多人数のほうが確實であるし、何よりも各個が強力な力を持っているため、再び暴動が起こったとしても鎮静させるのが容易になる。

少しでも怪しい行いがあれば正し。

歯向かう者がいれば有無を言わさずに殺した。

恐怖と暴力による支配だった。

当然な罰とは言え、その支配は明らかに度を超えていた。

『ヒト』等の不満は高まるばかりであつたが、見張りを務める神々の力は圧倒的だった。

今のままでは、どうあがいても勝つことなどできない。

それをわかつていた『ヒト』等の取った行動は1つだった。

新たな魔力の使い道を得るというものである。

神に戦いを挑み、そして破れた先の大戦争。

その時の『ヒト』等は、魔力を使った身体の強化を施した状態だった。

通常の何倍もの腕力、脚力、耐衝撃性などを得た『ヒト』等だったが、それだけだった。

いくら身体能力が高かろうと、神に届く『力』が圧倒的に不足していたのである。

それでは勝てるわけがない。

子供の戯れに等しい攻撃をいくらしようが、神の命に届くわけがない。

しかし、神とまともに戦う事のできた2人 『アダム』と『イ

ヴ』は違った。

あの2人だけは、他の『ヒト』とは違う術を用いて神と対峙していた。

自身の魔力を高密度に圧縮することによって結晶化させ、それを用いて神を攻撃し。

その他にも、魔力を火や水に変え、それらを自在に操ったり、『形容しがたい現象』を引き起こしたりもしていた。

それが『ヒト』等と、2人の決定的な差であった。なぜそんな差が生まれてしまったのか。

簡単である。

『ヒト』等は、魔力を使いこなせていたと錯覚していたからだ。

少しばかり身体能力が向上したからといって、魔力の使い方を全てを掌握したかのように振る舞い。

それだけで神よりも強くなったと舞い上がった。

その結果が、敗北である。

しかしだ。

『アダム』と『イヴ』と同等に魔力を使いこなすことが出来たなら、話は変わってくる。

神々から支配されている現状を抜け出し、世界を牛耳ることができ

る。結論が出た『ヒト』等の行動は早かった。

すぐさま魔力の研究を、極秘に開始したのだ。

神々にこのことが知られたら、もちろんただでは済まない。

だからこそ、研究員は著しく限定された。

選りすぐりの人間だけが、地下深くに設立された施設に入ることが許される。

研究は日夜に関わらず続けられた。

実験のために何人も死に絶え、嘆きと絶望が蔓延しつつも、研究が

止められることはなかった。

その甲斐あって、『ヒト』等は新たな魔力の使い道を確立させたのである。

魔力を結晶化させ、個々に応じた武器を精製する『結晶』。

体内を巡っている魔力を制御し、それを変化させ、様々な現象を引き起こす『魔術』。

この2つが判明したのを皮切りに、結晶も魔術を使いこなす『ヒト』が急増した。

使用可能になる条件が判明したわけではない。

あくまで、使い道が判明しただけだ。

それでも『ヒト』等が結晶も魔術も使いこなせたのは、神を滅ぼしてやるという並ならぬ執念があつたからであつた。

絶対に神を滅ぼす。

側近も全て滅ぼし、世界を手にする。

その強い思いが、『ヒト』等の能力を開花させたのだ。

強さを手に入れる『ヒト』の数は急激に増えて行き、もはや魔力を使いこなせない者のほうが珍しい風潮にまで達した。

秘密裏に、強さを持つ『ヒト』を増やしていく。

絶対に神々に知られぬよう、細心の注意を払つて。

だが、いつまでもそんな大事を隠し通せるわけもなかった。

ひょんなことから、今までの行いを神々に知られてしまったのである。

神々は怒り狂い、『ヒト』等を皆殺しにしようと牙を剥いた。

3度も神に歯向かつた『ヒト』を、1人残らず、皆殺す。

そう誓い、神々は『ヒト』等に攻撃を仕掛けた。

しかしながら、神々の思った以上に『ヒト』は強かった。

さすがに個々の能力は低いものの、束になってかかってこられれば厄介な事この上ない。

神々は苦戦を強いられた。

屠つても屠つても、次から次へと敵が沸いてくる。

疲弊し、傷つき、追い詰められ、ついには神々のうちの1人が殺されるまでに至った。

これ以上はと、ようやく重い腰を上げたのが『神』であった。

殺された神の代理を『創り』、そして神々にある強力な武器と、新たな力を与えた。

ご存知、『神器』と『眼』である。

ありとあらゆる攻撃を受けても砕けず、どんなものでも切り裂く『神器』は、『ヒト』等が使う『結晶』に勝るとも劣らぬ威力を見せ、『眼』の発現は今までの身体強化が子供の遊びに思えるほどの強化を全身に施してくれた。

『神器』と『眼』は壮大な効果をもたらし、一時は敗北寸前だった戦況を五分にまで回復させるにまで至った。

そのまま神たちが押し切るかと思われたが、戦況はそのまま硬直状態に陥ってしまった。

神々の殺傷力と、『ヒト』等の生産力が完全に釣り合ってしまったせいである。

いくらなぎ倒したところで、『ヒト』は虫のように沸くし、『ヒト』等も新たな力を手にした神々に手を出ることが出来なかった。

神が直接手を下したのであれば、この状況を終わらせることも出来ただろうが、神の力も無限というわけではない。

好き放題に力を使ってきたため、今までのような事象を引き起こす事が出来なくなっていたのだ。

回復するまでには気の遠くなるような時間がかかる。

それまでは、この戦況が動くことないだろうと予測されていた。

長きに渡る、均衡状態。

全ての元凶となる男は、こんな時代に誕生した。

幼き頃から出会った女と共に、こんな嘆かわしく酷い世界を生きていた。

人の死ぬ瞬間を何度も目撃し、親友を亡くし、子供を助けられず、親しき人に裏切られる　　そんな悲劇をも乗り越え、たくましく2人で生き抜いてきた。

2人は時に喧嘩もしたし、意見の食い違いこそあったが、それでも仲違いすることはなかった。

どこまでも、2人の相性は抜群だった。

それもそのはず。

その男と女は、かつて『ヒト』を大量に生み出すために創られ、生みの親である『神』に反旗を翻した『アダム』と『イヴ』の生まれ変わりだったのだから。

第143話 元凶編 12人1

.....
「お呼びになられましたか？」

.....
「もちろんでございます。貴方様の命であれば、何なりと」

.....
「監視？ 私は一向に構いませんが、時期が時期です。たかが1人の人間を見張るなど.....」

.....
「なるほど、『アダム』の生まれ変わり.....。放置しておけば反旗を翻す可能性も、確かにありますね。そうなれば、『第一次聖戦』の再来となりましょうな。この戦争は激化するどころの話ではなくなる.....」

.....
「わかっております。しかし、器との相性もかなりよいのでしょうか？ 監視などまどろっこしい真似などせず、殺してしまえばよいのではないですか？」

目の前の女ならば、尚更。

「……起きた？」

「ん、起きた」

短いやり取りをかわしつつ、伸びをする。固まっていた筋肉がほぐれ、心地いい感覚が全身を包む。が、全身のたるさはどうも消えてくれない。当たり前だ。木製の床に何も敷かず寝れば、どんなに熟睡したって疲労が完全に消えることなどない。

現在、マリスが寝起きしている場所は、町はずれにある小さなボロ屋。長年使ってきただけあって愛着こそあるが、それでも不便なことには変わりない。出来れば改築したり、それが叶わぬならばせめて寝床だけでもマシな物に変えたいと常日ごろから願ってはいるが、今日食べていくのにも困らなければならぬこの状況では、そんなささやかな望みも叶わぬままだ。

色々と文句のある『家』ではあるし、不満もたくさんあるが、それでもマリスはそこそこ幸せだった。ずっと、目の前の女 セレスと一緒にいたから、どんな苦難でも乗り越えて来られたし、小さな事でも幸せに感じる事ができた。

神と戦争をしているこの世の中。

セレスがいたからこそ、マリスは今の貧困な生活にも幸せを見出すことができたのだ。

「今日はどうする？」

「盗みましょ。今日は『戦喜祭』だから、お店がたくさん出る。きつとたくさん盗めると思うよ」

ああそうだったと、マリスはセレスの言葉に頷いた。

戦争を激励するための祭り、『戦喜祭』。それは、この戦争を少しでも楽しく、そして正しいものだという認識を植え付けるという目的から、毎月開催される祭りである。それに踊らされた無邪気な人々は、主催者の思惑通り、魔力を扱う強力な駒になり、終いには得られるかどうかわからない世界のための礎となる寸法だ。

何も知らない人々を利用する魂胆に吐き気がするが、しかしそのおかげでしばらく困らない程度の食料を得ることができるのだから、そうそう馬鹿に出来たものではない。文字通りの命綱だ。この催し事がなければ、2人はとうの昔に餓死していたことだろう。

「3日……いや、1週間分は何とか確保したいな。水と雑草だけはいくら何でも厳しいし」

「不安がらないの。1店舗じゃ無理でも、転々とすればきつと集まるよ。今までだってうまくやってこれたんだから、大丈夫大丈夫」

「相変わらずたくましいね、セレスは。羨ましいよ」

セレスの真つ直ぐな表情に、マリスはついつい笑みを浮かべてしまう。どんなに世界が暗くとも、醜くとも、この笑顔が照らしてくれる。マリスにとって、セレスこそが太陽だった。自身の不安を、絶望を、全て吹き飛ばしてくれる光だった。

「マリスも、ちょっとは前向きにならないとね。こんな時代だからこそ笑顔だよ！ つらいことがあっても、悲しいことがあっても、

笑っていさえればあつという間にこんな時代なんて終わる。そうすれば、きつとおなかいっぱい食べられる平和な世の中になるよ!」

「……そうだね。そうなればいいね」

それが例え叶わぬ夢だろうと、セレスが言うならば本当に起こり得るのではないかと思えてしまうから不思議だ。これは一種の才能なのだろう。人に希望を与えるその人柄は、決して後天的なものではなかった。幼き頃より人に優しくすることを覚え、以来笑顔を絶やさなかったセレスは、人を幸せにする才能を持った天才だった。

「それじゃ、行こっ! もうお店、開いてるよっ!」

セレスに腕を引っ張られ、マリスは起き上がった。寝不足で足元が若干ふらつくものの、慢性的であるそれは、これから行うことの妨げには大してならない。慣れてしまったからである。通常よりも悪い状態が、マリスにとっての普通だった。

だから、いつものようにセレスに微笑みかけ、その小さな手を大事に握りしめ、小屋の外へと歩き出した。

これから行う事を思えば、そんなことをしている余裕などないはずなのだが、それでも市場に着くまでは、セレスと共に穏やかな時間を過ごしたかった。

これから行う、食糧の確保。

それは、罪だった。

やらなければ生きていけないというもつともらしい言い訳を掲げて、その行為を正当化しようとしても、悪行は悪行。長年やってきた行いではあるが、根からの悪人ではないマリスとセレスにしてみれば、それは良心の痛む行為だった。やる度にやるせなさとしりな

さが湧き上がり、全てを終えた後には心が罪悪感でいっぱいになる。それがわかっていいるからこそ、それが訪れるまではこうする。手を繋ぎ、わずかながらの安らぎで心を潤す。

それが、2人のちっぽけな処世術だった。こうでもしなければ、罪悪感に塗れて、とても生きていくことなどできやしなかった。

町までの道のりは、それなりに時間がある。

その時間がいつまでも訪れませんかのようにお願いながら、2人はゆっくりと町まで歩を進めた。

+++++

町は人でごった返していた。普段であればそれほど人も見当たらない通りでさえ、老若男女問わず犇めいている。1つの出店に群がるその様は、さながら餌にたどり着いた蟻のようだった。これほどの人が、一体どこから湧いて出たのか、不思議でならない。

ともあれ、これだけの人数がいれば十分だ。十分、店主の目を誤魔化せるし、いつもよりも多めに食糧を盗み出すことが可能になる。うまくいけば1件目で1週間分が確保できるかもしれないし、店を転々と回れば次の戦喜祭までの分まで盗み出すのも夢ではない。もちろん、そこまでうまくはいかないだろうが、それでも必要以上の食糧を確保できるのは確実だ。期待は十分できる。

できるが……それでも罪悪感が消えることはない。

戦争真っ只中のこの世の中、食糧を作ることがどれだけの困難かを想像することなど容易い。それを対価も支払わず横からかすめ取るのだから、気分がいいわけではない。

「っ……っ」

ぶんぶん頭を振り、マリスはその考えを振り払った。余計なことを考えた状態で、盗みを完遂させることは不可能だ。切り替えなければ、成功はやってこない。失敗すれば、しばらくは雑草だけの毎日が待っているのだ。自分はともかく、セレスにそんな生活を送らせるわけにはいかない。

2度ほど、深く深呼吸をする。

長く吸い、長く吐く。

(…………よし)

切り替えは完了した。いつでも、大丈夫。

『…………マリス、聞こえる？』

頭の中に、セレスの音が響く。

セレスの魔術 『広範囲伝達』である。これは、あらかじめ対象となる人物の魔力を記憶しておくことにより、その持ち主と言葉を交わすことのできるという能力のだが、特筆すべきはその範囲にある。どんなに遠くに居ても、と言うにはいささか大げさだが、少なくともかなり広大であるこの国の規模でも、セレスの声が途切れることはない。『こういうこと』をするにはうつつつけの能力だった。

『ちゃんと聞こえてるよ。準備できた？』

心の中で、そうセレスに呟く。

『うん、大丈夫。そっちも準備できたみたいね。それじゃ、お願い』

『了解。うまくやるよ』

短いやり取りを終え、マリスはすぐ近くにある店舗へと、しゃがんだままじりじり近づいた。決して店主には見つからないよう、音を立てず、細心の注意を払いながら、距離を縮めていく。

店主は気づいていない。それどころか、通りを歩いている人々もマリスに気が付いていなかった。細心の注意を払っていることもあるが、ここまでうまく気配を消せるのは一重に経験であった。物心ついた時から、浮浪者や国の警護隊を相手に逃げ隠れし回っていたマリスにとって、これくらいならば朝飯前。その気になれば、このまま何品かの食糧を盗み出すことだって可能だ。

しかし、それでは駄目だ。これから行う作戦に比べれば、手に入る量が少なくなってしまう。少しでも多く盗まなければならないのに、そんなことをするわけにはいかない。

余裕を持ち、決して気づかれないであろう位置でマリスは待機する。遠すぎず、かといって近すぎないその距離は、店主だけでなく往来している人々からも存在を気取られぬ最適な距離だった。

『……よし、いいよ』

心の中で、聞いているであろうセレスに向かって呟く。

『了解。それじゃ、行くね』

その返事から数秒もしないうちに、店主の前にセレスが現れる。辺りにいる人々と違い、薄汚れている服のセレスは、明らかに浮いていた。人々の視線はもちろん、その店の店主さえも、セレスのみすばらしい恰好へ視線を注いでいる。

浮浪者がいること自体は珍しくはない。おかしいのは、こつも堂々と店の前までやってきているということだ。いきなり盗みを働くのではないのか、はたまた何かろくでもないことをやらかすのではないか。そんな考えが浮かんだ店主の表情は、自然と険しくなっていた。おかしいことは絶対させまいと、セレスに悟られぬよう身構える。

「おじさん！　お願い、食べ物を見せてください！」

大声で叫び、セレスは深々と頭を下げた。

その大声に、あるいは様子に、なんだなんだと次々と人々が集まってくる。

思いもよらないセレスの行動に驚き、店主は狼狽しながらも叫ぶ。

「い、いきなりなんだお前はっ！　お客さんの迷惑だろうがっ！」

「お願いです！　私の弟がこのままだと餓えて死んでしまうんです！　どうか、どうか食べ物を恵んでください！」

頭を下げたまま、それでも大声でセレスは叫ぶ。あたかも本当のことのような必死さを醸し出してはいるが、もちろんセレスに弟などいない。口からのでまかせである。演技がこれだけ上達したのも、全ては生きるため。こんな時代でなければ、舞台の上で脚光を浴び

ることもできたのだろうか、それも叶わぬ夢である。

セレスのあまりの真剣さに、店主は一瞬ひるんだようだったが、すぐに気を取り直して吐き捨てるように言葉を放つ。

「黙れっ！ 金も持ち合わせておらん乞食が何をほざくかつ！」

「お願いします！ お願い、します……！」

「駄目だ駄目だ！ 品物をただで渡すことなどできるか！ さつさと失せろ、この愚図！」

「で、でも！ それだと弟がつ！」

「知ったことかそんな事！ 乞食が何人死のうと一向に構わんわっ！ いい加減にせぬと叩き伏せるぞ小娘！」

「……っ！」

悔しさを表情に滲ませ、流れる涙も拭うことなく、セレスは走り出し、そのまま路地へと入り込んだ。その表情も涙も演技であるが、店主はおろか、観客の誰もがそれを本物であると疑わなかった。店主に煙たがられるのは仕方ないことだとわかつているし、金がないのに無料で品物を渡すわけにもいかないことも理解できているのだが、それでもセレスに同情してしまうのは、それだけ演技が素晴らしいものである何よりの証拠だった。

路地に入ったセレスはあらかじめ決めておいた集合場所へと向かった。誰にも悟られることなく、演技を続けたまま向かうと、そこにマリスがいた。手には膨らんだ風呂敷。中身はもちろん、先ほど

の店の品物。ご察しの通り、セレスが演技をして皆の注目を集めている間に、マリスはこうして一仕事終えたわけである。店主や観客には、盗んだことを一切悟らせてはいないその手腕は、セレスの演技力に匹敵する熟練度を誇っていた。

「おかえり、こっちはうまくいったよ」

涙目になってしているセレスにそう言い、マリスは風呂敷を持ち上げて笑ってみせる。

それを確認してようやく緊張の糸が切れたのか、セレスは目に溜まっていた涙を拭った。

「さすがだね、マリス。この調子でいけば、すぐ集まっちゃいそう」

赤くなった目に似合わぬほど、嬉そうな笑顔を見せるセレス。ここまでうまくいったのもずいぶん久しぶりのことなのだ。喜ばずにはいられないだろう。

「このペースだと、あと2、3回やれば集まりそうだね。今度はもう少し離れた場所でやるうか」

「りょくかい。それじゃ早速行こ！ 手筈はさっきと同じだよね？」

うきうきといった様子で、セレスはマリスの手を取って走り出す。いきなりだったからか、マリスの足も少々もつれ気味だったが、それでもはしゃぐセレスに言葉をかける。

「わ、わかったから引つ張らないでってば！ そ、それと！ 次だつて慎重にやらないとダメだからね！」

「わかってるわかってる！」

マリスの言葉もそこそこに、セレスは実に楽しげにマリスと共に駆ける。

2人は走る。

生きるために、走っていく。

薄暗く、誰もいない不気味な裏通りを、2人の楽しげな足音だけが、いつまでも反響していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9331b/>

異次元図書館

2012年1月14日01時02分発行